俳諧歳時記

新年

俳諧歳時記

新年

附・總索引

大谷句佛
笹川臨風
國富信一
武田祐吉
山本信哉
寺尾新
牧野富太郎

改造社

例言

一、本書は「俳諧歳時記」新年之部とす。

一、新年之部に收容せる季題の選定併びに排列の順序は、專ら解說擔任者の意見に依りたるも、古書校註の部にのみ存する古季題は編輯部に於て適當と認むる箇所に挿入せり。

一、新年之部季題選定の範圍は、陽曆一月、及び陰曆一月に屬するものを採用せり。

一、新年之部の季題中、冬之部及び春之部に重出せるものあるも、季の決定は兩者を參照すれば分明する樣心掛けたり。

一、本書收載の例句は、句作併びに鑑賞上の便を考慮し、一大句集を兼ねしむるため、從來の例を遙かに凌ぐ句數の採擇を乞ひて收容せり。

一、參考の部分擔は別記の通りなるも、排列の結果、山本氏の執筆に係る「鹿島の事觸」の參考は人事之部に入りたり。

一、挿畫は解說擔任者の選定を主とし、之に編輯部に於て追加せり。尙、植物之部挿畫は牧野博士の好意によりたり。

一、本書の執筆分擔は左の如し。

季題解說・實作注意・例句	大谷句佛
古書校註	笹川臨風
參考	
時候・天文	國富信一
人事	武田祐吉
宗教	山本信哉
動物	寺尾新
植物	牧野富太郎

一、本書卷末には「俳諧歳時記」全五卷の總索引（五十音順排列）を附したり。

昭和八年十二月

凡例

一、本歳事記は改造社の依囑により、俳諧に關する新年季題を蒐集解說したるものなり。即ち陰暦正月及び陽暦一月中に於ける事象を、時候・天文・地理・人事・宗敎・動物・植物の七部門に分ち、それ〳〵解說を施し、且つ古今の例句を採錄し、往々實作注意を加へたり。

一、採錄季題中には、今時既に廢滅に歸したるもの等も、古俳諧研究者の參考となるべきものは、つとめてこれを記載し、又、地方行事殊に新領土に於て季題たるべき行事等は、句作者の參考資料として蒐集に注意したり。

一、季題排列の順序は、略舊例に則りたれども、人事の部は大體、宮廷行事・幕府行事・武家行事・民間行事（以上日取順）、衣・住・食・商・工・農・林・漁・獵・遊戲・演劇・遊里・門付類・新年禁忌語・新領土行事の順に分類したり。又、宗敎の部は大體日取順に收め、忌日のみは末節に一括したり。

一、例句中、改造社より送致の古句は全部、その他編纂者の見聞に任せて採錄し、明治以後の例句は編纂者に於て汎く各流派の句集及び雜誌等より撰擇採錄し、その廣範圍に亙ることを特色の一としたり。尙、思はしき例句を得難かりしものは、雜誌「懸葵」に於て特に一般より募集し、編纂者これを採選したり。

一、本書中、百數十項に亙り、畫圖を插入して解說を補ひたり。畫圖の原典は總て本願寺所藏のものに依據したり。

一、本書の成立に就ては、「懸葵」編輯者名和三幹竹をして、編纂及び校正の助力を得たるもの多し。一言附記す。

昭和八年十一月明治節後五日

大谷句佛

巻頭に

まだ寒けれども初東風と呼ばれて、大路小路の門松・しりくめ繩にさらさらと吹き渡れば、日頃は洋髪・洋装の姫御前も、高島田・結綿なんどに髪をとゝのへて、きらびやかな長袖にて追羽根突くも、新玉の年立ち返る春の景色ぞかし。橙・譲葉・鏡餅、いづれも目出たき限りを盡して、屠蘇に祝の盃を重ぬれば、門禮者の車のひゞきも遠近に轟きて、萬歳の打つ鼓の音も、春こゝに立ちくる思ひあり。常日頃とかはらぬ水道の水も若水と唱へられ、初荷・初買の名の何となく物珍らしく聞ゆるも、流石に歳の始めなり。お寶〱の聲は聞えず、鳥追のあとも絶えて、萬づ古りにし初春の興は無けれど、神代のことも思はるゝ元朝の俤、しばらくは四海波靜かにと謠ひて、清く朗かに美しく感ぜらるゝも、新年の徳なるべし。今と古と、あるほどの天文・人事・時候・動植物一切の森羅萬象を取集めたる新年の歳時記こそまことに長閑けききはみなれ。

昭和八年十二月

笹川臨風しるす

序

出版界に於て第一流たる改造社から俳諧歳時記が出版されると云ふ。其の企てが既に一般の注意をひく上に更に計畫內容を聞くに及んで私としては異常な興味を感じたのである。元來科學者たる私が斯樣な出版に對して參加すべき筋のものでは無いが、今回の計畫たるや、在來の型を破つて「參考」と云ふ欄を設け其處に各專門家が各自の立場から、一つ一つの事柄を說明すると云ふのであるから、誠に結構な事と思ひ、思はず執筆を承諾して仕舞つた。從來歳時記も仲々多く出版されて居たが事實の說明となると往々少なからざる誤りを發見し、中には思はず失笑する樣な說明さへも見る事があつた。實際私共の樣に時々興に任せて駄句りたくなる者には善い歳時記が欲しかつた。此の考へは恐らく私だけでは無かつたらうと思ふ。此の點に於て本書は充分大方の滿足を得られることゝ思はれる。

私としても執筆に際しては以上の樣な氣持を以て終始したつもりであつた。又一方から見ると此の歳時記は單に俳諧に趣味を有する方々ばかりでなく、一般の家庭にも座右に備へて戴いて尙充分其の眞價が發揮出來ると思ふ。卽ち本書は下手な百科辭典に優ること數段、立派な浮世辭典では無いかと思ふ。一言執筆に際して所感を述べさせて戴き以て序文とする。

昭和八年十二月

國富信一

序

この俳諧歳時記に於いて、小生の引き受けたのは、人事の參考欄だけであつた。しかし歳時記に於ける人事といふものは、人間の生活の大部分を占めるものであつて、これが記事を作ることは、人間一年間の生活史を描くに外ならない。こは、繁雜なる人間の生活に於いて、堅信と詩趣とに充てる部分であつて、殊に古人のひたぶるな心は、此處に最よく現れてゐる。今、古書校訂や季題解說の間を縫つて、なるべくこれらと重複しないやうに注意して、記事を作つて行つたが、出來上つたものは、自分ながら不十分に思ふ點が多い。こゝに新年之部の筆を擱くに當つて、多事にして至幸なりし一年の生活を漸く送り得た感がある。

都會の地に在つては、急速度を以つて舊い行事が廢れて新しい行事がこれに代りつゝある。これも意義の無い事でも無からうが、舊い行事を忘れてしまふには及ばぬことである。俳句の世界は正しくこれを護つて行つて呉れる。吾等は舊い行事を顧みつゝ、新しい行事を育てゝ行きたいと思ふ。

昭和八年十二月

霧立つ人　武田祐吉

序

予常に謂へらく、神道は人道を包容す。神道を離れて別に人道あるに非ざるなりと。

惟ふに、我が國に於ける神には、祖先を崇拜するあり。偉人を崇拜するあり。自然を崇拜するあり。超自然を崇拜するものも亦之れありて、固より一樣ならずと雖、其の大多數は人の神格化せるものにして、神道は即ち人道の絕對化せるものなり。

蓋し人道は人對人の道なれども、神道は人對神の道なり。人が神のまゝ、神の通りと爲つて、神の心を心とし、神の行を行ふ所に、神道の理想と、神道の實現とを看る。

由來神道に於いて最も尙ぶ所のものは、實に其の不言實行に在り。故に神道を信ずる者は、常に自省悔悟して、專ら力を修養に盡し、以て神人の合一を期せずばあるべからず。

嗚呼、世に神道を談ずるもの多しと雖、能く神道を知るもの尠し。適ゝ神道を知るもの有りと雖、能く神道を行ふもの極めて稀なり。是れ豈に獨り神道のみならんや。其の佛教、耶蘇教、乃至一切の宗教に於けるも亦復是の如きか。

茲に本書成るに臨んで、其の序を請はるゝや急なり。因て聊か素懷を記して以て序に代ふ。

昭和八年癸酉極月十二日

穀堂　山本信哉

序

自分の書いたものが印刷に附された後、讀み返して見て、滿足に思つたことは、今迄一度もなかつたが、とりわけこの動物參考欄に對しては不滿足感が甚しい。これは、一つには天狗俳諧式に、季題解說と別に何等の打合せもなく、執筆したためでもある。但し、このちぐはぐな點がユーモラスで、興味が深いとなら、もつけの幸とでも云はうか。固より本當に參考になるかどうかは、筆者が最初から推察し得ない處である。

昭和八年十一月廿七日

寺尾新

題言

古來幾多の俳諧歳時記があつて其書は何れも其れを使ふに當ては先づ一と通り其用を弁ぜざるものはないのであるが、然かし書により其記事に精粗があつて時に靴を隔てゝ痒きを掻き、又其刊行に新舊があつて索むるに時代を異にし、今之れを使用する方から觀れば無論其れ等何れの書にも便利な點は多けれども、亦何處か其內容に不便を感ずる個處もあつて、其處で此等の人々には甲に索め乙に探ぐる爲め止むを得ず數部の類書を蒐めて之れを座右に常備せざれば往々用に臨んで事を缺くといふ不便が伴はぬでもなかつたのである

今茲に此等の不便を一掃し使用者をして成るべく失望の憾み若くは歎きなからしめ、參考の爲めには及ぶ丈け多數の作例をも示し、又覽る人をして世の進みに連れて發生せし新事實にも觸接せしめんとして出現したものが即ち此改造社の俳諧歳時記であつた

故に此書を使用する人々は常に此書が從來の何れの書にも優つて斯道に精彩があり之れを活用するに際しては用に應じ事に臨んで直ちに其目的事件を釣出し得べき寶庫であるといふ事を知り得るであらう、乃ち此の改造社の歳時記は何れの時を論ぜず何れの處を問はず常に斯道者に伴隨して其使命を全うすべき一良友であると信ずる。

昭和八年十二月

理學博士　牧野富太郎　識す

部類目次

目次

宗教

動物

植物

新年之部

時候

一月（いちぐわつ）

【季題解説】一年十二月の第一の月なり。節、晩冬にして極寒にあたり、陰暦にてはこの月を正月と稱す。〔參照〕正月（シヤウグワツ）

【例句】

一月となりけり雪もふりにけり　子規（子規全集）
一月や雪に撒きやる雀の餌　冬葉（懸葵）
一月も半ば過ぎたる釜日かな　紫朗（同）
一月や人なき寺の臺所　天眞（同）
一月や無事歸省して俥に乘る　三幹竹（同）
一月の陽あたる畑や風の音　句佛（同）

正月（しやうぐわつ）

お正月　睦月　祝月　元月　眤月　端月（ハツキ）　初月（ハツヅキ）
嘉月　王月　上月　泰月　謹月　征月　陬月　年端月　初春月
暮新月　初空月　霞初月　太郎月　初見月　年待月　とらの月
早緑月　子日月　三陽月　三微月　端正月　年初月　正陽月　王
春月　春正月　人正月　王春　初春　新春　孟春　上春　早春
開春　發春　首春　獻春　規春　首歲　初歲　肇歲　開歲　芳歲
華歲　方歲　青歲　發歲　獻歲　主月歲　年初　甫年　初節　青陽
孟陽　上陽　正陽　新陽　初陽　孟陬　履端　大簇　始和　解凍
王正　月正　天正　地正　人正　初正　夏正　春孟　春首　歲首
歲始　歲初

【古書校註】

【山之井】正月は親疎ゆきむつぶ故に、むつみ月ともいへり、それを略してむつきとはいへり。立春（一）の後十五日、雨水（二）の節の初昏（三）に、斗柄（四）寅の方（五）にさせり、故にとらの月ともいふなり。寅は夏の世（六）の正月とて、夏正とはいへり、十二律の大簇（七）此月に准れば、大簇ともいへり。

【栞草】夏（八）は寅を以（て）正月とす。これを人正と云、商（九）は丑を以（て）正月とす、これを地正と云、周（一〇）は子を以（て）正月とす、これを天正と云。

字彙　正の字本と音去聲、音政、云く秦の始皇の諱（一一）政なるに至て、改めて平聲と爲す、音征、後生今に至り之に沿ふ。○睦月［世諺問答］正月をむつきと申侍るは、しる人なるはたがひに行かよひて、いよ〳〵したしみむつぶるわざをしけるによりて、此月をむつびづきと名づけ、それを略してむつきと云なり。○王春月　左傳　春王正月、周の正月也。○太簇律［月令］正月律は大簇に中る、高誘曰、簇は簇也、言心は陰衰へ陽發して萬物地に簇して生ず。○立春　月令廣義　周天王衛六問に云ふ、大寒の後十五日、斗柄艮に建つ（一二）立春と爲す。正月の節、立始て建つ也、春始めなくして至る、故に之を立と爲す也。（一三）○雨水［同上］立春後十五日、斗（一四）寅を指すを雨水と爲す。正月の中、雨水氣に中り雪散じて水と爲る也。（一五）○孟春　元帝纂要　正月を孟春と爲す。○陬月　潜確類書　正月を陬と爲す。寅位之月、故に孟陬と曰ふ。○夏正月令廣義　大禹金德を以て王安邑に都し國を夏と號す、仍ち有廣寅に建つの月を以て歲首と爲す、故に夏正と謂ふ。○上春　元帝纂要明詩　初春に同じ。○太郎月　鶯水（一六）曰、人の子の、先に生れたるを太郎といひ、次に生れたるを次郎と云にたとへて、一年の頭なるゆゑに、太郎の名あり。○初空月　藏玉　雪は猶ふるとしながらたつ春はさえにしまゝの初空の月　後鳥羽院　○霞初月［同上］げにもはや山かぜ寒くふる雪の其名斗や霞そめ月　定家。○初春月［同上］霞たつ初春月の朝日影のどけき色や空にみゆらん　家隆。○早緑月［射恒祕藏抄］年（明らく）くれてさみどり月になりぬれば所さへなし小松引まの　貫之。○年端月［莫傳抄］梅もはやさかりになりぬとしは月名もめづらしく聞えこそすれ。○暮新月［同上］くれし月千世かゝるらん初草の又みるばかりとしは來にけり。

【滑稽雜談】　正月朔日より前に立春あるを年內立春又は除日立春など云、當年之立春去年ありて、來春の立春又正月にあるの時は中一年立春なし、是を俗に空穗年と云、或說に其年の矢を中に貯ふ、故に鞘年と云說侍る。覺束なし、猶識者によりて決すべし。云々（一七）

【周書】　凡そ日時歲を成す者、春夏秋冬各孟、仲、季有り、以て十二月に名づくるなり。

【禮記】　孟春の月、律大簇に中る、東風凍を解く

註（一）立春　二十四氣の一、陰曆にては正月節、陽曆にては二月三日、倚本文を看よ。（二）雨水　二十四氣の一、立春の後十五日、陰曆正月中、陽曆二月十八日、倚本文を看よ。（三）霞　[illegible]初むる頃。（四）斗柄　北斗星の杓子の形の中、その柄に當る星、七星中第五より第七に至る三星にして、一晝夜に十二方を指す。（五）寅の方　東北の間に當る方位。（六）夏の世　禹王の即位より桀王の滅亡に至るの間、十七世四百五十八年。（七）管樂を十二の調子に分ちて之を十二律とす、之を陰陽に從て律呂に分ち、黃鐘、太簇、姑洗、蕤賓、夷則、無射を六律とし、大呂、夾鐘、仲呂、林鐘、南呂、應鐘を六呂とす。（八）六を看よ。（九）商　支那古代の王國、契の封ぜられたる國、又殷とも云ふ。（一〇）周　武王、殷を滅して帝位に即いてより三十八世赧王に至るまでの八百七十餘年間。（一一）諱　忌名の義、生日ㇾ名、死日ㇾ諱、人の名を死後より云ふ稱、轉じて實名の敬語となる、貴人の名の一字を賜はるを御諱の字を賜はると云ふが如し。（一二）艮（コン　うしとら）東北の方角。

（一三）立春、陽暦に一は二月なり。（一四）斗、北斗の略。（一五）雨水、陽暦にては二月なり。（一六）嘯水　姓は高木氏、名は五省、治左衛門と稱す。白梅園、三省軒、歌仙堂等の號あり。京の人、蕉風を祖立圃に學ぶ。享保十八年三月廿六日歿、年七十六、此柴、手習、糸屑、萬才樂附合、俳諧新式、若夷、新玉櫛笥、俳諧良材、俳諧指南、春のあけぼの等の著あり。（一七）李穗年、寶年、未考。

季題解說　陰曆一月を正月と云ふ。これは王者正に居る義に取れるなり。故に王月ともいふ。王春は周王の春の義にして、天下の一統を表示す、故に正月を王春月といひ、「春秋」に「元年春王正月」とあるに據る。春正月、陬月、端月等正月に同じ。睦月とは知人互に來往して親しみ睦ぶの意をとりて、むつび月と名づけ、それを略して「むつき」といふなり。歐洲にても此月の名は、ローマの平和の神の名よりとりて「平和の月」と云ふ。又人の子の先に生れたるを太郎といへる例と同じく、この月を太郎月とも云ふ。

倘年端月、早緑月、初空月、暮新月、霞初月等、等異稱頗る多し。

實作注意　正月は陰曆一月をいふ稱呼なれば陽曆の一月の氣分にて詠むことは避くべし。一月は現今寒に入る月にして寒さのきびしくなる時候なれど、正月といへば春立ちたる陽氣を迎へ樂む氣分あり。その間に自ら區別さるべきものゝ存することに注意を要す。閏正月、舊正月、小正月、七日正月、二十日正月、骨正月、女正月などいづれも陰曆の行はれたる時の稱呼なればその心して作句すべし。

また、「二夜正月」と俗にいふは、四十二の厄年の者、二月一日より十五日まで正月と同樣に祝ひて、親族のものを饗することを云ふ。

「流行正月（ハヤリシヤウグワツ）」とは、田舍にて凶事ありし年、正月を仕直すことあるを云ふ。

はやり來て撫子かざる正月に　（冬の日）

の句にても知らるゝ如く、勿論正月以外の時に、業務を休みて祝ひなほすを云ふ。但し、これは次第に江戶近在に及ぼし、寬文七年七月六日、町觸を以て差止められたり。

又「阿蘭陀正月」とは、古、長崎に於て蘭人、十一月に取越して行ひしものをいふ。

參照　一月（イチグワツ）　閏正月（ウルフシヤウグワツ）　舊正月（キウシヤウグワツ）　七日正月（ナノカシヤウグワツ）　小正月（コシヤウグワツ）　女正月（ヲンナシヤウグワツ）　骨正月（ホネシヤウグワツ）　二十日正月（ハツカシヤウグワツ）

例句

正月

いたゞくや大和正月三笠山　鬼貫（俳諧七車）
正月も美濃と近江や閏月　芭蕉（もとの水）
正月の魚のかしらや炭俵　傘下（炭俵）
正月の月夜は嬉し見はせねど　支考（蓮二吟集）
膳立もまだ正月の匂ひ哉　同（同）
けふ脫や正月させてふぢごろも　浪化（浪化上人發句集）
正月や三日過れば人古し　闇更（半化坊發句集）
正月や皮足袋白き鍛冶の弟子　同（同）
正月や胼いたましき采女達　几董（井華集）

正月

正月の烏帽子かけたる主頭　几董（井華集）
正月はからかささへもおもしろき　成美（成美家集）
正月やころりと寝たるとつとき着　一茶（九番日記）
正月の町にするとや雪が降る　同（七番日記）
正月やわすれてあれば袖の月　乙二（をのゝえ草稿）
雪花も正月らしや眼のうへ　蒼虬（蒼虬翁句集）
春王の正月書すと書かれけり　子規（子規全集）
正月や里はきのふの古薄　同（同）
正月や歯朶をかけたる軒の柴　青々（妻木）
船頭も正月をしに草の宿　同（同）
酒のなき正月寒し梅の花　紫影（かきね草）
正月も更けてはたゞの夜なりけり　鳴雪（鳴雪俳句集）
正月や庵に淋しや鮭二本　橡面坊（深山柴）
正月や刈らずの髪に帽頭巾　寸七翁（寸七翁句集）
箕を立てゝ正月をする節哉　櫻磈子（春夏秋冬）
正月や一つのこりし屠蘇袋　田士英（ホトトギス）
正月や鎌倉山の松の色　劉生（同）
正月や椿の小宮尋ね入る　素石（木虫句集）
一醉に正月暮れし思ひ哉　月斗（同人俳句集）
正月や第一楼の青畳　霽月（霽月句集）
正月やよき旗をして梅を見る　碧梧桐（明治一萬句）
正月や酒主方に重の物　八重櫻（同）
正月や幟たてたるかゝり舟　白水（同）
正月や尾上の寺の長閑なる　虚明（最新二萬句）
正月や錢もてあそぶ閭門の子　蝶衣（蝶衣句稿）
正月も物縫ふ妻と二人かな　観崖（大正新俳句）
春王正月天是人地是地　烏兎子（烏兎子句集）
正月の驛の雜貨や雪清き　寒山（懸葵）
ふるさとの正月誰も彼も無事　瓜青　同
正月や日々盆栽の句を案ず　三幹竹（同）
正月やもゝゝ數へに數へ唄　羊我（同）

お正月

逢ばたの土めづらしやお正月　一茶（一茶句帖）
朝からの今日亦酒もお正月　繞石（北の國より）
玄關に小さき[illegible]やお正月　虚吼（虚吼句集）
父の客母の客とてお正月　柳之（現代俳句大觀）
燭を挿いて人まつ雪のお正月　鶯池（鶯池句集）
着物着て袖肩こるやお正月　青雨（塔）
牛馬も里の神なりお正月　山梔子（最新二萬句）

祝月　動なき代や磐石のいはゐ月　梅盛（滑稽太平記）
大ふくは貢茶に父や祝ひ月　益忠（大三物）
豐年やよき事二つ祝ひ月　圓周（同）
太郎月　馬も人もおほきなるよし太郎月　薄芝（臨野後集）
罷出たものは物ぐさ太郎月　蕪村（ふたりづれ）
年嵩が供いひつかる太郎月　梨葉（梨葉句集）
大釜に産湯沸かすや太郎月　放江（放江句集）
戯れ初めし駒の肥立や太郎月　竹坡（昭和一萬句）
棕梠の實のみなこぼれけり太郎月　菊童子（昭和模範句集）
太郎月猫の家内も殖えにけり　寛愛（最新二萬句）

閏正月（うるふしやうぐわつ）

季題解説 正月、閏月にあたりたる時を閏正月と云ふ。〔參照〕正月（シヤウグワツ）

例句
閏正月　閏正月梅咲く山に遊びけり　北谷生（懸葵）
閏正月郡の緣者を尋ねけり　三幹竹（同）

舊正月（きうしやうぐわつ）

季題解説 陽暦を用ふる人々の間にて、もとの陰暦の正月をさして舊正月と云ふ。暦法改正發布せられてより久しけれども未だに田舍にては陰暦によりて正月の儀式を行ふところ多し。〔參照〕正月（シヤウグワツ）　春－舊正月（キウシヤウグワツ）

例句
舊正月　黄ナ粉挽く舊正月の暇かな　南鷗（同人俳句集）
故里へ舊正月の渡舟かな　佐海（現代俳句大觀）
行人に舊正月の門飾り　月堂（昭和一萬句）
御飾や舊正月の二三軒　六木（現代俳句大觀）
田舍から舊正月の人出かな　三千春（同）
草の戸や舊正月の擲錢戯　月哉（年刊俳句集）
俄かなる舊正月の寒さかな　青眼子（昭和模範句集）
のどかなる舊正月や奧吉野　まき女（續ホトトギス）
舊正や沙彌をたづねこ里の母　句一歩（同）
梅が香に舊正月の雜煮かな　田士英（懸葵）
ふるさとや舊正月の雪籠り　三幹竹（同）

七日正月（なぬかしやうぐわつ）

古書校註 【山之井】 今の世にはけふを子日（ね）とて若菜のあつものを用（ゐ）侍るな

り、荊楚歳時記にも正月七日俗七種の菜を羹としてくへば人萬病なしと侍るにや

【栞草】俗に正月七日を五節句（一）の初として七種の羹をくらひ、遊宴して嘉義をなす、是を七日正月と云、下賤の輩正月七日廿日等の日を正月と云こゝろは、恣に遊びをするを云。

【年浪草】東方朔占書に曰く、歳後八日、一日を鶏と爲し、二日を狗と爲し、三日を豕と爲し、四日を羊と爲し、五日を牛と爲し、六日を馬と爲し　七日を人と爲し、八日を穀と爲す云々。（三）、靈辰とは唐の李嶠が人日の詩に「七日最靈辰」註に人を以て萬物の靈と爲す、故に人日と謂ふ。（四）

註（一）子日（ねのひ）〔初子日を云ふ〕（二）人日（正月七日）上巳（三月三日）端午（五月五日）七夕（七月七日）重陽（九月九日）を五節句と云ふ、節句は節供の誤轉にして、節供とは節日（氣候の變る節なとに祝儀を行ふべき日）に供ふる食物の謂なり、上巳の草餅、端午の粽等の如し。（三）（四）原漢文

季題解説　正月七日をいふ。古來この日に七草粥を祝ふ習慣あり、詳しくは「人日」の條下に説くべし。〔參照〕正月行事　人日（一）人事　六日年越

例句

七日正月

七日正月阿波蛤と伊勢海老と　冬　星（昭和一萬句）
唐崎や七日正月雨の降る　千　里（年刊俳句集）
七日正月の夕燒に凧一つかな　豐　流（同　）
七日正月かるた遊びも疲れけり　雀　子（懸　葵）

小正月（こしやうぐわつ）　十五日正月（じふごにちしやうぐわつ）

季題解説　正月十五日を小正月と云ふ。この日家々にて雜煮又は小豆粥を祝ふ習慣あり、俗に十五日正月とも云ふ。〔參照〕正月　人事　十四日年越　十五日粥　女正月

例句

小正月

松とりて世こゝろ樂し小正月　几　董（行　脚　紀　行）
小屛風の陰に瓶子や小正月　月　斗（現代俳句大觀）
溫泉の里やちらほら梅の小正月　尺　予（年刊俳句集）
市に曳く馬休ませて小正月　一　豐（同　）
小正月雲雀鳴けとて野をありく　浩二路（巳　巳　句　鈔）
凧の繪の龍描きやりぬ小正月　十二星（鐘　氷　集）
山川に流るゝ菜屑小正月　栩　童（ホトトギス）
山樵の圍爐裏ばくちや小正月　無　錫（同　）
小正月繪本など見る榾か妻　一耕人（俳　星）
焚きたてゝ匂ふ若木や小正月　牛　喆（青　嵐）
妻が書く賀狀二三や小正月　九品太（大正新俳句）
裏白のからびわびしや小正月　太　里（ゆく春第一句集）

老二人山に暮して小正月　墨洲（懸葵）
遅れ籾庭に積みあり小正月　同（同）

女正月（をんなしやうぐわつ）

【季題解説】正月十五日。京大阪の俗に、松の内は女の身邊忙しき故、十五日を年禮の始として、女正月といふ。

【實作注意】正月十九日を、京都の俗女節分とて吉田の疫神詣をなすに同じ。

【參照】正月（シヤウグワツ）　小正月（コシヤウグワツ）　宗教―女節分（ヲンナセツブン）

【例句】

女正月

亡妻の友誰彼や女正月　蕪翠窟（木虫句集）
珍らしき友尋ねきつ女正月　花明（大正新俳句）
子一人を我代の珠に女正月　伏兎（同　）
染めし頬に宴はてにけり女正月　茅花（同　）
女正月髪の話に暮れにけり　智枝女（壬申句鈔）
金襴の帶の重さよ女正月　なよ女（現代俳句大觀）
祇園夜話女正月更けにけり　徂春（昭和一萬句）
女正月机の上の塗扇　朝冷（現代俳句大觀）
女正月母の好めるすし持ちて　花舟女（昭和模範句集）
梅咲いて女正月よかりけり　華哉（最新二萬句）
女正月笑ひざうめく一間かな　羊我（懸葵）

二十日正月（はつかしやうぐわつ）

骨正月（ほねしやうぐわつ）　骨の正月（ほねのしやうぐわつ）　團子正月（だんごしやうぐわつ）　二十日團子（はつかだんご）

【古書校註】

【山之井】二十日だんご　俳世俗今日を廿日正月といへり。

【栞草】和漢三才圖會　京師の俗、正月廿日家毎に赤豆餅餌（あづきだんご）を食ふ、紀事　今日地下（一）の諸人おの〳〵遊び、廿日正月といひて團子を食ふ、是を廿日團子といひて佳節とす。事文類聚　江東（二）の俗、正月廿日を號して天穿（テンセン）と爲す。（三）〇今日又婦人鏡臺の鏡餅を祝ふ、廿日と初顏と其訓近し、故に初顏を祝ふの意なり。

京大坂にて新年の嘉慶に、必ず鰤の脯（ホシウヲ）を用ふ、其魚の骨に、大豆、酒の糟を入れ、煮熟して節物（四）としてこれを食ふ、故に骨正月といふ。

註（一）ぢげと訓す、堂上、殿上に對して五位以下の未だ昇殿を許されざる官人の稱、轉じて禁裏に仕ふる公家衆よりして、其以外の人をいふ稱。（二）江東　揚子江の東岸、昔の吳にして楚の項羽が革命を起せし所。（三）天穿　別項を看よ。（四）節日（せちにち）の食べ物

【季題解説】正月二十日を特に二十日正月といふ。京大阪にて新年の嘉祝に用ゐたる鰤の頭及び骨に、牛蒡昆布などを集め、又大豆、酒の糟、大根などを加へて煮熟し祝ふ故に、骨正月又は骨の正月といふ。地方によりては鰤

の代りに鮭を用ゐる風習あり。又團子を作りて祝ふ風習ありて團子正月といひ、二十日團子とも呼ぶ。【二】正月二十

例句

二十日正月

正月も廿日に成て雑煮哉　　嵐雪（車題發句集）
丸々と廿日遊んで團子哉　　百朶（竹　友）
鰤の首尾祝ひ納むる二十日哉　　蝶衣（續春夏秋冬）
骨たゝく古組も二十日哉　　著森（懸　葵）
二番餅二十日正月祝ひけり　　八重櫻（明治一萬句）
正月も繞纊市たちて二十日かな　　鬼城（鬼城句集）
正月も二十日となりし樽の酒　　閒去（同人俳句集）
正月も古りて二十日や宵の雨　　江村（木虫句集）
爐の上の幣すゝけし二十日かな　　素山（閑　古　鳥）
朝酒も二十日正月氣分かな　　抱翠（現代俳句大觀）
正月も是でしまふか鰤の骨　　休計（浪花置炬燵）

骨正月

骨正月賴朝公の天窓哉　　放江（放江句集）
乞食の骨正月や霙降る　　菰堂（春夏秋冬）
粕汁に骨正月の寒さかな　　圭岳（同人俳句集）
長崎の骨正月や餅の黴　　柳之（昭和模範句集）
山あるゝ骨正月の榾火哉　　奇遇（明治一萬句）
奉公や京の商家に骨正月　　山法師（最新二萬句）
着倒れの骨正月や京淋し　　蘇南（蘇南遺唫）
食ひのこす骨正月の團子哉　　竹の門（懸　葵）
遊び〳〵足らぬ思ひの骨正月　　秋若（同　）
氷魚飯や骨正月は雪しまき　　黒洲（同　）

新年（しんねん）

新しき年（あたらしきとし）　新歲（しんさい）　年頭（ねんとう）　年始（ねんし）　甫年（ほねん）　改年（かいねん）　初年（はつとし）　明る年（あくるとし）　若き年（わかきとし）　新なる年（あらたなるとし）　新玉の年（あらたまのとし）　新玉（あらたま）　玉の年（たまのとし）　年立つ（としたつ）　迎ふ年（むかふとし）　改る年（あらたまるとし）　來る年（くるとし）　年越ゆる（としこゆる）　年立返る（としたちかへる）　年變る（としかはる）　年明く（としあく）　年改る（としあらたまる）　年の端（としのは）　年の始（としのはじめ）　年の花（としのはな）

古書校註

【御傘】あら玉の年、春也。
【栞草】璞（アラタマ）の砥とつゞけて、年と云ことの枕辭（一）なり。さて轉じては、あら玉の月日ともいひ、あら玉の春などともいへり、みな活用（ハタラ）かしいへるなり、此あら玉を改まるこゝろと云說はよろしからず。
【雪玉集】あたらしきとしをむかへるかゞみ山世にくもりなき光そふらん。
（二）○年立かへる　年の再びかへり來るといふ義なり。

【新續古今】春來ぬといふより雪のふるとしをよもにへだてゝたつ霞かな　權中納言雅家。

【年浪草】萬葉集曰、荒珠之年、又璞玉、麁玉、未玉。仙覺抄曰、あら玉とは改ると云心也。或云、玉はまろばずに滯らず走る物なれば疾(トヽ)心也、萬葉に未玉乃年往還春立者未都吾屋戸爾鶯者南計（三）右中辨家持。

註（一）枕辭（まくらことば）和歌を作るとき、或る語の上に被らしむる一種の語。（二）作者道塵院なり。（三）あら玉の年たちかへる春立こばまづわがやどに鶯はなけ。

季題解說　改まりたる年の始めを新年、新歲といふ。新玉の年、新玉は年の枕詞にして、新年の美稱。年立つは新年となれる意。年の花は但し年頭の立花、又は年玉をいふ等異說あり。**參照**　今年(コトシ)　舊年(キウネン)　去年(コゾ)　宵の年(ヨヒノトシ)

例句

新年
似合しや新年古き米五升　芭蕉（鶚尾冠）
掛盤に顏見て年の新也　來山（續いま宮艸）
新年の棺に逢ひぬ夜中頃　子規（子規全集）
文章の稿のまゝ新年に入る　露月（露月句集）
年茲に新たなり妻を迎へん夜　墨水（墨水句集）
海祀る我釣に今年幸あれよ　耐雪（雪すゞ雑詠選集）
本坊に年新たなる柝を打つ　葉櫻（續春夏秋冬）
高山大河年新たなる草廬かな　文生（新春夏秋冬）
河水も新に年の淸みかな　青々（丙寅句鈔）

改年
先づ女房の顏を見て年改まる　虛子（虛子句集）
改旦の夜は放れゆく山の色　大羽（年刊俳句集）

初年
はつ年や梅一りんを袖香爐　桂花（寶曹齋引付）
初としや百の赤子の老ひとつ　野坡（野坡吟艸）
炬燵に醉ひて目覺めたる初年の晝　句佛（我は我）

新玉の年
鳥のこゑ雨あら玉の年立かへる　鬼貫（俳諧七車）
あら玉の年立かへる虱かな　一茶（一茶發句集）

新玉
鳥羽玉の山夜があけてあら玉や　調和（俳林不改樂）
あら玉の馬も泥障を惜むには　嵐雪（玄峰集）

年立つ
たつ年のかしらもかたい翁かな　宗因（梅翁宗因發句集）
立ちやすしこんな事なら百年も　同（同）
立年の鏡をかほの花にせう　鬼貫（俳諧七車）
年立や家中の禮は星月夜　其角（五元集拾遺）
明燈や殊に年立つはじめの夜　野坡（野坡吟艸）
年立や雨落ちの石に凹む迄　一茶（九番日記）
年ぞ立つ鬼門の守り松と竹　古軒（大三物）
年立て外山の里に焚く火哉　青々（妻木）
神に仕ふる心ゆたかに年立ちぬ　蝶衣（蝶衣句稿）

年立つ

立つ年の雪に萌え居り麥畠　愛種（かゝがね）
年立つや彌陀讃の誦經より　芸罌室（木虫句集）
年立つや夫婦の中の膳ひとつ　冬葉（故郷）
酒藏や蒸米の香に年立ちぬ　青陽（閑古鳥）
年立つて雪ちる松の城下かな　栗人（最新二萬句）
年立ちて寺から御札下りけり　一葛（同）
天そゝる千木より年の立ちにけり　朶青子（年鑑俳句集）
盆梅の一輪に年立ちにけり　卜風（同）
捗ぎ殘る楠子に年立つ旦かな　瓜青（懸葵）

迎ふ年

迎へしは古來稀なる春ぢやげな　鳴雪（鳴雪俳句集）
迎へねど年に來にけり七十九　同（同）
故人全集年を迎へてめでたけれ　露月（露月句集）
慣れ住みて年を迎へし間借かな　仙者（昭和一萬句）

來る年

來る年のをも湯につなぐ命哉　貞室（卯辰集）
年の來てあまねく至る春日哉　宗因（三籟）

年越ゆる

門にけさとしこゑ松のかざり哉　寸圓（毛吹草）
ふじのねも年はこえける霞哉　宗祇（大發句帳）

たちかへる年

年も立かへり新ざかけふの春　正直（毛吹草）
立歸る年のはしるし松の色　紹巴（大發句帳）

年明く

年明ぬ猶過たあらためん　長和（大三物）
年明て又珍らしや松の雪　一之（同）
年明て開かぬ梅や古暦　正友（狗猧集）
年すでに明て達摩の尻目哉　嵐雪（玄峰集）

年の端

年の端や地下の柏で子細なし　方山（大三物）

年の花

うるふ世の年の花見んけふの雨　宗因（三籟）
麒麟に鞍けさは來にけり年の花　松滴（東日記）
雪よ／＼きのふ忘れし年の花　鬼貫（鬼貫句選）
我が例の古事記繙くや年の花　不言舍（大正新俳句）
百八の大塔の鐘や年の花　樂丈（同人）

今年（ことし）

【季題解説】今年はこの年、今の年の義。但し、去年といへば新年の季題となり、今年とあり一では新年の季題にならずとの古説あれども、古今に例句もあれば、新年の季題として然るべし。【參照】新年（しんねん）去年（こぞ）

【例句】

今年

六十の年の元日
十六の若文字かへすことしかな　宗因（發句集追加）
今朝是へお馬が參ることし哉　同（櫻川）

嶺の松調子揃ふて今年より　來山（いまみや草）

是ことしくらがり越に日にむかふ　同（續いまみや草）

今年から丸まうけ也婆婆の空　一茶（一茶句帖）

祈る我にあらねど今年春や來ん　句佛（我は我）

舊年（きうねん）　古年（ふるとし）　舊臘（きうらふ）　舊冬（きうとう）

季題解說　新年になりて、去りし前年をさして舊年、又は古年と稱す。　**參照**　新年（シンネン）　去年（コゾ）

例句

舊年

舊年の畑に忘れし手鍬かな　小酒（續春夏秋冬）

手にし出づ吾が舊年のホ句手帳　靜雲（ホトトギス）

遊歷の舊年戀し旅中吟　鱶洲（昭和一萬句）

舊年の臼に殘れる糠粃かな　山梔子（最新二萬句）

舊年の畑の撤藁恙なし　小蛄（同）

舊年の鴨飛び去らず池の濠　橡面坊（同）

舊年のわびごと多き年詞哉　銀次郎（同）

舊年や高嶺に見えて炭けぶり　冬葉（年鑑俳句集）

古年

ふる年のいろはに戻る旦哉　米仲（米思集）

舊冬

舊冬の賀狀にまじる手紙かな　玉鉾（懸葵）

舊臘

舊臘になりたる旅の山河かな　北谷生（獺祭）

去年（こぞ）　去年今年（こぞことし）

考證　【御傘】一句づゝあり、詠にはきよねん　去歳　こんねん　當年　新年　改年などと聲によみて一座に二句づゝあり。

【年浪草】雜談抄に云、貞德（一）說に去年今年春也、去年と計も春也、今歳と計は句に依るべし、師說に連歌には去年と云ふ詞は春也、今年は雜也云々句體に依るべし、後拾遺にいかにねておくるあしたにいふ事ぞきのふをこぞとけふをことしと　小大君。爾雅に曰、唐虞（二）は載と曰ひ、商（三）は祀と曰ひ、周（四）は年と曰ふ、名同じからずして義一也、皆一歲の功成る所以也。（五）○若き年、よひのとし、若き年作例未ㇾ考、よひの年俳なり。

註（一）貞德　松永氏　通稱淸右衞門、逍遙軒、延陀丸、長頭丸、保童丸、明心居士等の號あり、細川幽齋に和歌の傳授を受け、里村紹巴に連歌の式目を問ひ、守武、宗鑑が滑稽を承ひて遂に俳諧の一體を興す、斯道の開祖にして御傘を撰し連歌の式に則り俳式を定む、慶長二年八月　勅許を蒙り花の本宗匠となる、花咲翁の名遠近に轟ふ、承應二年十一月十五日歿す、年八十三、著書頗る多し。（二）唐虞　帝堯陶唐氏及帝舜有虞氏、堯舜二帝の世を云ふ。（三）（四）商周一月の註を見よ（五）原本、此下に許氏及爾雅を引けども略せり。

季題解說　年の始に前年をさして去年といふ、昨日をキゾといふ古語に通

ず、去年今年は年もうつりて元日になりていふ詞なり。

【作句注意】 去年今年は、年は改りたれども、なほ舊年をなつかしむ氣分にて作句すべし。【參照】新年 今年 舊年

【例句】

去年

中垣や梯にしらける去年の空　鬼貫（鬼貫句選）
高砂や去年を捨てゝ初むかし　沾徳（俳諧七車）
去年やきのふつとめて休む車牛　同（俳諧五子稿）
葉牡丹に少し殘れり去年の雪　松濱（昭和一萬句）
憂き事も去年になりゆく懷しや　瓦全（同）

去年今年

雲横に去年の今年の花や空　鬼貫（俳諧七車）
此うへの夢は覺えず去年今年　鳳朗（鳳朗發句集）
來る春は及びこしなる去年今年　意敬（毛吹草）
蒼海に立つ白浪や去年今年　格堂（俳星）
一樽の醉ひにも去年と今年かな　鳴雪（鳴雪俳句集）

[illegible]の勅語を拜す

勅なれや日々に新に去年今年　青々（丁卯句鈔）
賽者登りし足跡よりぞ去年今年　瑞光（附古鳥）
水仙の吹けるを句とし去年今年　宋斤（現代俳句大觀）
去年今年我家はなれず風邪の神　百艸（昭和一萬句）
着膨れて去年今年なし渡し守　白眼（昭和模範句集）
木曾川や筏の上の去年今年　冬葉（青嵐）
油つけば燈の花落ちぬ去年今年　烏不關（同）
大空や鐘のひゞきの去年今年　楞山（懸葵）

[illegible]

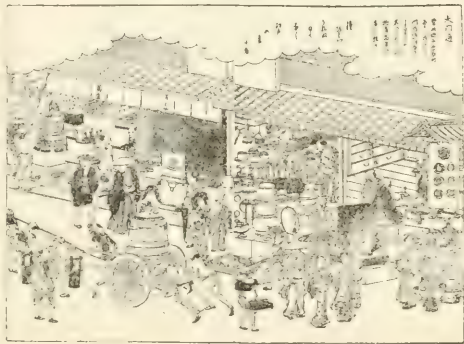
寄する波引く波なから去年今年　俊晃（同）
骨立舍十句の軸や去年今年　碧童（同）

初春

春　明の春　今朝の春　千代の春　千々の春　代々の春　御代の春　國の春　神の春　神祇の春　年の春　今日の春　新しき春　瑞玉の春　玉の春　たちかへる春　君が春　公が春　民の春　三の春　新春　孟春　天の春　天地の春　天下の春　四海の春　雪の春　花の春　松の春　梅の春　日の春　曙の春　朝の春　宿の春　夜半の春　四方の春　千里の春　京の春　江戸の春　伊勢の春　宇佐の春　三保の春　都の春　町の春　里の春　浦の春　海の春　島の春　山の春　峯の春　濱の春　水の春　宮の春　寺

の春　家の春　庵の春　宿の春　窓の春　門の春　納屋の春　糀
屋の春　畑の春　柱の春　橋の春　庭の春　人の春　老の春　父
母の春　孫が春　身の春　我が春　己が春　おらが春　君子の春
武家の春　武士の春　武威の春　供の春　柚の春　賤が春　旅の
春　屠蘇の春　酒の春　縁の春　他詣の春　歌の春　富の春　風
の春　夢の春　誠の春　耳の春　午の春　西の春　二度の春　榮
花の春　慈悲の春　門徒の春　異派の春　諒闇の春　下馬の春
伽羅の春　諸事の春　自他の春・春を迎ふ

古書校註

【樂草】○花の春　花の咲春といふ義なり。誰人が薦著ています花の春　芭蕉。○千々の春　［虚栗］鶴さもあれ顔淵生て千々の春　其角。○四方の春　いづれをみても春の氣色の具りたるをいふ。○宿の春　［遠近集］よる年に留守をつかへよ宿の春　路春。○窓の春　ほの〳〵と鳥くろむや窓の春　野坡。○御代の春　題黄金」目にはみず一万枚を御代の春　其角。
又百世、万代等古歌に見えたり。
烏丸資慶卿の書給へるものに云、君とよむ事は、大君に紛るゝ故、築地(二)のうちにては讀べからず、それも君ならで誰にかなど(二)元より熟したる

詞はゆるすとなり。

註（一）築地　ついひぢの事、花を立て枝を植え、籬末にて其の間を埋めて築きたる垣なり、上を瓦にて葺く、御所、宮家にのみ用ゐらる（二）君ならで誰にか見せん梅の花色をも香をも知る人ぞ知る（友則）

季題解説　陰暦正月は、春の初めなる故に初春といふ。現今の陽暦にて一月は厳冬なれども、慣例によりて初春といふ。支那にては上春と云ふも初春に同じ。君が春は聖天子を奉戴する初春の義。神の春は神社の新春の義。花の春、松の春はともに賞美の詞。其他いろ／＼の名称頗る多し。

作句注意　新年嘉祝の意を十分に籠めて、作句すべし。然らざれば、例へば「朝の春」「宵の春」「夜中の春」「水の春」「山の春」「海の春」「庭の春」等は新年の句とならざることとあるべし。**参照**　春—春ハル

例句

初春

初春や恵方に向て岩城山　宗因（[illegible]宗因千句）
梅柳初春の眼にたしかなり　白雄（白雄句集）
初春やけぶり立るも世間むき　一茶（旅日記）
初春も月夜となりぬ人の顔　同（題叢發句集）
初春や千代のためしに立ち給ふ　同（嘉永板發句集）
初春や思ふ事なき懐手　紅葉（紅葉句集）
初春や心まどかに手毬唄　添水（添水第二句集）
初春の紙鳶の尾長し日本晴　句佛（我は我）
藺草履の藺の香も春の初めなり　同（同　）

明の春

世の中の蝶々も鼻をあけの春　其角（五元集拾遺）
四海波魚のきゝ耳あけの春　嵐雪（玄峰集）
かつらぎの紙子脱ばや明の春　蕪村（[illegible]）
ひがごとのきのふはむかし明の春　大魯（蘆陰句選）
鬼を山が笑ひかへすや明の春　也有（蘿葉集）
あばら家や其身その儘明の春　一茶（一茶句帖）
梨壺の使の童明の春　虚子（虚子句集）
ほの／＼と鶴を夢見て明の春　紅葉（紅葉句集）
俳諧に生きてめでたし明の春　子[illegible]（現代俳句大觀）
矢[illegible]風の三斑中黒や明の春　五空（五空句集）

今朝の春

誰やらが形に似たりけさの春　芭蕉（續虚栗）
庭訓の往来誰が文庫より今朝の春　同（江戸廣小路）
今朝春の[illegible]孫もあり彦も有[illegible]を富　嵐雪（玄峰集）
けさの春は李白が酒の上にあり　杉風（杉風句集）
日を八日[illegible]ほとありけさの春　来山（いまみや艸）
けさ春の氷ともなし水の槽　召波（春泥發句集）
袖口に日の色うれし今朝の春　樗良（樗良發句集）

誰ひとり掃とも見えずけさの春　蓼太（蓼太句集）
今朝の春鳩の三枝を見付たり　同（同）
みなみどり松を見海をけさの春　白雄（白雄句集）
みどり子や御箸いたゞく今朝の春　一茶（七番日記）
けさの春四十九ぢやもの是も花　同（同）
鶯のいなゝきやうも今朝の春　同（嘉永版發句集）
けさの春にし吹山にあるこゝち　乙二（たのゝえ草稿）
ひとつづつもののなつかしやけさの春　蒼虬（蒼虬翁發句集）
酒もすき餅もすきなり今朝の春　虚子（虚子句集）
君が代も我が家も無事に今朝の春　紅葉（紅葉句集）
鶴に乘る願は無くて今朝の春　古白（古白遺稿）
悠紀主基の御田のうはさも今朝の春　四明（四明句集）
海霞む大曙や今朝の春　師竹（最新二萬句）
門を出て野に梅折るや今朝の春　雷死久（懸葵）
雪もなき越路淋しき今朝の春　孤島（同）
先代の贈位もありて今朝の春　春坡（同）
主馬寮に馬嘶くや今朝の春　紫水（同）
今朝の春たゞ我爲の世なりけり　夜濤（同）

千代の春

七十や何ほどの事千世の春　宗因（梅翁宗因發句集）
天秤や京江戸かけて千代の春　芭蕉（當世男）
伊勢が賣家にも來たり千代の春　同（もとの水）
なに事もひと夜につきし千代の春　成美（成美家集）

千々の春

鶴さもあれ顏淵生て千々の春　其角（虚栗）

御代の春

日には見ず一萬枚を御代の春　同（五元集拾遺）
聲萬歳よもいちか曰御代の春　杉風（杉風句集）
野守まで餅を鏡と御代の春　也有（蘿葉集）
酒旗やとうふ和らぐ御代の春　巢兆（曾波可理）
日の本や金も子も生む御代の春　一茶（一茶句帖）
名の高き遊女聞えずみよの春　朱阿（古選）
刀鍛冶は庖丁鍛冶や御代の春　子規（子規全集）
賭け食ひの餅を莚に御代の春　蝶衣（蝶衣句稿）
若くいます我大君や御代の春　飄亭（昭和模範句集）
玄關の大衛立や御代の春　鬼城（鬼城句集）
鯨飲の君恙なし御代の春　小蜻（最新二萬句）
御代の春貧しき父母も嬉しけれ　插雲（同）
とつ國の人詠進の御代の春　羊我（懸葵）
牛追のはした謠も御代の春　雨青（同）
御代の春暦の梅も開きけり　鼎湖（同）

國の春

けふに明て無筆歌よむ國の春　成美（成美家集）
天照皇大神や國の春　梓月（續紅調集）
大比叡は都の鎮め國の春　水峡（年刊俳句集）
盛能に生椰子の實や國の春　竹満（昭和一萬句）
神の春楠もいはほと成てけり　曉臺（曉臺句集）

神の春

飛梅やかろ〳〵しくも神の春　守武（守武句集）
松の若鶴痩せながら神の春　漱石（漱石全集）
神の春草山稲荷小里哉　青々（最新二萬句）

神祇の春

日の本や神祇の春を雪の上　糸尺（年刊俳句集）

年の春

稀なりといふや老土産年の春　宗因（梅翁宗因發句集）

今日の春

朝夕の人も珍らしけふの春　同（同）
庭訓にまかせ畢ぬけふの春　同（同）
子寶のいはれとけたりけふの春　米翁（藏明山莊發句藻）
丑年
無尾牛の歌おもしろや今日の春　四明（四明句集）

新しき春

新しき春待ち得たり花の庭　紹巴（大發句帳）
あら玉の春や御垣の雀にも　北元（北元集）

新玉の春

福天の御息もかゝれ玉の春　巣兆（曾波可理）

玉の春

玉の春一聯の鶴東す　麥門冬（同人俳句集）

たちかへる春

たちかへる春や柳の青みより　芳國（霞俗）
とし〳〵の春や立かへる朝霞　宗長（宗長手記）

君か春

宿直して迎へ侍りぬ君が春　月居（續明烏）
おろかにもをしみし年を君が春　成美（成美家集）
拙者儀も異議なく候君が春　一茶（九番日記）
君が春蚊帳は萌黄に極りぬ　越人（去來抄）
臣老いぬ白髪を染めて君が春　漱石（漱石全集）
生々者皆新也君が春　梨葉（梨葉句集）

民の春

大君の春むらさきに明けにけり　句佛（懸葵）
雪をうけて袂ゆたけし民の春　宗因（三籟）
牛馬のものくふ音や民の春　蓼太（蓼太發句集）

三の春

年も日も身も祝ふ也三の春　蠡陰（大三物）

新春

新春の御慶はふるき言葉哉　宗因（梅翁宗因發句集）
新春は堯の御代つぐ佳例哉　永良（廬筑波）

孟春

うるほふや物孟春の玄關口　寸木（大三物）

天の春

つちのとみやつ〳〵は辨才天の春　良次（同）

天地の春

卦引紙御代や寫して天地の春　金生（雜巾）

天下の春

鳳凰の庭籠や出て天下春　祖丈（同）

四海の春

御連歌の松の雫や四海の春　調和（俳林不改楽）

雪の春
花の春

築き上げて白帝城や雪の春　鶯池（鶯池句集）
おもしろや頃は初折の花の春　宗因（梅翁宗因發句集）
さかづきや先打わらふ花の春　鬼貫（俳諧七車）
二日にもぬかりはせじな花の春　芭蕉（曠野）
薦を着て誰人ゐます花の春　同（其袋）
五十にて四ッ谷を見たり花の春　嵐雪（玄峰集）
面々の蜂をはらふや花の春　同（同）
褻形では逢はじいふても花の春　去來（去來發句集）
雪降や紅梅白し花の春　杉風（杉風句集）
宵の氣をすてゝ起るや花の春　浪化（浪化上人發句集）
けふ〳〵と思へば嬉し花の春　支考（蓮二吟集）
硝子の一夜あちらや華の春　同（同）
花の春命に枝や東うけ　來山（いまみや艸）
花の春宿の都路筑紫船　同（續いまみや艸）
まづ米の多い處で花の春　惟然（惟然坊句集）
よき事の目にもあまるや花の春　千代女（千代尼發句集）
驕白き從者も見えけり花の春　蕪村（落日庵句集）
花の春誰ゾやさくらの春と秋　同（紫狐庵聯句集）
素袍着た酢賣出こよ花の春　召波（春泥發句集）
こと〴〵く中は盡じ花の春　同（同）
山〳〵やさくらの中の花の春　樗良（樗良發句集）
むつまじやもろ人競ふ花の春　同（同）
松のひまほの〳〵見ゆる花の春　曉臺（曉臺句集）
よろこびの雲見えそめて花の春　同（同）
明星の色を外山の花の春　青蘿（青蘿發句集）
海も山も皆下蔭や花の春　闌更（半化坊發句集）
見る物は先朝日なり花の春　同（同）
松はまだちつぼけなれど花の春　士朗（枇杷園句集）
侘盡し〳〵てぞ花の春　同（同）
看經もそこ〳〵にして花の春　成美（成美家集）
ぬけて出る夜着よりすぐに花の春　同（同）
狗が鼠とるなり花の春　一茶（一茶句帖）
頭巾とる門はどれ〳〵花の春　同（享和句帖）
君が代やよその膳にて花の春　同（旅日記）
おのれやれ今や五十の花の春　同（七番日記）
大江戸や藝なし猿も花の春　同（同）
柴の戸を左右へ明て花の春　蒼虬（蒼虬翁發句集）
古きものは我身ばかりぞ花の春　梅室（梅室家集）

花の春

七轉八起のそれも花の春　鳴雪（鳴雪俳句集）
侘住や一輪さしの花の春　紅葉（紅葉句集）
草の戸にひとり男や花の春　鬼城（鬼城句集）
聖や賢や竹林に愚や花の春　碧梧桐（新俳句）
木徳を以て王たり花の春　へき（最新二萬句）
花の春俳諧日々に新たなり　寒樓（同）
新妻と寫眞に行くも花の春　繞石（明治一萬句）
淺草の鐘も聞かばや花の春　釣舟（年刊俳句集）
天命を知るとは申せ花の春　羊我（藝葵）
百人首百の姿や花の春　一樹（同）

松の春

朝彦の殿ぶり清し松の春　素丸（素丸發句集）
門々や何里目出たき松の春　不白（不白翁句集）
日の色のうれしや殊に松の春　墨水（墨水句集）

梅の春

心よし廻にむかふ梅の春　十壽（花笠）

日の春

日の春をさすがに鶴の歩み哉　其角（五元集拾遺）

曙の春

曙の春へ翁をわたしけり　洗車（花笠）

鶴の春

御社に氣しきうつりや鶴の春　宗廣（大三物）

宵の春

軒を連ぬる宿屋早き灯宵の春　繞石（草の園より）
宵の春灯明かき町に羽子をつく　句佛（我は我）
宵の春錦繪に似て團欒かな　同（同）
宵の春猿澤にうつる木辻の灯　同（同）

夜半の春

聽聞やこれもめづらし夜半の春　宗春（三籟）
逢見まく星うつり來ぬ夜半の春　昌察（同）
よき[illegible]度枕上なり夜半の春　虛子（ホトトギス）

四方の春

月を明て閉て居る也四方の春　太祇（太祇句選）
人中の龍駈出む四方の春　曉臺（曉臺句集）
しら雪のすゑより見えて四方の春　蒼虬（蒼虬翁發句集）
四方の春月は明かに餅白し　紅葉（紅葉句集）
天地の昔ながらや四方の春　稻村子（愛吟集）

千里の春

雪ほのぼの千里の春の濱社　青々（年刊俳句集）

京の春

大佛で御室尋し京の春　正國（大三物）

江戸の春

鐘ひとつ賣れぬ日はなし江戸の春　其角（五元集拾遺）
引窓も一度にあくや江戸の春　一茶（一茶句帖）
笛の家鼓の家や江戸の春　蘿兎（續春夏秋冬）
鼓打つて江戸の春趁ふ三河者　守水老（守水老遺稿）

伊勢の春

商人の空音ゆたかや伊勢の春　去來（去來發句集）

宇佐の春

神かけて祈る戀なし宇佐の春　漱石（漱石全集）

三保の春

比枝は富士都の門や三保の春　一林（大三物）

都の春
君は船水からくりや都の春　勝直（稚巾）
町の春
辨天の巳年美し町の春　鳴雪（鳴雪俳句集）
里の春
里の春はや双六に成にけり　桐雨（大三物）
ひつそりと日の出を待つや里の春　惟月（昭和模範句集）
機姫にそふ蠶の神や里の春　鳴秋（最新二萬句）
浦の春
うたがふな潮の花も浦の春　芭蕉（いつを昔）
大碇飾かけたり浦の春　樂園（愛吟集）
海の春
横雲や戸あけて見れば海の春　昌和（大三物）
波の春
日を積や帆を待つ四海波の春　淡々（淡々發句集）
島の春
宿々に船皆上げて島の春　皎月（昭和模範句集）
山の春
花になる雲も出初や山の春　馬光（馬光句集）
路絶えて雫の靜かや山の春　鶯池（鶯池句集）
峰の春
山崎や鳩の目覺て峰の春　桎祥（雪月花）
瀧の春
時得たり鯉のいさみや瀧の春　雨谷（花笠）
水の春
水の春柳もあそぶ朝かな　正次（大三物）
宮の春
塗り替へて丹の玉垣や宮の春　曉水（昭和一萬句）
寺の春
狂俳の開卷ありぬ寺の春　のぼる（同）
家の春
蟹動き動かぬや蜘蛛の家の春　淡々（淡々發句集）
大黒を日の出に菅や家の春　喬阿（花笠）
神々に繩畢包へ家の春　露月（露月句集）
鍵の手に敷く鍋島や家の春　梨葉（梨葉句集）
大根のころがるまゝに家の春　杏雨（現代俳句大觀）
孫一人伊勢にふえけり家の春　默興（續紅潤集）
年々にうれしさそふや家の春　梓雪（梓雪句集）
庵の春
庵の春に紙子借けり都人　沾德（俳諧五子稿）
庵の春寢そべるほどに霞む也　一茶（一茶發句集）
比叡も如意も柴にあけて庵の春　四明（四明句集）
我世なる調度も古りぬ庵の春　帆影郎（昭和一萬句）
墨芭蕉かすみておはす庵の春　青嵐（同）
味噌は黄に飯は白きに庵の春　鶯池（鶯池句集）
東山を庭のつゞきや庵の春　雨城（年刊俳句集）
富士山を蓬萊にして庵の春　雄梧（續紅潤集）
燭剪つて棋盤明るし庵の春　五空（五空句集）
二タ寺の鐘にはじまる庵の春　綱手（塔）
三寶に通ふ風あり庵の春　耕衣（同）
宿の春
發句なり芭蕉桃青が宿の春　芭蕉（ばせを翁）
宿の春何もなきこそ何もあれ　素堂（俳諧五子稿）
貴らである槍一筋や宿の春　墨水（墨水句集）

宿の春
諒闇の意を妻とあり宿の春　五空（五空句集）
紙屑のちらぬばかりを宿の春　紅葉（紅葉句集）
丈草のせゝる垣根よ宿の春　虚子（虚子句集）
我幸や今年は母と宿の春　句佛（我は我）

窓の春
ほのぼのと鳥くろむや窓の春　野坡（[illegible]句集）
まざと幼時を紙鳶見居る我が窓の春　句佛（我は我）

門の春
相生の陽にむかふや門の春　宗因（梅翁宗因發句集）
庵にのみふるとしの雪を門の春　白雄（白雄句集）

納屋の春
裏白やむしがれかざる納屋の春　杉風（雜巾）

糊屋の春
神の皿いかにまがへて糊屋の春　一有（同）

畑の春
妻もけさ男作りて畑の春　風切（花笠）

柱の春
羽箒も住やならべる柱の春　木端（雜巾）

橋の春
魚荷から日も新らしや橋の春　一壺（花笠）

庭の春
見ぬ鶴はさぞな蓬が庭の春　心敬（心敬發句帳）
打水や氷の様したる庭の春　正武（大三物）

人の春
粧や七日を待たぬ人の春　津富（古今句鑑）

老の春
桑さして茶行畑や老の春　杉風（杉風句集）
老の春初鼻毛抜今からも　素堂（俳諧五子稿）
念佛と豆腐とふとし老の春　支考（蓮二吟集）
龍宮に三日居たれば老の春　同（同）
ほうらいの山まつりせん老の春　蕪村（五車反古）
竹の家は人も訪ひ來ず老の春　墨水（墨水句集）
めでたさの人にましけり老の春　梓月（續紅調集）
酒も藥に醉ふほどほどや老の春　鶯池（鶯池句集）
耳たぶに幸を集めて老の春　黄雨（現代俳句大觀）
子がための加留多交りも老が春　句佛（我は我）

父母の春
父母の春に男ながらの化粧哉　夕市（大三物）

孫が春
其嘆の尿のぬくみも孫が春　鳴雪（鳴雪俳句集）

身の春
身の春や遊ぶところに日かけさす　白雄（白雄句集）

我が春
筆の露におさなし我が春　一林（大三物）
我が春も上々吉ぞ梅の花　一茶（我春集）

己が春
すこやかに双親あるを己が春　繞石（落椿）
從容と一年つ境や己が春　鳥不關（青嵐）
かにかくと子等に晴著や己が春　自浦（現代俳句大觀）
手飼して太る仔馬や己が春　無外（懸葵）

おらが春
目出さもちう位なりおらが春　一茶（おらが春）
おらが句の客たり主たりおらが春　僊堂（續春夏秋冬）
温袍著て孫と餅食ふおらが春　四明（四明句集）

裏白と句籠かされておらが春　禾水（最新二萬句）

三夫婦の中の夫婦のおらが春　水陽（懸葵）

君子の春　遠目鏡天下道あり君子の春　一陽（俳中）

武家の春　蓬萊や米高うして武家の春　和洞（同）

武士の春　大小は月の頭ぞ武士の春　正治（大三物）

武威の春　江戸かち栗一天かたし武威の春　陳次（俳中）

供の春　髭髯もけさこゝろみん供の春　八々（同）

松の春　門口の大銭や松の春　杢庵（現代俳句大觀）

賤が春　曙はいつも斯こそ賤が春　加雲（大三物）

旅の春　經木は姥背のはじめ旅の春　林々（百卅番句合）

屠蘇の春　元日は下戸ならんこそ屠蘇の春　志石（大三物）

酒の春　囃しこむ獅子を下物や酒の春　梓月（年刊俳句集）

樂の春　四方の皺波しづか也樂の春　正次（俳中）

俳諧の春　細道の奥たづねばやホ句の春　冬葉（獺祭）

俳諧の春の天下や草の庵　北谷生（懸葵）

各々の下品下生や發句の春　撲天鵰（同）

歌の春　歌の春千載萬葉ありにけり　鶯池（鶯池句集）

富の春　大黒やうち出のつちの富の春　極音（大三物）

凧の春　紙鳶の春江戸繪心地に置炬燵　句佛（我は我）

夢の春　昔かな初音三井寺夢の春　其角（五元集）

誠の春　肅として誠の春を迎えけり　句佛（我は我）

耳の春　孕句や今朝産聲を耳の春　一寸（大三物）

午の春　よき事を附込御代や午の春　千駒（玉かつら）

伯樂に知られて嬉し午の春　大來（懸葵）

酉の春　さんすいを付て祝ふや酉の春　祇玉（明和二年歳旦）

此御代の太鼓に眠れ酉の春　桂舍（同）

二度の春　門松の五百枝は千代ぞ二度の春　良徳（崑山集）

榮花の春　屠蘇袋世や赤染が榮花の春　一味（俳中）

慈悲の春　町里の樂や天下の慈悲の春　廣瀬（大三物）

門徒の春　門徒の春松はしるしもなかりけり　慶之（俳中）

異派の春　莊嚴も台儀ほのめく異派の春　句佛（我は我）

諒闇の春　諒闇の春は山家に似たる哉　同（同）

下馬の春　勇ましのいなゝく駒や下馬の春　古友（玉かつら）

伽羅の春　國厚う千代のつやあり伽羅の春　露言（露言歳旦帳）

諸事の春　わが家の内はわが物ぞ諸事の春　直重（大三物）

自他の春　はづれゐて祝こむるや自他の春　愚益（同）

春を迎ふ　春を祝ふ數々やまづ門の松　宗因（三籟集）

春や祝ふ丹波の鹿も歸るとて　去來（炭俵）

元日

お元日 元首 元旦 元朝 元辰 聖日 首祚 更始 初歳
正旦 履端 人正 大旦(オホアシタ) 初旦(ハツアシタ) 歳旦 聖旦 鷄旦 首歳
旦 改旦 履旦 正旦 嗣旦 春の旦 三旦 三元 元三
三朝 三時 三の朝 年の朝 三つの晨 正始 三始 三つの始
四始 七始 日の始 年の始 歳朝 正朝 正朔 正日 慶日
初暁 初明け 青陽 履端 初陽 淑節 韶節 天臘 天中節
啓令節 年の朝

解説

【山之井】 元日 けさの春 けふの春 四方の春 はつ空 日のはじめ みつの始 みつのあした 年の始 あら玉の年 あら玉の春 としたつ あくる年 初とし 新しき年 上日 年頭 鷄旦 華節 改旦 歳旦 年のはしめ 時のはしめ、月のはしめなれば三始・三元・元三などともいへり、年の朝・月の朝・日の朝なれば三のあしたとはいふなり。

【栞草】 〇元日・元朝・三朝 玉燭寶典 正月一日を元日と爲す。朱子が曰く元は大なり始なりと云々。尚書大傳 正月一日を歳の朝、月の朝、日の朝と爲す、故に三朝と曰ふ。〇元三、三始、三元 師古漢書註 元三も亦三朝と同義なりと云々、又元三は三元の轉稱なり、總百傳 元日は歳の始、月の始、日の始なり、故に三始と曰ふ。玉燭寶典 元日は歳の元、時の元、月の元なり、故に三元と曰ふ、元は始なり。〇鷄旦。東方朔占書 歳後八日、一日を鷄と爲すと有より元日を鷄旦と云、七日を人日といふにおなじ。〇履端 左傳 先王の正時たるや、端を始めに履み、正を中に擧け、餘を終に歸す。元日を云なり。

【史記大官書註】 〇四始 正月元旦をいふ、歳の始め、時の始め、日の始め、月の始めなり。

栞題解説 一月一日、一年の最初の第一日を元日といふ。元朝は元日の朝の義。元旦もおなじく元日の朝の義、歳旦は一歳の朝の義にて元旦と同じ。猶俳諧にては三ケ日を合みて用ふることあり、別項を參照すべし。支那の古俗に、正月元日を鷄とし、二日を狗、三日を豕、四日を羊、五日を牛、六日を馬、七日を人、八日を穀としたることあり、これに因って元日を鷄旦、鷄日といふ。改旦は即ち改まる年の朝といふ意、履旦は暦の始の義、轉じて元日の異名に用ふ。正旦、嗣旦、大旦、初旦いづれも元日の異名。三元は三つの元、即ち年の元、月の元、日の元なるより元日をいふ。元三は三元の轉稱。三朝は即ち年の朝、月の朝、日の朝といふことにて元日を云ふ。三ツの朝、三ツの晨は三朝をやはらけたるにて同意語。三始は即ち歳の始、月の始、日の始なる故に元日の異名、三の始、三ツの始は共に三始を和け

たるにて意味は同じ。四始は三始に時の始の一を加へていふ語にて矢張り元日の異名。日の始は一年の日の始めといふ意。年の朝は歳旦を和げたる意にて元日のことなり。其他異名多し。【參照】元日立春　歳旦

例句

元日

元日に田ごとの日こそこひしけれ　芭蕉（泊船集）
元日やおもへば淋し秋の暮　同（續深川）
ほんのりとほのや元日なりにけり　鬼貫（鬼貫句選）
元日や月見ぬ人の橋の音　其角（五元集拾遺）
元日の炭うり十の指黒し　同（同）
元日やはれて雀のものがたり　嵐雪（玄峰集）
元日や漸くうごくいかのぼり　同（同）
元日や花咲く春は屠蘇の酒　杉風（杉風句集）
元日や草の戸越の麥畠　召波（春泥發句集）
元日や土つかふたる顔もせず　去來（去來發句集）
元日や家に讓りの太刀佩ん　同（同）
元日やたゝみのうへにこめ俵　北枝（北枝發句集）
元日や雜煮むつかし燒て喰　來山（濱いま宮艸）
元日やされば野川の水の音　同（同）
元日も旅人を見る大路かな　沾德（俳諧五子稿）
元日の晝や留木の立わたり　同（同）
元日や聟の肴の網代守　言水（同）
元日の居ごゝろや世にふる疊　太祇（太祇句選）
元日や大樹のもとの人ごゝろ　白雄（白雄句集）
元日やくらきより人あらはるゝ　曉臺（曉臺句集）
元日や此心にて世に居たし　闌更（半化坊發句集）
元日や松靜なる東山　同（同）
元日と思ひの儘の朝寢哉　同（同）
元日や雪をふむ人にくからず　也有（蘿葉集）
元日やうつはの水も伊勢の海　蓼太（蓼太句集）
元日や上々吉の淺黄空　一茶（一茶發句集）
元日や日の本ばかり花の婆娑　同（一茶句帖）
家なしも江戸の元日したりけり　同（七番日記）
元日も過ゆくくさの扉かな　成美（成美家集）
元日はかくて二日の待れける　梅室（梅室家集）
元日や人の妻子の美しき　同（同）
元日や峰をさだむる東山　蒼虬（蒼虬翁發句集）

自題小照

大三十日愚なり元日猶愚なり　子規（子規全集）

元日

元日の人通りとはなりにけり　子規（子規全集）
元日や寺にはひれば物淋し　碧梧桐（碧梧桐句集）
元日の袴脱ぎすて遊びけり　同（同）
元日や一系の天子不二の山　鳴雪（鳴雪俳句集）
元日や親子七人梅の花　同（同）
元日や此の秋にある大嘗會　虚子（虚子句集）
元日の庭に眞白の椿かな　青々（妻木）
元日も水鳥羽搏つ夜となりぬ　露月（露月句集）
元日や家にめでたきもの〻數　華兎（華兎句集）
降りやまぬ雪元日となりにけり　墨水（墨水句集）
元日や登城さわりの投草履　四明（四明句集）
元日や烏帽子素袍の家の格　師竹（續春夏秋冬）
元日の圍爐裏に晝となりにけり　樂南（同）
元日や新たに仰ぐ聖天子　瓢亭（昭和模範句集）
元日の笛吹いてゐる草家哉　花笠（同）
元日のかくてや二千五百年　松宇（松宇句集）
元日や凛然として松の霜　瓦全（現代俳句大觀）
元日やたゞ安らかに老い心　几董（年刊俳句集）
元日や今年ぞ安き我が心　村溪水（同）
元日の芥流る〻野川かな　把栗（明治俳句）
元日や喪にゐて晴き民の顔　樂天（年刊俳句集）
四海波靜かに元日暮れにけり　繞石（落椿）
元日のよき火となりし圍爐裏哉　月村（同人俳句集）
諒闇の元日寒き草木哉　霽月（霽月句集）
元日や弓師を訪へば昔顔　水巴（新春夏秋冬）
虎溪禁元日の酒許しけり　雪人（同）
元日の菰樽据ゑてたのみあり　守水老（守水老遺稿）
元日や四檐の雪に壓され住む　極浦（殘紅）
元日や草の家ながら夕節會　木母（相味唱）
元日の雪白妙や宮藁屋　橡面坊（深山柴）
元日や雉酒の匂ふ溜の間　明成（懸葵第一句集）
元日暮る〻爐邊の雪沓穿きもせず　牛詰（同）
元日や横町わたり獅子の笛　羊我（懸葵）
元日や風なき雪に暮れてゆく　櫻蒐（同）
元日や常の日あたる枯葎　蕉風子（同）
元日やまだ起き出でぬ子の晴着　芳聲（同）
元日や一皺もなく湖暮る〻　天眞（同）
元日や舞猿も來て日暮れゆく　三幹竹（同）

元日を昔語りに母が許　句佛（我は我）
元日や裾引きし母が世を偲ぶ　同（同）
元日も早暮るゝ庭樹鳥を見る　同（同）

御元日

羽織着て今年ぞ宿の御元日　宗成（明和二年歳旦）
旅にある子に幸あれやお元日　虛子（虛子句集）
緣側の日にゑひにけりお元日　鬼城（鬼城句集）
雪の戸にいつまで寢るやお元日　普羅（普羅句集）
放送の鶯聞けりお元日　白圃（現代俳句大觀）
知るほどの古句かんばしやお元日　徂春（昭和一萬句）

元朝

元朝や神代の事も思はるゝ　守武（類題發句集）
元朝の見るものにせんふじの山　宗鑑（同）
元朝の念佛に類はなかりけり　如水（反古集）
元朝や鼠顏出すものゝ愛　太祇（太祇句選）
元朝の不盡ふたつ見んうら山し　乙二（をのゝえ草稿）
元朝やよつにたゝみし紙衾　蒼虬（蒼虬翁發句集）
元朝は寢心もよし心の音　鳴雪（鳴雪俳句集）
元朝の氷すてたり手水鉢　虛子（虛子句集）
馬に乘つて元朝の人動二等　漱石（漱石全集）
元朝や大比叡の雪凄じき　四明（四明句集）
元朝や屋根雪落ちて四方の音　蝶衣（續春夏秋冬）
元朝の梆聲天に響けとて　月嶺（月嶺句集）
元朝や佛に謁する衆生恩　雨圃子（芋畝）
元朝や古き筧の水の音　冬葉（故鄕）
元朝の神燈明く灯しけり　續石（落椿）
元朝やめでたきものに金泥經　燕子（塔）
元朝や月の照りをる荒磯波　瓜青（青嵐）
元朝や寒き一間の風の音　撲天鵬（同）
元朝の神に組豆を陳ねけり　北涯（俳人北涯）
元朝や二見の宿の福草履　石城（懸葵）
元朝の大雪からりと晴れにけり　繁枝女（同）
元朝や雪靄晴るゝ御堂前　三幹竹（同）

元旦

元旦や赤城榛名の峰明り　鬼城（鬼城句集）
元旦に酒酌まぬ今年ばかり哉　乙字（乙字句集）
元旦やしづかに居りてありがたし　虛吼（虛吼句集）
元旦の門嚴かに開きけり　麥浪（青雲抄）
元旦や霜潔き大通り　瓊音（古今模範一萬句集）
元旦の月も見えたり寺の屋根　花笠（懸葵）
元旦の神樂末社に到りけり　九萬里（同）

歳旦

歳旦や年々けふの初むかし　了輔（[illegible]帖）
南山を流るゝ水や歳旦　露月（露月句集）
歳旦の長家の壁に題しけり　青々（妻木）
乾坤を剖つ歳旦の一句哉　五空（五空句集）
歳旦や三寶に歸依し奉る　綾華（[illegible]）
歳旦や老が著るなる緋甚平　月斗（現代俳句大觀）
歳旦の弓師が家を軒古りぬ　二山（懸葵）
歳旦や譯を重ねて朝貢使　石城（同）
歳旦や香の間猶も灯のともる　句佛（我は我）
歳旦をさてなすこともなかりける　同（同）
歳旦の目出度きものは念佛かな　同（同）

聖旦

聖旦や蒼生の賀に　月斗（同人俳句集）

鷄旦

時なる哉雉よりは猶雞旦ぞ　長正（大三物）
鷄旦の神代にかへる山河哉　冬葉（[illegible]祭）
鷄旦を水汲む人や松の下　鱸江（懸葵）

大旦

大旦むかし吹にし松の風　鬼貫（鬼貫句選）
大燭を連ね餅祝ぐ大旦　素石（木虫句集）
大旦望みをかくる子のひとり　白夜（戊辰句鈔）
雪中の人聲よりぞ大旦　葵鄉（草上俳句集）
宵のまゝ榾燃えてをり大旦　蔦月（同）
大旦梅の花より白みけり　鶯池（鶯池句集）
大旦や亭々として雪の松　方外（最新二萬句）
野も山も木花つけたり大旦　南花（[illegible]俳句集）
大旦の天地冷ゆるをかしこみぬ　宋斤（同）
大旦無異に御慶を申しけり　青々（倦鳥）
大旦雪おごそかに明けにけり　瓜青（懸葵）
香焚いて來客を待つ大旦　葉枝女（同）
ひるがへる國旗の古し大旦　厚子（同）

初旦

憎からぬものは笑顏ぞ初旦　一滴（寶暦九年歳旦）
我愚雀に起つ初あした　桃水（大三物）
　予は元日を以て產る
產てくれた恩も有けり初朝　其山（安永四年歳旦）
初朝や花も盛は斯うあらめ　素更（同）

春の旦

許されて色着る春の旦かな　鳴雪（鳴雪俳句集）

三の朝

三ツの朝三夕暮を見はやさん　嵐雪（玄峰集）
歳ありて般若の聲を三の朝　白雄（白雄句集）
我門や松は二本を三の朝　蕪村（新五子稿）

年の朝

野の宮や年のあしたはいかならん　朴什（あら野）

あふれ井もめでたき年の朝哉　青々（百字類題集）
隙なもの箒と我と年の朝　也有（蘿葉集）
頭巾とる佛もたず年の朝　同（同）
蹲石に凍には見えずよ年の朝　梨葉（梨葉句集）
雪の竹雪の松年の旦かな　竹の門（竹の門句集）
土間におりて羽叩く鶏や年の朝　逸字（閑古鳥）
三笠山月残りゐて年の朝　个字（年刊俳句集）
故里に雪をたゝへつ年の朝　白槐（同）
日天を拜む舟子や年の朝　山梔子（最新二萬句）
大鐘に御堂暗さや年の朝　三幹竹（年刊俳句集）
名聞なき念佛に籠る年の朝　句佛（我は我）

三の始

くむ酒の數さへ三のはじめ哉　永治（毛吹草）
餅につくる三の初のいはひ哉　休音（狗猧集）

日の始

あめつちも長閑なる日の始哉　紹巴（大發句帳）
あれたのし十種はじめに日の鏡　鬼貫（俳諧七車）
ふり袖のやまとに長し日の始　曉臺（曉臺句集）
松竹や世にほふらるゝ日の始　千代女（千代尼發句集）
面白やと神ものぞくや日の始　安靜（俳諧溫故集）
美しき霜の光りや日の初め　溫亭（溫亭句集）
草の戸や鍬[illegible]光る日の始　春波（ゆく春第二句集）
松立てゝ月日とかれと日の始　古泉（丙寅句鈔）
ひたすらに思ふまことや日の始　左黄（辛未句鈔）

初曉

先祝へ初曉の初手水　蕪葉（昭和二年歳旦）

初明け

囀らぬ鳥も初明け風情哉　苑扇（大三物）

鶏日

鶏日を長閑に告ぐる八聲哉　日如（鷹筑波）

宵の年（こひのとし）　初昔（はつむかし）

季題解説 元日に前年をさして、宵の年と云ひ、又、初昔とも云ふ。【參照】新年（しんねん）

例句

宵の年

かゝげたる燭の火明し宵の年　三幹竹（懸葵）
宿直する顔も古りたり宵の年　同（同）

初昔

雪黒き焚火のあとも初昔　天哉（現代俳句大觀）
波音も初昔なる二見かな　鶯竹里（獺祭）

元日立春（ぐわんじつりつしゆん）

季題解説 立春の舊暦元日にあたるを元日立春といふ。【參照】元日（グワンジツ）春

立春（りつしゅん）

例句

元日立春　元日や立春の梅咲くに遇へり　三幹竹（懸葵）

二日（ふつか）

季題解說　二日は正月二日の義。他の月の二日にはあらず。以下に說く三日、四日、五日、六日、七日皆同じ。古來多く今日をよろづの仕事始めの吉日と定めらる。

例句

二日

惟茂と起しに來たる二日かな　嵐雪（玄峰集）
おきがけに猶寝こけなる二日かな　闌更（新五子稿）
春なれて二日の門はたゞしけれ　柳女（續明烏）
二日はや禮盡すべき家もなし　虛子（虛子句集）
飯白き二日めでたき天氣哉　温亭（温亭句集）
所富士暮れなんとして二日哉　極浦（殘紅）
吹くからに眞晝の風の二日哉　梨葉（梨葉句集）
酒家籬に早や墨のつく二日哉　小酒（續春夏秋冬）
白魚に春のどかなる二日かな　梓雪（梓雪句集）
籠りゐて心深山の二日かな　舞月（舞月句集）
城山の鵯聞え來る二日かな　默禪（ホトトギス）
二日より伊勢參宮や泊りがけ　伯洲（青雲抄）
檀那寺の二日を訪ひぬ早椿　來布（最新二萬句）
伊豫の温泉へ渡る正月二日哉　月斗（現代俳句大觀）
上京や二日の朝のうす氷　九斤子（同）
弟子つれて二日の禮や角力取　是佛（同人俳句集）
硝子戸に二日の寒さ見ゆる哉　龍雨（龍雨俳句集）
東海に二日の旅や伊勢泊り　三幹竹（懸葵）
かの日記還讀む二日降る夜なる　句佛（我は我）
比叡晴れて紙鳶に時雨るゝ二日哉　同（同）
二日晴紙鳶を前なる稻荷山　同（同）
晝の月彌晴るゝ二日畑青き　同（同）
（久々に寄松先生の書はれいたば）
なつかしき畫の師と爐邊に二日哉　同（同）

三日（みつか）

季題解說　正月三日を三日といふ。

例句

三日

一壺かろく正月三日となりにけり　鬼城（鬼城句集）

暮るゝ山に凧一つある三日かな　春梢女（ホトトギス）
人も見ず三日暮れけり濱の宿　三豆（昭和一萬句）
鏡餅はや干割見え三日かな　不言舍（現代俳句大觀）
甕照らす月太古めく三日哉　瓜青（大正俳句選）
正月も三日暮れたるもの哀れ　月斗（同人俳句集）
遊ぶ子に雨の三日の炬燵哉　蕉星窟（木虫句集）
禮帳をつとめあげたる三日哉　梨葉（現代俳句大觀）
京の雪見て戻りたる三日かな　朝冷（年刊俳句集）
おもひなく火桶にゐたる三日かな　宋斤（同）
蓬萊に見ゆる三日の埃かな　一凍（同）
松の雪蕩むばかりの三日かな　夢城（同）
賀狀見て炬燵に倚るも三日哉　竹湍（昭和模範句集）
讀むものも三日となりし机かな　喬司（年鑑俳句集）
箒目のくづれし砂も三日かな　芋洗（懸葵）
飾海老片髯折れし三日かな　柳子女（同）
廻禮の濟みて三日の早寢かな　鱶洲（同）
三日暮れ風となる柚の實木搖れして　句佛（我は我）
雪消きく窓ゆかしさよ三日晴　同（同）

三ケ日（さんにち）

季題解説　正月元日、二日、三日の總稱。この三ケ日間は毎朝雜煮を祝ひ、年賀の交換をし、賀客には屠蘇年酒をすゝむ。

例句　三ケ日

日々に日にあたらしや三ケ日　友德（綾錦）
柴の戸を覗きにゆくや三ケ日　梅口（發句新葉集）
三ケ日常くる人がねから來ず　九野（同）
門番に餅を賜ふや三ケ日　子規（子規全集）
梅活けて三幅對も三ケ日　繞石（落椿）
古への愚を守りけり三ケ日　霽月（霽月句集）
お料理の家例めでたし三ケ日　竹の門（竹の門句集）
太平の醉や覺めざる事三日　紅葉（紅葉句集）
一人居や思ふ事なき三ケ日　漱石（漱石全集）
忘れゐし柚の葉や三ケ日　五空（五空句集）
日々に新にして屠蘇の三ケ日　四明（四明句集）
門さして寺町さみし三ケ日　鬼城（鬼城句集）
腰痛き何時もの風邪や三ケ日　極浦（殘紅）
押鮎のいとゞつめたし三ケ日　梨葉（梨葉句集）
三ケ日母國行事に籠る人　櫻磯子（日本俳句鈔）

三ケ日
裾を引く妻の立居や三ケ日　三允（春夏秋冬）
三ケ日ホ句三昧や貧にこそ　鳥堂（續春夏秋冬）
化事あらば常の如しぬ三ケ日　鸚鵡（ホトトギス）
神棚に神います灯や三ケ日　柿紅（同　）
大晦をつゝき暮しぬ三ケ日　何左衛門（同　）

歳旦（さいたん）

季題解説　歳旦開などの用例に於けるが如く、俳諧に一は特に三ケ日間の意をも歳旦といふことあり。（参照）元日（グワンジツ）　人事　歳旦開（サイタンビラキ）

例句
歳旦
歳旦をしたり貝なる俳諧師　蕪村（夜半楽）
歳旦や芭蕉たゝへて山籠り　蛇笏（昭和一萬句）

四日（よっか）

季題解説　正月四日を四日といふ。因みに醫師僧侶などの廻禮はこの日より行はるゝ習慣あり。

例句
四日
四日には寝ても春の花ごゝろ　北枝（卯辰集）
うれしさの過ぎぬ正月四日なり　子規（子規全集）
情ねきら紫草に霜見る四日かな　無患子（草上俳句集）
お賽銭四五枚たまる四日かな　小齋（年刊俳句集）
小普請に四日の大工一人かな　駝門子（愛吟集）
麦踏を旅に見かけし四日哉　天浪（青嵐）
紋服のしみ恨めしき四日かな　水仙女（大正新俳句）
領臥に鴨一羽ある四日かな　ひさ子（同　）
ま一と夜とぞむ酒にがき四日かな　一蕁（懸葵）
供つれて門徒を廻る四日かな　三幹竹（同　）

五日（いつか）

季題解説　正月五日を五日といふ。

例句
五日
若菜野はかすむ五日となりにけり　春坡（松のそなた）
七面鳥五日の富士に叫びけり　丁二（年刊俳句集）

六日（むいか）

六日（むいか）　六日（むゆか）

季題解説　正月六日を六日といふ。

例句

六日　六日はや厨淋しう納豆汁　荏多露（草上俳句集）
野路遠く薺摘み來し六日かな　冬葉（獺祭）
郵便もやゝ遠のきし六日かな　蘭栞（懸葵）
俎に薺用意や六日の夜　句佛（同）

七日（なぬか）

七日（なのか）

季題解説 正月七日を七日と呼ぶ。〔參照〕七日正月（ナヌカシヤウグワツ）　人日（ジンジツ）

例句

七日　母のある正月七日の寒さ哉　乙二（松のゝえ草稿）
粥木も日芳しき七日哉　末琢（伊達衣）
隱れ栖の宿なる寺の七日哉　石老（閑古鳥）

人日（じんじつ）

人の日（ひとのひ）　靈辰（れいしん）　人勝節（じんしようせつ）　元七（ぐわんしち）

季題解説 正月七日を人日といふ。東方朔占書に「歳後八日、一日を雞と爲し、二日を狗と爲し、三日を豕と爲し、四日を羊と爲し、五日を牛と爲し、六日を馬と爲し、七日を人と爲し、八日を穀となす」といへり。又七日を靈辰ともいふ、人は萬物の靈なるが故なり。〔參照〕七日正月（ナヌカシヤウグワツ）　七日（ナノカ）　人事―若菜摘（ワカナツミ）　七種（ナヽクサ）

例句

人日　人日や本堂いづる汗けぶり　一茶（七番日記）
人日や隣近所を茶に招く　四方太（明治一萬句）
人日や春衣再び新なり　同（同）
人日に從容として炬燵かな　青々（妻木）
人日や趙大人に騎馬の客　五空（五空句集）
人日の埃美し塗火桶　せん女（ホトトギス）
宝の花見て人日の詩興哉　田士英（同）
人日や薺の發句梅花の詩　鶴夢（明治一萬句）
粥腹に人日寒く籠りけり　小石（大正俳句選）
人日や凍土踏んで誰ぞ來る　風鳥（年刊俳句集）
人日や庵朗かに鳥の聲　琅玕（靑嵐）
人日や雪降りかぶる小柴山　蓄兒（同人俳句集）
人日や正月肴盡きんとす　奇遇（明治一萬句）
人日や遊草臥寢草臥　露峰（同）
人日の烟りたなびく野山かな　羊我（懸葵）
人日や都はなれて宇治木幡　句佛（我は我）
人の日　ことさらに人の日なるぞ淺緑　櫻叟（眞木柱）

人の日

人の日やけふは見下す松の風　巨龍（蕉庵再興記）

人の日と思へばをしき曇哉　梅室（梅室家集）

人の日も人の翁は寒くこそ　鳴雪（鳴雪俳句集）

人の日に喧嘩の聲の聞ゆるぞ　紅葉（紅葉句集）

人の日に屏を書いて遊びけり　龍雨（龍雨俳句集）

人の日を牛の如くに寢てゐたり　重雪（明治一萬句）

人の日を暇なき身の暇かな　四方太（同）

松の内（まつのうち）　注連の内（しめのうち）　松七日（まつなぬか）

古書校註

【栞草】正月十五日迄を松の内、注連の内と云、江戸にては七日に門戸の飾を除く、近來の風俗なり、黒田家（一）にては古來のごとく十五日迄飾らるゝなり。

註（一）外様大名にして九州福岡五十二萬石を領す、赤坂溜池町に邸地あり。

季題解説

年首に門松を建ておく間を松の内と云ふ。東京にては七日までを松の内といひ、又松七日とも云ふ。京阪にては十五日までを松の内といひ、又は注連の内ともいふ。

【參照】松過ぎ（マツスギ）

例句

松の内

呼聲もまた廓若し松の内　倚村（黄昏日記）

奥深き宿となりけり松の内　玦石（類題發句集）

口紅や四十の顔も松の内　子規（子規全集）

もろ〳〵の神も遊ばん松の内　露月（露月句集）

蝶鳥と子等を囃しぬ松の内　同（同）

淋しさも古き都や松の内　青々（妻木）

つぶ遊びなど倚ほ殘る里松の内　四明（四明句集）

立ならべし弓の古びや松の内　五空（五空句集）

ふるごとのつぎ〳〵にゆかし松の内　鬼城（鬼城句集）

霽雪や不二高か〳〵と松の内　墨水（墨水句集）

兎角して寒に入りけり松の内　左衛門（左衛門句集）

琴棋書畫松の内なる遊び哉　虚子（虚子句集）
松の内使に出るや小提灯　癖三醉（癖三醉句集）
天目に温泉上りの茶や松の内　露月（露月句集）
振袖の大和見に來よ松の内　横斜（新俳句）
餘所ながら松の内なる鼓かな　寸七翁（寸七翁句集）
二十妻の日髪朝湯も松の内　放江（放江句集）
雪ふりて正月めきぬ松の内　十二星（鐘氷集）
米付けて馬來る宿や松の内　閑村（續春夏秋冬）
裾を引く妻が起居や松の内　三允（春夏秋冬）
古寺に開帳もあり松の内　八重櫻（明治一萬句）
夜來る女の客や松の内　九品太（同）
繋ぎ牛も絶えぬ田町や松の内　好翠（最新二萬句）
酒くさき布團に寢たり松の内　千甕（現代俳句大觀）
松の内いづくも雨の藁砧　孤島（懸葵）
村情に馴れ來し妻や松の内　水棹（同）
着飾りて思はれ顏や松の内　冬水（同）
加茂人の卯杖おこしぬ松の内　三幹竹（懸葵）
松の内も人日近く常の樣　句佛（昨非集）

注連の内

組重を絶やさでゐたり注連の内　樵青（同人俳句集）
物乞の女來なるゝ注連の内　雪徑（昭和模範句集）
鑄物師の胡粉暖簾や注連の内　三幹竹（懸葵）
注連も早八瀬を出て來る薺賣　句佛（我は我）

松七日

松七日夜々の月明に遊びけり　山梔子（懸葵第一句集）
福壽草咲かで過ぎけり松七日　蓼江（同）

松過ぎ（まつすぎ）　注連明き（しめあき）

季題解說　門松を撤したる後を松過ぎと稱す。現今東京にては六日夜に松を取る習慣あり、京阪にては十五日に取る習慣なれば、各その地方の習慣によりて、七日過ぎ、或は十五日過ぎを松過ぎといふ。又京阪地方にては俗に注連明きといふ稱呼を用ふることあり。〔參照〕松の内（まつのうち）

例句

松過ぎ

飾松過てうれしや終の道　杉風（杉風句集）
一日も霜威ゆるまず松過ぎぬ　蝶衣（蝶衣句稿）
松過ぎや鶴の飼壺の薄氷　三昧（年刊俳句集）
温泉も遊び飽きたり松過ぐる　温亭（温亭句集）
松過ぎて毎日餅を食ひにけり　虚吼（虚吼句集）
松過ぎやひとわたり掃く家まはり　蘇子（蘇子句集）

松過ぎ　松過ぎや寒さをたのむ石蕗の花　梨葉（梨葉句集）
松過ぎや鈴鳴らし來る芥掻　寸七翁（寸七翁句集）
松過の雪なき町に戻りけり　十二星（鐘氷集）
松過ぎし浦海苔舟も見ゆるなり　冬葉（冬葉第一句集）
松過ぎの臺所見たり近衛殿　東洋城（最新二萬句）
松過ぎに炮烙賣の來りけり　水棹（青嵐）
松過ぎの間抜けて戻る賀状かな　茶丘（年刊俳句集）
松過ぎや瓶に殘りし燗ざまし　とう子（筑波）
松過ぎや既に胸うつ世事の難　凡水（同人俳句集）
松過ぎの淋しき膳につきにけり　一雅（かりがね）
松過ぎの粥このもしき夕餉哉　活天（草上俳句集）
松過ぎを水仙の花剪りつめし　翠光（懸葵）
福壽草の苔乾きくる松過ぎぬ　句佛（我は我）
注連あき　注連あきの後仕事や始まりし　山不鳴（大、模範一萬句集）

小年（こどし）

季題解説 正月十四日をいふ　大晦日を大年といふに對していふ詞なり。
〔季節〕冬　大晦日（おほみそか）　人事—十四日年越（としこし）

例句
小年　爐の隙を月にさましゝ小年かな　冬葉（獺祭）
松も早戸は淋しき小年かな　三幹竹（懸葵）
輪飾の取り忘れある小年かな　句佛（同）

春永（はるなが）

永日（えいじつ）　永陽（えいやう）

古書校註 【栞草】初春に三春の季長きをさして云。

季題解説 春永とは初春より季春迄三春に亘りて、末長きことを祝ふ意なり、專ら正月に用ゐる言葉とす。又永日、永陽ともいふ。

例句
春永　春永といふやことばのかざり繩　立圃（空礫）
春永の年のかしらや福祿壽　貞德（鷹筑波）
からくりの春の永さや絲柳　草也（三崎志）
春永に古寫の樂譜を正しけり　鳥不關（青嵐）
春永や障子の外の芽麥畑　瓜青（同）
春永や鐘打ち暮るゝ温泉寺　一許（同）
春永のよき日を記す掛暦　山堂（昭和一萬句）
春永や炬燵にあれば欲もなし　魚石（年刊俳句集）

天文

初空（はつそら）　初御空（はつみそら）

季題解説　元日の大空のことを初空といふ。又天を崇めて初御空ともいふ。

〔異名〕初東雲（はつしのゝめ）　初茜（はつあかね）

例句

初空

初空や烏をのする牛の鞍　嵐雪（玄峰集）
初空や有の福祿壽無の惡魔　言水（俳諧五子稿）
初空やたばこ吹輪の中の比叡　同（同）
初空や船なき海に日の出る　百池（巴調集）
初空や十日は蓑のきそはじめ　蓼太（蓼太句集）
初空や鳥はよしのゝかたへゆき　千代女（千代尼發句集）
初空を夜着の袖から見たりけり　一茶（七番日記）
初空にはや疵付けるけぶり哉　同（同）
初空のはづれの村も寒いげな　同（同）
初空へさし出す獅子の天窓哉　同（我春集）
初空やあし邊の雪に雨三家　露月（露月句集）
初空に横斜す庵の舊木かな　同（同）
初空や古檜雲吐く峰つゞき　同（同）
初空の明りさし來る爐邊かな　青々（妻木）
初空や山茶花くらき宿の霜　同（同）
初空や雜木の間の雲一片　癖三醉（癖三醉句集）
初空や千歳と古りし宮の樹々　五空（五空句集）
初空や都に古き烏丸　蓼江（年刊俳句集）
初空やはや揚りゐる凧　凱風（同）
初空や鶺鴒遊ぶ船溜り　麥門冬（同）

金澤に住みて初めて春を迎ふ

初空や吹雪靜まる門の杉　続石（落椿）
初空や峰の風音あるばかり　紫陽（昭和模範句集）
初空に舞ひ上りけり神の鳩　秋雨（同）
初空の松は綠に鶴かな　紫茗（明治一萬句）
初空や大淀川の水の色　月斗（大正新俳句）
初空や高千穗の嶺のたゞずまゐ　徂春（同）
初空につゞく杉山檜山哉　天哉（最新二萬句）

初空

初空や横雲かゝる十勝岳　不倦堂（青嵐）
初空の青し地上の雪二尺　波空（續春夏秋冬）
初空に聳ゆる一の鳥居かな　鳥一（同人俳句集）
神路山初空に月殘りけり　个字（閑古鳥）
初空へ靜かにあがる軍艦旗　一浦（現代俳句大觀）
初空や小村の末も日の御旗　小波（同）
初空や富士へ長々と冬木道　月波（懸葵）
初空やけさも淺間に立つ烟　二巴（同）
初空の靄や大喪の東山　句佛（我は我）

初御空

初御空晴空に飛ばす駒もがな　蝶衣（蝶衣句稿）
山なべに旭の彩りや初御空　鶯塘（年刊俳句集）
消えゝゝて雲一つなし初御空　泰堂（同）
浮橋の三尊仰ぐや初御空　水哉（現代俳句大觀）
洛人に招き松など初御空　杜鵑花（同）
東海に名だたる城や初御空　竹の門（竹の門句集）
三山の鼎めでたし初御空　行々子（ホトトギス）
初御空夫婦鳥の渡りけり　鯉澄（同人俳句集）
霜うけて光る草あり初御空　土音（大正新俳句）
初御空鷹を見つけて仰ぎけり　喜雨（昭和模範句集）
かゝり紙鳶いくつ御苑の初御空　句佛（我は我）

初東雲（はつしのゝめ）　初曙（はつあけぼの）

季題解説 元日の曉天をいふ。元日の明けむとして、仄かにあかくなりたる空をいふ。　**参照** 初空（ハツゾラ）

例句

初東雲

水仙に初しのゝめや洛の水　青々（妻木）
靜さや初東雲の裏生駒　米都（昭和一萬句）
鳥一羽初東雲の空過ぎぬ　殘夢（現代俳句大觀）
初東雲早や漕ぎ出づる舟ありし　芳舟（同）
樹々の色も初東雲の明治橋　北洲（年刊俳句集）
初東雲沖の島々朗かに　聯珠（同）
檣頭の初東雲や古港　市夕（同）
富士の雪初東雲の錦かな　吟月城（木太刀俳句鈔）
灯を消せば初東雲の障子哉　栗人（最新二萬句）
磯山や初東雲の家二軒　玉鬼（同）

初曙

初あけぼの一筆鳥聲にてぞ　泰徳（東日記）
わざとならぬ初曙や神の春　紫狐（雁風呂集）

初茜空（はつあかねぞら）　初茜（はつあかね）

季題解説　元日の曉、將に初日出でんとして東の空あかくなれるを初茜空・初茜といふ。［參照］初空（ハツゾラ）

例句　初茜

初茜山は久遠の姿なる　顧堂（丙寅句鈔）

初日（はつひ）　初旭（はつあさひ）　初陽（はつひ）　若日（わかひ）　初日影（はつひかげ）　初御影（はつみかげ）　初日の出（はつひので）　初日向（はつひなた）　初日山（はつひやま）

季題解説　元旦に晴れたる太陽を初日といひ、又、初旭・初陽・若日・初日影などといふ。年の初めの日の出なれば、初日の出ともいひ、又初御影ともいふ。

［參照］初明り（ハツアカリ）　人事　初日拜む（ハツヒヲガム）

實作注意　初日は元日の太陽を讃へ喜ぶ謂ひなれば、新年の瑞祥滿ち〳〵たるさまを詠ずるやう注意すべし。每日東天に出づる太陽に變りはなけれども、年改まりたる日の初めての太陽なれば、これを迎ふる人々の心の上にも自らなる喜びあふるゝものあるなるべし。

例句　初日

嘉例候よやをら初日の梅ごゝろ　鬼貫（俳諧七車）
雲つゝむ初日を空のおしむやは　同（同）
出霞のつゝみおほせぬ初日かな　浪化（浪化上人發句集）
梅が香の筋に立よる初日哉　支考（蓮二吟集）
木に草に麥に先見る初日哉　來山（續いま宮草）
日の光今朝や鰯のかしらより　蕪村（蕪村句集）
しづかさの鍬にさし入る初日哉　蓼太（蓼太句集）
喰うて寝て起きて見たれば初日哉　也有（蘿葉集）
竹も起きて音吹かはす初日哉　千代女（千代尼發句集）
土藏から筋違にさす初日哉　一茶（一茶句帖）
我々が顏も初日や御代の松　同（享和句帖）

初日

鶴初日千代の古道金砂子　鳴雪（鳴雪俳句集）
初日さす朱雀通りの靜さよ　碧梧桐（碧梧桐句集）
しづ〳〵と藪にさしこす初日哉　青々（妻木）
雁も啼く洲濱なる初日詣でしつ　乙字（乙字句集）
我が郷に富士といふ山初日かな　癖三醉（癖三醉句集）
掃はざりし蝶もゆたけく初日さす　蝶衣（蝶衣句稿）
霜とけて初日にけむる葎かな　鬼城（鬼城句集）
雪晴の竹の綠に初日かな　十雁（十雁句集）
小家皆初日に向ふ平砂かな　萬南坊（深山柴）
初日さして橙赤き戸口かな　把栗（新俳句）
出たり〳〵海をはなるゝ大初日　桂月（同）
しろしめす御代のはじめの初日哉　なみえ（丁卯句鈔）
人皆の無爲になりたる初日哉　松宇（現代俳句大觀）
牛部屋の屋根に雞鳴く初日哉　漱石（落椿）
山國の雪美しき初日かな　九日庵（明治一萬句）
寸青き麥に初日や柴の門　素泉（最新二萬句）
東海に大きく見ゆる初日哉　東[illegible]（懸葵）
潮退きし河のすがしき初日哉　南青（同）
山々のすがしき色の初日哉　楠香（同）
葉牡丹の霜紫に初日哉　句佛（我は我）

初旭

初旭鐵も拜まれ給ひけり　一茶（七番日記）

初陽

鶯や初陽毎年の案内者　正依（毛吹草）
初陽毎朝春鶯囀も哉　貞[illegible]（[illegible]筑波）

若日

人起きて東に若日出にけり　可醉（大三物）

初日影

初日影まづ出たりないこま山　鬼貫（俳諧七車）
らちはれて障子も白し初日影　同（同）
しら粥の茶碗くまなし初日影　丈草（丈草發句集）
けにも春宵過しぬれど初日影　太祇（太祇句選）
我と世をのがれん身にも初日影　白雄（白雄句集）
大あたま御慶と來けり初日影　巣兆（曾波可理）
我と人と深山ごころや初日影　曉臺（曉臺句集）
忽然と活たり〳〵初日影　同（同）
ふるさとの伊勢なを戀し初日影　樗良（樗良發句集）
酒掃の奇特見てけり初日影　梅室（梅室家集）
我が國の物とこそ思へ初日影　鳴雪（鳴雪俳句集）
冠毛を立つる鸚鵡や初日影　四明（四明句集）
初日影夜は明けていまだ富士見えず　古白（古白遺稿）
寒蘭や掃はぬ庭の初日影　青々（妻木）

秋田城を殘すのみ東征初日影　天郎（東國）
葦原や吹雪の中に初日影　織江（青雲抄）
松柏ある國ぶりの初日影　古泉（丙寅句鈔）
初日影跡光りが卒の目に　折柴（日本俳句鈔）
門袖の疎竹婆娑たり初日影　蒼梧（年刊俳句集）
天津風そへ來し木々や初日影　牛喆（懸葵）
堆書裡の跡の破れに初日影　羊我（同）
加茂川や柳條長き初日影　句佛（我は我）
獅子舞の宿を出てゆく初日影　同（同）

初日の出

松竹も常盤の影や初日の出　思向（玉かつら）
東路の橋は富士なり初日の出　漁眠（明和二年歳旦）
馳け上る松の小山や初日の出　漱石（漱石全集）
初日出仙家の巖の柑子哉　六花（寒烟）
海のある國うれしさよ初日の出　蝶衣（蝶衣句稿）
島々の昨日の雪や初日の出　格堂（俳星）
東に初日出けり昇り行く　温亭（温亭句集）
初日の出我は山中の詩人哉　癖三醉（癖三醉句集）
我生きて此土尊し初日の出　五空（五空句集）
初日の出浦は七浦七戎　梁村（最新二萬句）
御神火のほのかに見えて初日の出　龍子（續紅調集）
大いなる鶴戶の窟や初日の出　冬葉（故郷）
初日の出東海に面す小城かな　古巖（春夏秋冬）
初日の出蓬萊宮の咫尺かな　鳥堂（續春夏秋冬）
去年の月殘る高さや初日の出　句佛（我は我）

初日向

持得たり蘭も常盤の初日向　馬光（馬光發句集）

初日山

龜の背に海老ほの赤く初日山　鬼貫（俳壇七車）

初明り（はつあかり）

季題解説 元日の朝の曙光の、ほのぼのとさし來るさまを初明りといふ。

參照 初日（三六）

例句

初明り

初明り宿のあしたもかはる也　露芝（大三物）
鶯のはこの障子も初明り　四明（四明句集）
螢の石かゝへる小窓の初明り　同（同）
初明りさすやみかのへみかのはら　蝶衣（蝶衣句稿）
お潮上げにつゞく人影初明り　同（同）
入海にそゝぐ一河や初明り　格堂（俳星）
百八の鐘に千鳥や初明り　青々（最新二萬句）

初明り

眞榊や寂々として初明り　素石（大正新俳句）
海風に眉の晴さや初明り　鳥不關（青嵐）
初明り神も來通ふ御山雲　鴻村（年刊俳句集）
森走る水上みよりぞ初明り　竹の花（炬火）
ほの〴〵と初明りして烏帽子岩　十雨（ホトトギス）
初明り嶺々現れてめでたけれ　醉骨（同）
しろ〴〵と總尻の波や初明り　五沼（閑古鳥）
乳瘤垂るゝ銀杏大樹や初明　王樹（同人俳句集）
初明り阿彌陀ヶ峰へ霜を踏む　水青（同）
明星の光りうすれて初明り　とう子（筑波）
お篝に背を向けてたつ初明り　蛻骨（枯野）
初明り神代の杉の梢より　冬葉（故郷）
我家や海を門邊の初明　鹵舟（青嵐）
波の上をはしる波あり初明　黒潮（同）
富士が嶺の雪むらさきに初明り　楚人冠（現代俳句大觀）
潮鳴の遠き社頭や初明り　星村（同）
枕頭の椿水仙や初明り　月江（同）
松深き中の山居や初明り　伏兎（昭和一萬句）
初明りさし來雪野の流れ哉　三幹竹（懸葵）

初晴（はつはれ）

季題解説 元日の晴天を初晴といふ。日次紀事には、「天晴。今日晴るれば、則ち五穀必ず熟す」と見え、元日より日本晴となるはめでたきこととなり。

例句 初晴

初晴にはやきく凧のうなりかな　冬葉（懸葵）
初晴や野に出でゝ見る富士筑波　同（同）
初晴や建禮門を仰ぎ見る　三幹竹（同）
初晴の三日や羽子もほのめきて　句佛（我は我）
初晴や堂椽に見る阿彌陀峯　同（同）

初東風（はつこち）　節東風（せちこち）

古書校註 【栞草】〔爾雅〕東風は之を谷風と謂ふ。注 谷風とは五穀養育の意也。春晴ての風は光風と曰ふ。〔萬葉〕細注 東風越の俗安由乃可是と云、東風痛久吹良之奈吳乃安麻乃都利須流乎布禰搒可久流見由（一）家持。

註（一）あゆのかぜいたく吹らしなごのあまのつりする小舟こぎかくるみゆ

季題解説 新春に吹きそめる東風を初東風といふ。この風の數日吹きつゞ

くものを節東風といふ。

實作注意　初東風は陰曆正月の初めに吹く風をさす、現今の陽曆一月の初めの風とは異なれども、大方は廣く用ゐ居れば一月に吹く風をも詠みて差支なし。正月に五日も十日もつゞきて吹く風を節東風と呼ぶ。〔參照〕初風（ハツカゼ）　春―東風（コチ）

例句

初東風

初東風や枝もならさぬ松林　千和（玉かつら）
初東風や大内山の恵方より　貞嶺子（大三物）
初東風や厩に白き猿の幣　四明（四明句集）
初東風や神樂の獅子の鬣に　同（同）
初東風や富士に筋違ふ凧　鳴雪（鳴雪俳句集）
初東風や鈴鹿を下る馬の鼻　同（同）
初東風の麥の灰吹く日和哉　紫影（かきね草）
初東風や神代を今に淡路島　格堂（俳星）
初東風や樂も聞えて舟飾り　橡面坊（深山柴）
初東風に佃通ひの小舟かな　守水老（守水老遺稿）
初東風や凧に夜明けて日本晴　繞石（落椿）
初東風や帆に選ぶ字の大いなる　冬葉（冬葉第一句集）
樹主に鍾調べの初東風や　三汀（日本俳句鈔）
初東風や地鎭木の花さくや姫　不休（同）
すこし動く初東風見ゆれ鰕の髭　露葉（春夏秋冬）
初東風や一打ち祝ふ鯛の網　八重櫻（續春夏秋冬）
初東風や津守が家の朝灯　雪枝（昭和模範句集）
初東風に膨るゝ水のおもて哉　落葉（同）
初東風に並んでけむる鹽屋哉　綠泉（同）
初東風や門外見ゆる山十里　甘雨（同）
初東風や畫室開きの絹白し　蝶衣（明治一萬句）
初東風や家持が歌の海は畑　竹の門（竹の門句集）
初東風や神代ながらの宇伽の山　天眞（蘭古島）
草の戸の臼に初東風渡りけり　北江（現代俳句大觀）
初東風や船より揚ぐる凧　乙路（同）
初東風に顏うちよせて軍馬哉　九朝（同）
初東風や畑の霜に鷄の群　山堂（昭和一萬句）
初東風や既に澄み鳴る凧　蘆仙（同）
初東風や魚籠の浮木に鴎つく　神櫻（炬火）
初東風や雪寢の麥のそゝり葉　月嶺（月嶺句集）
蟹甲羅かけし戸毎よ初東風に　紅綠天（同）
初東風や藪根に殘る去年の雪　琅玕（懸葵）

初東風　初東風やそげこぼれたる餅の皮　五沼（懸葵）
初東風や門前ながら海見ゆる　東嵐（同）
初東風や宮井に垂るゝ飾藁　三幹竹（同）
初東風や嵯峨の筏の飾吹く　句佛（我は我）
飾東風　飾東風の磯のあげ舟松立てる　鷺瓢（昭和一萬句）
飾東風や秋刀魚寄りくる安房の海　冬葉（獺祭）

初風（はつかぜ）

季題解説　元日に吹く風を初風といふ。

實作注意　初風は秋の初風の場合もあれど、新年の季題としたる古今の例句されば、新年の意の季題としても存すべし。―［參照］初東風

例句
初風　かはらぬや年の初風よるの雨　紹巴（大發句集）
初風や去年の目さますいねの花　鬼貫（俳諧七車）
のんどりと吹く初風や松の香　竹遊（安永四年歳旦）
初風や紙鳶に日當る枯尾花　句佛（我は我）

儺追風（なおひかぜ）

季題解説　正月十三日、尾張の國府宮に直會祭（又、儺追祭）あり。この日吹く風を、追風の追と結びて、特に儺追風とも稱す。［參照］宗教―直會祭

例句
儺追風　尾張の國に春を探りて
うめの花ちり初にけり儺追風　丈草（丈草發句集）
から風や儺追の垢離の水の皺　梓月（俳諧雜誌）
ふんどしの月に白しや儺追風　鶯竹里（獺祭）
儺追風打たれて腫るゝ鬼の面　句佛（懸葵）

初霞（はつがすみ）　新霞（にひがすみ）

季題解説　新春山野にたなびく霞を初霞といひ、又新霞ともいふ。

實作注意　初霞は元旦の霞引くさまなれば初霞と詠むべし。霞み初むといへば、春季の霞の立ちそめたることになり、その意自ら異なれば注意すべし。但し「霞初月」といふ正月の異名は別なり。初霞月とはいはず。［參照］春・霞。

例句
初霞　朝紅や水うつくしき初霞　鬼貫（俳諧七車）
むらさきを諸事に補ひ初霞　支考（蓮二吟集）

ことさらに唐人屋敷初霞　蕪村（落日庵句集）
初霞きぞの嶽々たのもしき　白雄（白雄句集）
初霞長柄の橋もかゝるなり　蓼太（蓼太句集）
むしけらもさし覗け此初霞　曉臺（曉臺句集）
かくしても山また白し初霞　也有（蘿の落葉）
松しまもそこらにあるか初霞　成美（成美家集）
初霞たつや二見のわかるほど　千代女（千代尼發句集）
地に遊ぶ鳥は鳥なり初霞　同（同）
初霞立つや温泉の湧く谷七つ　鳴雪（鳴雪俳句集）
竹霞如意は紫に比叡白く　四明（四明句集）
弓懸けむ屛風の松の初霞　五空（五空句集）
初霞川は南に流れけり　月斗（同人俳句集）
生駒より金剛高し初霞　草千（ホトトギス）
初霞掘り残されし芋を掘る　藜杖（大正新俳句）
野鵆や啼かずにわたる初霞　白水郎（年鑑俳句集）
葛城の山の連り初霞　清風（昭和一萬句）
香に立つや大杯にはつ霞　鶯池（鶯池句集）
京如何遠山住の初霞　青々（最新二萬句）
磯山や松に鳥鳴く初霞　竹葉（同）
寶寺の釜拜見や初霞　稻青（同）
松に篩かゝる水城や初霞　零史（同）
鳶翼の煽ちに消えつ初霞　蝶衣（蝶衣句稿）
石槌の嶺に雪見ゆ初霞　富竹雨（年刊俳句集）
兒島富士全く明けぬ初霞　大呂（同）
そのかみの猪名野に立てり初霞　天哉（同）
内海の浪しづかなり初霞　櫻蒐（同）
雪野一帶ぬくき日射しや初霞　映水（二葵第一句集）
大山の裾より野より初霞　厚子（噫葵）

初凪（はつなぎ）

【季題解説】新春、風なくして、風ぎたるを初凪といふ。

【作法注意】初凪は多くは海上水邊の靜かに凪ぎたる樣をいへども、往々山野の凪ぎたる景色をも詠むことあり。

【例句】

初凪

魚陣うつる初凪の空の鷗かな　乙字（乙字句集）
初凪や新船幌ぎに蜜柑撒く　蝶衣（蝶衣句稿）
初凪や山影凝つて水碧り　五空（五空句集）
初凪や霜雫する板廂　鬼城（鬼城句集）

初風

初風や汢速に薄雪けぶりけり　月嶺（月嶺句集）
初風や島根まばゆき流れ汐　梨葉（梨葉句集）
初風や寒蘆日出でゝ潮平　楳面坊（深山柴）
初風や浦戸三里の潮の色　木牛（同人俳句集）
初風や鹿島香取の舟詣　常山（同　）
初風や眞珠がそだつ海の上　水青（同　）
初風や松もまばらに砂の道　天浪（かりがね）
初風や日の影長き澪　纜石（落椿）
　蒲郡にてよめる
初風の海や裾より富士の影　默興（濱紅調集）
初風や島に漲る松の青　炎天（年刊俳句集）
初風や海ある程を日の染むる　小波（古今俳諧一万句集）
初風や島の社へ燈を獻ず　素石（木虫句集）
浦島のかへらで久し初風す　はつ女（大正新俳句）
初風や江の島かけて松十里　華水（同　）
初風やたかしの松の葉茂りに　露石（懸葵第一句集）
初風や大樅に來し雉夫婦　蜺骨（同　）
初風や飾り舟見る橋に來て　北洲（同　）
初風や魚見の松に雲もなし　柿音（懸葵）
初風や海に向ひて立つ鳥居　放牛（同　）
初風や佐渡も間近く波の上　三幹竹（同　）
初風や海苔干す海士が門飾　句佛（我は我）
飛龍二年勅題もかしこ初風ぎて　同（同　）

淑氣（しゆくき）

古書校註

【栞草】―わくかせわ―早春たつ一氣也、千門淑氣新と詩にも作れり。○只新春の氣をいふべし。

季題解説

新春に瑞相満ち〳〵たる莊嚴なる氣を、たゞよふを淑氣といふ。

實作注意

淑氣は新春にみち〳〵たる瑞祥の氣をいふなれば、別に形象あるものにあらず。全く新春の氣分のなごやかなるをあらはす語なり。作句にあたりその**心持**を十分汲み取ることを忘るべからず。

例句

淑氣

起こりそむる炭の中より淑氣哉　龍雨（現代俳句大觀）
淑氣滿つ一村姓を同じくす　亞志路（同　）
淑氣滿つ厨子に灯の穂の靜きけり　菰堂窟（昭和一萬句）
うすじめりして濱砂の淑氣かな　丹沙郎（年刊俳句集）
白鶴のその羽叩きも淑氣かな　龍花（同　）

富士描く筆勢にたつ淑氣哉　土瓜子（[illegible]嵐）
伊勢海老の髯の先なる淑氣かな　冬葉（[illegible]祭）
淑氣きて拜す念珠や御繪像　綾華（大正新俳句）
襖繪の水仙よりの淑氣かな　鼠石（塔）
淑氣滿つ磬の餘韻を始經せり　句佛（我は我）
淑氣滿つ畫襖の幾間罷るなり　同（同）

御降（おさがり）　富正月（とみしやうぐわつ）

古書校註

【栞草】元日に降る雨雪をいふ。

【山之井】元日にふる雨を世俗にいひならはせり。

季題解説　元日に降る雨、又は雪を御降といふ。蓋し、アマサガルの轉語か。一說に、三ケ日間に降る雨雪をも云ふ。また富正月とは御降の異名にして、元日に雨又は雪降ればその年は豐穰なりとの義に因くといふ。

例句

御降

まんべんに御降うける小家哉　一茶（一茶句帖）
御降もまれなる藪におぼえけり　乙二（松の、え草稿）
御さがりやこゝぞと開く朱傘　梅室（梅室家集）
御降りの流れいでけり御所の溝　子規（子規全集）
御降りの雪にならぬも面白き　同（同）
御降や主殿司の朝淨め　紫影（かきね草）
御降や靜に暮るゝ京の町　同（同）
御降や排織の圖を筆すさみ　四明（四明句集）
御降や衞士に馴れ來る翁丸　露月（露月句集）
御降になるらん旗の垂れ具合　漱石（漱石全集）
御降に遠山松の綠かな　五空（五空句集）
御降や遠くにも鷄村の家　繞石（北の國より）
御降の下燻べ竈に沸く音あり　櫻磈子（[illegible]門の草）
御降や彼は誰れ時の酒の醉　守水老（守水老遺稿）
御降や住吉踊を傘の下　橡面坊（蕉山集）
御降や桐油かけたる飾り馬　伯州（續春夏秋冬）
御降や廐の飾濡るゝほど　十二星（[illegible]氷集）
御降や國栖人濡れて參りける　香墨（新春夏秋冬）
御降や眞白になりし四方の山　五城（同）
御降や蓬萊の松ひちりこに　鳴雪（同）
御降に五座の看板灯しけり　薯森（最新二萬句）
お降や初瀨の茶店の古火鉢　樂堂（同）
お降に太綱をきる神事哉　香村（同）

御降

御降りの岩つたひ消えし鵆鳴かず　蝶衣（蝶衣句稿）
お降や音のざらめく炙りもの　鳥不關（青嵐）
御降に濡れたる牛の額かな　北涯（俳人北涯）
御降や寛々として獨り酌む　鎮西郎（同人俳句集）
御降や青葉の交じる敷松葉　吐天（枯野）
御降は十日の雨のはじめ哉　千畝（新俳句）
御降や羽たゝく鶴と鳴く鶴と　竹の門（竹の門句集）
御降の幕十分にしぼりけり　士栖（閑古鳥）
御降や野の尾つゝむ淺黄布　青嵐（最新二萬句）
街道は御降に居れり御古石　鶯池（鶯池句集）
お降りにほと／＼濡れて緣結び　播水（昭和一萬句）
野社へお降り霽れや夕まゐり　蛇笏（同）
お降りに履き擲いて戻りけり　九萬里（懸葵第一句集）
御降の中に諸天の神供かな　瑞光（同）
御降やすりつかれたる大硯　櫻山（懸葵）
御降や隣の鼓聞え來る　壽美平（同）
御降の軒の雫をうつゝかな　羊我（同）
御降に嵯峨を出て來し禮者哉　三幹竹（同）
異派の人と香焚きて語る御降れり　句佛（我は我）

富正月

燈ともして富正月に酌みにけり　冬葉（懸葵）

地　理

初富士（はつふじ）　初不二（はつふじ）　初不盡（はつふじ）

季題解說　元日に富士山を望み見るをいふ。東都歲時記に「初富士、東都見物の最初たるべし。されば江戶の中央日本橋あたりを以て佳境とするにや、又駿河臺、御茶の水、その他高き所より眺望す。深川萬年橋の邊をいにしへ富士見ケ關と呼びけるとぞ、富士を見るによし。」とあり。

實作注意　初富士は我が日の本を世界に誇る富嶽の秀容をたゝふる語なれば、東海の天に輝きわたる清淨なる山容を、心の內に明かに把握して作句すべし。富士山に初めて登るといふことには非ず。なほ「初筑波」等の古句もあれば、「初筑波」「初比叡」等も詠みやうによりては、新年たるべし。

參照　夏　山開（ヤマビラキ）

例句

初富士

初不二の雪を貢の日の出かな　千兵（玉かつら）

初富士や草庵を出て十歩なる　虛子（虛子句集）

初富士や双親草の庵にあり　同（同）

神棚に代へて初富士拜むなり　乙字（乙字句集）

本所から初富士寒さ侘びにけり　梨葉（梨葉句集）

天地に初富士ほのと白みけり　鶯池（鶯池句集）

初富士や浪の穗赤き伊豆相模　格堂（俳星）

初富士やさかさにかゝる梯子乘　冬葉（獺祭）

初富士や大師詣の舟の中　行野（ホトトギス）

初富士や子山孫山あを〳〵と　二秋（同）

初富士を徑にひろひて詣でけり　冬男（ホトトギス）

初富士

初富士や連峰をぬく雲の上　徂春（ゆく春第一句集）
初富士の雲につらなる裳かな　波那女（同）
初富士を神の姿を仰ぎけり　鶴子（壬申句鈔）
うらゝ晴れて初富士近し日本橋　孤軒（孤軒句集）
初不盡や十三州に澄みわたる　松宇（松宇家集）
初富士や雪したゝかに裾野まで　炎天（現代俳句大觀）
初富士の大きく晴れて雲もなし　寶石（同）
庵の窓雪の初富士輝きぬ　天門（昭和一萬句）
初富士を明の方ともおがみけり　柏葉（年刊俳句集）
初富士や朝日影浮く雲の波　闘水（木太刀俳句鈔）
初富士や箱嶺愛鷹晴れ渡り　竹嶺（愛詩集）

江の島にて

初富士に照り映ゆる日や波靜か　厚子（懸葵）

小園

初富士や三幹の竹の間より　蒼梧（同）

若菜野（わかなの）

若菜の野（わかなのの）

季題解說　正月七日、若菜を摘む野をいふ。〔[illegible]〕人事—若菜摘ツミ　植物
—若菜ワカナ

例句

若菜野

若菜野や赤裳引ずる雪の上　闌更（半化坊發句集）
若菜野や草鞋に下駄の摘かたれ　也有（蘿の落葉）
人あしに鷺も消るや若菜の野　千代女（千代尼發句集）
若菜野に昔男ぞなつかしき　松宇（松宇家集）
若菜野や池の漣美しき　素石（木虫句集）
若菜野や王城を出でゝ東に　秋菊（年刊俳句集）

初景色（はつげしき）

初氣色（はつげしき）

季題解說　元日の瑞氣滿ちたる四圍のめでたき景色を初景色といふ。

實作注意　「春景色」「冬景色」等の季題もあれば、これ等と比較して元日のめでたさを失はぬやう作句すべし。

例句

初氣色

飛雀とまり鶯や初氣色　光雪（大三物）
元信もいかに畫かん初げしき　至（安永四年歲旦）

初景色

神路山下りてあけぬ初景色　鶯竹里（懸葵）
關越して都の空や初景色　三幹竹（同）

人事

元日節會(ぐわんじつせちゑ)

諸司奏(しよしのそう)　御暦奏(ごれきのそう)　七曜御暦(しちえうおんれき)　氷様奏(ひのためしのそう)　氷様(ひのためし)　腹赤奏(はらかのそう)　腹赤贄(はらかのにへ)　國栖奏(くずのそう)　國栖笛(くずのふえ)　國栖歌(くずうた)　國栖人(くずびと)　國栖の翁(くずのおきな)　國栖魚(くずうを)　平座見參(ひらざのげんざん)

昔言校註

【山之井】七曜御暦とは日月火水木金土の七曜をしるしたるよりつねの暦也。氷の様とは去年氷室にをさめたる氷の厚さ薄さをこまかに奏してそのためしとて石瓦のわれをたてたまつると也。腹赤の贄は鱒と云魚をはらかとて筑紫よりたてまつりしを、昔は節會(一)などに供しけるにや、これらの事諸司奏とて元日節會のつゐでに有と也。又國栖奏とて歌をうたひ笛を吹事も此節會に侍り、應神天皇吉野宮に行幸の時、國栖人(二)參りて一夜酒(三)をたてまつり歌うたひし其後も常に來朝しける其まねひとかや。公事根源。

【栞草】○元日節會　滑稽雑談　この節會は、天子紫宸殿に渡御なりて、群臣百官に酒を給ひて、宴會あるの儀也。宴會と書てトヨノアカリとよめり、大かたの節會の名にて侍るにや、十一月中の辰日の豐明(トヨノアカリノセチヱ)節會には限るべからず。云々。其式に次第等に詳也。むつきたつけふのまとゐやもゝしきの豐の明のはじめなるらん　顯昭。○諸司奏是は元日の節會に、中務省(四)より七曜の御暦を奉り、宮内省(五)より氷様・腹赤の御贄を奉るを云、其儀式江次第等の諸書にみえたり。○七曜御暦　是れ元日の節會に、中務省、陰陽寮を率ゐて奉る也。公事根源　七曜の御暦とは日月火水木金土の七曜をしるしたるよのつねの暦なり。云々。○氷様　延喜式宮内省式抄氷様の奏、主水司(六)之を奏す。此司は宮内省に屬す。氷様とは氷室の氷の厚薄寸法、瓦石を以て其様として之を奏す。公事根源　氷の多くゐるは聖代の驗し、氷のゐぬは凶年にて侍れば、氷の御祈とて、大法祕法を行はれしにや。これ元日の節會にあること也。○國栖奏　日本紀　應神天皇十九年冬十月朔、吉野の宮に幸(イデマセ)る時、國樔人(クスビト)朝に參す。之に因て醴酒(コザケ)(七)を以て天皇に獻じて之を歌ふ。云々。延喜式　凡諸節會に吉野の國栖、御贄を獻じ、歌曲を奏す、節毎に十七人を以て定とす。國栖十二人笛工五人但笛工二人山城綴喜郡ニアリ　大國栖は人となり甚淳朴也。毎に山果(八)をとり食ふ、赤蝦蟆(九)を煮て上味とす、これを毛瀰(モミ)と名づく、其土京より東南の山を隔てゝ吉野の川上に居る。峯峻しく谷深く道路狹(サ)く嶮き故に、京に遠からずといへども、もとより

來ること希也。しかれども此儀よりしば〳〵參りて土毛を獻ず、其土毛は栗・菌・年魚の類也。云々。近世吉野より參ること絕たり。公事根源　今の國栖の奏とて歌をうたひ笛を吹ならす、吉野より年の始に參りたると云心なり。云々。○國栖笛江次第　國栖の歌笛は承明門の外に於て之を奏す。云々。雜談抄　國栖の歌笛は諸書を考るに元日にかぎらず、七日の節會また踏歌の節會、五節などにも見えたり。作者心得べし。但始を以て正とすれば早春に許用せり。云々。○腹赤奏元日公事根源云、腹赤の贄と（○）とて魚を筑紫より奉る也。昔はやがて節會などに供しけるにや、腹赤の食樣とて喰さしたるを皆取渡して喰たり。十二代景行天皇筑紫の長濱にて海人是を釣て奉る。其後四十五代聖武天皇の御時、天平十五年正月十四日太宰府より是を奉る。是よりして年每の節會には供すべきよし定めおかれたるなり。腹赤とは鱒の魚のことなり。

【御傘】腹赤贄、元日にある事也。肥後國宇土郡長濱よりたてまつる鱒を腹赤といふ也、景行の御時より事をこり、節會になる事は聖武よりと聞ゆ。

【年浪草】○むつきたつけふの圓居やもゝしきの豐の明のはじめなるらん　顯昭　此人は顯輔卿の猶子其頃の才者博覽也、宴會を豐の明とよめる證歌なるべし。豐の明と云詞五節に限るまじき由雜談抄にいへり。○諸司奏とは江次第に曰く、中務省は御曆を、宮內省は氷の樣の奏、腹赤の奏若し期を違へ不參なれば之を奏す、若し卯日に當れば卯杖の奏等也。仰を奉じて外記に仰す。往年王卿外辨に就て後御下を被れば外記外辨の外記に傳仰し、外辨上卿に申す。中古以來此儀無し、○七曜御曆とは日本紀曰、推古天皇十二年甲子正月戊午朔、始めて曆を用ふ、云々。去戌年の百濟勸操曆等書を用ひ來る。延喜式中務省式に曰、其後官人陰陽寮を率て建春門より入り、七曜御曆を進む、云々。公事根源に曰、七曜の御曆とは日月火水木金土の七曜をしるしたるよのつねの曆也。云々。○氷樣とは日本紀に曰く、仁德天皇六十二年、是歲額田大中彥皇子闘雞野に獵したまふ、時に皇子山上より野中を瞻そなはすに物有り其の形廬の如し、乃ち使者を遣はして視せしむ。還り來て之を曰ふ窟なりと。因て闘雞の稻置大山主を喚び之に問うて曰く、其の野中に有るは何の窟ぞ、之を啓して曰く、氷室なりと。皇子曰く、其藏むるさま如何、亦奚に用ふるぞ。曰く、土丈餘を掘り、草を以て其上を蓋ひ、敦くに茅荻を敷いて氷を取て以て其の上に置く、既に夏月を經て解けず。其をつかふに熱月に當り水酒に漬けて以て用るなりと。皇子則ち其氷を將ち來り御門に獻る。仁德天皇之を歡び是より以後季冬に當る每に、氷を藏む。春分の始に至り氷を散ず。云々。○延喜式・宮內省式に曰、凡そ氷を藏するの處、收氷の多少及び氷の厚薄を、每處具錄す、元日群臣來喚の前省の輔已上本司に將て入奏し、並に氷樣を進む。○國栖奏とは日本紀に曰、應神天皇十九年冬十月朔、吉野宮に幸するの時、國樔人來朝す、之に因り醴酒

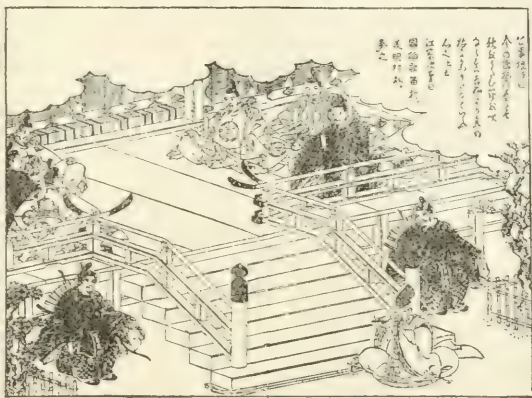
を以て天皇に獻ず、而て之を歌つて曰。云々。歌之既に訖て則ち口を打ち以て仰いで咲ふ。今國樔土毛を獻するの日に、歌訖て即ち口を擊ちて仰ぎ咲ふは蓋し上古の遺れる則也。○腹赤とは肥後國風土記に云、玉名郡長渚の濱郡西に在り昔、大足彥天皇球磨噌唹誅し、還駕の時御船を濱に泊す。云々。又御船の左右游魚多し、之棹人吉備國朝勝見て之を釣るに多く獲る所あり、即ち天皇に獻ず、勅して曰、獻ずる所の魚此何魚となす。朝勝見て奏して申さく、未だ其の名を解せず、正に鱒の魚に似たるのみ、御覽を歷て曰く、俗多物を見る、即ち云傳陪佐衞、今獻ずる所の魚甚だ此れ多く有り、衞陪魚と謂ふべく、其れ緣也、云々。篤信云、鱒又倭名腹赤。聖武の御時太宰府より是を奉る、今も筑州千年川に鱒多し、千年川太宰府に近し云々。年中行事歌合　初春の千世の例の長濱につれる腹赤も我君の爲四辻二位中將。

【新式】氷樣とはこぞのこほりをさめて、所々のためしをけふのせちゑにそうもんするなり。あつさうすさにいかほどと、いしかはらを以てそうするなり。仁德帝の御とき、ぬかたの大なかひこ始てそうし給ふとなり。○腹赤　つくしよりはらかのうをとて、ますのうをゝたてまつるなり。むかしはせちゑの御ぜんにもやがてくらしけりとなり。はらかのくひやうとて、くひさしたるを取わたしてくひけるとなり。景行帝の御時、肥後のくにうとのこほり長はまより、はじめて奉りしとなり。元日に定められたれど、遲參すれば七日にも奉とぞ。○國栖　よしのよりくす人といふもの參りて笛をふきなどしたる事有よし。

【いつまで暦】氷の樣　氷の厚薄をもつて、其年の吉凶をさだむるなり。○腹赤贄、鰚の奏　天智天皇御位已前西國御修行あり、筑後の國江さき小佐島と云ふ所に供御まいらする者なし、海人網曳する魚を召れて御饗を休めさせ給ひ、其魚の名をはらかといふ、帝位の後も鰚の奏とて元日になる事なり。○國栖笛・國栖奏　吉野の國栖とは舞人なり。國栖は姓なり。淸見天皇吉野の奥に籠り給ふ。國栖の翁栗の御料に鯎と云魚を具して備ふ、帝位の後も翁參りて桐竹に鳳凰の裝束を給ふて舞とかや。殿上より國栖と召るゝ時、聲にて御答申さず、笛を吹て參る也。此翁來らねば五節の始ることもなしといふ。

註（一）節會、せちゑ　朝廷に於ける節、其他定まれる公事ある時の集會の稱にして酒を群臣に賜ふ。白馬の節會と豐明の節會とを大節とし（六位以上に賜饗あり）元日の節會と踏歌の節會とを小節とす（五位以上に賜饗あり）其他立后、立坊、任大臣、相撲の節會なともあり。（二）國栖は大和國吉野郡の村名、國主、國巣、國樔と書しクズと訓む　土蜘蛛の類にして土着の稱、クニヌシ、クヌシの約なり。姓氏錄大和神別の條に「國栖は石穗別神より出づる也、云々」（御實に云、吉野の國栖、人倫也）（三）一夜酒、一夜つくりの酒、甘酒にいふ。（四）至尊に侍して其儀式を掌り、諫議を上り、詔勅文案を審署し、上奏を受けて覆奏し、宣旨、勞問、上表を受納し、國史の編輯を監し、女王内外命婦宮人等の名帳を掌り、叙位並に五位以上の位記、諸國の戸籍租調帳、僧尼の名籍等を掌る。屬司に中宮職、左右大舍人、圖書、内藏、縫殿、陰陽等の寮、畫工　内匠、内記等の司あり。（五）宮内省　古へ八省の一、宮中

大小の事務及調度等の事を掌る、今の宮内省に略ゝ同じ。（六）主水司（もんどのつかさ）古く水取の司、古へ宮内省被官の司にして、御井水、饗水、饘粥及び氷室の事を掌る。（七）醴酒（こさけ）醴酒の意、甘酒の類、米四升、麹一升、酒三升を和して醸し一夜にして成るといふ。（八）山果　山のくだもの。（九）蝦蟆　がま　ひきがへる、汎く蛙の類の大なるものゝ稱。（一〇）贄に就て御傘の説次の如し「月類に二句去也。贄と申は内裏又神社などへ生ながらたてまつるを申といふ義もあり、告朔の羊のごとし、腹赤の贄と申は春也、景行の御時より始れる節會也。其他春日の若宮へは、狐狸を奉り、諏訪の明神へ鹿をそなふるは皆神慮に叶ふる也、其句〳〵によりて季のせんさく有べし。

季題解説　正月元日。天皇殿上に出御ありて、群臣に宴を賜ふ儀にして、即ち小儀なり。元正天皇の靈龜二年より行はる。蓋し、是よりさき文武天皇の大寶令に、一年の節日を定められ、元日を以てその首におかれしが、元正天皇は此の制によりて行ひ給ひしなるべし。其の殿、元正天皇より孝謙天皇までは或は朝堂に於てし、或は中堂に於てし、或は藥園宮、中務省南院等を用ゐしこともありて一定せざりしが、嵯峨天皇に至りて、豐樂殿を用ゐ、淳和天皇は紫宸殿を用ゐられしより、其の後、多くはこの兩殿に於てすることゝなれり。節會を行ふ時は、先づ内辨以下の職員を定め、内辨は上位の大臣これに任じ、他は散狀にて之を命ず。節會式には、先づ諸司奏とて、中務省よりは七曜曆を奏し、宮内省よりは氷樣及び腹赤贄を奏する儀あり。外には外任奏をも加ふ。

次いで、群臣殿上の饗座に著き、酒饌を賜ふ。此の間、吉野の國栖は歌笛を奏し、大歌別當は歌人を率ゐて立歌を奏し、治部省は雅樂寮の工人をして立歌を奏せしむ。宴將に終らんとするに臨み、宣命の大夫、版位に就きて宣命を讀めば、群臣殿を下りて稱唯拜舞し、順次祿を賜ひて退出す。若し、物忌・忌月等に當り、或は即位以前なれは、天皇出御し給はず。又、忌月・災異・兵亂の時は、音樂を停止す。其の他、日蝕の時、又は常に兵皇元服ある時は、二日若しくは三日に延引し、諒闇或は兵亂の時は、平座見參とて略儀を用ゐるか、或は全く節會を停止するを例とせらる。殊に、後世兵亂相繼ぎ、朝儀荒廢するに及びては、用途の不足によりて毎に行は

れず。應仁の亂の後の如きは、二十餘年間中絶し、長享・延徳の頃に及びて再興ありしかども、其の後復た毎年之を行ふこと能はず、織田氏興りて皇室を尊び、次いで豐臣氏・徳川氏等一統の業を成すに及び、天正の末年より漸く昔日の儀に復することを得たりといふ。

節會の日、群臣の裝束は、文官は其の位次官職に應じて有文帶、又は巡方帶に魚袋をつけ、飾劍、又は蝶鈿劍を用ゐ、武官は卷纓に闕腋の袍を著くるを例とす。

實作注意 諸司の奏は、御曆の奏・氷樣の奏・腹赤の奏・國栖の奏など、いろいろの奏を總稱したるものなれば、その心得ありて作句すべし。又、御曆の奏は、七曜御曆、國栖の奏は、國栖笛・國栖歌・國栖人・國栖の翁などの語を以ても、その意を表現なし得るものなれども、必ず元日節會の意を失はぬやう作句すべきものなり。因みに、國栖笛に關して、「滑稽雜談」には「諸書を考ふるに、元日に限らず。七日の節會、また踏歌の節會、五節などにも見えたり。作者心得べし。但し、始めを以て正とすれば早春に許用せり云々」とあるは味ふべき言なり。こゝに、「始めを以て正とす」とは、一年中に二回以上用ゐらるゝ季題は、その始めの季を以て定むといふことにて、例へば「藪入」は正月十六日、及び七月十六日の兩度行はるゝ行事なれども、始め、即ち正月を以て季題とし、七月の方は「後の藪入」或は「秋の藪入」と言はざれば通用せざるが如きを云ふなり。

例句

元日節會

元日の節會や國司はおんぬるか　四明（懸葵）

諸司奏

新院のきこしめしけり諸司の奏　得川（同）

氷樣奏

味噌煮せし鮒のかしらや氷樣　露吸（東日記）

蟻の皇居あらば砂糖奏せん氷樣　言計（同）

太占や直き道より氷樣　草仙（大三物）

腹赤奏

覇府の世に腹赤の奏も式微哉　十框（十框句集）

筑紫ぶり腹赤の奏と聽くからに　青々（最新二葉句）

腹赤の奏筑紫に事もなかりけり　雪腸（同）

使者はるばる腹赤の奏に上りけり　樂堂（懸葵）

國栖奏

百鳥の器用を習へ國栖の奏　應三（寶晋齋引付）

とり出でゝ古き笛なり國栖の奏　死酒（日本俳句）

袂から鶯出せよ國栖の奏　蝶衣（蝶衣句集）

國栖人等眉かゞやかに奏しけり　左木（年刊俳句集）

奈良顏の大宮人よ國栖の奏　青々（最新二葉句）

國栖の奏庭燎に顏のほてり哉　翠竹（同）

國栖の奏栴の古根にかしこまる　露石（懸葵）

とりかぶと國栖の奏よと知られけり　康人（同）

高みくら星の林の國栖の奏　夜濤（同）

国栖の曲　國栖の曲舞ふよ老の中間人　立吟（伊達衣）
國栖の翁　國栖々々といへども花の翁かな　梼堂（俳諧発句題叢）
國栖人や戻りは何ふ雪の蓑　爲文（■ 集）
山樵の御階に近し國栖使　鞭石（俳句大觀）
國栖笛　國栖笛に囀ゆるき心かな　去留（大三物）
鶯も知らぬ初音よ國栖の笛　宋阿（眞蹟短册）

参考 これは小儀である。天皇殿上に出御して群臣に宴を賜ふ儀で、元正天皇の靈龜二年より行はれたものである。蓋し文武天皇大寶令に一年の節日を定め元日をその首に置かれたのでこの制に依られたものであらう。其の殿は元正天皇より孝謙天皇までは朝堂あるひは中宮又は藥園宮中務の南院等を用ゐられ概して一定しなかつたが嵯峨天皇の代に至つて豐樂殿を用ゐ淳和天皇は紫宸殿を用ゐさせられた。其の後多く此の兩殿で行はるゝ事となつた。その儀は、内辨　宴に達るべき外官の連名を奏すこれを外任の奏といふ。次に中務省よりは七曜曆を奏上し宮内省よりは氷樣及び腹赤贄を奏する儀あり。次で群臣殿上の饗座につき酒饌を賜ひ、此の間吉野の國栖は歌笛を奏し、大歌所別當は歌人を率ゐて立歌を奏し、治部省は雅樂寮の工人をして立樂を奏せしむ。宴終らむとする時宣命の大夫版位に就きて宣命を讀めば群臣殿を降りて稱唯拜禮し順次祿を賜ひて退出する。その大歌は古くは琴歌譜に正月元日讀歌とあるもの「そらみつ大倭の國は神からかありがほしき、國からか住みがほしき、ありがほしき國はあきつ島大倭。」又片降「あらたしき年の初にかくしこそ千年をかねて樂しき竟へめ。」などであらう。

朝賀（てうが）

朝拜（てうはい）　小朝拜（こでうはい）　拜賀（はいが）　参賀（さんが）

古書校註

【山之井】朝賀、朝拜おなじ事也。元日に群臣天子を拜し申さるゝ事とかや。奏賀、奏瑞も此時有事と也。小朝拜は朝拜を略す故にいふよし年中行事歌合に侍り、朝拜は百官ことごとく拜すといへども、小朝拜はたゞ殿上ばかりなりと公事根源に有り。

【年浪草】賀正の儀和漢共に同じ。日本紀に曰く、神武天皇辛酉の年春正月庚辰朔、帝位に橿原宮に於てつかせらる、是歳を天皇始年と爲す、云々。此れ天皇東征し玉ひ天下平かなり。然る後即位万世王道の基を肇め玉ふより賀正の儀起れり。同紀二十五　大化二年孝德　正月甲子朔、賀正禮（一）畢りて、則ち改新之詔を宣す。

【栞草】［公事根源］朝賀これを朝拜とも申也。元日辰の時に（二）天皇太極殿（三）に行幸ありて行はせ給ふ也。群臣みな禮服を着してさながら御即位の儀式に同じ、奏賀・奏瑞とは去年の日出度嘉瑞どものあるを國々より申せ

ばそれを記して今日奏する也、小朝拜は只臣下の元日にてあれば、天子を拜し奉るべきよし申請て行はるゝ公事(四)にして、さして朝庭の爲にもはべらず、神事佛事にもあらず、されば是は私の禮也、君に私なしと云本文あり、よろしからざることゝて、六十代延喜の御宇に勅有て、延喜五年左大臣時平公に仰せてとゞめさせ給ひし也。抑朝拜は百官こと〳〵く拜すといへども、小朝拜は殿上(五)ばかり也。故に私あるに似たりとて、とゞめさせ給ひしにや。しかるに臣下ども元正の日君を拜し奉ることをしきりに申せしかば、同十九年に又もとの如く行はれはべりし也。

【杜氏通典】漢の高祖の十月、秦を定めて遂に歳首と爲す、七年長樂宮成て、群臣朝賀の儀を制す、武帝改て夏正寅に建すの朔を用ふ。

【大明一統賦】正旦百官朝賀し、天下大小衙門闕を拜し、民間私に相慶賀す。

【江次第】(小朝拜)殿上の王卿、射場殿の邊に於て靴を著く。頭の藏人をして候ふ由を奏せしむ。次に御裝束、母屋の御簾を垂れ、暫く晝の御座を撤し、二色の綾の毯代を敷き、殿上の御椅子を立て、次に宸儀出御。次に藏人歸り出て、御出の由を告ぐ。王卿明儀仙華門を經、庭中に列立す、次に拜舞　次に各退出。

【御傘】朝庭、我朝之覲行幸、朝拜、小朝拜、朝恩、これら朝時分にあらず。あさに付くもくるしからず。今朝明朝などには三句去也。かやうの朝の字は百敷大内大宮の類には面をきらふ也。

【新式】年中行事にいはく、てうはいといふことは、臣下として元日にて

あれば、天子を拝し奉るべき由申うけて行へる公事也。せいりやうでんの庭に四位五位六位迄つめて袖をつらねて舞踏するなり。朝賀と申も此事のよしなり。たゞしてうはい、こぞのめでたき賀瑞ともの有をしるして、けふ同じく是をそうす。そうか、そうずいとて、二人庭にすゝみ、のつとを申事もありと見へたり。なほくはしくは彼書にあり。

註（一）賀正禮　ミカドヲガミゴト。（二）辰の時　午前八時。（三）太極殿（ダイゴクデン）大内裏八省院、卽ち朝堂院の正殿の名。天皇臨御政事を見らるゝ所にして、また國儀大禮を行はるゝ所なり。或は最大殿、大殿とも稱す。（四）公事（くじ）おほやけ事、すべて朝廷にて行はせらるゝ政事諸儀式の稱　（五）殿上　禁中にて清涼殿の上、又紫宸殿の上をも云ふ。四位以上此に昇ることを許さる。

季題解説　新年朝賀の式は一月一日及二日宮中に於て行はせらる。新年朝賀往古はミカドオガミと訓ず。の起源に就いては舊事本記神武記に「辛酉元年と爲し正月庚辰朔橿原宮に都し肇めて皇位に卽く。（中略）宇摩志麻治命天瑞寶を奉獻す。（中略）時に皇子大夫、群官臣連伴造國造等を率ひ元正朝賀禮拜す。凡そ厥れ卽位・賀正・建都・踐祚等の事並に此の時に發す。」と記され、公事根源の如きも亦之を引用せり。又孝德天皇の大化二年正月朔日賀正の禮あり（日本書紀）後、文武天皇の大寶元年の元旦には「天皇大極殿に御し朝を受く、其の儀正門に烏形幢を樹て左に日像・青龍・朱雀幡、右に月像・玄武・白虎幡・蕃夷の使者左右に陳列し、文物の儀是に於て備はる」（續日本紀）。貞觀儀式、延喜式ともに此の例を追ひ、卽位の禮と共に之を大儀と爲し兩者殆ど同樣なる華美崇嚴のものに定められたるなり。是より曩朝賀の外に小朝拜と云ひて、朝賀の畢りし後、更に皇太子以下大臣公卿等の拜賀する儀式ありしが、その後朝拜のある年は小朝拜を行はず、朝拜なき時は小朝拜を行ふの慣例となりたり。醍醐天皇の延喜五年正月一日「昔の史書を覽るに王者に私無し此の事は是れ私禮云々」（西宮記）とて之を廢せられしも、臣下固く舊に復せんことを請ひ奉りて、同十九年再び復活す。小朝拜は固より朝拜より簡略にして、關白以下五位六位藏人等參內、天皇淸涼殿に出御、諸卿東庭に列立し拜舞し畢りて退出す（公宗年事）。その後一條天皇の御宇以後は專ら小朝拜のみとなり、これさへも應仁の亂後は一時中絶したりしが、後土御門天皇の延德二年に元日節會と共に再興せられ其後繼續したるものなり。現制新年朝賀の式は拜賀の儀と年賀の儀とに別たれ、先づ拜賀卽ち陛下を拜謁奉賀する式次第は儀制令附式に定めらる。現今宮中の御模樣は宮中席次一階以上は各人一々拜賀せしめられ、第二階以下の者に付ては、天皇皇后出御前、班を分ちて[illegible]列し出御の時一齊に拜賀せしめらる。又式を一日には四回、二日には二回に分ち行はせらる。尙第一回の臣下及外國人の拜賀の行はれる以前に雨土下は鳳凰ノ間に出御・式部長官・宮內大臣・侍從長・侍從武官長・侍從・侍從武官・式部次長・皇后宮大夫・女官長・女官侍立の下に各皇族王公族の拜賀を受けさせらる。

一月一日の第一回は午前十時より宮中席次第一階以上の者及其の夫人の拜賀にして正殿に於て行はれ式部官の臚唱に依り一々參進拜賀をなす。第二回拜賀の式は例年午前十一時正殿に於て諸員列立の下に行はれ、高等官一等以下勅任待遇以上の者並びに其の夫人、神佛各宗派管長、及准勅任雇外國人並びに夫人とせらるゝを例とす。第三回は宮内奏任官同待遇の拜賀式にて、西溜ノ間東西兩側に整列、通御に際し拜賀をなす。第四回は外國交際官卽ち大使・公使・同館員・同館附外國武官及其夫人の拜賀にして第一回の如く正殿に於て行はせらる。
二日の第一回は伯爵以下從四位以上の者並びに其の夫人及勳二等勳三等を有する外國人並びに其の夫人の拜賀にして次第は前日第二回の時と同樣なり。第二回は兩院議員、高等官三等以下高等官八等以上及該等の待遇を受くる者並びに高等官九等、功四級勳四等以下勳六等以上の有勳者、正五位以下從六位以上の有位者、奏任待遇の神職、門跡寺院の住職、准奏任雇外國人、勳四等勳五等勳六等外國人を召さるゝを例とし、千種ノ間以下所定の位置に臚列し通御に際して拜賀するを例とせらる。
次に參賀の式とは參内又は大宮御所に參殿して、別に拜謁、朝賀せず、唯御帳に署名して賀正する式をいふ。一月二日午後四時までに正七位以下從八位以上の有位者、功六級勳六等以下勳八等以上の有勳者、無等の奏任待遇參内し、順次參賀簿に署名して退下す、判任官同待遇者は各その所屬廳に參賀する定めなり。

例句

朝賀

元帥大將車馬次々に朝賀哉　月斗　（同人俳句集）
嚴に老元帥の朝賀哉　同　（同　）
颯爽と御直宮の朝賀哉　桑陽　（同　）
鳩杖を突く老臣の朝賀哉　同　（同　）
大晴れの朝賀の車溜りかな　瓜青　（現代俳句大觀）
朝賀溜大勳位より進みけり　同　（懸　葵）
百歲の大臣めでたき朝賀哉　茂竹　（鬧　古　鳥）

朝拜

朝拜や春は曙一の人　鳴雪　（鳴雪俳句集）
朝拜や花の公侯伯子男　同　（同　）
朝拜に裳捧持の童かな　星川　（鬧　古　鳥）
朝拜に我は年ふる舍人かな　睡蓮　（現代俳句大觀）
朝拜や天へ廣がる松の聲　茂竹　（なぎの花）
朝拜や御階につどふ肥馬輕車　松宇　（松宇家集）
朝拜や輔弼の臣下誰々ぞ　月斗　（同人俳句集）

小朝拜

百人一首繪像や鄙の小朝拜　寝覺　（東　日　記）

拜賀

梅の花拜賀の廊に薰りけり　觀亭　（鬧　古　鳥）
上﨟の退出を待つ拜賀哉　夜濤　（懸　葵）

拜賀　宮様へ拜賀を賜ふ御莅　句佛（我は我）
殿の殿下へ拜賀の歸路を柳晴る　同（同）

參賀　二重橋に暫し止りし參賀哉　衣沙櫻（ホトトギス）
打仰ぐ松も古りぬる參賀かな　水夢（現代俳句大觀）
參賀人に敷砂ひろし車寄せ　子瓢（昭和一萬句）
玄關や鞍𨏍然と參賀馬　陽光（同）
朝日淺き野山淋しき參賀かな　泥子（年刊俳句集）
大内山の雪晴れ初めて參賀哉　虎郎（高雲抄）
日を受けて參賀の兵の輝けり　陽山人（大正新俳句）
北溜墨の香こめて參賀かな　瓜青（懸葵）
青山の樹々青々と參賀哉　同（同）

【參考】ミカドヲガミと稱す。天皇大極殿で百官の賀を受け給ふのである。名稱は日本書紀孝德天皇の卷大化二年正月甲子朔の條に賀正禮畢とある。元日に行ふを恆例とするが事故ありて延すこともあり、延喜式十二内記の部に凡元日朝賀依有事故延用二三日者其宣命之辭猶朔日と見えてゐる。公事根源に「神武天皇元年正月一日、橿原の宮をたてはじめて位につかせ給ける時、宇摩志麻治命天瑞を奏せらるゝ由、日本紀に見えたり、是などをや始とも申すべき、又孝德天皇の御宇、大化二年正月一日、御門をがみの事侍よし、同じ書にのせたり、此ぞ誠の朝拜とは申べからん、然に六十六代一條院正曆より後はあり共不承、又記錄にも所見なきにや、古は大極殿にて有しかば也、今は小朝拜許にぞ成にける」とある。しかし宇摩志麻治の命が天瑞を奉つたといふことは、日本書紀に見えず、舊事本紀の神武天皇即位の條の記事に依つたものであらう。

奏賀（そうが）・奏瑞（そうずゐ）

【季題解說】奏賀は朝賀の時賀詞を奏すること。又朝賀の時、宣命を讀む侍從の稱。奏瑞は朝賀の時、去年の日出度き瑞ともあるを國々より報告する時、これを記して奏上すること。又これをなす官人の稱なり。

【例句】
奏瑞　むら竹や伏して奏する雪の瑞　紅葉（紅葉句集）
雪の瑞みゆき人形奏しけり　鶯池（鶯池句集）

院拜禮（ゐんのはいらい）

【古書校註】
【山之井】一日院參（一）の人々、院の御所にて拜禮有事とかや。拾芥抄
【栞草】元日〔大府記　延久五年正月一日辛巳院の拜禮、午刻（二）諸卿以下參り集る、次に晝の御座の庇の御簾を垂る、五ヶ間　次に御出直御裝束也　次に

關白前の太政大臣・右大臣丼大納言・中納言・參議以上庭中に一列す。次に殿上の四位以下別當判官代等一列す。拜舞了りての後、上﨟(三)より次第に退く。略記。

【中右記】 院拜禮候べくや否やの事の條に年首拜禮は臣君を拜する也、公儀に非ざれば謙仰すべからず候べくの由を申さる。是れ院拜禮、朝拜等は凡下(四)の年禮の意なり。云々。

【古今著聞集】 仁平元年正月一日、八條の太政大臣七十二にて立ち給ひけり。一度拜して二度拜し給ひけり。此事禮記に見えたりとかや。

【新式】 一日院參の人々、院の御所にて拜禮有る事也。

註 (一)院參(ゐんさん) 院の御所に參ること。(二)午刻 正午。(三)上﨟 﨟を積むことの長きもの、即ち身分の貴きものをいふ。(四)凡下(ぼんげ) 身分なきもの。平民

季題解説 正月元日、宮中にて朝拜ある時、仙洞御所(上皇の御殿)にても院參の人々、各拜賀を行ふ式を院拜禮といふ。

例句

院拜禮　比叡晴れて院の拜禮終りけり　通天　(獺祭)

晴御膳(はれのごぜん)

季題解説 一月一日より三日に至る間宮中にては毎朝八時、晴御膳の式を行はせらる。古は宮中の節會其他の盛饗に際して、威儀御膳、晴御膳、腋御膳、殘御膳等を供ふる式を行はせられ、四節八座抄の元日節會の條に「次供二晴御膳八盤一(群臣立、供行居云々)、次腋御膳四盤(群臣不居云々)」、恆例公事錄元日節會の條に「次晴御膳(內膳司自南階供之)四種(酢・酒・鹽・醬、各銀器)唐菓子(餛飩・餲餬・索餅・桂心、各銀器)」など即ちこれなり。今は新年のみに晴御膳として告示せられ、鳳凰ノ間に於て行はせらる、その色目は、平盛(付燒小鳥鰕)。高盛(鹽鰤・蒲鉾・時雨煮蛤・大飯)。追物(龜足付零餘子燒鯛・燒雉子花盛)。御吸物(卷鯉)。御汁(清し角鯛)。四種(酢・鹽・酒・醬油)。御酒。御湯などを例とすといふ。

例句

晴御膳　主膳監白袴清がしや晴御膳　瓜青　(懸葵)

雉子酒(きじしゆ)

季題解説 新年宮中に於ては屠蘇はなく、雉子酒を用ゐさせらる。即ち雉子の切身を煮たるに溫酒を灑ぎたるもの。その緣起を審にせざれども、古來白雉等を朝廷に獻じたることは屢々史籍に現はるゝところなれば、瑞祥のものとして用ゐらるゝものなるべし。

例句

雉子酒　御屛風繪雉子酒の杯に映りけり　瓜青　(懸葵)

雉子酒　吹上の霞まちかき雉子酒　同（營　葵）

菱葩餅（ひしはなびらもち）

季題解説　新年宮中及び各宮家に於て御祝ひ遊ばさるゝ餅を菱葩餅といふ。即ち薄く丸くのしたる白餅（葩）に、紅色菱形の薄い餅を重ね、味噌と牛蒡とを包みて食するもの。新年朝儀に奉仕の者など頂戴する時には、二枚襲ねの白紙を二つに疊みたるものに一つ〳〵挾みて下さるといふ。

例句

菱葩餅　菱葩餅の紅にほひけり　瓜青（懸葵）

菱葩餅を賜はる諸役かな　同（同）

御藥を供す（みくすりをくうず）

古書校註　屠蘇（とそ）　白散（びやくさん）　度嶂散（どしやうさん）　藥子（くすりこ）

【山之井】天皇屠蘇をきこしめすに、まづ藥子とて、小女をえらびてのましめて、さてたてまつるよし公事根源に有り。藥子はをさなき童女にて侍り、と年中行事の歌合にもあれば、此比俳諧などに此を御藥の事のやうにしたつるは誤也。一獻に屠蘇、二獻に白散、三獻に度嶂散といへり。

【栞草】元日より三ケ日平旦に之を供ず。天皇清涼殿（一）の東廂に出御ありて御齒固（かためか）の御膳を供し、次に一獻を供ず。御酒を煖め御藥を入る、これ屠蘇也。前に分て藥子に嘗しむ、さて帝に奉る也。次に二獻を供ず、則白散也。事終て三獻を供ず、此度は度嶂散也、みな御酒に入て奉る也。其儀式江次第一等にみえたり。藥子とは御生氣の歲なる童女の、いまだ嫁せざる者を求めてつとめしむる事也。紀事　古へ屠蘇の屠、死戶の戶を忌て一點を加へて戸に作る、是本朝之故實也。

【江次第】御藥を供ず元、二、三、弘仁年中之を始む元日平旦　天皇東廂に御す。御生氣方御若衣を着し、引劍を具す　陪膳の女房以下著座、藥子鬼間より入り、（二）御倚藥南座に候す、采女（三）二人、御藥女官頭一人女官六人右青瑣門內に候す、御厨子所（四）御臺二人を供す、得選は鬼間御障子に於て、女藏人に付す。（五）女藏人之れを執り、陪膳に來授す。內膳は右青瑣門より（六）、齒固具を供す。次に一獻を供ず。屠蘇散也、御酒を洗煖し、主殿寮火爐を設く、御藥を以て酒に入れ之を屠蘇と名づけ別器に盛る、宮內典藥頭侍醫等三人、一一膝突て進む、（七）之を掌るは位階に依り、皆別杯を用ふ。次に御酒盞を供し、次に御料酒を供す、此間內膳の官人大土杯三枚小土器三枚を以て、藥女官に與ふ、女官前分藥子に嘗らしむ未方小兒より起る　次に御酒盞に盛り、御几帳綻より藥頭に付す、藥頭陪膳に傳ふ、主上夜の御殿南戶より入り、塗籠東方の戶に當つて立ち給ふ、陪膳の女房御酒盞を取り、御酒を入る東廂御障子より通り、御前に參り之を傳す、次に後取を召す、次に女官御酒盞の餘分、

御銚子の餘分等を大土器に移入し、傳へて後取人に給ふ、飲み畢り次に二獻を供ず、神明白散也次に銀匙を供し、馬頭盤に居り、神明白散を金銅小器に入れ、中盤に居り、尙藥藥を勷して御酒盃に入る、次に供御畢りて後、女官匙を以て三度白散を大土器に入る、次に飲分て後取に給ふ、次に三獻を供ず、度嶂散、其儀二獻と同じ。云々。略記

【江次第】　御酒を三寸と調ずるは、酒を飲めば則ち邪氣皮膚を去る三寸、云々。

【釋名】　酒さくる也、風寒邪氣をさくる也。

【公事根源】　五十二代嵯峨天皇弘仁年にはじめらる、一人是をのみぬれば一家に病なし、一家に是を飲ぬれば一里に病なしといふて、めでたき功能侍れば年のはじめに奉るにや云々。

【紀事】　屠蘇酒廣韻、元日之を飲めば、瘟氣を除く可し、屠は鬼氣を屠絕し、蘇は人魂を蘇醒す、俗說に屠蘇草は庵の名、昔人有り、草庵中に居す、每歲除夜、閭里藥一劑を遣し、井中に之を浸さしむ、元日に至り水を取り、樽に置きて、合家之を飲む、瘟疫を病まず、孫思邈に屠蘇酒方有り、蓋し庵名を取り、以て酒の名とす、後人遂に屠蘇を以て酒名と爲せり。

【時鏡新書】　元日屠蘇酒を飲む、先づ小者より起る、或ひと董勛を問ふ者あり、答へて曰、俗小者を以て歲を得、故に之を賀す。

註　（一）淸涼殿　大内裏宮殿の一、天皇常の御在所にして四方拜、小朝拜、敍位、除目、官奏、御遊以下の諸公事を行ふ所なり。（二）おにのま　淸涼殿の中にある室の名、夜叉の畫あればいふ。（三）采女　古へ後宮にて御膳の事にあづかるもの、郡の少領以上の姉妹、女の形容端正なるものより采らる、うねべ。（四）みづしところ　禁中にて朝夕の供御の物をとゝのふる所。（五）女藏人（にょくらうど）　朝廷に奉仕する下﨟の女房を云ふ、其職務等内侍と同一なれども内侍及命婦よりは下位に在り。（六）靑瑣門（せいさもん）　左右兩門あり、左門は紫宸殿の東北廊に在りて宣仁門と相並ぶ、右門は紫宸殿の西北廊に在りて無名門と相並ぶ。（七）膝突（ひざつき）　三尺四方ほどの薦蓙の稱。

季題解說　古、元日より三日間、主上に屠蘇、白散、度嶂散を奉りしことを「御藥を供す」と云ふ。公事根源に「是れは元三の儀なり、御殿にて行はる。主上晝の御座に出御なりて、生氣の方の御衣を、よの常の御直衣の上に重ねめさる。陪膳の典侍、藥の頭も生氣の方の色を着す。此時まづ御厨子所の御齒固を供ず。命婦、藏人、役送して、典侍次第に御盤にすう。參りはてゝ、藥子とて、少女のいまだ嫁せざるを求めて、是れを用ゐる事あり。屠蘇は小兒より飲むといふ本文あれば、其爲に小女を選みて、まづ飲ましむるなるべし。此の藥子、鬼の間よりすゝみて、はしの几帳のもとに候ふ。女官典藥をめして御藥を催す。一獻にまづ屠蘇を酒に入れて、藥子に飲ましむ。次に銀器に入れて、藥のかみとりて陪膳に傳ふ。主上座をたゝせ給ひて夜の御殿の南の戶より入り給ひて、塗籠の東の方の戶に向ひて立たせ給へば、陪膳御盞を持てまゐらす。是れも、屠蘇は東の戶に向つて飲むよし、本文ある故にや。次に女官に返し給へば、是れを後取の人に飲ましむ。

昔は上戸をえらびて、後取に召しけるとかや。一日は四位、二日は五位、三日は六位の藏人なり。つごもりの日奉行の藏人、交名を切紙にしるして、殿上の角の柱に押すなり。さて三獻には、神明、白散を供す。昔はさかなを後取の人に賜ふことあり。大根を賜ふ。女藏人賜はりて、扇にすゑて是れを出だす。元日は人々精進の故なり。と江次第に見えたり。三獻に度嶂散を供ず。如此御藥の儀式は三ケ日あり。第三日には御たうやくを奉る。銀器に入れたり。無名指に付けて、御額並びに御耳のうらにつけらる。右の第四の指をかゞめてつくるなり。是れは藥師の印相に侍るとかや。此の御藥の儀式は、弘仁年中に始めらる。一人是れを飲みぬれば一家に病なし。一家にこれを飲みぬれば、一里に病なしといふ。めでたき功能侍れば、年の初に是れを奉るなり」とあり、嵯峨天皇の御宇に始まりたる儀式なり。屠蘇は桂心・防風・菝葜・蜀椒・桔梗・大黄・烏頭・赤小豆等を調合して、緋の絹の袋に入れ、酒にひたして飲むものなるが、其の名につきては種々の説あり。貝原好古の日本歳時記に、此の藥はよく邪氣を屠り絶ちて、人魂を蘇醒せしむる故に、屠蘇と名づくと、諸雑類書に見えたり。李時珍が説には、蘇は鬼の名、此の藥よく鬼炎を屠り割くといへりとかけり。白散は白朮・桂心・桔梗・細辛等を調合したるものを云ふ。度嶂散は白朮・肉桂・麻黄・山椒・細辛等を調合したるものを云ふ。藥子は御毒味の役をいふ。

實作注意　屠蘇は宮中に於ても平安朝の初め頃より儀式として行はれしが、これに倣ひ公家にても早くより行はれ、その飲用は年少より漸次老者に至る定めありしが如し。禮記に君の藥を飲むは百官先づ嘗む、親の藥を飲むは子先づ嘗むとありて、藥ばかりは若者より飲むが老者を遇するに篤き所以なれば、これに因みたるものなるべし。〔參照〕膏藥ガウ　屠蘇祝ハイ

例句

供御藥　東海をあさりし供御の藥かな　青坡（木虫句集）
白散　白散よ酒に交へて生く藥　青々（妻木）
藥子　藥子やしも中かみにふさうこく　正章（山の井）
藥子よ茶の子といへる名にめでてぞ　付云（伊達衣）
藥子やけふ吞そむるちゝの春　未得（俳諧遠故集）
藥子の頬に色出でぬ梅の花　素石（木虫句集）
藥子の口紅雛に似たるかな　同（同）
藥子や御溝の竹のさゝと鳴る　二鳥（同）

膏藥（たうやく）　御膏藥（おんたうやく）　御膏藥始（おんたうやくはじめ）

古書校註

【山之井】たうやく、千皆萬病膏、延喜式、元日の御藥は、三ケ日きこし

めして、さて第三日には御たうやくをたてまつれり、銀器に入て奉るを、無名指(一)につけて、御額並御耳のうらに付らるゝとぞ。公事根源 たうやくとは、かうやく也。膏藥は聞わろき故たうやくといひかへたり、延喜式には千瘡萬病膏といへり。世諺問答

【栞草】 三日 主上へ千瘡膏と云膏藥を進る也。「後醍醐抄」 御額並に耳の裏へ傳ふ。云々。江次第 には、主上之を取て右の無名指を以て左の掌にぬらしめ給ふと有り、註に右の第四の指を曲るは是大師の印相也と云」一名千瘡萬病膏と云、からやくの名を忌てたうやくと云ふ。

【年浪式】 天子屠蘇白散等の御くすりをめしつる以後是をたてまつれば、天子みづから無名指に付て御耳御ひたいなどにぬらせ給ふとかや。千瘡萬病膏といふ御くすりのかうやくなるを、かうやくといはず、たうやくと申は故あることのよし。

註(一) 無名指 くすりゆび。

季題解説 正月三日。江次第に、「第三日、三獻供畢、次に典藥膏藥を供ず。次に御匙を供し千瘡膏を金銅の小器に盛り、中盤に据ゑて之を供す、藥を女官に付す、女官頭に付す、頭陪膳に傳ふ、陪膳之を供す、主上之を取り右手の無名指を以て左掌に塗らしめ給ふ。」とあり。御膏藥と書きて、御タウヤクと訓ず、カウ藥の名を忌みてタウ藥と云ふ、一名千瘡膏、また千瘡萬病膏といふ。 參照 供御藥

例句

御膏藥

御膏藥女藏人はべりけり　　鶯竹里（鶯祭）

高き香の鬼の間こめつ御膏藥　　龍峯（同　）

俎切始（まなきりはじめ）

塵那切始（まなきりはじめ）　俎始（まなはじめ）　庖丁始（はうちやうはじめ）

季題解説 正月二日の夜、京都禁裡御厨所、高橋・大隅の兩家にて行ふ俎板始の式を俎切始といふ。その他に塵那切始、俎始、庖丁始などといふ。

例句

俎初

俎初丁々とうち止めし　　雨圃子（芋　畝）

庖丁の痕一つ俎はじめかな　　盧　子（ホトトギス）

庖丁始

灯して庖丁始をしたりけり　　竹　人（現代俳句大觀）

淵醉（えんすい）

季題解説 正月二日、又は三日に、藏人頭以下の殿上人、殿上に於て盃酌の興あり、之を淵醉といふ。歌詠亂舞の事あり、天皇出御して御覽あらせらるるを例とす。院宮の淵醉亦同じ。此の事、後土御門天皇應仁の亂後、久しく絶え、同天皇の延德三年及び後柏原天皇の大永二年等に再興ありしか

ども、其の後、遂に行はれずといふ。

視告朔（こうさく）

【季題解說】正月三日、百官の行事（勤めぶり）上日（出勤の日數）をしるして、月每に天子の御覽せらるゝなり。告朔の文をみそなはすと申す心なり。天子大極殿に出御ありて聞し給ふ。卽ち先月の勤怠上番日數をこの月の始に御覽に供ふるなり。視告朔と書きて、たゞ「こうさく」と二文字とよむ口傳にて、こくさくとは讀まざるなり。

【例句】

視告朔

告朔の禮や未の年の春　良久（月令博物筌）

政始（まつりごとはじめ）　政事始（まつりごとはじめ）　政治始（せいぢはじめ）

【季題解說】一月四日宮中に於て政始の式を行はせらる。時刻、先づ國務大臣・宮內大臣・樞密院議長、通常服又は通常禮裝にて東三ノ間に參集す。次に聖上には式部長官の前行、內大臣・侍從長・侍從・侍從武官長・侍從武官の供後にて東一ノ間に出御あらせられ、玉座に著御、內大臣、侍從長、式部長官・侍從武官長廂內に候し、其の他の供奉員廂外に候す。次に前記參集員東一ノ間に參進し本位に就き、內閣書記官長・內閣書記官・宮內次官・宮內書記官廂內に候す。席定まるや、內閣總理大臣御前に進み、先づ神宮の御事を奏し續いて各廳の事を奏し、畢つて復席す。更に宮內大臣御前に參進皇室の御事を奏し、畢つて復座す。玆に聖上出御の時と同じ供奉にて入御遊ばされ、尋いで諸員も退下して式を畢るなり。

此の儀式は古の神宮奏事始及政始に起因す。神宮奏事始とは歲首に當り伊勢神宮の事を奏聞する始なり。政始は年頭御會の儀の畢りし後、吉日を擇びて行はれ、これは上卿（公卿の上首）始めて政事を議する朝儀を云ふ。現今政始の儀を一月四日と定められたるは、明治二年正月四日、議定・參與・辨事・知官事・副知官事・判事等を召され、政始式を行ひ勅旨を下し給ひ、越えて十一日神宮奏事始を行はれたりしが、翌三年の正月式より正月四日を以て兩儀を行はせられ、爾來變更なく儀制令の定むるところに依り現在に及びたるものなり。〔參照〕外記政始（げきのまつりごとはじめ）

【例句】

政始

八省の人馬も政事始かな　白山（續春一・秋冬）

いでましてみそなはす政事始かな　道堂（俳句大鑑）

集ひ來る政事初の暖爐かな　杏子（昭和模範句集）

抱へ來し政事始の鞄かな　笛聲（年鑑俳句集）

溜の間盆栽匂ふ政始かな　瓜青（懸葵）

御用始（ごようはじめ）

季題解説　一月四日。内閣をはじめ各官廳にては、午前十時に御用始を行ひ、且つ新年の祝詞を交換するをいふ。

例句　御用始

向合うて墨すりかはせ用始　鬼城（鬼城句集）
用始禿筆を嚙む小吏かな　同（同　）
雪を掃く御用始の廊下かな　水子（ホトトギス）
御用始率土の濱の村役場　青陽（現代俳句大觀）
掛時計合せて御用はじめかな　夢外（春嵐）

敍位（じよゐ）

古書校註

【山之井】五日或六日諸臣の年勞（一）を奏し位を次第に敍する事也。

【栞草】五日［公事根源］天智天皇十四年正月に諸王諸臣に爵位を給ふとみえたり。此敍位もとは六日にて侍りしを、天德五年より、五日に始て此儀あり、是は諸臣の年勞を奏して、位を次第に敍することと也。

【日本紀】推古天皇十一年冬十二月戊辰朔壬申五日也皇太子豐聰（二）天皇に請ひ始めて冠位を行ふ。大德今四位・小德、大仁五位・小仁、大禮六位・小禮、大信七位・小信、大義八位・小義、大智初位・小智、并十二階。云々。同十二年春正月戊戌朔、初めて冠位を諸臣に賜ふ。各成敗（三）に差有り、

【職原抄】敍位は其位を敍し昇進せしむるを言ふ。

【新式】京官除目とて京中官途のものの勤勞によりて階級する也。

註（一）年勞　一年間の功勞をいふ　（二）豐聰　聖德太子を云ふ　（三）成敗　處分するを云ふ。

季題解説　正月五日。諸臣の多年の功勞を奏して位を次第に敍する事を敍位といふ。もとは六日に行はれしを天德五年より五日に始めて此儀ありたり。　參照　女敍位（ニヨヂヨヰ）

參考者　文武天皇の朝より以後、正月に行ひたる事多きも其の日を定むる事は無かつた。桓武天皇の朝始めて一月七日と定め給ふ。始め六日なりしを村上天皇の應和三年始めて五日に行ひ給ふ。これを敍位儀とも又單に敍位とも言ふ。大和物語上に「四位にもなるべき年に當りたればむつきの加階たまはりのことといとゆかしうおぼえけれど」。

木造始（こづくりはじめ）　御釿始（おてうなはじめ）

季題解説　正月五日、禁中内侍所の庭上にて御大工・木子並びに惣官・鳥觜

子素袍にて御手斧始の式を行ふことを云ふ。

例句

木造始　木造始め烏帽子に木屑とびにけり　冬葉（懸葵）

新年宴會（しんねんえんくわい）　新年御宴會（しんねんごえんくわい）

季題解説　一月五日宮中に於て行はせらる。この儀の起源は古の元日の節會にあり、明治維新後に於ては、同二年節會を行はせられ、明治五年よりは新年宴會の名稱を以て行はせらる、爾後引續き一月五日を以て催させらるゝを例とす。當日午前十一時四十分、大勳位以下前官禮遇以上參內、牡丹ノ間に樞密院副議長以下從一位以上、勳一等參內西一ノ間、西二ノ間及右廂に、高等官一等以下勅任待遇以上及伯子男爵參內西溜ノ間に參集し、十一時五十分、各國大公使參內牡丹ノ間に參集、皇族男子並びに王公族男子にも亦同時刻御參內、葡萄一ノ間、同二ノ間に參集せらる。諸員の參集するや從一位以下の者、先づ式部官の前導にて各饗宴場に參進定位に就く。次いで聖上には御正裝遊はされ左右各一人の式部官の御先導、式部長官宮內大臣の前行、侍從長・侍從武官長・皇族・王公族・侍從・侍從武官の候後供奉にて、先づ牡丹ノ間に出御、便殿たる牡丹ノ間を通御の際同間に參集伺候せる諸員に拜謁あり、畢つて豐明殿に出御、是等の諸員も亦扈從同殿に至る。

次に聖上御座に着御、供奉並に扈從の諸員亦本位に就く、諸員最敬禮、次に勅語あり、次に內閣總理大臣、外國交際官首席者相尋いで御前に參進、恭しく奉對文を奏す。之を畢るや主膳監御膳並に御酒を供す。此の時豐明殿南庭に作られたる舞臺にて樂官の舞樂始まる。曲目は萬歲樂、延喜樂等瑞佳の義あるものを例とす。同時に諸員にも膳並に酒を賜ふ。宴終れば入御。此の時樂官長慶子を奏す。供奉は出御の時と同じく、次いで諸員は御料理を拜載して退下し、茲に儀全く畢るなり。〔參照〕新年會（新年）

例句

新年宴會　新年宴會雨儀樂奏す深雪哉　瓜青（懸葵）

白馬節會（あをうまのせちゑ）

古書校註

【山之井】七日あをうまのせち　御弓の奏　白馬をあをうまといふ事は青きは春の色なればとぞ。正月七日あを馬を見れば、年中の邪氣を去といふ本文有、其故に七疋ひきて天子の御覽ある事とかや。けふの節會に兵部省（二）よりたてまつる御弓の奏といふ事有、天竺の貝多羅葉（二）は其長さ七尺五寸也、弓も七尺五寸なる故に是をたらしとゝは申にや。公事根源

【栞草】七日　公事根源　正月七日に青馬をみれば、年中の邪氣をのぞくと

云ふ本文のはべり、仁明の御門、承和元年正月豐樂殿におはしまして青馬をみ給ふと云々。【世諺問答】 禮記に春を東郊にむかへて青馬七疋を用ふと見えたり 又青きは春の色、きはめて白きものは青さめてみゆるものなり、されば青馬ともかよびて申にや、これ又くはしき次第は江次第其外の書にみゆ。

【年浪草】 續日本紀曰、光仁天皇寶龜六年卯春正月七日、天皇揚梅院の安殿に御し、宴を五位以上に設けたまふ。既にして內厩寮青御馬を進め、兵部省五位以上の裝馬を進む 文德實錄曰、仁壽二年正月甲戌、豐樂院に幸し、以て青馬を覽たまふ、陽氣を助くる也、宴を群臣に賜ふ。○江次第に曰く、左右大將殿を下り巽角の壇上に立つ、馬允奏文を奏し、史生硯を持し、大將先づ之を取る、之を奏覽あり、允硯を取て候す、大將署を加へて後文を取る。侍從文を杖に挿み、參上して內侍に付す、退て本座に著す。件の御馬は、本必ず二十一匹也 每年左右寮より各十疋づゝ之を進む、其殘一馬は之を餘馬と稱す、隔年に兩寮より互に之を進む。次に白馬七匹、次に左右允、次に白馬七疋、次に左右屬、次に白馬七匹、次に左右助、次に右白馬陣、渡り畢つて、次に白馬を殿上の前、無名門明義仙華門を經御前に度す、瀧口より御物忌と雖も猶度す。次に三宮東宮齋院等に分參し、次に御膳を供す。三獻、內敎坊別當、舞妓奏を奏す、內侍に付して之を奏す。別當座に復し、樂人等射場殿に音樂を發く、舞左曲 云々。

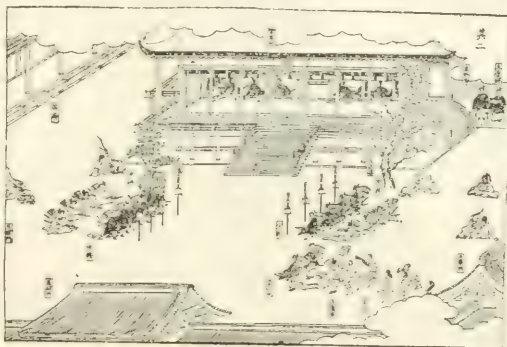
【新式】 七日 馬は陽のけだもの、青は春の色也、正月七日白馬をみればとしの內の邪氣をのぞくとなり、數は三才をかたどり三七廿一疋ひかるゝ由也、寬平の比より始る歟。

【いつまで暦】 白馬 七日 青馬の節會といふ、年中の邪氣を去るとあるゆへ七疋ひきて天子の御覽有るなり、極白きは青きものなれば白馬を青馬といふとかや。

注 (一)八省の五、ツハモノ、ツカサ、諸國の兵士、軍旅、兵馬、城隍、兵器等の事を掌る
(二)バイクラエフ、天竺の多羅樹の葉、長さ四五尺、幅五六寸、固く厚く二つに折れて萬年青の葉の如し、國人之を採りて字を寫す。

【季題解說】 正月七日。中古以來行はれし正月の三節會の一。左右馬寮の青馬二十一疋を庭中に引きわたすを、天子の見たまひて後宴を賜はる儀式なり。此日又兵部省より御弓奏を奉ることあり 御弓奏は兵庫寮に藏する弓矢を獻ずる儀にて、年の始に天皇兵器を閱したまふなるべし。もと節會に關聯することにはあらざれど、此日奏するが例なり。又加敍とて位記を敍人に賜ふことあり。節會の次第をいへば、御弓奏、敍位の事ありて後「次奏二白馬奏一、次內辨仰二參議一、令レ取二版標等一、次白馬渡、遲々者、仰二參木一催レ之、先左陣、次左右馬頭、次白馬七疋、次左右允、次左右屬、次白馬七疋、次左右馬助、次右陣、次陪膳釆女撤二御臺盤鮑一、次內膳供二御膳一、次供二殘御膳一、次給二臣下粉熟一、御箸鳴、次臣下應レ之、次供二蚫

羹一、次供二御飯一、次供二進物所御菜一、次供二御厨子所御菜一、次給二臣下飯汁一、御箸鳴、臣下應レ之、次供二三節御酒一、次供二一獻一、賜二臣下一、次御酒勅使、次供二三獻一、賜二臣下一、次奏二舞妓奏一、次舞妓參進、次舞妓拜、次内辨奏二宣命見參祿法一、次奏聞了復坐、次召二參議一人一賜二宣命一、次召二大辨一、給二見參祿法一、大辨良着二祿所一、次群臣下レ殿列立、次宣命使下レ殿着版、次宣制一段、群臣再拜、又一段、群臣拜舞、次宣命復坐、次群臣復坐、次拔レ匕、次内辨以下下レ殿、於二月花門下一給レ祿、乍レ居一拜退出」と三節會次第に見ゆ。

天武天皇紀に「十年正月七日天皇御二向小殿一而宴レ之、是日親王諸王引二入内安殿一、諸臣皆侍二于外安殿一、共置二酒以賜レ樂云々」の記事あり。これを七日節會の始ならんとするもの多し。又此日青馬を見る故事は公事根源に「馬

は陽の獸なり、青は春の色なり、是によりて正月七日に青馬を見れば、年中の邪氣をのぞくといふ本文侍るなり」とあるにて知るべし。又青馬二十一疋を引き渡すことは、公事根源に「此馬の事禮記に春を東郊にむかへて青馬七疋を用ひるとあり、七は小陽の數、正月は小陽の月なり(中略)今の節會には三七二十一疋をひかるゝ也、是れ三は三陽にかたどり、七は七日にあつるよし、寛平の御記に載せられたり云々」又江家次第に「件御馬本必二十一疋也、毎年左右寮各十疋進レ之、其殘一疋稱二之餘馬一、隔年兩寮進レ之」とあり。白馬と書きて「あをうま」と讀むは、古來諸說あり。安齋隨筆には「白きを青とも云ふことあり、正月七日禁中の白馬をあを馬といふ、白

色の至極潔げなるは、少しく青みあるが如く見ゆるゆゑなり、白を青といふは白馬節會に限るなり、常に白を青といふにあらず」とあり・本居宣長は、玉かつまに論じて「白馬節會の白馬、古は青馬といへり、萬葉集を始め、續後記、延喜式などみな然り、圓融天皇の頃よりの書に白馬と見ゆ、古よりの青馬を改めて白き馬とせられたるにて、そは延喜よりの後の事ならん、然るを後世までも文には白馬と書ながら、語には猶古へのまゝにあをむまと唱へ來て、遂には人皆誤り、古書に青馬と書けるをさへ、白き馬と思ふに至りしならん」と云へり。さるを又山彥册子には本居氏の說を駁し「馬は元より白きを用ひられしを、喪葬に白きを飾れば年始に白馬といはんを忌みて、口語には青馬といへるなるべし、古へは白と青とを通はしいへればたとひ忌むまでにあらぬとも、猶春の始めなるからに、青き方唱へならひたりと見んかた穩ならん」と云へり。なほ「玉かつま」に左の記載あり。併せ讀みて參考とすべし。

▽白馬の節會

正月七日の白馬節會、古は青馬と云へり。萬葉集廿の卷に、水鳥乃、可毛能羽能伊呂乃、青馬乎、家布美流比等波、可藝利奈之等伊布、とあるを始として續後紀文德實錄三代實錄、貞觀儀式延喜式などに、多く出たる、みな青馬とのみ有て、白馬と云へる事は、一つも見えず。然るを圓融天皇の御世、天元の頃よりの、家々の記錄、又江家次第などには、皆白馬とのみあるは、平兼盛の集の歌に、ふる雪に色もかはらで牽くものを、たが青馬と名づけそめけむ、と詠めるを見れば、當時既く白き馬を用ひられしと見えたり。然れば古よりの青馬をば改めて、白き馬とはせられたるにて、そは延喜より後の事にぞ有けむ、延喜式までは青馬とのみあればなり。さて然白馬に改められしは、いかなる故にか有りけむ、詳ならざれども、源氏物語の榊卷の河海抄に年始に白馬を見れば、邪氣を去ると云へる本文、十節錄にありと見え、公事根源にも十節記とて引れたり。さるよしにやあらむ。されど猶もとの本文は禮記の月令にて、孟春之月云々、天子居青陽左个一、乘鸞路一、駕倉龍一、載青旂一、衣青衣一、服倉玉一と有るによれる事なるべし。倉龍は青き馬なり。文德實錄にも、助陽氣也とあれば、白き馬にはあらず、青なりし事決し。貞觀儀式には青馬とさへあるを、然るを後の世までも、文には白馬と書きながら、語には猶古へのまゝに、あをむまと唱へ來て、しろむまとは云はず。白馬と書るをも、あをむまと訓むによりて、人みな心得誤りて、古へは實に青き馬なりし事をば、え知らで、もとより白き馬と思ひ古書どもに青馬と書るをさへ、白き馬と然云へりと思ふはいみじきひがごとなり。

例句

白馬節會　あを馬の雲井にゆくや龍の駒　良保（山之井）

白馬節會　白馬を御はしの椽やつらかくし　祐　政（洗　摺　物）
白馬に乘るべき物やくらつかさ　一　雪（同　）
聲もひけ白馬かたの小歌ぶし　近　之（同　）
裝束をみがく金銀のはく馬哉　同（同　）
餅あぶる青公家原の節會哉　丙　穴（新　虛　栗）
冴返り雪見る馬の節會哉　白　蝶（寶　曆　十　一）
白馬を引夜は空も月毛哉　重　勝（犬　子　集）
邪々馬やお公家詞の節會の場　昌　夏（江　戸　辨　慶）
白馬の鼻寒けなる節會哉　鳴　雪（鳴雪俳句集）

【参考】　白馬と書きて何故青馬と訓ますかと言ふ疑問は「降る雪に色も變はらでひくものをたがあを馬と名付けそめけむ」（兼盛集）と歌ひ始めてから今日まで多くの考證家は夫々論議して居るけれどもいまだに其の斷案を得ない。十節錄に「馬性以レ白爲レ本、天有二白龍一地有二白馬一、是日見二白馬一卽年中邪氣遠去不レ來」萬葉集に「水鳥の鴨の羽色の青馬をけふみる人は限なしと言ふ」とある。邪氣を攘ふといふ事になつてはゐるが、もと蠶繭の豐産を祝うた風習では無いかとも思はれる。

御執奏（おしつそう）　御弓の奏（おゆみのそう）

【季題解説】　正月七日、宮中にて兵部省より御弓奏を奏ること。御弓はミタラシと訓ず。主上兵器を閱し給ふ切めなり。公事根源に、「天竺の具多羅葉は、其長さ七尺五寸なり、弓のたけも七尺五寸なる故に、これをたらしとは申すにや。」とあり。

【例句】
御執奏　御弓の奏雪晴るゝ御門内　蘆　風（曙　葵）

若菜節會（わかなのせちゑ）　若菜を供ず

【季題解説】　古、正月七日、又は初子の日、七種の若菜を內藏寮並に內膳司より奉りたることをいふ。【參照】若菜摘（わかなつみ）、七種（ななくさ）

【例句】
若菜節會　燭の穗もにほふ若菜の節會かな　冬　葉（獺　祭）
局の灯ともる若菜の節會かな　三幹竹（懸　葵）

女敍位（によじよゐ）

【古書校註】【山之井】八日　女の位階を敍せらるゝ事にて侍る也、內侍司（一）の被官（二）に東豎子（三）とて、枕草紙に行幸の折のひふまうちぎみといへる物也、これ

は三ツ子（三）を用らるとかや、三子は天子の守りなる由緒も侍るにや、毎年申文（五）をいたして五位のくらゐを賜ふと也、昔より紀朝季明と同じ名を相傳ふ（六）云々。公事

【栞草】八日　近代は吉日をえらばる、日本紀　持統天皇五年春正月、癸酉朔、内親王（七）女王（八）内命婦（九）等に位を賜ふ。云々。是れ始め也。公事根源　是は女房（一〇）の位階を敍せらるゝことにて、隔年におこなはる。云々。

【新式】女敍位八日　女の位階を敍せらるゝ事也　其中に内侍司の被官にあづまわらはといふものあり、みゆきの時、ひめ松とて、おかしき馬にのりて供奉する事あり。是は三子をもちひらるゝ故實ありとかや、年ごとに申文をいたして、女ぢよゐには、かならず五位のくらゐを給ふなり。そのへむかしよりたゞ同じ名のりのみ給ふよし。

注　（一）内侍司　ないしのつかさ　禁中の女官也、後宮の雜事、奏請、傳宣の事をも掌る、尚侍、典侍、掌侍の三等あり、大寶令に始まる、鎌倉時代以後掌侍廢絶して、典侍は枕席に侍するに至り尚侍のみ專ら本來の内侍司の事を行ふに至れり。（二）被官　ひくわん　上官に直隷する官、例へば中宮職は中務省の被官なるが如し　（三）東竪子　あづまわらは　禁中の女官也、女藏人の次に位し、行幸の時騎馬にて供奉す、天子の御守なる由を云ふ。冠、縫腋の袍、指貫、唐衣、裳を著す　（四）三ツ子　一産に生れたる三人の子。（五）申文　公卿などより敍位任官を朝廷に申請する文書。（六）三ツ子は天子の守りといふ目出度き由緒ある故に、之に五位の位を授けて、紀ノ朝臣季明と名乗らせる。（七）内親王　ひめみこ　天皇の女子　（八）女王　ひめおほきみ　天子の孫女より曾孫女、玄孫女までの稱、五世以下は命婦、宮人の別に入る。（九）内命婦　ひめまうちきみ　五位敍爵の官女を命婦とす、五位の妻を外命婦とす。（一〇）女房　にようばう　禁中に宮仕へする女の稱、轉じて妻。

季題解説　正月八日。公事根源云、「是は女房の位階を敍せらるゝ事にて隔年に行はる、其儀大方は敍位に同じ。大輪轉・小輪轉・切杭の申文・うつぼ勘文など云ふ物あり、又典侍・掌侍・命婦・藏人・東竪はし〲の者を敍する事あり。切杭には五位の爵を申也、二位三位などさるべき人あれば敍せらるゝ也。中にも東竪といふは内侍司の被官にある物にて、行幸の時姫松とておかしき馬に乗りて供奉する是也、是は三子を持ちゐらるゝにや。三子は天子の守にて有よし由緒も侍る故とかや。年毎に申文を出して必ず五位のくらゐを給ふなり。是は昔より同じ名乗を相傳して紀朝臣季明と名乗る、いとふしぎなる事にこそ云々」とあり。　参照　敍位ジョ

例句

女敍位　　盆梅に袿袴繝れゆく女敍位かな　　盧風（驟葵）

参考　延喜式に正月八日女敍位紫宸殿南廂立二漆案一と見え、又公事根源に「是は女房の位階を敍せらるゝ事にて隔年に行はる、其儀大かたは敍位に同じ、大りんてん、小りんてん、きりくゐの申文うつぼ勘文などいふものあり。切株の申ぶみといふは生年十壹歳の女官四十の勞をもて敍爵するなり」などと見えてゐる。年中行事歌合、七番左「女敍位正月八日爲邦朝臣、春にあふあづま童の心まで君が惠をさぞ仰ぐらむ。」判詞に「左、女敍

位は正月八日女の位階を敍せらるゝ事にて侍也。其中に内侍司が袴官にあづま童と云者の有也。行幸の時ひめ松とておかしき馬に乘て供奉する是が事也」。

女王祿（おうろく）

古書校註

【山之井】女王祿（ワウロク）を賜ふ　同日（八日）參議辨史など承明門のうちに隣の座（一）にて女王（二）に祿を賜ふ事也。公事　女王祿の女の字ヨマザル也）

【栞草】八日　これは女王に祿を賜ふこと也、其祿法、人別に絹二疋綿六屯とあり。江次第　等に委し、公事根源　云、女王祿と字には書たれど、ただ王祿とばかりよみて、女の字を略するを口傳とはする也。

【江次第】正月八日女王に祿を給ふ事、西宮記に節會の西障を破らずして女王の座と爲し、參議一人辨史承明門内に著し、本司官人女王を率ゐて障下に候す、本司官人奏文を進め時服を賜ふ　王四百十九人を定め其の死闕を待ち次に依て之を補す、但し姓を改めて臣と爲るの闕は其代を補せず、隨て定額數を減ず、凡そ祿を賜ふの女王に百六十二人を定め、其の闕に隨て代を補し、及び改姓には闕を爲さゞる事並に上に同じ、又曰く、所司を殿庭に設け、幄に字を安福殿前に立て、祿を版位の南に積み亦殿上裝束を供奉す。天皇紫宸殿に御し、内侍女官を率ゐて座に就き、本司官人女王を引き、月華門より參入す、女王先づ幄下の座に就き、次に官人共に趁て前庭の座に就く。座定まつて簿を執り唱へて曰く、其親王の後と、即ち一祖之胤皆座を下り、共に唯と稱し、庭中の座に就く、座定まつて簿を執り、一一名を喚べば女王唯と稱し、進んで祿を受けて退出す、其祿法は人別に絹二疋綿六屯なり。

註（一）隣の座、幕を張りて作りたる假の座、節會。（二）女王　女で叙位の者を云ふ

[illegible]　正月八日。古、女王に祿を賜はりし御儀を女王祿といふ。昔は王四百二十九人、女王二百六十二人と定められて、年毎に今日祿を賜ひたるものなりと、女王祿と字は書きたれど、唯王祿とばかり讀みて、女の字を略するを口傳とするなり。

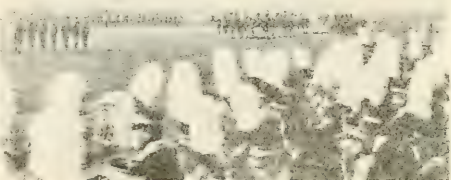
例句

女王祿

女王祿やねびまさりたる御笑顔　　子規　（子規句集）
女王祿や今日を曠着の立姿　　梅離　（年刊俳句集）
女王祿の日を慱らぬ緋鶯かな　　眉月　（最新二萬句）
女王祿やかくて歌日奏ふる　　同　（同　）
女王祿や土佐繪の霞紫宸殿　　東洋城　（澁柿）

[illegible]　女王祿と書きてたゞ王祿と讀み女字を略するを口傳とする。白馬節會の翌日、女王に絹布綿等を賜ふ儀である。長幼に依らず女王の世次に依る。

陸軍始（りくぐんはじめ）
陸軍始觀兵式（りくぐんはじめくわんぺいしき）

【季題解説】一月八日。陸軍始に於ける觀兵式は各衛戍地に於て行ひ、東京に於ては天皇の臨御あるを例とす。當日天皇には陸軍式御正裝、侍從武官長御陪乘の第三公式鹵簿にて式場に行幸あらせらる。この時軍樂隊及諸隊の喇叭手群は「君が代」一回を吹奏し、各隊は敬禮を行ふ。一旦便殿に入御。直ちに閲兵式を行せらる。閲兵を施行せらるゝ時、諸兵指揮官は前進して天皇を奉迎し當日出場の總人員を奏上し、天皇の右方後に在りて閲兵を奉導す。天皇は陪覽の皇族、團隊に附屬せざる將官佐官及陪覽を差許されたる將校を從へさせられ、御乘馬にて各隊を御巡閲遊ばさる。天皇の扈從又は隨從の諸員すべて乘馬なり。天皇の師團・旅團の右翼通御のときは師團長・旅團長は前進して奉迎、敬禮す。各聯隊右翼通御のときは各隊敬禮し、聯隊長・獨立隊長は前進奉迎、敬禮し、且其の隊の出場人員を奏上す。閲兵式終れば分列式行はる。即ち天皇は一定の地點に御乘馬を駐めさせられ、其の前面十二歩を分列通過する各隊を御覽せらる。各團隊は敬禮點に到りたるときは將校以下敬禮し軍旗亦敬禮す。聯隊長は隊の分列が側方に進出したる後、天皇の左側後に移り諸兵指揮官の定むる所に從ひ、大隊長又は中隊長の職階氏名を奏上す。分列式終れば天皇一旦便殿に入御。次いで各團隊臨御のときと同樣の敬禮の下に還御　軍樂隊及喇叭手群は車駕場外に出で給ふまで連續「君が代」を吹奏す。【參照】海軍始（カイグンハジメ）

【例句】
陸軍始

大筒をひき出て調練始かな　鬼城（鬼城句集）
鳴りわたる喇叭陸軍始かな　松露（同　古　[illegible]）
宵よりの雪積む陸軍始かな　漾人（昭和一萬句）
野の一木霞む陸軍始かな　可濤（大正俳句選）
陸軍始青き蜜柑を呉れにけり　夾府（年刊俳句集）
霜踏んで陸軍始並びけり　香骨（木太刀俳句鈔）
陸軍始喇叭に澄める空の色　佳花（俳句大觀）
馬心あり陸軍始いなゝける　其外（同）
筑波山晴るゝ陸軍始かな　天麓（[illegible]）
城西に龍駕動くや武を練る日　無黄（初冠）

陸軍始　富士晴れて寒き陸軍始め哉　瓜青（ホトトギス）

吉書奏（きつしよのそう）

【季題解説】 正月九日、又は吉日を撰び、宮中にて、大臣より諸國の守に鑰を賜ひ、不動の倉を開く由を奏聞する式を吉書の奏といふ。

【例句】
吉書奏　昇平の聖化ゆたけし吉書奏　夜濤（懸葵）
民草も道ある御代を吉書奏　同（同）

外記政始（げきのまつりごとはじめ）

【古書校註】 【山之井】 吉日をえらぶ、外記(一)は恆例臨時の政をとり行ふ官なる故、正月にまづ當年の政を行ひ始る心なり
【栞草】 公事根源 是は吉日をえらびて行ふ、先九日なるべき也。上卿(二)以下位次の公卿あるをりも有、宰相の座(三)につぐ、これよりさきに辨少納言外記史、かたなし(四)にて事をおこなふ。上卿めしあれば大辨も卿につく。かたなしのことはて丶、南の所にて勸盃（クワンパイ）のこと有。いでたちとて、出ざまにおの〳〵作法有。ことはて丶參內して左近の陣にて外記は恆例臨時の政をとりおこなふ官なるによて、正月には先づ當年の政を行ひ始むる心也。檢非使の廳にも、おなじく今日はじめおこなふ。【拾芥抄】 結政所、陽明門の內、近衞の南、左衞門府の西に在り 云々。
註 (一) 外記 げき 古への太政官の官、大外記、小外記あり、恆例、臨時大小の公事の詔書奏文を勘造し、局中に記錄す。(二) 上卿 禁中に公事あるとき、大臣、大中納言等、臨時に其奉行と定めらるゝ名目、又は宮中にても其日の政事の首席となる名目。(三) 宰相の座 宰相は參議をいふ、又大臣の座名、詳は其の役席。(四) かたなし 結ねなすの義にて、數通の文を一に束ねて、結び固むるを云ふ。かたなし所（結政所）とは、外記政始の時、政を行ふ所にして、大內裏外記廳の南に在り。

【季題解説】 外記政始は、古く年始に政事を議せし式にて、先づ外記廳の別館結政所（かたなし）にて、大辨以下作法を以て外記廳の申文を結ね固め、次に外記廳にて申文の儀あり、了つて上卿以下即ち南所（結政所のこと、廳の南に在るが故に、ミナミノトコロと云ふ）に著き勸盃あり、事はて丶參內して左近の陣につくを例とす。官政始と共に御齊會の儀畢りたる後、吉日を撰びて行へり。又新帝踐祚後、改元後、廢朝後等にも行ふ例あり。外記は太政官の職名、詔勅及び奏文を起草し、また其の事の記錄を掌りしもの。今の內閣書記官の類なるべし。【參照】 政始（マツリゴトハジメ）

【例句】
外記政始　幾面を並べて外記の用始　戊子（昭和一萬句）

海軍始

季題解説 一月九日。明治四年十二月二十七日兵部省よりの布告にて、明治五年一月八日陸軍始、一月九日海軍始と定められ、大元帥陛下御親臨の上行はせられたりしが、明治十二年以後絶ゆ。

例句

海軍始　神風に晴れし海軍始かな　北谷生（[illegible]葵）

子日の遊

初子の日　子の日　初子　子日の松　小松引　子日山　子日草　子日衣　子日の宴　初子の玉箒

古書校註

【山之井】是は萬葉集に家持卿の歌なかに此玉箒とは蓍（一）といふ草に小松を取そへて正月初子日こがひ（二）する屋をはきそむる事を袖中抄にいへり。

【選集】扶桑略記 宇多天皇の寛平八年閏正月六日に子日の宴有り、北野雲林院に行幸す。菅家文章 予亦嘗て故老に聞く、曰く、上陽子の日の遊は老を厭ふ、又曰く松根に倚て以て腰を摩る、風霜の犯し難きに習ふ。拾芥抄 正月子日、丘に登るは何ぞや、傳に云、正月子日、丘に登るは遠く四方を望み、陰陽の靜氣を得、煩惱を除くの術なり。十節記 初子のけふの玉箒 萬葉集始春之初子乃今日乃玉箒手爾取由良久玉乃緒（三）宗祇 袖中抄 玉箒とは、蓍と云草に子日の小松を引ぐして箒に作り、田家正月子日に蠶飼する家を掃初ることとなり。○子日衣 何にても子の日の遊に着用の衣を云べし。

【御傘】小松引　松引　春也、子日の事なり。

【篇式】子の日のあそびとて、むかしは野邊に御幸なりて小松をひき、御遊など有しとなり。子は北方の配あり、しかれば北倶盧州の人は千年を經るといへる長命をいはひて子の日の遊あり。松は千とせをふるよはひあり、然れば子の日に松を引はみな千年のよはひにあやからんと也。殊に小松はゆくするたのもしくみゆるなどの義にとりて、引事なるべし、猶習ひもあり。

【年浪草】子日の松は、根ともに引ゆゑに和歌連歌の作意に、子を根と松によせ有心あり、依て子日植物に越嫁ふこと有なり。

注（一）蓍（めど　めどぐさ　めどき）宿根より數十莖叢生す、高さ四五尺、葉の長さ三四寸、細く深く切れ、白多く葉間に互生す、夏秋の間に多く小枝を分ち紫白花を開くこと菊の如し、五六莖、色淺紫なり、又紅白あり、此莖直上して枝なく、年を經れば一根五十莖に過ぐ、蓍の一莖（めどぎ）とす。（二）こがひ　養蠶　（三）はつ春の初子のけふの玉箒手に取るからにゆらく玉の緒。

季題解説　正月初の子の日、野に出でゝ小松を採り、千代を祝ひて歌宴を催すを子日の遊びといふ。宇多天皇の寛平八年、閏正月六日、北野雲林院に行幸し、子の日の宴を行ひ、公卿近臣等に酒饌を賜ひたるに始まり、世世殿上の行事となれり。御所の御襖にもこの子の日の遊を寫せるものあり、狩衣を著し、或は牛に乗り、小童などを召し具したる姿を描けり、優雅なる正月の野遊びなり。初子の日の祝ひに着用する衣を子日衣といひ、この遊びに引く小松を子日草といふ。初子の玉箒は正月子の日に蠶飼する屋を箒き初むるに用ひし箒のこと、蓍といふ草にて作り、子の日の小松に結びつけたるものなり。萬葉集に「はつ春の初子の今日の玉箒手にとるからにゆらぐ玉の緒　家持」とあり。〔参照〕初子の玉箒ハツネノタマハヽキ　植物　子日草ネノヒグサ

例句

初子の日
子の日

獨り寝もよき宿とらん初子の日　去來（去來發句集）
初子の日抱へて笑ふ松もあり　蓼太（三傑）
引うたへ尾上のまあつを初子の日　可雪（洗濯物）
子の日しに都へ行ん友もがな　芭蕉（芭蕉句選拾遺）
兵のひかへてふたり子の日哉　其角（五元集拾遺）
心ゝうりは撰屑ひろふ子の日哉　浪化（浪化上人發句集）
掛り舟岬へまつに子の日せよ　白雄（白雄句集）
子の日まで鶴にあづける小松哉　也有（蘿葉集）
公家の手に豆出かしたる子の日哉　同（同）
喰へもせぬもの引に出る子の日かな　同（同）
野に咲て梅は人ひく子の日かな　同（同）
子の日せし跡とや人の立ありく　成美（成美家集）
まづひとり旅人通る子の日哉　同（同）
袴着て芝にころりと子の日哉　一茶（一茶發句集）
ちさきほど松はめでたき子の日哉　蒼虬（蒼虬翁發句集）
西東飛ぶ鳥多き子の日哉　同（同）
春日野ゝ子の日に出たり六歌仙　子規（子規全集）
小松がくれ鶴の子見ゆる子の日哉　同（同）
土佐が繪の小山は丸き子の日哉　月兎（明治新俳句集）
君が代や大根畠に子の日せん　古白（古白遺稿）

小松引

枯葎殘れる雪の子の日哉　田士英（ナガサキ）
暮の内誰ぞや子の日の御遊　彦影（同）
裏山を掃くも子の日の遊び哉　雨丁（年鑑俳句集）
松の香の小袖にこもる子の日哉　溪水（同）
衣手にとぶ砂淨き子の日哉　碧明（同）
撫でひくやあねはのもたる姫小松　宗因（梅翁宗因發句集）
引きつれて松をくはゆる鼠哉　其角（五元集）
曳松や山よりおろすうしのつて　浪化（浪化上人發句集）
手を添て引せまいらす小松哉　几董（井華集）
此君とけふはひかるゝ小松哉　蓼太（蓼太句集）
大黑天小ねらに松をひかせ給ふ　巣兆（曾波可理）
小松引人とて人のさみすらん　一茶（一茶句帖）
正月のちからわざなり小松引　梅室（梅室家集）
君が聲そふて引よき小松哉　同（同）
ちよつとした煙をたてゝ小松引　蒼虬（蒼虬翁發句集）
引添て杖にもむすふ小松哉　青蘿（青蘿發句集）
烏帽子きて尻餠つくや小松引　存義（新選）
小松曳野に朗詠を口ずさむ　橡面坊（深山柴）
春淺き野の鶯や小松曳　同（同）
小松曳袖摂りはへて五位六位　同（同）
牛飼の田にも遊べり小松曳　木母（榾味噌）
目表に雉のほろゝや小松引　栗人（懸葵第一句集）
畫襖の金泥古し小松引　虚子（ホトトギス）
曳き／＼て大方すてし小松哉　鼇兎（鼇兎句集）

某氏令壽祝賀

小松引く足の力よ腰の力よ　露月（露月句集）
袷の如き山の霞や小松引　五空（五空句集）
きめこみの小さき人形や小松引　四明（四明句集）
雪處々に小松曳きたる汚れ哉　守水老（守水老遺稿）
小松曳烏帽子着たるは何の守　露葉（春夏秋冬）
小松曳加茂川北を流れけり　河柳（明治一萬句）
小松曳天の香久山晴れにけり　石潞（現代俳句大觀）
加茂人や烏帽子着て出る小松曳　九樽（明治新俳句集）
露紐の土によごれぬ小松曳　蝶衣（懸葵）
小松曳枯草の雪拂ひつゝ　雷死人（同）
笹鳴の嵯峨山淺し小松曳　九日庵（同）
小松曳小松がくれの歌や誰　沈生（同）

子日山

藤の實を仙家に賣ん子日山　何云（伊達衣）

子日山　君が代や隱者の淺き子の日山　重貞（反故集）
子の日山小松がくれに傘袋　木母（懸葵）

参考解説　古、正月子の日に高きに上りて遠く四方を望みて陰陽の靜氣を得るに原づくと言ふ。正月第一の子の日を初子と言ひ第二子弟子と言ふ。初子を以て主とするが若し子日三日ある時は中の子の日を用ゐ或は二月に行うた事もあつた。この日野に出て小松を引き若菜を摘むのは息災延命を願ふ意味である。

卯杖（うづゑ）

祝の杖（いはひのつゑ）　初卯杖（はつうづゑ）　卯の杖（うのつゑ）　卯杖祝（うづゑいはひ）　卯杖壽（うづゑことぶき）　剛卯杖（がううづゑ）　御杖（みつゑ）

古書校註

【山之井】　正月上の卯日色々の木共を五尺三寸づつに切て二束三束にゆひておほやけに奉るを御杖といふよし公事根源に有、源氏物語には卯つちと有、卯杖とおなじ事なり、年中の惡鬼を追也、京所より内裏には奉る物也と三光院殿（一）御説也。今の世に加茂より卯杖とて在家などにおくれるは一尺あまりの白くけづりたる木にひかげのかづらをまとひて、倶利伽羅龍（二）のかたちに作れる物なり、清少納言枕草子に卯杖のほうしといふ事も有。

【栞草】　江次第上古には南殿に出御、皇太子參上の儀有り、近代行はれず、春宮（三）卯杖を獻ぜらる、其木榠櫨三束、木瓜三束、比々良木三束、牟保古三束、黒木三束、桃木三束、梅木三束、椿三束、云々　公事根源御杖とは、持統天皇正月の卯日、大學寮（四）より是を奉るよし日本紀にあり（五）。又仁壽二年正月に、諸衞府祝杖を獻じて、精魅をおふ也とみえたり。（六）是を以て惡鬼を拂ふ心なり。作物所（七）よりすばま（八）を造物にして、其上の岩ほの中に、御生氣の方の獸をつくりて卯杖にあはしむ。雜談抄今の世に賀茂より卯杖とて、在家などにおくるは、一尺餘りの白く削りたる木に、日蔭のかづらを纏ひて、倶利伽羅龍の形に作れる物と、云々

【いつまで暦】　色々の木どもを杖にしておほやけに奉ること也。

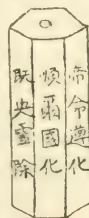
【御傘】　五尺三寸、正月卯日に獻する也、昔よりも下さるゝ也。持統天皇より始る。

【新式】　上の卯の日色々の木共を五尺三寸に切て、二束三束にゆひて、禁中へ奉る事をいふなり。

【年浪草】　浮舟卷の卯杖の註に、卯槌卯杖同じ事にて、年中の惡氣を追よし三光院殿御説也。又ちとせの卯杖、千とせの坂などいふ事あり。千とせの坂は山類にあらず、松竹立たる共間を通る事なり。卯杖つく君が姿は翁にて千とせの坂を今や越なむ　貫之。〇漢宮儀に云、正月卯日桃枝を以て、剛卯杖を作る、鬼を壓する也。

註（一）三光院殿　三光院入道前内大臣三條西實枝をいふ、三光院内府記の著あり、三内口訣　裝束抄とも名づく（二）倶利伽羅龍　黒龍の劍を纏ふ圖・不動明王の三摩耶の形といふ（三）春宮　東宮　皇太子（四）大學寮　式部省に屬す、紀傳、明經、明法、算道の四道

を掌る、各博士あり。(五) 持統紀三年正月甲寅朔、乙卯、大學寮、獻杖八十枚。(六) 文德實錄 仁壽二年、正月己卯、諸衞府獻卯杖、遂精壁也。(七) 作物所 つくもところ 禁中に在りて彫刻、鍛冶等種々の細工を爲す所。(八) まはま 淵の海 淵ある海邊、轉じて製作、書樣等に其の象を形どれるもの。

【季題解說】 古昔禁中にて惡鬼を避くるとて、正月上の卯の日、桃・椿・木瓜・榠樝・柊・梅等の木を五尺三寸に切り、二本或は四本を一束として天皇・皇后及び東宮に奉れるもの。初めは大學寮より奉りしが、文德帝の頃より諸衞府より奉ることゝなれり。持統記「三年正月乙卯、大學寮獻卯杖」とあり。これは漢土の剛卯を以て惡鬼を祓ふに倣ひたるものなり。後世にはこの儀も絕えて纔に諸神社の神事にその習俗を見るのみにして、京都賀茂神社にては卯杖とて白木の一尺ばかり、倶利伽羅龍の形をなし、日蔭のかづらを結びたるものを在家に贈りしことあり 今も同社にては初卯の參詣者にこの卯杖を頒與す。

（卯槌）

又卯杖を奉る時に奏する壽詞を卯杖祝、卯杖のことぶきといふ。榮華物語に「御前に侍ふ人々はえ念ぜず、おのづからうちさゞめき、うづゑほがひなどいふ心地こそすれ」とあり。【參照】卯槌

【例句】

卯杖

卯杖とはうさかの神の切にけん	句空（卯辰集）
古猫の相作にあふ卯杖かな	許六（五老井發句集）
古びやらかの通照ぶ卯杖哉	琴風（其袋）
世に古き噺きゝけり卯杖打	虎杖（俳句大觀）
子母錢をつけてくれたる卯杖哉	青々（妻木）
家ふりてけは〳〵見ゆる卯杖哉	同（最新二萬句）
護符添へて上加茂よりの卯杖哉	宏芳（ゆく春第一句集）

【參考】 王莽が劉氏の漢を亡して劉氏を忌み、劉の字は卯金刀の三字から成るを以つて卯日をも忌み、剛卯と稱する四角六角又は八角の木を腰に吊させたに始まると稱せらる。杖の材は曾波木・比々良木・棗・牟保許・桃・梅・椿・黑木・榠樝・木瓜等各長さ五尺三寸のもの。日本書紀持統天皇三年正月乙卯の條に大學寮より卯杖を獻ぜしを物に見えた始とす 神宮幕府にても亦之を用ゐる 上丘日の粥を煮るに卯杖を以てする その餘燼を以て女の尻を打てば男兒を生むといふ。枕草子に「十五日は餅粥の節供まゐる。粥の木ひき隱して家の御たち女房などの伺ふを打たれじと用意して常に後を心づかひしたる。」

卯槌（うづち）

【季題解說】 古昔、正月上卯の日に卯杖と同じく年中の惡氣をはらふとて奉り

し槌。槌は長さ三寸、廣さ一寸、形四角にして桃の木にて作り、竪に孔を貫き、十筋或は十五筋の五色の絲を通して垂るゝこと五尺ばかり、晝の御座の西南に懸けられたるものなり。臣下の家にも造りて互に贈答したるものなり。【參照】卯杖（ウヅヱ）

例句

卯槌
玉夜床（タマドコ）の惡鬼をはらふ卯槌かな　蛇笏（昭和一萬句）
神風の彩絲にかよふ剛卯かな　芒人（獺祭）
玉垂れの絲の五彩や懸卯槌　玉鉾（懸葵）

蹴鞠始（けまりはじめ）　鞠始（まりはじめ）

季題解説　正月中の日、江戸時代に行はれたる蹴鞠始の式を云ふ。現今は一月四日、京都華族會館分館に於て會始を行ふ。奥の間の床に蹴鞠の神精大明神の後陽成天皇の宸翰を掲げ、下に莚筵を敷き、三方に洗米神酒を供し、一同斗[illegible]神酒を受け終つて前庭に下り、一座から三座までの演技あり。この蹴鞠は一種の鞠を靴にて蹴上げ且つ受けて地に落さゞらしむる遊技にして、その演ずる場所を鞠坪、又は懸りといふ。裝束、蹴法等に種々の古式あり。【參照】秋—七夕鞠（タナバタマリ）

例句

蹴鞠始
梅柳影うらゝ蹴鞠初め哉　雪山（懸葵）
ありやありや磨やまろ蹴る四方の春　羊我（同）
鞠始地下も揃うて參りけり　三幹竹（同）

縣召除目（あがためしのぢもく）　縣召（あがためし）　春除目（はるのぢもく）

古書校註

【山之井】十一日より十三日まで三ケ日にてあがたは田舍の事也。外國（一）の人をめして任官を授けらるれば、かやうに名付るにや、諸國の受領（二）を任ぜらるゝ事とかや、さまざまの申文（三）公事根源に有

【栞草】十一日　年中行事歌合云、縣召除目と申は諸の外官（四）を宗（五）と任ぜられける也。外官とは諸國の司にて侍り、田舍をあがたと申はゐる也。外國の人を召て任官をさづけらるゝゆゑ、かやうには名づくる也、京官とは京にある諸司を任ぜらるゝ也。是は田舍の官を宗とし給ふなるべし。公事根源名替、名國替、秩滿、更任、任符、返上など云申文いろいろ數を知らず、おほよそこの除目につけて知るべき事とも、八十年の學にもきはめがたく、百丈の紙にも書のべがたし、云々、同花抄春はあがた召、秋は司召と云替るなり。なほくはしきことは、北山抄、江次第などにみゆ。

【職原抄注】任官を除目と曰ふ。位を授くるを敍位と曰ふ。目は名也、前

官之名を除き、當任之意を記す也。云々。

【御傘】縣召　春也、正月十一日除目の事也。

【新式】十一日、年中行事歌合に、あがためしのぢもくと申事は、外官をむねと任ぜらるゝなり、外官は諸國のつかさなり、ゐ中をあがたとは申なり。外國の人々をめして任官をばさづけらるれば、かやうに名づけ侍るにやと、爲二秀詞一也。

【いつまで暦】縣召　十一日　あがたは田舍也、外國の官人を召て任官をさづけらるゝ事有り。

【江次第】正月十一日縣召除目、大臣參上、着座納言以下筥文を執るの人御前の間南邊に到り、膝行すること三度にして筥を置く　公卿等着座、主上御簾より公卿の座定まるや否を覽なはし次に此方にと仰せらる。上﨟大臣微音に唯と稱す。主上起ちて早くと仰せらる。執筆大臣微音に唯と稱す。小揖して笏を左に置く、國官帳筥を取て膝行し左手を以て御簾を褰げ、筥を獻ず、主上覽畢て返し給ふ。大臣笏を搢て之に給す、主上仰せられて云ふ早く、大臣笏を置き、先づ内竪勞帳を取り之に任ず、次に讀申し次に更めて勞帳を取り名の上に勾次寄物を懸け點を着く、以下作法皆同じ云々。初夜十一日夜の議畢れば主上仰せられて云ふ、今夜加波加利と大臣大間を卷き、次に固く成文を結ぶ、之を結びし上に墨を引て、已上を一筥に入れ之を進む。云々。第二夜十二日夜也、儀式初夜の儀式の如し　主上夜前の筥を下さしめ次第之に任ず、第三夜十三日作法夜前に同し今夜除せらるゝ者定めなし、唯當るに隨て之を任ず、凡そ除目は諸道の者を以て多く任ぜらるゝを吉とす。云々　受領に任ずるに及んで諸卿座を起ち、陣に向て書學作法有り。云々　諸任畢つて大間を卷き奏せらる。叡覽畢返し給ふ。次に固く成文を結ぶ、大臣退出し參議筥文を撤す、清書上卿外記を召し筥に入れしめ、陣に着て清書を行ふ、今夜年月の下に日を注す。云々。

註（一）外國　都以外の國を云ふ。（二）受領（じゆりやう）國司の官に任ずること、ズラウ、ズレウ、其京に居て任ずるを遙任（えうにん）といふ、又專ら國守（クニノカミ）の稱。（三）中文　女叙位の註を看よ（四）外官（げくわん）王朝時代の地方官、京都の官人を内官と云ふに對しての稱なり、卽ち按察使、國司、郡司、太宰府、鎮守府等の官をいふ（五）宗　中心。

季題解說　古、正月十一日より十三日までの間に、朝廷にて、諸國の國司を召して任官を行ひし式、略して縣召といふ。縣は田舍の義、在京諸官の任命は秋季に行はる、秋の司召除目に對して春の除目ともいふ。任官を除目といふ、卽ち前官の名を除き、當任の意を記すなり。公事根源に「名替・國替・名國替・秩滿・更任・任符・返上などいふ中文いろ／＼數を知らず、凡そこの除目につけて知るべき事どもは十年の學にもきはめがたく、百丈の紙にも書きのべがたし。」とあり、又職原抄註に「任官を除目と曰ふ、授位を除位といふ、目名なり、前官の名を除き當任の意を記すなり。」とあり。　傍題　秋—秋の除目

例句

縣召君の惠ぞありかたき　吟山（安永四・歳旦帖）
一理窟もたぬ顏なし縣召　蓼太（三傑集）
鉾がよと老のよろこぶ縣召　四明（四明句集）
一門の譽れともこれも縣召　同（同）
渤海の事も暗んず縣召　木母（補味噌）
縣召高麗貢船と前後して　同（同）
縣召蝦夷を奏する司あり　師竹（最新二萬句）
縣召牧に逸足選びけり　同（日本俳句鈔）
縣召舟車に急ぐ日數哉　辰生（續春夏秋冬）
上﨟見て妻や劣らん縣召　蝶衣（蝶衣句稿）
北面に姻戚のあり縣召　六花（寒烟）
農兵の事奏しけり縣召　櫻磈子（閻門の草）
旨を享くればまさに雪也縣召　百花羞（百花羞遺稿）
縣召關白殿に知られけり　碧童（明治一萬句）
武臣錢を愛すと縣召されけり　耐雪（ホトトギス）
縣召遂に遠國を出でざりけり　枚々（現代俳句大觀）
縣召國の柑橘齎しぬ　栗人（最新二萬句）
縣召遺賢の德も奏しけり　纖洲（懸葵）
錦木の歌聞えけり縣召　三幹竹（俳星）

春除目

鳥帽子親都にありて除目哉　達郎（ナガサキ）
錦著て晝行く島司除目哉　紗羊（同）
馬添へて殊に除目や陸奥の守　櫻磈子（日本俳句鈔）
鬼打つて丹波の守が除目かな　同（最新二萬句）

參考　縣は、もと皇室の御料田を言ひ後廣く地方田舍の意に用ゐる。縣召の除目は外官の除目とて、主として地方官を任命する行事である。春の除目とも言ふ。正月十一日より十三日まで行はれる。年中行事歌合に新中納言冷泉爲秀の作「八隅しる君かをさむるあがためしめぐみにあへる名こそ聞ゆれ。」公事根源に「縣召には外官をむねと任せらるゝなり。外官とは諸國の司にて侍る。田舍をあがたとは申すなり。」又、枕草紙には、この除目に賴みをかけてゐる人々の樣子がよく描かれてゐる。「ちもくにつかさえぬ人の家、ことしはかならずときゝて、はやうありしものどものほかほかなりつる、かたゐなかにすむものどもなど、みなあつまりきて、出入車のながえもひまなく見え、物まうでする供にも、我も〳〵とまゐりつかふまつり、物くひ酒のみのゝしりあへるに、はつるあかつきまでかどたゝく音もせず、あやしなどみゝたてゝきけばさきおふ聲々して、上達部など皆出給ふ、ものきゝに宵よりさむがりわなゝきをりつるけすをのこなど、いとものうげにあゆみくるを、をるものどもはとひだにもえとはず、外よ

りきたるものどもなどぞ、殿は何にかならせ給へるなどとふ、いらへには、なにのぜんじにこそはと、かならずいらふる、まことにたのみけるものは、いみじうなげかしとおもひたり、つとめてになりて、ひまなくをりつるものも、やう／＼ひとりふたりづゝすべり出ぬ、ふるきもの、さもえゆきはなるまじきは、來年のくに／＼を手をりてかぞへなどして、ゆるぎありきたるも、いみじういとほしうすさまじげなり。」

解齋の御粥（げさいのおかゆ）

季題解説 正月十二日。清涼殿晝の御座の大床にて、臺盤一脚を立てゝ供す。御粥を赤き土器に盛り、和布の御汁物を供へ奉るを、三口めしあがり、御箸を置かせらるゝものなりといふ。参照 夏―解齋の御粥（ゲサイノオンカユ）

御薪（みかまき）

古書校註

【栞草】 十五日 公事根源 是は百官悉く薪を奉りて宮内省にをさめらるゝ也。其數は延喜式にみえたり、御薪と書てみかまき（一）とよむべし。

【御傘】 御薪 正月十五日百官ことごとく薪を奉る事あり。

【いつまで暦】 十五日 百官おほやけへ竈木を奉る也。

【延喜式主殿寮式】 年中所レ用御薪、湯殿料一百八十荷、御匣殿御洗料七十二荷、御沐料一百八十荷、御脚水料二百四十荷、御牧料七百八荷、儲料二百荷中宮准レ之御貸殿五荷。

註（一）みかまき 御竈木を云、百數の百のつかさのみかま木に民の烟も賑はひにけり。」

季題解説 正月十五日、王朝時代に佳例として百官より禁中へ御料として奉りたる薪、又はその式を云ふ。天武天皇四年正月十五日、百寮諸人薪を奉る事あり、御薪と書きてみかまぎと讀む。御大典の時の庭燎の料なども亦御薪と稱す。

例句

御薪

御薪やまとふて代々の松蘿　白嘛（德萬歲）
御薪にしのび笑ひの聞えけり　樹石（俳句大觀）
御薪や暮レ山積す主殿寮　禽化（懸葵）
御薪や八瀬の童子の牛車　同（同）
御薪に漏黑文字交りけり　同（同）
御薪や奥の小楢と記しけり　泰山（同）

踏歌節會（たうかのせちゑ）

踏歌（たふか）　男踏歌（をとこたふか）　挿頭綿（かざしのわた）　高巾子（かうこじ）　あらればしり　女踏歌（をんなたふか）

萬春樂　喜春樂　春鶯囀　梅枝うたふ　青柳うたふ　大芹うたふ

古書校註

【山之井】十四日の夜也、あらればしり、かざしのわた、或人かざしの錦とて春也、夜分也といふはかざしのわたを誤る也、踏歌の節會ともいへり、女踏歌は十六日の夜也。あられまじりのとよのあかりともいへり、是は京中の男女の聲よく歌うたふをめしつどへて、年始の祝詞をつくりて舞をまはせなどせられ侍し故に、踏歌とは申とかや。ある時は和歌をうたひ或時は詩をうたひしためしも侍り。源氏物語には此劒竹川などうたへる事あり、男踏歌に高巾子に綿の花を作る、是をかざしのわたといふ也。もろこしにも朝士の女をよくするものをして踏歌聲調をなさしめたる事文に有、但十五夜也。

【栞草】公事根源踏歌と云は、正月十四日の男踏歌のことにて侍るべし、近頃おこなはれ侍るは女踏歌也。それは十六日也。光源氏物語などにも多く男踏歌のことを申侍るにや。埏江入楚天武天皇の御時はじまりて、聖武天皇の御時かされてはじめおこなはる、又曰、圓融院天元六年正月十四日、有₂男踏歌₁、以後中絶云々。西宮記古語にアラレバシリと讀む云々よし未ㇾ詳。花鳥余情男踏歌十四日に有、殿上(一)地下(二)の四位以下の曲の終りに萬年アラレと云祝言を必すうたひ納むる故、アラレバシリと云輩。しかるべき所々をめぐりて催馬樂(三)をうたひ、舞かなづること有云云。男踏歌、女踏歌、隔年にあるよし。細流抄にみえたり、かざしのわたは河海抄踏歌の人綿の造花を以て冠の額にさす也。」かづけわたは踏歌の人にたまふ祿也。

十六日公事根源大かた正月十五六日は月の頃なれば、京中の男女の聲よく物うたふをめしつどへて、年始の祝詞をつゞりて、舞をまはせなどせられし故に踏歌とは申なめり。天武天皇三年正月に太極殿(四)に渡御なりて、男女わかつことなく闇夜に踏歌のこと有とそへたり。然れば月のころならねども烏羽玉の闇の夜にも有しにや。此外委しきことは江次第等にみえたり、今これを略す。

岷江入楚萬春樂は踏歌の曲(五)云々。萬春樂はすべて八句の詩也。それを漢音(六)にうたひて、句毎のあはひに萬春樂と唱ふる也、踏歌の舞人の立ざまにいふ事と。○體源抄春鶯囀台管音の作者、照于山右大略樂器をつくり樂の作者也。一説に天上寶樹樂と名づく」、これも踏歌の曲也。○梅枝梁塵祕抄呂之部に、うめが枝にきゐる鶯やはるかけてはれ二段春かけて、なけどもいまだ、ゆきはふりつゝ三段あはれ、そこよしや、雪はふりつつ○青柳は同抄律之部に、あをやぎをかたいとによりて、おけや、鶯の二段鶯のぬふといふかさは、おけや梅の花がさや、○大芹同抄律之部に、大芹はくにのさたもの、こぜりこそゆでゝもむまし、これやこのぜんばん

さんたの、木のゆしのきのばんむしかめのどう、さゞかくのさいやうさいとさりやうめんかすめうけたる、きりとほし、かなはめばんき、五六かへしの一六のさいや四三のさいや、年浪草云、各踏歌の夜のうたひもの也、我皇延祚億仙齡萬春樂元正慶序年光麗　萬春樂　かくのごとく八句の詩の句毎に萬春樂と唱ふと云。

【新式】　男踏歌　十四日、あらればしり、かざしのわた、これはみやこの遊士の聲よく物うたふをめして、としのはじめのいはひの詞をつくりて、まひを舞せられける也、此殿といふはたうかにうたふ歌の曲なり、かざしのわたといふは、かうふりの巾子くだりわたをまきて、かざしにもちひたるなりとかや。

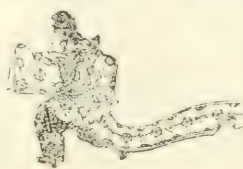
【御傘】　春也、霰には折を嫌、降物には（二句去なり）踏歌十六日女踏歌なり、公事根源年中行事等にくはし。

【いつまで暦】　かざしの綿、天智天皇より始る、都近江の國の時也。志賀の郡大津の宮とぞ、鎌足大臣始て藤原の姓を給ふて奥州の守に任ず、常陸の國より白雉一羽、一尺二寸の角生たる白馬一匹を奉る、其送り文に曰、雉の色の白は、皇澤の潔を表し、馬の角の長きは上壽の世を治るとぞ書けり。かの雉を其角に居へて、大臣乘て南庭にあそぶ。聖代の奇物これにしかんや。天子御感有て鎌足に金銀其外を給ふ。この事正月十六日午の刻よりはじまるなり、其例として年々正月十六日に有之なり、雲の上人馬に乘り、引出物給ふ事ありとかや。私に云踏歌霰走りの二名は、馬上にて文をよみ又かけはしる故、踏歌といひ霰走りといふなるべし。（七）

【年浪草】　日本紀に曰く、持統天皇七年春正月辛卯朔丙午、漢人等（八）踏歌を奏づ、同八年春正月乙酉朔辛酉、漢人踏歌を奏請す、癸卯唐人踏歌を奏す。云々。○禮記に云、今俗阿良禮走と曰ふ、師說、歌曲の終に必ず重ねて萬年阿良禮と稱す、故に萬歲樂と曰ふ、是れ古語の遺れる也。○續日本紀に曰く、聖武天皇天平二年春正月丙戌朔辛丑十六日也天皇大安殿に御し、五位已上を宴したまふ。晚頭、幸を皇后宮に移す、百官主典已上踏歌に陪從し、且奏で且行る、引て宮裏に入り、以て物を賜ふ。云々。○江次第に曰く、踏歌アラレハシリ注に云、正月十六日行はるゝ由、事の起り所見無し、今案るに正月十五日六日、明なる時京中の士女踏歌す。云々。琴歌に曰く、新年始邇何久社供奉良米萬代摩提丹（九）三節の御酒を供す、一獻國栖（一〇）歌曲を奏す、（一一）舞妓出づ、西宮抄に曰く、四十人殿位下に至り折れて南に行く、更に還て北に行く、踏舞三廻、了て元の如く退く、樂前の大夫二人帶劍者前行す。校書殿（一二）の南端に當り東向す、妓分れて殿より西に進む、校書殿の南端に當り東に折れて馳道に爽まる、分れて南に進み更に北に還て大輪を作て右に廻りて一匝す。又左右に分れ南に行き更に折て內より北に進み、了て退き校書殿の東庭に留まる。東に向て歌を唱ひ了て退き入る、了て三宮に參す、云々。○潜確類書に曰く、唐の長安の士女千餘人、燈毬の下に踏歌すること三日、

聲調雲に入る、歌に因く、長安の女踏二春陽一、何處春陽不レ斷レ腸、舞袖弓腰渾忘却、蛾眉空帶九秋霜。

註 (一)殿上 禁中に清涼殿の上、又紫宸殿の上をも云ふ、四位以上此に昇ることを許さる、之を殿上人、クモノウヘビト、雲客と稱す。(二)地下 殿上に對して五位以下の未だ昇殿を聽されざる官人の稱。(三)催馬樂 サイバラ 神樂歌の曲の名。(四)太極殿 朝賀に[illegible]せらる。(五)男踏歌 男踏歌の條を看よ。(六)漢音 漢字の音、唐以前の支那北方の音を傳へしもの、吳方の音を吳音と云ふに對す。(七)蕃客 外國の客人なり、參考として掲ぐるのみ。(八)蕃人 アダヒト 唐國以後、我が國に歸化せる外國の人の稱。(九)新らしき年の始めにかくしこそつかふまつらめよろづ代までに。(一〇)國栖 國栖奏を看よ。(一一)原文[illegible]六字を[illegible]、省略す。(一二)校書殿(ケウシヨデン) 禁廷に於て累代の書籍を納め置く所、納殿また文殿ともいふ。

季題解説 古昔禁中に於て行はれたる公事、正月十五日十六日、京中の男女の聲よく物うたふを召し集め、年始の祝詞を作りて歌舞を奏せしむる儀式なり。もとは其歌曲の終り毎に必ず重ねて萬年阿良禮と唱へたるによりて、阿良禮走とも云ふ。此日天皇豐樂殿に出御、宴を次侍從以上に賜ひたるものを踏歌節會といひ、又は阿良禮走の豐明ともいふ。阿良禮走とは歌曲の囃聲にて、歌曲の終に必ず萬年阿良禮、萬年阿良禮と折返して囃しつゝ退入する趣を擬して呼べるなるべし。而して男の舞人の奏するを男踏歌といひ、女の舞人の奏するを女踏歌といふ。男踏歌は正月十五日、女踏歌は正月十六日に行ふを例とす。節會の供奉儀式は元日節會に同じく、まづ三獻の御酒を供し、一盞の後國栖歌笛を奏し、御贄を獻じ、立樂・萬歳樂・地久樂・賀殿樂・延喜樂を奏す、立樂終り、舞人南庭をめぐりて踏歌を奏するなり。

男踏歌の式は新儀式に「當夜歌頭以下相率集中院、嘗而自月華門參入、行列右近陣南庭、時刻出御御座、內藏寮舁祿綿机立前庭、王卿依召參上、賜酒肴王卿、御厨子所供御酒、踏歌人道、南殿西頭跪奏請事、訖入仙華門列立庭上、踏歌周旋(三反)後列立御前、言吹進出當縞案立奏祝詞、(中略)退出自北廊戸、其後踏歌所々、及曉歸參、御座如初、歌頭躬入賜於庭中、管絃者座在橫切、打錢斗囊持座在南、出御之後公卿先候簀子、歌頭以下依召參入着座、賜酒饌、此間奏管絃、數巡之後賜祿有差、事了退出」と見え、又女踏歌の式は江家次第に見ゆ。持統天皇の七年より始まりしものなれど中古には女踏歌のみ行はれ、德川時代にも一時復興せられしことあれどもその俤をとゞむるに過ぎずして廢絕す。

萬春樂は踏歌の曲にて、八句の詩なり、それを漢音にうたひて、句每の間に萬春樂と唱ふるなり。年浪草には「我皇延祚億仙齡萬春樂、元正慶序年光麗萬春樂かくの如く八句の詩の句每に萬春樂と唱ふと云々」とあり。

實作注意 男踏歌の際、插頭綿、高巾子を用ふ。「萬水一露」に據れば、「か

ざしの綿は踏歌の祿也、禁中の內藏寮より、內侍・藏人などが櫛げに入れて、立ちならびてくばると云へり。踏歌の人の祿の綿を請取りて舞遊すといへり」と見え、且つ「高巾子は、踏歌の人綿を以て花を作りて、冠の額にさす也」と見ゆ。

又、萬春樂、喜春樂、春鶯囀等は、いづれも踏歌の曲にして、體源抄に「春鶯囀(合管音)の作者、照于山右大略樂器をつくり、樂の作者なり、一說に天長寶樹樂と名づく」とあり。梅枝・靑柳・大芹等は踏歌に謠ふ催馬樂の曲にして、梁塵愚按抄律部に從へば、それ〳〵の歌詞は次の如し。

梅　枝

むめがえにきゐる鶯や、はるかけて、はれ。
春かけてなけども、いまだ雪はふりつゝ。
あはれ、そこよしや、雪はふりつゝ。

靑　柳

あをやぎを、かたいとによりてをけや、鶯のをけや。
鶯のぬふといふかさはをけや、梅が花がさや。

大　芹

おほぜりはくにのさたもの、こせりこそゆでてもむまし、これやこのせんはんさんたの木の、ゆしのきのばん、むしがめのとう、さいかくのとう、さいかくのさび、ひやうさいりやうめん、かすめかけたるきりとをし、かなはめはんぎ五六がへしの、二六のさいや、四三のさいや。

總てこれらの語を用ゐたる句は、いづれも踏歌節會の作となし得れば、任意の表現によりて用語を選擇すべし。

例句

踏　歌

帶せぬぞ神代ならまし踏歌宴　其角（五元集）
雖も是踏うたのたぐひ哉　一雪（洗濯物）
踏歌舞天津宮事かくもこそ　蝶衣（蝶衣句稿）
月中へ奏でゝ歸れ踏歌人　同（同）
瑞籬も結はで妙なる踏歌かな　同（同）
踏歌人月華門より入りにけり　鴛化（懸葵）
御ン式微踏歌の節會なき世哉　同（同）
踏歌女の才姿天聽に達しけり　同（同）
踏歌人歡天喜地と奏でけり　蟻洲（昭和一萬句）
竭とれり踏歌は今を酣はに　荊棘（最新二萬句）
雪や此おとこたうかのかづけ綿　貞室（玉海集）
伶人の門なつかしや春の聲　其角（五元集拾遺）

挿頭綿
春鶯囀
梅枝歌ふ
鶯もつげよ梅が枝うたふ時　友元（蔵鏡短冊）

參考

（男踏歌）アラレバシリと訓む。日本書紀持統天皇七年正月丙午

の條に漢人の踏歌を奏せしを以つて初見とする。天平年間以降盛に行はれた。もと支那における集團舞踏の入り來つたもの であるから、歌曲も初は唐詩を用ゐ、後には此の外に催馬樂の我家、此殿、竹河、萬春樂等の曲を用ゐた。朝野群載踏歌歌章曲に「萬春樂萬春樂　我皇延祚億千齡萬春樂　元正慶序年光麗萬春樂　延曆休期帝化昌萬春樂　百辟陪延華屋内　天人感呼　千嶂作樂紫宸場萬春樂」等の章句が見えてゐる　囃詞なる萬春樂は、續日本紀によれば、古くは「萬年阿良禮」と言つたといひ、踏歌の事を一にあらればしり、又はあられまじりといふのは、これに依るのだといふ。（女踏歌）正月十六日は女踏歌で、内教坊の舞妓四十人、中宮東宮の舞妓合せて四十六人、殿前を三度廻つて唱歌する。後江戸時代には人數減じて二人となつた。女踏歌の章句は「明々聖主億千齡千春樂　無事無爲唯賞豫千春樂　凝旒端拱任群賢千春樂　網疎刑措還千古　天人感呼　治定功成大平年千春樂」等數章がある。

射禮（しやらい）　射遺（いのこし）

季題解說　正月十七日、是れは建禮門にて行ひ侍る事なり。代の始には豐樂院にてあり。十五日にまづ兵部省手つがひといふ事ありて、射手をとゝのへて、定むる儀式あり。正月になければ、三月にも行はるゝなり。もし三月ならば日次は十三日なるべし。清寧天皇四年九月一日、百寮に詔して、弓を射さしむ。孝徳天皇の御宇には正月にありき。天智天皇九年正月に、大夫士に詔有りて、宮門の内に大射すとあり。是れ皆射禮の始ならむかし。仁徳天皇の御宇に高麗國より鐵の楯鐵の的を奉る。群臣百官を召して、此の楯的を射さしむるに、更に射とほす人なかりけり。爰に楯人宿禰といふ人ありて、此の的を射とほしければ、高麗人どもいよいよ恐れをなして、みかどに隨き從ひ奉りけるとなむ。又射禮のあくる日は射遺とてあり。其は昨日射禮に參せさる內舍に、けふ射さしむるが故に、射のこしとは申すなり。弘仁二年正月に此の事はじまる　と公事根源に詳かなり。射禮の日は大藏省祿を積んで賞とし、兵部省標を設く。又鉦鼓を立てゝ矢の疎密に從てこれを叩き、中る時は白旗を以てその處を指す作法あり。

例句俳句

射禮　あたり矢のつゞく射禮の鉦鼓かな　船伏山（[illegible]）
射遺のあづま男が出仕かな　ひさし（同）
射遺や弓場殿前の日うらゝ　林間人（同）

賭弓（のりゆみ）

古書校註　【山之井】　十八日　是は天子弓場殿にて弓を御覽ずる事也。左右近衛左右兵

衞四府の舍人（一）ともの射侍る也。まけかたには罰酒（二）をおこなひ勝の方には舞樂を奏す、大かた近衞の管領なれば事果てのち大將射手に饗を賜ふ、これをかへりあるじといふ也。

【いつまで暦】 弓場殿にて上覽なり、左右の近衞、左右の兵衞四府の舍人の弓射はべる事なり。

【栞草】 江次第云、射禮の後朝を以て行はる、射禮正月十七日 賭弓翌十八日 其略に云、主上射場殿に出御云々射手四人立具してこれを射る、南にあるもの二人射了りて後に退出す、次の者歩み進む、又次者到來を待つ、其退出の路左近は射場の北の砌（三）より退き、右近は弓場の東面北の間の小蔀（四）の下より退く云々、勝方亂聲して勝負の舞を奏す左羅陵王右納蘇利、賭弓は淸和天皇貞觀二年正月十八日に始て行はる、（五）射禮は賭弓の前十七日行はる。正月なければ三月十三日のよし公事根源にみえたり。又射遣と云は射禮の翌日也、昨日射禮に參ぜざる四府に今日射させ給ふ也。

【年浪草】 （六）射禮、射遣共に俳諧活法の書に不レ出故に爰に略す。

註 （一）舍人、トネリ 王朝の頃天皇又は皇子等の左右に近侍して雜役を勤仕するものをいふ。（二）罰として飲まされる酒、春夜宴二桃李園一序 如詩不レ成。罰依二金谷酒數一李白 （三）砌（ミギリ）軒の下又は階の下などの甃（イシダヽミ）の處。（四）小蔀（コジトミ）殿上六間にありて主上殿上をみそなはす所（五）原本此所に公事根源を引けども山之井と同旨なれば略す。（六）原本此の前に江次第及公事根源を引けども栞草に出でたれば略せり。

季題解說 正月十八日。是れは天子弓場殿にのぞみて、弓を御覽するなり。仲春に弓をみる事は禮記などにも侍るにや。埒を築き、的をかけて、左右ノ近衞左右ノ兵衞四府の舍人どもの射侍るなり。左右の大將、射手を奏せらる。勝の方は負の方に罰酒をおこなふ。又勝の方は舞樂を奏す。大かた近衞の管領にてあれば、事はてゝ後、大將射手に饗をたぶ。是れを「かへりあるじ」といふなり。かへりあるじ行はぬ大將は、左右なく參内せぬ事にて、度々の召につきて參るとかや。又殿上の賭弓とて、臨時に弓を御覽ずる事あり。それは殿上の侍臣どもの射侍るなり。と公事根源に記述す。この賭弓は、布または錢を賭物にして、四府の舍人に射術をなさしめ、射あてたる者にこれを賜ふなり。この日近衞大將の射手を饗することを「かへりあるじ」と呼ぶ、俗の亭主振舞といふに同じ。

例句

賭弓 賭弓は手のうちもかへりあるじ哉 近之（洗濯物）

賭弓

舟ならでひくのり弓のをし手哉　一雪（洗濯物）
賭弓や的の星照る雲の上　富長（同）
賭弓やいづれも公卿のへろへろ矢　鳴球（明治俳句）
賭弓の弱冠にして譽あり　尺予（現代俳句大觀）
賭弓に四府の舍人の召されけり　禽化（懸葵）
賭弓の還饗（へリアルジ）の華燭かな　同（同）
賭弓に出居警蹕を稱へけり　同（同）

參考　中古以後一月十八日に射禮の後にこれを行ふ。一月に支障あればニ月に行ふ事もある。淳和天皇の天長元年に行はれたのを初見とする。射手は近衞十人兵衞七人としこれを左右より出して手番とする。勝方は賭物の布錢等を取り、負方は罰酒を行ふ。又臨時に殿上の侍臣をして賭射を行はしむるを殿上の賭弓と言ふ。年中行事歌合の判詞に、「賭弓と申すは、天皇弓場殿に臨み給ひて弓を御覽ずるなり。中春に弓を見る事は禮記等にも侍にや。是は左右の近衞左右兵衞四府の舍人どもの射侍るなり。左右の大將射手の奏を取、大方近衞の管領にてあれば事はてゝ後射手に饗をたぶなり。是を歸り主と申にや。」

舞御覽（まひごらん）

古書校註　【栞草】　十七日。〔紀事〕清涼殿東の小庭に舞樂あり云々、鶴の庖丁（一）此時也。

註（一）鶴の庖丁　別項を看よ

季題解說　正月十八日。清涼殿の南北に幄の屋をまふけ、左右の樂所とし、中庭に舞臺をかまふ。時刻にいたりて、柿鶴をもつて舞樂の番附を仰せて、是を書きて伶人に賜ふ。その後左右の樂を奏して、各番を都合百二十番の舞踏あり。天皇これを御覽ありて、伶人等に祿を賜ひ、亦歌人等に袍袴を賜ふことありといふ。〔參照〕鶴の庖丁（ツルノハウチヤウ）

例句　舞御覽

梅柳舞百番の御覽かな　冬葉（懸葵）
鳳竹のはねかへす雪や舞御覽　同（同）
御番組仰せ出されぬ舞御覽　三幹竹（同）

鶴の庖丁（つるのはうちやう）

古書校註　【栞草】　十七日〔紀事〕舞樂未だ始まらざる前、大隅高橋隔年に交る〳〵これを勤む、舞樂畢て後、鶴高盛等の膳あり、群臣またこれを賜ふ。云々。舞御覽の條かよはしみるべし。

季題解説　正月十八日。舞御覽と同日なり。卽ち舞踏より以前に、先づ六位二人、俎に庖丁・魚箸に檀紙をのせて、舞臺へ舁ぎ上げ、眞鶴一羽まな板の上に置く。この鳥は年々公方家より獻ぜらる。さて、高橋・福田兩氏などいへる庖丁家の人參入して、千年切、萬年切等の古式に則りて調理して奉るなり。この御儀は、豐臣秀吉、年始に鶴を獻ぜしに始まるともいふ。

〔参照〕舞御覽マヒョ

例句

鶴の庖丁

鶴の庖丁兩家傳ふる故實哉　尙化（[illegible]栞）
眞魚箸に水投く鶴の庖丁哉　同（同）
玉霰こぼすや鶴の千年切　同（同）

御會始（ごくわいはじめ）

季題解説　正月十九日、古へ内裏にて行はれたる和歌の御會始をいふ。後水尾院當時年中行事に「十九日（正月）御會始あり、題兼日ふれらる、宮方へは勾當内侍奉書にてまゐらす、入道親王などへは、宮方よりつたへらる、攝家方同門跡大臣などは、和歌の奉行より傳へまゐらす、その外は、和歌奉行折紙ひとつに書つらねてふれしらするなり、秉燭の比、おの〳〵參あつまり、生の御はかま御引なほし袙をかさねてめす、淸涼殿の北の方西向の御座に著御、（中略）次に宮方攝家方著座、次に讀師著座、讀師の氣色を待て講師著座、次に發聲著座、次に講頌の衆おの〳〵まゐりよる、講じはてゝ各退出、次に入御、宮攝家方等起座、常御所にて一獻有、宮方内々の攝家衆は御相伴、其外は淸涼殿にて勸盃あり、うたひなどうたひてにぎはし」とあり。

参照　歌會始ウタクワイハジメ

講書始（かうじよはじめ）

初講書（はつかうしよ）

季題解説　講書始の式は一月宮中に於て行はせらる。日時は一定せざるも多く二十日前後とす。

往古より我が宮中に御講書又は講義といふこと行はれ、三代實錄に「貞觀三年八月七日戊申、明經博士等内殿に參じ奉り論義常の如し。」「貞觀十二年八月八日戊子、天皇紫宸殿の簾中に御し明經博士・學士・學生等をして論義せしむ。親王已下參議已上侍す。畢りて博士學生等に祿を賜ふ各差あり。」延喜式に「凡そ應に書籍を講說せんとすれば先づ講書並博士名を錄し省に申す。始日本司座を堂上に設け省輔已下學生已上各著座す、諸博士皆講場に集り相共に論義す云々」「凡そ應に講說せんとすれば書記左傳各七百七十日を限り（云々下略）」とあるが如き卽ちこれなり。又天皇東宮皇族の御讀書始なる御式ありしも、これは初めて句讀を受けさせらるゝの式なり。然して新年の讀書始と云ふことは宮中の行事としては古籍に所見なき

が如し。新年の讀書始に就ては寧ろ武家の行事に多く見え、例へば吾妻鏡に「建仁四年正月十二日丙子、將軍家（源實朝）御讀書孝經始云々」「元久三年正月十二日甲午、今日將軍家御讀書始云々」折たく柴の記に「毎年正月の初に講筵を開かるゝの儀あり、かねてより講章を奏らしめ給ひ其日講訖りぬれば時服二領を賜はる事つひにかはらず」常憲院殿徳川綱吉御實紀卷五天和二年壬戌正月元日の條に「此日御讀書初の式行はれ小納戸柳澤彌太郞保明に大學三綱領を講ぜしめらる。これより年々の常規となされ、保明登庸の後も歲首の經筵に講書をつとめしとなり云々」とあり。これらによりて觀れば現在の講書始の式は寧ろ武家の制度に類するものゝ如く思はれ、故細川潤次郞博士は明治年中行事に「此の御式は明治以前にも行はれつることとありし由なるが、いつの頃絕えたりしにや」と記述せり。

現制に於ける御式次第は、先づ前年内に進講者及同控を親任命せられ、御式は、多く鳳凰ノ間に於て擧げさせらる。陪聽仰付けられたる宮内勅任官・同奏任官及び特に陪聽座許されたる陪聽者は通常服・通常禮裝にて參進著床し・次に進講者同控は通常禮服にて參進著床、次に宮內大臣內大臣著床す。此の時天皇陛下には御通常禮裝にて式部長官前行、侍從長・侍從・侍從武官長・侍從武官の扈從・皇太子・親王・王・王族・公族の供奉にて、續いて皇后陛下には皇后宮太夫の前行、女官の候後・皇太子妃・親王妃・內親王・王妃・女王・李王妃・公族妃の供奉にて出御。聖上には御間內北寄中央の玉座に、皇后宮にはその東方の御座に著御。次に進講者等しく御前に進みて座に就き御進講申し上ぐ。御進講は國書・漢書・洋書の順に進む、而して洋書の進講者御進講終りて舊の席に復すれば、兩陛下入御、つづいて諸員退下して儀式終了するなり。

例句

講書初

日の御子へ講書を選りて讀初めす　至人（悲交第一句集）

孝經の御儀ありけり讀み初め　羽山（俳星）

飼猿も座に侍す講書始め哉　橡面坊（最新二萬句）

講書始松籟ぬくう訖りけり　瓜青（鷺巢）

初講書

君若く臣銀髯や初講書　白及（俳星）

陪す進講に奉し、やがて御に問くと言上すれば、宮下始ども有り、陪せの諸卿起立すと成る

御講書始

御起立の御講書始め畏きよ　羊我（懸葵）

朝覲行幸（てうきんのぎやうかう）

古書校註

【山之井】二日也、是は天子の年始に、上皇（一）・皇母后（二）の宮に行幸なる事也。公事根源　朝覲の字禮記に有り。

【栞草】「公事根源」に云ふ。是は天子年の始に、上皇並母后に行幸なること有、嵯峨天皇大同四年八月に、朝覲の儀ははじまる。嘉祥二年正月廿日に仁明帝の母后に朝覲のため、冷泉院に行幸なる時、南階を下りて笏をたゞしくして、跪き給ひし事も侍るにや、周禮に春日に朝し秋日に覲すとみえたり、是れ朝覲のこゝろなり。

【年浪草】周禮春官に曰く、大宗伯の春見を朝と曰ひ、夏見を宗と曰ひ、秋見を覲と曰ひ、冬見を遇と曰ひ、時見を會と曰ひ、殷見を同と曰ふ。此の六禮は、諸侯を以て王に見ゆるを大と爲す。云々。〇史記高祖本紀に、六年、高祖、五日に一たび太公に朝す。家人父子の禮の如し。太公の家令、太公に說て曰く、天に二の日無く、地に二の王無し、今高祖子と雖も人主也、太公父と雖も人臣也、奈何ぞ人主をして人臣を拜せしめむ、此の如きときは則ち威重行はれずと、後高祖朝す。太公篲(三)を擁して門に迎へ却き行く。高祖大に驚き下つて太公を扶く、太公の曰く、帝は人主也、奈何ぞ我を以て天下の法を亂さむと、是に於て高祖乃ち太公を尊で太上皇と爲す、心に家令の言を善みし、金五百斤を賜ふ。云々。

【新式】二日、天子としのはじめ上皇母后などへ行幸有をいふなり。

註 (一)上皇 讓位後の天皇に奉る尊號、太上天皇、大上皇、仙洞とも申す、出家したまへるを院と申す。(二)母后 母に當る皇后。(三)篲 はうき。

季題解說 天皇、年のはじめに、上皇幷に母后の宮に行幸あらせらるる事なり。嘉祥二年正月二十日、仁明天皇、母后の宮に朝覲のため、冷泉院に行幸あらせられし時、南階を下りて笏をたゞして跪き給ひしこと、「公事根源」に見えたり。

例句 朝覲の行幸

南階に梅かをり來る御幸かな　冬葉(懸葵)

朝覲や御幸畏き玉の沓　三幹竹(同)

內宴(ないえん)

古書校註

【栞草】「公事根源」內宴とはうち〳〵の節會也。仁壽殿にて行はる。文人とも題を給はり詩を作りやがて御前にて講ぜらる。云々。

【山之井】廿一日 仁壽殿にて行はる、文人題を賜り、詩を作て御前にて講ぜらるゝことゝかや。

【埃囊抄】內宴は嵯峨天皇弘仁三年、幸二神泉苑一(一)覽二花樹一、文人令賦詩、是を始とす、保元に信西入道(二)申行ひし後、また絕侍る、文道のため口惜しと。云々。

【年中行事歌合判】內宴を神泉苑にてはじめらるゝ事はさこそ侍るなれども、花を見、月をもてあそぶ事はつねに神泉苑のみにて侍らずと。云々。

註 (一)神泉苑 京都市上京區門前町に在り、桓武天皇延暦遷都の初め之を創設す、屢々變

遷を經て德川氏のとき之を一寺となす、現存する所は中央の東偏にして僅に十の一に過ぎず。(二)藤原通憲　鳥羽、崇德、近衞の三朝に歷仕し正五位下日向守に任ず、博學宏才にして典故に練達し、兼て天文算道の數に通じ、詩歌管絃に堪能なり、薙髮して信西と稱す、後白河天皇の寵を受け、保元の亂に功を成して大に勢威をへり、後藤原信頼と隙有り、平治の亂其の捕ふる所となりて梟首獄に梟せらる。通憲又舞を好み、伎女を選びて磯の禪師に舞はしめ、以て白拍子の濫觴を起せりと稱せらる。

季題解說　古、正月二十一・二・三の日、子の日に當りし時、宮中仁壽殿にて行はれたる御宴にして、文人等に題を賜ひ、詩を作りて奏するを御前に講ぜしめられ、親王・公卿には若菜の羹を給ふなり。

例句
内宴　内宴やむらさきにほふ冠の緒　蓬青（曉臺）
細殿にもるゝ墨の香や御内宴　鯱人（同）。

參考　唐書に「同光初有レ詔設二立春宴一、問二希甫一云」の句が見えてゐる。年中行事秘抄に「廿一日内宴事（中略）國史云弘仁三年二月辛二神泉苑一覽二花樹一、命二文人賦一レ詩花宴之節始レ於レ此」とみえて居る。年中行事歌合に宗時朝臣「ちはやふる神の泉のそのかみや花をみゆきのはじめなりけむ」と詠んだのは、これに依つてゐるであらう。後中絶したのを、保元の頃少納言信西の論に依つて再興したが、保元の亂後、また廢絶した。

歌會始（うたくわいはじめ）　歌御會始（うたごくわいはじめ）

季題解說　歌會始は毎年一月（昭和八年は廿一日）宮中に於て行はせらる。新年早々に讀師・講師・發聲・講頌の任命あり、奉行は歌會の庶務を司る職、題者は勅題の案を勘考する職、點者は一諸人のよしあしを評し點ひきてえらぶ人」をいひ、現在に於ては御會當日披講せらるゝ歌の撿閲を爲す者、讀師は懐紙を整理して貴賤を次第し、式に指圖を總裁する者、講師は披講に際し、最初に發音正しく各歌を奉讀する者、發聲は講み終るを待ちて先づ上五文字を節唱し、講頌は之に次いで和する者なり。奉行は二名、題者・點者は各一名、又は相兼ねて一名、讀師は一名にして外に控一名を置き、講師・發聲は各一名、講頌は四名の例なり。此の外に和歌に堪能なる者に特に詠進を命ぜらる。この詠進歌を召歌と云ひ、同じく御會當日披講せらる。

歌會始の當日は時刻至るや、御歌所長・御歌所主事・御歌所寄人・御歌所參候、次に奉行・題者・點者・讀師・講師・講頌・發聲等孰れも小禮服又は通常禮服にて鳳凰ノ間に參進着床す。つゞいて參列すべき宮内勅任官・宮内奏任官・召人及び特に願出により陪聽差許されたる陪聽者等通常禮服又は通常禮裝にて參進着床す。次に宮内大臣・内大臣着床す。この時奉行は親王以下皇族方の御歌・詠進歌・預選歌を認めたる懐紙を御硯蓋に載せたるを、玉座前の卓上に置く。次に天皇御通常禮裝にて式部長官の前行、侍從長・

侍從武官長・侍從・侍從武官の候後、皇族女子・王公族女子の供奉にて出御。天皇には鳳凰ノ間北側正中に南面して設けられたる玉座に、皇后にはその東方の御座に就かせられ、候後の侍從・女官は文筥に納められたる御製・御歌の御懷紙を奉じて御前に參進、筥より御懷紙を出して御卓上の御小蓋の上に置く。御製の御懷紙はみちのく紙、御歌は襲懷紙なり。御懷紙は之を折疊みて置くを法とす。太皇太后・皇太后ある時はつゞいて出御、御座に就かせらる。皇太后陛下出御なき場合は、天皇陛下出御前、御歌使鳳凰ノ間に參入、御座の卓子の上に御歌の御懷紙を置き奉る　皇后陛下出御なき時も亦御同樣に遊ばさる。

御座定まりて、讀師恭々しく御前に參進、披講の席に就く。讀師卽ち懷紙を硯蓋より執り、蓋は之を裏に返し、披講の用意を整へ順次講師以下に目し、所役諸員同じく參進着席す。次に讀師懷紙を一枚づゝ硯蓋の上に載せて之を披講せしむ。懷紙は凡て聖上に向け奉る。講師先づ全歌を朗讀し、次で發聲上五字を唱し、次で講頌之に和す。披講は下より上に及ぼし、親王以下各皇族及臣下各々一反を唱す。（但し臣下は資格により音調を甲調とし或は乙調とす、皇族の披講は甲調なり）披講終るや講師以下披講の座を退かむとするの所作あり、讀師之に目して留め、御座に參進、御懷紙を返上、更に玉座に參進御製を拜受し讀み奉らしむ。奉唱三反へりにして御製を拜受し所役をして式の如く讀み奉らしむ。奉唱三反へりにして御懷紙は講師の方に向くるを法とす。奉唱終りて講師以下復床、讀師御懷紙を折り整へて參進し奉還して舊の座に復す　次に天皇・皇后・太皇太后・皇太后入御。御歌使をして御歌を獻ぜし時は、入御の後同使御座に參進御歌を筥に納めて退下。次で諸員退下す。

歌會始の起源は明かならざるも、八雲御抄中殿會の條に、「上古者寺常會唯中殿也、自中古爲晴儀云々」とあるより見るも、上古既にその端を發したるものゝ如し。中殿會とは天皇良辰を擇びて清涼殿に御し、歌會を行はしめ給ふ儀なり。歲首に當り歌會始を催されたるは、何時の頃よりかこれ亦明瞭ならざるも、永和三年記に「三月四日壬午、今夜禁裏和歌御會始也、出題御子左中納言（松千春友）云々」の記事を初見とし、後土御門天皇親長卿記に「文明十五年正月十七日今日御会云明日御會（御歌始也）初春祝可相能近臣二」とあり、以來は歌會始は絕ゆることなく行はれたるものゝ如し。

明治に至りては同二年正月二十四日京都禁裏小御所にて御會始行はせられ、東京遷都後も特別の事由なき限り、年々之を行はせられ、儀制令の定むるところに依り一月中宮中に於て行はせらるゝなり。

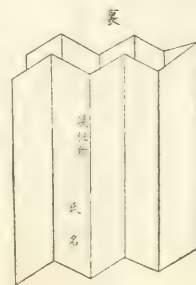
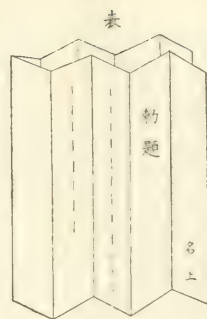
先づ御式に先ち前年內に奉行・題者・點者等任命せられ、次で勅題仰出され、宮內省告示を以て周知せしめらる。詠進は一人一首とし前年十二月十五日までに宮內省御歌所に差出す。料紙は美濃紙竪詠草五ツ折とし書式は

左の如し。

表

勅題

名上

裏

現今にては何人も詠進することを得るものなれども、古の詠進の範圍は多く公卿等に限られたるものなり（官位勲功爵ヲ有スル者ハ氏名ノ上ニ記スベシ）明治三年の勅題仰出に際しては、太政官達を以て「御會始御題別紙ノ御題　春來日暖ノ之通被仰出候間勅任官並華族各詠進可有之候、尤來二十四日辰半刻無遲々持參宮内省ヘ可差出事。但詠進無之龍ハ前以斷リ可差出事」と達せられ、同五年正月十日、史官より「來ル十八日歌御會始被爲在候間、判任官ニ至ルマテ歌道ニ心懸ケ有之輩ハ詠進可致事」と達せられ、同七年一月には「毎年一月御歌會始ノ節官員華士族僧侶平民之無差別詠進之向採錄ノ上叡覽ニ相供候儀ニ付勝手次第詠進之上各官廳ヘ可差出候、此旨布達候事。但御題御會日等ノ儀ハ毎年歳首可及布達事」と宮内省より布達せられ、玆に御歌會始の恒例儀式なること、及び一般より詠進せしめらるゝこととなりたり。參候・贊者・點者の制置かれ、預選歌を選ばれしは明治十二年以來なりといふ。【參照】御會始

【例句】

御歌會始

御歌會始十年の歌の屏　蘇元（蘇元古稀集）

歌會始南祭の雪しづりけり　瓜青（曖癸）

鶴軀なる御歌使まかりけり　同（同）

御歌會始めや源氏藤原氏　羊我（同）

年々の召歌に譽れあがりけり　三幹竹（同）

【參考】歌會の盛になつたのは、中古以降のことである。その式の最も盛なのは中殿歌會で、天皇清涼殿に御し給ひ歌會を行ひ、管絃の御遊あり、歌人に祿を賜ふ。又別に御代始めの歌會あり、其の儀中殿歌會には及ばなかつた。後世に至りて毎年正月に歌會始めがある。新年の御式として行はせられたのは後土御門天皇の文明十五年正月十七日を始とし、其の後は年年行はれた。明治以後は、明治三年正月二十四日に行はせられたのを始とし、二十二年以後は一月十八日鳳凰ノ間にて行はせらるる。明治七年より一般臣民にも詠進を許され、同十二年よりは、一般臣民の詠進歌中より秀逸の歌數首を御前にて披講せられることとなつた。

おつくばひ

【季題解説】おつくばひ（御蹲？）は、内裏より女臈へ正月に賜はるものなり。飯の高盛、大根の香の物を大きく切りたるを、一つ盛るものなりといふ。

【例句】

一日の糧に餘んぬおつくばひ　蝶衣（蝶衣句稿）

傳奏下（でんそうくだり）

【季題解説】新年朝廷より賀儀の傳奏を幕府に遣はされ、其の役人東海道を江戸に下ることを傳奏下りといふ。

【例句】

傳奏の雲井にかへる鶴見かな　沾徳（沾徳句集）

舞初（まひぞめ）　舞始（まひはじめ）

【古書校註】

【栞草】「紀事」四辻家（一）に樂始あり、舞人樂人來集り多く陵王（二）納蘇利（三）あり。

【年浪草】禮月令に、孟春の月、樂正（四）に命じて舞を習はしむ。云々。○日本紀に曰く、天武天皇十二年春正月己丑朔丙午 十八日也 是日小墾田の舞及高麗・百濟・新羅三國の樂を庭中に奏る。同朱鳥元年正月壬寅朔己未 同日朝庭に大餔す。是日御窟殿前に御し、倡優等に祿（五）を賜ふ。云々。今正月十七日、禁裏舞御覽、清涼殿の東小庭に舞樂有り、此節舞樂未だ始まらざる前、大隅高橋兩年交々鶴庖丁（六）を勤む。舞樂畢て後鶴高盛等の獻有り、群臣も亦之を賜ふと。云々。抑ゝ曲の濫觴はあまたの説あれども、蔡邕月令章句に、舞は樂の容也と。云々。呂氏春秋に陶唐氏が云、始め陰多く滯りて、人氣壅閼、筋骨瑟縮、故に舞を作さしめて以て之を宣導すといへり。是等皆人間に墮たる作業なり、專ら佛世界より世にあまねし、十方淨土佛菩薩の在す御元に妓樂を奏さずと云ことなし　殊に都率の内院には、常に萬秋樂を奏して、三會の曉をまつ間、當來の導師讃嘆し奉る。月宮には霓裳羽衣の曲を爲し、虚空を行動し玉ふ。昔天竺には大樹緊那、玉笛を吹玉琴を彈ずれば、迦葉は起て舞ひ、阿難は聲歌し玉ふと。云々。以上體源抄ニ出

註（一）四辻家　姓は藤原、閑院家の一、西園寺實藤を祖とす。初め籔内と號し後四辻と號す　羽林家の一、世々和琴箏を以て家業とす、明治に至り伯爵を賜はり室町と改む。（二）陵王　蘭陵王の略、舊樂の曲名、支那北齊の蘭陵王長恭の出陣の舞と云。又蘭陵とも云。（三）納蘇利　なそり　なつそり、雅樂の曲名、高麗樂なり。（四）樂正　樂官の長　樂長。（五）祿　官に仕ふる者に賜はる物、古へは絹・綿・麻布・穀物其他種々の物を云へり。後世は專ら知行・扶持米・給金等を云ふ、又褒美として當座の賜物をも云ふ。（六）鶴の庖丁　別項を看よ。

【季題解説】新年はじめて舞樂を司る家に舞人・樂人來集して樂初の式を行ひ、多く陵王・納蘇利などを舞ふことゝ又俗間にて舞踊の舞初をなすことたるといふ。【[illegible]】舞始、

【例句】
舞初
舞初や鶴の子つれて四海浪　　五蘊（玉かつら）
舞初や肩に輝くかづけもの　　鳴雪（鳴雪俳句集）
舞初の鶴を畫きたる扇哉　　北涯（俳人北涯）
舞初の鼓打ち込むしどまかな　　放江（放江句集）
幸若の今の世になし舞初　　山梔子（續春夏秋冬）
舞初や馬の心の手綱とり　　孤軒（孤軒句集）
再興の幸若舞や舞始　　竹の門（懸葵）

擔茶屋（になひちやや）

【季題解説】正月元日。京都勸修寺家へ年々來る與市某といふもの、新調の茶簞笥一雙に、釜爐茶具を飾り、烏帽子素袍にて、同家の家人を副へ、禁裏紫宸殿の階下に伺候し、點茶を殿上に獻ず。其の時、女孺の女房など、この茶碗を取り、錫一對、貫緡百疋を階の端より賜ふといふ。

【例句】
擔茶屋
あらたなる春のしるしや擔茶屋　　夜濤（懸葵）
橋のにほふ御階や擔茶屋　　二幹竹（同　）

箱海老（はこえび）

【季題解説】正月十五日　奥州金華山の麓村より、三尺の海老を箱詰として、京都御所へ獻上する古式あり。これを箱海老といふ。

【例句】
箱海老
みちのくの今日越えむ箱の海老　　杉風（炭俵）

二宮大饗（にぐうのだいきやう）

【古書校註】
【山之井】二日なり、二宮とは東宮（一）中宮（二）の御事なり、王卿以下二宮に參りて、拜禮有て饗につく事なり。（一）公事根源
【栞草】【公事根源】正月二日王卿以下二宮に參りて、拜禮ありて饗につくこと也、二宮とは東宮・中宮の御事なり。

【小右記】 長和二年正月甲午、左大臣以下燭を乘りて參內す、暫く雲上(三)に候し次に中宮に參る。左大臣以下中宮の大饗に著く、其儀例の如し、初獻左大臣、大夫道綱一獻了り餛飩次第云々、飯に居て箸を下し、後一巡了りて祿(四)を給ふ。左大臣以下侍從等次に東宮大饗に著く、初獻左大臣右大臣に傳ふ、其作法中宮の如し、諸卿已下祿を給はり了つて退出す。參入卿相の名之を略す。

【新式】 二日、東宮・中宮の兩御所へ王卿已下參り給ひて拜禮の後みあへ(五)有事なり、これを二宮大みあへといふ也。

註 (一)東宮 皇太子。(二)中宮 古く皇后の御所を云ふ、後には皇后の稱となる、然るに其の後には、皇后の外に設けられたる妃の位の稱となる、皇后と並べ置かる、蓋し藤原專橫の結果に因るなり。(三)雲上 くものうへ 禁中。(四)祿、絹、綿、麻布等の賜はり物。(五)みあへ 飮食の御もてなし。

季題解說 正月二日。二宮は東宮・中宮を申す。王卿以下、二日にはこの二宮に參じて拜禮のことあり、而して二宮の饗宴に臨むこと古への例なりしも、この儀絕えて久し。

例句
二宮大饗 二日晴るゝ大饗宴や春の宮 三幹竹 (懸葵)

大臣家大饗(だいじんけのだいきやう)

母屋(おもや)の大饗(だいきやう)

季題解說 正月二日。攝關大臣、宴を私第に設け、請客使を發して、親王公卿を招く。二宮大饗に準じたるものなり。常に母屋にて行ふを以て、一に之を母屋の大饗ともいへり。この日、朝廷より使を其の第に遣して、牛酪と栗子とを賜ふ。是を蘇甘栗の使と稱す。又其の第にては、鷹飼・犬飼をして庭上に出でしめ、雉を捕へしめて、以て座客を饗するの意を表するなり。而して大饗の具には、藤原氏の長者は祖先冬嗣より傳ふる所の朱器臺盤を用ゐ、自餘の大臣は赤木黑柿机樣器等を用ふ。新任の大饗を行はざる大臣の如きは、此の饗に臨むことを得ざるを以て例とすといふ。

例句
大臣家大饗 大饗や藤氏に傳ふ鶴の膳 零雨 (懸葵)

臨時客(りんじきやく)

古書校註
【山之井】 二日也。是は攝政關白家に春の始大臣以下の上達部(一)を招きて遊び給ふ事の有也。定まれる公務(クム)にもあらねば臨時の客と申也 年中行事源氏物語にはりんじ客とあり。御遊など有てさいばらうたへり。樂器を不用して郢曲(二)の人も笏拍子(三)にてうたふといへり。

【栞草】 年中行事歌合 正月二日、臨時客とは攝政・關白の家に、春の始大臣以下の上達部を招きて遊ぶこと有なり、さだまれる公務にもあらねば、

臨時客と申侍るにや、大方大臣の母屋(四)の大饗は年をへて行はれ侍るぞかし、鷹飼など渡しこ其興有事と、

【新式】攝政關白の家に、春のはじめ大臣以下の上達部をまねきこ遊び給ふ事有をいふなり、同じく二日に有。

註　(一)上達部　かんたちべ　かんたちめ　公卿を云ふ。(二)郢曲　えいきよく　今樣風のうたひものの名。(三)笏拍子　笏にて拍子をとること　(四)母屋　もや　おもや　住居の主要なる處。

季題解說　正月二日、王朝時代に攝政關白の家に、大臣以下の上達部を招きて遊宴を張りしことを云ふ。定まれる公務にあらざれば臨時客と稱するなりと云ふ。

例句

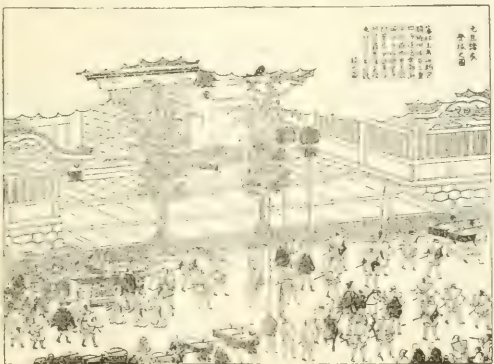
臨時客　催馬樂をうたふもありて臨時客　月嶺(懸葵)

參考　名稱の起りは請客せずして來集するより言ふ。其の儀式は略大饗に同じ。折敷高坏を用ゐ庇にこ之を行ふ。攝政關白及び大臣の家に於て親王公卿以下を饗應するのである。元日の節會に上首を勤めた人を尊者として上客とし、五獻の饗がある、客中よりは蘇甘栗の使とて牛醅と栗とを賜る。鷹飼犬飼は雉子を獻上する。後穩の座と稱して自由の宴となる。

初登城(はつとじやう)

兎の吸物(うさぎのすひもの)

季題解說　正月元日、德川幕府時代に諸侯及び諸士、歲首の御禮として登城をなすを云ふ。祝賀の後兎の吸物の饗應あり、德川家康の祖有親、なほ不遇にして信州に在りし時、林光政なる者、大晦日に兎を獲て、元日の饗膳に供へしより德川家の武運開けしとて、後代之を恆例となすといふ。因に「東都歲事記」には、元日の條下に、「御一門方御譜代御大名衆御禮(裝束にて卯半刻出仕)諸御役人方御禮登城」と見え、二日の條下にも「國主城主(裝束)諸御役人方御禮登城」と見えたり。

例句

初登城　知らぬ間に老いにし人よ初登城　夢筆(ホトトギス)

兎の吸物　彌勒まで御代よ兎の御吸物　越人(享保十三年歲旦帳)

江戸城御掃初　御掃初

季題解説 二日。江戸城にて老中の年長者、年男を命ぜられ、早朝出仕して、將軍御座の惠方に向ひて掃き初めをなしたること。又一般には元日は掃除せざるを以て二日を掃初めと云ふ。〔二一四〕掃初參

例句

江戸城御掃初　掃初の雪の總門ひらきけり　冬葉（懸葵）

御判始　華押始

季題解説 正月二日。江戸幕府にて、老中の役、其の年に初めて書札に華押を自署する式を御判始といふ。

例句

御判始　裃の端然と御判始かな　冬葉（懸葵）

佐竹の人飾　人飾

季題解説 德川氏時代に、佐竹侯は普通の門飾りをなさず、藩中の武士に禮服を著用せしめて、正門より玄關に至るまで整列せしめたれば、世にこれを佐竹の人飾といふ。

例句

佐竹の人飾　人飾の雪になりたる御門哉　冬葉（懸葵）

人飾や雪の御門の投草履　同（同）

謠初　素襖脱ぎ　御謠始　松囃子　松謠　松拍子

古書校註

【栞草】紀事「公武の兩家松囃子あり。倭俗正月三日より十五日に至て唱謠し或は鼓譟す。是を祝して松拍子と稱す。松は長久の義を取。豐臣秀吉公家譜 天正十五年正月二日謠初あり、諸士皆賀祝を獻ず。

【年浪草】御當家（一）も亦二日謠初あり、諸家賀儀を獻じ、或は群臣に宴を賜ふの式有り。○詩人玉屑が云、情を放にするを歌と曰ひ、悲み蛩蛩（二）の如きを吟と曰ふ、俚俗に通ずるを謠と曰ふ。云々。○或說に云ふ、謠能猿は桓武天皇の御宇に、日吉の社（三）の御前にて、猿三四寄合て手をたゝき舞踊りけり。則ち山王權現の御示現となり。是を學びて近江大和に猿樂とて四座を定め、近江の猿樂は猿の字を用ひ、大和の申樂は日よみの申を書といへり。人皇三十四代推古天皇御宇、豐聰太子（四）國を監し、天神地祇を祭祀し給ふて、以て安國利民の政をしき給ふ、因て六十六番の曲を作り、河勝（五）に命じて遂に橘の内裏の紫宸殿の前において此業をなさしむ。よ

つて四海波謠に萬民康樂也。太子其神樂を以て神の字を折て是を名付て申樂と云。說文に申も亦神也、大國中に有とき、猿を以て是に配す、故に後世是を始とし猿樂と云也。其後村上天皇、萬機の暇、太子の筆する所の申樂延年記を見玉ひ、群臣に告て曰玉ふ、上諸神を敬ひ、下萬民を安ずる事申樂に過たるはなしとて、則ち川勝の遺孫を氏安に命じて、重て此伎樂を學ばす。又紀氏あり、氏安が女弟むこ也、故に二人ともに是を起す。氏安二十九世の孫を金春と號す、大和圓滿井の座是なり、大和四座と云は結崎觀世坂戸金剛圓滿井金春外山寶生是也、猿樂は唐には散樂と云、又百戯とも云。社氏通典に、散樂は隋以前には之を百戯と謂ふ。

註（一）御當家　こゝには徳川家を指す。（二）叢祠　こほろぎとつく／＼ぼうし。（三）日吉の社　日吉神社　近江國滋賀郡比叡山の西谷、横川の關小比叡に在り、後之を神路山に移す、今官幣大社に列す、世に山王と云ふ。（四）聖德太子　聖德太子を云ふ。（五）河勝　秦氏、山城國葛野の人、秦の始皇の裔と傳ふ、聖德太子に仕へ一たび佛法を弘む。

【いつまで暦】松囃子、松の内のはやし也。

季題解說　新年に初めて謠曲をうたふこと。正月三日、徳川幕府時代殿中にて行はるゝ御謠初式を、松囃子と稱せり。國主大名の外は、御家門を初め諸侯悉く酉ノ刻より參殿し、暮六つ時より御三家の方々と將軍の御盃事あり。此時、觀世太夫拜伏しながら四海波の小謠をうたひ、次で左の御囃子あり。

老松　觀世太夫。
東北　金春・寶生・金剛交替にて勤む。
高砂　喜多七太夫。
弓箭立合　三流の太夫共に舞ふ。

三人の太夫は毎年唐織と時服を下され、此唐織を素袍の上に着して弓箭立合を舞ふ例なり。右御囃子終る時は、先づ一番に將軍召されたる肩衣をとりて觀世太夫に給ひ、御三家始め列座の諸侯何れも皆肩衣を脫いで之を給ふを例とす。又此時他の總御役者へは積錢三貫文づつを給ふを例とせられし由。

東西兩本願寺にても松囃子の能三番あり。御堂出仕の僧徒裝束をつけこれを勤めたるものなれど、正德年間に既に絶えて傳はらず。

實作注意　松囃子は民間の謠初めと混同せらるゝ所多けれども、これは幕府の行事なれば區別すべし。謠初めを松の内に行はるゝ所もあれば松謠といふ語もあらん。

例句

謠初

年德の神の祝言やうたひ初　重貞（毛吹草）
高砂や大きな聲で謠初　魯中（類題句集）
加賀屋敷けふお長屋の謠初　紫影（かきね草）
シテワキも夫婦むつまじ謠初　同（同）

上京のよい衆つどひて謠初　同（同）
謠初殿も一とさし舞はれけり　繞石（落梧）
拜領の熨斗目古りたり謠初　同（同）
梁の塵も落ちよと謠初　鳴雪（鳴雪俳句集）
獨居て謠初とて謠ひけり　露月（露月句集）
蓬萊もことほぐ術の謠かな　青々（妻木）
からたちの御殿ゆゝしも謠初　四明（四明句集）
謠初脇師ばかりの一座哉　犨兎（犨兎句集）
我家に能舞臺あり謠初　たけし（昭和一萬句）
謠初妻に鼓をうたせつゝ　雪鳥（現代俳句大觀）
謠初ワキ仕る嘉例かな　深叢（昭和模範句集）
謠初御庭の鶴の鳴きかはす　碧童（明治一萬句）
更くるまで謠ひあひけり謠初　露水（同）
謠初脇師の家を興しけり　化羊（同）
やゝ富をつくりし友や謠初　蝶衣（蝶衣句稿）
金春の筆は美男や謠初　北涯（俳人北涯）
謠初萬歳樂を七返し　言人（葵）
夫唱婦隨謠初むれば鼓かな　青蛾（懸葵）
謠初火桶の刷のひゞれかな　羊我（同）
シテの座に香を燻んぜよ謠初　零雨（同）
能舞臺に鑽火ゆゝしや謠初　寂人（同）
謠初家寶の鼓床にあり　四月（同）
謠初古稀の翁の聲の張り　紙鳶（同）
謠初らしき隣のぞめきかな　白及（同）
謠初今年は京の商が許　句佛（我は我）

松囃子

住の江の波の鼓や松ばやし　重治（鷹筑波）
松ばやしはやせ萬世と神あそび　徳忠（大三物）
惠方にもむかふかしらや松ばやし　貞常（同）
田舍藝も上洛してや松ばやし　種閑（同）
一調子東風にあけゝり松囃子　梅和（新類題發句集）
養老の文句めでたや松囃子　金生（同）
松囃子老ぬれば子にまかせけり　得川（新春夏秋冬）
金泥に灯のゆらめきや松囃子　樂天人（現代俳句大觀）
松囃子笛堪能の御曹子　佐月（懸葵）

松謠

松謠師家三代を知る老が　素石（葵）

参考　慈照院殿（足利義政）年中行事、正月四日の條に觀世太夫出仕して謠ふよし見え、古くは四日に行はれたが、豐臣氏に至つて二日となり、徳川氏にては初三日に行ひ、承應三年以後三日に行はれる。殿居袋に「正月

三日、同夜七ッ半時、長袴御譜砌、御三家、國持家之内、溜詰、御譜代及柳間之内、其外萬石以上以下、布衣以上御役人出仕、觀世・金春・金剛・寶生・喜多、素袍侍烏帽子にて出る、御番組、老松・東北・高砂、右御囃子相濟候而、御三家方御始、出仕之面々、御肩衣を太夫に被レ下之、如恒例、今夜大手幷内櫻田内外に而御篝焼之」。

鷹野始（たかのはじめ）

鷹野御成始（たかのおなりはじめ）

【季題解説】 正月四日　徳川將軍、始めて鷹野を催すことを鷹野始といふ。多く葛西・小松川・龜有等を選びて出遊したるものなり。一に遠御成始ともいふ。一に初鳥狩。

【例句】 鷹野始

筑波とす野に出づ鷹野始かな　冬葉（懸葵）

城東に鷹野始や供揃ひ　三幹竹（同）

馬騎初（うまのりぞめ）

騎馬始（きばはじめ）　騎始（のりはじめ）　騎初（のりぞめ）　初騎（はつのり）　馬場始（ばばはじめ）

【古書校註】

【年浪草】 雜書抄に云ふ、陰陽暦に曰、馬乗初又は馬始と云々。是を以て二事とす、心得難し、騎馬は稱美の詞也、武門の祝する乗初なればかく云にや（一）。又一説ヒメは姫の宛語なりと未考、云々。弓馬は元より武門の事とする處六藝（二）の其二（三）なれば、弓始について馬乗初勿論なるべし、日本紀に曰く、天武天皇十三年閏四月、詔して曰く、凡そ政要は軍事なり、是を以て文武官の諸人、務めて兵を用ひ及馬に乗る事を習ふと云々。又周禮に曰く、凡そ馬は八尺以上を龍と爲し、七尺以上を騋、六尺を馬と爲す。

【栞草】 馬乗始、註釋におよばず。

【滑稽雜談】 陰陽暦に曰、馬乗の初め、又騎馬の始めと云々。是を以て二事とす、心得がたし、騎馬は稱美の詞也、和邦の武門の祝する乗物なれば、かく云にや。

註 （一）此說に對しては騎馬始の條を看よ。（二）六藝　りくげい　禮、樂、射、御、書、數の六種の藝能をいふ。（三）

其二とあるは其三の誤

季題解説 新年はじめて馬に乘り初むる儀式を云ふ。徳川氏時代には正月五日にこの儀行はれたり。

例句

騎馬初 騎始

家中皆よき馬もたぬ騎馬初　康人（懸葵）
江南の鶯早し騎馬初　栗人（同）
乘初や殊にめでたき午の年　千河（玉かつら）
柑子くりも毛乘初や祝ふ駒馬の門　重綱（大三物）
乘初に下手のあたるや門の松　木導（類題句集）
乘初の足も亂れず雪のあと　子規（子規全集）
梶原の門の群集や騎始　格堂（新春夏秋冬）
騎初に庭を出づる良駒哉　月斗（同人俳句集）
騎初の輪乘り千里にたぐひして　櫻磈子（閭門の草）
騎初の道直ぐな雪蹴散さむ　紅綠天（雁來紅）
騎初や悠々として半日程　橡面坊（深山柴）
騎初や鞭加へ越す雪野原　八重櫻（續春夏秋冬）
騎初め清めの鞭を三度かな　得川（同）
一黨や譽れなけれど騎初す　碧堂（最新二萬句）
騎初や太守馬道に暗からず　柳矢子（同）
騎初や五侯の門を睥に　北涯（俳人北涯）
騎初や面繫の色とりどりに　五沼（俳星）
騎初や東風に吹かるゝ額髮　秋虹（懸葵）
だく乘りの橋の長さや騎初　射石（同）

初騎 馬場始

初騎の五十騎ばかり通りけり　柴天（最新二萬句）
雪すこし降りて夜明けぬ馬場始　牛喆（青嵐）

鐵砲打始（てつぱううちはじめ）　鳥銃（てつぱう）の打初（うちぞめ）

季題解説 昔、正月に武家にて行ひたる鐵砲の稽古初を鐵砲打始といふ。

弓始（ゆみはじめ）　的始（まとはじめ）　初垜（はつあづち）　射場始（いばはじめ）　初弓（はつゆみ）　射初（いぞめ）　弓矢始（ゆみやはじめ）

古書校註

【栞草】〔甲陽軍鑑〕弓始は正月七日なり。豹尾（へうび）黄幡（わうばん）を忌むなり、是によりて豹尾の頭を踏みて黄幡の尾を射るべし。〔陰陽暦〕黄幡の方、弓はじめに吉。

【年浪草】七日は禁中にも御弓奏（一）あり、武家是によるか。○本朝軍器考に云、弓矢は利器の第一となす、況や武家、源平及諸氏の良將群卒に至るまで、また嘗て控弦（二）を事とせずんばあらざるに於てをや。故に男子生るゝときは、則ち桑弧蓬矢（三）を推げて之を賀す、遠き略有るなり。其

人を稱して弓取と號す、其名豈に虚しからん乎、賴朝武家の禮を定め、正月に弓始め有り、埦飯獻物、弓矢を以て定額と爲す、所々の遊宴、笠懸流鏑馬(四)を以て事と爲す。云々。」河海抄に曰く、我國の弓矢は伊弉諾尊の御時に始まれども、又日本紀に、素盞嗚尊、父母の神に逐はれ、高天原に上り向ひ給ひし時、日の神背に千箭靫を負ひ、臂に稜威高鞆をはき、弓弭を振起し給ひしとあるぞ、此物の見えし始と、云々。

注 (一)御弓奏　白馬節會を看よ。(二)控弦　かうげん　弓をひく。(三)桑弧蓬矢　桑の弓と蓬の矢、男子の生れたるとき、之を以て天地四方を射て前途を祝す、故に四方に活動して功名をたてんとするの精神を桑蓬之志といふ。(四)笠懸流鏑馬　皆弓矢を用ふる武技なり。

季題解説　古、正月七日、武家に弓初の儀式あり、德川時代には將軍の上覽ありて甚だ盛大を極めたりといふ。

例句

弓始

とし德のやぶさめなれや弓始　梅盛（毛吹草）
射はづして仕丁笑ひぬ弓始　湖鷗（大三物）
君が代や鳥驚かぬ弓始　子規（子規全集）
やせ腕や三千石の弓始　同（同）
弓袴背らに雪の朝日哉　五空（五空句集）
弓初雪を開いて的遠し　同（同）
亂好む人誰々ぞ弓始　虚子（虛子句集）
水仙も荒れたる園や弓始　青々（妻木）
弓始や和田の別當司る　十框（十框句集）
大松明に且つ白む空や弓始　雪人（雪人句集）
長身の前キの首相や弓始　十星（鐘氷集）
矢申しや大松明の弓始　百世庵（日本俳句鈔）
弓始藤百石の指南番　雪山（續春夏秋冬）
弓始や天に向つて第一矢　冬葉（懸葵第一句集）
弓始幕は欅の島津紋　九老谷（ホトトギス）
弓始射貫し的を貫ひけり　杵山（同人俳句集）
神苑に村人寄りて弓始　同樂（稻の香）
門下百の禮射を受けぬ弓始　蒲公英（現代俳句大觀）
飾り楯庭にゆゝしや弓始　冬星（昭和一萬句）
師に次いで地擦り矢もなし弓始　土栖（大正俳句選）
三寶に並ぶ靫や弓始　素石（明治一萬句）
弓初や弦音つゞく二矢三矢　雀子（懸葵）
射垜にさす日もうらゝけし弓始　壽美平（同）
高松の雪射散らしぬ弓始　蝶衣（同）
弓とつて天下に恥ぢず的始　五空（五空句集）
臂にかけて弓の力や初垜　同（同）

的初
初垜

射場始	數の名のこの弓張らん初垜	同	（同　　）
	鯨幕あほる野風や射場始	箕谷	（昭和一萬句）
初弓	初弓の的も見えて葱畑	句佛	（我は我）
射初	弓の弦さすかいなには射初哉	一興	（洗濯物）
	鶴の羽の新矢をまゐる射初哉	蒲公英	（年刊俳句集）
弓矢始	初瀨法師定慧の弓矢始め哉	玉鬼	（日本俳句鈔）

參考 的始めとも、弓場始めとも言ふ。こは鎌倉幕府の時始めて行ふ所で、朝廷の射禮に擬したるものであらう。文治五年以後、毎年正月に行ひ、足利氏も亦踏襲して正月十七日に行つた。

槍遣初（やりつかひぞめ）

季題解說 正月七日。武家にて新年初めて槍を遣ふを槍遣初といふ。

例句

槍遣初	鑓梅の軒にも咲くや遣ひ始	千山	（玉かつら）
	槍遣はじめたばしる霰かな	芒角星	（獺祭）

若菜連歌（わかなれんが）

季題解說 正月七日。往古仙臺藩伊達侯にて新年に興行されし連歌を若菜連歌といふ。〔參照〕裏白連歌（ウラジロレンガ）

例句

若菜連歌	御連歌に七日出仕や青葉城	寂人	（懸葵）
	若菜連歌僉載點にはべりけり	代醉	（同　）
	梅に月にほふ若菜の連歌かな	冬葉	（獺祭）

具足餅（ぐそくもち）

武家餅（ぶけもち）　すわり餅（もち）

季題解說 正月武家にて甲冑に供ふるを具足餅といふ、上を赤にし下を白とし松魚節を添へて飾る。〔參照〕具足開（グソクビラキ）　鏡餅（カガミモチ）

例句

具足餅	我宿の春は來にけり具足餅	鬼貫	（鬼貫句選）
	一村を鼓でよぶや具足餅	史邦	（小文庫）
	から／＼に凍りて白し具足餅	琴糸女	（ゆく春第二句集）
	矢屏風やをさまれる世の具足餅	柿渦	（現代俳句大觀）
	鏡餅其の次の間や具足餅	翠陰	（最新二萬句）
	軒荒るゝ五家山中や具足餅	竹村	（同　　）
武家餅	武家餅や小豆下濃の御きせなか	則長	（雜巾）
すわり餅	長生に德ありと姥かすわり餅	園女	（玉藻）

具足開(ぐそくびらき)

[illegible]　具足鏡開(ぐそくかゞみびらき)　具足の鏡割(ぐそくのかゞみわり)　具足祝(ぐそくいはひ)

【山之井】具足（一）の鏡わり　二十日具足の餅（二）をかざるは元日也。今二十一日。

【栞草】紀事曰鎧に六具あり、悉く具足するの謂なり。其供する處の具足の餅特に刀を持て截ることを忌む。故に手をもつてし、槌をもつて是を破りおく、これを称して鏡開と云、新年截の字を忌む故なり。

【年浪草】本朝俗諺に曰、武家の甲冑に供する、是を具足の餅と謂ふ。此を八幡神に供すと言ふ。春行の吉日に、其供餅を煮、上下相依て之を拝賞す。此を具足の餅の祝と称す。此等は家々流例となる者なり。○篤信（三）云、鏡餅を煮食こと昔年は廿日を用し也、廿日と刃柄と訓同じ、廿日を用しは刃柄を祝ふと云俗説也。今廿日は御當代の御月忌なる故に（四）承應壬辰年より改て正月十一日を用ふと。云々。

註（一）具足　鎧、甲冑など。（二）具足にそなへたる鏡餅。（三）貝原益軒を云ふ。（四）三代將軍家光慶安四年四月二十日に薨ず、故に其翌承應元年より此儀を正月十一日とせるなり。

[illegible]　正月十一日、具足餅を十一日に至り手にて之を割りて祝ふを具足開と称す。具足の鏡開、具足の鏡割とも云ふ。武士の鎧に六具あり、悉く具足する謂なり、そのお供の餅を特に刀を以、截ることを忌み、手を以てし又槌を以てしてこれを破り餅いて祝ふを例とす。これ新年に截るの字を忌む故なり。昔は二十日を用ひ、二十日は刃柄と訓同じく、刃柄を祝ふと云ふ俗説なり。承應の頃より十一日に改めしといふ。【参照】具足餅をもみよ。鏡開をもみよ。

例句

具足開　十一日

御汁粉を運ぶ具足の祝かな　其角（五元集）

具足開く手力祝へ老の春　冬葉（獺祭）

具足開呵(か)呍の聲のひびきかな　鯱人（同）

江戸城連歌始(えどじやうれんがはじめ)

御連歌始(ごれんがはじめ)　初連歌(はつれんが)

[illegible]　寛永五年正月二十日より江戸城内にて御嘉例の連歌行はる。この時の發句は一松にみむ八百萬代の春の色——法橋昌琢——としたるよし。これより松を發句にする例あり。而して承應年間に至りて正月十一日に改めらる。新年始めての連歌の會なれば、御連歌始め、初連歌等とも云ふ。【参照】宗教　熊野連歌始くまのれんがはじめ　東照宮連歌始とうせうぐうれんがはじめ

例句

江戸城連歌始

燭剪りのひかへて連歌始かな　冬葉（懸葵）

年々に松の連歌の始かな　琅玕（同）

初日拜む（はつひをがむ）

季題解説 元日の初日の出を拜すること。元日の朝人々高地に登り、又は海濱等に出でて拜む習慣あり。伊勢神宮に詣で、二見浦の初日の出を拜むことなど近年專ら盛んに行はる。**參照** 天文―初日（はつひ）

例句 初日拜む

吉備眞備の社に初日拜しけり　十框（十框句集）
杉叢に初日拜みぬ峰社　松洞（松洞句集）
初日拜む我等の外に人あらぬ　十二星（鐵氷集）
烈風の中の初日を拜みけり　柏花（現代俳句大觀）
初日の出拜すにあがる海の鳥　青祇（同）
島に住んで初日大きく拜みけり　蓑雪（昭和模範句集）
滿ち潮を染めし初日を拜みけり　竹葉（同）
拜む間に海をはなれし初日哉　いろは（同）
潮湧くあまねき初日拜みけり　小蛄（懸葵）

拜賀式（はいがしき）

季題解説 一月一日、全國諸學校に於て職員生徒一同參集して、兩陛下の御眞影を拜し、君が代の國歌を奉唱、教育勅語を捧讀して拜賀の式を行ふをいふ。

例句 拜賀式

校長の鬚の白さや拜賀式　玉樹（同人）
拜賀式四山の雪の晴れにけり　冬葉（懸葵）
紫の幕に出入や拜賀式　撲天鵬（同）
拜賀式村の長者も並びけり　同（同）

初國旗（はつこくき）

季題解説 一月一日、新年の門毎に國旗を掲揚するを初國旗といふ。

例句 初國旗

松籟のひそまる曉や初國旗　一珍（懸葵）
雪の影日にかゞよふや初國旗　鶯竹里（同）
初國旗港に並ぶ繫り船　枳南（同）

若水（わかみづ）

井華水（せいくわすゐ）　初水（はつみづ）　一番水（いちばんみづ）　福水（ふくみづ）　若井（わかゐ）　井開（ゐびらき）　包井開（つゝゐびらき）　若水桶（わかみづをけ）

古書校註
【御傘】若水、立春なり、元日にはあらず。（一）
【山之井】去年御生氣の方の井を點して蓋をして人に汲せずして、立春の

日主水司（二）内裏にたてまつれば、朝餉にてこれをきこしめす。年中の邪氣を除くといふ本文侍るなりと年中行事歌合に見えたり、これをつゝみ井ひらくともいふなり。春のはじめにくめば若水と云にや。又世諺問答に云ふ、わたくしにも此日は井花水とてあらたにくみたる水を飲事侍にやと侍り、これ立春の事なり。在家には年男といふもの元日の早天に井の水を汲しを若水とて手水などにぬるめて用ひ侍りし。されど打まかせては立春の事なれば其句によりて時節を定侍るべし、是貞徳說なり。連歌に若水之目といへど俳諧には不用也。（三）

【公事根源】　荒玉の春たつ日是を奉れば、わか水とは申にや、（四）これは年中の邪氣を除くといふ本文ある故也、云々。

【江次第】　立春の水（五）を供する事、舊年御生氣の方の人家の井を封じて、一たび之を用ひて後廢して之を用ひず、御厨子所（六）より臺盤所（七）の女房に付して、之を朝餉に供せしむ、土の高坏（八）の上に折敷（九）を置き、大土器に立春の水を盛り、折敷に居ゑて之を供す。陪膳（一〇）之を高坏の上に居ゑ一度御飲罷て之を撤す。

【本朝食鑑】　今堀井と稱するもの有り、能く地中水脈の好處を察し之を鑿る、井を成す其の淺深は水脈に據るなり、時ならずして初めて汲むを新汲水と曰ふ。若人既に之を汲みて後之を汲むは新汲水に非ず、平旦第一汲を井華水と曰ふ。

【嘉祐本草】　新汲の水邪を却け、中を調へ熱氣を下す、宜しく之を飲むべし。

【日次紀事】　元日の朝、諸家新に井水を汲む、是を若水と稱す（一一）倭俗若字を以て老弱の弱に代へて之を用ゆ。

【いつまで暦】　若水　年内立春なれば歲旦の句になる也、春の節分のときは歲旦の句にならず。（一二）

【新式】　若水　立春なり。（一三）

註（一）年浪草には御傘を引きて「若水立春なり、元日にあらずといへる意なり、今歲旦にも用ると見えたり」とす、栞草も亦然り。（二）主水司　元日節會の註を見よ。（三）季吟說は若水連歌には之を元日とし、俳諧には之を立春とすと云ふなり。（四）公事根源は若水を立春のものとするなり。（五）江次第にも立春の水とす。（六）御厨子所　御菜を供ずの註を見よ。（七）臺盤所（だいばんところ）臺盤を置く所、即ち膳を調ふる所。（八）高坏（たかつき）食物を盛る器。（九）折敷（をしき）食器を載する具、片木作りの角盆、上世は柀を折り敷きて器とせり。（一〇）供御を奉るときに伺候する人。（一一）紀事は元日を以て若水とす。（一二）此の說立春の前後により若水を或は歲旦とし或は然らずとす、蓋し獨特

の見解なり。（一三）鶯水は若水を立春とするなり。

季題解説 元日の朝新たに汲む水を若水と云ふ。この水にて雑煮を作り、初手水にも使用するを例とす。この水汲みを年男の役とし、この水にて沸かしたる湯を福沸しといふ。
又古は立春の早旦に汲みとりし水を若水と稱し、禁中にては、年末、御生氣の方の井に蓋し、人に汲ませず、立春に至りてこれを開くを包井開と稱し、主水司これを内裡に奉る。又若水を一名井華水と稱す。若水桶は若水を汲みこむ手桶をいふ。

例句

若水

若水に皺影笑ふあしたかな　杉風（杉風句集）
若水に鰹のをどるうれしさよ　其角（五元集拾遺）
若水に智恵の鏡を磨うよや　嵐雪（玄峰集）
若水や老をわすれてつゝ井筒　乙由（麦林集）
若水や花のつぼみの一釣瓶　蕪村（紫狐庵聯句集）
若水やされば滴も玉の春　百池（巴調集）
若水や升なき時の人ごゝろ　蓼太（蓼太句集）
若水やおよそ玉川猪のかしら　白雄（白雄句集）
若水や流るゝうちに去年今年　千代女（千代尼發句集）
若水のよしなき人に汲れけり　一茶（旅日記）
若水や冬は薬に結びしを　野坡（類題發句集）
汲初て若水分る隣かな　浪化（大三物）
若水になりてこぼるゝ筧かな　子規（子規全集）
若水や澄むを待ち合ふ門流れ　鳴雪（鳴雪俳句集）
灯ともして若水汲める隣哉　同（同）
若水や其源の神路山　露月（露月句集）
若水や冬木が丘に鐘の聲　青々（妻木）
若水も割貸し住居一の井戸　繞石（落椿）
若水を汲めば手桶に碎けゝり　稻青（年刊俳句集）
若水や寒雉が釜に一杓子　橡面坊（深山柴）
若水や庵に氷らぬ池一つ　五空（五空句集）
若水のけむりて見ゆる靜かな　鬼城（鬼城句集）
若水や春立つ神も供御の上　碧梧桐（最新二萬句）
若水を汲む天神記ゆかりの井　天郎（東岡）
若水や銀河と酌めば桶躍る　櫻磈子（日本俳句鈔）
帝井に若水汲むや佐渡ヶ島　未央（續春夏秋冬）
若水を汲むや南の大河にて　鶴夢（同）
若水や井焉立ちそふ枯尾花　佛丈（枯野）
若水の桶に沈みし穂長かな　青黄（かりがね）

若水

若水や雪の井桁に湛へ澄む　八重櫻（明治新俳句集）
若水や草履に淺き野路の雪　寒樓（同）
若水や茜さしたる東山　唖蟬（同）
若水や苔に埋るゝ庵の井　古泉（同）
若水のうす紫に澄みにけり　青丘（昭和模範句集）
若水や鵯の下りゐる霜の畑　苔斧（同）
若水の釣瓶應へし深井かな　俳禪寺（同）
若水や井筒の石の苔の青　鶯池（鶯池句集）
若水やひとり世に住む歌法師　三亥（明治一萬句）
若水や誰汲みそめて捨氷　紫々（同）
若水やしつへついの釜の中　樂南（同）
錢出して若水買ふや舟住居　青嵐（同）
若水に顏映し見る女かな　玉鬼（同）
若水や木の香ゆかしき筒り桶　紫子（年刊俳句集）
若水や葉にすなる常水壺　濤子（同）
若水や檜の香を桶の遣ひ初め　松宇（同）
若水を山井のもとの朝月夜　滄海龍（同）
若水や懸樋を走る小鶺鴒　木雨（同）
若水や塗の手桶の杉柄杓　圭岳（同）
若水やそゞろにおもふ五十鈴川　默興（續紅調集）
若水や神矛立てし泉にて　四絃朗（現代俳句大觀）
若水やかそけく澄める松の琴　蛙衣（懸葵）
若水を汲む竹取の翁かな　鶴象（同）
若水や日出づる方に雪の山　三幹竹（同）
若水や霜の門井の森湛る陽　句佛（同）

井華水

叢の穗に北斗輝き井華水　露月（露月句集）
汲みこぼす蒔草青し井華水　鶯池（鶯池句集）
大海に一勺を汲む井華水　田士英（最新二萬句）
むら竹を隔るゝ闇や井華水　三豆（寿　嵐）
井戸開く滴る音や井華水　鳴々子（昭和模範句集）
錚杉の朝雲白し井華水　宗軒（懸葵第一句集）
木々覺ます風音や汲む井華水　亞浪（懸　葵）

初水
一番水

初水に轆轤の音の若き哉　元麗（大　三　聲）
醒ヶ井や春一番の水湛ふ　山梔子（明治一萬句）
賣茶翁春一番の水汲みぬ　射石（最新二萬句）
最合井の一番水を汲みにけり　九品太（同）
水のひゞき春一番の釣瓶哉　里石（同）

福水

福水や父祖代々の塗手桶　一始（同　人）

若井　若井汲今や東の初餉　旦茂（大三物）
　　　若井汲今朝や御製の様ならん　鳥水（同　）
井開　橋下井蔭井も開きけり　田士英（ナガサキ）
　　　井開や曉の星數ふべし　北涯（俳人北涯）
　　　井開の大跨に雪三尺かな　鶯池（鶯池句集）
　　　井開や竈の神の灯をうしろ　夕村（新春夏秋冬）
　　　井開や藪の明神の氏子衆　雪人（最新二萬句）
　　　井開や吹雪の中を四方の人　松亭（懸葵）
若水桶　雪に置く若水桶に旭かな　雨渓（明治新俳句集）

【參考】元日に清泉を汲んで若水といふは、若がへりの水の義で、支那の不老不死の藥に象つたもの。我が國では古く變若水（ヲチミヅ）と言つた。續日本紀元正天皇養老元年の詔に、養老の泉を汲んで新年の醴泉とせよとあるは即ちその謂である。後世弱水とも若水とも書く。

掛鯛（かけだひ）　懸鯛（かけだひ）　睨鯛（にらみだひ）　包尾の鯛（つゝみをのたひ）

【古書摘註】【栞草】〔紀事〕元日小鯛魚一雙、藁索を以て兩喉を結び、齒朶並由都里葉（ユヅリハ）を挿て竈の上に懸けて是を掛鯛と稱す、六月朔日に至て和（ア）羹にして之を食す。云々　かくのごとくする時は瘟疫咳病諸の邪氣を辟るなり。

【本朝食鑑】本朝歳の始め毎に、千門万戸、雙青松、雙青竹をして相對して立てしむ。上に向て横に注連繩を引て中間に干鯛一尾、海老煮紅一筒及橙橘串柿昆布海藻裏白讓葉等の數品を懸く　官家には大干鯛を用ゐ、其餘は中小意に任せて之を用ふ、號して懸鯛と曰ふ、是れ壽を祝するか、邪を辟るか、未だ何の然ることを知らず、但た我が邦の舊き流例なり。

【いつまで暦】かけはつがひをいふ、（三）一枚の事なり。

註（一）官家　天子又は皇室。（二）此說如何にや。

【季題解説】元日、掛鯛とて小鯛二尾を藁にて結び、齒朶・楪を挿して竈の上に懸けおく習俗あり、六月朔日これを下し、羹にして喰へばよく邪氣を祓ふといふ。吊りさげたる時互に相對するが故に睨み鯛といひ、又尾を包むが故に包尾の鯛とも云ふ。

【例句】
掛鯛　かけ鯛やいふ事なくて口と口　泥足（類題發句集）
　　　懸鯛やにらみあうても憎からず　燕子（新撰題發句集）
　　　懸鯛や相かはらずに向ひあふ　千尺（同　）
　　　掛鯛の影や柄杓のさゝら波　紅葉（紅葉句集）
　　　掛鯛の眼に煤たまる日數かな　橡面坊（深山柴）
　　　掛鯛や古き緣の長崎屋　十二星（鏤氷集）

遠方の年賀殘りて今日も雪　水巴（同　）
子等殘し來て日暮れたる年賀哉　久女（大正新俳句）
雪沓の御僧ゆゝしき年賀哉　刀水（年刊俳句集）
畑をめぐりて菊枯るゝ戸に年賀哉　句佛（我は我）

年の賀
年ゝ賀やいふ門なみのかざり哉　笑水（大三物）

年始
御年始の返事をするや二階から　一茶（一茶句帳）
年始して草の戸ぼそに戻りけり　梓月（年刊俳句集）
春は立つよこしまもなき年始哉　貞繼（毛吹草）
のたうまく禮に立出る年始哉　宗因（梅翁宗因發句集）

年禮
年禮に少しの野路の氣晴れたり　子東（續明烏）
年禮や眉ゑがきたる八代目　鳴雪（鳴雪俳句集）
年禮の常陸山らし二人挽　同（同　）
年禮や我れより先に鳴雪翁　虛子（虛子句集）
年禮や上野の寺に友二人　同（同　）
年禮の厨に酒器を鳴しけり　守水老（守水老遺稿）
年禮の出て元日の如く行く　溫亭（溫亭句集）
年禮の思ふ半ばを日暮れたり　九寸兒（續春夏秋冬）
年禮の名刺に古き知人哉　可山（明治新俳句集）
年禮の慶子を見たり夜半亭　碧童（明治一萬句）
年禮や竈に諂ふ古男　北涯（俳人北涯）
年禮や飲仙會に遲れ馳せ　淺茅（最新二萬句）
年禮や山茶花垣の奥ふかく　蝶衣（蝶衣句稿）
年禮や朝から人の老槐居　稻青（懸葵）

年の禮
たひかけや一日かゝる年の禮　不斷（我庵）

年頭
年頭や上の町から千鳥かけ　云比（皮籠摺）

初禮
初禮や富士をかさねて扇狩　枳風（虛栗）
砂敷の都の聲や禮雪踏　利次（雜巾）
なかれ哉下盃の四海初御禮　一平（同　）
初禮や女夫つれだつ里つゞき　雲塵（大三物）
初禮の聲迄和歌の姿哉　友和（同　）
門々や口上の一路禮はじめ　有中（俳諧三部抄）

正月禮
繼合はば正月禮を山ざくら　調和（俳林不改集）

春の禮
人待て跡に云けり春の禮　湖嵐（大三物）
春の禮己己の心かな　忠之（同　）
横町や道服著たる春の禮　晚嵐（同　）
閑人やいつまで殘す春の禮　遠水（月令博物筌）

門禮
門禮や手毬を袖にかざしけり　富世妻（大三物）
門禮や草の庵にも隣あり　子規（子規全集）

初禮者

いたく醉うて車に眠る禮者哉　丁堂（門出俳句）
馬で來し禮者や馬をかへしけり　小蛄（[illegible]萬句）
淺草寺鳩に豆やる禮者哉　癖三醉（癖三醉句集）
經紙ぶる主や居ると禮者哉　不喚樓（不喚小什）
松ケ根ゝ雪踏み去ぬる禮者哉　吟波（炬火）
門を入れば橙笑づる禮者哉　黑洲（懸葵）
遠く至る舊暦禮者垂氷落つ　蘸江（靑雲抄）
下馬先へ駒乘はなし初禮者　睦水（寶暦九年歳旦帳）
松根に腰をすりけり初禮者　柳架（安永四年歳旦帳）

門禮者
賀客

八日や近江は雪の門禮者　句佛（我は我）
的かけて賀客に弓をぬかせけり　五空（五空句集）
賀客送り出て掃捨かけず供ならん　六花（[illegible]烟）
母人に賀客のひまの置炬燵　寸七翁（寸七翁句集）
喪にありて賀客來らず梅白し　ゝ巴（春夏秋冬）
賀客去つて茶間たりや爐の助炭　車春（同人俳句集）

年始客
年賀客
年賀狀

替へし馬見せてゐるなり年始客　蛄汀（同）
年賀客遠をつくりて歸りけり　殘紅（昭和一萬句）
鐵齋の古勾流や年賀狀　紫影（かきね草）
年賀狀深雪にぬれて屆きけり　巨籟（ホトトギス）
賀狀書いて硯の山を散らしけり　自得（同）
年賀狀書くに使ひなき酒杯かな　南天樓（現代俳句大觀）
年賀狀書々障子や水仙花　小蛄（最新二萬句）
相知らず句に知る人よ年賀狀　十二里（[illegible]集）

賀狀

筆硯の濡れて賀狀すみて猶　有衛門（日本俳句鈔）
水引にはねて仕舞ふ賀狀かな　烏不關（同　古鳥）
世に出でゝ相見ぬ妹に賀狀かな　淺花（大正新俳句）
ホ句一つあり一名の無き賀狀かな　虛吼（虛吼句集）
俳諧に生くとも書ける賀狀かな　寸七翁（寸七翁句集）
一夜泊りし高野の宿の賀狀哉　一志（[illegible]）
片假名の幼きものの賀狀哉　沙汀（現代俳句大觀）
ひとつ〳〵打返し見る賀狀哉　他石（同）
大垣やいつか賀狀も絶えにけり　挿雲（昭和一萬句）
一年や賀狀のはしに母のこと　秋峻（同）
新婚の二人が書きし賀狀かな　斗山（年刊俳句集）
結婚の日にかへし書く賀狀かな　天山（年鑑俳句集）
子には子の我には我の賀狀哉　吸花（懸葵）
妻へ來し賀狀交りぬ二三枚　凱風（同）
あるは賀狀の片假名ばかり書きにけり　句佛（我は我）

年始状
忘れざる更科人や年始状　青々（妻木）
大江山生野の奥や年始状　松濤樓（新春夏秋冬）
なつかしき人に無沙汰や年始状　梓月（年刊俳句集）
年守りて酌みかはしゝが年始状　潮雨（紅鳥集）
草の戸や暮れてひとひら年始状　默興（同）
伊勢へ送り伊勢より來るや年始状　來布（最新二萬句）
うちたえて何より書かむ年始状　梓雪（梓雪句集）
年始帳
米値段ばかり見るなり年始帳　一茶（一茶句帖）

履新之慶（りしんのけい）　履端之慶（りたんのけい）　改年の慶（かいねんのけい）

【古書校註】
【山之井】履端之慶　元日に人を賀する詞なり。書言故事　履新之慶　是も正旦に書をもて人を賀する詞也。書言
【栞草】○履端【左傳】先王の正時たるや、端を始に履み正を中に擧げ、餘を終に歸す。元日を云也、○履新之慶　季吟か曰、履端は端を履むなり、あらたまり行く年のはしをふまへて賀する心なり、ふまへるに領する心か、履新も同じ心にて、改年の御慶などに同じ。
【唐書禮樂志】皇帝群臣の朝賀を受く、曰く、元正首祚、景福維新なり、惟陛下天と同休、臣等謹で千秋萬歳を上ると。制答(一)に曰く、履新之慶、卿等と之を同うす。云々
【新式】改年の御慶　改はあらたまるなり、あたらしきとしの御よろこびと人をいはふ詞なり。履端の慶　りたんははしをふむなり、あらたまりゆくとしのはしをふまへたるをいふこゝろ歟。世話に兄をさして、かしらをふまへたりといふのたぐひなるべしや。（覆新（二）の慶　これみな正月をいはひていふことばなり。
註　（一）制答　天子の御答。（二）覆新　履新の誤なり。

【季題解説】履新之慶・履端之慶共に元旦、履端は端を踏む也。あらたまりゆく年の端をふまへて賀する心にて、改年の御慶といふに同じ　【季題】年賀（ねんが）

禮帳（れいちやう）　禮受帳（れいうけちやう）　門の禮帳（かどのれいちやう）

【季題解説】古は年賀の時、武家、町家共に玄關先又は店先に机一基を据ゑ、筆硯を添へ、これに奉書二ツ折にして水引にて綴ぢたる禮受帳を備へおき、年賀に來りし人々の記名用とせし習慣あり。これを禮帳、又は門の禮帳ともいふ。　【季題】名刺受（メイシウケ）

【例句】
禮帳
禮帳に紅葉の花のこぼれけり　青々（妻木）

禮帳の文臺も庵は見づくし　四明（四明句集）
禮帳や四五枚とづる長水引　鬼城（鬼城句集）
禮帳の表紙畫ありと誰も見て　鵜平（日本俳句鈔）
禮帳におどけたる句を書かれけり　虚子（ホトトギス）
禮帳と梅の枯枝や塀の中　逸夢（明治新俳句集）
禮帳や酔筆既に午下り　北斗（明治一萬句）
禮帳や筆始めなる我が名恥づ　牛喆（懸葵）
禮帳や同じ門下の見知り書き　狐村（同）
禮帳の襟しぼりこぼれけり　三幹竹（同）

名刺受（めいしうけ）

【季語解説】三ケ日の間、賀客の名刺を受くるために、玄關・店頭・戸口などに備へ置く器を名刺受といふ。【參照】禮帳（レイチヤウ）　年賀（ネンガ）

名札受（なふだうけ）

【例句】名刺受

雀など啼きしづけさや名刺受　龍雨（龍雨俳句集）
草の戸や柱に結ぶ名刺受　一松（獺祭）
古錦襴貼けるもさびし名刺受　梨葉（梨葉句集）
はや〳〵の人のなつかし名刺受　同（同）
名刺受雪降り込みて濡れにけり　白水郎（白水郎句集）
大徳寺庫裡深々と名刺受　誓子（ホトトギス）
名刺受日あたりて門閉まりゐる　水郷（現代俳句大觀）
村鍛冶や鞴の上の名刺受　土州（昭和一萬句）
名刺受年に明るき玄關哉　北江（昭和模範句集）
敷臺や松の蒔繪の名刺受　松宇（松宇家集）

禮受（れいうけ）

【季語解説】三ケ日の間、玄關先にて、年賀人の祝詞に對し應酬することを禮受といふ。又その人を指す場合もあり。【參照】年賀（ネンガ）

禮者受（れいじやうけ）

【例句】禮受

禮受やよき衣裳く置炬燵　虚子（虚子句集）
禮受の人恥かしや筒井筒　同（同）
禮受や肥りそめたる妻夫　飄石（年刊俳句集）

禮者受

あそび妓火桶圍みて禮者受　夜半（ホトトギス）

屠蘇祝ふ（とそいはふ）

【季語解説】

屠蘇（とそ）　屠蘇酒（とそしゆ）　屠蘇袋（とそぶくろ）　屠蘇の香（とそのか）　屠蘇の醉（とそのゑひ）

屠蘇は年首に酒又は味醂に浸して飲む藥酒なり。白朮・肉桂・防

年酒（ねんしゆ）　年酒祝ふ

季題解説 新年、廻禮の賀客に膳部を出して一盞を進むることをいふ、又單にその酒を年酒ともいふ。〔參照〕屠蘇

例句 年酒

詩あきんど年を貪る酒債かな　其角（五元集拾遺）
いざくまん年の酒屋の上たまり　同（同）
蜜柑切り一絲しき串の年酒哉　守水老（守水老遺稿）
歸省して母につがるゝ年酒かな　默禪（ホトトギス）
逢へばまた元の主從や年酒酌む　常山（同）
お年酒や田視畑視むかへ來て　六々（同）
春永と迯げて歸りし年酒かな　月斗（同人俳句集）
いち早く年酒に頰を染めにけり　初子（同）
餅に寄る人嘲りつ年酒哉　山牢（同）
おさがりに心落ちつく年酒哉　閑凡夫（閑古鳥）
打ちつゞく年酒疲れになりにけり　嵐翠（同）
鯛の日のかゞやいてゐる年酒哉　春甕（現代俳句大觀）
角力來て年酒の膶に逍はれけり　東春（同）
年酒寒したゝき牛蒡と田作りと　春虎（同）
ホ句の題すでに出て居る年酒哉　朱斤（昭和一萬句）
神農の幅を前なる年酒哉　燕里（同）
年酒飮め父とて君が來るものか　雀朗（同）
大杯のあと覺なき年酒哉　圭岳（年刊俳句集）
卓打つて王民を說く年酒哉　後月（同）
客相次ぎ主人かはらぬ年酒哉　烏不關（青嵐）
呼びそこれて子の名皆呼ぶ年酒哉　九萬里（獺祭）

[illegible]

海渡り來し荷の中に年酒哉　三竒竹（懸葵）

雜煮（ざふに）

雜煮祝ふ　齒を祝ふ　雜煮餅　雜煮物　雜煮膳　雜煮箸　雜煮椀　雜煮腹　雜煮賣

古書校註

【栞草】〔増山井〕雜煮は餅に大根・芋・蹲鴟（イモガシラ）・昆布・（一）打あはび・（二）いりこ（三）・菘（四）等を加へて羹とし喰ふ。多種を交へ煮る故に雜煮と稱するか、是を略して羹を祝ふと云ふ。

【いつまで暦】雜煮　いりこ・くし貝・むすびこぶ・大こん・芋頭・これを祝ふといへば元日也　かんを祝ふ、羹（アツモノ）を祝ふなり、雜煮の事。

【山之井】　雜煮いはふ　かんをいはふいものかみ　むすびこぶ　ひらき牛房　ひらきまめ　ふとばし　雨のもの小かはらけ也。

【日次紀事】　元日の朝、良賤雜煮を食ふ、又神煮並に飯汁を小土器に盛りて、神佛に供し又竈並に井を祭る。凡そ今日良賤調味多く鯛魚・鯖魚・鰯魚・數子・蕪菁鼠・串石・決明並牛房・大根等を用ふ。云々。

【事文類聚】　唐の立春の日、春餅、生菜を春盤（五）と號す、齊人月令に曰く、生菜を食ふは、新を迎ふの意に取る。

【年齋拾唾】　元朝餅の事、汀州嘉靖丁亥志に曰く、汀國の人は餅を春て賓客を餐す、貧き人は市に買求めて節會になすと。云々。

註（一）大根、芋、いもがしら、結昆布　皆別項に出づ。（二）打あはび　熨斗の條を見よ、のしあはび。（三）いりこ・ほしこ　なまこの腸を去りて煮て乾したるもの。（四）蕪、たらな　葉は蕪に似て寒氣に耐ふ　（五）春盤。別項を看よ。

季題解說　正月三ケ日、毎朝餅を羹にしたるものを、神佛に供し、一家擧つて膳につ いて祝ふ。いろ〳〵のものを混入して煮る故に雜煮といひ、又羹を祝ふともいふ。雜煮の作り方は國々によりて異る風あり。詳しくは左の文章を參照すべし。

一 諸國雜煮物語

本山　荻舟

雜煮の箸を執る前に、先づ私達は祖先に對して、感謝と禮讃との眞ごころを捧げなければならぬ。あらゆる年中行事はさうであるが、殊に歳の首において行はるゝいろ〳〵の仕來りには、最も意義の深いものが多い。否その悉くが尊い教訓であるといつて差支へない。中は迷信に類した、形式的な習俗に過ぎぬやうに解釋する者が多いのは、解釋し得ない者の至らないために外ならぬ。

現に蓬萊臺に載せられる食摘物である。今こそ床飾りの一種として、ほんの形式に備へられるに過ぎなくなつてゐるが、昔は實際の料として、家族が食ひ、客にも勸めたものである。そして取合せる材料は、「米」「昆」「菓」を主として、これを天地人三才に象る、米は穀類の代表で田の物、昆は水首の義で海の物、菓は果實の意で山の物、即ち「山」「海」「田」の物を網羅し、しかも自然のままを用ひて人工を費せしものを用ひず、これ正月の料としては、不易の種々を集むる慣ひといふのである。日本人の食卓は、これが根源でなければならぬ。

こゝから發した正月料理の中、重要な地位を占めるものが雜煮である。

「貞丈雜記」に、雜煮の本名をほうぞうといふ、氣を益し、中を温め、小便を縮め、大便を固める效能がある。本草綱目にいはゆる臟腑を保養するの意で、保臟の文字に該當するとある。別に烹雜とも書くのは、調理の方からの當字であらう。禁内で昔かんと呼んだのは、羹即ちあつものの義である。江戸では昔は新吉原に限つてかんと呼び、お羹を祝ふ、お羹箸などといつた。その影響を受けた淺草の市で、雜煮箸のことをお羹箸と呼んで賣つたものだが、今は跡を絶つたやうだ。

○

雜煮のつくり方は、諸國によつて趣を異にし、又同じ地方でも、家々に家風があり仕例があるので、一概にはいへないが、本意は自然食の尊重と、營養知識の普及とにあるのだから、各地方に生産する材料を按配する間に、おのづからローカル・カラーが現はれたものと見るべきである。そして大づかみに區分し得るのは、切餅を燒いて用ふる關東と、丸餅を茹て用ふる關西との二大別であらう。

餅は望に通じ、丸いのを以て本義とする、鏡に擬せられるのもこれが爲だといふのと、糯米は粳米に比して粘りが強い、最も粘りの強いものはいいもちの稱である、それになぞらへた、だといふのと二說あるが、いづれにしても賀儀用の餅が、丸いのを以て本體とすることは明かだ。これを福のものとして、ふくでんともふくでとも呼ぶ地方があり、内裏では福生菓と呼ばれたといふのも、丸くふくらかなるの意で、ふくたみ餅の言葉もある。文化の古い關西地方が古風な丸餅を用ひるのに對し、關東で用ひる切餅は、後に生れた一種略式、餅花が本になつたのらしい。

餅花といふのは、餅を薄く押し伸にして、いろいろの形に切つたもの、今三月の雛祭に用ひられる菱餅の如きも菱花びらと名づけて、もとはやはり正月の料であつた。宮中でも中古式微の頃には、菱花びらを炙つて雜煮に代へられたとあるから、略式用であつたものにちがひない。

江戸以來東京の雜煮は、主として清汁仕立であるが、關西・四國・九州地方には、味噌仕立にするところが多く、また家によつて、清汁と味噌と汁粉仕立とを交互に用ふるところもある。東北地方の一部には笹の葉に包んだ笹餡を入れて笹雜煮にする風もある。

五臟を養ふ保臟の意味で、雜煮はもと必ず本膳の初めに供せられた。上戸黨には一寸迷惑な話であらうから便宜上雜煮に食方なるものが定められ、上置の飾物だけを食べて餅には箸をつけなくともよく、汁はむしろ吸ふものでないから、最初から汁は入れぬといふ作法もできた。食事としては退轉の第一歩だが、當時の饗應なるものは、本膳式そのものが既に形式に墮し、徒らに品數の多いことを以て能とする風があつたから、受ける方でもその積りで、形式的に箸を執つて、滿腹を調節したものと

見える。

雑煮に用ひられる材料は、原則としてその土地に産し、手近に求められるものといふのだが、大凡の標準へ、古文獻から拾び出して見ると、その間にまた自ら共通するものがあるのが面白い。

▽「庖丁聞書」——雑煮上置、串鮑・串海鼠・大根・青菜・花鰹。下盛に里芋、中に餅。また上置に串柿・搗栗・昆布を添へるは精進仕立也。

▽「料理物語」——雑煮は中味噌また清汁にても仕立つ、餅・豆腐・芋・大根・乾海鼠・串鮑・開鰹・莖立(青菜)など入れてよし。

▽「皇都午睡」——江戸では雑煮も上方の莖立にて、菜を入れたる清汁也、餅に平餅なく、大方切餅にて、味噌雑煮を大阪雑煮といふ。

▽「日本歳時記」——昆布。打鮑・乾海鼠・牛蒡・薯蕷・松・栗・鰯・大根・芋子・荒布。

一「伊勢家儀式雑書」——伊勢守貞宗朝臣相傳、餅・丸鮑・乾海鼠・焼栗・薯蕷・里芋・大豆・汁たれ味噌。

一「雑學集」——上置、串鮑・串海鼠・大根・青菜・花鰹、以上五種。下盛、里芋。

一「守貞漫稿」——京坂戸主の料には、必ず芋魁を入れる、大阪は味噌仕立、子芋・焼豆腐・大根・乾鮑、丸餅にて[illegible]　江戸は切餅を焼き、小松菜を加へ、鰹節を用ひし醤油の汁なり。

なほ擧げれば限りがないが、乾鮑・乾海鼠等は古来日本の特産として、延喜式以降、諸國貢獻の主位を占めた、保存の食品であつたと同時に、文化の中心が、山國の京都であつた關係から、特に乾物が珍重されたものと推測できる。山國である點と共に、日本中部の最大國である信州邊で、菜・芋・昆布・乾鮭・串海鼠・串鮑・豆腐・焼栗・大根・干瓢・婦子・花鰹に、餅を加へて以上十三種といふ、一寸おぼえきれないほどの材料を揃へたのも皮肉といへば皮肉である。

尾張・伊勢地方で、蛤を上置にするのは、名物であるから當然だが、これに纏まる傳説は、南北朝時代に發してゐる。後醍醐天皇の皇子宗良親王、その御子尹良親王、御公子に代其に戰陣に殁せられた方だが、尹良の御子良王君は後醍醐天皇の曾孫に當られる方で、賊難を尾張の津島に遁れたまふた時が、恰も永享八年正月元旦に、蛤の吸物、大根の輪切、田作の膾で、雑煮を祝はせられたところ、この年から御運が日出度かつたとあつて、いはゆる四家七黨の名家から起り、尾張・伊勢・美濃の風になつたといふのだ。津島は名古屋の西四里、桑田と伊勢の桑名との間に、三角形をなす地點であるから、蛤も大根もともに名物、最も合理的である。

徳川氏發祥の三州邊では、餅・蕎・結昆布・串海鼠・串鮑・鰹といふので、雑煮の方は普通だが、將軍家及び三家では、正月三ケ日の間、麥飯

雜煮

子等孫等堂に溢れし雜煮哉　露月（露月句集）
餅莚雜煮に減りし幾並び　紫影（かきね草）
人顏のほのぼのしろき雜煮哉　青々（妻木）
浦人の雜煮の膳にさす日かな　癖三醉（癖三醉句集）
濁りしは地となりしより雜煮哉　五空（五空句集）
孫五人小さきを膝に雜煮かな　四明（四明句集）
雜煮食うてねむうなりけり勿體な　鬼城（鬼城句集）
母なくて面々に食ふ雜煮かな　溫亭（溫亭句集）
昆布入れて海の香の添ふ雜煮哉　墨水（墨水句集）
おどけいふ口に喰はれし雜煮哉　極浦（殘紅）
雜煮喰うて腹に餅塊太りけり　蛇湖（蛇湖句集）
開山の像にも捧ぐる雜煮哉　守水老（守水老遺稿）
山住の雪を語りて雜煮かな　橡面坊（深山柴）
雜煮捧ぐ我をさそひし女の童　百花產（百花產遺稿）
お雜煮や東京に出て兄の家　紫人（春夏秋冬）
主人たり妻たり雜煮祝ひけり　觀魚（續春夏秋冬）
灯を消して明くる惜しき雜煮哉　淺茅（續春夏秋冬）
天恩に狃れて勿體なき雜煮かな　つしほ（年刊俳句集）
親一人子一人の雜煮祝ひけり　田水稻（同）
大神ををがみて祝ふ雜煮かな　桃蹊（紅潮集）
藁焚いて清くめでたき雜煮かな　潮雨（同）
新婦の世帶かしこき雜煮哉　碧梧桐（明治俳句）
下女下男雜煮の席に並びけり　蓼村（同）
雜煮の座已れがつきて定まりぬ　向童（大正新俳句）
雜煮祝ふ灯の輝きや古柱　樹人（同）
梅の白さ見つゝ雜煮をかへにけり　春草（同）
雜煮ゝ大鍋の蓋を吹きあげぬ　せん女（同）
強ひらるゝたゞ三椀の雜煮哉　鶯池（鶯池句集）
拾ひ子の育ちて嬉しき雜煮哉　秀竹（最新二萬句）
芋の頭ふるさき鄙の雜煮かな　露石（同）
國栖の里は鮎香ばしき雜煮哉　翠竹（同）
我が家例三角餅の雜煮哉　散木庵（同）
武家古式習ふ心や鹽雜煮　句王（同）
今昔の人對ひ合ふ雜煮哉　秋竹（同）
雜煮すんで新聞見るや雨明り　北江（草上俳句集）
さゝ鳴きを覗く子と待つ雜煮哉　水巴（現代俳句大觀）
一椀をかへし雜煮やあき心地　蛇笏（昭和一萬句）
一片の海苔の綠や替へ雜煮　思月（同）

子供なき淋しさ馴れて雜煮哉　紫江　（現代俳句大觀）
子の多き喜びにある雜煮かな　靜古　（大正俳句選）
此の年もしたゝか雜煮まゐりけり　飄亭　（昭和模範句集）
祖父となり祖母となりたる雜煮かな　野鳥　（明　鳥）
直ぐ下げる雜煮を藏の戸口哉　樵青　（同人俳句集）
盃を置きぬ雜煮は石の如　四方哉　（同　）
男世帶五年つゞけし雜煮哉　滴翠　（同　）
食ざかり雜煮の餅を三四十　山扇　（同　）
食ひ過ぎし雜煮に老の謠かな　丁堂　（明治一萬句）
我が春の雜煮も山家日記かな　秋峻　（同　）
歸順して日出づる國の雜煮かな　作郎　（同　）
獨住み土鍋に殘る雜煮かな　活潭生　（同　）
すき腹に屠蘇醉腹に雜煮哉　鴨村　（同　）
老て尙廉頗將軍が雜煮哉　蝶哉　（同　）
母います時の如くに雜煮かな　虛明　（壬申句鈔）
大雪の晝燭し雜煮祝ふなり　竹の門　（竹の門句集）
孫一人皆くひまけし雜煮かな　默興　（閑古鳥）
箸先に靑みはなれぬ雜煮哉　天麓　（同　）
食客の三千人に雜煮かな　左右郎　（明治新俳句集）
宗鑑の髯に滴る雜煮かな　華村　（同　）
農に歸る第一年の雜煮かな　笠城　（年刊俳句集）
古里に父母在す雜煮かな　播水　（同　）
孫が世を老のよろこぶ雜煮哉　牛詰　（靑　嵐）
松もちし匂ひ手にして雜煮かな　三千竹　（年鑑俳句集）
雜煮喰ふやあの子が居れば年幾つ　孤島　（懸　葵）
片假名を書くよになりし兒の雜煮　水棹　（懸　葵）

四八十歳を迎ふ

雜煮食ふに足る齒ありけり果報者　黑洲　（同　）
味ひて三日の雜煮惜しまるゝ　句佛　（我は我）
雜煮の間晴衣見せありく孫娘　同　（同　）

羹を祝ふ

味噌の香や羹祝ふなる近士の間　一青　（新撰題發句集）

雜煮餅

樂其樂、利其利

唯起てかん祝ひけりわれが春　大江丸　（俳懺悔）
福も壽もこめて祝ふや雜煮餅　古山　（安永六歳旦帖）
めでたさも一茶位や雜煮餅　子規　（子規全集）
寢たる子は起さずにあれ雜煮餅　月斗　（毎日俳句集）
僧堂や山と盛りたる雜煮餅　十框　（十框句集）
燒かすれば兒の焦しけり雜煮餅　無黃　（年刊俳句集）

雜煮餅　雜煮餅隠居の心妻知れり　挿雲（最新二萬句）
時めきし昔の膳や雜煮餅　李村（明治一萬句）
雜煮餅靜かに一つたうべけり　龍雨（龍雨俳句集）
雜煮物　法鼓せん今年はうまし雜煮餅　句佛（我は我）
きいふこそ雪菜分しか雜煮物　調和（俳林不改樂）
雜煮膳　もと〳〵の一人前ぞ雜煮膳　一茶（一茶句帖）
雜煮膳十人の子の順々に　繞石（落椿）
雜煮箸　二柱ふとしき末や雜煮箸　晨鷄（明和二年歳旦帳）
雜煮箸水引かけてひとり〳〵　鬼城（鬼城句集）
雜煮椀　盛形に松鶴もあり雜煮椀　酒人（寛曆九年歳旦帳）
今日買はんむぐらの宿の雜煮椀　淡々（淡々句集）
幼子や顏一杯の雜煮椀　古溪（年刊俳句集）
雜煮腹　野一道雪見ありくや雜煮腹　召波（春泥發句集）
野路一里吹かれあるくや雜煮腹　霽月（霽月句集）
雜煮腹留守の炬燵に晏如たり　繞石（落椿）
雜煮腹かゝへて行くや俳句會　月雄（明治一萬句）
雜煮腹鼎あぐるに足りぬべし　野風呂（大正新俳句）
雜煮腹に謠一番謠ひけり　圭史（現代俳句大觀）
雜煮賣　我庵や元日も來る雜煮賣　一茶（七番日記）

【參考】正月一日餅を炙き蘿菔・牛蒡・芋魁・昆布・豆腐等を混ぜて羹となす。親戚故舊來賀者に屠蘇酒を進め雜煮を供す。保臓・烹雜ともいふ。

門松

御門松　松飾　飾松　飾竹　竹飾　門の松　松の門　門の松
竹　松竹　門の竹　立松　松一對　飾木　初代草

【古書考證】【山之井】晴明簠簋内傳に胡日將來が塚のしるしをなぞふとあれど、世諺問答に松は千年をちぎり竹は萬世を契る物なれば年始の祝ひに用るよし一條禪閤（一）の御說仰ぎ侍るべき也。

【年浪草】簠簋の說又其所以あるべし。一書に云ふ、歳始家ごとに煮餅を食ふや、門に松竹を樹つるや、藁繩を飾るや、皆我が神國の遺風なり、相傳ふ垂仁天皇の時、大巳貴尊大田田根子命に誨へて曰、正月元日赤白餅を以て、吾荒魂

天照大神と祭らば、國中災無くして幸福續かんと。凡て節辰の祭、皆大田田根子命に始まる。此の命常に神に見えて人と談るが如し、故に利世祭禮習傳して行はる。云々。○紀事に云、凡そ新年の賀儀各々方土の異有り、一家の例あり、其の式様一ならず。惟家内の葦索(二)並門前の松竹は、夏夷(三)共に之に同じ、倭俗正月門前左右各々松竹一竿を建て、上に竹兩竿を横へ、其外面に昆布・果實等の物を挿む、名て門松或は立松と稱す。蓋し孟春の月、戸を祝ふの義乎、云々。○禮の月令集說に曰、戸は人の出入する所にして之を司る神有り、此の神は是れ陽氣戸の内に在り、春は陽氣出る、故に之を發す。○史記龜策傳に曰松柏は百木之長と爲す、而して門閭を守る。○松竹の日出度例は和歌に

古今　ときはなる松のみどりも春くれば今一しほの色まさりけり

後拾遺賀　春日山岩手の松は君がためちとせのみかは萬代そへん　能因法師

續千載賀　おなじくは八百萬代をゆづらなんわが九重の庭のくれ竹　後二條院

【栞草】「世諺問答」門の松立ること昔よりあり來れる事なるべし。松は千年を契り、竹は萬代を契るものなれば、年の始にいはひ用るよし。

【いつまで艸】江戸吉原倡家には松飾を後ろ前に立る。

註　(一)一條禪閤　一條兼良をいふ、號は桃華老人、最も博學にして公事根源・歌林良材・新玉集等有益の著書多し。(二)葦索(ゐさく)　別項を看よ。(三)夏夷　夏は聖人の國、夷は野蠻國。

季題解說　年の初に新年を祝ひて、家々の門前戸口に飾り立つる松、松飾りとも云ふ。後世竹をも併せて飾る、門の松竹といふ。竹のみなるを竹飾り、門の竹などと云ふ。松竹はいづれもその常綠をめでゝ、松は千年を契り、竹は萬代を契るものなれば、永久不易の象徵として建つること昔に變らず行はる。古は賢木を立てしこともあり、所謂飾り木といふはこれなり。初代草は門松の古稱なり。

實作注意　門松は新年を祝ひて門毎に建つる松を云ふものなれど、「門松立てる」「松立て」など詠む場合は前年の暮になれば冬季とすること忘るべからず。又宮中に於ては門松を建てず。これは元小家の汚れを隱蔽するために用ゐられたる遺風なるべし。又眞宗の寺院にても門松を建てず、信仰固き眞宗の門徒にてもこれを用ゐず。

門松も建てずに門徒物知らず　月斗

門徒の春松はしるしもなかりけり　慶之

の作あれど、物知らざるにあらず、宗義として立てざるにてと古人の句の存するにても知るべし。

例句

門松　門松やおもへば一夜三十年　芭蕉　(六百番發句合)

門松やうしろにわらふ武庫の山　鬼貫　(俳諧七車)

門松

門松や死出の山路の一里塚　来山（續いま宮艸）
折てさす是も門松にて候　一茶（七番日記）
門松もなみだをそゝぐものなるか　成美（成美家集）
門松は年神むかふしるし哉　祖丹（大三物）
御門松その立砂や比叡愛宕　忠房（同）
とかくして松一對のあした哉　移竹（五車反古）
門松に月を見る哉柴屋町　青々（妻木）
門松に藪鳥の來る暮近み　蝶衣（蝶衣句稿）
門松や鎮守のやぶを庵の前　五空（五空句集）
蹴鞠の國も門松の霞哉　櫻魂子（閭門の草）
門松や萬歳去つてちよろ來る　蓑堂（春夏秋冬）
門松や鶯の鳴く玉造り　薫水（續春夏秋冬）
門松や寛文よりの古廓　野風呂（ホトトギス）
門松・うちつけにある戸口哉　竹満（明治俳句）
門松のすこし伸びたる緑哉　雨青（懸葵）
門松の葉摺れも淋し夜の街　如月（同）
門松や旭眞向う開く門　東一紅（同）
門松や松葉落つる大覺寺　句佛（我は我）

松飾

おほむつや箱崎いきの松飾　宗因（梅翁宗因發句集）
いくしもにこゝろばせをの松飾　芭蕉（桑集）
飾松や遠山鳥のしだり尾の　杉風（杉風句集）
松飾伊勢が家かふ人は誰　其角（五元集拾遺）
行合の松もかたそぎかざり松　同（同）
元政の松もかざらず老が門　白雄（白雄句集）
我人の物とは見えず松飾　梅室（梅室家集）
松飾り二日立ぬに猫の戀　蒼虬（蒼虬翁發句集）
山や思ふ馬屋も猿も松かざり　斧芝（初便）
文敎師の胡椅暖簾や松飾り　四明（四明句集）
山祖松の木の間の松飾　古白（古白遺稿）
落葉埋むまゝの柴戸や松飾　明成（炬火）
山鳥の庭に遊ぶや松飾　橡面坊（深山柴）
扇折りて古き渡世や松飾　壽美平（青雲抄）
松飾日出づるまでの霜靜か　九品太（蟻葉第一句集）
大いなる門のみ殘り松飾り　虚子（虚子句集）
飾り松船並びゐて風強し　蘇三醉（蘇三醉句集）
越後屋の暖簾貫ひぬ松飾　著森（新春夏秋冬）
松飾戸を締めて家相似たり　繞石（落椿）
城北に伊吹白しや松飾　夜濤（懸葵）

飾り竹

行合の松もかたそぎ餝竹　基角（五元集）
飾竹してみやびたり竹の宿　青々（妻木）
柴の戸や雪にうもるゝ飾竹　默興（續紅潤集）
移る世に昔構や飾り竹　圭岳（同人）
札差の家の驕奢や飾竹　象外（懸葵）

竹飾り

千世くまん若水桶も竹飾　春清（大三物）

門の松

きのふこそ峰に寂しき門の松　宗因（梅翁宗因發句集）
月雪のためにもしたし門の松　去來（去來發句集）
をがたまの木迄化粧や門の松　是橋（寶晋齋引付）
右左花たちばなや門の松　松吟（同）
錦木やまことの男門の松　蕪村（[illegible]孤庵聯句集）
大きくも小さくもなし門の松　百池（巴調集）
兎角して今朝となりけり門の松　宋屋（瓢簞集）
竈獅子が頭ではらひぬ門の松　巣兆（曾波可理）
雜巾のほしどころ也門の松　大茶（九番日記）
羽子一つかゝりしまゝや門の松　墨水（墨水句集）
竹高く飾るならひや門の松　同（同）

松の門

我人に似たる樣なし松の門　曾之（大三物）
吹風に力見せぬや松の門　遠野（同）

門の松竹

松竹の門や古今の色を見す　木吾（新類題發句集）
門々や影ゆづりあふ松と竹　呂博（同）
長生の印は門の松と竹　林卜（大三物）

松竹

松竹や鼎に立てる殿づくり　彫棠（末若葉）

門の竹

鶯も來よと思ひぬ門の竹　江山（新類題發句集）
物申の聲にそよぐや門の竹　群巢（同）
すら〳〵とやすくも立てり門の竹　嵐蘭（類題發句集）

立松

立松の朝色濃き翠哉　蓁林（大三物）
日の出猶立松威有神の庭　龜松（同）

松一對

とかくして松一對のあしたかな　移竹（もとござ）

飾木

かざり木にならで年ふる柏哉　一晶（あら野）

【參考】正月に人家の門戶に松を立つることは、平安朝時代より文獻に見えてゐる。卽、本朝無題詩、惟宗孝言の詩に「鎖レ門賢木換二貞松一」の句の自注に「近來世俗皆以レ松插二門戶一、而余以二賢木一換レ之而已」とあり。今日でも普通は松竹であるが、なほ樒・榊・楢・笹等を用ゐる地あり。門戶に松を立つるは、もと神の憑り木とする意であるといふが、野邊より松を引いて來る行事と關係あり、むしろ初から長壽を願ふ意が本となつてゐるかとも思ふ。梁塵祕抄にも「新年春くれば門に松こそ立てりけれ、松は祝のものなれば君が命ぞ長からむ」とあつて、早くから祝賀の意を感じてゐ

たことが知られる。

藁盒子（わらがふし）　幸籠（さいはひかご）

【季題解説】藁にて盒子（椀の類）の如く編みたるものを、門松に結びつけて、日々雑煮などの供物を入れて供ふ、これを藁盒子といひ又幸籠とも人ふ。これ門神に供する意なり。【季題】幸木（さいはひぎ）、

【例句】
藁盒子
松が枝に鳥の巣とみむ藁盒子　梅門（新類題發句集）
山もりの雪もたのしや藁盒子　杜隣（同　）
古道や松にかけたる藁盒子　升六（發句類聚）
鶯の落し子もあれや藁盒子　蝶衣（蝶衣句集）
君が代の雀が来るや藁盒子　同（蝶衣句稿）
めのと出て結びましけり藁盒子　同（同　）
朝風にもの丶からびや藁盒子　嵐翠（青嵐）
鶯の巣かも知らずよ藁盒子　青々（妻木）
笠置下りて里ゆかしさよ藁盒子　素泉（日本俳句）
幸籠
常盤さや菜も香らず幸ヒ籠　素丸（素丸發句集）

蓬萊（ほうらい）

蓬萊臺（ほうらいだい）　蓬萊飾（ほうらいかざり）　蓬萊山（ほうらいさん）　懸蓬萊（かけほうらい）　組蓬萊（くみほうらい）　積蓬萊（つみほうらい）　包蓬萊（つつみほうらい）　福包（ふくづつみ）

【古書校註】
【山之井】　蓬萊かざる　にしざかな　かずのこかどの子也　田づくりほこいはし也、ことのはらともいへり　ほだはらほんだはら　かやかへ　かち栗　くし柹　梅ぼうしむめぼし　だいだい　柚から　柑子　橘かざる　野老　秋のこのみもかざるといへば元日也。
【栞草一】　紀事　倭俗新年三方薹（一）に海老・熨斗昆布・榧・橙・穂俵、等を置き、先づ賀客に供して新年を祝ふ、是を蓬萊臺と云ふ。　列子渤海（二）の東に山有り、一は岱輿と曰ひ、二は員嶠と曰ひ、三は方壺と曰ひ、四は瀛州と曰ひ、五は蓬萊と曰ふ。華實皆滋味有り、之を食すれば不老不死、居る所の人皆仙聖の種、云々。蓬萊盤これに據る歟。
【史記本紀】　海中三神山有り、蓬萊・方丈・瀛州と曰ふ。僊人之に居る。
【史記封禪書】　蓬萊・方丈・瀛州・此の三神山は渤海の中に在りて、人を去ること遠からず、諸の僊人及び不死の藥皆在り、其の物禽獸盡く白し、而して黄金銀を宮闕となす、未だ到らずして之を望めば雲の如し、到るに及びて三神山反りて水下に居り、之に臨めば風輙ち引き去る、終に能く至るなし。
【いつまで暦】　蓬萊祝ふ　かや・かち栗・くし柹・ところ・ゆ・柑子・橙・

橘・梅干・みかん等をかざるとすれば元日なり。

註 (一)三方　食物を載する具、神供・貴人の膳部・或は儀式の用とす。檜の白木にて作れる方形の折敷(をしき)に、臺を重ねたるものにて之を衝重(ツイカサネ)といふ。臺の傍に孔を穿つ、之をくりかたといふ、其三面に孔あるもの即ち三方なり、又四面に孔あるは四方といふ。
(二)渤海　西漢の郡名、今の直隷省天津府滄州の東西四十清里に在り、東漢の冀州渤海郡は今の天津府南皮縣の東北八清里に在り、其の他尚ほ沿革ありて定まらず

季題解説　蓬萊は新年の嘉祝とする飾物　その飾り方は家々により區々にして一定せざれど、三方に松竹梅を立て、紙の上に白米・齒朶・昆布・譲葉を布き、その上に又橙・蜜柑・柚・橘・榧・搗栗・野老・穂俵・串柿・伊勢海老・梅干などを盛り飾りたるものを普通とす。白米を載せるは、即ち米は富草といひ、名をよろこぶと共に百穀の王にして、長壽を與ふる靈效ありと稱し、齒朶は裏白或は穂長・もろむきといふ。もろむきは夫婦の相生に比し、その形朶長くて瑞鳥たる鳳凰の尾に擬し、又齒は齢に通じ、朶はえだの意に取り、長壽の意に通はせ、且霜雪に萎まぬをよろこぶの意なり。昆布は和名ひろめにて廣きを喜び、或は夷子女とて福をよろこぶ。譲葉は一名親子草、代々譲りて子孫長く絶えざる意を寓す。橙は夏青色に變ずるを若返るに比して祝ふ。橙の外、蜜柑・柚・柑子はいづれも古は橘の屬にて、橘は果實の長上、冬も綠に色褪せず、萬病を除く效驗ありと信ぜられ、古來嘉祝の品とす。榧は百木の長、實は延壽の能ありとて用ひられ、搗栗は勝栗と、勝の字に通ぜしめて慶び、野老は長き鬚あるを以て老人の長壽に比す。その他穂俵・串柿・伊勢海老・梅干等はいづれも家運を祝福し、長壽を祝ふ意を寓せざるはなし。支那の偶說に渤海の東に蓬萊・方丈・瀛州の三島あり、居る人皆聖仙にして不老不死、金銀珠玉を以て宮闕とし、遠望すれば雲の如く、之に近けば水面下に見ゆとあるより、それに寄せて萬歳を祝ふ意となす。懸蓬萊は蓬萊の飾物を集めて掛け下ぐるもの、組蓬萊は昔堂上家の宴に三峰膳とて、中に蓬萊、右に方丈、左に瀛州を美にて作りかたどりしもの。包蓬萊は、蓬萊の飾物を紙に包み、水引にて結びたるもの、俗に福包とも云ふ。

例句

蓬萊　蓬萊の麓へ通ふ鼠かな　鬼貫(故人五百)
蓬萊に聞ばや伊勢の初便　芭蕉(炭俵)
蓬萊の松にたてばや曾根の松　其角(五元集拾遺)

蓬萊

蓬萊を脇息のけて居けらし　杉風（杉風句集）
蓬萊にかけてかざるや老の袖　去來（去來發句集）
家にあり蓬萊作り覺えけり　沾德（俳諧五子稿）
蓬萊に夜は薄ぎぬ着せつべし　言水（同）
蓬萊に熨斗の高橋かけまくも　來山（いまみや艸）
蓬萊や升の中から山が出る　同（同）
蓬萊の晝ぞ雀の起る時　同（續いま宮艸）
蓬萊のかざりすがたや朝朗　宋屋（瓢簞集）
此心我蓬萊のはな柑子　曉臺（曉臺句集）
蓬萊に見るや浮世の慾ぞろへ　也有（蘿葉集）
蓬萊や只三文の御代の松　一茶（七番日記）
蓬萊になんむ／＼といふ子哉　同（おらが春）
蓬萊の山におさへし柱かな　梅室（梅室家集）
蓬萊の橙あかき小家かな　蒼虬（蒼虬翁發句集）
蓬萊やこゝろに花の吉野榧　莊舟（能靜草）
蓬萊や御國のかざり檜木山　杜國（三つの國）
蓬萊に松のみ殘る日數哉　蝶夢（新類題發句集）
蓬萊に兒這ひかゝる目出度さよ　山店（類題發句集）

簑一枚笠一個簑は房州の雨にくされ笠は川越の風にされたるを床の間にうや／＼しく飾りて

簑笠を蓬萊にして草の庵　子規（子規句集）
蓬萊に根松包むや昔ぶり　同（同）
蓬萊や上野の山と相對す　同（同）
蓬萊の齒朶踏みはづす鼠哉　同（同）
蓬萊や朝日さしこむ床の上　漱石（落椿）

小泉八雲先生は余が恩師なり

蓬萊や恩師の像を脇床に　同（同）
蓬萊に藥の臼の並びけり　青々（妻木）
蓬萊や柴の煙を山かづら　同（同）
いぶり炭蓬萊の霞釀しけり　蝶衣（[illegible]葵第一句集）
夜雨さびて蓬萊の松感應す　同（蝶衣句稿）
蓬萊や熨斗目屏風を引廻し　四明（四明句集）
蓬萊や海老かさ高に齒朶隱れ　碧梧桐（碧梧桐句集）
蓬萊を捧げて眉のかくれけり　鳴雪（鳴雪俳句集）
蓬萊に徐福と申す鼠かな　虚子（虚子句集）
山人の蓬萊の間にある爐かな　癖三醉（癖三醉句集）
蓬萊や數々の間の明通し　五空（五空句集）
蓬萊の一間にちりもなかりけり　墨水（墨水句集）
蓬萊のしづかによせよ老の波　梓月（續紅潤集）

蓬萊に鼠なくなり枕元　把栗（明治俳句）
蓬萊を東の床へ飾りけり　竹満（同）
蓬萊の朱門を開く仙女哉　四方太（同）
蓬萊や左右に開く銀襖　半風（新俳句）
蓬萊や青き疊は伊勢の海　松宇（同）
蓬萊や晴きところに嫁が君　霽月（同）
蓬萊に見なしつ雪の淡路島　白雲（年刊俳句集）
枕して蓬萊近く仰ぎ瞻る　橡面坊（津山集）
蓬萊や雨戸あくれば夜のあける　露石（春夏秋冬）
家内して積む蓬萊の高さかな　八重樓（續春夏秋冬）
宿とりぬ唐一杯の蓬萊に　野鳥（ホトトギス）
蓬萊や玉取の舞松風の曲　雄兎（雄兎句集）
蓬萊の蜜柑つまみて炬燵哉　蘇子（現代俳句大觀）
蓬萊に灯ともす朝ぞ靜なる　錦褓子（明治新俳句集）
蓬萊に遠來したる神馬藻　霜峰（年刊俳句集）
蓬萊に貴き年をいろへけり　椿堂（同）
蓬萊に裏白の波よするかな　蕎生（明治一萬句）
蓬萊の昆布のからびも日數哉　雪山（同）
蓬萊の句蓬萊の山謝春星　蝶哉（同）
蓬萊や神農の軸畵師が家　波雲（同）
蓬萊や疊にとゞく鰕の髯　梅日（同）
蓬萊の波よりあがる千鳥かな　華水（丙寅句鈔）
畝傍山を蓬萊にして草の庵　文木（同）
蓬萊にゐなじむ宿の柑子の木　別天樓（同）
蓬萊にところの山の木の實哉　螢樓（丁卯句鈔）
蓬萊作り母の母より傳はりけり　鼓竹（同）
蓬萊の眺めよ島の海かすむ　茅上（現代俳句大觀）
蓬萊の汐たるゝ程匂ふかな　竹人（年刊俳句集）
蓬萊や海草の香もほのめきて　北涯（俳人北涯）
蓬萊に橘黃なり奈良の宿　蕪堂（噫蕪葵）

子規在世

蓬萊のその蓑笠も古りにけり　三幹竹（同）
蓬萊に誰が積み添へし柑子哉　同（同）
蓬萊や飾りて小さき穗ン俵　同（同）

蓬萊山

年姬よ蓬萊山のさゝ一つ　元水（大三物）
高砂や此巳の年の蓬萊山　吉春（同）
大内は蓬萊山の姿哉　子規（子規全集）
蓬萊の山高く熨斗の水長し　鳥堂（續春夏秋冬）

蓬莱山　宿の猫蓬莱山を守りけり　八重樓（明治一萬句）
かしこまる蓬莱山の麓哉　可山（同）
土器や蓬莱山の朝灯　碧童（同）

懸蓬莱　銀燭の蓬莱山を照らしけり　盧靜（明治俳句）
しだり尾を疊にひくや掛蓬莱　薫風子（青嵐）
初聲し掛蓬莱のゆるぎなき　南畝（年鑑俳句集）
ならはしの掛蓬莱も淋しけれ　夢川（現代俳句大觀）

組蓬莱　楹柱に四五葉の樹に對す　蕪子（昭和一萬句）
西行は不二を詠けんか組蓬莱　言水（俳諧五子稿）
鶴の巣も季を持へしぞ組蓬莱　不入（東日記）
組蓬莱眞砂かぞへん磯目鑑　水柳（同）
組蓬莱寸白の葉尋ぬべし　在悠（同）

喰蓬莱　喰蓬莱母より傳へけり　青水（現代俳句大觀）

縄包み　水引や松葉むすびを縄包み　夜濤（響苑）

參考　もとは正月の肴として用ゐたものであるが、後には變つて單なる飾物となつた。蓬莱飾とも、くひつみとも云ふ。

鏡餅（かがみもち）　御鏡（おかがみ）　餅鏡（もちゐかがみ）　据り餅（すわりもち）

季題解説　正月家毎に飾る供餅を鏡餅といひ、略して御鏡と云ふ。古へは「もちゐかゞみ」と呼び、据り餅とも云ふ。鏡餅を祝ふに圓形の餅を二個重ねて一トかさねと號す。

實作注意　鏡餅は正月飾りの重なるものにて、我が國にては平安朝の頃より用ゐられ、鏡の如く圓形なるより鏡餅と稱したるなり。二個うち重ねたるは日月を表はし一重ねと呼ぶ。而して家々の佛壇・神棚に、或は床の間に、その他常に己の信仰する所、愛好する器具に飾り供へる物なり。即ち竈神に供へ鏡臺に飾るなどその一例なり。

一言　鏡開き參照。

例句

鏡餅　あるはなしある年毎のかゞみ餅　宗因（梅翁宗因發句集）
古歌に曰くちとせぞ見ゆる鏡餅　同（同）
思ひ出づ赤人にまでかゞみ餅　言水（俳諧五子稿）
鏡餅多門は餅をあれ鼠　同（同）

御鏡
餅鏡

鏡餅母在して猶父戀し　曉臺（曉臺句集）
海老赤く穂俵黒し鏡餅　子規（子規全集）
風年や笑み割れそむる鏡餅　鬼城（鬼城句集）
大寺や靈屋々々の鏡餅　清潭（虚子選雜詠選集）
千石を積む船いくつ鏡餅　蕃森（日本俳句鈔）
ひわれけり天神樣の鏡餅　竹滿（春夏秋冬）
三重の餅や又なき大鏡　八重櫻（續春夏秋冬）
鏡餅八萬ひげを作りけり　卯の吉（ホトトギス）
我庵やヒボクラテスに鏡餅　默禪（同　）
我未だ師恩忘れず鏡餅　同樂（稻の香）
古例の一幅かけて鏡餅　意外（昭和一萬句）
鏡餅二臼どりに一と重ね　圭岳（同　）
橙の一葉青しや鏡餅　添水（懸葵）
橙の黃も目出度けれ鏡餅　徂春（大正新俳句）
お鏡や紫檀の卓に片よせて　素十（ホトトギス）
餅鏡ついたち頃のながめかな　心成（大三物）
子は親にすべてもちゐの鏡哉　德元（狗猧）

熨斗

長熨斗　薄鮑　打熨斗　熨斗鮑

古書校註

【栞草】卜部古事記　天照太神伊勢五十鈴川上にて神代の人形を學ばせ給ひて熨斗を作り給ふと也。打鮑とも云。

【年浪草】常に嘉祝の供と爲す、五萬米、鰮、鮑熨斗と並べ用ふ。熨斗は神代の人の形狀なり、肩いかりて腰ほそく、壽は萬歲を保つと古書にありと也。

【いつまで艸】熨斗は螺最上なり。鮑榮螺之に次す。

季題解説　鮑の肉を薄く長く剝ぎて干し延したるもの。長熨斗・打熨斗等あり。新春蓬萊臺などに用ゐるを以て新年の季とす。

例句

熨斗
大まかに水引祝へ庵の熨斗　烏堂（續春夏秋冬）
水引のひんとはねたり祝熨斗　夜濤（懸葵）

注連飾

飾繩　年繩　飾藁　輪飾　飾棹　輪注連　前垂注連　大根注連　牛蒡注連　掛飾　門飾　大飾　お飾り　飾

古書校註

【山之井】上佐日記にこへのかどのしりくめなはと侍るこれ也。すべて神

社のしめをしりくめなはといへば、門にかざる心なくては祢になるべからず。

【栗草】 世諺問答 しめ縄と云ものは、左縄によりて、縄のはしをそろへぬものなり。左は清浄なるいはれなり。はしをそろへぬはすなほなる心なり。浄不浄をわかつ故に、神事の時は必引なり、正月の神を祝ひ祭るこゝろなり。

【年浪草】 神代の巻に曰、時に手力雄ノ神、則ち天照太神の手を承はり引て出し奉る、是に於て中臣ノ神、忌部ノ神、則ち端出の縄を以て界す。乃ち請して曰く、復た還幸する勿れ。云々。○釋名に云、注連いましめ也、是をはりて出入をいましむるなり、縄はなをきなり、縄はすくなる物なり。○荊楚歳時記に曰、正月朔日、畫鶏を戸上に帖け(一)、葦索を其上に懸け(二)、符を旁に挿す、百鬼之を畏る、云々。○説文に曰稈は禾莖也、即ち稲の和皮也、天を祭るに以て席となす、云々。凡そ米穀は生命を繫ぐ、至寶、藁草の之にしく者なし、神明之を賞美す、洗米、散米、新藁注連等最も重ずる所也、云々。和漢草索を用ふるの意、知るべき也。○後成恩寺殿纂疏に曰ふ。左縄端出づ、此れ其義を釋し又其訓を解す、縄は直の儀、神道直を以て本と爲す、左は陽徳、清明の儀に取る、端の出づるは素を隠して整はず、其の餘す所の芭端を穿ぐ也。是質朴にして飾らざるの意、故に直清の質を以て、神明の徳となす、一條の縄にして此の三徳を具す、即ち注連也、云々。

註(一)(二) 畫鶏を戸に帖す、葦索、別項に在り。

季題解説 注連飾は七五三縄とも書く。端出縄の約言、端出縄は藁の尻を切らずにこめおく意なり。七五三縄と書くは其製法卜部家の傳にて、縄の端を七本五本三本と順に垂らすに因る。正月の飾に清き藁を左縒りにしたる縄を門戸又は神前などに懸け飾ること、不浄を祓ふの意なり。尚飾縄・年縄・飾藁・大飾・お飾とも云ひ・又略し單に飾ともいふ。

これに又種々の形式ありて、最も普通なるは前垂注連と名づけ、縄より藁を一面に前に垂らせるもの。然して家によりては前垂の藁をまばらにし、藁と藁との間に譲葉、歯朶を挿し込みたるものもあり。又門の入口には特に前垂注連の透間なきものをつるし、その中央に、歯朶・譲葉・荒布・海老・橙・柚・橘・串柿・榧・勝栗・穂俵・池田炭・野老などを飾るもあり。又藁を輪にしたるものは輪飾、輪注連といひ、太く短くして尻くめ藁を垂れぬものを大根注連と云ひ、これとやゝ細長くし一尻くめ藁を垂れぬものを牛蒡注連といふ。これらの飾縄は大小種々の別あれども、神棚をはじめ、竈、藏、臼、金庫、井戸、自轉車、自動車等何によらず引きはへる慣習あり。

例句

注連飾

人心よやゆるゆるとしめかざり　長頭丸　(洗濯物)

曙や天つ空迄しめ飾り　三澤　(大三物)

吹けばとぶ家の世並やメかざり　一茶（一茶新集）
小蔀や暖簾の上の注連餝り　子規（子規全集）
古辻や地藏の堂のしめ飾り　同（同）
造營の齋館に御注連飾りけり　蝶衣（蝶衣句稿）
注連飾日蔭かづらを掛けそへたり　鬼城（鬼城句集）
から〳〵と走る大戸や注連飾　十樵（十樵句集）
酒倉や松尾の神に注連飾　橡面坊（深山柴）
故郷や臼も竈も注連飾　寒樓（春夏秋冬）
注連飾八十氏人の榮え哉　奇遇（續春夏秋冬）
注連飾秀貞が家の鞴哉　秋子（同）
注連飾寺子の机積み祝ふ　射石（日本俳句鈔）
宮遠き一の鳥居や注連飾　績石（落椿）

飾繩

据付けに千代萬代や飾繩　可全（類題發句集）
飾繩や御代の直なと圓いのと　移竹（同）
曳はてゝ猶あまりあり飾繩　傘狂（新類題發句集）
かざり繩やくりかへしくるけふの春　定重（毛吹草）
百尺のかざり繩ありけさの松　幾音（家つと）

年繩

年繩の淸々しさよ古柱　みの吉（春潮集）

飾藻

神風や霞に歸るかざり藻　蕪村（[illegible]聯句集）
かざり藻菓種に笑ふ雀哉　如雲（大三物）
かざり藻を結び分ばや春の道　馬光（馬光句集）
雪隱の長家にうつや飾藻　靑々（妻木）
新藻の飾り香りて侘寢哉　羊我（大正新俳句）
飾藻殊に靑きを選びけり　牛詰（懸葵）
里百家汲む玉の井や飾藻　三幹竹（同）

輪飾

裏門や小さき輪飾齒朶勝に　子規（子規全集）
輪飾や弓に疵なき弦わたり　五空（五空句集）
輪飾や吾は借家の第一號　鳴雪（鳴雪俳句集）
輪飾や萬葉集の古文箱　紫影（かきね草）
輪飾す小さき厨子や何佛　橡面坊（深山柴）
輪飾や飛火八十八末社　樂南（續春夏秋冬）
輪飾や椋の葉磨きの宮柱　山梔子（日本俳句鈔）
機臺の數に輪飾かけにけり　蘇坤（明治一萬句）
輪飾のぬるゝ程水使ひけり　雨靑（懸葵）
輪飾や車も曳いて小百姓　黑洲（同）
輪飾の枝折戸風に任せある　句佛（我は我）

飾棹

荷ひけり稻の同塵かざり棹　吉俊（江戸辨慶）

牛蒡注連

こもり居つ女ずまひや牛蒡注連　寂人（懸葵）

飾海老（かざりえび）　伊勢海老飾る（いせえびかざる）　鎌倉海老飾る（かまくらえびかざる）

古書校註【栞草】紅鰕俗に伊勢海老と云、或は鎌倉えびとも稱して賀祝のものとし國俗春盤（一）にこれを用ふ。

【本草綱目】鰕音霞、俗蝦に作る、湯に入るれば則ち紅色霞の如し、云々。

註（一）春盤　別項を看よ

季題解說　正月、伊勢海老又は鎌倉海老を茹でゝ、鏡餅・蓬萊臺、又は注連飾等に添へて飾るを云ふ。［參照］動物—伊勢海老（イセエビ）

例句

飾海老

若松に老もむべ也錺海老　舍曲（寶晋齋引付）
錺海老物申といはん風情なる　梅人（安永六年歲旦帳）
飾り海老崭然として齒朶の中　鳴雪（鳴雪俳句集）
飾り海老我も刎ればや躍らばや　同（同）
鬚はねて甚長し飾海老　たかし（ホトトギス）
恙なき二本のひげや飾海老　惜哉（ゆく春第一句集）
飾海老の足三寶に餘りけり　潮花（同）
足もげてなくてめでたし飾海老　野風呂（現代俳句大觀）
大いなる金庫の上や飾海老　迂外（同）
飾海老軒燈ともる齒朶がくれ　蒼梧（同）
飾海老四海の春を堪へけり　冬葉（靑嵐）
伊勢海老や赤うして先に祝はるゝ　玄梅（類題發句集）

飾炭（かざりすみ）

古書校註【栞草】本草綱目　白炭除夜之れを戶內に立て、亦邪惡を辟く。云々。この義なるべし。

【年浪草】簠簋內傳に曰く、牛頭天王（一）后妃八王子及諸眷屬を率ゐて廣遠國に到り、巨旦族を滅ぼし、其の巨旦が屍を斷ち、五節句（二）に配して調伏の威儀を行ふ。所謂擧年の門松は巨旦が墓驗（三）の木にして上の結炭は葬送の火爐也、云々。本草綱目に曰く、白炭除夜之れを戶內に立つ、亦邪惡を避く云々と、邪惡を避くるの義に據るべし、簠簋の說は如何にや。

註（一）牛頭天皇（ごづてんわう）佛說に天竺の北なる九相國の吉祥園の主とす、祇園精舍の守護神なり、佛家にては其の垂跡を素盞嗚尊とす、山城國愛宕郡八坂郷なる今の祇園の神是れなり。（二）五節句　人日（一月七日）上巳（三月三日）端午（五月五日）七夕（七月七日）重陽（九月九日）、（三）墓驗（はかじるし）門松は巨旦の墓しるしなりと云ふ　門松の條を見よ。

季題解說　飾炭は門松に炭を結びつけて飾ること。炭を住の字訓に寄せ、永住して相離れざる意にて祝ふ。又邪惡を避くるためとも云ふ。［參照］注連

例句　飾炭

撰れて巖のごとし飾り炭　心武（新類題発句集）
朽ぬ門の姿をすくに飾り炭　歌涼（同）
深山木や都の春にかざり炭　默魚（類題発句集）
鎌倉に古き鍛冶屋や飾り炭　雪人（明治俳句）
炭飾落ち沈みけり雪の中　一泉（昭和一萬句）

飾臼（かざりうす）　臼飾

季題解説　正月、農家にて臼に注連を張り、その上に鏡餅を供へて飾る、これを飾臼といふ。

例句　飾臼

飾臼あたりを拂ふ大きさよ　露月（露月句集）
臼飾りていくさ草鞋の藁打たん　櫻磯子（鳴門の春）
槻が枝の百足る御世や飾臼　山梔子（日本俳句鈔）
新らしき莚の上や飾り臼　泰山（春夏秋冬）
男臼女臼飾り並べけり　漁壯（同）
臼庭を掃ききよめたる飾哉　村家（ホトトギス）
飾臼草分けの家の寶かな　繞洲（懸葵）
飾臼四つ杵掛けて祝ひけり　碧梧桐（同）
聟取て臼がふえけり飾りけり　師竹（最新二萬句）
宇治山のふるき出店や飾臼　青々（同）
蟲くひの古きもほぐや飾臼　蝶衣（蝶衣句稿）
太平に象に臼を飾りけり　北涯（俳人北涯）
箕も添へて挿す南天や飾臼　天郎（東國）
門口の老木の梅や飾臼　梓雪（梓雪句集）
三十三才來てゐる土間の飾臼　白萩女（年刊俳句集）
くだかけの垂尾曳きけり飾臼　鶯池（鶯池句集）
百姓の祖を忘れぬ飾臼　五沼（懸葵）

飾米（かざりごめ）

季題解説　蓬萊臺に飾る白米をいふ。參照　蓬萊（ほうらい）

例句　飾米

白妙の雪にまがふや飾米　冬葉（懸葵）

松竹梅飾る（しようちくばいかざる）　せきだい飾る

季題解説　松と竹と梅とを盆栽としたるものを正月の祝ひとして飾り用ふ

るを、松竹梅飾るといふ。京阪にてはこれを「せきだい」と稱す。

例句 松竹梅飾る

蓬萊をはなれて日あり松竹梅　童哉（年刊俳句集）
金屏に松竹梅を飾りけり　巨鋒（懸葵）

楪飾る（ゆづりはかざる）

季題解説 新年嘉祝の物として、注連繩・蓬萊臺等に楪を飾り用ふるを楪飾るといふ。參照 植物—楪（ユヅリハ）

例句 楪飾る

楪の葉艶うれしく飾りけり　零雨（愛吟集）
一枚のゆづり葉注連に飾りけり　三幹竹（懸葵）

橘飾る（たちばなかざる）

季題解説 正月、橘の實を注連繩蓬萊などの飾りに用ふるをいふ。參照 植物—橘（タチバナ）夏・橘の花（タチバナノハナ）　秋—橘の實（タチバナノミ）

例句 橘飾る

橘や宗祇のにほひ琵野老　山卜（雅巾）
蓬萊の橘匂ふ一間かな　陶々（新類題發句集）
高き香をめでゝ橘飾りけり　鶯竹里（懸葵）

橙飾る（だいだいかざる）

季題解説 世俗に橙を代々の祝語に寄せ、正月の蓬萊・門飾に用ふるを橙飾るといふ。參照 植物　橙（ダイダイ）　秋—橙（ダイダイ）

例句 橙飾る

橙や春をかさねし千年家　山呼（新類題發句集）
橙やつきせぬ家の飾もの　座忘（同）
橙や疝氣をさまる御代の春　李由（風俗文選）
橙や裏白がくれなつかしき　子規（子規全集）
詩書堆裏兒等橙を玩ぶ　露月（露月句集）
橙の一と葉を春のかざし哉　梨葉（梨葉句集）
洞神に橙の一つ色なせり　素石（木虫句集）
竹の門氏よりわが還暦を祝くとて橙を寄こしけるに
橙も鼠が抱けば寶珠かな　鶯池（鶯池句集）
橙の黄もからびたり二夜三夜　小蛄（青雲抄）
橙につきあたりけり獅子頭　松宇（松宇家集）
橙や春を名殘の臺所　孤軒（孤軒句集）
かんかんに橙凍てし飾かな　浩舟（ホトトギス）

橙飾る　橙の香をおぼえつゝ飾りけり　坡牛（同　）
草の戸や橙光る飾りもの　鱶洲（既　?）
鳥飛兎走爰に橙の數五十　翁化（同　）
橙の一つを飾りあましけり　三幹竹（同　）

柑子飾る（かうじかざる）

季題解説　柑子を注連繩・蓬萊などの新年の飾に用ゐるを柑子飾るといふ。
〔[illegible]〕植物　柑子[illegible]　秋　柑子ノカ

例句
柑子飾る　わが伜に實植の柑子註りけり　如足（千　鳥　掛）
小柑子栗やひろはん松の門　[illegible]泉（[illegible]　野）
山あつてころ柿白く柑子黄也　如泉（雜　巾）
置床や柑子を飾る草の庵　北谷生（[illegible]　葵）

柚柑飾る（ゆかうかざる）

季題解説　柚柑を注連繩・蓬萊などの新年の飾に用ゐるを柚柑飾るといふ。
〔[illegible]〕植物　柚柑[illegible]

例句
柚柑飾る　葉のつきしを選りて飾りし柚柑かな　玉鉾（懸　葵）

藪柑子飾る（やぶかうじかざる）

季題解説　藪柑子は、柑子の名あるによつて、柑子と同じく蓬萊などの新年の飾に用ふ。これを藪柑子飾るといふ。〔[illegible]〕植物—藪柑子ヤブカウジ

例句
藪柑子飾る　前山の藪柑子ぬいて飾りけり　蒼梧（懸　葵）

蜜柑飾る（みかんかざる）

季題解説　蜜柑を蓬萊・鏡餅などの新年の飾に用ゐるを蜜柑飾るといふ。
〔[illegible]〕秋—蜜柑[illegible]

例句
蜜柑飾る　大いなる蜜柑撰びて飾りけり　零雨（懸　葵）
二組の餅に蜜柑を飾りけり　三幹竹（同　）

串柹飾る（くしがきかざる）

胡盧柹飾る（ころがきかざる）

古書校註
【菓草】和漢三才圖會　竹の串に貫きて乾したるもの也。云々。「酉陽雜俎」・

柿に七絶あり、「一ッに壽、六に嘉賓。云々。」今新年嘉祝の物として蓬萊臺に用るは此義か。

【年浪草】和漢三才圖會に云ふ。竹串に貫て乾す者也、或は繩に貫き之を乾す、共に下品也。按るに此物、其形狀串海鼠(一)に似たり。故に嘉祝の物として飾藁、或は蓬萊臺に用る歟。（雜談抄に云ふ、萬物を抓とるの義と云へり。柿と抓と和訓近き故ならん。云々　凡そ榧・搗栗・串柿・昆布・柑・柑子・橘・熨斗・梅干等の類、飾る心なくては歳始の嘉種となるべからず、皆物々當季を專とし、又雜の物あり、云々。

註（一）くしこ、なまこの腸をとりて、煮て乾したるもの、之を熬海鼠(いりこ)と云ふ、又ほしことも云ふ。再び水に浸して煮て食ふなり。いりこを串に貫きたるものをくしこと云ひ藁にからげたるものをからことといふなり。

季題解說　串柿を注連・蓬萊・鏡餅などの新年の飾に用ゐるを串柿飾るといふ。〔參照〕秋　柿

例句

串柿飾る

串柿の夫婦めでたき連理哉　遊花（新類題發句集）
串柿や昔も同じ枝の友　雪幸（同）
串柿やまだ一枝に居る心　長英（類題發句集）
父母妻子串柿のごと並びけり　子規（子規全集）
串柿を清話の人に肴哉　青々（妻木）
串柿をさして錢籠祝ひかな　櫻磈子（閻門の草）
馬の事に來てあぶれ串柿を貰ふ　天郎（東國）
串柿のみな秦晋のよしみ哉　百花羞（百花羞遺稿）
串柿の食はぬ蔕こそめでたけれ　井村（續春夏秋冬）
串柿を夫婦の中にほどきけり　小酒（同）
折ふしの獨居串柿さがり居る　蒓江（青雪抄）
串柿の串ぽき〳〵と折りくるゝ　夢鳴（年刊俳句集）
串柿の皆琥珀色粉を吹けり　三幹竹（懸葵）

胡盧柿飾る

三寶に胡盧柿の串あまりけり　雨青（同）
胡盧柿の吹き粉を愛でゝ飾りけり　三幹竹（同）

榧飾る（かやかざる）

季題解說　榧の實を蓬萊などの新年の飾に用ゐるを榧飾るといふ。〔參照〕植物―榧(かや)　秋―榧の實(かやのみ)

例句

榧飾る

榧の實を御口祝や吉野殿　牛父（新類題發句集）
小鼠の烏帽子にかつぐ榧の殼　蝶衣（蝶衣句稿）
幾年を蟲氣なき榧飾りけり　嵐翠（懸葵）
訪ふ客に山居の情や榧を盛る　鱶洲（同）

搗栗飾る

古書校註 【栞草】 和漢三才圖會　搗の訓を勝の字にかへて、諸勝負の利あるを悦て之を用ふ。
【字類抄】 栗黄　搗栗　カチグリ。

季題解説 栗を乾してやゝ皺む時、臼にて搗きて殻と澁皮とを去りたるもの、搗栗の音カチクリなれば勝の字にかへて祝ひ、蓬萊盤などに飾るをいふ。〔參照〕秋―栗。

例句 搗栗飾る

搗栗や齒のなきは無き家の春　無徳（新撰□□發句集）
かち栗や餅に和らぐ其しめり　沽圃（續猿蓑）
名におふやかゞみの餅にかちん栗　信忠（毛吹草）
かち栗に甲州殿の酒杯かな　烏堂（□春夏秋冬）
勝栗に老の天盃まはしけり　舷耳（閑古鳥）
足ることを知れと勝栗祝ひけり　朶青子（懸葵）

梅干飾る

梅干祝ふ　梅法師

古書校註 【年浪草】 和漢三才圖會に曰ふ、白梅(ムメボシ)又鹽梅霜梅俗云梅干(ウメボシ)也、豐後之産肥大肉厚く味美し。云々。梅干を梅ぼうしとは倭俗寶珠を擬寶珠と云が如く、如意寶珠(一)に比せる賀詞なるべし。〇本草綱目に曰ふ。梅は其の實酸し。曝乾して脯と爲し、又羹臛中に入る、又之を含み以て口を香はすべし。

註 (一)如意寶珠（によいほうじゆ）探嚴經にある靈異なる珠の名、又神功皇后の海中より獲給へりといふ。寶珠にもいふ。

季題解説 梅干は梅實を鹽漬にし紫蘇を加へ、色をつけて、曝し乾したるもの、俗に梅ボウシと長音に呼ぶが故に寶珠に偶し、その皺あるを老人の齢に比して嘉祝の具となし、蓬萊臺に飾る。祝ふ又は飾るといひて新年とす。〔參照〕夏―青梅　梅漬ける　梅干

例句 梅干飾る

梅干やこゝに年とる五十年　紫君（懸葵）

齒朶飾る

季題解説 齒朶の葉を注連繩・蓬萊・鏡餅などの新年の飾に用ゐるを、齒朶飾るといふ。〔參照〕植物―齒朶

例句 齒朶飾る

十かへりの鶴の雨羽や飭齒朶　方寸（大三物）

御飾りの歯朶にさす日のうれしけれ　寂木（懸　葵）
二三枚飾り残りの歯朶のあり　枳南（同　）

野老飾る

季題解説 野老を蓬萊などの新年の飾に用ゐるを野老飾るといふ。參照 植物―野老トコロ　冬　野老掘トコロホリ

例句

野老飾る

長髭を祝うて飾る野老かな　北谷生（懸　葵）
海老野老臺を同じく飾りけり　三幹竹（同　）

椰葉飾る

季題解説 新年嘉祝に飾り用ふ。昔、鏡の宮に椰の葉飾れること行はれたりと見え、嬉遊笑覧に「寛永以前はやくこの事あり、風波靜まるをなぎといふ、波なければ水鏡の如し、その名詮を取ての事と見ゆ。」と說明せり。

例句

椰葉飾る

海をけさなぎの葉かすむ宮路哉　心敬（熊野千句）
しだの葉を被にもちゐの鏡かな　宗房（毛吹草）

昆布飾る

季題解説 昆布を、蓬萊・鏡餅などの新年の飾に用ゐるを昆布飾るといふ。參照 植物―昆布コンブ

例句

昆布飾る

飾昆布松前殿の厨かな　山梔子（山梔子句集）
廣前に飾る昆布や風渡る　代醉（懸　葵）
飾り昆布垂るゝもうれし青疊　三幹竹（同　）

穗俵飾る

季題解説 穗俵を、蓬萊などの新年の飾に用ゐるを穗俵飾るといふ。參照 植物　穗俵ホダハラ

例句

穗俵飾る

穗俵や飾れば伊勢の海戀し　零雨（懸　葵）
旅に得し淡路穗俵飾りけり　三幹竹（同　）

大根飾る

大根祝ふ

季題解説 大根を蓬萊などに飾り用ゐるを大根祝ふといふ。參照 植物―

例句

鏡草（カヾミグサ） 大根祝ふ

紫竹野の祝ひ大根を貰ひけり　三幹竹（懸葵）

掛莚（かけむしろ）　新莚（あらむしろ）

季題解説 正月、神前などに新しき莚を掛けるをいふ。地方によりて門飾にかける處もあり、お飾の一種なり。**参照** お飾（オカザリ）

例句

掛莚　春の門隠者めかすゝつり袋　奇淵（俳諧發句題叢）

新莚　あたらしう揃かけばやあら莚　園女（俳句大觀）

福藁（ふくわら）　福藁敷く（ふくわらしく）　ふくさ藁（わら）

古書校註

【栞草】「紀事 家庭に藁を敷く、これを福藁と稱す。雑談抄 正月の神を祭り勧請する間、不淨を除く心なるべし」云々。一説に賀客を送迎の爲ともいへり。

【山之井】ふくわらを敷く、ふくさわらを福わらとて庭に敷事也。

季題解説 新年、庭上に清き藁を敷く俗あり、この藁を福藁といふ。これ不淨を除くためなりと云ひ、又賀客を迎ふるためなりともいふ。**参照** お飾（オカザリ）

例句

福藁

福藁や誰取初し早苗より　蝶山（葎亭句集）

福藁や塵さへ今朝のうつくしき　千代尼（千代尼發句集）

福藁や御所の裾にも袂にも　同（同）

福藁や十ばかりなる供奴　一茶（七番日記）

ふくわらや天智の御穂の積餘り　蓼太（三傑）

福藁に田毎の秋ぞ思はるゝ　乙由（麥林）

福藁に雀の下りる日和哉　子規（子規全集）

齒朶青く福藁五尺あまりかな　露月（露月句集）

福藁に歌賑くむや梅が下　紅葉（紅葉句集）

福藁や嵐ふき入る金屏風　五空（五空句集）

福藁や暖さうに犬眠る　緑面坊（澤山柴）

福藁の霜の花踏む雀かな　柳汀（俳星）

福藁を敷いて飾れる唐箕かな　山梔子（最新二萬句）

福藁に初東風渡る戸口かな　玄花（同）

福藁に釜下ろし置いて禮者うけ　かな女（大正新俳句）

福藁のよごるゝ雨となりにけり　蕪洲（懸葵）

ふくさ藁分て小松は生にけり　意水（大三物）

初暦（はつごよみ）　暦（こよみ）

伊勢暦　暦開き　本暦　柱暦　綴暦　花暦　盲暦　繪暦　巻

古書校註

【年浪草】雜談抄に曰く此儀は只民間に云所也。禁裏へは冬十一月朔日南都（一）幸徳氏の某來年六月迄考たる暦を書進す、又六月朔日に十二月迄考て奏する由也。民間にも右幸徳氏並加茂氏考る所の新暦十一月朔日に進奏するを大經師所幸德などより申請て是を板行して世に弘む。是を大經師暦と稱す。又伊勢神宮の御師（二）より祓に添て送る、是を伊勢暦（三）と云。又豆州三島より出るは三嶋暦（四）と云云々、凡そ暦を賣るは冬とし初て見或は開くを春とす。王維詩に歸燕識二古巢一舊人看二新暦一と作れり、暦は冬より用ゆれども皆春の用を辨ずる爲なれば春勿論也。

【栞草】［雜談抄］凡そ暦を賣るは冬とし、初めて見、或はひらくを春とす。冬より用れ共春（の用を辨ずる爲なれば春勿論なり。

註（一）南都　奈良を云ふ、幸德加茂兩氏は中古以來朝廷に仕へて暦の事を掌る。（二）御師（おし）神主の卑き者、おんし　（三）伊勢暦　伊勢神宮の祭主藤波家にて、土御門家より寫本を受け、暦師佐藤伊織に命じて發版せしむ　（四）三島暦　鎌倉時代の頃より三島明神の下社家川合良節之を刊行し伊豆相模の二國を限り頒布を許さる。

季題解説

新年にはじめてこの年の暦を用ひ始むることにて、暦開きとも云ふ。暦には本暦・柱暦・綴暦・花暦・盲暦などいろ〳〵あり、花暦は年中百花の開落期を擧げたる暦。盲暦は昔、陸中南部にて刊行せしものにて、文盲者のために繪を以て、月の大小、季節等を示したるもの、故に繪暦とも云ふ。［參照］冬―暦賣（コヨミウリ）

例句

初暦

遊ぶにはふさがりもなし初暦　乙由（麥林集）
皆すてた事よし〳〵と初暦　也有（蘿葉集）
柱にもまたるゝ花や初暦　同（同）
我が名の假名いただかん初暦　蓼太（三傑）
神宮の判すわりけり初暦　子規（子規全集）
新宅に掛くる釘なし初暦　同（同）
人の手にはや古りそめぬ初暦　同（同）
初暦頼みもかけず掛けにけり　虚子（句集虚子）
初暦妻めとる日も見當らず　同（新俳句）
初暦我世うらなふかゝり人　青々（妻木）
春遠き草の庵やはつ暦　同（同）
あら玉の日鏡の老や初暦　紅葉（紅葉句集）
宇佐に行くや佳き日を選む初暦　漱石（漱石全集）

初暦

神明にひと夜をおきぬ初暦　蝶衣（蝶衣句稿）
おろかしや天變地異を初暦　霽勝花（大正新俳句）
種蒔く日嫁とる日もや初暦　東洋城（同）
貼りつけし舟玉棚や初暦　蘇南（蘇南遺吟）
吉日のつゞいて嬉し初暦　鬼城（鬼城句集）
綴糸の青き白きや初暦　滿泉（續春夏秋冬）
初暦料理暦も貼りにけり　只木（[illegible]第一句集）
大いなるすゝけ柱や初暦　潮風（ホトトギス）
初暦はや七草の日をめくる　あい子（同）
初暦日の出大きく畫きけり　橡面坊（最新二萬句）
初暦俳諧草紙つくりけり　坡酔（同）
色刷の贋び江戸繪や初暦　磨劔（同）
初暦二月の閏を見初めけり　稻青（同）
陸部署の印大きさや初暦　碧童（明治一萬句）
初暦伊勢の神樂衆くばりけり　八重櫻（同）
持かけて邪魔な紐かな初暦　鶯池（鶯池句集）
初暦借をおとなふ日を定む　小姑（青雪抄）
伊勢へ行く吉き日選ばん初暦　默雷（同）
初暦我年一ツふえにけり　月兎（明治新俳句集）
初暦茶の間の柱古びたり　耕石（落椿）
日蝕も月蝕もなし初暦　丁川（明治俳句）
初暦恥かしき日も近よりぬ　靜子（同）
初暦子規忌芭蕉忌春星忌　昔春（同人俳句集）
初暦何見るとなく嬉しさよ　鷺江（かりがね）
草の戸や神棚に置く初暦　同樂（稻の香）
神ながら佗人そみる初暦　蛇笏（昭和一萬句）
正月は皆あそぶ日の初暦　宋斤（同）
初暦忘恩の日とてあらなくに　句佛（我は我）
黑星の多き年なり初暦　孤島（懸葵）
初暦年中の事定めたり　晋森（同）
人だのめ百姓讀みや初暦　胡桃太（同）
初暦俳諧行事書き込みぬ　鱗洲（同）
初暦はや繰り忘る二三日　童觀（同）

繪暦

繪暦を貼り重ねたり太柱　裸馬（年刊俳句集）
繪暦の幼時戀しき我が家哉　三幹竹（懸葵）

本暦

本暦は床の飾りに置かれけり　梓月（俳諧雜誌）
綴糸の青きもうれし本暦　枳南（懸葵）

伊勢暦

いざ見ばやはる〴〵伊勢の初暦　西友（續春夏秋冬）

年男（としをとこ）　若男（わかをとこ）

古書校註【年浪草】記事に云、若水を汲む人を年男と謂ひ、此水を煮るを福沸と謂ふと云々。年男は其家々人を撰て之を定め、先づ舊年煤掃の竹を以て拂はしめ、除夜追儺の豆を撒しむる事各當年の恵方より初む、是年男の役とする處春來猶家々の嘉例勿論にや。

季題解説 家々にて除夜、追儺の豆を撒くことより始まりて、正月の儀式一切を行ふ役に當りし人を年男といひ、又若男ともいふ。〔参照〕若水（新年） 冬―節分（セツブン）

例句

年男

ゆゆしさや御年男の旅姿　其角（五元集拾遺）
仁朱判やとるがうへにも年男　同（同）
白魚のちりも撰りけり年男　言水（俳諧五子稿）
年男千秋樂をうたひけり　舟泉（あら野）
第一の盥嗽了る年男　露月（露月句集）
年男我が候ふや竈の火　同（同）
餅の粉で染めけん鬢や年男　蝶衣（蝶衣句稿）
年男松のしづれをあびにけり　同（同）
五段目の猪承りぬ年男　紅葉（紅葉句集）
皺尉の面といはれて年男　四明（四明句集）
雪に道つけて遠井や年男　大我（毎日俳句集）
よく似合ふ茶縞袴や年男　雪後（[illegible]一萬句）
年男宿りつらねし名提灯　眉峰（同）
末座から謡ひ出でたり年男　少一（同）
誰やらがざれ繪の顔や年男　月兎（明治新俳句集）
年男やたら塞がる額かな　竹冷（古今[illegible]一萬句集）
一つ唄幾度うたふ年男　二九（明治一萬句）
年男家三代の下部かな　松宇（松宇家集）

若男

世の花や袴すがたの若男　善但（大三物）

初手水（はつてうづ）　手水初（てうづはじめ）

季題解説 元朝、若水にて初めて手水を遣ふことをいふ。これを終れば衣服を改め、先づ神佛を拜するを例とす。〔参照〕若水（新年）

例句

初手水

そりや出る日波間の影や初手水　古角（[illegible]かつら）
星一つ手にいたゞくや初手水　潤子（同）
手の内に春を見せけり初手水　楓鹿（大三物）

初手水

春に我雀や遅き初手水　無絃（大三物）
眠りしか山際少あかりて初手水　喜之（宗土產）
明ぬらん鶯雀初手水　水哉（江戸蕉匣）
貧泉のもとに家して初手水　青々（妻木）
手を入れて清き心地や初手水　墨水（墨水句集）
田の闇に鶺鴒鳴けり初手水　蝶衣（蝶衣句稿）
まだ明けぬ御裳濯川や初手水　松宇（松宇家集）
青竹の筧も嬉し初手水　とう子（筑波）
初手水頭ぐり〳〵洗ひけり　虚吼（虚吼句集）
曉天の黄や紫や初手水　松毬路（ホトトギス）
初手水溢るゝ門の噴井かな　歸加（同人俳句集）
神風に懷紙とばしぬ初手水　天眞（寶古島）
塗盥槌口に置きて初手水　木牛夏（同）
初手水寢てゐる舟の霜白し　天門（現代俳句大觀）
井の蓋の雪拂ひけり初手水　鶴女（大正俳句集）
明星のまたゝき寒し初手水　不山（年刊俳句集）
初手水稍ばかりにさす日かな　静樹（春泥研究會句抄）

手水初　初老

いかに寢て手水はじめのさゞれ皺　宗雅（雜巾）

初釣瓶（はつつるべ）

季題解説 新年始めて井水を釣瓶にて汲上ぐるを初釣瓶といふ。［參照］若水（わかみづ）

例句

初釣瓶

潮の帆のおもかげくむよ初釣瓶　康吟（大三物）
初釣瓶濁らぬ水の日哉　永言（同）
若と呼ぶ三番叟や初釣瓶　一角（文化四年歲旦帖）
初釣瓶南天のさみどり映りけり　冬葉（線）
我が庵は不斷の釜や初釣瓶　三幹竹（感）

初驛（はつうまや）

季題解説 元日、驛路に車馬の往來し初めることを云ふ。

實作注意 初驛は正月の宿場の情景をあらはしたるものにして、或る昔の如く旅中に會ひし最初の停車場をいふにはあらず。東海道五十三次の宿場宿場の正月などの情景を思ひうかべて味ふべし。

例句

初驛

初驛名所の松を案内かな　五空（五空句集）

旅人や鞍に梅さす初驛　小酒（續春夏秋冬）
神路山のほとりなりけり初驛　案山子（現代俳句大觀）
街道に波の霞や初驛　汀波（俳星）
出女の使ひ歩きや初驛　青々（最新二萬句）
馬の鈴鳴りて橇出づ初驛　同（同）
夕餉すまして君見送るや初驛　和香女（大正新俳句）
かゝり舟の旗手なびきて初驛　蝶衣（懸葵）
雪に伏す竹に朝日や初驛　同（同）
篝立てゝ小人數ながら初驛　巧拙（同）
雪深き灯の明けをるや初驛　瓜青（同）

初門出（はつかどで）

季題解說 正月初めて我が家の門戸を出づるを初門出といひ、又初朝戸出ともいふ。

初朝戸出（はつあさとで）　初戸出（はつとで）

例句

初門出　初朝戸出　初戸出

初門出我は松より生れしか　蘭杜（新虛栗）
初音哉初朝戸出乃麻裃　可囚（[illegible]巾）
初戸出や國旗に雪のちら〳〵す　三幹竹（懸葵）

初旅（はつたび）

季題解說 新年始めての旅途に上るを初旅又は旅初・旅行始といふ。

旅始（たびはじめ）　旅行始（りよかうはじめ）

例句

初旅

初旅に浪華の芝居見て戻る　義千（懸葵）
初旅や山茶花多き京の町　美彌子（青雲抄）
初旅や寧樂の御佛拜みたく　盧王（ホトトギス）
初旅を伊勢路へ雪の加太越　句佛（我は我）
初旅の晴れ〳〵しさよ燒津富士　同（同）

旅始

宿帳に書く年淋し旅はじめ　不刀（年刊俳句集）
父母や伊勢にはる〳〵旅始　枳南（懸葵）

初刷（はつずり）

季題解說 新聞紙・雜誌等の新年初刊行のものをさして初刷といふ。

刷初（すりぞめ）

初刷

初刷の繪附錄子等に與へけり　繞石（落椿）
初刷のほしき繪附錄何々ぞ　橡面坊（[illegible]山柴）
初刷の皇子晴れ〳〵と拜しけり　蓬村（年刊俳句集）
初刷を見るそこばくの暇かな　丹沙郎（同）

初刷　刷初

夜のまどゐ初刷に皆顔よせて　閑村（年間俳句集）
初刷の新聞嬉しわが一句　月叢（[illegible]句集）
初刷や枕にあごのひろひ讀み　鼓竹（最新二萬句）
雪積る戸々や初刷投げて去る　蛇湖（[illegible]句集）
初刷や動き出したる輪轉機　佐海（ホトトギス）
初刷を膝に夫婦や比翼讀み　三海風（同）
袴はき乍ら初刷に眼を通す　麺車（同人俳句集）
初刷や女の部屋に擴がれり　二島（木虫句集）
初刷や折り込まれたる繪双六　竹城（現代俳句大觀）
初刷の金泥光る挿畫かな　去濫（同）
刷初の皆襯衣白く著て居りぬ　滴萃（ホトトギス）

初時報（はつじはう）

季題解説　一月一日、ラヂオ放送局より時報を初めて放送するを初時報といふ。〔[illegible]〕初放送（はつはうそう）

例句　初時報

火鉢して眠しラヂオの初時報　黒洲（懸葵）
先づ正す柱時計や初時報　蒼梧（同）
初時報つゞく氣象や日本晴　三幹竹（同）

初放送（はつはうそう）

初ラヂオ

季題解説　初放送は新年始めてのラヂオ放送をいふ。〔參照〕初時報（はつじはう）

例句　初ラヂオ　初放送

店の者みな起きて聽く初ラヂオ　斗柄（年鑑俳句集）
紳問の朝の燈や初ラヂオ　喇夢（同）
初音聞く初放送のまどゐ哉　枳南（懸葵）

日記始（につきはじめ）

初日記（はつにつき）

季題解説　新年はじめて今年度の日記帳に書きしるすことを日記始、又は初日記といふ。

例句　日記初

爐邊離れねば日記初に異聞なし　乙字（乙字句集）
初日記よしなしごとに餘白なき　百工（戊辰句鈔）
師友の名つらねて日記始かな　孤山（[illegible]）
めでたさや日記始の恵比壽紙　潮雨（同）
さま〴〵の御座敷すませ初日記　左太代（現代俳句大觀）

書いて一紙に餘る日記の初め哉　島不關（同）
戀々とをみなの筆や初日記　蛇笏（昭和一萬句）
草庵や常の禿筆日記初　櫻紅子（同）
妻もする日記始めや芋大根　瓦谷（同）
夜の雪のしづかに日記始めかな　滄山人（年刊俳句集）
初日記二日の欄に喰ひ入りぬ　颯江（昭和模範句集）
梅が香のすゞろに日記始かな　紫紘（同）
無事帖と題して日記始め哉　粂青子（懸葵）
獻盃を御方日記の初め哉　三幹竹（同）

寢正月（ねしやうぐわつ）

季題解說　元日、家に籠りゐて寢るを寢正月といふ。寢ながら正月を過す意なり。

例句　寢正月

松風のつのれば侘し寢正月　蝶衣（蝶衣句稿）
粉炭の起りゐる香や寢正月　泰堂（古今濟箇一萬句集）
蓬萊の山の日南や寢正月　駒村（枯檜庵句集）
楪の萎びからびや寢正月　夢筆（虚子選雜詠選集）
美しき炬燵蒲團や寢正月　虎杖（ホトトギス）
わか宿の京の機屋は寢正月　秀好（同）
この雪を出づる愚かや寢正月　圭居（同人俳句集）
大雪の隣に疎し寢正月　孤聖窟（木虫句集）
雪山家榾足しくべて寢正月　淡蕩（辛未句鈔）
落着きや雪となりたる寢正月　松都（閑古鳥）
寢正月淋しく釜のたぎるなり　虹華（草上俳句集）
屋根の雪しづる音かも寢正月　十雨唯（同）
寢正月の人は知らじな釣の味　九天（現代俳句大觀）
朝鮮に住みて慣れたり寢正月　長州（昭和一萬句）
晴著して子を出しやりぬ寢正月　士栖（現代俳句大觀）

鬼打木（おにうちき）

鬼木（おにき）　鬼除木（おによけぎ）　鬼障木（おにさへぎ）　鬼押木（おにおしぎ）　大賀玉の木（おおがたまのき）　年木（としぎ）

古書校註

【栞草】「月令博物筌」大賀玉（をがたま）の木ともいふ、門松のかげの木也、年木とて正月始に疵なき木をとり末に葉をのこし門によせかけておくなり、鬼打拂ふ木といふことにてみな陰氣をはらふの義なり。

季題解說　正月、門松の陰に疵なき木を選みて末に葉を殘し立て置くものを鬼打木又は鬼木と云ふ。疫鬼を打祓ふ意なり。又伊勢神宮の邊にては正月

門松のもと、又は戸外に、割木に墨もて十二月の數を横に引きて數多く立つるを鬼障木といひ、又は大賀玉の木ともいふ。【[illegible]】幸木じ[illegible]

例句

鬼打木

鬼打木醫師が家の岡めかな　丁々（春夏秋冬）
鬼打木浮世々々の門柱　同（同）
鬼打木門安かれと思ふかな　同（同）
鬼打木堅木欅の門の春　師竹（最新二萬句）
鬼共の引けど動かず鬼打木　同（同）
牛頭逃げて馬頭見に來るや鬼打木　同（同）
鬼打木倒して童子逃れけり　橡面坊（同）
堀川の淋しきに見つ鬼打木　天郎（同）
常盤木の堅木を額め鬼打木　泰山（同）
鳥使者の鬼來しものを鬼打木　櫻魂子（同）
鬼打木疱瘡の子はなかりけり　小蛄（同）

幸木（さいはひぎ）

季題解説　長崎地方に行はれし古俗。世間胸算用卷之四に「庭に幸ひ木とて横わたしに敷く、鰤いりこ串貝雁鴨雉子あるひは塩鯛赤いはし昆布鱈鰹牛蒡大根、三ケ日に使ふほどの料理のもの、此木につりさげて竈をにぎはゝせ、すでに大晦日の夜に入れば、物貰ひども顔あかくして、土でつくりしゑびす大こく、又荒鹽臺にのせ、當年の惠方の海より潮が參つたと、家々をいはひまはりけるは、船つき第一の所ゆゑぞかし、（云々）」とあり、木の小枝を折り、枝に魚鳥、菜果を懸け、これを竈の上に飾るものにて、蘭玉に似たり。又一說には門松の根に立つ木を幸木といふ。【類語】鬼打木　幸籠

例句

幸木

幸木てふ名の目出度さよ雁一羽　青々（倦鳥）
有德の竈柱や幸木　冬葉（懸葵）
三日過ぎてやゝさびしらや幸木　山笑（同）

水祝（みづいはひ）

大浴せ　水掛祝ひ　水掛振舞

古書校註

【栞草】舊冬新たに妻をむかへたる男に、水を祝ふとて、朋友相催し、酒肴を携へ其家に至りて、水を祝ひあびせるなり。今は官より禁ぜらる。

【年浪草】紀事に曰く、新婦を娶る者あるときは、則ち朋友其の家に聚まりて、水を桶に入れ大に其人に灌く、是れ祓除の謂なり。（）日本紀、孝德帝の紀に粗其儀有りて後、其人酒食を設け、浴室を開いて之を謝す。是を

水懸振舞と謂ふ、和俗水を灌ぐを加俱留と曰ふ、饗應を振舞と曰ふ、又俗新婦を新造と言ふ、言ふ心は新に宅を作り之に居らしむるの義也。云々一説永祿の頃阿波の三好が家士松永久秀が姪女を寵臣に娶はせしより此戯れ初まる。是れ婚儀に褐色を用る事、黑きは水を主とす。故に水を添るの謂と附會の説を設くるに起ると。云々。

【季題解説】元日、前年新たに妻を迎へたる男に水を祝ふとて、友達相誘ひ酒肴を携へてその家に至り、新郎に水を祝ひ浴びせるをいふ。永祿の頃、松永彈正が姪を嬖臣に嫁せしより始まり關東には殊に盛んにして、互に怨讐を含む基となり、喧嘩鬪爭止まず亂れしかば、正德の頃嚴禁せらる。又水祝ひを受けたる家にて人々に饗應するを水掛振舞といふ。【參照】尻張り(シリハリ)　花水祝ひ(ハナミヅイハヒ)　心竹(ココロダケ)　伊達の墨塗(ダテノスミヌリ)　糯打(モチウチ)　御方打(オカタウチ)　嫁叩き(ヨメタタキ)　粥の木(カユノキ)

【例句】

水祝

こなたにも女房もたせん水祝ひ　其角（五元集）
生死のむかし昔ぞと水祝ひ　同（五元集拾遺）
義秀に門叩かせよ水祝　蓼太（三傑）
こりずまの世に聟ありて水祝　白雄（白雄句集）
用捨なく水祝ひけり五十聟　一茶（七番日記）
逃しなや水祝はるゝ五十聟　同（同）
大君の來ませ御肴水祝　子規（子規全集）
逃げ廻る跛の聟や水祝　同（同）
家中一の美男といはれ水祝　四明（四明句集）
水祝哭服所衆は京言葉　同（同）
はした女も同じ心や水祝　鳴雪（鳴雪俳句集）
十郎のうしろ姿や水祝　同（同）
鼻たれの男なりけり水祝　虛子（虛子句集）
水祝覺悟のことに座りけり　五空（五空句集）
聟殿の勳八等や水祝　蘇坤（續春夏秋冬）
水祝ひいざ逃ぐるとてやるまいぞ　撫琴（明治一萬句）
ともすれば妬み心や水祝　夕秋（年刊俳句集）
金屛に祝の水のかゝりけり　蕣兎（蕣兎句集）
物蔭やこゝにも一人水祝　鱗洲（懸葵）

水浴せ

廣袖も寒きけしきや水あびせ　東以（俳諧猿舞師）

【參考】此の行事は元和元年町觸を以つて一令式の制限を加へ享保元年遂に嚴禁するに至つたが地方には往々行はれ明治維新前まで存せし所があつた。日本書紀に「未嫁之女始適レ人時姤ニ斯夫婿一使ニ祓除一多」とある、祓除の義に出でたものであらうと言ふ。「みづかけのことぶき」「みづあびを」とも言ふ。

尻張り

【季題解説】元日、去年結婚したる新婦の尻をうちて祝ふ行事を尻張といふ。即ち水祝の一種なり。【[illegible]】水祝ひ

桃湯（たうたう）

【季題解説】元日、桃を入れし湯に浴すれば悪疫にかゝらずとし、これを桃湯といふ。【[illegible]】桃仁湯（たうにんたう）

蒼朮湯

【季題解説】元日、蒼朮を湯に滞して浴すれば、瘟毒の患なしとしこれを蒼朮湯といふ。【[illegible]】桃湯

元日不開戸（ぐわんじつとをひらかず）　掩門戸（もんこをおほふ）　掃かぬ家例（かれい）

【出典解註】【華草】江戸の商家、多くは元日戸を開かず、一日廢務（一）なり。又俗間に家内を掃除せず、凡新年の陽氣を重ずる義也。唐にも此事あり。閩部疏に云、閩（二）の俗歳首を重んず、民間正戸を開かず。云々。紀事　京俗元日より三日に至り民間門戸を掩ふ、心は福神を出さぬ爲也。云々。

註（一）廢務　仕事をせぬこと　（二）閩　支那東南地方（台建省地方）の人種の名、又其の土地の名、又國名、五代十國の一、南唐に亡ぼさる。

【季題解説】元日、商家多く戸を開かず休業す。又俗間家の内を掃除せず、これ新年の陽氣を重んずるためなりとしこれを元日不開戸、掩門戸、掃かぬ家例といふ。二日には戸明け始めを行ふ。【[illegible]】江戸城御[illegible]　掃初め

【例句】
掩門戸　門戸掩て一家炬燵に遊びけり　黒洲（懸葵）

加古物鎮　物鎮（ものしづめ）

【季題解説】元日より七日間　播州加古の民家にて萬事物音のするを禁じ、若し過つ時はその家に祟ありといふ習俗あり、加古の物鎮め又は單に物鎮めといふ。

【例句】
物鎮　加古川の瀬音更けけり物鎮め　冬葉（樂祭）

元三大師の像を門戸に貼る（ぐわんさんたいしのざうをもんこにはる）　角大師の像を貼る（つのだいしのざうをはる）

【季題解説】日本歳時記に「正月本朝にては元三大師とて慈恵僧正の像をかき

て門戸におしつけ、邪癘をふせぐまじなひなるよしにて、俗人の家ごとにすることなり。元享釋書に慈恵僧正の影像を所々の民屋におすは、かの僧あるとき鏡を以て容をうつして、誓つて曰く、わが像を置かんところには必ず邪魅災難をはらはんと、またことに疫をふせぐことをちかへりと見えたり。凡そかやうのことの有無是非は口舌を以てあらそひがたし、道をまなび、理あきらかにならば、おのづからその眞妄をしるべし。」とあり。現時にても京洛の民家にて門戸にその角大師の像を貼付するを見ることとあり。

例句

角大師の像を貼る

門松にかくれ顔なり角大師　冬葉（獺祭）

黑木賣る家々の戸や角大師　三幹竹（懸葵）

庭竈（にはかまど）

古書校註

【栞草】紀事火爐（一）を庭上におき、合家（二）蓆を鋪て圓座す、是を庭竈と云ふ。世間胸算用　元祿五年印本 卷四に云ふ。正月奈良中の家々にて、庭に竈つくり、釜かけて燒火（三）して、庭に敷物して、其家内旦那も下人もひとつに樂居して、不斷の居間は明おきて、所のならはしと二、輪（四）に入たる丸餅を、庭火にて燒くらふもいやしからず、云々。

【いつまで暦】庭にむしろを敷く。祭る事なり。

【年浪草】庭竈は曾て宮中並官家に其沙汰なし、唯民間の祝儀なり。倭俗民間の坪の内を場と云ふ、庭の字も亦並べ用る也。○和漢三才圖會に云ふ、竈は飲食を炊き生命を資ふの重器なり・恐らくは神有らむ、毎に清淨に爲して可なり。○舊事本紀に曰く、興津彦、興津姫、此の二神は竈神也。○酉陽雜俎に、竈神狀美女の如し、隗と名づく。姓は張、名は單、字は子郭、夫人六女有り、常に月晦を以て天に上り、人の罪過を白す、云々。畿内に竈を荒神と崇め、平常淸淨にして香華及供物を備へ祭る、月晦には修驗者を請じ、竈の前に於て奉幣し、其言を誦し以て荒神祓と爲す。是れ酉陽雜俎の說によるか。今庭竈と云も亦竈神を歲首に祭るにや。

註（一）火爐　かまど。（二）合家　家内中。（三）燒火　たき火。（四）輪　まげものにて作れる容器を云ふ歟。

季題解說　正月、常の竈の外に庭に新しく圍爐裏の大きなる樣に作り、その廻りに家内中寄り集まり、薪を燒き、茶・酒・餠・蛤等を食ひて三ケ日の間遊ぶことを庭竈といふ。なほ「世間胸算用」卷之四に「正月奈良中の家々

に庭いろりとて、釜かけて焼火して、庭に莚打して、その家内旦那も下人もひとつに楽居して、不断の居間は閑置て、所のならはしとて、庭に入たる丸餅を、庭火にて焼喰ふも、いやしからず云々」とあり。

【季題解説】庭竈にて一の季題なれば、庭の竈と「の」の字を入れて作るはよろしからず、庭の竈とする時は雑となるべし。

【例句】

庭竈

叡慮にて賑ふ民や庭竈　芭蕉（庭竈集）
庭竈牛も雑煮を居りけり　其角（五元集拾遺）
打をさむ入鹿が首に四海波　同（同）
御覧せんことさら民の庭竈　越人（眞木柱）
難波津の世にあふ時や庭竈　釜翁（妻かな）
薪には富し山家や庭竈　菊路（新類題発句集）
庭竈秋の朝田の人数かな　玄何（同）
松竹の中に草戸や庭竈　青々（妻木）
垣根なる臼に鶏鳴け庭竈　山梔子（續春夏秋冬）
芋屋より胴立たり庭竈　蛙足（懸葵）

事始（ことはじめ）　お事始（おことはじめ）　お事汁（おことじる）　むしつ汁（じる）

【季題解説】事始について古来諸説あり、「栞草」には、「二月八日を事始とし、武江の俗二月八日を事納とし、十二月八日を事始めとするは近世の誤なり」と評す。「嬉遊笑覧」には「事始と云ふ日定かならず、元隣が（誹身の上）四季短歌に『三つな引わこは太郎月二郎もよれるほうびぎはせちぶるまひに事はじめ』とありて、正月の内なり」とあり。又「日次紀事」には十二月十三日の條に「事始日、今日正月萬事營始修之俗是謂二事始日一、正月所有之物亦多買二」とあり。古来の作句を見るに正月の内に事始ありたるものもあれば、しばらくこゝに正月の事始を挙げおくことゝす。

また、御事汁とは、事始の日に、あつき・牛蒡・いも・大根・豆腐・焼栗・慈姑など入れ中味噌にて煮たるいとこ煮の汁を云ふ。又これをむしつ汁といふ、「嬉遊笑覧」に「むしつ汁といへるはふし汁といふをかくあらぬことにいふなるべし、ふし汁は芋から、赤小豆を入たる汁なり。今のいとこ煮、いもがらは入ざれども用ひしこともありしより此名を呼しものならん、ふしは芋からのことなり」とあり。【参照】冬―事始、春―事納

【例句】

事始

ゐな野の古郷に年を迎へて
事はじめいくやゐなのゝしらうつぼ　鬼貫（七車）

古き郷に春を迎へて
難波女や何からとはん事始　園女（玉藻集）

お事始

糸屑をまるめて御事始かな　麥人（木太刀）

おこしは初發なし。然る故に新婦を娶るは新室を造る故に、新婦を新造といへり。よしや、室造る事なきも、新婦を新造といへるは古への通稱なり。さればひめはじめは密事始の略稱なれば、輻末にも、姫にも、飛馬にもかゝはる事はあらず。」とあり、

例句

ひめ始

ほこ長し天が下照る姫はじめ　望一（望一千句）
年おとこするはさほ姫はじめ哉　慶友（犬子集）
姫はじめせんとや門に松ふぐり　春可（俳諧發句帳）
千代萬けふくり返すひめ始　同（月令博物筌）
はつ春のかげろふものよひめ始　篤老（自撰句帖）
ひめ始八重垣つくる深雪哉　龍雨（現代俳句大觀）
あなにやし面をとめがめなひめ始　寒樓（同）
ひめ始江家に老いし下僕かな　羊我（懸葵）

參考　正月糄粽を供し始るをいふ。米を上代は蒸して食用に供したが、後に水を加へて焚く今日風の料理法に轉じ、その柔なるより「ひめいひ」と稱した。その「ひめ」の始めで、飯の焚き始めの義であらう。但し飛馬始とて乘馬の始めとも、又女伎始めで、衣服の縫ひ始めであるともいふ。又新枕の義にもいふ。

話初（はなしぞめ）　初話（はつばなし）　初咄（はつばなし）

季題解説　新年を迎へて始めて人に會うて談ずることを話初といひ、又初話・初咄ともいふ。

例句

話し初

いざ咄し初祖父は蓬莱へ柴刈に　幽山（東日記）
んめ咲きよしある門の咄し初　去暮（寶書籍引付）

初話

初咄鶯まねしもろ心　正矩（三物）
まさぐれば無き火箸や初話　龍雨（龍雨俳句集）

笑初（わらひぞめ）　初笑ひ（はつわらひ）　初笑顔（はつゑがほ）

季題解説　新年はじめて嬉笑することを初笑ひといひ、その笑ひ顏を初笑顏といふ。

例句

笑初

笑ひ初すはや隣の狂言師　虚谷（小弓俳諧集）
末の子の家に王たり笑ひ初　蛇笏（蛇笏句集）
病人のおとろへ見えて笑初　一帆（ホトトギス）
これはまた叱言はじめの笑ひぞめ　凍魚（同）

初笑顔

耳うときことより笑ひはじめ哉　雅之（毒嵐）
大佛の柱くゞりや初笑　夏睡（同）
畫工来て主の顔畫く初笑　虚明（虚明句集）
作男二人おこゝろよしや笑初　俳小星（大正新俳句）
夕餉つどへば主従したしや笑初　かな女（同）
鏡中の白髯翁と初笑ひ　霽月（年刊俳句集）
初笑ひ朝湯の窓を洩るゝ哉　碧蘚（現代俳句大観）
明けそむる臥所の子等の初笑ひ　榮次郎（同）
初笑ひ子にうき事は忘れけり　みか子（同）
老いそめし父母のめでたし初笑ひ　大文字（昭和一萬句）
初笑どつと多勢膳を前　竹樓（同人）
上もなき寶ぞ君が初笑顔　祇光（明和三年歳旦帳）

泣初（なきぞめ）　初泣（はつなき）

季題解説 新年始めて泣くを泣初、又は初泣といふ。［参照］米こぼす（ヨネコボス）

例句

泣初

泣初や仔猫は知らぬ毬の事　雨江（俳諧雑誌）
泣初の顔をよごして眠りけり　和香女（ホトトギス）
泣初の弟に兄のかしこさよ　梅笑（同）
泣ぞめや屏風の裾にねころがり　泥子（同）
泣初もありてうれしきまどゐかな　無明（同）
泣初をしに參りけり市村座　虚子（同）
泣初の玩具喧嘩をさばきけり　いく女（現代俳句大観）
破れ凧泣初の子を見守れり　草郎（昭和一萬句）
灰に落ちし涙見られし泣初め　みどり女（大正新俳句）
酒の醉廻るに辭や泣き初め　蘇南（蘇南遺唫）

仕事始（しごとはじめ）　事務始（じむはじめ）　初仕事（はつしごと）　初事務（はつじむ）

季題解説 新年始めて各人の職業、事務等に携るを、仕事始・事務始・初仕事・初事務などといふ。

例句

仕事始

仕事始の梭音したり二つ三つ　蒼梧（懸葵）
一箱を仕事はじめや文選工　冬葉（同）

事務始

事務始電話が一度かゝりけり　涼荷（同人俳句集）
印字機の蓋の塵や事務始　二郎（現代俳句大観）
事務初め金庫音なく開かれぬ　相後（同）

事務始

誰彼の顔揃はずよ事務始　光王（現代俳句大觀）
事務始電話が一度かゝりけり　涼荷（同　）

初仕事

初仕事草鞋一足作りけり　鈴和尚（同　）
初仕事一日手間にあまりけり　九萬字（九萬字句集）
水煙に朝日映ゆるや初仕事　秋晴（青雲抄）
雑煮腹減つてめでたし初仕事　白澄（年鑑俳句集）

年玉（としだま）　お年玉（おとしだま）　年贄（としのにへ）

古書校註

【山之井】年始の持参禮物をいへり。
【栞草】新年の賜と云なるべし。年玉（ネンギョク）といふはわろし。
【年浪草】紀事に云ふ。正月、士農工商及僧徒神官、各〻贄（一）を執て互に相賀す、凡そ新年互に贈答の物惣て年玉と謂ふ。

註（一）贄　にへ　古代面會のとき其身分に應じて相手の方へ差出した贈物、みやげもの。

季題解説　新年の祝儀に贈答するすべてのものをいふ。年の賜物といふ意ならんで昔は武家の間には太刀・馬・反物などを贈り、民間にては鯣・酒・昆布・山鳥・紅筒・紙筒・羽子板等を年玉として贈答せり。現今も年玉の贈答行はるゝこと昔にかはらず。

例句

年玉

年玉や利ぬくすりの醫三代　太祇（太祇句選）
年玉や杓子数添ふ草の庵　同（　）
年玉や抱ありく子に小人形　召波（春泥發句集）
年玉やわび寝の庵の枕上　同（　）
年玉に梅折る小野の翁かな　言水（俳諧五子稿）
おくれ家や猫にも一つお年玉　一茶（一茶句帖）
年玉を並べておくや枕許　子規（子規全集）
年玉や何とも知れぬ紙包　同（　）
年玉や淋しき庵に十も來る　青々（妻木）
年玉や木香の移りの紙包　同（　）
年玉のかずかずに灯や枕元　露月（露月句集）
年玉の水引うつる夜闇かな　虚子（虚子句集）
年玉やものものしくも紙二帖　紅葉（紅葉句集）
年玉にもなほ庭訓の文字かな　不喚樓（不喚小什）
年玉を抱ふるや黄足袋かたしなる　六花（雪　烟）
年玉や水引かけて山の芋　鬼城（鬼城句集）
ことごとく母預りぬお年玉　橡面坊（深山柴）
ゆづり葉にのせし銅貨やお年玉　友風（虚子撰雑詠選集）

年玉やむつからぬならばよき子なり　蝶衣（蝶衣句稿）
年玉や檀緣捨てぬ箸一把　鳥不關（青嵐）
年玉やこは山の幸海の幸　北涯（俳人北涯）
絲卷に其角の句ありお年玉　月斗（同人俳句集）
大丸の包のまゝやお年玉　苔水（同）
年玉や昔ケ香こもる壺の內　梓月（附古鳥）
大いなる寺の御判や御年玉　牧童（同）
年玉にくれし東寺の頭芋　是佛（現代俳句大觀）
熨斗崩すまじく抱いてお年玉　麥浪（同）
年下や都へ送る炭一駄　骨子（明治新俳句集）
年玉や熨斗もさゝざる蜜柑箱　喜舟（年刊俳句集）
夜の雪年玉買ひに出でにけり　虛明（最新二萬句）
年玉や通闘が其京へ來る　提月（同）
たらちねに年玉の禮したりけり　碧童（明治・萬句）
年玉の海苔源平に引き結ひて　八重櫻（同）
年玉や百疋とらす樽拾ひ　化羊（同）
燈心や惠心が寺の御年玉　射石（最新二萬句）
年玉や他は筆墨に事の足る　禽化（同）
年玉や龜兒鶴孫と書はまくす　著森（日本俳句鈔）
年玉や豆も瀬々布の目をあらみ　瓏華（同）
年玉や村の聟の通ひ弟子　飄六（續春夏秋冬）
貧しさの年玉につけ發句かな　泰山（同）
年玉やにくまれ年の七ツ八ツ　月村（同）
山下りて年玉配る法師かな　瓦全（ホトトギス）
裸錢にぎらす老の御年玉　起草（同）
年玉や淡路便りの小蛤　青嵐（懸葵）
年玉の花をもたらす花屋かな　松畔居（同）

參考　節用集には歲貴とある。舊事本紀神武天皇元年の條、「正月庚辰朔、宇摩志滿治命、先獻天瑞亦堅神楯以齋矣、（中略）藏天璽瑞寶爲天皇鎭祭之」とあり、これが年玉の初だと傳へられる。しかしこれは起原を附會したもので、本來年首に其の年の吉兆を喜ぶよりして、珠玉等を飾り、人よりも物を賜つて年玉と名づけるに至つたものであらう。

幸籠（さいはひかご）　幸籠（さちかご）

季題解說　月令博物筌に「幸木、幸籠、木の小枝を折て大に魚鳥菜菓をかけ竈の上をかざるをさいわい木といふ、つくしにはもつぱら今もする事也、さいわいかご同じ」とあり。〔同〕幸木（さいはひぎ）　藁盆子（わらぼんご）

初便り（はつだより）

季題解説 新年初めて贈答する音信を初便りといふ。

例句

初便　みちのくやいくつ門の戸を初便　白雄（白雄句集）

今年また忌にある妹や初便　せん女（年刊俳句集）

初撫（はつなで）

季題解説 新年始めて兒孫の頭などを愛撫するを初撫といふ。

例句

初撫　初撫や二十五歳の子の頭　虚吼（虚吼句集）

貯金始（ちよきんはじめ）

季題解説 正月、初めて貯金するを貯金始といふ。

例句

貯金始　貯金始も三日になりぬ重さ哉　一珍（[illegible]葵）

書初（かきぞめ）

試筆（しひつ）　試毫（しがう）　試紙（しし）　試翰（しかん）　吉書（きつしよ）　筆始（ふではじめ）　筆を試む（ふでをこころむ）

古書校註

【年浪草】紀事に曰く、元日公武兩家及地下良賤各筆を試む　是を書初と謂ふ。羅山文集に云ふ、我朝年市に字を寫すもの、皆試筆と稱す。故に試簡・試兎・試穎・試瓢・試毫、或試春と稱するも此皆然り、蓋し叢林家(一)偈(二)を作る者の初めて爲す所乎。官家(三)先儒(四)學士(五)の文集に未だ之を見ざる也。宋の六一居士(六)試筆之詩有り、唯筆の好惡を試るを言ふ。故事要言に云ふ、元日筆初には王羲之が月儀書を用ふべし、其文に曰く、日往月來、元正首祚、大簇告辰、微陽始布、罄無不宜、和神養素云々。尋常凡俗に用ゐるは朗詠に、長生殿裏春秋富、不老門前日月遲　保胤。あら玉のとしのはじめに筆とりてよろづの寶かきぞあつめる。

註（一）叢林宗、僧の群居する處を叢林と云ふ、寺院。（二）偈　げ　佛宗の詩詞、通常四句を一偈とし、五字又は七字を一句とす。（三）官家　皇室。（四）先儒　先輩の儒者。（五）學士　學者。（六）六一居士　歐陽修を云ふ。

季題解説 新年はじめて書又は畫を揮毫することを云ふ。昔は公武兩家及び地下の良賤各試筆する風習盛んなりしが、今は多く二日に目出度き詩句などを選みて書初するを例とす。これを筆始又は吉書とも云ふ。試筆は書初と同義なれども、主として自作のものを書き試むることに用ふ。

例句

書初　書初や行年七十攝州の住　宗因（[illegible]句集）

書初や、紙にゆづる寺屋敷　白話（洗濯物）
さし當る用に任せて書初ん　左釣（新選）
書初や難波津よしあしくとも　鳴雪（鳴雪俳句集）
書初や書きそこねしも五六枚　同（同）
書初は女まじらぬ一間かな　露月（露月句集）
書始や窓の垂氷に咫尺して　同（同）
書初や上代樣の祝ひ歌　紫影（年刊俳句集）
千字文書初の句を選みけり　纏石（落葉）
書初を一々つるす鴨居かな　温亭（温亭句集）
書初や老妻酒をあたゝめたり　鬼城（鬼城句集）
書初や陸奥紙に詠進歌　春波（春波句集）
書初や墨磨り了へし硯三つ　鬼薊（新春夏秋冬）
書初や東涯竹里父の前　散木庵（最新二萬句）
書初や墨すつて居る日かな　牛歩（明治俳句）
書初や筆の運びの凡ならず　芳水（同）
書初や天下古今を罵りて　虚吼（虚吼句集）
書初の筆さら〳〵と目にうれし　梨葉（梨葉句集）
書初の龍頭蛇尾や終りけり　十二星（鐘氷集）
書初の片假名にして力あり　奇北（ホトトギス）
書初や温泉歸りの一句二句　默禪（同）
我が筆に雷もおこらず書初めぬ　寒樓（最新二萬句）
書初の墨氷る硯あふりけり　竹の門（竹の門句集）
書初や心の奥に澄める風　孤軒（孤軒句集）
書初や蕪村のホ句のいの字より　松濤樓（懸葵）

試筆

庭訓は春りはじめの試筆哉　正式（滑稽太平記）
心こめて年試ることとしかな　白雄（白雄句集）
青樓に醉ひて其角の試筆哉　鳴雪（鳴雪俳句集）
一家風試筆則ち富士の山　露月（露月句集）
一青氈三世の子の試筆かな　乙字（乙字句集）
山莊客を見ずして大臣の試筆哉　紅葉（紅葉句集）
庵主の愚にもかへらず試筆或　鬼城（鬼城句集）
讃酒家は我田へ水の試筆哉　竹の門（竹の門句集）
徜徉も寒ら歸りて試筆哉　蝶衣（蝶衣句集）
二紙三紙いよゝ書き劣る試筆哉　素琴（懸葵第一句集）
門聯も新たにす試筆貼られけり　橡面坊（深山柴）
六歌仙の押繪の額に試筆哉　黒洲（大正新俳句）
朝雀晴れやかに鳴く試筆哉　梅城子（同）
順々に貼り出されたる試筆哉　平安（同）

試筆

ふきたびのひまをぬすみて試筆哉　蘆雪　（大正新俳句）
書けは何書る試筆を洗ひけり　可濤　（閑古鳥）
末の子や試筆もつ手に力瘤　冬葉　（同　）
我校は生徒一百の試筆哉　春吐　（明治一萬句）
師の坊のあまりの墨に試筆哉　薫子　（年鑑俳句集）
天地の心となりて試筆哉　露十　（年刊俳句集）
洗ひあげし硯冷たき試筆哉　九萬里　（大正俳句選）
法帖を見ては樂む試筆哉　三幹竹　（昭和一萬句）
朗詠になれし一句の試筆哉　同　（[illegible]抄）

吉書

筆ひたて結びし文字の吉書哉　宗鑑　（新式大全）
天みつとつて七ツの吉書かな　白雄　（白雄句集）
書賃の蜜柑見いゝ吉書哉　一茶　（一茶句帖）
小坊主が棒を引いても吉書哉　同　（同　）
行雲流水の如醉筆の吉書哉　露月　（露月句集）
硯の海濶く一家の吉書哉　露月　（露月句集）
赤軸の吉書の筆を貰ひけり　青々　（妻木）
みちのくの薄摺紙に吉書哉　月斗　（同人俳句集）
大印をしかと押したる吉書哉　田士英　（あざみ會句集）
父母の膝下にありて吉書哉　士栖　（昭和一萬句）

筆始

大津繪の筆のはじめは何佛　芭蕉　（勸進牒）
ゆづり葉や口にふくみて筆始め　其角　（五元集拾遺）
大和假名いの字を兒の筆はじめ　蕪村　（文集賀辭）
梅はとく開て居るや筆始　才麿　（小弓俳諧集）
君が代や猶も永字の筆初　乙由　（麥林集）
立札や法三章の筆始　子規　（子規句集）
年玉や上の一字を筆始　同　（同　）
厨なる古妻遠し筆始　露月　（露月句集）
老後の手習にして筆始め哉　虚子　（虚子句集）
蜀箋の紅まぜて筆初　青々　（妻木）
古稀にして細楷をよくす筆始　四明　（四明句集）
氣を以て勝る文字や筆初　五空　（五空句集）
筆始机に古き二王帖　天葩　（天葩詠草）
唐墨の和墨に如かず筆始　霽月　（霽月句集）
梨壺の五人男や筆始　麥人　（明治俳句）
筆始二叟に質す古碑の論　碧梧桐　（最新二萬句）
名もしるき遊女なりけり筆始　荒井蛙　（同　）
小巧は忌む大拙や筆始　六花　（寒烟）
筆始酒みしを鷄舍に入りなどす　響也　（日本俳句鈔）

兄や愚に弟や賢なり筆始　樸面坊（深山集）
御製集したひまつりぬ筆始　小謠（新刊俳句集）
事もなげに打つ一點や筆始　曉台（大正俳句選）
筆始晋宋の子書に調かり　井村（春夏秋冬）
江南の梅の翁や筆始　樂南（同）
剛毫の柔毫の筆始かな　秀畝（ホトトギス）
末の子の筆の太さよ筆始　木石（懸葵）
筆始青雲の勇揮ひけり　守六老（同）
少年にして墨客や筆始　錦村（同）
蓬萊の山に倚りけり筆始　梧園（最新二萬句）
六甥の第一日や筆始　ゆうく（同）

【參考】新年に際して筆を試みることは古くより行はれてゐた。正月十五日のどんど焼にこれを焼いて、その高くのぼるのを書の上達する兆として喜んだ。宮中にても室町以降清涼殿東庭又は小御所の御庭で竹を三本立て縄を巻き扇を吊して天皇の御吉書をも共に焼かれ、これを御吉書左義長といふ。近世の寺小屋教育では書初の式を盛に行ひ、紅唐紙などに書して掛けたものである。

初硯（はつすずり）

【季題解説】新年初めて硯を使用するを初硯といひ、主として書き初めに用ふるをいふ。【參照】書初ヘ

【例句】
初硯
濱荻も筆に芽ぐむや初硯　乙由（麥林集）
筆捨ぬ松こそよけれ初硯　蓼太（蓼太句集）
初硯獸蹄立てもおもはゆけ　鶯池（鶯池句集）
白扇に染むる一句や初硯　燕里（山人俳句集）
初硯染めし立志の詩一篇　仙蓼（現代俳句大觀）
姉妹や墨すりかはす初硯　佳外（昭和一萬句）
初硯心靜かに墨を持つ　大羽（現代俳句大觀）

讀初（よみぞめ）

草紙の讀初（さうしのよみはじめ）　初草紙（はつざうし）　讀書始（どくしよはじめ）

【季題解説】新年はじめて讀書を試むること。昔は儒家にて經書の讀始をなすを云ひ、其式、孝經の士章又は唐の杜荀鶴が咏、終南山の詩を讀ましむるを例とす。又草紙の讀初は、昔は吉書の次に冊子讀初とて、女子は文正草紙を讀み、中古までその例ありしと云ふ。【參照】講書始ハンメ

【例句】
讀初
よみ初や初音一卷に爪印　秋色（寶晋齋引付）

讀初

讀初やさかへあらはす宿の春　忠清（大三物）
讀初の一章大いなるかも　露月（露月句集）
謹で君が遺稿を讀みはじむ　虚子（虚子句集）
讀初や稿ならである離郎篇　四明（四明句集）
讀初に勸學院の雀かな　橡面坊（深山柴）
聲立てゝ滯りなし讀初　琅々（續春夏秋冬）
讀初や全晩集の春の歌　一我（ホトトギス）
よみぞめや開きありたる創世紀　谷莊（同）
讀初や句讀正しき師の許　牛歩（明治一萬句）
讀初や巻を開けば王の春　北晉（同）
讀初や家に傳はる四書の内　觀魚（同）
讀初や弱冠にして一家風　鶯巴（鶯池句集）
讀初に佐の駒鳥啼きにけり　東布（最新二萬句）
讀初や吾幸ふして春雨篇　思宙（同）
冷泉の朗詠すゞし讀始　王居（同人俳句集）
讀初や家に傳はる日本書紀　比呂櫻（同　古鳥）
讀初の袋頁をきりにけり　昇幹（現代俳句大觀）
讀初や見なれたれども古今集　旋風（同）
日の本の古典よろしき讀初め　ふすみ（昭和一萬句）
讀初や子規全集の俳句の巻　鐵湖（同）
讀初や聲高らかに子の日く　寛石（落椿）
末子にも繪本もたせぬ讀初め　大浪（年刊俳句集）
讀初や讀み古したる萬葉歌　幡石（昭和模範句集）
讀初や我俳諧の志　頭風（青嵐）
讀初の盆栽つぼむ机上かな　魚里（同）
初讀やまづいたゞきて歎異鈔　雨關子（年鑑俳句集）
讀初の寶雲抄に終日す　待月（同）
口馴れし關雎の章や讀始　紫州（懸葵）
神代の巻を誦んず讀始　天易兒（同）

初草紙

公時が白髪にさはし初草紙　米仲（米恩）

【参考】江家次第に御讀書始めの事と言ふのがある。近世は、書初の次に冊子の讀初めとて、女子は文正の草子を讀んだ。橘曙覧「春にあけてまづ讀む書も天地の初の時とうちいづるかな」。此は古事記を讀んだのである。

掃初（はきぞめ）　初帚（はつばつき）

【季題解説】正月二日、始めて箒をとることをいふ。【参考】元日不開戸（グワンジツトヲヒラカズ）　お撫で物（オナデモノ）　采配（サイハイ）

【例句】

掃初

掃きぞめの箒や土になれ始む　虚子（虚子句集）
掃初や梅の下なる萬朶一片　素泉（續春夏秋冬）
掃初や神事に焚きし藁の屑　愛堂（ホトトギス）
掃初の疊埃の立ちもせず　花城（同）
掃きぞめの箒二つや草の庵　行野（同）
掃初や散り山茶花を二三枚　黄櫨（同人俳句集）
掃初や障子開けば川千鳥　不倦堂（現代俳句大觀）
掃初や鼠の糞も二つ三つ　芒角星（同）
掃初や社頭につゞく橋の雪　朝鳥（昭和一萬句）
二人してたゝむ屏風や掃始　三千君（現代俳句大觀）
掃きぞめの埃かゝりし鏡かな　靜夢（年刊俳句集）
帶に挾む曠着の袖や掃初す　無黄（同）
掃初や床に人形の妻が部屋　繞石（落椿）
掃初や手輕に移す孔子像　千嶽（年刊俳句集）
掃初や帶にたばさむ對の袖　梨葉（愛吟集）
掃初のわづかに塵や福壽草　水青（最新二萬句）
机書架鶯籠や掃初る　射石（同）
掃初の塵らく水や水仙花　玉鬼（同）
掃初や箒に遠き池の鴛鴦　土櫻（最新二萬句）
掃初に小姓頭の伺候かな　六花（同）
掃初や鶯籠を椽に移す　笛人（同）
掃初や椅ころぶ雪の上　尺蠖（同）
掃ぞめに飛石の雪を拂ひけり　蝶衣（蝶衣句稿）
毬かゞりし絲屑よすや掃初め　かな女（大正新俳句）
掃初の塵なき音や青疊　羊我（懸葵）
掃初の箒冷めたく握りけり　朴堂（同）

【參考】　萬葉集卷二十、天平寶字二年正月三日の大伴家持の作に「初春の初子の今日の玉箒手に取るからにゆらぐ玉の緒。」これは新年に財寶を掃き寄せる趣に緣起を祝つてゐる。

戸開初（とあけぞめ）

戸開始（とあけはじめ）

【季題解說】　正月三日、江戸の俗、門戸を始めて開くことを戸開始といふ。

【參照】　元日不開戸（グワンジツトヲヒラカズ）

初寢覺（はつねざめ）

【季題解說】　正月二日の朝の寢覺を初寢覺といふ。　【參照】　初夢（ハツユメ）

畫き、これに一富士二鷹三茄子を描く、七福神は福祿壽・壽老人は支那道教の神、大黒天・辨財天・毘沙門の神・布袋は支那の佛僧、蛭子は日本の神、三教合同の寶船にのりて、福の神とす。これに例の心學者流は道徳觀念を付會して壽老人は壽命、大黒天は知足、福祿壽は人望、蛭子は正直、辨財天は愛敬、毘沙門天は威光、布袋は大量を示す。此の七つを心に體せば福なるべしといふ。「應機接物の手段としては面白し」とあり。
この風習は古くより行はれたりと見え、足利氏時代には、將軍家を始め之を用ひたるが如し。近世、殊に緣起を祝ふ場所にては、盛んに競ひて買ふ風あり。〔季語〕寶枕・[illegible] 初夢・[illegible]

例句

寶船

須磨明石見ぬ寢ごゝろや寶船　嵐雪（玄峰集）
夢明けて浪のりぶねや泊瀬寺　同（同）
やごとなき一筆がきや寶船　召波（春泥發句集）
寶船御枕香ぞいや高き　同（同）
寶船譯の聞へぬ寢言かな　太祇（太祇句選）
寶船慶子が筆のすさび哉　蕪村（新五子稿）
たから舟嵐のしらぬ一間かな　蓼太（蓼太句集）
蓑笠に庵の狹さよ寶船　同（同）
抽斗や寶舟買ふ錢五文　露月（露月句集）
寶船貧の灯赤くしたりけり　鼎三醉（鼎三醉句集）
庵主の坊主枕や寶船　鬼城（鬼城句集）
寶舟且一片の反古かな　犢面坊（深山柴）
夢の跡皺になりけり寶船　放江（放江句集）
寶船こゝろすなほに敷いてねる　蚕樓（辛未句鈔）
寶舟大日の丸を畫きけり　月斗（同人俳句集）
夢もなき身の描きよ寶船　蝶衣（蝶衣句稿）
我心歌の意知らず寶舟　碧童（明治一萬句）
裏白の上に敷き寢や寶舟　八重櫻（同）
今朝さめて波濤跡なし寶舟　瓦全（昭和一萬句）
寶舟敷いて寢し子の鼾かな　零雨（愛吟集）
寶船われに知らさず敷きありし　雨丁（漁火）
たふさかに年寄耳や寶舟　青畝（ホトトギス）
寶舟敷き寢の枕高々と　王城（同）
授かるや尼が手摺の寶舟　桐一（同）
草庵や泊り客にも寶舟　淡夢（同）
寶舟遠きむかしの瓦版　雅喬（同）

參考　こはもと支那の民俗、禍災を船に乘せて流すといふよりいづ。唐の韓愈の「送窮文」にも見えてゐる。初め窮鬼を船に乘せて川に流し棄て

し呪ひより後、船上に福神をのせるに至つた。

貘枕　貘の枕　貘の札

季題解説 正月二日の夜、貘を畫きたる紙を枕の下に敷きて寢るを貘枕といふ。昔は節分の夜に行ひしこと寶船に同じ。蓋し、支那の俗說に、貘は夢を喰ふ獸なりといへば、凶夢を見ざるために敷くなり。貘は犀に似たる奇蹄類の獸なり。**參照** 寶船

（貘之圖）

例句　貘枕

貘枕一睡にして夜明けたり　蕪塱窟（木虫句集）
貘枕と二世の幸をゆめみけり　松華（戊辰句鈔）
貘敷て錦のくゝり枕かな　月斗（懸葵）
枕外す女夢なし貘の札　同（同）
女共が迷ひの夢を貘枕　句佛（薊子庵句抄）

初夢

古書校註

【山之井】立春の朝の夢なり。（一）

【栞草】紀事に云ふ、凡初夢とは大晦日の夜より元日の曉に至るの夢也。「年くれぬ春來べしとは思寐のまさしくみえてかなふ初夢」西行。

【年浪草】紀事に曰く、凡そ初夢とは、大晦日の夜より元日に至る曉の夢也。故に舊年晦日の夜、禁裏畫船を白紙に貼して、宮方（二）及び諸臣に賜ふ。地下良賤（三）も亦畫船（四）を以て臥榻の被底（五）に布て寢ぬ。今晦日の夜、吉夢有るときは則ち來歲福を得ると云ふ。若し惡夢を見るときは、則ち翌朝元日の謂也是を流水に付す。是を惡夢を流すと謂ふ。和俗斯の船内に種々の珍寶を畫く、故に寶船と稱す。近世是も亦梓に鏤めて兒童市中に賣る、大に寶船々々と呼ぶ。是れ又中華紙船の類乎。（六）〇月令廣義に曰く、古夢、注に其の歲時の天地の會を觀、陰陽の氣を辨ふことを掌る、日月星辰を以て夢の吉凶を占ひ、季冬王夢を聘して吉夢を王に獻す。（七）

註（一）初夢を立春のものとする季時の說尚考ふべし。（二）宮方　皇族方。（三）地下良賤　下々の身分良きもの及身分賤しきもの。（四）寶船　寶船を畫ける繪、又書きたる寶船別）寶船敷を看よ。（五）衾褥の被底　寢床の下。（六）寶船敷の條を參看せよ。（七）夢を占ふ事、甚だ由なるに似たれども、又以て古昔の事を叙諸に付せざるの志を見るべし。

季題解説 昔は大晦日の夜より元日曉に至る間に見るものを初夢と云ひたり。現今京阪地方にては節分の夜より立春の曉までの間に見るものを初夢といふも、東京地方にては、二日の夜の夢を初夢といふ習慣なり。**參照** 寶舟　貘枕

例句

初夢

初夢や額にあつる扇子より　其角（五元集拾遺）
初夢に古郷を見て涙かな　一茶（一茶句帖）
初夢に猫も不二見る寝様哉　同（九番日記）
初夢や追れてありく須磨の波　乙二（をのゝえ草稿）
はつ夢や吉野龍田の花盛　子規（子規全集）
女來よ初夢語りなぐさまん　同（同）
隔て住むや子の初夢に吾のあり　乙字（乙字句集）
初夢や兒孫の中に寝て安し　同（明治一萬句）
はらからが初夢語る灯かな　鳴雪（鳴雪句集）
初夢の嘘ついて人を喜ばす　露月（露月句集）
初夢の吉に疑無りけり　青々（妻木）
初夢や富士飛び越えて花に月　古白（古白遺稿）
初夢や美人を天の一方に　十框（十框句集）
初夢に羆熊の吉を卜し得たり　橡面坊（深山柴）
初夢や白雲起る書架のへん　木母（柚味噌）
初夢や到る處に青山あり　小鮎（最新二萬句）
初夢に拾ふあゆびの小鈴かな　蝶衣（蝶衣句稿）
初夢の覺めてゆくへや小蓬萊　寒樓（明治新俳句集）
初夢の何やらなりし忘れけり　氣石（落椿）
初夢も無くて寧足袋の裏白し　水巴（年刊俳句集）
朝寝して初夢もなき男哉　青嵐（明治俳句）
初夢の大きな海を見たりけり　花笠（同）
初夢に大いなる毬を買ひけり　みどり女（昭和模範句集）
初夢や獨占ふて曰く吉　松軒（春夏秋冬）
翌る日や君の初夢買はまくす　未央（續春夏秋冬）
初夢を占はしむる王者かな　春草（同）
初夢やうら〳〵として金砂子　月斗（同人俳句集）
初夢やほの〴〵さめし東山　冬葉（故郷）
初夢や晴々と亡き母の顔　孤軒（孤軒句集）
初夢もなくて覺めたり馬足掻く　拘水（現代俳句大觀）
初夢の目に拭はるゝ露の如　土酒（大正新俳句）
初夢路屏風の山の麓より　梧月（同）
初夢のおぼゆるとなく子の咄す　如露露（年鑑俳句集）
初夢や祕めて語らず一人笑む　蘇南（蘇南遺唫）
初夢や判じ煩ふ三世相　松宇（松宇家集）
三人に一人初夢見たりけり　青楓（明治一萬句）
初夢を見は見たりしが忘れけり　鶯池（鶯池句集）

初夢や蘆生の悟り我の凡　一了（青嵐）
初夢のまさ／＼と手に貴かな　得川（[illegible]）
初夢や枕ならぶる梅[illegible]　四組堂（同）

[解説] 山家集巻頭の歌に「年くれぬ春来べしとは思ひねにまさしく見えてかなふ初夢」とあり、立春前夜の夢をいふこと明である。今日では二日の夜寶船を枕の下に敷いて寝る夢をいふ。

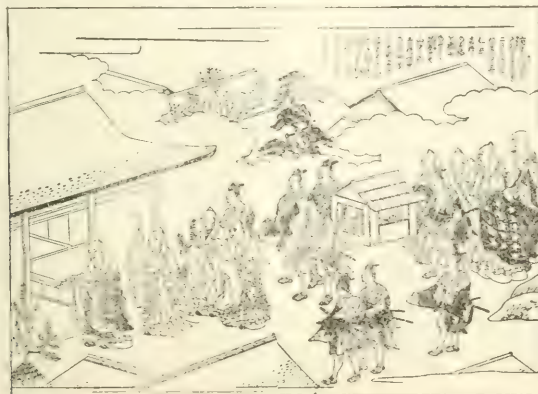
初灸（はつやいと）

[解説] 正月に灸をすゑること、初灸といふ。[季節] 春―二日灸（ふつかやいと）

[例句] 初灸

若菖蒲湯選し初やいと　才丸（江戸[illegible]）
初やいと顔も濃淺し涼川　由吉（同）
風門や身の花思ふ初やいと　如船（同）
忘れ草手に餅生り初やいと　言水（同）
[illegible]の[illegible]初灸[illegible]へり　政信（東日記）
風の手よ障子[illegible]初やいと　茂則（同）
初灸聴病神にけがるべし　口青（同）
初灸吉野ふみしも思ひ出に　五空（五空句集）

有馬の湯開（ありまのゆびらき）

[解説] 一月二日。攝津國有馬温泉は古来温泉を以て聞こゆる。古に湯山町といへり。武庫川の一支流なる有馬川の上流地六甲山（一に武庫山）の北麓にあり、東西南の三面は山巒を負ひ、北方は有馬川の渓谷に面して開豁なり。こゝに例年、正月二日入湯始の儀あり、同所温泉寺（今は清涼院と號す）の開基行基菩薩及中興仁西上人の木像を輿に舁きのせ、十二坊の主及町内名譽職等供奉し入湯式を行ひ、終りて輿を舁きて町内を巡幸あり、歸院後大般若轉讀をなす。

[異名] 湯殿始（ゆどのはじめ）

例句

有馬の湯開

さゝかにに初湯の御輿むかふなり　大江丸（はいかい袋）

湯開や雪の有馬の十二坊　冬葉（獺祭）

湯開や年玉に買ふ有馬筆　三幹竹（懸葵）

聟押し（むこおし）

季題解說 正月三日、常陸國稻敷郡舟島村の阿彌神社にて前年の正月三日以後他村より來つて新聟となれる者を社殿に招じその進む時土地の若者途上に待ち受け、左右押し合ひ押し拔き、これを困らす風習あり。これを聟押しといふ。水祝ひなどに類したるものなるべし。 參照 水祝ハヒイ

女禮者（をんなれいじや）

女賀客（をんながきやく）　女禮（をんなれい）

季題解說 女の年賀客を云ふ。婦人の廻禮は多く四日以後より行はるゝ習慣あり。 參照 禮者レイジヤ

例句

女禮者

連れ立ちて桃李の女禮者かな　月斗（同人俳句集）

女禮者揃ひの小紋著たりけり　開去（同）

供長く待たせて女禮者かな　梓弓（現代俳句大觀）

正月のことをさめによめる

居蘇一具女禮者にのこしけり　梓月（續紅調集）

四五人の女禮者や若つくり　女々（年刊俳句集）

女禮者滯留日あり梅咲いて　陽紅（青雲抄）

里下りの女の禮者迎へけり　三幹竹（同）

垣の鈴女禮者が鳴らしけり　著森（最新二萬句）

つゝみものさげたる女禮者かな　修山人（年鑑俳句集）

女賀客

日暮れたる女賀客に灯しけり　たけし（虛子選雜詠選集）

女禮

ひと年を語盡すや女禮　唫風（發句類聚）

棚探し（たなさがし）

季題解說 正月四日、三ケ日間の祭祀の供饌又は嘉祝の殘りものなどを探し集め、煮て食するを棚探しといふ。又福沸しを棚探しの別名とする說あり。

例句

棚探し

姪の來る御禮遲れや棚探し　水棹（懸葵）

疎き友ふと來る日なり棚探し　同（同）

棚探し餘瀝に醉の買ひ足らぬ　同（同）

雪に捨つ齒朶楪や棚探し　水明溪（同）

新年會（しんねんくわい）

新年宴會（しんねんえんくわい）

季題解説（シンネンエンクワイ）　俗間、新春を祝ふために宴會を催すを云ふ。〔傍題〕新年御宴會

例句

新年會

醉蟹や新年會の殘り酒　子規（子規句集）

折詰の海老大いなり新年會　茶居（閑古鳥）

割箸の古もめでたし新年會　默人（靑嵐）

出初（でぞめ）

消防出初（せうばうでぞめ）　出初式（でぞめしき）　出初（でぞめ）　鐘（がね）　梯子乘（はしごのり）

季題解説　一月、各地にて消防夫集りて消防の出初演習をなす式を、消防出初、出初、出初式といふ。模擬火災、梯子の曲乘り等の餘興ありて、人出多し。東京にては一月六日丸の内にて行はるるも、地方によりては二日・四日・五日・七日・等にも行ふ所あり。因みに、防火の制度は江戸時代、慶長六年以降たび〳〵の大火に促されて、享保に入りて、その制度確立せしものなり。火消は最もいなせの職とされ、その出初は、古くより盛に行はれしものなり。

例句

出初

大江戸の一夜の雪に出初哉　露月（露月句集）

朝日影出初の梯子纏かな　碧童（明治一萬句）

こゝに又出初くづれのゐたりけり　虛子（ホトトギス）

四日晴れ東叡山の固め鳶　天郞（東　圖）

曉天の霜に出初の半鐘哉　五空（五空句集）

藁の火に出初めの水を筒祝ぎぬ　三山（日本俳句鈔）

空晴れて風早き日の出初かな　井村（續春夏秋冬）

西東鳶の出初や四日晴　辰生（同　）

出初式雪に纏をたてにけり　句雨（同人俳句集）

不忍の霜の深さに出初かな　孤軒（孤軒句集）

凍雲のあかつき晴し出初式　夢想子（閑古鳥）

鐘を打つ人に旭のさす出初かな　月人（草上俳句集）

出水式放水虹をゑがきけり　旅滴（同）
神風の雪吹き晴れぬ出初式　冬葉（大正俳句選）
北風に晒す面てや出初式　柳之（昭和模範句集）
出初式木遣も遠く聞えけり　伯洲（明治一萬句）
日に光る馬簾に風や出初式　一岳（青嵐）
浦風や雪降る中を出初式　禾口（大正新俳句）
出初戻り御慶述べ行く聲高に　九萬字（同）
晴れきつて山々近き出初かな　鵑子（現代俳句大觀）
聳え上る三つの塔や出初式　たけし（同）
總監の馬上ゆたかや出初式　梅莊（同）
鳶口に朝日かゞやく出初かな　石稜（同）
雪を蹴つて出初の喞筒通りけり　東雲（同）
駿し見る富士や出初の梯子乘り　秀山（同）
一村の三寒晴れや出初鐘　休山（昭和一萬句）
出初式うかと半鐘に起されし　繁枝女（懸葵）

六日年越（むいかとしこし）

季題解説　正月六日を六日年越といふ。七日正月の前日なるため名づけられたるものなり。〔參照〕時候　七日正月（なぬかしやうぐわつ）　冬―年越（としこし）

例句

六日年越
あたゝかに六日年越よき月夜　白水郎（白水郎句集）

松納（まつをさめ）

松取る（まつとる）　門松取る（かどまつとる）

季題解説　門松をとりはらふことを松納めといひ、松取る・門松取るとも云ふ。東京にては六日の夕方に取るを例とし、京阪地方にては舊慣の如く、十四日の夕べに之を撤す。〔一茶〕門松

例句

松納
江の家や人ひとり出でゝ松納　庭後（江戸庵句集）
梅柳松は納めて束ねけり　觀魚（續春夏秋冬）
學僕の松を納むる暮雪かな　奇遇（同）
松納め里は寢雪となりにけり　竹の門（懸葵第一句集）
門迄の雪の深さよ松納　左衞門（ホトトギス）
此町や後れ先だつ松納　虛子（同）
松をさめ内は莾のいそぎ哉　梓雪（梓雪句集）
山日和庭の子雪松納めけり　不喚樓（不喚小什）
隣家より歸り來りて松納　溫亭（溫亭句集）
雪ならん二本の松も納めけり　梨葉（梨葉句集）

松納

木場の家霜ふかき松納めけり　蕙子（年刊俳句集）
月夜鳥仰ぐ子と松納めけり　只竹（同）
四五日の焚して來たり松納め　波那女（昭和[illegible]句集）
境内に松納めする焚火かな　八重櫻（明治一萬句）
雪晴れの日の穩かに松納　雨青（懸葵）
買ひ足してなほ喰ふ餅や松納　川芎（同）
ものゝ足らぬ幾日つゞきて松納　芋洗（同）
晴天の風音さびし松納め　荻聲（同）
裏門や納め忘れの松淋し　鳴雪（最新二萬句）
松納門を牛往く山家かな　極浦（同）
葛飾や山口素堂松納　朱泉（同）
松納めし穴に捨てある蜜柑哉　詩朗（現代俳句大觀）
松納めの今日までを凪つゞきけり　句佛（我は我）
掃きよせしことよごれし雪や松納め　三幹竹（年刊俳句集）

松取る

松取りて常の昔日に成にけり　不角（續の原）
松とりて閒日頃の松の月　曉臺（三傑集）
ついて來て松取るを惜む童かな　蝶衣（かりがね）
松取れて月夜淋しき大路かな　橡面坊（深山柴）
松を取る門に誰が手ぞうつくしき　梨葉（梨葉句集）
松取つてたゞの門なる小家かな　樂南（最新二萬句）
羽子の子にはや門松のとるゝかな　茶泊（ホトトギス）
されば人ひたなぐり取る六日松　寥松（發句題叢）

參考 嬉遊笑覽に「松かざり昔は久しく立置きたり。寛文二年正月六日町觸に松かざり明七日朝取可申事、其の後もなほ止ざりしと見えて寛文十年戌正月父おなじ法度の觸ありて來年よりは相觸申間敷候間毎年左樣心得可申候」とみえて皆る。武家にては久しく立おくものあれども大方は門飾を取りて木梢を折りて插おく。この風習今日もありて鳥總松といふ。

鳥總松（とぶさまつ）

季題解說 門松を取拂ひし跡に、松の梢の一枝を折りて插す。その形鳥總に似たるを名づけて鳥總松といふ。古歌に大樹を伐れば梢の一枝を折りてその傍に插し樹靈を祀ること見ゆ、これらの餘風ならんとの說あり。［參照］松納（イツヲサメ）

例句

鳥總松

鳥總松雪沓はたく石置きぬ　ひで女（閑古鳥）
たそがれやどこの門にも鳥總松　みづほ（現代俳句大觀）
鳥總松ひたして暮の雪の水　南畝（同）

[illegible]の巷となるや鳥總松　麥門冬（昭和一萬句）
鳥總松に出て羽子つけり料理人　波馬女（現代俳句大觀）
打ちつゞく晴れ淋しさや鳥總松　龍雨（年刊俳句集）
寬永寺にいつ來しことぞ鳥總松　十二星（鐘　氷　集）
よらで過ぐ知るべの門や鳥總松　淡路女（ホトトギス）
朝の雪地を白うしぬ鳥總松　滴翠（同人俳句集）
門廣く掃いて淋しや鳥總松　素石（木　虫　句　集）
鳥總松犬が嗅はへて走りけり　木豆（同　　）
鳥總松一夜の雪に埋りぬ　竹門（ゆく春第一句集）
敷砂を盛りて插しけり鳥總松　梨葉（年刊俳句集）
鳥總松宵の深さのそよぎなく　禾公（昭和模範句集）

薺賣

若菜賣　祝菜賣　七種賣

【季題解説】　薺賣は七日正月に用ふる料を賣りあるくものをいふ。【參照】　薺打　若菜摘

【實作注意】　正月なること論なし。但し多くは六日に賣り歩くものなれば作句の場合その心得を忘るべからず。若菜賣・七種賣も同樣なり。

【例句】
薺賣

きのふより若菜摘そへ薺賣　杉風（杉風句集）
京縞の頭巾で出たり薺賣　曉臺（曉臺句集）
薺賣鮒の釣場をしへけり　白雄（白雄句集）
薺賣我子になれよ錢くれん　青蘿（青蘿發句集）
薺賣おはバヽ付けてみたりけり　隣佛（明治一萬句）
薺賣石藥師より御所に入る　四明（四明句集）
提原が門を出でけり薺賣　梨郷（ナカナキ）
風車買うて戻るや薺賣　子角（現代俳句大觀）
注連も早八瀨を出て來し薺賣　句佛（我は我）

若菜賣

きのふけさ足の早さよ若菜賣　杉風（杉風句集）
おもたくと雪つけてこい若菜賣　來山（いまみや艸）
腰みのや己が磯田の若菜賣　曉臺（曉臺句集）
若菜賣春のことほぎ申しけり　栗人（最新一萬句）
雪うすき京のあしたや若菜賣　子雀（年刊俳句集）
美しき賣聲よばん京若菜　柳子女（[illegible]　）

若菜摘

若菜狩　七草摘　初若菜　若菜舟　若菜摘歌

【古書校註】
【山之井】　若菜　初わかな　七くさ　なゝな　ほこべら芹　菁（かぶら

ななり）ごぎやう　すゞしろ（すゞな）　佛の座　菜つむ（薺菜つむ）惠具摘　千代水菜（若菜也　藏玉）ふくわかし　わかなはやす。

昔は若菜を上の子日（一）に内藏寮（二）並内膳司（三）より禁中（四）に奉れるとなり、或は十二種供する事も有しよし、公事根源に侍り。其中には芹・蕨・葵・蓬（五）等も有、今は在家（六）七日に羹わかしとてこなかきを祝ひ侍り、六日の曉より七くさはやすとてわかなを盤にのせて唐土の鳥と日本の鳥となどいふ事を打はやし侍り。

【栞草】公事根源　内藏寮並内膳司より正月上の子の日に是を奉るなり、寛平年中より始れることにや、延喜十一年正月七日に後院（七）より七種の若菜を供す云々。○七種の條見合すべし

【栞草追加】　こながき祝ふ、靑藍云増山之井　若菜の條に云、昔は若菜を上の子の日に、内藏寮並に内膳司より禁中に奉れるなり、或は十二種供することもありしよし公事根源に侍り、今は在家七日に羹わかしとて、こながきを祝ひ侍り、云々。今は在家といはれたる文意をもて按ずるに、四季部類公事の部に糝七種のあつもの奉ると也、云々、注したるは誤か、此事公事根源及び後水尾院年中行事等にもみえず、且又糝とばかりは當季通ならず（八）祝ふの詞をそへて可ならんか、はなび草には七日のこながけと出せり。和訓抄　こながき、和名抄薕をよめり、又糝をよめり、字書に糝は以レ米和レ羹也といひ、餗糝といへば粉菜羹雜るの義、米粉をもて菜羹を和するなり、云々、こながきとは今の菜粥の事也。

註（一）上の子日、上旬の子の日、こゝには正月初めの子の日を云ふ。（二）内藏寮（くられう）ウチノクラノツカサ、中務省に屬す、金・銀・珠玉・寶器・錦綾・雜帛・氈褥・御服・裝束等を掌る。（三）内膳司（ないぜんし）ウチノカシハデノツカサ・古へ宮内省被管の司、御膳の事を掌る。（四）禁中、内裏。（五）苣（ちさ）蕨（わらび）葵（あふひ）蓬（よもぎ）（六）在家　平民の家　（七）後院　後宮　天子の與御殿。（八）如何なる季節に當るか判然しない。

季題解説　人日に用ふる七種の菜の總稱、薺・蘩蔞・芹・菁・五形・スヾシロ・佛の座の七種の若菜をいふ。正月七日、摘みて羹とし食へば萬病を除くといふ支那の古俗に習ひ、古は宮中の内膳司より、正月上子の日に七種の若菜を奉ることとあり、これを若菜を供すといふ。昔は上子の日なりしが、後世七日となり、今日も亦俗間にこれを粥として食ふことゝ行はる。千代名草の古名あり。七

種のうち薺のみにても、又、薺及び二三種にても若菜といふ。【參照】若菜を供ず　七種　地理―若菜野　植物―若菜

【例句】若菜摘

畠から頭巾よぶなり若菜摘　其角（五元集）
菜摘哉扇二ツをとぶこてふ　同（同）
土手の馬くはんを無下に菜摘哉　同（同）
裾折て菜をつみしらん草枕　嵐雪（玄峰集）
とゝははやすめば聲若し菜摘歌　同（同）
今ひくも小松がはらのはた菜哉　杉風（杉風句集）
若菜摘敷ものやらうさん俵　去來（去來發句集）
かゝる物賣ぬ代ゆかし若菜摘　蓼太（蓼太句集）
若菜摘む人落合ぬ紙屋川　曉臺（曉臺句集）
此門を名乘してゆけ若菜摘　同（同）
褄や傘をさゝせて若菜摘　同（同）
松かげにならびてうたへ若菜摘　同（同）
若菜摘む人を知る哉鳥靜　同（同）
金春がひと群出たり摘若菜　巢兆（曾波可理）
亘燵から十足出て摘む若菜哉　也有（蘿葉集）
松ははや見かへる跡や若菜摘　同（同）
足にまだふむ草はなし若菜摘　同（同）
若菜摘野になれそむる袂哉　樗良（樗良發句集）
若菜摘てやがてけぶりを立にけり　成美（成美家集）
道くさも藪のうちなり若菜摘　千代女（千代尼發句集）
若菜摘けふより花の道廣し　同　同
茜うら帶にはさんで若菜摘　一茶（享和句帖）
眼にあかで暮るゝまで摘若菜哉　梅室（梅室家集）
犬ひとり先に立けり若菜摘　蒼虬（蒼虬翁發句集）
うなゐ子が地にひく髮や若菜摘　松宇（松宇家集）
若菜摘み〳〵京の日は暮れぬ　鳴雪（鳴雪俳句集）
山の如く若菜摘みたるつぶね哉　同（同）
この子茲に嫁ぎて摘める若菜哉　露月（露月句集）
摘む人の傍に寄り若菜つむ　溫亭（溫亭句集）
氏人や出雲八重垣若菜摘む　橡面坊（深山柴）
森かげに雪をひく野や若菜摘み　冬葉（冬葉第一句集）
風影や香久山負ふて若菜摘む　董太（現代俳句大觀）
晴れきつて底冷强し若菜摘む　好翠（懸葵）
曙も古りし心や若菜摘　九斤子（同）
磯畑に早き梅かな若菜摘　蘆仙（同）

若菜摘

若菜摘嫁の小川を渡りけり　蘿洲　（懸葵）
村嬢もなほつゝましく若菜摘　素彩　（同　）
隠れ家を訪ひ寄る者や若菜摘　牛耳郎　（最新二萬句）
草の戸に住むうれしさよ若菜摘　久女　（年刊俳句集）
鳴きわたる蘆邊の田鶴や若菜摘　薫風子　（同　）
降りつみし雪うらゝなり若菜摘　三幹竹　（懸葵）

若菜狩

うたひ垂供のぞめきや若菜狩　定明　（はすのみ）
扇さひ人な咎ぞ若菜狩　也有　（蘿の落葉）

七草摘

七色もつむ手は芹に匂ひけり　同　（蘿葉集）

初若菜

けふ引し牛蒡も賣か初若菜　篤老　（自撰句帖）

若菜舟

若菜舟一ふしあれや歌之助　曉臺　（曉臺句集）
男女せぐゝまりゐる若菜舟　青々　（最新二萬句）

参考　若菜　春の初に野に出て若菜を摘み羹にして食ふのは、もと支那から傳へた習で、仙業を服して若がへる意を寓す。若き女子の手に依つて煮るのを本義とし、若菜の精ともいひて采女が供御に奉る七種の粥の本縁である。萬葉集巻十「春日野に煙立つ見ゆ嬢子らし春野の菟芽子摘みて煮らしも」。

薺摘（初薺、雪薺）

季題解説　七種粥に用ゐる若菜は薺を以て主となす。薺をつむ、また正月初めて摘む意にて初薺、雪を掻分けて摘む意にて雪薺とも用ふ。［参照］若菜摘　植物―薺

例句

薺摘

古畑や薺摘行男ども　芭蕉　（杜撰）
百人の雪掻きしばし薺ほり　其角　（五元集）
薺摘む野や枯萩もおもひ草　青蘿　（青蘿發句集）
摘むや薺小町の墓を二めぐり　鳴雪　（鳴雪俳句集）
堀川末の汚れ水も澄み薺摘む　四明　（四明句集）

初薺

山里や雪の下より初薺　潮雨　（紅[illegible]集）

磯菜摘

季題解説　磯菜は磯邊の若菜なりといふ。新古今集に「けふとてや磯菜つむらんいせ嶋やいちしの浦の海士の乙女子」とあり。若菜十二種の内に「水雲」とあれば海藻の類も磯菜ならんか。［参照］若菜摘

例句

磯菜摘

汐木あつめて焚火もしたり磯菜摘　蒼梧　（懸葵）
有磯海の蜑が小唄や磯菜摘　冬葉　（同　）

蕣蒿摘（をはぎつみ）　莵芽子摘む（うはぎつむ）

古書校註

【菜草】和名抄 蕣菜（一）一名莪蒿（二）和名於八木（オハギ）（三）崔禹食經 狀芥草（ヨモギ）（四）に似て香ばし、羹となして之を食ふ。夫木 けふはまた雪まのおはぎつみまぜて野べの若菜のかずやまさらん 信實 ○よめがはぎの條見合すべし。○蘘蒿（コウギ）（五）時珍曰、二月莖を生ず。葉食ふべし、野園家園に分つことを用ひずして叢生す、香氣あり、秋花をひらく、野菊に似たり。○ヨメガハギ、ヨメナ同物なるべし。オハギは似たれども別なり。

【いつまで暦】をはぎ摘　よめな也。

【年浪草】藻鹽草に、おはなつむといひてわかなとよめるもあり、又よまれぬもあり、莵芽とかく也、引歌 春日野はをはなつみけりなら山のこのめはるさめゆるくふるらん。○夫木 けふはまた雪まのおはぎつみまぜて野べの若なの數やまさらむ 信實 ○順和名に曰く、食經に蕣菜一名莪蒿、和名於八木、崔禹食經に云、狀芥草に似て香し、羹に作て之を食ふ。○詩小雅に曰く、菁々者莪、陸機注に卽莪蒿也。○本艸に時珍が曰く、蘘蒿一名莪蒿、小薊（六）に似て宿根（七）より生ず、百草に先んず。云々○萬葉 春日野爾烟立所見嬬嬬等四春野之莵芽採而煮良思毛（八）○礒菜は八重垣に云、礒邊のわかな也。若菜の題によめり。新古 けふとてやいそなつむらんいせ嶋やいちしの浦の海士の乙女子 俊成。若菜十二種の内水雲（モヅク）あり、海藻の類も礒菜ならんか。

註 （一）蕣菜　なづな。（二）莪蒿　つのよもぎ、（三）於八木（おはぎ）よめなの古名。（四）芥草　よもぎ。（五）よめがはぎ　よめな。（六）小薊　とあざみ。（七）宿根　古き根。（八）春日野に烟立みゆをとめらし春野のおはぎとりて煮らしも。

季語解説　蕣菜、一名莪蒿、和名、於八木とあり。嫁菜の一種にして、その狀は芥草に似て香し。蕣と同じく摘み、羹に作りて食すといふ。萬葉集に「春日野にけむり立ち見ゆ乙女らし春野の莵芽子とりて煮らしも」とあり。ここには莵芽子と書けり。参照 若菜摘（ワカナツミ）

恵且摘（ゑぐつみ）　ゑぐの若菜（わかな）　ゑぐの若生え（わかばえ）　ゑぐの若立（わかたち）

古書校註

【菜草】藻鹽草 芹の異名也。云々。顯昭が曰く、ゑぐとは女蔞と書てゑごとよめり、くとこと同音也、或は芹を云といふ義あれども、六帖には芹の外に別にゑぐをもあげたり、云々 ゑぐのわかな、ゑぐのわかたちとも云

【萬葉集】爲君山田之澤惠具採跡雪消之水爾裳裾所沾（一）

【いつまで暦】ゑぐ摘　芹也。

註 （一）君がため山田の澤にゑぐつむと雪消の水にもすそぬらしつ。

季語解説　藻鹽草に芹の異名なりといひ、蕣と同じく摘み祝ひ菜となす。萬

葉集には「君がため山田の澤に惠具摘むと雪消の水にもすそぬらしつ」とあり。惠具と書けり。【□□】若菜摘

例句

ゑぐ摘　ゑぐ菜つむあたりや去年の芋畠　正式（山之井）

七種

七草　薺粥　七種粥　七日粥　七草打　七草はやす　若菜はやす　薺打つ　若菜の夜　薺の夜　宵薺　若菜の日　薺の拍子　二薺　芹薺

古書校註

【栞草】「荊楚歲時記」正月七日七種の菜を以て羹を作す。是を食ふ人萬病なし○七種は芹、薺、鼠麹、繁縷、佛座、菘、蘿蔔なり。「世說故事苑」七種の菜を打こと諸子の考いまだ見ず。按に事文類聚に歲時記を引て曰、正月七日多く鬼車鳥渡る、家々門を槌、戶を打、灯燭を滅してこれを禳ふと、和俗七種を打つに、唐土の鳥が日本の土地へ渡らぬさきにと唱るは此鬼車を忌む意なり、板を打つは鬼車鳥の止まらざるやうに禳ふなり。「太平廣記」鵂鶹は即鵰なり、一名姑獲、一名夜遊女、又は鬼車と名づく、春夏の交、稍陰晦に遇へば飛鳴て嶺外に過ぐ、尤多し、人家に入り人の魂氣を鑠す、或云、常に血を滴る、血を滴らるゝの家は凶咎ありと。云々。

【年浪草】世諺問答に曰く、正月は小陽の月なり、又七日は小陽の數なり、よつて朝庭をはじめ私の家に至るまで宴會を催しあつものを食すれば萬病又邪氣をのぞく術なりと云々（紀事に曰く、今日良賤互に相賀し、昨日より今朝に至り家々湯燖薺菁薺等を砧几に載せて、杖を以て之を敲き、七種菜に代へて之を用ゆ。今日之を敲きし艸を拍と謂ふ。今朝是を以て菜粥と謂ふ。各之を食ふ。俗間燖七草の湯を以て瓜を漬けて之を剪る云々。○閩書風俗志に云、衆人七樽の菜果を採り聚めて羹と爲し、七寶羹と號す。○雜談抄に云、公事根源等の諸抄七日には七種の若菜とあり、十五日に七種の粥を獻ずる由也、資隆卿八條院へ書進する簡中抄又同じ、或人云、七種は七日の粥の事にて侍る、七種の粥は十五日の故實也、則七寶羹の義なるべし、菜果の果の義十五日に有よし見たりと、云々、○大宗家訓に曰く、七種の若菜を調へて、氏神並所の三寶、次に父母に獻じて後に食すれば、春の氣病、夏の疫病、秋の痢病、冬の黃病もやまず。又人に七魂と云は、天に七曜と現し、地には七草となり、是を取て食すれば我魂の氣力を増し命を延ぶと云々。○紀事に云、今朝の菜粥を以て福涌と謂ふ、四日も亦福涌と謂ひ、亦若水を煮るも福涌と謂ふ。何れが其の正を知らざる也○薺　本艸に時珍が曰く、薺は生ゆること濟々たり、故に之を薺と謂ふ、釋家其莖を取て燈を挑ぐる杖を作る、蚊蛾を避くべし。之を護生草と謂ふ、能く衆生を護るなり、大

小數種あり、小蕪は葉花莖扁にして味美なり、大蕪は科葉皆大なるも味及ばず、並に冬至後を以て苗を生ず、二三月莖を起すこと五六寸、細白花を開く、云々。詩に曰く、誰謂荼苦、其甘如薺と是也。和名なづなと云、秋冬より春ありて夏なし、故に夏なきの下略也。○繁縷　本艸に時珍が曰く、此草莖蔓甚だ繁し、中に一縷有り、故に名く、俗に鵝兒腸菜と呼ぶ。形に象る也、滋長し易し、故に滋草と曰ふ、古樂府に云、爲樂當及時、何能待來滋、滋は乃ち草の名即ち是也。正月苗を生ず、葉大いさ指頭の如し、細莖蔓を引き、之を斷てば中空なり、一縷有り絲の如し、蔬を作れば甘脆也、三月以後漸く老て細瓣の白花を開き、小實を結ぶ云々。倭名みき草、古歌あり。○芹　本艸に時珍が曰く、芹當に蘄に作るべし、艸蘄に從ふ、諧聲也、後省いて芹に作る。云々。○呂氏春秋に曰く、菜の美なる者に、雲夢の芹有り、雲夢は楚地、蘄州蘄縣に有り。○爾雅翼に云、地多く芹を產ず、故に字斤に從ふ、芹に二種有り、水芹は江湖陂澤の涯に生ず、旱芹は平地に生ず、二月苗を生ず、其葉節に對して生ず、其莖節稜有て中空なり、五月細白花を開く。云々。詩に云、觱沸檻泉、言采其芹云々。此草冬月あり、倭俗嚴寒の間尤賞翫す。和名セリ、其性一所にせまり合也、せまりの中略也、異名根白草、又ツミマシ草、又エグとも云。○菘　本草時珍曰、按に陸佃が埤雅に云、菘性冬を凌ぎ、晚に凋む、四時常に松の操有るを見る、故に菘と曰ふ、今の俗之を白菜と謂ふ、二種有り、一種は莖圓く厚く微靑一種は莖扁薄にして白し、其葉皆淡靑白色、八月以後之を種ゆ、二月黃花を開く。云々。是れ蔓菁の類、倭俗之を稱して菜と曰ふ、水田に在るを水菜と稱し、又浮菜といふ、圃に在るを畠菜と稱す、諸國に於て京菜と稱す、又水田に在るを菘と曰ひ、圃に生るを菁と曰ふ。云々。今すゞなとは小菜にて少き心とも云。○鼠麴草　本草、佛耳草、和名母子草、文德實錄に出づ、曰く、野に艸有り、母子草と名く、二月始めて生ず、莖葉白く脆し。云々。○蘿蔔　韓保昇が蜀本草に云、萊服俗蘿蔔と名く、按るに爾雅に云、突蘆肥、孫炎が注に曰く、紫花菘也。俗溫菘と呼ぶ、蕪菁大根に似て、俗雹突と名づく、本草に時珍が曰く、王禎農書に日、北人蘿蔔、一種にして四名、春破地錐と曰ひ、夏夏生と曰ひ、秋蘿蔔と曰ひ、冬土酥と曰ふ、其の潔白、酥の如きを謂ふ也、珍按るに、菘の菜名、冬に耐ゆること松柏の如きに因る也。萊服は乃ち根の名と、云々。是れ和に大根と稱するもの、七種にはスヾシロと云、スヾの詞すゞ菜の意に同じく小き心なり。シロとは根の白きを云、順和名に溫菘を古保禰と訓ず、是小大根なり、すゞの詞に叶へるにや。○佛の座　本艸に時珍が曰く、黃瓜菜、其の花黃なり、其の氣瓜の如し、故に名く、二月苗を生じ田野徧く有り、小科蕣の如く、三四五月黃花を開く、花と莖葉と竝んで地丁に同じ、但だ差小なる耳。云々。臭蒿一名土器菜、又田平子と名く、是れ尋常の七種の若菜と云、又公事根源には十二種

有り略す、

【新式】　七種　御形・蘩蔞・芹・薺・鈴菜・酒々代、是を七くさといふ也。又ある説に佛の座一説にたひらこ、むかしは十二種をつみけるよし、七くさ十二種、若菜十二種といふが本説なり、わかな・はこべら・わらび・あふひ・からほね・芝・せり・ちさ・なつな・えもき・水蓼・水雲。

【いつまで暦】　七草　芹　薺　五形　蘩蔞　鈴菜　酒々代（スヾシロ・ダイコン）・佛の座。

季題解説　正月七日、七種の菜を羹として食すれば、萬病を除くと云へる支那の古俗に習ひ、芹・薺・五形・蘩蔞・佛の座・菘・蘿蔔の七草を刻み、これを米粥に和へて祝ふ。これを七種粥と云ひ、この日を七種と呼び、且つこの行事をも七種と呼びならはしたり。これを刻む時、俎板の上にて叩き、「七草、なづな、唐土の鳥が日本の土地に渡らぬ先に」と諷ひ、摺粉木、又は庖刀にて叩きつゝ曉に及ぶ。この叩きはやすことを七草はやす・薺はやすと云ひ、又薺打つ・薺の拍子とも云ふ。又薺と菘菜の二種のみを用ひ作るものを二薺と稱す。

實作注意　七草の薺打は、七日の未明に行はるゝものとして作句すべし。昔は六日の晩に囃したるものとしての作例、

七草をうちて寢ねたる小家哉　青々

もあれど、

七草や跡にうかるゝ朝烏　其角

の例あれば七日の朝として詠むやうにすべし。〔参照〕供若菜（ワカナ）　若菜摘

例句

七種

七草や跡にうかるゝ朝烏　其角（五元集）
七種や明けぬに聟の枕もと　同（同）
七種の跡の拍子は鳥の骨　桃隣（古太白堂句選）
七草も過ぎて赤菜の寒さかな　浪化（浪化上人發句集）
七種や唱歌ふくめる口のうち　北枝（北枝發句集）
七草や兄弟の子の起そろひ　太祇（太祇句選）
七草や餘所の聞へもあまり下手　同（同）
七種は枯葉にしめる草履かな　沾徳（俳諧五子稿）
七草や袴の紐の片むすび　蕪村（狭萎集）
七草に鼠が戀もわかれけり　几董（井華集）
七種や御末かしらに藤ばかま　巣兆（曾波可理）
七種のうまや祭の猿もゆく　乙二（をのゝえ草稿）

薺粥　七種粥　七日粥　七草打　薺打つ

七草や都の文を見る日数　千代女　(千代尼發句集)
七種や七日居りし鶴の跡　青蘿　(青蘿發句集)
なゝくさや明日は野寺の初藥師　同　(同　)
七草や粥にあつまる門弟子　四明　(四明句集)
七草や油障子に雪の音　庭後　(江戸庵句集)
七種や薺すくなの粥すゝる　亞浪　(古今俳諧一萬句集)
なにごともなくて七草薺かな　菊狂　(同　)
七草や長鳴く鷄に霜朝日　三幹竹　(懸葵)
蓋取て野にもかうかと薺粥　見示　(類題發句集)
髭の邪魔いかにきのふの薺粥　也有　(鶉衣)
先づ春の匂ひも嬉し薺粥　二遊　(恒誠)
香に籠る薺の粥や持佛堂　青々　(妻木)
薺粥路頭の老に分ちけり　同　(同　)
薺粥箸にかゝらぬ緑かな　蝶衣　(續春夏秋冬)
朱雀野を偲び祝ひつ薺粥　子角　(同人俳句集)
薺粥薺の緑たゞよひぬ　四方太　(明治一萬句)
薺粥石に冷えたる末社哉　天哉　(懸葵)
薺粥神の折敷の染まりけり　木母　(同　)
心いよゝ七草の粥にうつろなる　駒村　(枯檜庵句集)
家をもち七草粥の焚く烟　夕村　(年刊發句集)
七種粥に正月ごころ逸りけり　一貫　(同　)
とけそめし七草粥の薺かな　立子　(昭和模範句集)
天暗く七種粥の煮ゆるなり　普羅　(普羅句集)
雜煮腹七種粥に調ひぬ　龜齡　(明治一萬句)
酒荒れの舌に七草粥熱し　瘤翁　(懸葵)
朝粥にみどり匂ふ早七日なる　竹の門　(竹の門句集)
境内に薺摘みけり七日粥　句佛　(我は我)
七草を三べん打つた手首かな　嵐雪　(玄峰集)
さはらびの七種打は寒からん　其角　(五元集拾遺)
七草を打つてそれから寢役哉　一茶　(七番日記)
七草をうち出しけり母屋の灯　裸馬　(昭和一萬句)
卒然と七草打つや壁隣　三水生　(明治一萬句)
七種や日出づる方に向ひ打つ　素水　(同　)
鶯も啼くやしぐ草はやす時　守水老　(守水老遺稿)
七草の古き歌にてはやしけり　たま女　(年刊俳句集)
よもに打薺もしどろもどろ哉　芭蕉　(續深川)
玉簾にきこしめすらむ薺打と　曉臺　(曉臺句集)
世わすれに薺打らん月と梅　士朗　(枇杷園句集)

薺打つ

薺打つ江戸品川は軒つゞき　成美（成美家集）
妹が子は薺打つ程に成にけり　同（同）
薺うつ遠音に引や山かづら　青蘿（青蘿發句集）
とばしりも顏に匂へる薺かな　其角（五元集）
雜炊の名もはやされて薺かな　支考（蓮二吟集）
深川の畠でたゝく薺かな　桃隣（古太白堂句選）
庖丁に袂もぬるゝ薺哉　浪化（浪化上人發句集）
ほとゝぎすわたらぬさきに薺哉　召波（春泥發句集）
親と子の間にこぼるゝ薺かな　乙二（をのゝえ草稿）
老の腰摘むにもたゝく薺哉　也有（蘿葉集）
君が代の薺をはやす拍子哉　子規（子規全集）
きぬ〳〵や薺に叩き起されつ　鳴雪（鳴雪俳句集）
薺打つや世にふる宮の古御達　紫影（かきね草）
こと〳〵と老の打出す薺かな　鬼城（鬼城句集）
薺打つて袴ながらの焚火哉　五空（五空句集）
薺打つ夜半に聞きぬ琴の塵　駒村（栢園庵句集）
なほ薺打つや登城の路の家　百花菴（百花菴遺稿）
薺の句薺うつ日を忘れけり　盧子（春夏秋冬）
薺打つ遠音こもるや明け霞　八重櫻（明治一萬句）
薺打て朝待たるゝ灯かな　碧童（同）
我戀の隣りや巳に薺打つ　喜風（同）
薺打つや撫で肩すべる紅襷　ゆかり（年刊俳句集）
大雪に明けてしづけし薺打　六松（閑古鳥）
打囃す薺や青き月の色　黄雨（現代俳句大觀）
及び腰に灯さゝげつ薺打　蝶衣（大正俳句選）
薺打つ隣持ちけり今戸住　韮兎（韮兎句集）
あかときの星に打ち出す薺哉　茂竹（靑嵐）
行燈の丁子こぼすや薺打　米水庵（嘆葵）

若菜の夜

市姫の神もおよらじ若菜の夜　乙二（をのゝえ草稿）

若菜の日

若菜の日晝から雨となりにけり　曉臺（曉臺句集）
若菜の日三輪の酒賣出初たり　同（同）
若菜の日摘むも白髮の根芹哉　也有（蘿葉集）

薺の夜

うち囃し馬も斷よ薺の夜　白雄（白雄句集）
隣〳〵うしろ隣も薺の夜　同（同）

宵薺

宵薺囃せば躍る鼠かな　松宇（現代俳句大觀）

二薺

景淸が所帶みせぬや二薺　其角（五元集）
母一人子一人旅の二薺　句佛（我は我）

芹薺

鶯ははなし飼なり芹なづな　乙由（麥林集）

芹薺踏よごしたる雪の泥　催然（催然坊句集）
夜明なば二種は世にふれ芹薺　素檗（素檗句集）
芹薺事かはりたる有どころ　梅室（梅室家集）
わすられぬ詞つゞきや芹薺　同（同　）

參考　正月七日、七種の若菜の羹を調じて食するは、若菜に若がへりの效ありとなすに出づ。支那の俗に一日を鷄、二日を狗、三日を猪、四日を羊、五日を牛、六日を馬、七日を人とするより人日とも言ふ。この日の儀式の盛に行はれるに至つたのは近世である。もとは何々の草と定まらなかつたのを後に芹・薺・五行・繁蔞・佛の座・菘・鈴代の七とした。唐土の鳥の渡らぬ先にと囃すは、支那で鬼車鳥といふ悪鳥の翔るを憎むよりいづるといふ。

七種爪（なゝくさづめ）　薺爪（なづなづめ）

季題解説　七種の日に薺を茹でたる汁に浸して爪を剪れば邪氣を祓ふといふ慣習あり。七種爪・薺爪といふ。參照　七草（ナナクサ）

例句　薺爪

薺湯やきのふ摘みにし爪の土　蜂友（初懐紙）
垢爪や薺の前もはづかしき　一茶（七番日記）
兄よ來よ弟よ來よ薺爪　梓雪（梓雪句集）
薺爪助炭にふれて染りける　握月（最新二萬句）
小鋏の付根の鈴や薺爪　梅屋（青嵐）
薺爪熱き炬燵をそびらかな　龍雨（龍雨俳句集）

糝祝ふ（こながいはひ）

季題解説　正月七日。古の俗に米の粉にて作りし羹に若菜を和したるものを食ふことを糝祝ふといふ。

例句　糝祝ふ

糝や夫婦の中の膳一つ　冬葉（懸葵）
糝の殘り菜鶏にあたへけり　蒼梧（同　）

鵯踊（ひよどりをどり）

季題解説　正月七日夜より八日朝にかけ、駿河伊久美地方にて男女相集つて踊る鵯をどりあり、今は男のみなりといふ。

曲搗き（きよくづき）

季題解説　曲突（きよくづき）　京都市内にて松の内の間、作事手傳の若者等十二三人一團とな

り、揃ひの印法被に友禪の襦袢袖かさねたるを着、鉢卷に紺の腹掛股引、麻裏のつゝかけ草履を履き、手に杵樣の三尺ばかりの樫棒を持ち、親方棟梁の家々を廻り、即ち門前に到れば一列に向ひ並び、中一二人横に立ちて日の丸扇をかざし、初春祝ふ祝儀歌の音頭を取り（この音頭取は年配者にて羽織着物の通常服）、他の若者の踊子は杵を手に音頭に連れ、振り面白く踊る。その杵は地を搗く樣、互に打ち合ふ樣、又高く空へ投げ巧みに手に受け踊る等、種々曲を盡す。踊り終れば親方棟梁の家より一同に祝儀を與ふ。斯くして市中諸方を廻る。古都の春の一景物なり。尚これに參加したるものにその年の祇園會鉾の音頭取の資格ありといふ。

例句

曲突

曲突や一町占めし門構　史明（同人）
曲突きの唄は目出度き若松よ　黒淵（鑿案）
曲突きの棒打つ音や門飾り　同（同）
中京や曲突き踊る風日和　同（同）

曲搗き

曲搗に藝者の酔ひの危ふかり　羊我（同）
曲搗や色香ほのめく袖の口　同（同）
曲搗や杵投げあぐる晴空に　同（同）

龜卜始（きぼくはじめ）

つけうら　うらかへ

季題解説　正月七日。伊豆八丈島に古風として行はるゝ龜卜の始あり。これを七日の「つけうら」といひ、十五日、龜卜を燒き、これを「うらかへ」といふ。七日に事なければ龜卜の燒初を例とし、事あれば更に吉日を撰みて燒く。

學校始（がくかうはじめ）

季題解説　一月八日。前年十二月二十五日より休業せし諸學校、八日より新しく授業を開始するを學校始といふ。

例句

學校始

遊び足らぬ思ひ學校始かな　多京（同人）
言ひ交す御慶學校始かな　芭角星（鑿案）
學校始スキーに乘つて來りけり　冬葉（同）

書房入學（しよばうにふがく）

季題解説　臺灣にては今尚ほ書房と稱する寺小屋式の教育補助機關留存し、正月に七八歳の兒童入學す。

[illegible]　書房入學　入學の書房に寄し芭蕉林　冬葉（[illegible]）

町汁（まちじる）

[illegible]　十日汁（とをかじる）　惣汁（そうじる）　町汁（まちじる）　十日汁（とをかじる）　汁會（しるくわい）

[illegible]【栞草】記事　十日の條、洛下の舊俗、今朝毎にみづから膳食を會所（一）に携ふ、此月頭人（二）一汁（三）を設く、これを汁會と稱す、喫し畢て法令（四）を讀て敎ふ、町中の男女此式を守る、正月九月兩然、云々。

註（一）會所（くわいしよ）衆人の寄合ふ所　（二）頭人（とうにん）頭取　頭目（かしら、をさ）。（三）一汁　一椀の味噌しる。（四）法令　町民の守るべき規則。

[illegible]　正月十日　昔京都にて町内の會所に年寄町人の會合初めあり、會者一同自家より膳食を運び、頭屋の年寄より一汁の饗應を設け出す、これを十日汁と稱す。喫し終つて年寄は諸司代よりの法令を讀みて一同に告げ敎へ、町内の男女はこの式を守りたりといふ。

[illegible]　町汁

町汁や鳥にうつる夕日影　　挑白（俳句大觀）

町切餅（まちきりもち）

茶配（おちやくばり）

[illegible]　正月十日。町汁の日、最近に家を買ひたる者、茶を配り、町切餅を出すを云ふ。[illegible]　十日汁ヲ見ヨ

入營（にふえい）

新兵入營（しんぺいにふえい）

[illegible]　一月十日、各府縣より、兵に徴せらるゝ壯丁の軍隊に入營するをいふ。[illegible]　冬　除隊者

[illegible]　入營

入營や老がいふまゝ墓まゐり　　呂仙（毎日俳句集）

入營の今日晴れ〴〵し男山　　庭水（同）

入營や奉公やめて家に待つ　　河野生（同）

入營やあけはなれ行く人の顏　　三豆（寄嵐）

入營や驛路の雪の深くして　　曲東（同）

入營の祝旗山河にかざしけり　　雅之（同）

入營や寒のゆるみしぬかり道　　撲天鵬（[illegible]）

初子の玉箒（はつねのたまばうき）

初子（はつね）あけふの玉箒（たまばうき）　玉箒（たまばうき）　蠶屋箒（こやばうき）

[illegible]　昔といふ草に子の日の小松を引き其し、箒に作り、正月子の日に蠶飼する家の掃き初めに用ふるを玉箒といふ。萬葉集に「はつ春の初子の

けふの玉箒手にとるからにゆらぐ玉の緒」と家持の歌あり。[參照] 子日の遊(ネノヒノアソビ)

例句

初子の玉箒　御座をはけこよひ初子の玉はゝ木　重頼（犬子集）
　よろこぶを見よやはつねの玉はゝ木　嵐雪（玄峰集）
玉箒　けふとてぞ猫のひたひに玉はゝき　巣兆（曾波可理）
　君がため起々とるや玉箒　百羅（竹の友）
蠶屋掃　蠶の神に玉はゝき木をかけにけり　冬葉（驢葵）
　緑濃き蠶屋掃の小松かな　同（同）
　松の葉のこぼれて青し蠶屋掃　蒼梧（同）

鏡開(かゞみびらき)　鏡割(かゞみわり)

季題解說　正月十一日。武家にて、男子は具足に、女子は鏡臺に供へたる鏡餅を食するを鏡開といふ。元二十日祝として二十日に行はれ、男子は刃柄(ハツカ)祝ふ、女子は初顏祝ふとて、二十日に訓を通はせたるものなり。近世は武家に限らず俗に十一日に祝ふ風あり。鏡餅は刃を以て切ることを忌み、手又は槌を以て破り缺く、故に開く・割る等の字を用ふ。京都にては四日に鏡開きをなす。[參照] 具足開(グソクビラキ)　講道館鏡開(カウダウクワンカガミビラキ)

例句

鏡開　伊勢海老の鏡開きや具足櫃　許六（類題發句集）
　學寮や祖師の鏡のあぶり喰　召波（春泥發句集）
　相撲取の金剛力や鏡割　鬼城（鬼城句集）
　荒蕪に粉が散る鏡開きかな　子角（現代俳句大觀）
　道場や鏡開きの新莚　春象（昭和一萬句）
　老刀自の手づから鏡開かな　碧泉（最新二萬句）
　火を鑽るや鏡開きの具足櫃　雪明（同　人）
鏡割　うれしさや養君のかゞみ割　召波（春泥發句集）

參考　もとは正月二十日、後改めて十一日とする。二十日は男子は刃柄(ハツカ)に女子は初顏に寄せて祝つたが、承應元年より二十日の御月忌に當るより十一日に變更せられた。かゞみびらきといふは、ひわり・ひく等の語をいみて斯く言ふ。

講道館鏡割(かうだうくわんかゞみわり)

季題解說　一月十一日、小石川柔術道場講道館にて恒例の鏡割式を行ひ、汁粉を製して振舞ひ道場開きをなす。[參照] 鏡開(カガミビラキ)

例句

講道館鏡割　道場の燈の穗ゆれなし鏡割　冬葉（驢葵）

眉あがる輓士若う鏡開きけり　蒼梧（同）

打叩き（うちたゝき）

〔季題解説〕正月十一日。越前の國俗に、打叩きとて、漁師等の間に船を祝ふ行事あり。〔参照〕舟乘初

〔例句〕

打叩き

荒海の浪にこだます打叩き　牛山人（懸葵）

打叩き船頭醉うて戻りけり　同（同）

稼初（かせぎぞめ）

〔季題解説〕正月十一日。山形地方にては早曉肥料に用ゐる秣を背負ひ、田畑に出で吉方に向ひて投げ、家に戻りてこれを祝する風習あり。これを稼初といふ。

〔例句〕

稼初め

烏共惠方に飛ぶや稼ぎ初め　竹石（懸葵）

花水祝ひ（はなみづいはひ）

〔季題解説〕正月十三日。越後國魚沼郡宇賀地の郷堀の内にて、花水祝ひといふ風習あり。北越雪譜に詳し。その要を摘めば、「前年に新婚ありつる家毎に神使を遣し、新婚の婿に水をそゝぐにて、神使たるべきは氏子の中の舊家にて、立派なる行列にてその家に至り、その家の親子は麻上下にて地上に出で迎ふ。神使の草履取、大聲に正一位三社の宮使者と大呼す。亭主地上に平伏し、これを座敷に引き祝儀あり。これは花水をたまふことを告知するにて、氏子の中數十軒の新婚あれば、此くの如くして數十軒めぐり、神使歸れば、踊の行列繰り出し、傘・矛に水引をかけ、次に假面にて天鈿女に出立ちたるもの一人箒の先きに紙に女陰を描きたるを附けてかたぐ。次に、これも假面にて猿田彦命に出立ちたるもの一人、麻にてつくりたる繩帽やうのものを被り、手杵のさきを赤くなして、男根を表示せるものをかたぐ。それより法服いかめしき山伏、それより踊のもの大勢群り行く、これを、「こうりんしやう」といふ。降臨象の意にて、天孫の降臨を象れるなるべし。さて、婿の方にては筵を敷き、それに新しき手桶に水を入れ、松葉と昆布とを水引にて結びつけ、筵の上におく。踊り手かたの如く筵のめぐりに群りて、『さんやめでたい、花水さんや、せなにあひせん、わかせなに』とて、婿に水をあびせるなり」とあり。〔参照〕水祝

〔季題解説〕

花水祝ひ

大雪の中の花水祝かな　北谷生（懸葵）

花水祝ひ　祝はじや花水桶の昆布松葉　芭角星（鷺葵）

繭玉（まゆだま）　餅花（もちばな）　團子花（だんごばな）　繭玉祝ふ（まゆだまいはふ）

季題解説　正月十四日、樹の枝に小さき團子を多く挿し、花の咲ける如くにしたるを飾りて祝ふ、これは養蠶の繭に象れるものにて繭玉と稱し、又餅花・團子花とも云ふ。東京亀井戸妙義社の初卯詣に賣る繭玉は、柳の枝に大さ繭ほどの餅、及び小判・寶の玩具などをつけたるものなり。賽者はこれを求め歸りて神前に供へ、養蠶の豐なること、財寶の多きことなどを祝ふ。

例句

繭玉

繭玉や金地皺れ黄の二枚折　鏡石（落椿）
繭玉や蒔繪連ねともす灯に　同（同）
繭玉に天神橋の嵐かな　鳴雪（鳴雪俳句集）
繭玉の玉の細採ら子ら居たり　寒月（寒月句集）
繭玉や紐あせたる弓袋　五空（五空句集）
繭玉や皆なゝゞゝと船問屋　鬼城（鬼城句集）
繭玉の揺曳として挿されけり　温亭（温亭句集）
繭玉を貰ふに壁鏡なかりけり　雪人（雪人句集）
繭玉をさすや初荷の戻り馬　未央（續春夏秋冬）
繭玉を著くる枝毎しだれけり　静波（ホトトギス）
繭玉に経話の火桶かな　濱人（昭和新選句集）
美しや繭玉ゝるす爐のほとり　素若（明治一萬句）
繭玉の小判照り合ふ火影かな　佐登女（同人俳句集）
繭玉の下に脊宴のあるじかな　殘鶯（同　古鳥）
まゆ玉にともるをまづるすがたかな　万太郎（現代俳句大觀）
繭玉や小判光りて俗ならず　瓦全（年刊俳句集）
繭玉や鏡屋が店の花ランプ　冬水（最新二萬句）
繭玉の映る金庫を拭ひけり　龍雨（龍雨俳句集）
繭玉や釣り傘並ぶ壺所　句佛（我は我）
夕日照るや繭玉かつぐ奈良の町　同（同）

餅花

餅花やかざしにさせる嫁が君　芭蕉（西がため）
もち花や母の心の闇の梅　言水（俳諧五子稿）
餅花や都しめたる家ざくら　同（同）
餅花や迦葉の笑しをさな貌　同（同）
餅花や灯たてゝ壁の影　其角（五元集）
餅花や鼠が目にはよしの山　同（五元集拾遺）
散事を待とはおかし餅の花　千代女（千代尼句集）
餅花の木陰にてうちあはゝ哉　一茶（おらが春）
かまけるな柳の枝に餅が生る　同（同）

木に餅の花咲く世にも逢にけり　同（七番日記）
もち花を咲かせて見るや指の先　同（九番日記）
餅花や火鉢に倚りて淡き戀　盪水（盪水句集）
餅花や神の實門挿まれ出づ　同（同　）
餅花に春を促す一間かな　蝶衣（新春夏秋冬）
餅花や壁におぼろの影もなし　同（同　）
末枝なる餅花紅をさしにけり　紫嶺（日本俳句鈔）
餅花のともし火春となりにけり　八重櫻（新春夏秋冬）
餅花や立て羽子板に枝垂れやう　蒲人子（ホトトギス）
餅花に二十日鼠かつきにけり　豐馬（同人俳句集）
餅花の小判らつりぬ塗り箪笥　繞石（落椿）
餅花や灯に美しき翁面　綾園（同　）
餅花の下春のよな炬燵哉　居白（最新二萬句）
餅花や障子に搖るゝ東風ならん　雷死久（同　）
餅花の影を重ねて燈りけり　鹵舟（青嵐）
餅花や何かと多き人出入　枚々（年鑑俳句集）
餅花や大天井に些のゆれず　宋斤（同　）
餅花やこの里振りの黄天井　五沼（同　）
餅花や小店ながらに美しき　三幹竹（懸葵）
餅花や晝屋が店も東風渡る　句佛（我は我）
我宿もよしの屋なれや餅の花　素仝（三千化）
賑かや米積む上の餅の花　炎天（懸葵第一句集）
團子花御嶽の晴れを戰ぎけり　鶯池（鶯池句集）

餅の花
團子花

[illegible]　曲玉に、團子花・餅花に同じ。新年に餅花を作り門口につけて祝するより、繭の豐産に想ひ及んでこの名がでたのであらう。

削り掛挿す

削り掛　削り花　年木　祝木　ほいたけ棒

[illegible]　【栞草】或書に、初子の日小松を引て、是を百莖にけづり、やごとなき御方（一）の御殿には東方にかけらるる也。これを削り花とも年木ともいへり、此遺意なるべしと記せり。今は十四日の夕べ、貴賤とも家毎に、柳の枝をいろ〳〵にけづりかけて門にさす也。

（祝木の圖）

（ほいたけ棒の圖）

註（一）やごとなき御方　天皇・中宮

[illegible]　正月十四日。江戸時代、十四日年越に行ひし行事なり。柳の枝を

いろ〳〵に削りて、門に掛く。又、横の木に一年の月の數を書きて、門に立て、接骨木を削り、門戶に繋ぐ。之は、初子の日に小松を引きて之を百莖に削り、やごとなき御方の御殿の東方に掛けられし事の遺意なりともいふ。又ほいたけ棒の異名あり。〔參照〕祇園の削掛（ギヲンノケヅリカケ）

例句

削掛

餅舊苔の蹼を削れは風新柳（けづりかけ）　蕪村（明和辛卯春歳旦帖）
正月も影はやさびし削かけ　蓼太（蓼太句集）
風そよぐ軒端の花や削かけ　佐幸（古今句集）
北殿の鎖せるまゝや削かけ　午心（新句類聚）
唐木屋のあるへかゝりや削掛　寥松（同　）

十四日年越（じふよつかとし）　十四日團子（じふよつかだんご）

古書校註

【栞草】〔紀事〕今夜、俗十四日年越と稱し相祝ふ。

【年浪草】（一）雜談抄に云、倭俗今日迄を注連の內松の內と云て、門松注連飾をなす、今日飾を取拂ひ、明朝の爆竹に燒あくると、云々。今日片田舍に は餌を製して是を十四日餌或は繭玉とて木の枝に貫て神棚へ供す、蠶飼家の祝にや、又削掛をさすなり、或說に云、初子の日に小松を引て是を百莖に削り掛てやごとなき御方の御殿には東方に掛らるゝと也、是をけづり花とも年木とも云と、云々。此遺意なるべし。（二）

註（一）原本此處に紀事を引く、內容栞草に同じければ略す　（二）原本以下に和漢三才圖會の齋の記を引けども略す

季題解說

正月十四日の夜を俗に十四日年越と稱して、團子などを作りて祝ひたる習慣あり、これを十四日團子といふ。〔參照〕小正月（コシヤウグワツ）

例句

十四日年越

十四日年越の坊にておこしかた　梓月（俳諧雜誌）

飾納（かざりをさめ）

注連飾取る（しめかざりとる）　飾取る（かざりとる）

季題解說

正月十四日夜、松過ぎの注連飾、其の他新年齋祝の飾ものを撤することを飾納といひ、又注連飾取る・飾取るともいふ。〔參照〕お飾り（オカザリ）　松の內（マツノウチ）

例句

飾納

出勤や飾納めもそこ〳〵に　一圖（昭和一萬句）
薪小屋の小さき飾も納めけり　夏竹（同　）

注連飾取る

注連とりて軒端淋しき雀かな　明香（現代俳句大觀）
注連流す渣荒れ海も久しぶり　公羽（ホトトギス）
納めたる注連を焚きゐる子供哉　蛾城子（昭和模範句集）

注連貫（しめぬきひ）

【季題解説】門松を撤し、注連を取る時、小兒等之を貫ひ集め歩きて、三毬打の料とす。これを注連貫ひといふ。【参照】左義長

【例句】

注連貫

注連貫の中に我が子を見出せし　虚子（虚子句集）
注連貫ひに柿も一串與へけり　煌星（同人俳句集）
色里や朝寝の門の注連貫ひ　松濱（昭和一萬句）
橙を落して行くや注連貫ひ　轉路（年刊俳句集）
餅や蜜柑入るゝ籠持ち注連貫ひ　斗柄（同人）
注連貫ひ親しき家を廻りけり　歩牛（懸葵）

土龍打（うごろもちうち）

土龍打（もぐらうち）　土龍封じ（もぐらふうじ）

【栞草】畿内正月十四日に此事あり。貝原先生（一）の歳時記にも、西國もまた此日薄暮より明曉に至るまで、土龍（二）を打とて、藁を束ねて地を打こと有といへり。浪花にては此日地上を海鼠を縄にてくゝり曳ありく也、鉦太鼓を打て拍す所もあり。和漢三才圖會　鼹鼠、海鼠を畏る、串海鼠の柱を以て、花園をおひうてば、鼹あへて入らず。云々。

【年浪草】蘇頌曰く、早蔵（三）には田害と爲る、云々。故に土民田害を憎て是を制し、地を打て畏れしむ。

【いつまで暦】十四日土龍の咒に畑を注連にて打廻る也。

注（一）貝原先生、益軒を云ふ。（二）土龍　もぐらもち。（三）早蔵　ひでりどし。

【季題解説】正月十四日。但し大阪等にては節分の夜に行ふ。この日、薄暮より夜にかけて、一家の下女下男、或は番頭小僧など、藁をつかねて地を打ち、又各自金盥等を叩きて、「土龍は内にか、とらがどんのお見舞ぢや」と囃し立つ。とらがどんとは海鼠のこと、土龍は海鼠を忌む故、土龍封じに海鼠の見舞なる詞を用ふるなりといふ。

【例句】

土龍打

蟄蟲も出でよと土龍打ちにけり　橡面坊（澤山柴）
遁穴を塞ぎて土龍打ちにけり　同（同）
打ち漏らす土龍目を見て潜みけり　同（最新二萬句）
夜は寺のむぐら打けり椈畠　青々（同）
土龍打行くや畝尻畝頭　櫻磯子（同）
晴明の暮の月夜や土龍打　小鮎（同）
ぬけて飛ぶ藁の穗しべや土龍打　石堂（昭和一萬句）
土龍打つくりぬ男の子の數を　草駄（同）
土龍打とらごどうんとこけにけり　梨葉（愛吟集）

土龍打

此穴を土龍打つ童かな　丁々（明治一萬句）
土龍打一百笞月氷る夜や　師竹（日本俳句鈔）
土龍圃生の雪に逃れけり　丁々（新春夏秋冬）
草の戸や壁にかけたる土龍槌　呂柳（ホトトギス）
ぼと〳〵と土龍打つなり霽の内　石鼓（同人俳句集）
藁笠に餅乞ひゆくや土龍打　後月（同　古　巴）
十ばかり打ちて代りぬ土龍打　王樹（現代俳句大觀）
おとゞひの唄こも〴〵に土龍打　天浪（同）
たそがれの土龍打ち出す隣り哉　嵐翠（懸葵）
土龍打を〳〵日の暮きけり　瓜青（同）
土龍打後園の雪を亂しけり　鷺潤（同）
海鼠いつ繩抜けゝらし土龍打　樂堂（同）

大津(おほつ)の藁打(わらうち)

【行事】正月十四日、昔、近江國滋賀郡大津驛にて夜酉の下刻より、神出三町各々家別に藁を出し、亥の刻を限り繩を作る。そのさま初め大木の松三本を伐り出し、是に藁をかけて作る、而して長き方を勝とし、翌十五日爆竹の火にて燃やすこと行はれ、これを大津の藁打といふ。

【例句】
大津藁打　大津繪にもれし藁打目出度けれ　三幹竹（懸葵）

幸(さい)の神勧進(かみくわんじん)

【行事】幸の神祭をする費用を勧進する小兒の業なり。北越雪譜に、「正月十五日まへ、七八歳より十三四までの男の童ども幸の神勧進といふ事をなすなり。少し富家の童これをなすには[illegible]木を上下より削り掛て錢の形を作る。これを斗棒といふ。これを二本大小にさし上下を蓋し、童僕に一升桝を持たせ、又紐ありて頸にかくるあり。その中へ五六寸ばかりの木を頭ばかり人形に作り、目鼻をゑがき、二つつくりて女神男神とし、女神は頭に綿をきせて、紙にて作りたる衣服に紅にて梅の花など畫く。男神には烏帽子をきせ、木をけづりて髭とす。紙の衣服に若松など畫く。この二つをかの桝の内に置き、幸の神勧進々々と呼ばはりて歩く。」とあり。この習慣、關東・東北の諸地方に行はれ、地方によりて多少其の狀況を異にすれども ほゞ相似たるものなり。【参照】宗教　幸の神祭(サイノカミマツリ)

【例句】
幸の神勧進　勧進の僕にまかりし童かな　冬葉（懸葵）
幸の神吹雪の中にうけにけり　同（同）

とびとび

【[illegible]】 正月十四日、九州にては今夜薄暮にて臼・杵・小判、いろいろのものを作りて折敷に連ね、異装に扮装したる者、家々に持ち歩きて、その折敷を戸の内にさし入れ置く。時にその家の主はこれを取り、その中に米餅などを入れ、もとの所にかへせば、持來りし人は直ちに取りて歸るを、かねてより水を汲み置きて、その人にかけ笑ひ罵る行事あり。これをとびとびといふ。〔參照〕かいづり

【[illegible]】 とびとび
とびとびに爐の影さす戸口かな　冬葉（懸葵）
とびとびや水祝はれし蓑と笠　屛峰（同）

ほとほと

【[illegible]】 正月十四日。因幡伯耆地方にて今夜祝事ある家に村中より祝物を贈れば、その返しに膳を設けて待ち、村の若者四五人打連れて唄ひつゝ家に入らんとするを、家人柄杓にて水を浴びせ祝ふ。若者等逃げ廻り、遂に裸體に蓑を着て入り込み、膳の物を食する奇習あり。之をほとほとといふ。〔參照〕水祝（ミヅイハヒ）

【[illegible]】 ほとほと
ほとほとの裸に蓑を着たりけり　冬葉（懸葵）
ほとほとや水に濡れたる顔ばかり　不水（同）

心竹（しんだけ）　御柱（おはしら）

【[illegible]】 正月十四日。名古屋の城下にて、辻の中央に長さ十間餘の大柱を建て、松竹等を備ふ。これを心竹とも、御柱ともいひ、市中の童子集り、水祝の遊びをなす。左義長の遺風なりといふ。〔參照〕水祝（ミヅイハヒ）

【[illegible]】 心竹
鐃鉢にあげ競ふ風や心竹　玉鉾（懸葵）
街道を一日塞げつ心竹　蒼梧（同）
御柱
注ぎ水のたちまち凍つ御柱　同（同）

伊達の墨塗（だてのすみぬり）　墨塗（すみぬり）

【[illegible]】 正月十四日。陸奥國伊達郡[illegible]館の村民、新婚者の家に近隣の人集りて、新夫婦の顔に墨塗るを祝儀とする風習あり。水祝の如き民間行事の一なり。〔參照〕水祝（ミヅイハヒ）

【[illegible]】 伊達の墨塗
墨塗や信夫女に伊達男　半白（懸葵）

御方打(おかたうち)

【季題解説】 正月十四日。甲斐の國の俗に、この夜、新婚ある家に多勢集りて踊り唄ひ、その家にては酒肴を出して、以てこれを饗するを御方打といふ。蓋し、水祝などの風習の變遷せしものなるべし。（參照）水祝

【例句】
御方打　御方打酒の座となり唄ひけり　龍王（懸葵）

嫁叩き(よめたたき)

【季題解説】 正月十四日。信濃國南佐久郡川上地方にては、花嫁のある家に、十四歳と十六歳との少年四人宛押しかけ行き、十四歳の者、陽物形の棒に御幣を付けたるものを持ちて嫁を叩き、十六歳の者はこれを監視し、式終れば別席にて酒食の饗應ありといふ。（參照）水祝

【例句】
嫁叩き　嫁叩きいまだけなはのそめきかな　沈生（懸葵）
嫁叩き巧みにしもとはづされし　鯱人（同）

糯打(もちうち)

【季題解説】 正月十四日。仙臺地方にては今夜、去年のこの日以來、新たに婚姻せる家に、さまざまの假裝をなして入り來り、「内か外か」と問ひ、内と答ふれば入つて座につき、その家にては酒食を出して饗應するの風習あり。これを糯打といふ。新撰陸奥風土記には「糯は望の字なるべきか、十五日の祝の前夜する意にてこれもよし」と附記せり。（參照）水祝

粥(かゆ)の木(き)

粥杖　祝杖　粥木　御祝棒　祝木

【古書校注】
【山之井】 ちひさきしもと二つにて、女の腰を打戯れ也。是にて打れたるものは、男子を產といへり。枕草紙にはかゆの木とあり、狭衣にはかゆ杖といへり。あづまのかたに、けづりかけといふものにて、人を打事これなり。
【栞草】 十五日粥の木にて女の尻をうてば、男子をもつ兆なりと一打こと有。女はうたれじと防ぐ也。枕草紙、狭衣物語などに見えたり、しかれども本文たしかならず。紀事・追加に云、信濃、飛驒、三河の三國にては漆樛の木を一尺二寸ばかりに切り、上下より削りかけて、さきの方に左巻のかたち、或は柳、櫻花のごときものを紙にて切り、粘して松煙にてこれを燻べ、其かたちをとり除くれば、白く其模様殘る、是を名つけて御祝棒と云、新婦ある家毎に入て新婦の腰をうつ。兒童の戯なり。

【新式】十五日、かゆの下燒あまりし木にて、ちいさきしもとをこしらへ、袖にかくし持て女の尻を打つたはぶれあり、是にあたりつる女ははらむといへり。

【いつまで草】ちいさきしもとにて、女の腰を打たはれる、是にて打たれたるものは、男子を産といふ。

【狹衣】十五日には若き人々、こゝかしこに群れ居つゝ、をかしげなるかゆつゑ引きかくしつゝ、互に窺ひ、又打たれじと云々、十五日粥の杖にて打つ古事、可レ勘、禁中今も粥杖にて女房を打てば、男子を生ずとて打つ也。

【枕草子】十五日は望粥の節供參る、かゆの木を引き隱して、家の御たち、女房などの窺ふを、打たれじと用意して、常に後を心づかひしたるけしきもをかしきに云々。

註 (一)しもと 笞 杖。(二)かゆを煮る釜の下を焚きたる薪の餘り。

季題解說 正月十五日。古、粥を焚きたる木を削りて杖としたるものを粥杖といふ。この杖にて子無き妻の尻を打てば、男子を設くると云ひ傳ふ。宮中の女房達もこれを行ひたること古き物語に見ゆ。又新婦を迎へたる正月にはその家毎に入つて新婦の尻を打つ兒童の戲れあり、これを「嫁たゝき」と云ひ、これに用ふる杖を「御祝棒」「祝ひ木」と云ふ。

又農家にて陸英を尺ばかりに切り、之に團子をはさみ、粥の煮え立ちたる時、この木にて掻き廻し、その木に神符などを挿み、田に持ち行きて水口に立つれば、その田に蟲害なく有利なりといひ、これを粥の木或は粥木といふ說あり。又粥の木は楊櫨を長さ箸程に二本切り、頭の方を削り掛けの如くに作り、鍋の粥の煮立ちし時、其頭をさしこみ、すぐに引あげ打返して、門の兩脇に一本づゝ挿すものを云ひ、粥杖とて女の腰を打つものとは同じからずといふ。〔季語〕水祝(ミヅイハヒ)

例句

粥の木
粥の木や女夫の箸の二柱　才丸（向の岡）
やろまいの十筋右衛門が粥木哉　六花（最新二萬句）

粥木
みす几帳逃ぐるを追うて粥木哉　東洋城（澁柿）

粥杖
粥杖の笑うて弱き力かな　吐月（發句類聚）
粥杖や作ならぬ太郎月　馬耳（同）
粥杖に逃ぐるふりして打れけり　三畝（類題發句集）
粥杖や袖の香に後ろ知られたり　鏡足（新類題發句集）
粥杖や御簾にほつるゝ鬢の髮　曾天（同）
粥杖や花守が子の杓子顏　素葉（素葉句集）
粥杖や梨壺の五人打はつし　羅川（五車反古）
粥杖や後は御末にどよむ聲　龍眠（新選）
粥杖や打れてあられはしり迄　完來（俳諧發句題叢）
粥杖に冠落ちたる不覺かな　鳴雪（鳴雪俳句集）

粥杖

かしこくも粥杖うちぬ狐つき　青々（妻木）
粥杖に一家ほのめく晨かな　韓兎（韓兎句集）
粥杖や祝ひて掛けし閂の上　師竹（最新二萬句）
粥杖を祝はれし戸に落首哉　櫻磈子（同）
粥杖や人の妬みに打たれけり　麥門冬（同）
粥杖や伊賀の局にたぢろぎし　松宇（松宇家集）
うき人の粥杖に顔赤らめぬ　旭櫻（懸葵）
粥杖の打ちそこねけり柳腰　春雨（同）

福杖

福杖の下を樞や玉をの子　重次（大三物）

御祝棒

前にあるかとすれば後へにお祝棒　北漽（俳人北漽）
御産屋お祝の棒置きにけり　山樵子（續春夏秋冬）

〔補〕「かゆづゑ」とも云ふ。卯杖の條に見える。

十五日粥（じふごにちがゆ）　赤小豆粥（あづきがゆ）　赤小豆粥祝ふ（あづきがゆいはふ）　紅調粥（うんてうしゆく）

〔考〕

【山之井】同日（十五日）あづきかゆを煮て天狗（一）を祭れば、年中の邪氣を除くといへり。公事

【栞草】十五日〔歳華記〕正月十五日小豆粥を煮て天狗の爲に庭中案上に祭るとき則ち粥饌る時、東方に向て再拜長跪して祝すれば、年を終るまで疫氣（二）なし。粥木、粥柱などむかへみるべき也。

【公事根源】蚩尤といふ惡人を、黄帝と申す御門、正月十五日にほろぼし給ふ。（三）其首天狗と成て其身は蛇蠱となる、よつてけふの亥の時（四）あづきの粥をにて庭中に案（五）を立て、天狗を祭りて食すれば、年中の邪氣をのぞくといふ說ありと。云々

【續齊諧記】呉縣の張成、夜起きて忽ち一婦人の宅の東南の角に立ちて、手を擧げて成を招くを見る。成即ち之に就く。婦人の曰く、此地は是れ君が家蠶の室にして我は即ち此地の神なり、明年正月の半ばに、宜しく白粥（六）を作り、膏を上に泛べて我を祭るべし、必ず當に君の蠶桑をして百倍ならしむべしと。言絶て之を失ふ。成、言の如く膏粥（七）を作る、是より後大に蠶を得たり。今正月の半ばに白膏粥を作ること此より始まれり。

【玉燭寶典】正月十五日、膏粥を作り、門戸を祠る。

【荊楚歳時記】今州里の風俗、望日（八）門を祭るに、先づ楊柳を以て門に插む、楊柳の枝の指す所に隨て、仍ち酒脯飲食及豆粥を以て、箸に插て之を祭る。

【[illegible]談抄】門に柳を插むの義、東武に今猶侍る也云々。下野國俗、漆膠木を尺許に切半は皮を削り去り、其處を木口より四ツに割り、其の割る處を小豆粥の內へさし入て粥の付たるを門戸に祭る、是を粥箸と謂ふ。

【注】(一)一種の妖怪變化なり、深山に住み形は人の如くにして、鼻高く、翼ありて自在に飛行すと云ふ。(二)疫氣 疫病の氣。邪氣 あしき氣。(三)此書は我國にも出でたれば、又弓始の的、破魔弓などにも出づ。(四)亥の時 午後十時。(五)案 つくゑ 机。(六)白粥 米のみにて作れる粥。(七)膏粥 滋味に富みたる粥 上等の粥。(八)望日 望月の日、十五日。

【季題解説】正月十五日。小豆粥をつくりて天狗を祭り、これを食すれば、疫氣を除くといふ。支那の俗信の移れるものにして、漢名にて紅調粥と呼ぶ。枕草紙に「十五日は餅粥の節供まゐる」といへるは是なり。日本歳時記に「玉燭寶典に正月十五日膏粥を作りて門戸を祭ると記せり。又荊楚歳時記にも正月十五日豆糜をつくりて油膏をその上に加へ門戸をまつると見えたり。月令にも孟春に戸を祭るといふ事侍れば、是なん據とはすべき。」とあり。我國にて小豆粥を祝ふことは寛平の頃より始まりしといふ。【季語】小正月

【例句】十五日粥 小豆粥

幾春もあかぬ粥いはふ節會哉　長之（長崎集）
かゆのあづき色や紅梅の大納言　捨女（捨女句集）
椽に寢る情けや梅に小豆粥　支考（蓮二吟集）
正月は寂しいものか小豆粥　斑象（發句類聚）
淺漬の寒き匂や小豆粥　故流（同　）
太箸の色づきにけり小豆粥　木槿（新題季句集）
紅梅のこぼれし樣や小豆粥　南箕（同　）
吾子が頰にしたゝかつけぬ小豆粥　紅葉（紅葉句集）
寢忘れて小晝時分や小豆粥　温亭（温亭句集）
明日死ぬる命めでたし小豆粥　虚子（ホトトギス）
太箸のつかひ納めや小豆粥　圭岳（同人俳句集）
小豆粥一人遲れてとろけけり　素石（木虫句集）
箸紙の文字のよごれや小豆粥　野風呂（現代俳句大觀）
小豆粥とろけて庵主起きにけり　瓦全（年刊俳句集）
山長者谷をうたひぬ小豆粥　鶯池（鶯池句集）

左義長（さぎちやう）

さぎつ長　三毬杖　三毬打　どんど　とんど　みそとんど　止牟止　爆竹　爆竹　飾焚く　吉書揚　菱の花を爆らす　菱の葩をにこらす

【季題解説】【山之井】左毬長は眞言院（一）にて打たる毬打を神泉苑（二）に出して燒あくるをいふよし徒然草に見えたり。法成就の地にこそとはやすべしといへり。今の世には三ケ日のかざりの松竹しめなはなどあつめて扇をつけ帶をかけなどして、どんどやおほんとはやし侍る。此つれ〳〵草の說に付ては

さへ毬打といふ事を略してさぎちやうといふにやと師説には侍し。又左義長といふ字に付ての説も野槌に有、爆竹はもろこしに山臊といふもの人を犯しなやますをおどすしわざにて侍るを、元日の所に事文類聚には出せり。然共此國には十五日の曉かけてほこらせり、賀茂には十五日の夕内裏には十八日也。

【栞草】徒然草 左義長は、正月に打たるぎちやうを、眞言院より、神泉苑にいだして燒あぐる也。法成就の池にこそ、とはやすは神泉苑の池を云也。云々、和漢三才圖會 正月十五日、清涼殿の庭に於て、青竹を燒て以て吉書を天に上らる、十八日にも亦竹を飾り、扇を結付、清涼殿の庭に於てこれをもやす。唱文師（三）大黒松太夫、其徒四人鬼面を被り赤熊（四）の髮を蒙り、二嫗は太鼓を携へ、二の翁は逐舞てこれをうつ、童子二人素面にて赤熊の髮を蒙り、腰鼓をならす。又かたはらに肩衣袴をきたるもの五人舞ひ立てこれを囃しどんどやと云、措袴をきたる者一人、聲を和せてはあと云、いまだ其來由をしらず。歲時記 元日庭前にて竹を爆す、以て山臊を避く。事文類聚 爆竹は、神異經に云、西方深山の中に人有、長尺餘り、人を犯し寒を病しむ、名づけて山臊と云、竹を以て火中に著、熚烞として聲あり、山臊驚き憚る。紀事 洛中家々、今曉爆竹す。其焦あまりたる竹を廁の内にはさみおくときは、其家疫なしと云、或は左義長の火にて餅をやきて喰ふ、是も疫の祟をほこらすといふ、この火を以て今朝の粥を煮る。○或云、漢明帝正月十五日、佛教道書（五）の勝劣を試るの遺風也と是左義長の義しかれども其の儀式浮圖（六）の事に拘はらす、恐らくは附會の說也、凡民間十五日の朝、毎家の飾藁松竹を取收め、一處に集めて之を燒く。止年止とす、兒童の試筆の書を天に上ぐ。○武江にては官禁ありて爆竹をせず 御傘 花ひらの條に云、正月の餅に菱の花ひらとて有、青藍按るに、餅を菱の花に造りたるを云歟。

【いつまで暦】爆竹 門に飾りし松竹注連等燒事なり、

註（一）眞言院、朝廷の御修法を念誦を勤むる所、修法院又は曼荼羅道場とも云、内裏の内八省院の北、皇居の西に在り。（二）神泉苑 京都上京區門前町に在り、桓武天皇の初め之を創設す、修法の處とす、後屢々廢亡あり、現存するは十の一に過ぎず。（三）唱文師、苔莢の條を看よ。（四）赤熊（しやくま）支那に産する犛牛といふ獸の尾、之をはぐまと云ふ、染めて赤きをしやぐまと云ふ。（五）佛道道書、佛は釋迦の道、道は老子の教。（六）浮圖、浮屠、佛陀、佛、ほとけ。

季題解説 正月十五日、古、左義長は朝廷にも行はれし式にして、清涼殿の庭上に、青竹を三本束ね、これに扇子短册などを結び付け、陰陽師等をして謡ひ囃して之を燃さしむるを例とす。我國にこの式の始まりしは何時頃なるか詳ならず、漢土の爆竹の風の移れるものならんといふ。民間にても十五日の朝未明より兒童等集り、松・竹・飾繩などを貰ひ集め來り、ドンドヤドンドと打ち囃しつゝ焚く、この囃し聲より左義長を又どんどとも稱す。正字未詳。止卒止などと字を當てたり。みそどんどは正月十六日に味噌搗をなせば、年中の味噌搗、いかなる惡日にても故障なしとて、飾繩などを焚き、味噌豆を煮るより起りたる名なり。爆竹は竹を燃して爆發せしむること、支那にては元旦鷄鳴の頃、庭前に靑竹を爆し、以て山臊惡鬼を避くとなすもの。我國にては爆竹を左義長と同義に解するも、同趣にして異事なり。吉書揚は、禁中の左義長の時、主上の御吉書を爆らすに倣ひ、民間にてもどんどの火中に書初めを爆すを云ふ。その高くあがるを吉祥とし、筆蹟の上達を祝ふ習俗となれり。又どんどの火にて餅を燒くを菱の花を爆らすといひ、その餅を食し、或はその火にて小豆粥を煮る習俗あり。なほ、日本歲時記には、「我國に今日爆竹する事定[illegible]なし。いつの比より始りし事にや。(中略)日本のさぎちやうは、僧家にいひつたふるは、後漢の明帝の時、初めて、天竺よりもろこしに佛法わたる。五岳の道士、是をやぶらむと訴るによりて、そのしるしをみんとて、佛經を左におき、道士の書を右におきて火をかくるに、道士の書燒けたり。されば左の義長ぜりといひて、左義長と云ふ。又、西域義長や、東土やとはやす。(京都の俗に、爆竹を東土と云ふも之によれり)西域佛法の義まさりて、東土へ流布すといふ事なりともいへり云々。」とあり。

[參照] 注連貰(シメモラヒ)　松納(マツヲサメ)

例句

左義長

日の本やたうとゝはやす左義長　季吟（類題集）
左義長や降つゞきたる雪の上　鞭石（眞木柱）
爆竹(さぎちやう)はたゞ年德の庭火かな　昌窓（毛吹草）
左義長の火に寄る人や門の霜　紫影（かきね草）
左義長や大口たゝく村女　同（同）
左義長やちら／＼雪の遠明り　青々（妻木）
左義長や野梅官柳めぐり行　同（同）
左義長や木の丸殿の松の中　別天樓（最新二萬句）
左義長の遠く飛火す淺茅哉　橡面坊（深山柴）
左義長を離れて寒き河原哉　好翠（大正俳句選）
左義長や雫してゐる神の杉　一杉（昭和俳句集）
左義長や城の眞下の勢だまり　綺石（落椿）
左義長の明りにつゞく月夜哉　寒樓（明治新俳句集）
左義長の竹勸進の來りけり　黄雀風（新春夏秋冬）

左義長

左義長や河をへだてゝ村二つ　歌庭（現代俳句大觀）
左義長や舟して渡る一番手　葉雨（同人俳句集）
左義長の炎見ゆるや道明寺　小[illegible]（懸葵）
左義長や潟より白む一城下　青美平（懸葵）
左義長に移すべき火を[illegible]りけり　雨青（同）
左義長や石垣の外の海うらゝ　三幹竹（同）

三毬杖

たかむらの竹をやたてゝきさんぎちやう　正章（山の井）

どんど

小雨ふるとんども例の火影哉　鬼貫（七車）
餅やくをお暇乞のどんと哉　太祇（太祇句選）
おどろかすとんどの音や夕山邊　青蘿（青蘿發句集）
正月の榮花にほこる爆竹かな　同（同）
御代継の吉書によむとんど哉　嘯山（葎亭句集）
どんど焚くどんどと雪の降りにけり　一茶（七番日記）
あの畑はしつけぬ麥かとんど焚　乙二（をのゝえ草稿）
田一枚どんどとんどの雪間かな　鳴雪（鳴雪俳句集）
どんど火の黒こげ餅をはたきけり　紫影（かきね草）
主人もどんどとの濱の磐に乘る　寄三[illegible]（[illegible]三[illegible]句集）
囃し去る兒等やとんども薄煙　六花（寒烟）
信夫男のどんど信夫女榾の下に　天郎（東國）
土俗火を崇む餘風どんど焚く　四明（四明句集）
どんどする城見晒の煙かな　八重櫻（[illegible]）
とんど場や斧新しき清め砂　黒洲（懸葵第一句集）
祝ひ雪少し降る止傘止朝晴れて　三碧水（同）
風土記に殘れる村のどんどかな　野葡萄（ホトトギス）
道ばたに吉備津氏子のどんど哉　夜潮（同）
青笹のそよぎては燃ゆどんど哉　虚子（同）
谷底に温泉七所どんど哉　一竿（最新二萬句）
夫婦神籠らせ給ふどんど哉　徜徉（同）
詣で來て湯島の社頭とんど哉　樂南（明治一萬句）
切火縄火を乞ひ歸るとんど哉　一蓑（同）
三逕の霜を冒してどんど哉　烏人（明治新俳句集）
二荒の神の火うつすどんど哉　巴石（青嵐）
大川の波にもえつくどんど哉　眺峰（同）
農村に我が家一つのどんど哉　義朗（大正新俳句）
みあかしを移し申してどんどかな　史潮（年刊俳句集）
この夕べどんどめがけて舟歸る　士栖（同）
久米の子の今こそ焚くなれどんど哉　無果（年刊俳句集）
城見ゆる風の畑のどんどかな　裸馬（年刊俳句集）

ほの〴〵と山際白きどんどかな　漁郎（同）
もろむきのいと燃えやすきどんど哉　十二星（[illegible]氷集）
どんど焚く藪ほとり藤戸渡しかな　響也（日本俳句鈔）
二夕どんど神の火配り舟やりて　青蛾（同）
詩仙堂の方にも見ゆるどんど哉　射石（新春夏秋冬）
道端に多賀の氏子のどんど哉　象外（同）
濱どんど浪あびて来ては囃しけり　迷羊（附古鳥）
高麗人も出でゝどんどを焚きにけり　別天樓（最新二萬句）
樹の下に繋馬の稚子のどんど哉　山灌子（同）
雪山にかゝるどんどの埃かな　巨口（同）
縣井の蓋にどんどの灰白き　香村（同）
天の下人の小さきどんどかな　梅の門（草上俳句集）
ゆづり葉の青きが燃ゆるどんど哉　古鼎（現代俳句大觀）
水郭の寒き霞にどんどかな　飛雨（昭和一萬句）
舟玉を裸まつりのどんどかな　鶯池（鶯池句集）
旅人もまじりてまだきどんど哉　琴舟（懸葵）
誰彼の顔やどんどのうす明り　雨城（同）
兒等を将て小きどんどや裏の畑　瘦石（同）
どんどする垣根に来るや神の雞　三幹竹（同）

みそどんど

さうぞきて加茂人出でよみそどんど　碧童（明治一萬句）
みそどんどきり〳〵舞の扇かな　象外（最新二萬句）
烟たがる瘡の神やみそどんど　鶯池（鶯池句集）

爆竹

爆竹や南京町は正月す　鳴雪（新俳句）
爆竹の烟の中のゆきゝ哉　壽珠（續ホトトギス）
爆竹が鳴れば大獅子きほひたつ　非文（同）
爆竹や芭蕉の蔭に火を噴ける　竹童（同）
奉討てと爆竹戻りの騒きに　北涯（俳人北涯）
爆竹の火ぼこりに河そまじけり　秋穂（年鑑俳句集）
燕の民甘棠の下爆竹す　十樞（十樞句集）

飾焚く

飾焚くやかまはぬ事に鳴く鷄　道彦（俳諧發句題叢）
名所の野とも知らずや飾焚　文何（同）
飾焚くと隣の人も出で来たり　青峰（年刊俳句集）
飾焚くや中に威を振る長者の子　骨舟（昭和一萬句）

吉書揚

吉書揚まづのぼる齒朶の灰高し　射石（新春夏秋冬）
吉書揚がる烈風杉を鳴らしけり　祖春（ゆく春第一句集）
石叩咫尺に立ちぬ吉書揚　句雨（草上俳句集）
眞向に大寺見ゆれ吉書揚　一木（昭和模範句集）
蝶鳥と翔る焔や吉書揚　大我（青嵐）

吉書揚　御手洗に散りうく灰や吉書揚　可穗（懸葵）
うち囃す聲に吉書の揚りけり　文光（懸葵）

参考 三毬長・三毬打、爆竹等の字も書く。十五日には毬を打つた毬打を三本燒く。徒然草に「さぎちやうは正月に打ちたる毬杖を眞言院より神泉苑へ出して燒きあぐるなり。法成就の池にこそと囃すは神泉苑の池をいふなり。」とある。

博多松囃子（はかたのまつばやし）

季題解説 正月十五日、往古、筑前國博多の町人、家々に酒肴を設け、親戚を迎へて祝ふ。町屋毎またはゞ遊物などを出す。町人は麻の肩衣に下は裁付をはき、其上に三尺手拭をしめ、頭に頭巾を被り、草鞋をはきて福岡城に至り、御玄關に於て酒を頂戴し歸る。これは唐船博多に着岸したる當時の餘風なりと、これを博多の松囃子といふ。

ほんだる

季題解説 正月十五日、農家に於て、早朝、竹の五六尺なるを半ばまで割きかけて、漆膠木の枝二三寸廻りなるを長さ五六寸に切り、その割りたる竹の先に差し、家毎に門口の軒端に二本づゝ之を挿す。名づけて、ほんだるといふ。是豐年の祝ひ、穗垂の祝義かといふ。

例句
ほんだる　ほんだるをたてればとまる雀かな　冬葉（懸葵）
ほんだるや垂穗の秋を偲びつゝ　蒼梧（同）

鹽釜のざつとな（しほがまのざつとな）

季題解説 正月十五日　陸奥風土記に、「宮城郡鹽釜社の下町にて、正月望の夜、この事あり、子供等町々に集りて、其所の男女老少の差別なく、行跡のよからぬ事を其者の背戸門の邊に來り、同音に世間の見聞にあづかる所。齒に絹きせず言ひ散らし、いづくともなく別れ去るなり。其の發端に『ザツトナ〳〵こゝに話ありとな』といへば、『なんとや』と答へて、よしあし共にその行跡を一々いふ事なり。されば、みそか事にて、人の知る事なかりしも、此夜より廣がりて汚名を傳ふる基となれども、却て世の愼みもの多し。これ神の惡みを蒙るものにして、かやうのことは鹽釜にも限らず、諸國共にあることなり。上代の遺風にして、人の所爲とはいふべからず。」とあり。奇抜なる風習なりといふ。「ざつとな」とは、概略の意味なり。

例句
鹽釜のざつとな　ざつとなに澄む鹽釜の月一つ　冬葉（懸葵）

柱餅（はしらもち）

季題解説 正月十五日。長崎の舊俗。餅搗の時終りの一臼の餅を柱に卷きつけおきて、正月十五日左義長の火にてあぶり食ふことを云ふ。「世間胸算用」卷之四に、「長崎の年の暮の事をいへる條に「餅は其家〳〵の嘉例にまかせてつきける、柱もちとて仕舞に一臼を大黑柱にうちつけて置、正月十五日の左義長のときこれをあぶりて祝ひけるとそ」云々」とあり。又増葉集には「この柱餅の遺風今もあり、餅を延命袋の形につくりて大黑柱に打つけて置、春に至りておのづから落るをまちてあぶりくらふとぞ」と記せり。

例句 柱餅

暖簾の紺濃やかや柱餅　倦堂（續春夏秋冬）
柱餅唐貿易の長者かな　田士英（同）
柱餅いく世歪まぬ柱かな　山茶（最新二萬句）
家の富人謳ふなり柱餅　倦堂（同）
暖簾から覗く娘や柱餅　華島（同）

蛇踊（じやをどり）

季題解説 正月十五日。長崎歲時記に「唐館に於て巨蛇を作り、其體中にあまた燭を點じ、館内を蜿蜒とつかひ廻る、これを蛇踊と云ふ」とあり、今傳らず。今は十月七・八・九日の諏訪祭の時、諏訪町及び本籠町の奉納踊として行ふのみ。

鳥追櫓（とりおひやぐら）　鳥追唄（とりおひうた）

季題解説 正月十五日。越後國南魚沼郡地方にて、鳥追櫓とて去年より取除きおける雪を一丈近くも山の如くに積みて、櫓を築き立て、これに登るべき階段をも雪にて作り、頂上を平坦にして注連繩を張り、其の上に筵を敷き、又は積み上げし雪の中に筵を布き、鍋釜などを携へて、鳥追唄を謠ひつゝ遊び戲るゝ風習あり。その唄は「あゝ鳥や、何處から追つて來た、信濃の國から追つて來た、何を持つて追つて來た、芝の鳥も河達の鳥も、立ちやがれ、ホーイ〳〵」の如き、その一例なりといふ。

例句 鳥追櫓

鳥追の櫓囃や雪の晴　半白（懸葵）
猪口の酒凍る鳥追櫓かな　鯱人（同）

木を囃す（きをはやす）

季題解説 正月十五日　信濃國伊奈地方の俗にて一人の男斧にて木を打ち傷けて「なり候か」「切り候か」と呼びゆく跡より、「なります〳〵」など

云ひて、一人が粥をその傷にぬりゆくさま面白く、方言に「木をはやす」といふ。即ち果樹責め、一種なり。〔参照〕なるかならぬか

例句

木を囃す　斧入れて木をはやしゆく雪寒し　釣月（ホトトギス）
みすゞ刈る信濃の雪や木を囃す　冬葉（懸葵）

ナモミ剝　生身剝　火形剝

季題解説　正月十五日、今夜羽後地方にナモミ剝の風習行はる。露月山人の「山中新題」の中に「ナモミ剝ぎ、ナモメ剝ぎなど云ひ慣はしなれど、生身剝ぎの意ならんかとも思ふ。十五日夜（舊正月）鬼の面を被り、異様の扮装したるもの或は太刀を携へ、或は御幣を持ち、瓢に豆などを入れてからからと打鳴らし、惡魔拂ふ／＼と高らかに呼んで戸々を廻り歩くに、戸々にては餅二タ切程を與へて去らしむるなり。予が幼時は、村の貧しき男が餅を貰はんとて、生身剝ぎとなりしものなるが、それよりも大人にてするもの無く、十二三の少年どものわざとなり、それさへ近年は殆ど廢れたる様にて、只兒女の多き家に行き、兒女を嚇すを面白きものにすなり。但、生身剝ぎの由來は久しきものなるべし。緣起を明かにせざるも父老の口碑に據つて考ふるに、昔、山中に賊住みて、時々人里に下り、掠奪を試みたる頃の風なるべし。賊居ずなりて後も治に居て亂を忘れざれの意にて、かゝる事の始まりしと覺ゆ。それより世降つて一種の調戲となりしはナマ身を剝ぐといふ事にて證せらる。村俗爐火にあたりて脛に火紋つきたるを、ナモミ（又はナモメ）がついたといふ。懶惰にして爐邊にのみあるものに此火紋を見る故、その火紋卽ちナモミを剝ぎて懶惰を懲さんの意とはなりしなるべし。其惡魔拂と呼ばるは事を知らざるなり。彼は惡魔を拂ふものに非ずして、惡魔其物なればなり。脛にナモミなく、家に泣く子なければ彼は剝ぐこともせず、唐辛味噌つけて子を喰はんともせで、二タ切の餅にて退散するなり。前に云ひし山中の賊とは例の米女鬼の鬼なり。云々」とあり。秋田地方の習俗として面白きものなり。

例句

生身剝　生身剝二人逢ひけり枯木立　露月（俳星）
わが影の雪に映れり生身剝　同（同）
火形剝　なごめ剝戸に庖丁を鳴らしけり　五空（五空句集）

藪入

養父入　宿入　里下り　宿下り　宿降　走百病　六の餅　十六　六餅　六入　十六日遊

古書校註　【栞草】紀事「正月十六日、農工商おの／＼遨遊（一）す、是を十六日遊びと

す、又藪入と稱す。いふこゝろは、往ところなき人は林藪に入めん〳〵遊樂す、一說とすべし。藪入もと宿入の誤り也。北目洛（二）內外の男女、或は兩親の家に到り又姻家（三）にゆき、或は寺社に詣で、又山林に遊び、各隨意にす、又奴僕は我が宿所に歸る。○六の餅とは大和國の俚語にて藪入と云に同じ。泉州にては、六入と云、大和の民間にて舊年嫁したる女、今日親里へ歸るとて、必餅を舂て祝す、是を十六餅と云、十六日の餅の略語也。彼是名目混雜して、六の餅、六入の名有、又江戸にては宿おり（四）といふ。

【いつまで暦】和州にて十六日藪入に餅をつく事をいふ。

【註】（一）遨遊　思ふまゝに遊ぶ。（二）洛都　ミヤコ、京都。（三）姻家　姻戚關係のある家。（四）宿おり　宿さがり。

【季題解説】正月十六日。農工商、各業を休み、男女の使用人に一日の休暇を與へ、父母の家に歸らしめ、或は隨意に外出を許して行樂せしむ、これを藪入と云ひ、養父入り・里下り・宿下り・宿降りとも云ふ。これ藪澤の故里へ歸るの義より出づ。支那にてはこの日を走百病と云ひ、寺院に行き遊ぶ俗あり。走百病は遊山して元氣を養ひ、百病を走らする義なるべし。又大和の俗に、前年嫁したる女、其親里に歸る時は必ず餅を搗きて祝す、これを十六日餅、略して六の餅といひ、藪入を六入ともいふ。【參照】秋―後の藪入（ノチノヤブイリ）

【實作注意】藪入は養父入りとも書き、又、走百病とも書きて、ヤブイリと訓じたるものもあれども、假名付けにする煩瑣を省きて、普通の「藪入」を用ゐるをよしとす。藪入と云へば、正月の休みをさす。お盆の休みは、後の藪入と云ひて、區別すること忘るべからず。

【例句】

藪入

破（ヤブイリ）や見憎い銀を父のため　其角（五元集）
やぶ入やそれはいなばの是は星　同（同）
やぶ入や牛合點して大原迄　同（同）
藪入や一つはあたるうらや算　同（同）
やぶ入や早いにろくなつらはなし　同（五元集拾遺）
養父入に溫飩打とて借着哉　支考（蓮二吟集）
藪入の寢るやひとりの親の側　太祇（太祇句選）
やぶ入や琴かき鳴す親の前　同（同）
養父入の兒けば〳〵し草の宿　同（同）
やぶ入やよそ目ながらの愛宕山　蕪村（蕪村句集）
やぶ入や守り袋を忘れ草　同（同）
やぶ入や鐵漿もらひ來る傘の下　同（同）
やぶ入のまたいで過ぬ凧の絲　同（同）
やぶ入の夢や小豆の煮る內　同（同）
やぶ入は中山寺の男かな　同（同）

藪入

やぶ入や鳩にめでつゝ男山　同（蕪村遺稿）
養父入を守れ子安の地藏尊　同（同）
やぶ入や浪花を出て長柄川　同（春興帖）
やぶ入の宿は狂女の隣かな　同（津守舟）
やぶ入に曇れる母の鏡哉　同（夜半叟句集）
やぶ入の羅をしかくす野風[illegible]　几董（井華集）
やぶ入や命の恩の醫師の門　同（同）
藪入やついたち安き中二日　同（同）
やぶ入の我に遲しや親の足　同（同）
養父入や行燈の下の物語　召波（春泥發句集）
やぶ入の枕うれしき姉妹　同（同）
やぶ入や畷の小みちの雨に逢　白雄（白雄句集）
筑波根や世のやぶ入か遠霞　同（同）
藪入やつゐでに古き墓參　青蘿（青蘿發句集）
やぶ入の先に立けりしきみ桶　一茶（一茶句帖）
やぶ入や先つゝがなき墓の松　同（同）
藪入や墓の松風うしろ吹　同（七番日記）
藪入の顔にもつけよ桃の花　同（[illegible]若菜集）
藪入や連に別れて髷仕廻ふ　同（一茶新集）
藪入や三組一處に成田道　同（[illegible]藝集）
藪入のわざと暮すや草の月　同（[illegible]永[illegible]發句集）
藪入や小さき箱をうち明て　士朗（枇杷園句集）
藪入を獅子の口より見初けり　曉臺（曉臺句集）
やぶ入や木履貼かへ人ごゝろ　同（同）
やぶ入の撫して通るや古[illegible]　蒼虬（蒼虬翁發句集）
藪入や梅津桂の雪ばれに　同（同）
藪入に晝はれて拜む持佛かな　同（同）
藪入や思ひは同じ姉妹　子規（子規全集）
藪入の二人落ちあふ渡し哉　同（同）
藪入やはゝそ墓のあけ近く　鳴雪（鳴雪俳句集）
藪入の悲し子一人母一人　同（同）
藪入の紅うるはしと稱へけり　露月（露月句集）
藪入の流行目にさす藥哉　同（同）
藪入や母に後れし父一人　青々（妻木）
藪入の覺えの膳に鹽肴　同（同）
藪入や母なる人と芝居見に　漱石（落椿）
藪入や京もの語りしたり顔　同（同）
藪入や爐をなつかしむ里の家　蝶衣（明治一萬句）

藪入

藪入の小燈かこち膳につく　同　（年刊俳句集）
藪入や母はたうべきものを問ふ　四明　（四明句集）
藪入の里なつかしき木の間哉　五空　（五空句集）
藪入にまじりて市を歩きけり　鬼城　（鬼城句集）
藪入の歸れば母の灯しけり　温亭　（温亭句集）
藪入に餅花古りて懸りけり　普羅　（虚子選雜詠選）
小豆煮て藪入待つや親心　守水老　（守水老遺稿）
藪入や浪華の春は舊に似て　漾面坊　（漾山紫）
藪入の何に輝く眸子哉　百花羞　（百花羞遺稿）
藪入の庭柑子藥散るもよき　樗磈子　（鳴門の草）
鷄の聲に關の戶思ふ藪入の　蛇湖　（蛇湖句集）
藪入や天にも地にも母一人　鶯池　（鶯池句集）
藪入や山にかゝりて雪一里　月斗　（同人俳句集）
藪入の更に泊るや佛の日　北涯　（俳人北涯）
藪入や流をあがりて徑行く　鱸江　（新春夏秋冬）
藪入や窈窕として草の宿　小洒　（同）
藪入や母の病に長とまり　松濱　（同）
藪入の母に小錢を貰ひ得つ　紅綠　（俳家句集）
藪入に着きて古里月夜哉　艸公　（丁卯句鈔）
藪入に鶯鳴くや枕元　・青　（戊辰句鈔）
藪入や渡し越ゆれば里つゞき　葉冬　（故郷）
藪入の落合語る渡舟かな　蘇南　（蘇南遺唫）
藪入や家興さんと誓ひける　蟻棲　（最新二萬句）
藪入や母聞きし事父も尙　古泉　（同）
藪入の袖に野山の匂ひかな　虚明　（同）
藪入や鏡にうつる顏二つ　居白　（同）
藪入のいわまじものを言ひにけり　石牀　（同）
藪入の子のしらぬ寒さ母が問ふ　来布　（同）
藪入の我を知らずよ渡守　傘車　（同）
藪入や氣づよき母に育てられ　波那女　（昭和一萬句）
藪入や人に見らるゝ町の髮　圭岳　（同）
汝が僻み只に憎めず藪入子　漂舟　（同）
藪入や顏見合せて飛ぶ雀　稻青　（現代俳句大觀）
藪入や一と棧入れし母の機　青嵐　（同）
藪入の羽織着る子となりにけり　斥二　（年刊俳句集）
藪入の吾家の水なつかしむ　山彥　（同）
藪入の布團の中や親拜む　月村　（同人俳句集）
藪入や一人の親に廣き家　支方　（同）

藪入や薄き身寄の長勤め　樵青（同）
藪入の着物を前に寢つかれず　羽山（同）
やぶ入や親の墓訪ふ一乘寺　孤村（春夏秋冬）
やぶ入の曉山を越えにけり　麥人（同）
やぶ入の父なくて母は後の母　無事庵（同）
やぶ入の炬燵に寢たり主ぶり　愛櫻子（同）
藪入やなく牛我に物言へか　薫水（續春夏秋冬）
藪入の宮に來て椿なつかしむ　兎人（懸葵第一句集）
藪入や雪の夕を墓參り　澄郎（ホトトギス）
櫓窓に藪入をせぬ一人かな　芒月（同）
藪入や村に殖えたる橋ひとつ　半荘（闇古鳥）
藪入やものなつかしき古机　白雲樓（同）
藪入や親と話すに町言葉　凡水（現代俳句大觀）
最上川越えて藪入遠き哉　殘鶯（同）
藪入の我家わりなき炬燵哉　みどり（同）
寄る邊なき身とて藪入せざりけり　喜衣（昭和模範句集）
藪入の二人來にけり草の宿　櫻紅子（青雲抄）
藪入や鄕國の一日を國訛　甘瓠（懸葵）
藪入や鳴門越え來て淡路島　薫風子（同）
藪入や揃ひの下駄の姉妹　雀子（同）
藪入や浪華はづれの毛馬の里　鱗洲（同）
藪入の女に重き荷物哉　天眞（同）
藪入の家に這入れば牛の顔　三幹竹（同）
藪入の名殘を雪の鎖しけり　句佛（同）

里下り

里下りや我子借り來る餘所乍ら　青々（妻木）
里下りが一輪生けぬ角の倉　同（同）
里下りや懐鏡出だし見る　月兎（懸葵）
あつけなき一ト日は暮れぬ里下り　陶水花（年鑑俳句集）

宿下り

枕外す髷もなほりぬ宿さがり　蝶衣（蝶衣句稿）
花簪馬車に搖れ〳〵宿さがり　五海樓（青雲抄）
行燈も鼠も親し宿下り　霞溪子（年刊俳句集）

秋田（あきた）の鳥追（とりおひ）

[行事] 正月十六日、秋田地方の農家の年中行事の一つにて、夜半臥床を蹴立て起き、法螺貝を吹き鳴らし、田圃に出づ、これを鳥追といふ。その唄ふ文句は、「朝鳥ホイ〳〵、夜鳥ホイ〳〵、長者殿の園地には鳥もない園地。能代のオカンコは鳥ぼてたもれ、何鳥ぼつて、雀やの雀、荒駒に鞍おいて、じやほれ〳〵、稲こく鳥は頭切つて鹽つりてしよ、鹽俵にぶち込んで、

佐渡が島へはい揚れ〻、今年の世中、よい世中、升は置いて箕ではかる」とあり、面白きものなり。【參照】鳥追櫓（トリオヒヤグラ）

【例句】
秋田の鳥追　鳥海の夜鳥朝鳥追ひにけり　玉鉾（懸葵）

賽燈燒（さいとやき）

【季題解説】正月十六日、羽前國米澤地方にて、「さいと燒」を行ふ。十五日の夜は、若者兒童等宵の中より、「ゆふとりよしゑよゑよゑ」と云ひて、近邊を廻り、藏王堂に集りて通夜し、朝まだき「あさとりよしゑよゑほゑ」と云ひて廻り、藁を積みて火を焚く風習あり。

【例句】
賽燈燒　宵よりの雪降りつみぬ賽燈燒　竹石（懸葵）

貰湯（もらひゆ）

【季題解説】正月十六日、一說に正月三ケ日或は七月十五・十六日となせり。江戸時代の錢湯にて、其日の收入を三助（雇人）に與ふるを例となす。故に雇人の客に對するもてなしよければ諸人多く入浴しその貰ひも多かりしと、これを貰湯といふ。

【例句】
貰湯　貰湯の人足晝となりにけり　北谷生（懸葵）

十八粥（じふはちがゆ）

大師粥（だいしがゆ）

【季題解説】正月十八日。江戸の貴賤共に小豆粥を食す。元三大師へ供養の心なりといひて大師粥ともいふ。十五日の粥の一部を殘しおき、この日食すともいふ。守貞漫稿に、「正月十五日、云々三都共に今朝赤小豆粥を食す、云々江戸は專ら白砂糖をかけて食す。今日の粥を餘し蓄へて、正月十八日に食す、俗に十八日粥といふ。京阪には此事なし」とあり。

【例句】
十八粥　正月も終りの粥を祝ふ日ぞ　梓月（俳諧雜誌）

二十日祝（はつかいはひ）

刃柄祝（はつかいはひ）　鏡臺祝（きやうだいいはひ）　初顏祝（はつかほいはひ）　鏡の祝（かがみのいはひ）

【季題解説】正月二十日。古、武家にては刃柄祝ひとし、婦女は初顏祝ひとし、又、鏡臺祝ひとて、鏡臺に供へたる鏡餅を食することあり。日本歲時記に「これ武士の鎧の餅をいはふとひとしき事なり。廿をもちゆるは、廿をいはふと、初顏祝ふと、詞おなじきゆゑに、これを緣にとれるよし、俗にいひならはせり」と記す。【參照】鏡開（カガミビラキ）　時候—二十日正月（ハツカシヤウグワツ）

【例句】

鏡臺祝

隱遁の侍者が鏡臺祝ひ哉　青々（妻木）
鏡臺を祝ふ難波のお山哉　同（同）
鏡臺祝狹斜に人となりてより　十二星（鐘氷集）
鏡臺をならべ祝ふや假の姉　同（同）
餅白う鏡臺祝ふお末かな　觀魚（新春夏秋冬）
鏡臺祝大人札も春めきて　素石（木虫句集）
主人常に在らず鏡臺祝哉　葱畝（同）
鏡祝ふ小さき餅や小傾城　二島（同）
鏡臺を祝ふや花の女形　松濱（最新二萬句）

苞入（つといり）

【季題解説】正月二十日、伊勢國山田地方の人、手土産を苞にして神職の家に行き、寶物の拜觀を乞ふことを苞入といふ。【参照】秋・苞入（イリ）

【例句】

苞入の鱧はねてゐる途上かな　半白（懸葵）
苞入や衣冠正して匣を開く　林間人（同）

月の出を拜す（つきのでをはいす）　二十六夜待（にじふろくやまち）

【季題解説】正月廿六日、江戸時代の庶民月の出を拜し、二十六夜待をなす。但し、後には廢せられて、七月のみの行事となれり。【参照】秋—二十六夜待（ニジフロクヤマチ）

節振舞（せちぶるまひ）　節會　年の饗　節の日　朝節　夕節　節小袖　節衣　節布子　椀飯振舞　椀飯　節料理　節客　節座敷

【古書校註】

【栞草】「紀事」京師の俗、元日より晦日に至るまで、親戚朋友互に酒食を設け饗應す、是を節と云ふ。節とは節供の下略にや、節小袖も准て知べし、朝夕は饗應の時刻を云ふ。

【年浪草】荊楚歳時記に曰く、元日より月晦に至て、並に酺を爲して聚りて飮食し士女舟を泛べ或は水に臨て宴樂す　按るに毎月皆弦望晦朔有り、弦八二三日、望八十五日、晦朔八晦日、朔日也　正月は年の初なるを以て、時俗重んじて以て節と爲す也。節と爲すとは佳節と定むる意也。和俗正月親戚を饗するを節と云は之に據る乎。○法苑珠林に曰く、唐の長安の風俗、元日已後に至る毎に、遞ひに酒を飮て相邀迎す、傳生酒と號す。

【季題解説】日次紀事に、「京師の俗、元日より晦日に至る、親戚朋友互に酒

食を設けて饗應す、之を節と云ふ。」とあり。節とは節句の略か。朝日・夕節とは、その饗應の時刻によりての稱、節小袖・節衣・節布子とはその饗應に着る小袖布子をいふなり。又、節振舞は一に椀飯振舞ともいふ。昔々物語に「五六十年の昔は、大身小身衆は申すに及ばず、下々輕き者一人も召仕ふ程のものは、町人迄も正月は椀飯振舞とて、親類縁者子供殘らず呼びよせ、夫々分限に應じ、結構にして日出度き壽を述び、酒盛をしてあそぶ。是、遊ぶばかりに非ず、年々遠々しく打過ぎたる親類も、此の椀飯の振舞には、年中第一の祝儀なれば洩れず集る。又不通不和にして、過ぎし親類親しき方へ話して、此の椀飯より寄合の人數に交るなり。又誰の子息最早年高なるまゝ、今年は緣組然るべし。又誰の息女は當年中に緣組如何樣の方望みに候哉、家古びたる人には、當年は御普請然るべしなどと、年中大方の相談初とし、機嫌よく遊びけるなり」と見ゆ。椀は埦に同じく食器なり。古來誤用して多く垸に作れり。椀飯は村上天皇の比の書に始めて見ゆ。

例句

節の日
せちの日やあらかた開く梅の花　青蘿（新五子稿）
節の日やくらぶるとなき娘どち　嘯山（葎亭句集）
節の日や手まりあてがふ一座敷　同　（同　）

節客
朝比奈は引物役や和田の節　孟遠（類題發句集）
節客や九十三騎の打揃ひ　琴二（新類題發句集）

節小袖
節小袖衞士の火影にかゝはゆし　遊林（反故集）
一家皆昔模樣や節小袖　富水（新　選）
女わらべの袖比べけり節小袖　魯白（新類題發句集）
節小袖そのさゝぶりも惜からず　紅葉（紅葉句集）
節小袖野山の晴るゝ且かな　長沙（戊辰句鈔）

椀飯
椀飯や酒に家中の四天王　翠竹（最新二萬句）
椀飯のねんごろ久し根來椀　寥松（職人盡）

松葉錢（まつばせん）

馬錢（うまぜに）　やせ馬（うま）

季題解説　正月、青森地方にて子供等に與ふる年玉の錢を松葉のつきたる枝に通して一とくゝりにしたるものを、松葉錢（マツコウ）又は馬錢といふ。秋田地方にては「やせ馬」と呼ぶ。蓋し昔時は金子を何匹などと數へしよりの、少なき錢をよぶに「痩せ馬」といひたるものならん。近年までありし行事なり。

例句

松葉錢
松葉錢をたゝかはし子の嬉しさに　文方（昭和一萬句）

馬錢
馬錢や何買へばよきと子の言へる　同　（同　）

やせ馬
やせ馬や來べき數ほど盆の上　撲天鵬（鬱　茂）

著衣始（きそはじめ）

【古書校註】

【山之井】きぬきそむるいはひ也。三ケ日の内吉日を撰てする也。或説には競始（きそひはじめ）とて舟どもかざりて乗そめ侍る事ともいへり。

【栞草】季吟曰ふ、衣を着初る祝なり、三ケ日の内吉日をえらぶ。

【雑談抄】暦に云々の着衣とも衣裳とも書く、衣をそとも讀む也、衣裳はきぬを、きと略しもすそを、そと略したるなり。

【貞享四年山田暦】誹きそはじめとは、新らしき冠、装束、衣裳を着するものなり。

【季題解説】正月三ケ日の内、好日を撰びて衣を著始る祝を著衣初と云ふ。

【季題】春著。

【實作注意】御産の時の祝の着衣初と混同すべからず、新春三ケ日の内の吉日を選びて祝ふなれば、その心にて作るべし。

【例句】

著衣始

姿にありてつくしの綿のきそ始　宗因（梅翁宗因発句集）
著そ始咲や難波の梅の花　杉風（杉風句集）
福藁の塵もいとはじ著衣始　春坡（古人春夏秋冬）
世とともに身のきそ始思ふ哉　白雄（白雄句集）
我裾の鳥も遊ぶやきそはじめ　千代尼（千代尼発句集）
釋迦どのゝいくつの年ぞきそ始　一茶（一茶句帖）
名所や絹商人の著衣始　子規（子規全集）
なつかしき藍屋が妻や著衣始　青々（妻木）
著衣始奥の灯は消さである　蝶衣（蝶衣句稿）
若うして家の主や著衣始　北涯（俳人北涯）
著衣始人となりたる袴かな　五空（五空句集）
著衣始錦の帯を閨にひく　橡面坊（深山柴）
著衣始や太刀を佩きし御姿　草加（草加句集）
著衣初や鏡にうつる御神燈　十二星（寒氷集）
火燵出る足袋の白さや著衣始　烏堂（續春夏秋冬）
著衣始昔しのぶの古小紋　梓雪（梓雪句集）
男女いづれ我子や著衣始　古泉（己巳句鈔）
貧しさになれて母たり著衣始　初谷（閑古鳥）
九人ありて憎き子もなし著衣始　かせを（明治一萬句）
角力取の子に貰はれて著衣始　黒洲坊（明治新俳句集）
母方の紋めづらしききそ始　山峰（古今俳諧明治句集）
犢鼻褌を隠しにはさむ著衣始　汶村（同）
物堅く祇園に住むや著衣始　碧童（明治一萬句）

著衣初通る太夫の傘揃　渓月（同）
丈草が枯木姿や著衣始　凡湫（最新二萬句）
著衣始季に生れて縫直し　酒落（同）
美しき噂の娘や著衣始　祥石（青嵐）
顧る後ろ鏡や著衣始　洛川人（大正新俳句）
遊女とは母を知らじな著衣始　徂春（同）
稀婦の里細布今なし著衣始　泰山（泰山俳句集）
著衣初恍惚として親心　鱶洲（懸葵）
著衣初若うおはすと申しけり　石牛（同）

春著（はるぎ）
正月小袖（しやうぐわつこそで）　春小袖（はるこそで）

季題解説 正月着用するために衣服を新調す、これを春著といひ、又正月小袖、春小袖とも云ふ。**参照** 著衣始（きそはじめ）

例句

春著

病み臥せる人に繍たき春著哉　虚子（ホトトギス）
折釘に掛けし春著や五ツ紋　漱石（漱石全集）
頼みこしこれ程の世を春著哉　青々（最新二萬句）
春著あり朝の雀の心よき　素石（木虫句集）
降りかゝる春著の上の塵埃　温亭（温亭句集）
サと投げて裏返しなる春著かな　虚吼（虚吼句集）
廣間たゞ衣桁に春着かゝるのみ　波那女（[illegible]）
一つ違ひの姉妹の春著かな　三木（同人俳句集）
引流す櫻ちらしの春著かな　ゝ石（ホトトギス）
春著きるや裾ふみおさへ腰細く　久女（同）
傳へ來て古き春著や我も著る　孤軒（孤軒句集）
春著人淡き疲れによる机　絹村（現代俳句大觀）
酔はされて座に耐えかねし春著哉　待宵草（年刊俳句集）
春著着て船の子船に遊び居り　泰堂（同）
ふくよかに襟重ねたる春著かな　艶生（春泥研究會句抄）
脱ぎすてし春著色めく燈下かな　千壺（昭和模範句集）
緋鹿子の又なくはえし春著哉　まさ女（大正新俳句）
さら〳〵と雪聞いてたゝむ春著哉　みさ子（同）
襷かけて春著の袖を婢の惜しむ　かな女（同）
人の著て魂なごみたる春著哉　蛇笏（昭和一萬句）
それ〴〵の春著に子等を起しけり　愁他樓（同）
あたゝめて春著きせたり妹に　かな女（同）
炬火燵春著のまゝに寝落ちけり　子峰（同）

春　著　乳母なりし人来て春著きせくれぬ　麻城（現代俳句大観）
よくたべて腹もこわさず春著の子　みどり女（同　）
正月小袖　思ひ寝や正月小袖枕もと　十二星（鏤氷集）
春小袖　うき人に蜜柑擲や春小袖　銀獅（新懐紙）
蛤の煮汁かゝるや春小袖　几董（井華集）
春小袖たゝみ羽子板毬もおく　秋蒼（大正新俳句）
金銀の揃ひの縫衿や春小袖　山黛（同人俳句集）
おだやかな娘となりぬ春小袖　一紅女（昭和一萬句）
著通して三日の皺や春小袖　砂丘（現代俳句大観）

初衣裳（はついしやう）　初重（はつがさね）

季題解説　新年始めて着る晴着をいひ、又これを初重ともいふ。参照　春著ハ、初衣桁ハ、著衣初ハ、

例句
初衣裳　楊すれて匂せかせん初衣裳　初遊軒（大三物）
初　重　円玉子黄むく白むく初重　口楽（雑巾）

初衣桁（はついかう）

季題解説　新年始めて春著などをかけ用ゐる衣桁を初衣桁といふ。参照　初衣裳ハ、

例句
初衣桁　振袖の紫垂れよ初衣桁　碧童人（懸葵）

春袋（はるぶくろ）　天地袋（てんちぶくろ）　天地の袋（あめつちのふくろ）

季題解説　新年に縫ふ財布を春袋といふ。ハルといふより之を祝して縫ふなり。秋はアキ財布とて之を忌む。又、天地袋ともいふ。天地を縫ひ合する心にて、幸を納るゝ祝物とす。「天地を袋に縫ひ幸を入れて持たれば思ふ事なし」といふ俗諺あり。

例句
春　袋　春袋も金木綿に仕たりけり　素石（永虫句集）
春袋恵方詣りに紐解きぬ　二島（同　）
底深く紐長かりし春袋　同（同　）
笑ふ時淋しき妻よ春袋　釜村（最新二萬句）
質引を思ひつゝ縫ふ春袋　同（同　）
その中の緋の春袋乞はれけり　すゞき女（年刊俳句集）
山鳥の尾の紐長し春袋　杉村（高潮俳句鈔）

天地袋

神の札天地袋に納め得つ　素石（木虫句集）

座右銘天地袋に忘れめや　陽洲（鶴　祭）

初髪（はつかみ）

季題解説 結初（ゆひぞめ）　初結（はつゆひ）　梳初（すきぞめ）

新年はじめて婦女子の髪を結ひ、又はじめて髪をくしけづることを初髪、梳初などと云ふ。

例句

初髪

初髪や姑となりし我が妻も　五空（五空句集）

初髪や婢の髪も結ひやりぬ　三千女（ホトトギス）

初髪の頸を伸べて婢かな　紅女（同）

初髪や来る人毎にはやされつ　福子（同人俳句集）

初髪や銀の元結はねあげて　千秋（現代俳句大観）

初髪の櫛笄も年古りぬ　寶生子（同）

初髪を寝まじき娘心かな　宋斤（昭和一萬句）

膳を運ぶ皆初髪の舞子どち　樂天（同）

初髪の納め簪や母老いし　櫻紅子（年刊俳句集）

初髪の鏡はなれて祝儀かな　六灰（同）

初髪の妻帰り来て笑ましげな　野花（同）

初髪や蒔絵の櫛も母ゆづり　きさゑ（木太刀俳句抄）

手間どりて初髪結ふてやりにけり　みどり女（昭和模範句集）

初髪や隣の椅子のタイピスト　しげを（同）

初髪の襟あし寒く戻りけり　蘆仙（懸葵）

結初

結初の二人参りぬ雪の宮　秀畝（現代俳句大観）

結初の髷や妻たり娘たり　芒角星（青嵐）

初結

初結の櫛笄や膝の上　和香女（ホトトギス）

初結や嫁ぎし時の髪飾　艶子（同）

初結やかいこゞるみの羨まし　夜濤（懸葵）

梳初

梳き初めや足袋ほのしろき立鏡　梨葉（梨葉句集）

梳初や油光りの手馴櫛　淡路女（ホトトギス）

新しき櫛や油やすき始　虚子（同）

梳初や乏しき髪に嫁姑　珊々（現代俳句大観）

初鏡（はつかゞみ）　初化粧（はつけしやう）

季題解説 新年はじめて婦女子の鏡臺にむかひて化粧をなすことを初鏡、初化粧といふ。〔参照〕鏡臺祝（イハヒ）

例句

初鏡

梅や紅人のけはひの初かゞみ　鬼貫（俳諧七車）

初鏡

衣紋つき老も正して初鏡　鳴雪　（鳴雪俳句集）
自嘆
大入道笑び映るや初鏡　虚吼　（虚吼句集）
うばたまの黒髪祝へ初鏡　十二星　（鐘氷集）
初鏡すでに火桶に火のありぬ　せん女　（現代俳句大觀）
又しても湯氣に取らるゝ初鏡　妙女　（年刊俳句集）
初髪の櫛笄も年ふりぬ　實生　（同　）
戀や昔女に小さき初鏡　春樹　（ホトトギス）
唇をなめ消す紅や初鏡　久女　（同　）
母の年幾つか過ぎし初鏡　よりえ　（同　）
結ひあげて立惜みけり初鏡　愁花　（同　）
やうやくに坐るいとまや初鏡　織女　（同人俳句集）
ほてりたる頬をうつしぬ初鏡　福子　（同　）
快くびんふくらみぬ初鏡　タツ　（同　）
初鏡顏引きのべて化粧哉　奇錢　（同　）
幼きに序で化粧や初鏡　帆影郎　（昭和一萬句）
ねもごろにひく眉墨や初鏡　素月　（同　）
泣ぼくろとつて終ひぬ初鏡　三巴女　（同　）
なか〳〵に母に似し子や初鏡　蕉堂　（昭和模範句集）
櫛とりかへてさす前髪や初鏡　寒餘子　（大正新俳句）
灯さし寄せてこゞみとく髪や初鏡　みさ子　（同　）

初化粧

雛の羽つくろふや初化粧　千納　（玉かつら）
春ぞけさ端居の猫も初化粧　梅佳　（大三物）
子なき身の若さいつ迄初化粧　房女　（現代俳句大觀）
頬の紅唇の紅や初化粧　炎天　（大正新俳句）
嫁がねば我れも娘や初化粧　花野女　（同人俳句集）

初寫眞（はつしやしん）

初撮し（はつうつし）

季題解說　新年初めて撮影する寫眞を初寫眞といふ。

例句

初寫眞

初寫眞妓に寫し場賑かし　珖耳　（同人俳句集）
眞帆片帆松ヶ枝込めて初寫眞　翠雲　（かりかね）
庵主の山高帽や初寫眞　珊月　（現代俳句大觀）
里の親も居合せて嬉し初寫眞　芳雪　（同　）
子を叱る妹母めかし初寫眞　若石　（同　）
初寫眞梅下に子等の並びけり　柿山伏　（最新二萬句）
初寫眞撮る草の戸によき日かな　萬太樓　（年鑑俳句集）
初寫眞長幼序あり一家庭　松宇　（松宇家集）

初寫眞乙女なる日の思ひ出に　てい子（同人俳句集）

初嫁入（はつよめいり）

季題解説 新年に結婚式を擧ぐるを初嫁入といふ。

例句 初嫁入

竹取の翁が娘初嫁（ハツヨメリ）　好調（大三物）

初座敷（はつざしき）

季題解説 新年始めて客をもてなす座敷を初座敷といふ。　參照 節座敷（セチザシキ）

例句 初座敷

物ならふ女のわらはの年のはじめとて參りつどへるをもてはやして

ひらにとて羽子板もたす初座鋪　園女（小弓俳諧集）

初屏風（はつびやうぶ）

季題解説 新年座敷の飾りつけに引き廻すを初屏風といふ。

例句 初屏風

雪江の松思ひ出や初屏風　五空（五空句集）

初竈（はつかまど）　焚初（たきぞめ）

季題解説 元日、始めて竈に火を焚きつくるを初竈といひ、又焚初といふ。

參照 炊初（カシギゾメ）

例句 初竈

西行のよしの手拭初竈　芳室（增亭環）
輪飾の焦げる炎や初竈　稻青（最新二萬句）
今年ぎりの禮奉公よ初竈　蕉青（同人俳句集）
煤びたる秋葉の護符や初竈　桑陽（同）
日本は男に焚かす初かまど　夕村（庚午句鈔）
豆殼の煙あげけり初竈　冬葉（故郷）
初竈神の火うつす附木哉　烏不關（閑古鳥）
庭上の松の太さや初竈　鬼洗（愛吟集）
初竈次々に燃え盛りけり　せん女（ホトトギス）
荒神は火を吹きませり初竈　靜山（同）
初竈燃えゐて誰か立てりける　盧子（同）
初竈鵜所の宿と見られけり　夢堂（懸葵）
初竈小野の薪の枯芒　水棹（同）

初竈

幾度か雪に雉鳴く初竈　日塔（大正新俳句）
まさをなる火吹竹あり初竈　美乘（年鑑俳句集）
焚きそめて妻にゆづりぬ初竈　和亭（現代俳句大觀）
[illegible]しき世帯道具や初竈　申[illegible]（同）
初竈裏白の屑燃やしけり　貞子（大正俳句選）
初竈蓬を焚きし匂かな　雨丁（年刊俳句集）

焚初

焚初やいよゝ明るき古柱　蒓江（同　）

初炊ぎ（はつかしぎ）　炊初（おかしぞめ）　たきぞめ

【季題解説】新年始めて飯を炊くを初炊ぎ、炊ぎ初といふ。【参照】初竈（ハツカマド）

【例句】

初炊ぎ

初炊ぎ家々窓を開きけり　庭後（江戸庵句集）
草庵や粟一つかみ炊初め　江戸庵（最新二萬句）

俎始（まないたはじめ）　庖丁始（ほうちやうはじめ）

【季題解説】三日、初めて俎、庖丁を用ゐるを俎始、庖丁始といふ。【参照】俎切始（[illegible]）

湯殿始（ゆどのはじめ）　初湯（はつゆ）　初風呂（はつぶろ）　若湯（わかゆ）　初湯殿（はつゆどの）

【古書校註】

【莱草】「雑談抄　和俗歳の始に沐浴するを湯殿初といふ」

【年浪草】雑談抄に云、和俗歳の始に沐浴するを湯殿始と云ふ云々。世俗の云ふ處皆同じ、然るに藤大典侍の御局の御湯殿記に付て按ずるに、御湯殿とは臺盤所を云ふ。臺盤所は俗に云ふ臺所に同じ、故に臺所始と云意にて湯殿始といふなるべし、因に世俗初湯、若湯といふ類に非ず、年中人の生命を繋ぐ食物等を調ふる其元なれば、第一臺所始を祝ふべき也。（一）

【註】（一）臺盤は食案の外に食物を調ふる台にて云ふ、「臺、盤などは、台盤殿の上にかゝりたるも宜しからず」（[illegible]）

【季題解説】新年初めて湯殿にて沐浴するを初湯といひ、又初湯殿とも云ふ。錢湯の初湯、初風呂は元日は休み、二日の早朝より開く、習慣なり

【宗匠注意】御産の時の祝の湯殿初と混同すべからず。正月初めて湯殿に入りて沐浴すること、初湯殿・初風呂皆同じ。

【例句】

初湯

我を[illegible]く湯氣たつもしき初湯哉　鳴雪（鳴雪俳句集）
いつまでも浦鳴らし居る初湯哉　虚子（ホトトギス）
謠ひ恵加賀は初湯の謠ひ聲　緑石（落椿）
鶴の首長しと笑ふ初湯哉　露月（露月句集）

命長き人に逢ひたる初湯哉　紅葉（紅葉句集）
初湯や六十年の古男　鬼城（鬼城句集）
初湯戻り川は夜明の靑さ哉　月斗（現代俳句大觀）
眉剃りて妻の嬉々たる初湯かな　蛇笏（年刊俳句集）
旅籠出て上野驛前の初湯哉　炎天（大正新俳句）
落つかぬ旅に帶とく初湯かな　波那女（同）
麥畑に山の日とゞく初湯かな　梅鳩（年鑑俳句集）
雀啼くはろけさにある初湯かな　紅鳥子（現代俳句大觀）
朦朧と妃のおます初湯かな　もん女（同）
妓に妓にかくて初湯の化粧かな　溪月（續春夏秋冬）
初湯出て早梅活けし書齋哉　耕雪（ホトトギス）
餠花や松湯梅湯が沸初め　雪山（明治一萬句）
手拭の紺のゆかりの初湯かな　松濤樓（懸葵）
行末を皺手に憶ふ初湯哉　守拙（同）
窓にさす雪のまばゆき初湯かな　葉枝女（同）
水桶に齒朶の浮き居る初湯哉　三幹竹（同）

初風呂

初風呂もふくや入くる宿の春　一雪（洗濯物）
初風呂の我垢恥づる灯影哉　鳴雪（鳴雪俳句集）
初風呂の長き化粧よ子を守り　郊人（現代俳句大觀）
初風呂や宿の膳立出來るまで　黃雨（年刊俳句集）
初風呂の夜の大雪に焚き次げり　黑洲（大正新俳句）
初風呂の棚番醉うて居たりけり　滑川（年鑑俳句集）
初風呂の一日沸いて靜かなり　穀雨（昭和一萬句）
初風呂の溢れつゞけて勿體なや　壺陽（ホトトギス）
初風呂や新の波桶十ばかり　坡牛（同）
初風呂の肩をこぼれて流れけり　塔雨（懸葵）

若湯

江戶住は我々しきも若湯哉　一茶（一茶句帖）

初湯殿

月雪のよごれ洗はん初湯殿　船男（類題發句集）
たちのぼる湯氣紫に初湯殿　默興（續紅調集）
次の間に羽織袴や初湯殿　玉樹（同人俳句集）
輪飾の雫して居り初湯殿　屛峰（年刊俳句集）
手拭の木香うれしさよ初湯殿　句佛（我は我）

初火事（はつくわじ）

季題解説　新年初めての火事を初火事といふ。**參照**　冬―火事（クワジ）

例句

初火事

初火事の埒なく消えて日和かな　俳白魚（俳諧雜誌）

供へて後、一家の人数により、小さき鏡餅を作り折敷にのせ、押鮎・大根・橘・橙等を添へて食ひ祝ふを歯固めといふ。歯固の具として高坏六本に、折敷をすゑ飾る。即ち一本には煮鹽・鮨・鮎・押鮎を焼きて、皆上に置く。鮎串差、一本には鯉・鳥・鹿・猪、皆盛物に随ひ串差にして上に置き、倶に之を貫く。一本には瓜漬・茄漬・蕪・大根。一本には居[illegible]・白散・窪坏・窪盞。一本には酒盞・窪杯四口　一本には鏡・相具鮎・大根・橘、等を飾る古式ありといふ。

例句

歯固

歯固めに枝のへるこそめでたけれ　北枝（北枝発句集）
歯固やとは云さして水の恩　言水（俳諧五子稿）
歯固や先酢牛蒡のさえ加減　越水（桃の首途）
人並に歯茎固めの豆麸哉　一茶（九番日記）
歯固に梅の花かむ匂かな　如行（類題発句集）
涎して歯がためなせる童かな　如泉（新類題発句集）
歯固や鬼一口の茎大根　繕古（同　）
歯固やいで海のもの山のもの　子規（子規全集）
歯固やかねて侘しき[illegible]と砂　青々（妻木）
歯固や鼠は何を食む今宵　紅葉（紅葉句集）
歯固や馬歯徒らに長じけり　懐面坊（深山[illegible]）
歯固や犬馬の如く生きて尚　白山（新春夏秋冬）
歯固や耳順の父母に十二採　素泉（同　）
歯固や祖先の像に[illegible]　春宵女（ホトトギス）
歯固めに石を噛んだる古因よ　虚子（同　）
歯固や病を恨む老詩人　同楽（[illegible]の[illegible]）
歯固や二つ殖えたる膳の数　佳外（現代俳句大観）
歯固に父母の健なる嬉しさよ　尺角（最新二萬句）
歯固や子の[illegible]膳に[illegible]箸　紅萍（同　）
老幼の歯固めに木の實祝ひけり　三幹竹（[illegible]）

参考　正月の元日に猪・鹿・雉・鴨・押鮎・煮鮎・大根等を食ふを言ひ、後には鏡餅を用ゐた。土佐日記に「芋もあらめも、歯固めも無し。」源氏物語に「歯がための祝ひしてもちひかがみさへ取り寄せて」

太箸（ふとばし）

[illegible]箸　雑煮箸（ざふにばし）　柳箸（やなぎばし）　祝箸（いはひばし）　箸包（はしづつみ）　箸紙（はしがみ）

古書校註

【栞草】雑談抄　箸のをるゝは落馬の相と云ふ。将軍義勝（[illegible]）幼少にて治世のとき、元朝規式の箸折たり。其年の秋落馬にて失給ふ、御舎弟義政續て治世の時、をれざるやうに取計らひて太くせしより始る、古實にはあ

らず。

【年浪草】太箸又之を美箸と謂ふ、說文に曰く、箸は飯攲なり、竹者の聲に從ふ、今俗筯に作る、或は櫡に作る。韓子に曰く、商紂始めて象を以て之を爲る（二）。○順和名韻に云ふ、筯和名波之是なり。字亦箸に作る。倭俗歳始に用ふる箸尤も太し、故に是を太箸と謂ふ。（三）

註（一）將軍義勝　足利七代將軍義勝を指す、嘉吉二年七月廿一日、年僅に十歳にして薨ず。俗說之を落馬に歸すれども史家は病に依るものとして落馬說には多く疑を存せり。（二）象牙、象牙の箸を作り箕子之を諫めたること史記に見ゆ。（三）和名抄は天暦の頃、源順の撰する所、太箸の語之に出づるとせば、足利時代の創始にあらざること明けし。

季題由來　太箸は歳旦の食膳に用ふる白木の太き箸、多く柳にて作る故に柳箸とも云ふ。古、足利義勝將軍治世の時、元朝の儀式に用ゐたる箸折れ、その年の秋落馬して死したるより、弟義政の代に至りて、箸の折れざる様に家臣の取計にて、太く造らせたるに起源すと云ふ。

例句

太箸

太箸をいただいて置く門儀哉　卯七　（類題發句集）
太箸や太鼓の役の持ちはじめ　秋之坊　（同）
太箸や削りもはてず神代より　吞流　（新類題發句集）
太箸や卜にひかへし檜木山　曉臺　（曉臺句集）
太箸や削らぬさきの杉の月　巣兆　（曾波可理）
太箸をふとく思ふもひと日哉　梅室　（梅室家集）
太箸のうれしさしるや草枕　蒼虬　（蒼虬翁發句集）
太箸や年々瘦せる老の腕　鳴雪　（鳴雪俳句集）
太箸も其庭訓の威儀にこそ　露月　（露月句集）
太箸のまろびよりけり齒朶の上　青々　（妻木）
太箸へ神と居並ぶ心地かな　紅葉　（紅葉句集）
太箸やころげ出でたる芋の頭　庭後　（江戸庵句集）
太箸やまだらはげなる器物　鬪人　（春夏秋冬）
太箸や伊勢の檜の丸削り　雪山　（[illegible]春夏秋冬）
太箸の丈を揃へて頒ちけり　繞石　（落椿）
太箸も骨正月となりにけり　未央　（明治一萬句）
太箸に名を書き待ちし人の來し　雪魚　（現代俳句大觀）
太箸のほのか匂へる白さかな　峭木　（年刊俳句集）
太箸の二日の色に染まりけり　鶯池　（鶯池句集）
太箸をあつめ[illegible]多き草家哉　栗人　（最新二萬句）
太箸の垢も正月二十日かな　白花蛇　（同）
太箸や彈丸除の札うけて來し　眉月　（同）
太箸や柚が杓にさも似たり　蝶衣　（蝶衣句稿）
太箸に赤くはさみしちよろげ哉　蛙波　（年鑑俳句集）

柳箸

祝箸

箸包

箸紙

太箸や覺束なくも子は樂る　旭花（同）
太箸や煙草にこげし指の先　百迷（同人俳句集）
太箸や生木のにほひ懐しく　不花（同）
太箸は水に濡らして白き哉　素石（木兎句集）
太箸や京に育ちて國知らず　せん女（昭和一萬句）
太箸や和合の膳の五十年　稗人（同）
小き子や下の方持つ柳箸　無黃（現代俳句大觀）
刈柴の中から選りて祝箸　蘇衣（かゝがね）
らうたけて行くをたよりや祝箸　律朗（俳星）
めづらしや去年の筆見る箸包　音水（大三物）
壽の一字古りたり箸包　繞石（落椿）
箸包水引ゆるき三日かな　同（同）
三笑の松竹梅や箸包　烏堂（續春夏秋冬）
箸紙に誰が手か我が名書かれありぬ　十二星（鐵氷集）
箸紙や水引の尾の尻上り　同（同）
箸紙や越前奉書恭し　同（同）
箸紙に壽の字墨痕淋漓たり　黑洲（懸葵）

喰積（くひつみ）　重詰（ぢゆうづめ）　重詰料理（ぢゆうづめれうり）　組重（くみぢゆう）　ほうらい

古書校註　【栞草】青藍云（一）今の俗誤りて蓬萊臺を喰つみといへる故に、俳諧者流もまた同物と心得たる者多し。（二）むかし食つみと唱へしは今の重詰のたぐひにて、賀客饗應の具なれば、連句にはかならず食類の差合を繰べし、「食つみをほつほつあらす夫婦かな」嵐雪「食つみや山居の味をおぼえ初御居一食つみ、蓬萊、同物ならぬ微は炭俵集春の部卷頭「蓬萊にきかばや伊勢の初たより」芭蕉、云々。さて此句より飾り松、箱の海老、今朝の春などいへる句五章つらねたる後に「食つみや木曾の匂ひの檜物」岱水、云云。同物ならんには、蓬萊、食つみと並べ出すべきをかく隔てたるにてしるべし。但し木曾の匂ひの檜物とは其器をいふなるべし。

註（一）栞草の著者臨亭青藍。（二）浪華蓬萊笥、喰積を同一とす。

季題解説　食積は食ふべきものを集めて積み飾る義より出で、今の重詰のたぐひにて、賀客饗應の用に供したるものなり。誤りて蓬萊臺を食積といひしことあれども當らず。これは古、蓬萊の如く三方に勝栗・昆布・野老・穂俵・柑橘類などを積みかさね出したるものを食積と稱したるためなり。

例句　〔參照〕蓬萊（ほうらい）

喰積　ほつ／＼と喰摘あらす夫婦かな　嵐雪（玄峰集）

喰積

喰積や木曾の句の檜もの　岱水（炭俵）
喰積へさそひ出るやまめ良　米翁（[illegible]明山荘句稿）
喰積やかざやく斗り精米　羅柳（新類題発句集）
喰積やみな海山の寶もの　鳳嘁（同）
喰積に喰ふべきものを探りけり　子規（子規全集）
喰積もなくて酒のむ蜜柑十　鳴雪（鳴雪俳句集）
喰積のほかにいさゝかの鍋の物　虚子（虚子句集）
喰積のもの大かたに荒にけり　青々（妻木）
喰積や七日過ぎたる爲體　紅葉（紅葉句集）
喰積や書[illegible]のつゞく家　鬼城（鬼城句集）
喰積や天[illegible]数の子白々と　虚吼（虚吼句集）
喰積の一日箸をつけざりし　橡面坊（深山柴）
喰積のやゝにとゝのふ料理かな　青史（續春夏秋冬）
喰積のちよろげいつまで赤きかな　禾人（ホトトギス）
喰積に入れ是すことも三日かな　一空（ゆく春第二句集）
喰積に鶏鳴聞きぬ二た夫婦　姑洗子（現代俳句大觀）
喰積やからびそめにし飾歯朶　蓼雨（昭和一萬句）
喰積の重ね着合せ積みにけり　水歩（昭和模範句集）
喰積や猿が喜ぶ赤き物　渕蕭史（最新二萬句）
喰積や底に嫌ひな物残る　泰洋（同　）
喰積に忍ぶ夫の君嫁が君　矮松（同　）
客去るや喰積よせて皿の上　かな女（大正新俳句）
凍てしきる喰積つゝく寝しな哉　蝶衣（蝶衣句稿）
喰積や水引つけて箸袋　銀桂道（懸葵）

重詰

重詰や勅題に因む料理など　一犂（昭和一萬句）
重詰や次々斜めに積まれたる　蛇九坊（同　）

組重

組重に圍爐裏つほこりかゝりけり　夜臼（同人俳句集）

据り鯛（すわりだい）

季題解説　元日、食膳に鯛を供ふるを据り鯛といふ。〔参照〕掛鯛（かけだひ）

例句選句

据り鯛

据り鯛祝ひ一箸つけにけり　枳南（懸葵）

若魚（わかうを）

若魚迎（わかうをむかへ）

季題解説　正月二日、備後國横島地方にて神棚に魚介を供ふ、これを若魚といふ。又、このために、曉起して漁るを若魚迎へといふ。

例句選句

若魚　若魚に掌程の鰈かな　正喜（同人俳句集）

若魚迎へ　提灯に雪散る若魚迎へ哉　同（同）

若魚を迎へて戻り火燵哉　同（同）

沖風のそよと若魚迎へかな　羊我（懸葵）

なのりそも摘める若魚迎へ哉　同（同）

二日の海鼠の膾（ふつかのなまこのなます）

季題解説　正月二日、長崎地方にては、雑煮の外、必ず海鼠を刻み交ぜたる膾を膳に供ふるを例とす。江戸時代には、曉方より俵子賣來る、商家にては、聲高に俵子俵子（トーラゴトーラゴ）と呼び迎ふ。蓋し、二日の買初めに俵を買ふといふ緣起に因れるものなるべし。文化頃には、その年、平年なれば十二文、閏年なれば十三文を與へたりといふ。

若餅（わかもち）　正月餅（しやうぐわちもち）　鼓餅（つみもち）

古書校註　【山之井】三ケ日（一）につきたる餅を雑煮などに用る也。【栞草】三日の間に搗を若餅と云ふ由古老いへり。「雑談抄」一説に云ふ。三ケ日に餅搗ことあるべからず、俗に餅の大小を云ふ時、小きを若きと云ふ（二）。是小の詞を忌て云ふ。これ賀客に饗するに便ある故に、小きを賄ふ故と。云々。唯祝語とするのみ。

註　（一）三ケ日　元日より三日までの三ケ日間。（二）獨り餅の大小のみならず、小さきを若きといふこと多し。

季題解説　正月三ケ日の間に搗くを、若餅又は正月餅といふ。若は祝語にして、歳暮に搗く餅に對する詞なり。

實作注意　若餅は歳暮に搗く餅に對して年頭につく餅、祝ふ言葉なれば、單に餅の若搗きなどいふ場合などゝ混同すべからず。地方によりては元日に餅を搗き、直ちに雑煮を祝ふところもあり。故に正月餅といふ名もありと知るべし。現時、多くは三日に搗く。

例句

若餅

若餅に師走の音はなかりけり　和水（類題發句集）

若餅や晴著のまゝで搗きに寄る　巴靜（同）

若餅や春は春なる杵の音　六橋（新編類題發句集）

襷に來て若餅つくや次郎冠者　蛙聲（同）

若餅やざぶと搗き込む梅の花　一茶（眞蹟集）

若餅や草津の里の姥が軒　子規（子規全集）

若餅に后土の神を祀りけり　青々（妻木）

若餅に輝く松の旭かな　紅葉（紅葉句集）

若餅　若餅や家の嘉例の一ちぎり　山梔子（續春夏秋冬）
若餅や外にみそるゝ朝の香　星蓮（[illegible]句集）
若餅に匂ひそめたる蓬かな　八重櫻（明治一萬句）
若餅や小さきものゝ數多く　雨翠（同）
若餅を入るゝや米の空俵　奇遇（同）
若餅を春駒の子に取らせけり　田士英（同）
正月餅　山の風正月餅にかびの來て　夕月（年刊俳句集）

粥柱（かゆばしら）

[illegible]【栞草】粥の中へ餅を入て食ふを粥柱と云、七日の粥にも入るれど、十五日の粥には往古より入れ來れるにや。

[illegible]粥の中に餅を入れて食することを粥柱といふ。七種の粥にも入れたれども、十五日の小豆粥には昔より入れ來りしものなるべし。枕草紙に「十五日もちかゆのせくまゐる」とあるはこれなり。

實作注意　粥柱は十五日粥又は小豆粥の中に入れたる餅をいふものなれば、粥の木・粥杖などと混同すべからず。（[illegible]）粥杖探し　七種粥　十五日粥（ジフゴニチカユ）

例句
粥柱　小豆鳴めぐるや天の粥柱　吉長（雑巾）
大もちは例を引物ぞ粥柱　一茶（[illegible]）
まづ腹の力になるや粥柱　冬[illegible]（類題發句集）
粥柱祝ひつゝ下戸の一人かな　曉[illegible]（[illegible]春帖[illegible]）
長男は今兵にあり粥柱　素石（木虫句集）
粥柱なづなの縁かゝりけり　雪山（年刊俳句集）
七草のつきてうつくし粥柱　青々（最新二萬句）
粥柱くつつき合ひてあがりけり　紀山（懸葵）

結昆布（むすびこんぶ）

古書校註　【栞草】新年の雜煮にこれを加ふるは、むつびよろこぶと云に訓をかければにや。
【年浪草】雜煮に容て結昆布を加ふるは、正月を睦月と云ひ、すとつと相通ず、昆布は俗悦ぶと云ふ義を含む、むつびよろこぶ意にや。

[illegible]　昆布を小さく結びたるものにて、大福茶等に用ふるを結び昆布といふ、睦びを結ぶに寄せ、悦ぶを昆布に寄せて新年嘉祝のものとす。

例句

結昆布

御前に酒賜りぬ結び昆布　素石（鶏　）
杉箸ではさみし結び昆布かな　青々（妻木）
からからと正月寒し結昆布　梨葉（【葉】句集）
土器の冷酒に結び昆布かな　平安（同人俳句集）

〔結婚〕

結び目のそもそも堅き昆布哉　香墨（明治俳句）
結び昆布家例を今に膳の上　水棹（【馬】嵐）
結昆布めでたくも嚙みほぐしけり　泉園（年鑑俳句集）

両の物（りやうのもの）　料の物（れうのもの）

古書校註

【栞草】小土器也（一）の名義いまだ詳ならず、疑ては開豆、開牛房の両種を土器に盛て雑煮の膳の左右におく、此両種を盛物と云ふの略語歟、又料の物ともいふ、これも両種を盛る料とするか（年浪草）

【新式】こうろけの事なり。（二）

【いつまで暦】料の物　小土器二つ也、牛蒡、豆をもるなり。

註（一）かはらけ　土器、釉を用ゐざる焼物を云ふ。又轉じては其の杯。（二）こうろけ　亦かはらけの事なるべし。

季題解說　正月、開豆・開牛蒡の二品を小土器に盛り、雑煮膳の傍に据ゑ置くを両の物といひ、又料の物ともいふ。〔一説〕開豆に開牛蒡

古書校註

両の物　年酒酌みて両の物より祝ひけり　枳南（懸葵）

芋の頭（いものかしら）　芋頭　芋頭祝ふ

古書校註

【栞草】芋がしら（一）を頭と唱ふるは例の祝語なり、玄蕃頭、主頭などのかみ（二）をかりて云、かならずこれを用るは多子の義に取るなり。

註（一）芋頭、さといもの根の塊、おやいも。（二）かみ　上の義、長官、古への制長官を一官の長として、次官これを助け其下に判官、主典ありて各其の務に從ふ、これを長官（かみ）次官（すけ）判官（じよう）主典（さくわん）とも稱す、諸官概ね然り、之を官の四等と云ふ。

季題解說　里芋の親芋を芋の頭といふ。頭をかみといふことと所謂祝詞にして、玄蕃頭、木工頭などのカミを借りて云ふ。雑煮に用ひ、多子の義をとりて祝ふなり。又蹲鴟、駿鴟などとも書す。〔一説〕雑煮に

例句

芋の頭　今朝は猶何がしの僧都芋頭　我口（新類題發句集）

芋の頭

妹が箸に持ちなやみけり芋頭　風馬（[illegible]句集）
芋の頭姑射の山人植しかな　冥々（冥々句集）
芋の頭箸の冠に似たる哉　四明（四明句集）
以て祝ふ正月中や芋頭　牛詰（年刊俳句集）
芋の頭をもてあます子笑ひけり　左人（同）
朱の椀に一つ殘るや芋頭　黒洲（懸葵第一句集）
禿げ椀にわが世ゆたけし芋頭　芋村（懸葵）
芋頭二つ祝ふやかゝり人　夜濤（同）

開豆（ひらきまめ）

古書校註

【栞草】紀事 水煮の大豆、是をひらき豆と云、開牛蒡、煮もして生の牛房なり、算木（一）の如くこれを盛る、俗に算木牛房と云、又ひらき牛房と云、兩種ともに土器に盛り、齒朶、楪を敷く。

【いつまで暦】開き豆　水煮の豆なり　開き牛蒡　なまごぼうなり。

註（一）算木　易に用ゐる具、小さき方なる木にて六個あり、古くは中央に一と刻みあり、三個にはなし。

季題解説　開豆は新年の祝ひ膳に供するものにて、大豆を水煮せるものをいふ。【參照】雨ノ物（一六）　開牛蒡（[illegible]）

例句

開豆

祝はゞや心の花もひらき豆　百男（新類題發句集）
以て祝ふ正月中や開豆　十歩老（春夏秋冬）
疵なきを一粒選りや開豆　黒洲（懸葵）

開牛蒡（ひらきごばう）

算木牛蒡（さんきごばう）　叩き牛蒡（たゝきごばう）

季題解説　牛蒡を生のまゝ算木の如く切りたるもの、依つて算木牛蒡と云ひ、又開牛蒡といふ。新年の祝ひ膳に供す。叩き牛蒡は連木にて叩き刻みたるものを云ふ。【參照】雨の物（一六）　開豆（[illegible]）

例句

開牛蒡

ねもごろに叩き牛蒡や老の爲　東亭（新類題發句集）
鼻先きに開牛蒡の匂ひけり　黒洲（懸葵）

草石蠶（ちよろぎ）

ちよろぎ　甘露子（かんろし）　滴露子（ちよろし）

季題解説　草石蠶は、春苗を生ず、莖方にして葉と共に毛刺あり。葉は荏の葉に似て、狹くして皺あり。黄綠にして對生す。秋に至りて苗の高さ一二尺、梢に二三寸の穗狀の淡紫の花を開く。紫蘇の花に似て大なり、冬に至

り根の下に、別に繭に似たる根を生ず、長さ一寸ばかり、圭球ありて一頭は狭く尖り、一頭は蠅の形に似て白し。この根を梅酢に漬けて新年喰積の具となす。〔参照〕夏―草石蠶 〔参照〕夏―草石蠶

例句

ちよろぎ　重詰にのこりしちよろぎばかり哉　茶 居（蘭 古 島）

俵子（たはらご）　はつたはら

古書校註

【山之井】たはらこ　生海鼠をいへり。

【栞草】名義未ㇾ詳、按ずるに奥州金華山に近き海邊にて海鼠を取るを金海鼠と云ふ、其形あたかも俵のごとし、祝詞とせるか、春耕に糸切歯俵子はゴマメ也。小殿原は武家の祝語、田作は農家の祝語、俵子は商家の祝語。南海にて海鼠を俗に俵子といへり、

【新式】俵魚　なまこなり。

【雜談抄】和俗海鼠を呼でなまこと云ふ、熬海鼠に對して也　俵子と云ふ其義未だ詳ならず、按ずるに此者を子と稱す、子の貴きは太郎と云ふ、よつて太郎子と云ふべきか、たはらこと略して云にや、太郎は男子の稱也、此者海男子の名あり、思ひ合すべし、此者の形男根に似たる故、海男子と云と。云々。

季題解説

陸前國金華山附近にて漁獲する金海鼠はその形、俵の如し、仍て俵子といひて祝品となす。又春耕に糸切歯には「俵子はゴマメなり、小殿原は武家の祝語、田作は農家の祝語、俵子は商家の祝語なり」との説あり、

〔参照〕一日の生海鼠の膾

例句

俵子　俵子や名を賜りて高あがり　阿 蘭（〔illegible〕句集）

俵子やこがね花咲く國のもの　友 蝶（同　）

海蠃の身（ばいのみ）　海螺の身（ばいのみ）

古書校註

【栞草】〔和漢三才圖會〕海獅、俗にばい、海中に生じて小き螺也、色彩田螺（一）に似て堅く田螺より大なり、春夏ともに多く出づ、其肉上黒く中白く盤曲（マガリ）て殼にしたがひて蒼（アヲキハラハタ）腸有り、腸を去て煮て食ふ、甘く鹹し。商家にて除夜及び歳の始に必用の酒肴とす。いふ心は千倍万倍、貨殖をとるの祝歟。

註（一）田螺（たつぶ、つぶ）田野に生す、湖海にも有り、其形にて大なるは長さ一寸許り、殼薄くして黒色を帶ぶ、肉は青黒く身白し、春夏の交之を食ふ。

季題解説　海鼠は倍に通ずるを以て、京阪の商賈、千倍、万倍の貨殖を祝ひこれを年首の嘉饌とす。〔季題〕動物―海鼠に

例句　海鼠の身

海鼠の身や島をはなれて小一年　　歩　牛（懸　葵）
海鼠の身をねだる幼き好みかな　　寂　人（同　）

數の子（かずのこ）　鯑（かずのこ）

古書校註

【山之井】　かずのこ　かどの子なり。

【栞草】　青魚の子也、臘月歳始及び婚宴以て規祝の肴とす、多子の義に取るなり。（一）

注　（一）本草綱目「鯡之子也、腹を割て鯑を出し之を乾す。黄白色を上品とす。臘月歳始及婚礼以て規祝の肴となす。多子之義に取る、鰕を海老之義に取ると同じ」

季題解説　鯡の鯑を乾燥したるもの、數の子、即ち多子の意により子孫繁栄の意に寄せ新年の祝肴とす。〔季題〕重出ナシ

例句　數の子

數の子や我は果報ぞ花の春　　千　翅（類題発句集）
數の子は二親をいはふ年始哉　　氏　重（狗　尚　集）
小頭の數の子臭き且かな　　曲　翠（かなしふみ）
數の子に人を留めて小杯　　青　々（妻　木）
數の子を二箸三箸祝ひけり　　八重櫻（春夏秋冬）
から〳〵の凍て數の子を量りけり　　雄　月（ホトトギス）
數の子に置きつぎの酒こぼれけり　　瓢　園（同人俳句集）
數の子や辰馬が家の女客　　蘋　兎（蘋兎句集）
數の子や正月もはや末となり　　吹　歩（ゆく春第一句集）
大君の數の子や凡そ八千萬　　鳥不關（獺　祭）
數の子の歯音めでたき老もがな　　晴　風（同　）
數の子やかけこぼしたる花鰹　　晴　堂（昭和撰句集）
數の子に皓歯を鳴らす主哉　　徂　春（同　）
數の子の盟柴に氷かな　　奇　遇（明治一萬句）
家の中羽子數の子の酒に落つ　　月　斗（最新二萬句）
數の子の一ト皿膳を領しけり　　泰　洋（同　）
數の子に黒豆色をなしにけり　　喜　舟（大正新俳句）
數の子を音たてゝ食ふ兒となりぬ　　南　音（閑　古　鳥）
妻子寝て酌めば數の子氷りをる　　芳　雨（草上俳句集）
ほつ〳〵と數の子ほつき喰べにけり　　うしほ（現代俳句大觀）
琥珀色にして數の子の小山かな　　玉　樹（昭和一萬句）

数の子の浸り過ぎたる匂ひかな　黒洲（同）
数の子に鶯鳴きの銚子かな　行々子（現代俳句大觀）
数の子につきし麹の白さかな　旭山（年刊俳句集）
たべ醉うて數の子臭き男かな　沈生（懸葵）
數の子の數兄弟の九人かな　一樹（同）
數の子の壺に爐埃浮きにけり　三幹竹（同）

螺肴（にしさかな）　辛螺肴（からにしさかな）

古書校註

【栞草】時珍曰く、其形蝸牛（一）に似て、其類多し、唯泥水を食ふ。春月に人取て鍋中に置き、これを蒸ば其肉おのづから出づ、酒に煮、糟に煮てこれを食ふ。

【年浪草】此物を新年の酒肴とするは、海贏（二）に似たる故に並べ用ふるもの乎。

註（一）蝸牛　かたつむり、でゝむし。（二）ばい　別項を看よ。

季題解説　螺は田螺をさすなり、田螺の肉をとり出して汁にて煮たるもの、これを新年嘉祝の食とするは、海贏に似たる故なるべし。一説には鯡のことにて、其音二親に通ずるより祝ふと云ふ。

例句

螺肴
懸乞に皆食れしゝ螺肴　楠間（俳諧新句題叢）
出る日のさかむかひかやにしざかな　宗明（鷹筑波）
歌か否連歌にあらず螺肴　文鱗（類題發句集）
年をとれば屠蘇を思ふやにし肴　定好（大三物）

田作（たづくり）　小殿原（ことのばら）　五萬米（ごまめ）

古書校註

【栞草】和漢三才圖會に万米鰮也、正字未た詳ならず、一名田作、又古止乃波良といふ。（一）

【いつまで草】ともにごまめなり、武家、農家の唱へかへ。

註（一）和漢三才圖會原文「五萬米鰮也、正字未だ詳ならず、一名田作、又古止乃波良と云ふ。漁家海邊石上に攤け乾す小鰮也、阿波之産を上と爲す。之を好みて久しきに耐ふ。諸病に和し煮て食し、常に嘉祝之供と爲す。鮑熨斗と並び用ふ。」とあり。

季題解説　田作は鯷の素干にしたるもの、新年嘉祝の用に供す。農家にては祝ひて田作と云ひ、武家にては、小殿原と呼ぶ。五萬米は鱓と書す　五萬米は祝して假用する文字なり。（一）秋　鯷。

例句

田作
田作は手にもとられておかしけれ　龜洞（曠野後集）

田作

畔をゆづる代や田作りを祝ひ月　一雪（洗濯物）
田作や庵の肴も海のもの　子規（子規全集）
田作の蒿張らせたる袋かな　鳥不關（青嵐）
田作や海の和物尊けれ　二島（木虫句集）
ほつ／＼と面長田作好み食ふ　さとる（ゆく春第三句集）
田作に旅の正月わびしいぞ　浪三（蟋蟀）

小殿原

海老の座も越えぬべら也小殿原　言水（俳諧五子稿）
齒朶の葉の七符は誰を小殿原　同（同）
小殿原鉛太刀となそしられぞ　四明（四明句集）
小殿原に交りて龍のおとし子が　同（同）
おしなべて牛蒡もそるや小殿原　化羊（續春夏秋冬）
箸袋さすやめうとの小殿原　梨葉（梨葉句集）
春正が重の人繪や小殿原　青々（最新二萬句）
小殿原こゝの庵主の髯のよさ　散木庵（同）
祝はゞや二つはさみし小殿原　三幹竹（青雲抄）

五萬米

年徳は松のうら葉のごまめ哉　正親（大三物）
餅の嶋ごまめの白蛇眠りけり　洗口（虚栗）
餅配り國栖人ごまめ奏してより　其角（五元集）
世の中に馴れぬごまめの姿かな　子規（子規全集）
水引に妹背結びのごまめ哉　野風呂（ホトトギス）
京はあまき五萬米煮くなり家の春　梨葉（梨葉句集）

押鮎（おしあゆ）　年魚（としうを）

古書校註

【山之井】　土佐日記に元日に用たる事有り。江次第にも元日押鮎一杯といへり。鮎は年魚とて年の始に用る魚也。

【栞草】　江次第元日押鮎一坏、煮鹽鮎一坏。云々　土佐日記　にも元日に用ひたることとみえたり、是れ齒固の具なり。鮎は年魚とて其年長ずる故に、新年嘉祝の食とす。

【新式】　貫之土佐日記に、たゞおしあゆの口のみすふとあり、むかしはおしあゆをすはりて元日にいはひけん、異名を年魚といふによりてか。

【土佐日記】　正月元日　芋も荒布も齒固もなし、たゞおしあゆの口のみぞ吸ふ。（一）

註（一）土佐の船中にての事なり。

季題解說　鮎を鹽押にしたるものを押鮎といふ。鮎は春生じて一年の中に成長する故に年魚と稱し、年首の嘉祝にこれを用ふなり。昔は元日の齒固めの祝ひに用ゐたること古書に見えたり。［參照］夏―鮎

【實作注意】 押鮎は新年嘉祝のものなれば、作句の時祝ふ意を忘るべからず。又年の魚ともいふ例句あれば、年の魚祝ふ心持にて作るもよし。

【例句】

押鮎

鮎に見し押鮎すはるけさおかし　幸佐（大三物）
押鮎や國栖の翁にあやかれと　何龍（新類題發句集）
押鮎はなくてもあらん氷頭鱠　曉臺（曉臺句集）
押鮎や南は吉野草の宿　青々（妻木）
押鮎の腹平らかに居たりけり　露月（露月句集）

年の魚

記を續がば土佐の九萬疋年の魚　和英（伊達衣）

【參考】 土佐日記に「おしあゆの口をのみ吸ふ」とある。鮎は年魚とて、一年にて生育すれば、祝うて嘉儀に用ゐる。

葩煎（はぜ）

米花（こめばな）　葩煎賣（はぜうり）　葩煎袋（はぜぶくろ）

【古書校註】

【年浪草】 字彙に曰く、糅米爆米は糅を日ふ。○經驗方に曰く、稻米火に爆せしめて食す、之を白花米と謂ふ。○米花急就草　徽州處風土記。○袁仲朗詩集に云ふ、糯穀を釜中に爆す、孛婁と名づく、昔は元日之を賣り、蓬萊臺にも之を敷くと也、今世白米を用ゆ、豐後國にては薹索へも白米を包て付く、是をとみと云、富の字の意。

【栞草】 和漢三才圖會攝州天王寺の民家にて、河内の上糯米の殼を用てこれを熬る、爆脹れて、稃おのづから脱し去て潔白雪の花の如し。云々。○昔は正朔に家内にこれを撒こと有て賣と云説あり。また蓬萊臺にもこれを敷といへり、今は白米を用ふ、江戸にては雛祭にこれを供ず。

【季題解説】 糯米を炒りてはぜさせたるもの、色白く花片の如きを以て米花とも云ふ。古は元日、家中にこれを撒き、又蓬萊臺にも布きたりといふ。現今は白米を用ふ。大阪の十日戎の際は、葩煎を賣る店並ぶ。【參照】宗教—十日戎

【例句】

葩煎

葩煎蒔て童遣する遊び哉　銀獅（新選）
葩煎白し池にも梅のちりしかと　吾東（類題發句集）
正月の葩煎のあま味もうすら寒む　梨葉（梨葉句集）
葩煎賣や吳山の笠に楚地の香　朶輝（寶暦九年歳旦帖）
はぜ賣のこぼして庭も春寒し　宗瑞（竹の友）

葩煎賣

葩煎賣の桝大まかに量りけり　花未紅（晒葵）

葩煎袋

春風に疊束なさやはぜ袋　遲望（類題發句集）

【參考】 ハゼは米のはぜたのであるから糅の字を書くが正しい。又葉是とも當つ。

紫蘇粥（しそがゆ）

季題解説　正月、干し紫蘇を粥に和し食するもの、これを紫蘇粥といひ、よく邪氣を祓ふといふ。〔参照〕地黄粥　防風粥

地黄粥（ぢわうがゆ）

季題解説　正月、干し地黄を刻み、粥に和して食するを地黄粥といふ。これ邪氣をよく除くためなりといふ。〔参照〕紫蘇粥　防風粥

防風粥（ばうふうがゆ）

季題解説　正月、干し防風を刻みて、粥に和し食するものを防風粥といふ。よく邪氣を除くといふ。〔参照〕地黄粥　紫蘇粥

阿茶羅漬（あちやらづけ）

季題解説　京阪地方にては、正月料理用として、守口大根或は蕪を小さく刻み、これに昆布を刻みたるもの、及び、鷹の爪（紅唐辛子の小さきもの）を少々入れ合せて、酢・醤油・砂糖の三杯酢に漬けたるものを阿茶羅漬といふ。〔参照〕重詰

例句

阿茶羅漬
元日匆忙に過ぎつ阿茶羅の馴れ加減　素石（葵）
蠅帳に色なすものや阿茶羅漬　同（同）

切山椒（きりざんせう）

季題解説　一月、東京市内の菓子舗にて山椒入の五色の餅を細く算木形に切りて賣り出す、これを切山椒といふ。

例句

切山椒
下げ紙や切山椒賣り始め候　撲天鵬（懸葵）
下町で買へば味あり切山椒　蘭琢（同）

算木茶菓（さんぎちやか）

季題解説　算木茶菓は嬉遊笑覧に「（鶉尻）に伊勢宇治邊は年禮の客來れば先折敷にさんぎちやかとり、二寸ばかり割たる木二三枚はらにて結びたるを置、田作からうじなどをまじへ、これを年始の饗とし、次に芋かしら三ツ椀に入て寶珠といふ。これをするわたし、小紙一帖を以て引出物とす。家の貧富により紙の大小多少ありといへり。さんぎちやかとは算木茶菓なる

べし。伊勢にかりの風俗にあらぬにや。云々」とあり。切山椒に似たるものなるべし。〔三題〕切山椒（キリザンセウ）

勅題菓子（ちよくだいくわし）

【季題解説】新年嘉祝ノ用に、その年の勅題に因みて菓子司にて作り、賣り出す菓子を勅題菓子といふ。

【例句】勅題菓子

御勅題菓子や虎屋が納めもの　撲天鵰（懸葵）

美しや御題に因む祝菓子　三幹竹（同）

榧衣（かやごろも）

【季題解説】新年嘉祝の菓子、榧の實に衣をかけたるもの、蓬莱につむ榧の實を利用して製し、榧衣といひて古くより存す。

【例句】榧衣

榧衣をか香にもをどりけり　撲天鵰（懸葵）

初釜にめでたきものや榧衣　三幹竹（同）

五ケ日の飴（ごかにちのあめ）

【季題解説】正月五日に陸奥地方にて、朝に神棚佛壇等に飴を供ふる風習あり。是を五ケ日の飴といふ。

【例句】五ケ日の飴

五ケ日の飴をたらせし疊哉　文方（同人）

八日蕎麥（やうかそば）

【季題解説】正月八日。青森地方には、この日八日蕎麥とて必ず蕎麥を食ふ風習あり。

【例句】八日蕎麥

八日蕎麥また賭食ひを初めけり　文方（同人）

福沸（ふくわかし）

福鍋（ふくなべ）

【古書校註】〔栞草〕紀事云、若水を汲てこれを煮る、福沸といふ。これに用る鍋を福鍋といふ。雜談抄俗に七日の粥を呼て福沸といふ、是福とて餅の異名なり。其故は古へ福引とて餅を二人して引合ことはべりしとかや、其うへ餅の異名を福生果といへり、今朝餅を粥に和して煮るを云ふ。

【年浪草】野州邊にて、鏡餅を福出（フクデ）と稱す、福生果より云にや。或は說ふ、正月四日に、神棚へ三ケ日供したる飯・汁・羹の類を撤するを、棚さがしと云ふ、是を集めて一つに煮熟して、全家是を食ふ、是れ福沸なり、云々。

【日次紀事】今朝（七日）の菜粥を以て、福涌（ワカシ）と謂ふ、四日亦福沸（ワカシ）と謂ふ、亦若水を煮るを福沸と謂ふ。何れが其の正なるを知らざる也。

【いつまで暦】福わかし四日　神棚門飾へ上げし三ケ日の雑煮を一つ鍋へ入て祝ふ事也。

註　右の本文に依れば福沸には（一）、元日の若水と（二）、四日の棚さがしと、（三）七日の菜粥との三種あることを知るべし。

季題解說　元日、若水を汲みてこれを煮るを福沸しと云ひ、これに用ふる鍋を福鍋といふ。又一說に、七日の粥を福わかしと呼ぶ。これ福とは餅の異名、粥に餅を和して煮熟するを云ふとあり。古き句集に七種に付して出せるを見れば、七種の餅を煮る義と解して然るべし。［參照］粥柱（カユバシラ）　棚探し（タナサガシ）

例句

福沸

めづらしや青菜まじりの福わかし　了味（眞木柱）
七彦の粥とやいはふ福わかし　一雪（洗濯物）
福わかし蕪か餅か水の月か　圓入（類題發句集）
菜にめでゝいはふ斗ぞふくわかし　捨女（自筆句集）
けさは茶をあとへまはして福わかし　梅室（梅室家集）
福沸し家例に小判煮たりけり　耕石（高潮俳句鈔）
ひつそりと七日も過ぎぬ福沸　寸七翁（寸七翁句集）
兄　鰥　妹　孀　福　沸　奄美人（ホトトギス）
福沸す火のおとろへや二番鶏　一岳（ゆく春第一句集）
貧しくも心澄みけり福沸　洋雲（ゆく春第二句集）
ひたすらに神信心や福沸　天眞（閑古鳥）
ふつ〳〵と蓋ふき上げぬ福沸　燕州（年刊俳句集）
大姐小姐袖つらねけり福沸　鶯池（鶯池句集）

福鍋

福鍋にきけや蓬萊の松の風　紅葉（紅葉句集）
福鍋の下蝦夷炭の火の粉哉　雨圃子（芋　畝）
福鍋や田舍に住めば瓦斯戀し　虚子（ホトトギス）
福鍋に耳かたむくる心かな　蛇笏（現代俳句大觀）
福鍋や山河と共に古りし宿　瓦全（昭和一萬句）
福鍋や蓋の堆朱をなつかしむ　青嵐（年刊俳句集）
あした疾く福鍋煮ゆる草の宿　右京（同　）
福鍋の尻こそ〳〵と洗ひけり　翠竹（最新二萬句）
杓子新らし福鍋の吹き上る待つ　かな女（大正新俳句）

大服（おほぶく）　大福（おほぶく）　福茶（ふくちや）　お福茶（ふくちや）　大福茶（おほぶくちや）

古書核註

【山之井】元日におほぶく(一)にたてたる茶を大福といひなして用る事也。

【栞草】大服とは點茶(二)の名なり。紀事其式茶を點じ、鹽梅(三)山椒を茗碗（チヤワン）の内に漬て合家（カナイ）これをのむ、又賀客に獻ず、これを大服と云(四)、季吟が曰く、元日に大ぶくにたてたる茶を大福といひなして用ふること也と。云々。　大服は去年の青葉の匂ひかな　防川。

【年浪草】淡海志に云ふ。正月詞に祝て勢田(五)には大服茶を點て吹たり廻りたりと云て呑、矢橋(六)には是に異なり早に粥を食て今日は能きかい日和なりと云と、云々。　是れ互に旅人の多を悦ぶ也。○今式に云、大ぶくといふ事、古格ありといへども いむべし。服といふ文字なれば作になりてよろしからず、近く松崎蘭如といふ俳人有り。大ぶくと作るとも何ぞ禍福其詞によらんやとて「大服や三口にちやうど壽福祿」とせしに、その年類孫の愁ありて服(七)を受ること三度と、云々。○雜談抄に云、六十二代村上帝六波羅密寺の觀音を信敬し玉ふ、或時御腦の事あり、醫藥驗を失ふ、當寺の本尊靈夢の告ありて、供する所の奠茶を服し玉ひて御腦平愈し玉へり、然れば主上の服御するを以て王服と稱し、毎歲元旦に當寺の供茶を召て服し玉ふ由、緣起に出づ、云々。　又足利家の時茶道盛んの故に始ると、云々。

註（一）おほぶく（大服）元日に茶湯に梅干を入れて飲みて祝ふこと、常に大福と書して祝す。（二）點茶（てんちや）末茶を湯にたてること。（三）鹽梅（えんばい）うめぼしを云ふ。（四）紀事の原文には次に左の記載あり「梅を用ふる事は、高年の後面皮皺をけず、鹽梅の皺面に倣はんと欲するなり、椒は之を服すれば人をして身輕く能く走らしむ。云々」（五）（六）勢田、矢橋（矢走）共に近江琵琶湖畔に在る地名なり。（七）忌服。

季題解說　大服は點茶の名にして大福とも書く。元日、若水にて茶を點じ、これに梅干・山椒・結び昆布などを入れたる茶碗につぎ、一家擧りてこれを飲み、又賀客にもすゝむ。即ち梅干を用ふるは老人の顏の皺に擬してその壽にあやからんことを欲するにて、山椒の實を用るは、之を服すれば人をして身輕く走らしむる故なりといふ。**參照**　六波羅王服茶（ハロラワウブクチヤ）　結昆布（ムスビコンブ）

例句

大服

大ふくの茶のあつさにや梅干（ウメボウン）　愚道（犬子集）

大服やけさはきのふを初昔　旦藁（三つの顏）

大福は去年の青葉の匂かな　防川（類題發句集）

大服や一歲越しの泊り釜　魚赤（新類題發句集）

大服

大服や圍爐裡に席を作りつゝ　蘆口（新類題發句集）
大ぶくや淡路も見さい茶臼山　鬼貫（俳諧七車）
大ぶくや泡と見し世の人のうへ　成美（成美家集）
大福や家に傳はる霰釜　子規（子規全集）
大服や四方山人の歌は何　鳴雪（鳴雪俳句集）
大ぶくやほから／＼と六の題　青々（妻木）
大服やお末も祝ひ侍んべりて　月尚（ホトトギス）
大福の床に五葉の松ふぐり　默禪（同）
大服を祝ひあますや膳の濡れ　泰洋（最新二萬句）
大福や中年漬の梅干に　菜甸（同人）
大福や老のかんばせつやゝかに　楓子（昭和一萬句）
大ぶくに高麗燒の香りかな　さとる（ゆく春第一句集）
大服やいとも見目よき女の童　同樂（稲の香）
大服や昔ながらの接ぎ茶碗　嵐翠（閑古鳥）
大服や樂十代の印の系　揮月（懸葵）
大福や松の雪得て釜に煮る　素石（同）
大服やほゝゑむ父が古袴　露石（同）
大服や歌のよしみの小大名　へき（懸葵）
大福や山河朧の茶碗の繪　米水庵（同）

福茶

大黒の耳だぶ／＼と福茶哉　素雪（明和二年歳旦帳）
うすれたる大軸かけて福茶哉　害笛（現代俳句大觀）
梅干の皺もめでたき福茶哉　霞村（年刊俳句集）
年若のあるじをかこむ福茶哉　月笠（同）
年よりの熱き福茶をまゐりけり　青丘（ホトトギス）

大福茶

にじ注いで梅のにじみや大福茶　宋斤（年刊俳句集）
大福茶禮を懸き殘しけり　素明（俳句大觀）
まけぎはの寒さにくみぬ王服茶　麥秋（閑古鳥）

正月茶（しやうぐわつちや）

季題解説　一月一日より十五日迄の間に、近江國神崎郡八幡村地方にては、村内の主なる親類を請じ、互に正月の振舞をなし、又は早朝より集りて、甘酒等を振舞ひ、四方八方の話に興じつゝ時の移るを知らず、夜遲く歸宅する風習あり、これを「正月茶」といふ、正月の節振舞の遺風なるべし。

參照　節振舞（セチブルマヒ）

例句

正月茶

親類のやうな隣りや正月茶　雨青（懸葵）
正月茶子供ばかりの一座敷　泊舟（同）

桃仁湯（たうじんたう）

季題解説　元日、去年實りし桃の實の核を湯に入れて呑む。是を桃仁湯といひ、よく邪氣を祓ふといふ。 參照 桃湯

梅花酒（ばいくわしゅ）

季題解説　元日、崔寔の月令に梅花酒を服すれば老を忘るとあり。 參照 屠蘇

初市（はついち）　初相場（はつさうば）　初立會（はつたちあひ）　市初（いちはじめ）　初市場（はついちば）

季題解説　新年、魚市・野菜市など初めて開くを初市といふ。現今はその日取り一定せざれども昔は多く二日に行はれたり。又初相場は新年の初市場に於ける諸商品の初取引の値段を云ふ。株式・期米・生絲・綿絲・砂糖等の精算市場にては、四日に大發會をなし、初立會と呼びて取引を開始し、この時初相場をもつくるとなり。

▽初市　　槇　きん一

以前は大阪から西の取引所では大概賑かな初市があつたさうですが、今では僅かに堂島だけに殘つてゐるやうです。以前は何日に立つたものか知りませんが今では正月の四日です。午前一時二時頃から各店のものは、店へ集まります。そして門口には弓張を二十も三十もいつぱいにつけます。そして蠣雑炊の釜をかこんで冷えた體をあたゝめます。景氣のいゝ人々は前夜から飲みつゞけた勢で出てきます。四時頃になると、この店々の提灯の灯の中を角力、役者、はなし家その他いろ／＼の藝人が年賀に來ます。その内お客が繰込んで來ます。堂島濱通りは、これらの往來で賑かになります。店へ來たお客は大概二階へ上げて酒を出してもてなします。五時になると店々の小僧が「寄りまアす」とどなつてお客に知らせます。二階のお客は酒を飲みながら、みんな御祝儀の商ひに多少の玉を出すことになつてゐます。年賀に來た藝人はそれ／＼ひゐき先の店へ這入つてこの酒の座をあつせんして引て後お客に連れられて出かけてゆくのです。その「寄りまアす」の聲々が堂島の濱通りにひゞいてゐるうちに寄附の柝が這入ります。この日は六節位で大引の柝を入れます。この時各店では、「引けまアす」と聲々に呼びます。夜はしづかに明けてゆきます。（大正九年一月一日發行、俳諧雑誌） 參照 宗教―市神祭

例[illegible]句

初市

初市や梅の花貝千代見貝　　等躬（伊達衣）

初市や雪に漕來る若菜船　　嵐蘭（猿蓑）

初市の跡はそのまゝ霞かな　　成美（杉柱）

初市

初市の篝に鯛の光り哉　素石（明治一萬句）
初市に一駄の米の荷主哉　芋村（最新二萬句）
初市や霧立ちこめし天滿橋　歌舟（現代俳句大觀）
初市に河豚交り居し戸板哉　鼎二（大正俳句選）
初市の空ぬく〳〵とある日哉　眞也（年刊俳句集）
初市や路次に出でゐる陰陽師　千壺（昭和模範句集）
初市や揃ひの皿を求め得し　和賀女（大正新俳句）
初市のはじまる貝の聞えけり　甫水（ホトトギス）
初市の祝儀相場や牡蠣一荷　曲萱（同人俳句集）
初市や賣り崩しゆく鰤の山　風骨（同）
初市や雪にころがす大鮪　圭州（現代俳句大觀）
初市やあわびも入れし海鼠桶　みつ穂（昭和一萬句）
初市や酒氣帯ぶ聲が買ひ煽る　葵一路（同）
初市の蠣雜炊や釜のまゝ　きん一（俳諧雜誌）
初市の袴つけたる場立かな　同（同）

初相場

御祝儀の賣買あるや初相場　同（同）
初相場大阪高を傳へけり　庭後（江戸庵句集）
干の買ひ筆頭や初相場　十二星（露氷集）
初相場すみたる門を掃きにけり　豐吉（ホトトギス）
堂島に名を馳す仕手や初相場　飛雨（同人俳句集）
崩れ足つきし綿絲や初相場　春虎（同）
箱根からすぐに市場へ初相場　蘇子（萬古鳥）
立會に先づ手をしめぬ初相場　櫻月（昭和一萬句）
そゝくさと經ちし三日や初相場　一空（現代俳句大觀）
初相場寄付までのするめ酒　木朱（年刊俳句集）
御祝儀の薄商や初相場　啼魚（同）
大いなる算盤玉や初相場　俊晃（鶏祭）
相撲場で聞く西高や初相場　露舐（同人）
飛將軍第一聲や初相場　羊我（懸葵）

市初

市初は今朝佐保姫の錦哉　松木（大三物）
雪に置く柿や盥や市初　かな女（現代俳句大觀）

初市場

糶りあてし鯛かたねけり初市場　鶯池（鶯池句集）
初市場霜のかゝりし若菜哉　後月（最新二萬句）

初荷（はつに）

初荷馬（はつにうま）　飾馬（かざりうま）　初荷車（はつにぐるま）　初荷橇（はつにぞり）　初荷船（はつにぶね）

季題解説　一月二日、或は三日四日、問屋又は諸商店より商ひ初に馬、車、現今は自動車などにも商品を高く積み上げ、美しく飾り、囃歌をうたひつ

つ、市中を練り歩きて賣先に送り届けるを初荷と云ふ。

例句

初荷

曉の提灯暗き初荷かな　鳴雪（鳴雪俳句集）
呼びつれて霜の大路の初荷哉　同（同）
闇深く初荷の聲の湧き起る　紫影（かきね草）
途に逢ふて相譲らざる初荷哉　五空（五空句集）
藥湯に四五俵の炭の初荷かな　鬼城（鬼城句集）
宰領の聲に出初めし初荷哉　潮風（ホトトギス）
天滿橋を初荷通れる響かな　紅醉（同）
嚴かに太縄結へる初荷哉　波空（明治一萬句）
振舞や初荷の門の杓子酒　棟穂（同）
七車八船とはやす初荷哉　鶯池（鶯池句集）
日本橋初荷の旗の纚る　繞石（落椿）
藏の戸を皆開いたる初荷哉　松濱（昭和模範句集）
抑つけの酒の初荷の來りけり　米太（同）
初荷行く昔ながらに富士の影　虚明（現代俳句大觀）
幕間や初荷通るが聞えけり　虚吼（虚吼句集）
廣重の繪の日本橋初荷哉　十二星（鐘次集）
判取の雪にぬれ來し初荷哉　聽泉（閑古鳥）
わが町に稀の雪降る初荷かな　瓜牛（大正俳句選）
長崎の絹數々を初荷かな　江秋（年刊俳句集）
滯陣や騾馬に初荷の届きけり　八重櫻（最新二萬句）
初荷揚汀に馬をならべけり　蝶衣（蝶衣句稿）
腹掛に重き初荷の祝儀かな　藤花（年鑑俳句集）
伊丹から酒の初荷や梅の花　蘆江（懸葵）

初荷馬

初荷馬飾られ勇む足搔かな　紫影（かきね草）
おとなしく飾らせてゐぬ初荷馬　鬼城（鬼城句集）
諸鈴を瓔珞づりに初荷馬　野風呂（ホトトギス）
初荷馬鈴勇ましくつゞきけり　虚心（懸葵）
初荷馬並べ飾れり榧の下　三幹竹（同）

飾馬

飾馬汗によごれて通りけり　澄水（ホトトギス）
飾馬どれも〳〵我が結ひし鞍よ　閑夢（同）
瘠馬の骨をかくして飾りけり　破曉聲（同）
斿つけし飾の馬をよけ通る　柏葉子（同）
飾馬見劣る馬子も機嫌かな　香步（同）

初荷車

初荷車牛首ふつて引いてゐる　溫亭（溫亭句集）
壽鬼前を拂うて初荷車哉　羽山（日本俳句鈔）
初荷車蜜柑とらせて村過ぐる　萬頃（懸葵）

初荷車
木やり節初荷の車續きけり　好　翠（懸　葵）
竹切つて軋轢は初荷の牛車　句　佛（我　は　我）

初荷橇
初荷橇けたゝましくも續きけり　畫　虹（昭和模範句集）
應々と答へつゞくや初荷橇　中越郎（昭和一萬句）
馬橇に初荷囃して通りけり　泉　々（年鑑俳句集）
蹄うつて初荷の橇のよくすべる　日　塔（大正新俳句）

初荷舟
船飾る港の初荷賑のあたり　華　園（續春夏秋冬）
初荷船脇艪を立てゝのぼりけり　梨　葉（梨葉句集）
初荷舟橋の賑ひ過ぐるかな　圭不英（懸葵第一句集）
初荷船朝の海にならびけり　牧　童（懸　葵）
海の上うら〳〵日さす初荷舟　三幹竹（同　）

初商（はつあきなひ）　商始（あきなひはじめ）　商初（あきなひぞめ）　初賣（はつうり）　賣初（うりぞめ）　買初（かひぞめ）　初買（はつかひ）

古書校註

【栞草】初商・初賣・賣初・買初　注釋に及ばず。(一)店卸　商家にて去年中金銀の出入算用又は賣買の利不利の高等を改めみるを店卸といふ。○帳閉・帳書　紀事正月四日市中諸商人も亦其事を始む、凡そ年中の物價を記すところの簿册を裁補す、これを帳綴として、おの〳〵これを祝す。

【雜談抄】帳商に大福の字を題す其の根源、洛陽(一)の上菩提藥師堂より始れり、緣起に云、本尊は推古天皇六庚午聖德太子彫刻し給ひ、大和國廣瀨郡宮田郷に伽藍を建て、藥師を以て本尊とし、造營事終て、大工鍛冶諸商人に金銀を給ふ。各々富貴の身となる、奈良・北京・難波堺の輩、此緣にあやからんと此堂に來集りて帳の上書を大福帳と題する事、大福寺よりの義によれりと、云々。

【新式】帳閉　十日、十一日。

註(一)洛陽　支那古代の帝京の名、我邦にては京都を云ふ

季題解説

一月二日、三日、又は四日に商家が商ひ初めをなし初荷を出すこと。現今都市の百貨店などは、多く四日に初賣出しを行ふ。

例句

賣初
賣初や京に呉服もかざり棚　懿　昌（大　三　物）
賣初や替らず德を酉の年　三　狐（安永六年歳旦帳）
賣初や多分に切つて尺の物　碧梧桐（續春夏秋冬）
賣初や町内一の古暖簾　虛　子（ホトトギス）
賣初や空明け居るを店の灯の　繞　石（落　椿）
賣初や富山商人旅揃へ　雲桂樓（日本俳句鈔）
賣初や初荷や市の雪はるゝ　磨　劍（最新二萬句）
賣初の店に着飾る女かな　鶴　女（昭和一萬句）
賣初や惜しみながらに古短册　南　崖（春泥研究會句抄）

初賣

初賣や道頓堀は寄せ太鼓　耕洲（最新二萬句）
初賣や昔ながらに河岸の意氣　三允（同）
初賣や轎々と皆働ける　閒寺爐（大正新俳句）
初賣や暗きより來る隣の子　青塔（同）
初賣の人ねぎらひて厨忙し　ひさ子（同）
初賣やつゞいて來る小買物　温亭（温亭句集）
初賣に半紙買ふべき小錢哉　同（同）
人中に初柴賣や小百姓　躑躅（ホトトギス）
初賣に古りしながらののれんかな　鯨洋（同）
初賣を終えて書湯に浸りけり　好翠（閑古鳥）
初賣や連立つて來しメノコ達　水浦（現代俳句大觀）
初賣や湯こたぎらせて茶の老舗　樹雲（昭和模範句集）
初賣の市獅子舞の囃子哉　碧童（明治一萬句）
初賣や大佛前の饅頭屋　鯉魚（同）
初賣やひねもす動く吊り絲　草門（昭和一萬句）
初賣の青毛驢馬にひかせけり　倚乙（同）
初賣の帳場に一日坐りけり　破籠子（同）
初賣や背戸に勢ひの魚賣　骨舟（現代俳句大觀）
初賣や梅置く店の青疊　茶泊（年刊俳句集）
初賣の幟をあぐる雪明り　積翠（同）
初賣の店に出揃ふ夫妻かな　頼子（同）

買初

買初に天津橋をわたりけり　青々（妻木）
買初に寒紅の口切りにけり　橡面坊（深山柴）
買初や殘の錢に何買はん　十二星（鳥氷集）
買初に吹かれ出でゆく妻子哉　楊童（ホトトギス）
買初や髮のものなどいさゝかに　さわ女（同）
買初の妙振出しや一袋　祿郎（同）
大奥の御用出でけり御買初　碧童（明治一萬句）
買初切れの七種八種かな　羽山（同）
買初や使ひなれにし筆二本　未央（同）
女房や買初の絹五六尺　樂南（同）
三味の糸に掛ばかり買ひ初めぬ　水青（最新二萬句）
買初や紫皮の莨入れ　足佛（同人俳句集）
買初や通りすがりのみすや針　秋峡（現代俳句大觀）
買初の魁けて大戸たゝきけり　蝶衣（昭和一萬句）
季寄せ買ふ店の初音やまうけもの　小酒（年刊俳句集）
買初に越後へ送る蜜柑かな　天哉（同）
天滿一の紅屋と聞いて買初す　貞子（大正新俳句）

買初　初買や日出度がられし産の物　勇生（年鑑俳句集）
　　買初の清心丹や二日酔　九日庵（騒　葵）
初買　初買や富る事をしつて若夷　宗好（雑　巾）
　　兩國の初買やこれ福壽草　文車（明和二年歳旦帳）
　　初買や博多のものの帯人形　白水郎（續白水郎句集）

淀屋橋祝儀商（よどやばししうぎあきなひ）

〔季題解説〕正月四日・五日、大阪堂島米市場にて初商するを淀屋橋祝儀商といふ。〔参照〕初相場、バッサ

帳綴（ちやうとぢ）　御帳綴（おちやうとぢ）　帳祝（ちやういはひ）　帳書（ちやうがき）　帳始（ちやうはじめ）　新通帳（しんかよひちやう）　新通ひ（しんかよひ）　新帳（しんちやう）

〔季題解説〕一月四日、諸商人の家に其年用ゐる帳簿を綴り祝すること。昔はこの日を帳祝と稱し、小宴を張りたることとあり。帳書は新たに綴ぢたる帳簿の上書きをすること。帳始とは帳面のつけ始めを云ひ、新通ひとは新しき通帳にて新年よりあらたに使用することを云ふ。

〔例句〕
帳綴　恵美須紙かけ取り帳の三枚目　其角（五元集拾遺）
　　帳綴や金座銀座の物がたく　四明（四明句集）
　　　文晃・開舗
　　麟鳳来宿帳も綴りけむ　露月（露月句集）
　　燈下見たり内助の帳の二タ綴り　六花（寒　畑）
　　千鳥羽ばたく倉めでたかり帳綴ぢぬ　天郎（東　國）
　　落丁を改めて見るや御帳綴　橡面坊（深山柴）
　　お帳綴千束の苧縄選びけり　木母（柿　味　噌）
　　掛落し地獄帳など綴末に　星陵（日本俳句鈔）
　　帳綴や花山帳の女文字　十二星（鏗　氷　集）
　　商ひの繁昌祝へ御帳綴　天籟（續春夏秋冬）
　　伊賀紙の紙の白さよ御帳綴　觀魚（同）
　　千石の高記す帳綴ぢにけり　泊雲（同）
　　入船の出船の御帳綴ぢにけり　蘇坤（同）
　　萬兩の掛もめでたし御帳綴　竹の門（同）
　　綴ぢ了へし大福帳に切火哉　碧童（明治一萬句）
　　帳綴や伊勢の出店の祝酒　佐革人（同）
　　帳綴や酒の通ひの二帖綴　琅々（同）
　　帳綴や幾代古き帳簞笥　松洋楼（同）
　　御帳綴小口の白きめでたけれ　泰山（同）
　　帳綴や折日を下の五百枚　松緑（現代俳句大觀）

帳祝

帳綴ぢて一つ一つに切火かな　黒洲（昭和一萬句）
帳尻の餘白抜きけり帳つゞり　土柄（大正俳句選）
帳とぢや錐目滿ちたる店机　蝶衣（蝶衣句稿）
帳綴や無筆ながらも馬の主　馬鼓洞（青嵐）
帳綴や別家分家の顔も來て　香夢（大正新俳句）
帳綴の灯に古槌の光りけり　冬葉（曙葵）
帆柱が軒に立つ屋の御帳綴　爲化（同）
帳綴や年經て黒き樫の槌　山外（同）
はねあがる腕の太緒や帳祝　千桂（濱紅調集）
歌反故をつゞりし帳も祝ひけり　同（同）
帳祝帳に載せたる馬蹄銀　平陽（昭和模範句集）
めい／＼に贈そなふるや帳祝　かな女（大正新俳句）
番頭に能書ありけり帳祝　五空（五空句集）
孫共の作文帳も祝ひけり　露月（露月句集）

帳書

帳書の手に餘りけり小判墨　四明（四明句集）
遲く出て帳書きするや若主人　子角（現代俳句大觀）

帳初

帳初や魚の市場の眼千兩　東窓（最新二萬句）
帳初に算盤寄く丁稚哉　寶青（同）
門跡へ金千匹や帳始　三猿子（黛祭）

初通帳

帳初や爐火に上反る厚表紙　曉雲（昭和一萬句）
書き上げし表紙に百や新通　黄檣（同人俳句集）
新通かけて古りたる柱かな　無外（昭和模範句集）
新通持ち返さるゝ印紙もれ　黄檣（同人）
新通配り疲れぬぼて二杯　同（同）
初通帳餅綱添へて配りけり　麺車（同）
新帳

新帳やよき墨薫る奥帳場　松宇（松宇家集）

國分寺の初市（こくぶんじのはついち）

【季題解説】一月八日。信濃小縣郡神科村の國分寺にては、一月八日を藥師如來の縁日とし、張子の日無達磨、啊飴、養蠶用具等を賣り、殊に此市の特色としては、柳の木を以て六角の塔形に刻み、大福長者蘇民將來子孫人也と二字づゝ六行に書きたるを賣る。これを求め來りて幼兒の衣につけおけば、厄を拂ふといふ風習あり。

藏開（くらひらき）

御藏開（おくらびらき）

【古書校註】

【栞草】雑談抄　和俗年の始に藏を開きて、積蓄の金銀米錢にかぎらず、一

切の貨財を取出して用に充て寶貨の事を調ふ、尤其年始るれば、吉日を撰びて庫藏(クラ)をひらくをいふめり。

【年浪草】或說に云、正月の藏開には、內裏にて、三種の神寶を御藏より開始と、云々。

【季題解說】正月十一日、又は吉日に、藏を開きて祝ふを藏開といふ。東都の數へ歌にも「十一日は藏開きお藏を開いて祝ひませう」といへるあり。當日は神に供へたる鏡餅を割りて雜煮をつくり、又は酒肴を調へ、開きたる藏の戶前、又は藏の中に入りて祝ひ、目出度き謠曲などを謠ふこともあり。但し、その日も行事の內容も共に異ひし所ありといふ。〔參照〕棚卸(タナオロシ)

【例句】

藏開

子供にはまづ惣領や藏ひらき　葛雫（續瓊葵）
心よく鎰うけとりつ藏開　春近（大三物）
つちのとのみたゝり藏や開初　空信（同）
藏開藏悉く開きけり　繞石（落椿）
金藏は開かでゐるや藏開　月兎（明治一萬句）
大藩の金鳴る藏よ開き初　八重櫻（同）
七つ藏開く手力男命かな　翠竹（最新二萬句）
父祖三代天滿に住みて藏開　不刀（年鑑俳句集）
その日入荷の船や藏開　鶯洲（昭和一萬句）
藏開雨手に鍵を鳴らしけり　燕里（同）
額にふれし注連をくゞりぬ藏開　師竹（年刊俳句集）
うらうらとさす日なつかし藏開　稻村子（同）
藏開酒千石のかをりかな　竹嵐（愛吟集）
人も知る古りし暖簾や藏開　田士英（昭和模範句集）
藏開き七代つゞく家運かな　同樂（稻の香）
藏開米の升取めでたさよ　華園（續春夏秋冬）
浪音の燈にひゞくなり藏開　冬葉（故郷）
鍵役の老いて健なり藏開　泰郎（古鳥）
鳥あそぶ樹影ぬくとし藏開　北江（草上俳句集）
藏開稻荷を挾む二戶前　千燈（現代俳句大觀）
船つきて二日の濱や藏開き　待月（同）
唯一つの雜穀藏も開きけり　牛喆（懸葵）
藏開きするや南天雪ざらと　秋蒼（同）
家の子に酒振舞や藏開　梨月（同）
惠方より四十八藏開きけり　沈生（同）

金庫開(きんこびらき)

【季題解說】新年始め出納に金庫を開くを金庫開といふ。〔參照〕藏開(クラビラキ)

例句　金庫開

抱いて出る櫃や帳簿や金庫開き　生蕃（昭和模範句集）

松本の鹽市（まつもとのしほいち）　飴市（あめいち）

季題解説　正月十一日。昔、武田信玄の北條氏と戰ひし時、北條氏鹽を甲信二國へ輸入するを禁ぜしため、いたく困難せし折、越後の上杉謙信は北條氏の不義を憤りて、糸魚川方面より鹽を信州に送りしは正月十一日なりしとて、毎年これを記念せんがために市神を祀る。初めは鹽を鬻ぎしが、いつの頃よりか、飴その他、繭玉等をも賣ることゝなり、この月大に賑ふといふ。

例句　鹽市

鹽市や五合鹽買ふそれも春　枳南（懸葵）

店卸し（たなおろし）　棚卸し（たなおろし）

季題解説　新年商家にて昨年中の商品の仕入、販賣高、商品の現在高等を調査し計算すること、年に二回づゝ行ふ習慣あれど、單に店卸しを新年となす。〔参照〕藏開（クラビラキ）

例句　店卸し

一とせの心さだめや棚おろし　琴風（類題發句集）
有金の束もめでたし店卸　烏堂（續春夏秋冬）
三代の我世目出たし店卸　同樂（稻の香）
桁高に丁としめるや店卸　梨葉（現代俳句大觀）
店卸十の算盤みな合ふて　紅醉（同）
店卸大福帳も飾りけり　壽美平（昭和一萬句）
店卸寝貸死貸中々に　かせを（同）
山國の繭の問屋や店おろし　鹿村（最新二萬句）
唐人の噂長し店卸　几湫（同）
神棚の鯛もめでたし店卸　牛詰（同）
久三が長き返事や店おろし　紫影（同）
店卸錙銖の違算もなかりけり　田士英（同）
商標の鶴も目出度し店卸　蟻洲（懸葵）
算盤の上のもうけや店卸　梁村（同）
桝で量る小判の山や店卸　滴翠（同）

扇子賣（せんすうり）

季題解説　正月初めに、江戸時代、市中に扇子を賣り歩きたるものあり。

一代男に、「元旦の處、扇は／＼おゑびす／＼と、賣聲に春のこゝちして云々」とあるを以て知るべし。〔參照〕初扇（ハツアフギ）

〔例句〕扇子賣
明なんと鐘より先に扇子賣　心峨（明和二年歲旦帳）
子に孫に末廣がりや扇子賣　巴水（同　）
元日もいつもの姿や扇子賣　蘭聚（懸葵）

若夷賣（わかえびすうり）

〔季題解説〕正月三ヶ日の間、江戸時代、烏帽子を着たる若夷賣歩きたりといふ、胸算用に「南都十二月晦日云々、夜も明がたの元日に、たはらむかへ／＼と賣けるは板にをしたる大こくどのなり、二日の明ぼのに、惠比須むかへとうりける、三日のあけがたにびしやもんむかへと賣ける、毎朝三日が間、福の神を賣るぞかし」とあり。又、椀久物語に「えぼし着て若夷賣曆うり、とあるは二品を賣しにや、此事もいつより有しかさだかならず」とあり。

〔例句〕若夷賣
諸聲や今朝鶯と夷賣　愼笑（大三物書入）

初音賣（はつねうり）

はつねぶえ

〔季題解説〕正月「鶯笛」を賣り歩くを初音賣といふ。犬子集に「けふははやうぐひす笛も子の日哉」と云ふ句あり、子供の吹き遊ぶ笛を鶯笛といふ。

〔例句〕初音笛
曉け口の雪明りさす初音笛　亞浪（現代俳句大觀）
初音笛の紅やうつりて妻の口　竹葉（懸葵）

菜候（なそう）

〔季題解説〕新年の若菜賣りを菜候といふ。菜參り候の略語なり。

〔例句〕菜候
上京の橋渡りくる菜候かな　冬葉（懸葵）
畑の姥の着替してくる菜候かな　雨青（同　）

橇乘始（そりのりはじめ）

〔季題解説〕新年始めて雪中往返に橇に乘るを橇乘始といふ。

〔例句〕橇乘始
乘初の馬橇に敷きぬ熊の皮　不倦堂（現代俳句大觀）
乘初の橇國境にかゝりけり　冬葉（懸葵）

年禮に出る大橋の乘りはじめ　雨青（同）

船乘初（ふなのりぞめ）　舟出始（ふなではじめ）　舟初（ふなはじめ）　漕初（こぎぞめ）

古書校註

【栞草】攝州大阪の船乘始には、船に松竹注連を飾り船靈へ鏡餅神酒を供し水主（一）をそろへ凡十段（二）ばかり乘出して漕戻せる也。其外所々にあり。

【年浪草】雜談抄に云ふ「舟を用ふる者、歳始に乘初とて、一歳の祝儀を爲す、暦にも之を記すと、云々。攝州大阪の初乘初には、舟に松竹注連の飾りを立て、船靈神（三）へ鏡餅神酒等を供し、水主を揃へ、凡そ一たん許乘出て漕戻ると也。其日船持の家々、酒肴を調へ、合家嘉儀を催し、年中廻船（四）の海上風破の難なきことを神に祈り、自らも祝ふと也」

註　（一）かこ　水夫　船をあやつり遣る者、舟子。（二）十段　一段は三百歩なり。（三）船靈（ふなだま）船の神、住吉明神の和魂（にぎみたま）を祀る。（四）廻船　貨物の運送に船を廻らすこと。

季題解説　新年に舟を用ふる渡世のもの、船の乘初とて祝儀をなすこと、普通には二日を例とし、その所によりて儀式の次第等同じからず。和漢船用集卷二に「本邦孟春の月の二日、船のりぞめをするなり。いえ〳〵吉日を撰で吉例の日あり。二日は舟玉祭にて、船大工釿始のことぶきをなす。是天神の御代に初りし遺風なるべし、多く此日を用て船乘初とす」とあり。

參照　角倉の船乘初（ハノ八）

例句

船乘初

舟々の小松に雪の殘りけり　且藁（春の日）
乘初や惠方參りの渡し舟　子規（子規全集）
乘初やほの〳〵鞆の浦社　松濤樓（俳星）
飾舟乘初すみし漁村哉　蓍森（新春夏秋冬）
おもかぢのとり梶の歌や乘始　蜂衣（蜂衣句稿）
乘初や氷の上の纜　六花（寒烟）
乘初や霜の纜解き放ち　椽面坊（采山柴）
乘初や一粒選りの舟子共　碧童（續春夏秋冬）
此川の運上取や乘初め　波空（同）
櫂二本左右にたてたり乘初　小鮎（最新二萬句）
乘初の東風快よき追手哉　伯洲（懸葵）

舟出初

上下の諏訪通ふ舟の出初哉　奇遇（明治一萬句）
法師乘る矢走の舟の出初哉　同（同）
船宿のひいきの旗や出初舟　八重櫻（同）
舷をたゝく穗波や出初舟　蓼江（懸葵）
酒積で金比羅舟の出初哉　雪山（同）

船始め　東す舳に富士や舟初め　著森（新春夏秋冬）
外安房のおらは漁師で舟初め　鬼洗（年刊俳句集）
漁城凪ぐ七島の船初めかな　紅綠天（鹿來紅）
漕初　漕初や船靈前に勢揃へ　あをほ（ホトトギス）

角倉船乗始

季題解説　正月二日、古、京都の高瀬川にて角倉氏の船乗始の式あり。角倉家の前の入江に船二艘を飾り、一艘は當主の船、一艘は船歌船にて、寅の刻、當主及び老臣、監舟の士乗船して入江を七度漕ぎ廻る。當主の船は幕を張り、高張毛槍を立て、一同裃姿、他の船は装飾も簡單に皆羽織袴にて乗船す。この時船中にて祝儀の宴あり。謠曲及び船歌を謠ふ。しばらくして船の表に備へたる饅頭を船中へ撒き、又路上へも撒く。この饅頭を懷中すれば難船の患なしとて、海上往返の商家は爭つてこれを拾ひたりといふ。〔三圖〕船乗始

駕乗初

初駕籠

季題解説　江戸時代新年はじめて駕に乗るを、駕乗始といふ。

例句
駕乗初　垂れあげて駕籠乗りぞめの女かな　雨青（懸葵）
住の江を駕籠乗初のけしきかな　玉鉾（同）
初駕籠　初駕籠に横川の法師見えにけり　冬葉（同）

初電話

季題解説　新年初めて通話するを初電話といふ。

例句
初電話　初電話うけに立ちたる主人かな　菊坡（昭和一萬句）
若者の聲の醉ひをり初電話　雨垂石（塔）
衣ずれの音も聞えて初電話　一珍（懸葵）

初飛行（はつひかう）

季題解説 新年始めて大空を飛行機の飛翔するを初飛行といふ。

例句 初飛行

初飛行見事に一つ宙返り　菫糸（ホトトギス）

初電車（はつでんしや）

季題解説 新年初めて乗る電車を初電車といふ。

例句 初電車

浪音の由比ヶ濱より初電車　虚子（虚子句集）

初電車燈の鹽釜に著きにけり　犀州（同人）

初電車二見ヶ浦へ走るなり　白童（同）

初電車すでに待つなる二三人　青嵐（塔）

初車（はつくるま）

季題解説 新年始めて引く車を初車といふ。

例句 初車

日よ月よ千代の轍の初くるま　鬼貫（俳諧七車）

初自動車（はつじどうしや）

季題解説 新年始めて乗る自動車を初自動車といふ。

例句 初自動車

長官の初自動車や通りけり　酔骨（昭和一萬句）

初渡舟（はつわたし）

季題解説 新年始めて渡船場の舟に乗るを初渡舟といふ。

例句 初渡舟

初渡舟祝儀の餅をもらひけり　杉亭（同人）

初渡舟水神様に神酒流し　同（同）

初渡舟棧橋白き大霜よ　耕石（高潮俳句鈔）

初飛脚（はつひきやく）

季題解説 正月飛脚の往来し初むることを初飛脚といふ。

例句 初飛脚

東海道松の並木や初飛脚　北谷生（懸葵）

たちいづる京三條や初飛脚　雨青（同）

匙始（さじはじめ） 匕始

【季題解説】 新年醫家にて始めて藥を合せ盛るを匙始めといふ。

【例句】 匙始

茯苓や世に千年きく匕始　如春（雜巾）
葛根を盛る手捌きも匙始　蘭栗（懸葵）

蒸初（むしぞめ） 初蒸（はつむし）

【季題解説】 菓子司にて菓子・饅頭等を蒸し初めるを蒸初めといふ。古は正月二日を例となせり。

【例句】 蒸初 初蒸

仕事着も皆白々と蒸し初　天穿（懸葵）
初蒸しの饅頭美はし神の棚　同（同）
初蒸しの仕事終へたり禮廻り　同（同）

縫初（ぬひぞめ） 初針（はつはり）

【季題解説】 新年はじめて婦女子の裁縫をはじめるを縫初といひ、また初針とも云ふ。

【例句】 縫初

縫初や柳も起て片相手　仙草（明治二年歳旦帳）
うみつむぎぬひ初や已にきそ始　久良（大三物）
縫初の一針が三針四針かな　烏不關（靑嵐）
白絹に針の光りや縫初め　梨葉（梨葉句集）
縫始今暖めて來し手かな　汀女（虚子選雑詠選集）
五色針糸に尾長ら縫ひ初る　烏堂（新春夏秋冬）
縫初や堺の鉄京の針　虚子（ホトトギス）
縫始絹裂く音の快き　藤紫雲（同）
縫初や人形座右に戀衣　ひろ女（同）
縫初や奈良のみやけの箆二つ　まさ女（同）
縫初やその卷絹をときほごし　鶯池（同）
縫初の色絲ばかり縫ひにけり　白槐（閑古鳥）
縫初の裁骨もなき疊かな　菊女（草上俳句集）
縫初や障子の外に鷄が鳴く　敏子（現代俳句大觀）
縫初や子馴れぬ若き母となり　漁句郎（同）
紐二つくけて縫初しまひけり　梅枝（昭和一萬句）
縫初や小切あつめて肘ふとん　きさゑ（同）
縫初の弟子美しく並びけり　葩蜂（同）

縫初や皆ふくよかに髪容　櫻紅子（大正俳句選）
縫初の萌黄の糸を巻きにけり　芳醉（年刊俳句集）
縫初の障子によき日當りけり　秋女（同）
針箱にあふるゝ糸や縫初め　地藏尊（昭和模範句集）
縫初の待針挿すや青疊　水紫（最新二萬句）
縫初や色糸映ゆる青疊　機外（同）
縫初や庖厨の事與らず　青羽（同）
ぽつぺんの子を氣遣ひて縫初す　涼也（大正新俳句）
縫初や紅裏はゆる手に顔に　妙女（年鑑俳句集）
縫初の絹に明るき疊哉　柳子女（懸葵）

裁初（たちぞめ）

季題解説 新年初めて布帛を裁つことを裁初といふ。**參照** 縫初（ぬひぞめ）

例句 裁初

裁初や奈良の土産の角の箆　丹石（同人俳句集）
裁初や臺上におく福壽草　冬葉（懸葵）
裁初を守袋の錦かな　同（同）

初火熨斗（はつひのし）

季題解説 新年初めて裁縫の時に火熨斗を用ゐるを初火熨斗といふ。**參照** 縫初二六〇　裁初二六一

例句 初火熨斗

大ふくさ椨も皺のす初火熨斗　柯亭（昭和九年歳旦帖）
はねあがる火花めでたし初火熨斗　冬葉（懸葵）
穿ち出し袴におきぬ初ひのし　雨青（同）

初染（はつぞめ）

染始（そめはじめ）

季題解説 新年初めて糸・布等を染むるを初染といふ。

例句 初染

初染や藍の泡立ち快う　蝶衣（蝶衣句稿）
初染の甕ぬちくらき吊燈かな　同（同）
初染や盃かはす染子達　弓道人（ホトトギス）
初染の從兄弟同志の徒弟哉　同（同）

織初（おりぞめ）

機始（はたはじめ）　初機（はつはた）　機場始（はたばはじめ）　機屋始（はたやはじめ）

季題解説 二日、新年始めて機織を試むることを織初といふ。機屋、機場の

初仕事を機場始・機始・初機ともいふ。

例句

織初

織初に三筝の緯も飾りけり　蝶衣（蝶衣句稿）
織初や襷せぬ袖ひるがへし　同（同）
餅もやゝなほりそめしを織始　同（同）
織初や梭の二打老もして　櫻磈子（閻門の草）
羔絲もなき雪明り織初す　同（同）
機織れば機翁の名あり織始　同（同）
巡化記に此嫗のことや織初　六花（寒烟）
織初や龜甲綾の尺足らず　同（同）
織初や有職裂の棄にあられ　四明（四明句集）
母ありて織初しけり草の庵　小酒（續春夏秋冬）
織初や今出小唄も五斤十斤　流翠（俳星）
織初や織子は雪の中を来る　佐月（最新二萬句）
尺そこら織初の筬打納む　壌華（同）
織初や機より下ろす鏡餅　榮次郎（昭和一萬句）
織初や三千筝の筬の音　竹の門（竹の門句集）
織初や歌におさめし筬の數　冬葉（故郷）
織初や窓にたわゝの鳴門柑　歩牛（閑古鳥）
織初やはとりの中の哭はとり　炎天（懸葵）
織初や織女雜談暮れかゝる　黒洲（同）
糸卷のつきせぬためし織初む　夜濤（同）
織初や鶯来鳴く丘の家　三幹竹（同）

機始

けふはとて小姫が手にも機始　梨葉（年刊俳句集）
草の戸や白機始む十四日　蛇笏（昭和一萬句）
谿の音雪崩なりけり機始　秋櫻子（ホトトギス）
機初の杼鳴りに雪も晴れにけり　牛喆（懸葵）

機場始

西陣の機場始や齒白し　鳥堂（續春夏秋冬）

初機

緞揃三打うちて初機下りけり　蝶衣（蝶衣句稿）
不淨忌むも女心や初機に　鱶洲（懸葵）

紡初（つむぎぞめ）

季題解説

新年始めて紡車にて糸を紡ぐを紡初といふ。

例句

紡初

縷々乎たり綿々乎たり紡初　鱶洲（昭和一萬句）
紡初めて絲の長恨新なり　蝶衣（蝶衣句稿）
紡初麻笥の形も世にふりぬ　同（懸葵）

初絲（はついと）

季題解説 新年初めて絲問屋にて絹絲を賣買するを初絲といふ。

例句

初絲　初絲や問丸あけてわけえびす　喜清（雜巾）

綿打初（わたうちぞめ）

季題解説 新年始めて綿打ちするを綿打初といふ、〔季語〕冬―綿打（ワタウチ）

例句

綿打初　弦におどる打初綿や鶴の毛ほどに　蝶衣（蝶衣句稿）
燈明に綿打初のほこりかな　同（同）

挽初（ひきぞめ）

茶の挽初（ちゃのひきぞめ）

季題解説 新年初めて用ふる茶を挽くを茶の挽初とふ。〔季語〕初茶の湯（ハツチャノユ）

例句

挽初　挽初や袖も春なる茶のみどり　羊我（懸葵）
あらたまのまだまの臼や挽初す　同（同）

窯始（かまはじめ）

初窯（はつがま）

季題解説 製陶家新春初めて窯詰めをして燒くを窯始、又は初窯といふ。

例句

窯始　松籟や今日信樂の窯初め　雨青（懸葵）
樂燒の窯初めすや句坐の中　同（同）
宇治　窯詰めの初めや壷に梅を描く　同（同）
初窯　朝日燒初窯の日に遊びけり　三幹竹（同）

初彫（はつほり）

初彫刻（はつちやうこく）

季題解説 新年初めて彫刻家の鑿を使ふを初彫といふ。

例句

初彫　弟子一人ゐて初彫にいそしみぬ　夕水樓（現代俳句大觀）
初彫に切れあぢよき刀かな　雨青（懸葵）
初彫や日高き窓の凧の影　冬葉（同）

細工始（さいくはじめ）

初細工（はつざいく）

季題解説 新年始めて細工物をなすを細工始といふ。〔季語〕初彫（ハツホリ）

〔例句〕

細工始　細工始ませすまして飲むや二職人　不棲魚（ホトトギス）

吹きまろぶ細工始や鉋屑　婁羅（同）

初細工　おもしろや福壽の二字を初細工　久刀（明和二年歳旦帳）

鐵槌始（ハマはじめ）

鐵槌初（ハマぞめ）

〔季題解説〕新年始めて鐵工場・造船所等にて、鐵槌を打ち振ひ仕事するを鐵槌始といふ。

〔例句〕

鐵槌初　鐵槌初や午近き海に日照る松　芽史（ナガサキ）

鍛冶始（かぢはじめ）

鎚始（つちはじめ）

〔季題解説〕新年始めて鍛冶屋の仕事をするをいふ。〔参照〕吹革初（ハイコ）

〔例句〕

鍛冶始　向槌妻にうたして鍛冶始　光芭（ホトトギス）

鎚始　三の灯や小鍛冶が家の鎚始　棣南坊（深山柴）

吹革始（ふいごはじめ）

鞴始（ふいごはじめ）　初鞴（はつふいご）

〔季題解説〕新年始めて鍛冶職などにて吹革を用ひるを吹革始といふ。〔参照〕鍛冶始（かぢはじめ）

〔例句〕

吹革初　餅燒くや鞴始めの殘んの火　麹車（同人俳句集）

煤けたる飾り蜜柑や鞴初　九州郎（現代俳句大觀）

水桶に鞴初のほこり哉　農雨（同）

鞴初火の神へ餅供へけり　黄檣（同）

お飾を焦がせし鞴始めかな　光王（昭和一萬句）

吹きそめの鞴に匂ふ穗長哉　牛喆（青嵐）

初鞴一番鎚が澄みにけり　沙蹤（同）

鞴始焰の色を祝ひけり　十二星（同人）

初鞴　金燒くる焰が青し初鞴　南國子（同人俳句集）

初鞴師の前槌に廻りけり　同（同）

鑄初（いぞめ）

鑄物始（いものはじめ）

〔季題解説〕正月初めて鑄物師の仕事するを、鑄初めといふ。〔参照〕吹革始（ハイコ）

〔例句〕

鑄初　快き鞴の焰鑄初めかな　十一星（［illegible］氷集）

鑄初の烏帽子にかゝる埃かな　梧月（ホトトギス）

手斧始（てうなはじめ）

釿始（てうなはじめ）　鐇始（ちやうなはじめ）

季題解説 一月二日、大工を職とする者、手斧始めとて、祝儀に仕事始めをなす。昔は正月十七日江戸城外陣にて、作事の棟梁、諸職人、曉七ツ半時より手斧始の式を行ふ嘉例ありたりといふ。

例句 手斧始

手斧始鉋なき世の宮普請　櫻魂子（圓門の草）
烏帽子着て手斧初や木工の頭　橡面坊（深山柴）
城普請手斧始めに參りけり　蟻衣（續春夏秋冬）
一打の手斧始めや木工頭　琅々（同）
神酒祝ふ手斧始も事なかれ　松濤樓（新春夏秋冬）
手斧始墨壺の凍に湯をさしつ　蝶衣（蝶衣句稿）
手斧始城造營の記にも見る　磨劍（最新二萬句）
手斧初木場の浮木の雪二尺　百蛙子（同）
天つ空手斧初の谺かな　沫字（同）
　鉋始
弟を弟子としたりし鉋初　桃孫（ホトトギス）

升搗（ますつき）

季題解説 正月元日。北國地方にて鳥の聲をきゝて、其年の豐凶をトすることを升搗きと云ふ。

例句 升搗

升搗の餅をなげやる烏かな　冬葉（懸葵）
升搗やほの〴〵あくる佐渡が島　雨青（同）

一鍬松（ひとくはまつ）

季題解説 正月二日。下總國北相馬郡川原代村に一鍬松といふ樹あり、農夫始めて田を耕す時、必ず此の松の一枝を鍬頭にかざりて豐作を祝すといふ。〔參照〕鍬始くハ

例句 一鍬松

年々に一鍬松の榮えけり　雨青（懸葵）
鍬一挺松が枝飾り祝ひけり　三幹竹（同）

鍬始（くははじめ）

鋤始（すきはじめ）　打初（うちぞめ）　鍬入（すきい）れ

季題解説 正月二日、農夫等畑に出でゝ鍬をつかひ始むる祝ひを鍬始と云ふ。鋤を用ふれば、鋤始と云ひ、又打初め、鋤入れともいふ。〔參照〕鍬入イくハ

一鍬松ハヒヅ

例句

鍬始

天は晴れ地は濕ふや鍬始　子規（子規全集）
早梅の御題畏し鍬初　露月（露月句集）
鍬初今年神田を預りて　蝶衣（蝶衣句稿）
鍬初や花壇に春の霜を見る　北涯（俳人北涯）
鍬初盆梅庭へ下ろしけり　繞石（落椿）
鍬初の唄もありなん女房ども　鷲池（鷲池句集）
門畑や打ちつゝ馴れたる鍬初　八重櫻（續春夏秋冬）
寸青き麥めでたしや鍬初め　松濱（同）
鍬初や神農の後八千載　丁川（同）
埴安の神風晴れや鍬初　碑櫻（枯野）
野拓きてこゝ一の耕地鍬初　豊州（同）
日を拜む信心堅し鍬初　射石（最新二萬句）
鍬初梨の下草削りけり　霽月（同）
鍬立てゝ東阜に事の初め哉　橡面坊（同）
霜晴や門々ふるく鍬初　青々（同）
鍬初はや歸農の姿なる　小鮎（同）
鍬初鶏鶴の如行けり　六花（雲烟）
鍬始淺間ケ嶽に雲かゝる　鬼城（鬼城句集）
雪上に豆殻挿せり鍬初　月嶺（月嶺句集）
鍬初や畝に小さき鏡餅　虛吼（虛吼句集）
あらがねの土打返せ鍬初　十二星（鐘氷集）
養老田柳の下の鍬初　括狐（日本俳句鈔）
泥拭くに殘る雪かも鍬初　鷹子（同）
鍬始雉が飛び立つ一番ひ　開古城（同人俳句集）
日あたりに木瓜の蕾や鍬始　鷺江（鷺古鳥）
手にもちて吹かるゝ幣や鍬始　大穗（現代俳句大觀）
神農の世より農たり鍬始　牧童（大正俳句選）
股引の紺の香高し鍬始　とう子（筑波）
惠まれて野にある人や鍬始　添水（添水第二句集）
松の尾の御田一枚や鍬始　三幹竹（俳星）
鍬初めよれば四五人梅白し　秋蒼（懸葵第一句集）
提灯消せばなほ暗き野や鍬初　交醉（同）
ふるさとや殘る茶園に鍬始　羊我（懸葵）
鍬始遠くは出でずすましけり　天浪（同）
嶋畑も人渡り住む鍬始　塔雨（同）
大聲に鶏呼びけり鍬始　冬葉（同）

鋤始

肥きゝし畑菜綠や鍬始　黒洲（同　）
いろなして鮮けき土や鍬始　瑞星（同　）
御手に耜柔し穀　峡水（蘆分船）
すきぞめや解ぬ氷を引起し　雲木（類題發句集）
くてい牛に緋飾をして犂初　四明（四明句集）
田の中に徐福の塚や鋤初　山不鳴（ホトトギス）
鋤初や華表は見えて遠き宮　黒洲（[illegible]）
かほど菜も太り我手に鋤初めぬ　八九子（年刊俳句集）
門雪に鋤初め鍬を淸めけり　牛喆（昭和一萬句）
長生の農夫目出度し鋤初　月兎（明治俳句集）
鋤初や畑をミ鍬田をミ打ち　女羊（新春夏秋冬）

打初

打初や葛野九郎兵衞こゝにあり　虚子（虚子句集）

鍬入（くはいれ）　烏呼び（からすよび）

季題解説　正月十一日、下野地方の農家にては、その年の年男、未明に起き出でゝ身を淨め、所有の田圃に入りて小松を建て、紙片を結びつけ、其前に鍬を入れ三畝を鋤立つ。畝毎に紙を敷き、其上に餅一重及び田作洗米等を供へ、左方を早稻、中央を中稻、右方を晩稻と定め、其身は遠く退き、「烏來い〳〵」と高聲に呼び、烏來りて之を啄む時は、其左右中のいづれを先にせしやを見屆け、その先に啄みし分を以てその其年の豐凶を卜すといふ。同じく鍬入れとて、常陸國鹿島、行方郡方面にては、正月四日拂曉、戶毎にその年の吉方を卜し、畦畔又は畦上に幣を立て、白紙を敷きて餅を供へ、數步退きて大聲に「カラス〳〵」と連呼し、烏の啄み去るを待ち、若し來らざれば、更に位置を替へてこれを行ふ風習あり、又、烏呼びともいふ。〔[illegible]〕鍬始（[illegible]）

例句

鍬入

鍬入の幣に朝東風渡りけり　冬葉（懸葵）
鍬入に晴れ渡りたる筑波かな　同（同　）
鍬入や烏にのこす餅と幣　雨青（同　）

桑折（くはをり）

季題解説　正月子の日、陸前地方の農家の人々、桑畑に出でゝ、山繭のつきたる枝を折り來りて家內に飾り、その年の養蠶の豐作を祈る、これを桑折といふ

例句

桑折

野蠶の黃繭めでたき桑折かな　薫風子（蠶　祭）
朝早く父起きいでし桑折かな　峻石（同　）

蠶種數へ

季題解説 上州地方は養蠶業の盛りを祈るために、正月に「蠶種數へ」といふ一種の物貰ひ來りて、種々養蠶の緣起を述べ、米錢を乞ひ歩くといふ。

例句 蠶種數へ

掃臼も蠶種數への祝ふもの　狂々（懸葵）
蠶種かぞへ毛の國ふかく來りけり　玉鉾（同　）

年の豐凶を測る

季題解説 正月十五日。この夜、月の中天に昇りし時、一丈の竿をたてゝ月の影を測る。七尺なれば大豐年。六尺も豐年、九尺、一丈は雨多く、三尺・四尺、五尺は旱なりといふ。〔參照〕伊勢世様

例句 年の豐凶を測る

豐凶を測るや寒きおのが影　雨青（懸葵）
豐凶を月にはかるや竿の先　北谷生（同　）

なるかならぬか　果樹責め

季題解説 正月十五日。山形地方の農家にて、この朝、團子を茹でたる汁を手桶に入れて持ち出で、他の一人鉈を持ちて果樹を打ち、「なるかならぬか」と喚び、手桶を持ちたる一人、これに團子汁をかけ、「なり申す／＼」と答ふる俗習を行ふ。常陸地方にも、これと似たる果樹責めありといふ。〔參照〕木を囃す

例句 なるかならぬか

柿の木はなるともならぬとも云はざりけり　雨青（懸葵）
桃栗は三年なるかならぬかや　三幹竹（同　）

山開

季題解説 正月四日。柴刈・木樵等初めて山に入り、山初を祝ひ、餅を携へて鳥獸にまき與ふを山開きといふ。〔參照〕山入　山始

例句 山開

火打石打つも祝ひや山開　鹿村（最新二萬句）
山開醉へば固雪食みもしつ　十風（年刊俳句集）
木々の雪あびて嬉しき山開　秋蒼（懸葵）

山入

季題解説 正月六日、又は吉日を撰み、各地にて山林を持つもの、鶏鳴の頃

より山林に入り、白米・餅・魚類等を供へ、山神を祭りて祝ふことをいふ。〔參照〕山開　山始

例句

山入　山入や研ぎすましたる斧と鉈　涼舟（同人俳句集）

山始（やまはじめ）

初山（はつやま）

季題解説　柴刈・樵夫など、新年初めて山に入り、携へし餅を鳥獣に撒き與へて祝ふを山始或は初山といふ。〔參照〕山開　山入　樵始　斧始

例句

山始

福杖を小者持ちけり山始　隣佛（最新二萬句）
柴木に注連張りかへぬ山始　彪醉（同）
鹿垣に藁沓かけつ山始　水棹（閑古鳥）
山始誰かして居る谺かな　水城子（ホトトギス）
朝の間の親山影や山始　櫻坡子（同）
つゝじ柴して戻りけり山始　月村（同人俳句集）
四五人に峰の旭や山始　三千丈（壽雲抄）
山始山臣といふ樵夫かな　村雨（懸葵）
壺草に年越す雪や山始　竹秋（同）

初山

初山や竈の火附を見に上る　天籟（同人俳句集）
初山や枯木ばかりの雪の晴　竹門（昭和一萬句）
初山や高く居て樵る雪どころ　蛇笏（年刊俳句集）

樵初（きこりぞめ）

樵始

季題解説　新年始めて山林に入りて樵るを樵初といふ。〔參照〕斧初　山始

例句

樵初

一斧に雪落す樹や樵初　冬葉（故郷）
樵初や木の股に去年の忘れ斧　牧童（枯野）
矍鑠と赤股引や樵初　暮情（ホトトギス）
ちはやふる大山積や樵初　紫雲（昭和一萬句）
樵初や屋敷つゞきの雑木山　巴石（壽嵐）

斧始（をのはじめ）

山始

季題解説　新年始めて伐木のために斧を用ゐるを斧始といふ。〔參照〕樵始

例句

斧始　天地に響けとばかり斧始　矯哉（明治一萬句）

斧初

檜山雜木に斧初めけり　邊洋（最新二萬句）

幣まつる老木匠や斧始　松籟（同　上）

斧初してはれ〴〵と歸りけり　采女（年鑑俳句集）

葛城の峰つゞきなり斧始　白舟（ホトトギス）

初筏（はついかだ）

季題解説 新年初めて川を流し下す筏を初筏といふ。

例句

初筏

浪よけの幣の白さや初筏　冬葉（懸葵）

初筏桑名長者に着きにけり　雨青（同　）

嵯峨に出て霜解け初むる初筏　句佛（同　）

曳初（ひきぞめ）

季題解説 新年、製鹽業者初めて鹽田の砂曳きするを曳初といふ。〔参照〕濱拜み（ハマヲガミ）

例句

曳初

三鍬程砂を撒きけり曳始　鱗洲（懸葵）

霜踏んで勇む濱子や曳始　同（同　）

初漁（はつれふ） 漁始（れふはじめ）

季題解説 漁撈を業とする者、新年はじめて漁船を出して、漁するを初漁といふ。

例句

漁初

網主の祝ひの酒や漁始め　水鷄子（獺祭）

鯛網の島の長者や漁始め　三幹竹（懸葵）

初鳥狩（はつとがり）

季題解説 年の始めの鷹狩を初鳥狩といふ。松鶴軒記に、「年の始めに鷹をつかひはじむるをもいひ、又その年のはじめての鷹をつかふをもいふなり」とあり。〔参照〕鷹野始（ハジメ）　動物—新玉鷹（アラタマタカ）　秋—小鷹狩（コタカガリ）

例句

初鳥狩

鷹杖に富士を指しけり初鳥狩　冬葉（懸葵）

初鳥狩草うらゝけき野面かな　雨青（同　）

参考 萬葉集卷十九、天平勝寶三年八月四日、大伴家持の作「岩瀨野に秋萩しぬぎ馬並めて初鳥狩だにせずや別れむ。」これに依れば、古くは秋の鷹の使ひ初めを初鳥狩と云ったものである。

春興（しゅんきょう）

季題解説 新年俳諧をなすもの集り、其の吟詠を板行して知人間に贈答すること、これを春興の句といふ。〔参照〕歳旦開（サイタンビラキ）

例句

春興　今朝見ればほ句にてはなし春の興　沾徳（類題發句集）

三物連歌（みつものれんが）

三物俳諧（みつものはいかい）　三物（みつもの）　三物賣（みつものうり）

古書校註 【栞草】「紀事」正朔（一）連歌俳諧各々席を開く、凡京師において連歌の長、是を花の下（二）と號す、又宗匠（三）と云ふ。毎年今朝其一家中其事を玩ぶ者及び弟子等其宗匠家に集り各連歌（四）をなす、其第一句を發句といひ第二句を脇（ワキ）と稱す、第三句めを作るを榮とす、近く此三句を三ツ物と稱す。今朝之を作るに隨て剞劂氏梓に鏤めて市中に賣る近世俳諧も亦然り、高聲に連歌俳諧の三ツ物と呼びて街衢を往來す。

【いつまで暦】三物連歌、同俳諧、發句脇第三なり。

註（一）正月朔日。（二）花の下　連歌宗匠の棟梁たる者の稱する號　宗祇之を朝廷より賜はりしに始まる。宗祇の後宗長・里村紹巴・松永貞徳・北村季吟等皆花の下と號せり。（三）和歌、連歌等の先達の稱、後には俳諧、茶道等の師にもいふ。（四）連歌　古へは二人にて三十一文字の和歌を作りしを云ふ、上の句を發句と云ひ、下の句を擧句（あげく）といふ。足利時代より次第に複雜になり、五十韻百韻等の法式を生じ更に俳諧の連歌を生むに至れり。

季題解説 元日、連歌俳諧の宗匠の家にて門弟を集め、歳旦の三ツ物（發句、脇、第三の三句をさす）を作る、これを三物連歌、三物俳諧といふ、又版木師はこれを印行して「連歌、俳諧の三物」と高聲に呼ばはりつゝ市中を賣り歩きたるものなり。〔参照〕歳旦開（サイタンビラキ）　春興（シュンキョウ）

例句

三物連歌　三ツ物やあまき愚案の口ずさみ　政頼（大三物）

三ツ物よ松體竹體見えた體　辨朗（同）

三ツ物や駄荷に付出す國の花　重勝（類題發句集）

三ツ物の猫も杓子も連歌哉　羊我（懸葵）

三物賣　蓬莱に題す三ツ物いざ買はん　鯢魚（續春夏秋冬）

句は知らぬ三ツ物賣の頭巾哉　松濤樓（懸葵）

比叡颪三ツ物賣の來たりけり　羊我（同）

歳旦開（さいたんびらき）

歳旦句（さいたんく）　歳旦帳（さいたんちやう）　歳旦歌（さいたんか）

古書校註 【年浪草】正月吉辰を撰て連歌俳諧各々席を開きて此事あり。歳旦とは歳首に賀詞を發句に作りたるを云ふ。今世は冬の内に門弟の句を乞集めて梓

に鏤ばめ、是を一帖として歳旦帖と云、此一帖を門中へ送るなり。其事を始る日を歳旦開と云。○今式に云、歳旦は手際もの（一）にて作句稀也、尤禁誠の詞（二）、手爾於葉（三）、送り假名にも心を付べし、假令ば高砂（四）のさしに、つもり〱て老の鶴のと云事あり、觀世左近はつもり〱てと切て謳ひし也、云續くれば手負の鶴ときこふる故也。此類いかほども有べしと。云々。

註（一）手際もの　きはもの、ない切なもの。（二）禁誠の詞　死又は敗ると云ふが如き忌詞。（三）てにをは、文法。（四）高砂　謡曲の曲名。

【栞草】正月吉辰をえらびて、連歌俳諧、おの〱席をひらきて此こと有、歳旦とは歳首賀詞の發句を云、歳旦の句と云義也。

季題解說　正月吉日を撰び、俳諧の師、俳諧を催し門人より集めたる歳旦の句を披露することを歳旦開と云ふ。又歳旦開の句を歳旦句と云ひ、その句帳を歳旦帳と呼ぶ。また同様に、歳旦の詩歌なども披露することもあり。

【三物】三物俳諧（[illegible]）　春興（[illegible]）

例句　歳旦歌

是丹よと板におこすや歳旦歌　佐命（大三物）
四方に梅先歳旦の詩歌かな　永雪（京海集）

初句會（はつくくわい）

句會始（くくわいはじめ）　初運座（はつうんざ）　初披講（はつひかう）

季題解說　新年最初の句會の開筵を初句會、句會始と云ふ。【參照】歳旦開

例句　初句會

初句會畫家か交りて筆の陣　素石（木虫句集）
忘られし人誰々ぞ初句會　同（同）
振作を示す女流や初句會　月斗（同人）
初句會遅刻者酒に崩れゐる　宋斤（現代俳句大觀）
金屏のいよ〱暮れぬ初句會　明舟（昭和俳句集）
廚下より一句はべりぬ初句會　鷲池（蒼池句集）
初句會句箋は籠にあふれけり　美彌子（俳星）
少年に秀句ありけり初句會　沽井（青嵐）
初句會懐に慣れし豆句帖　蛇湖（蛇湖句集）
聞えくる遠き鼓や初句會　瓢風（ホトトギス）
初句會春盤が題に上りけり　二島（木虫句集）
配膳に添ふ短册や初句會　一松（現代俳句大觀）
山庵や雪明りして初句會　湖舟（昭和一萬句）
旅先に旅人迎へ、初句會　三巴女（同）
盆梅のかげに座りぬ初句會　逸美（[illegible]集）
雪の中に灯して句會始かな　菰聖窟（木虫句集）

運座初

初運座改まり居る庵主かな　久人（同　人）

蓬莱をしりへに運座始め哉　俊晃（懸　葵）

初會の顔揃ひたる運座かな　撫草（同　）

闇汁や運座始の果てゝ後　鱶洲（同　）

初披講

初披講牛歩法師を煩はす　三幹竹（同　）

夜半亭の文臺古りぬ初披講　同（同　）

吟行始（ぎんかうはじめ）

季題解説　初吟行會（はつぎんかうくわい）

新年初めて郊外に吟行するを吟行始と云ふ。〔參照〕初句會（ハツクワイ）

例句

吟行始

吟行始落柹舍の昆布茶啜りけり　鱶洲（懸　葵）

上賀茂や吟行はじめさむき朝　雨青（同　）

吟行始惠方の奈良に遊びけり　三幹竹（同　）

湯開きの有馬に吟行始め哉　同（同　）

連歌始（れんがはじめ）

季題解説（エドジヤウレンガハジメ）　初連歌（はつれんが）

新年初めて催す連歌の會を連歌始といふ。〔參照〕江戸城連歌始

例句

初連歌

座一順も有付よしや初連歌　近之（洗　濯　物）

初連歌新式ねんの祝儀哉　一雪（同　）

水莖の昼形や年の初連歌　泰徳（江戸辨慶）

本歌もや引手あまたの初連歌　水水（俳諧三部抄）

參考　嚴有院殿御實記付錄下に「先々謠曲始は正月二日具足の御祝ひ及び連歌始めは同じ二十日の事也しが二十日は前代（家光）の御忌日なれば承應年中より（中略）具足及び連歌始めは十一日にせられしなり。是より今にいたりて永制とはなりぬ」と見える。武德編年集成に「慶長十六年正月二十日、江城御鎧の賀儀あり。例の連歌百韻興行に依て、此道堪能の族伺公す。

若綠雲井に立つや庭の松　紹之

春の朝戸を明けむかふ峰　御（秀忠）

けふぞ聞く百よろこびの鳥の聲　玄仲

臺德院殿御實記に「慶長十六年正月二十日、連歌の莚三州よりの佳例なり。しかれどもその句のものに見えしはこの時を始めとす」

初懷紙（はつくわいし）

季題解説　新年初めて用ゐる懷紙をいふ。懷紙とは連歌、俳諧を書く式紙に

して、杉原又は檀紙を四つ折にして用ゐるものなり。

【例句】初懐紙
梅に來る鳥のあとせむ初懐紙　麥水（麥水發句集）
静まりて障子の咳や初懐紙　同（同）
門に立松の葉ごしや初懐紙　同（同）

初歌會（はつうたくわい）

【季題解説】新年初めての歌會開きを初歌會といふ。【参照】歌會始（ウタクワイハジメ）

【例句】初歌會
初歌會相聞の歌なかりけり　南崖（年刊俳句集）
初歌會朗詠の士の衣紋哉　同（同）

初會（はつくわい）

初寄り（はつより）

【季題解説】和歌、俳句に限らず、又碁・將棊・或は謠曲・琵琶等の趣味の會、及び無盡・町會・幹事會などの如きものをも廣く含めて、新年始めての會合を總稱して初會或は初寄りといふ。

【例句】初會
初會におくれ來し目と見あひけり　久女（大正新俳句）
初會やこゝは祇園の二軒茶屋　三幹竹（懸葵）

挿花始（さふくわはじめ）

生花始（いけはなはじめ）　生初（いけぞめ）

【季題解説】正月に初めて挿花するを挿花始といひ、また生け花始めといふ。

【例句】挿花始
嵯峨御所や挿花始に京の人　鱶淵（懸葵）
生初
生初や多き女弟子の池の坊　羊我（同）
嫁ぎ來て心もとなく生初す　同（同）

初茶湯（はつちやのゆ）

初釜（はつかま）　釜始（かまはじめ）　點茶始（てんちやはじめ）　點初（たてぞめ）　茶湯始（ちやのゆはじめ）

【季題解説】新年はじめての茶の湯を初茶の湯といふ。又はじめて懸ける釜を初釜といひ、抹茶をたてるを點茶始といふ。【参照】初茶杓（ハツチヤシャク）　初茶筌（ハツチヤセン）

【例句】初茶湯
心あての枝あり梅の初茶の湯　其車（明和二年歳旦帳）
とく〳〵の水まねかば來ませ初茶湯　素堂（俳諧五子稿）
初茶湯花壇の若菜つむ日也　巳百（曙春帳）
初茶の湯青竹青き雪の路地　耕雪（ホトトギス）

雪の前膝の寒さや初茶湯　梨葉（現代俳句大觀）
此窓の山を主や初茶の湯　呉山廬（同）
つぎ／＼にお炭覗きぬ初茶の湯　照子（同人）

初釜

初茶の湯梅寒菊を心かな　三味（懸葵）
初釜や掃き清めたる青疊　素紘（昭和模範句集）
初釜や柳條影も重ならず　烏不關（[illegible]嵐）
初釜の遲き一人は醉ふて來し　青幹（大正新俳句）
初釜や湯に火を焚く料理人　[illegible]中（同人俳句集）
初釜や利休めでにし池田炭　瓜牛（昭和一萬句）
初釜や袪つけてにじり口　羊我（懸葵）

釜始

蓋置に青竹切りつ釜始　雪後（同人俳句集）
つくばひや薄氷して釜始　梅枝（ゆく春第二句集）
青竹の茶筅届きぬ釜始　雪後（昭和一萬句）
水雞筒にわびすけ椿釜始　房女（[illegible]俳句集）

點初

點初のちりもとどかぬ臺子哉　深雪女（俳句大觀）

初茶杓（はつちやしやく）　初削り（はつけづり）　削初（けづりぞめ）

季題解説　茶家宗匠新春初めて茶杓を削るをいふ、その年の干支、或は目出度き銘を附して、初茶の湯にこれを使用し、茶後福引などにより門人社中等に贈るものをいふ。〔參〕初茶湯（[illegible]）、初茶筌（[illegible]）

例句

初茶杓　初茶杓しら／＼として竹の艶　三味（[illegible]葵）
初削り　握先きに勁く瑞氣や初削り　同（同）
削初め　刀心に細る竹心や削初め　同（同）

初茶筌（はつちやせん）

季題解説　正月玉服茶をたてるに茶筌を初めて使用するを初茶筌と稱す。京都空也寺の僧徒の業として常に茶筌を作り、大晦日と元日に市中に賣り歩きたるさまは都名所圖繪に見ゆ。〔參〕初茶湯（[illegible]）、初茶杓（[illegible]）

例句

初茶筌　初茶筌御製のかまどけさとても　一帆（雑巾）

珠光餅（しゆくわうもち）

季題解説　珠光餅は茶家に於て松の内、または初茶の湯に用ふる菓子の一種にして、鏡開きの餅を煮て柔かくし、これに味噌に砂糖を加へて煮たるを掛けて食す。もと、茶祖村田珠光の初めしよりこの名あり。鏡餅を用ひず單に小餅にてする事もあり。

例句 初釜

初釜の佳例もうれし珠光餅　柳子女（懸葵）

掛柳（かけやなぎ）　柳掛くる（やなぎかく）　結び柳（むすびやなぎ）

季題解説 茶家に於て、松の内中茶席内に綠柳を掛くるを掛柳といふ。柳はその丈け長き程をよろこび、二間三間に及ぶものを、二つ三つも結び垂るるなり。多く床の勝手付道具疊の隅柱に、天井廻縁より七八寸下りに釘を打つ、これを柳掛釘、または柳釘といひ、この釘に青竹その他の筒形花生を掛けて枝垂柳を挿すなり。時によりて床の内隅柱にも柳釘をうちて、掛柳することもあり。いづれも床の花とは關係なし。【[illegible]】初茶湯[illegible]

例句 掛柳

さわ／＼と風に音せぬ掛柳　三味（懸葵）

風爐先の繪の山水や掛柳　同（同）

柳掛くる

柳かけて不斷の釜や人の來ず　同（同）

籟初（ふきぞめ）　吹初（ふきぞめ）

古書校註

【栞草】笙笛（セウノフエ）のたぐひを吹初る也。

【年浪草】簫 笙 簧 俗云之末 篪 俗云豆保 世本に曰く、隨笙を作る、長さ四寸、十二の簧は鳳の身に象る、正月の音也、物生ずる故に之を笙と謂ふ。○禮の明堂に云、女媧氏笙を造る。云々。○篳篥、笳管、悲篥 比千利岐 徐景山が云、胡人馬を牧するに骨を截て筒と爲し、蘆を用て首に貫き、之を吹て以て群馬を驚すと。云々。一説漢張騫が作爲する所。云々。○笛音狄 横笛與古笛に筆談に云、雅笛羌笛の二種有り。○律書樂圖に云、横笛は羌より出づ、張騫首めて一曲を傳ふ、李延年新聲二十八曲を造る。○簫 高麗笛古今著聞集に云、篳篥は聖德太子高麗の沙門惠慈に傳授し玉ふ、天王寺時國名人、笙は四位の盛定古今無双也、笛は侍衣中將名人。云々。○尺八は唐土普化和尚の作なり。楊貴妃、馬嵬が原にて殺さるゝ悲みの聲を學ぶと。云々。

季題解説 新年はじめて笛・尺八・簫などを吹奏するを籟初といふ。

例句 籟初

簫内しさるふき初の宿ならん　綠衣（續春夏秋冬）

吹初の人揃ふたる一門かな　自得（ホトトギス）

籟初や一口水を下しぬる　素石（木虫句集）

籟初や家系思ふて愧づる哉　同樂（稻の香）

籟初や松子落ちたる池の面　炎天（年刊俳句集）

籟初や蓬が宿に闇なる　月兎（明治一萬句）

籟初や壁間の天女舞出でよ　西湖（同　）
籟初の人を遠きに思ひけり　純江（青　甍）
籟初や座附に名ある笛の家　碧童（最新二萬句）
籟初や神子の唇朱を點ず　北涯（俳人　北涯）

彈初（ひきぞめ）　初彈（はつびき）　琴始（ことはじめ）

古書校註

【栞草】琴三絃鼓弓の類みな彈と云、年の始に其わざを試るを云也。

【年浪草】倭俗琴瑟の類を鼓する之を彈くと謂ふなり。是も亦歳首に其の業を試む。琴 古止 琴徽 古止知 箏 象乃古止 箏柱 古止知 琴操に曰く、伏羲琴を作る、以て身を修め性を理め其の天眞に及ぼす。琴長さ三尺六寸六歩、三百六十日に象る也、廣さ六寸、六合（一）に象る、文の上を池と曰ひ、下を濱と曰ふ、前廣く後狹きは尊卑に象る、上圓く下方なるは天地に象る、五絃は五行（二）に象る、大絃は君也、寬和にして溫、小絃は臣也、淸廉にして亂れず。云々黃帝は廿五絃、伯雅は十三絃とす、本邦に傳ふること空穗物語に詳也　○和琴 夜萬止古止 倭名抄に曰く、日本琴は體箏に似て短小、六絃有り、一種鷄尾琴 止比乃乎古止 有り、相傳て云、日本武尊始て作る、小弓六張を双へて音を成す、今製も亦六絃有り、六弓を張が如し、是れ本朝樂器の始なり。○琵琶 胡琴 俟、俗に撥を用ゆ、琵琶は本と胡中より出づ、馬上にて鼓く所也、魏の文帝之を造る。云々、本朝には仁明天皇の御宇、貞敏入唐して琵琶の曲を傳へ來る。是れ其の始也、朱雀院の御宇博雅三位同息信義、信明、最も堪能と爲す。○三線 三味 は五雜俎に曰く、三絃は常に簫に合せて之を鼓す、然れば多くは淫哇の詞にして、唱優の習ふ所のみ。夫子の謂ふ、鄭聲は淫なり。○和漢三才圖會、按ずるに琉球國、好て多く之を用ゆ、然れども樂器と爲さず、婦女里の子等毎に之を鼓す。○鼓弓、まだ其の始を詳にせず、形三絃に似て、撥を用ゐず、小弓絃を以て之を鼓す。○廣博物志に曰く、夫れ樂は先王の喜を飾る所以なり、軍旅は鈇鉞の怒を飾る所以なり。故に先王の喜怒、皆其の齊ふことを得たり。喜ぶときは則ち天下之を和し、怒るときは則ち暴亂の者之を畏る。先王の道禮盛なりと謂ふべし。云々。

註（一）六合　天地四方（東西南北）。（二）五行　水火木金土の五つの元氣。また五行相生とて木生火、火生土、土生金、金生水、水生木とし、五行相剋とて木剋土、土剋水、水剋火、火剋金、金剋木とす、天地萬物人事の動靜皆此理に支配せらるゝものとして種種の法術に應用せらる。

季題解說　新年はじめて琴・三味線・胡弓・琵琶など各〻その好むものを彈き試むることを彈初といふ。

例句

彈　初
彈初や去年許されし師の片名　紫影（かきね草）

彈初

彈始めの姉のかげなる妹かな　虛子（虛子句集）
彈初や枯木の中の一ツ宿　青々（妻木）
彈初や伯牙の琴に客もなし　五空（五空句集）
彈初や官位持ちたる琵琶法師　鬼城（鬼城句集）
彈初や使ひ馴れにし津山撥　忍月（ナガサキ）
彈初や幼き聲に御萬歳　橡面坊（澤山柴）
彈初や障子の隙に隅田川　南鱗子（虛子選雜詠選集）
今宵ゆく芝居思ひつ彈初す　松濤（最新二萬句）
彈初や昔玄上牧馬とて　田士英（同）
彈初や名取の撥の鮮かに　蓮南（蓮南遺唫）
彈初や三輪の酒屋の奥座敷　碧童（明治一萬句）
彈初や降れば來る來ぬ人の數　孤軒（孤軒句集）
生田流の松竹梅や彈はじめ　圭居（年刊俳句集）
彈初の唄の御題に作來たり　青蛾（懸葵）

初琴

新妻や客のすゝめに彈始　美代女（同）
初彈やしやんとかまへて老いし母　晴坪（鹿火屋）

琴初

羽子板のものを忘るゝ琴はじめ　みさ女（寶暦九年歲旦帳）

稽古始（けいこはじめ）　初稽古（はつげいこ）

季題解說 新年始めて武術・音曲・生花等の稽古を始むるを稽古始といふ。

參照 彈初　挿花始　鏡始

例句

稽古初

一二合稽古初めの竹刀かな　麥人（現代俳句大觀）
やがて師も稽古初の面つけぬ　白江（ホトトギス）
先生に稽古初めの一手合　傘子（同）

初稽古

武者窓に雪吹き込むや初稽古　石字（年刊俳句集）
初稽古肌に冷えこむ取著かな　草眠（同人）
木刀に小さき注連や初稽古　巨栗（ホトトギス）
御あかしの燦と照合ひ初稽古　躑躅（同）
おの／＼の强き顏よし初稽古　泥中（同）
的までの地の薄雪や初稽古　季發（同）
黑帶を締めて今年や初稽古　綠夢（昭和一萬句）
さる方の傳書開きや初稽古　柳子女（懸葵）

破魔弓（はまゆみ）　濱弓（はまゆみ）　破魔矢（はまや）　濱矢（はまや）

古書校註 【山之井】はまとて輪をまろばしてかの弓矢にてこれを射てたがひに勝負

をいどむ事也。かのむかしののり弓(一)のまねびにや。

【栞草】〔世諺問答〕蚩尤(イウ)が眼の瞳を抜て、木丁(きちやう)の玉とし、かの眼のふくりん三重有し故弓射るの的に三重を畫て中の瞳を除く。(二)〔雜談抄〕或説に正月に射戯する濱弓は蚩尤が眼を射破る義なれば、破目弓(ハマユミ)なるべし。通唱の宜きにより濱弓濱矢と稱す、又魔を破るの意にて破魔弓とも書く、濱の字心なし。

【年浪草】或説に云ふ。弓は不祥を祓ふ物なれば、中夭邪氣のある時は、必ず弦を鳴して祓ふ事也、故に神道には採物の中に弓を用ひ、佛家には弓矢を定慧とし、又惡魔降伏を表す。故に吾邦正月には、王宮神社に射禮を行ひ、或は士人小兒の弄とすること、是れ年中の邪氣を祓ふ爲なり、故に破魔弓と云ふ。其の由て來る所倘(ヒサ)し、故に異域にも已に之を評せり。北史卷九十四、倭國列傳に曰く、正月至る每に、必ず射戯して酒を飲む、其餘の節は、略華(三)と同じ、文獻通考日本の部にも此事あり、是れ治世にも武を忘れざる意にやと、云々。

国(一)のり弓 常弓 別項賭弓を看よ。(二)別項毬打の條を見よ。(三)華 中華 支那をいふ。

【[illegible]】正月、破魔弓は古兒童の遊戯に繩を卷きて輪の如く作れる的をば、竹の弓にて射ることにて、その的をハマ、其矢を濱矢といふ。大和・土佐などの國々に行はれたりしが、後世には變じて、美麗に裝飾せる玩具の弓二張に矢を添へたるものとなり、これを年末男子ある家に贈り、それを受けたる家にては正月之を室内に飾りて、兒童の武運息災を祈りたるものなり。

【例句】破魔弓

はま弓や當時紅裏四天王　其角(五元集拾遺)
誰にやる破魔弓ねぎる道心者　來山(續いま宮艸)
破魔弓や握る乙子の二人張　風化(寶晋齋引付)
破魔弓や使者も奏者も布袋顏　秋航(同)
破魔弓やあたり隣の八平氏　蓬宰(新類題發句集)
破魔弓や的に立たる納豆箱　蓼太(蓼太句集)
五家村や破魔弓つけし戻り馬　鳴雪(鳴雪俳句集)
破魔弓や男の幸の三河武士　碧梧桐(明治新俳句集)
破魔弓や一つ据ゑしに春來たり　小鵠(春雲抄)
破魔弓や男子四方の志　默佛(春夏秋冬)
破魔弓や大和機女が子寶や　八重櫻(續春夏秋冬)
破魔弓や百姓ながら奈須に住む　碧童(同)
破魔弓や重藤の弓とりの家　虛子(ホトトギス)

破魔弓

破魔弓や倍にやる子はなかりけり　琅々（明治一萬句）
破魔弓やどさと落ちたる松の雪　白及（年刊俳句集）
破魔弓や的もかけたき雪の上　三幹竹（懸　葵）

破魔矢

放したる破魔矢追行廊下哉　長松（京　水）
壯年の人も破魔矢に反る哉　和泥（大　三　物）
たてかけてあたりものなき破魔矢哉　虚子（年鑑俳句集）
箙を押す鏑雁股破魔矢哉　田士英（續春夏秋冬）
あと厄もすみし今年の破魔矢哉　嘯魚（ホトトギス）
柳營の閑戲の圖繪の破魔矢哉　小鮎（最新二萬句）
鉢の木の箙に備れる破魔矢哉　濠面坊（澤　山　柴）
浪花女の背中にさしゝ破魔矢哉　冬葉（現代俳句大觀）
翠帳につらぬきとめし破魔矢哉　蛙筠（蛙　筠　句　集）
脇床の穗灯に映ゆ破魔矢哉　不水（懸　葵）

參考　破魔弓はもと的弓の義といふ。的は圓座に似て居り、圓座を一に「はま」といふ。文獻通考日本の部にも毎レ至二正月一日一必射戲とみゆ。破魔の字を宛て厭勝の意に出るとするは附會であると言ふ。男兒の初正月にこれを贈りて祝意を表する。

綱曳（つなひき）　綱引（つなひき）　引綱（ひくつな）

古書校註
【山之井】大綱を引合て勝負に付て吉凶を知るなり。
【栞草】〔紀事〕江州大津の人、三井寺（一）門前の人と各野原において左右に分列して互に大綱を爭ひ引、多方ともに太鼓をうちたがひにきそひ進む。勝方其年福をうると云、是を綱引と稱す。十三日より十四日の朝に至て去ると。云々。この戲れ所々に有。
【五雜俎】唐の時清明に（二）拔河の戲あり、其方大なる麻の組兩頭を以て、各十餘の小索を繋ぎ、數人之を執り、對し挽て強弱を以て勝負を爲す。
【いつまで暦】十四日、十五日　大綱を引合ひ勝負して吉凶を知る事也
註（一）三井寺　江州長等山の半腹に在り、一に園城寺といふ、古へ山城比叡の延暦寺と勢力を爭ふ。（二）二十四氣の一、春分に次ぐ、四月五日前後。

季題解説　正月十三日より十四日の朝に至るまで、江州大津の人及び三井寺門前の人々等、原野に出でゝ左右に立別れて大綱を引き爭ひ、勝ちたる方其年の福を得ると云ひ傳へて行ひたるもの、諸國にもこの類の戲れありしが、今は全く廢絶したり。〔季題〕宗教―牛頭天王綱引

例句

綱引

つな引に小家の母も出にけり　西吟（渡し舟）
綱引や勝も負るも同じ里　稍丸（浪花置火燵）
綱引やと地かたへつく番太郎　一禮（姿かな）

綱引や穴一のあな踏にじり　倡和（はすのみ）
綱曳や山三井寺の領さかひ　冬秀（新類題発句集）
綱曳や黄昏きそふ里わらは　蚊山（同）
綱引や鶺尾いまだ里童　蓼太（三傑集）
綱引や去年の八束穗より合せ　同（同）
綱引や雙峰の神みそなはす　露月（露月句集）
綱引や松を境に西東　十框（十框句集）
綱引の綱はえ飾る社頭哉　橡面坊（深山柴）
負組も祓ひて綱を納めけり　告水（日本俳句鈔）
彩綱の握り太なる三度引く　田士英（同）
綱太く引きも撓まぬ人數かな　碧童（續春夏秋冬）
この綱や猿田彦神引きし綱　八重櫻（同）
綱引の右になだるゝ左かな　溪月（同）

新婚祝
二人して綱引なんど試みよ　虚子（ホトトギス）
綱引の人かたまつて倒れけり　蕣兎（蕣兎句集）
綱引や鎌倉殿の内童　化羊（明治一萬句）
綱引や金剛力の二固め　瓏華（最新二萬句）
綱引や小松の中の濱社　鹽村（同）
綱引に村の鳥獲を賴みけり　北涯（俳人北涯）
綱引や朝夷一人仁王立　松宇（松宇家集）
曳き終へしお綱を神に納めけり　天浪（懸葵）
綱引や雙腕に立つ力瘤　禽化（同）

參考 綱引は、年占の一種で、勝つた方が豐作であるとなすのである。諸國に多く存してゐるが、殊に新年に多く之を催す理由が此處に存する。西國に多い。

かいつり

季題解說 正月十四日、この夜土佐の地方には「かいつり」とて家々に酒餅などを構へおけば、老幼男女の變裝をなしたる三人五人の組々、互ひに流行唄いろ〳〵の隱し藝などして興じ去る風習あり。いつの昔より始まりしか明かならず。かいつりは掛鈎りと云ふ字に當るものならん。日本歳時記に「今夜羅蔔にて臼杵判金いろ〳〵のものを作りて折敷に連ね、蓑笠着て人のもとへ持行、かの折敷を戸の內にさし入れて置くなり、主の方より取りて其折敷へ米餅など入てもとの所にかへせば、持來りし人取りて歸るを、かねてより水を汲み置きて、是にかけ笑ひ罵る事あり、鄕國にてはとびとびといふ（九州地方の詞）四國には『かいづり』といふよし聞ぬ」とあり。〔參照〕とび〳〵

【例句】 かいつり　かいつりやことに娘のある家に　旅 滴 （年刊俳句集）

針打（はりうち） 紙打（かみうち）

【季題解説】 昔、正月の遊びとして、良家の家庭に行はれしもの。判紙又は小判紙を幾帖となく積み重ね、三四寸も長く絲を付けたる木綿針の尖頭を口に咬へ、右手に絲の端を持ちて、紙の上に投げつけ、針に刺されたる紙を取りて收得とするものなり。長崎地方にては「紙打」ともいふ。【參照】 煎餅釣（せんべいつり）

【例句】 針打　針打に高くかさねし菊紙かな　雨 青 （懸葵）

煎餅釣（せんべいつり） 針煎餅（はりせんべい）

【季題解説】 針打の一種にして、薄燒の煎餅を幾枚も重ねて、絲をつけたる針を打ちつけ、これを多く釣り上げたるを勝とし打ち興ず、これを煎餅釣といふ。【參照】 針打（はりうち）

【例句】 煎餅釣　三枚目釣りそこねたる煎餅哉　枳 南 （懸葵）

意錢（ぜにうち） 攤錢（だせん）

【季題解説】 昔、錢を地上に投じて勝負を爭ひたる兒戯を意錢といふ。嬉遊笑覽に「錢をうち中る事とも聞ゆれど、和名抄に已無とも訓せたるをみれば、うつ事とは異なるべし。もむは採字などをもよみて、南手にてするわざなり。されば攤うつと云事もあるは、錢を兩掌の内に持てよく念じて擲ち、其なめと、かたと、あらはれたるをもて、勝負する事なるべし」とあり。二人或は三人錢を出し合ひ横に地上に筋をひき錢を撒き、一錢を掌に持ちこれにて敵の指すところの錢をうち、中れば則ち勝とし、あやまつて他錢にあつれば負けとなす遊びをいふとも三才圖會に記す。現今絶えて見ることなき遊戯なり。

【例句】 意錢　意錢や屛にもたれし背のよごれ　蝶 衣 （蝶衣句稿）

意錢や半緡負けて晝餉時　同 （同　）

粒遊び（つぶあそび） 瞎打（かつうち）

【季題解説】 正月、江戸時代の遊戯の一として、壁際に椀の半ばほどの大さの孔を穿ち、各々銀粒を出し合ひてこれに入れ、綺麗なる石にて打ち、勝負

を爭ひたるものあり、これを粒遊び、又は礫打といふ。

【例句】

粒遊び　粒遊び雪駄の土をはらひけり　雨青（懸葵）

念人（ねんじん）

【季題解説】正月十六日、河内國吉田の里にて、兒童集りて互に石討合をなすことを念人といふ　印地打の餘風ならんといふ。【季題】夏―印地打（インヂウチ）

【例句】

念人　念人の枯草高く隱れけり　瓜青（懸葵）

念人の石に火花のはしりけり　冬葉（同）

寶引（はうびき）

寶引綱（はうびきづな）　胴ふぐり（どうふぐり）　辻寶引（つじはうびき）　飴寶引（あめはうびき）

【古書校註】

【栞草】〔雜談抄〕餅の異名を福生果と云ふ。故に餅を福と云ふ。古く福引とて餅を二人して引あふて侍りき、云々。福引寶引これにはじまるにや。（一）

註（一）雜談抄原文更に續けて云ふ。「播州箕箇辨才天の社に、毎歳正月七日、富の行事を修す、之を得る者必ず其年に富家に充ると云、是も亦福引なり、其外家々嘉事として品物を撰み集めて、合家鬮取にし、或は繩を付て引て之を得るを福引と云、或は寶引と云ふ」

【季題解説】寶引は正月遊びの一にして數本の長き絲を集め持ちて、其中の一本に木製の槌、又は橙などを結びて印とす。この印を「胴ふぐり」といふ。これを競ひ引きて、引き當てたるものを勝となす、又餅を二人して引合ひ、多く取りし方を勝とする遊戲をも同じく寶引といへり。辻寶引は天明時代に行はれ、此處彼處辻々に立ちて、價をとりて寶引の絲を引かしめ、その當りたるものに隨意の品一つをとらせたるものなり。又飴を賣る者、寶引に類したる籤を作りて、小兒等を集め飴を賣るを飴寶引といふ。【季題】福引（フクビキ）

【例句】

寶引　寶引に蝸牛の角をたゝくなり　其角（五元集）

寶引

寶引の宵は過つゝあはぬ戀　几董（井華集）
寶引の味方にまいるおとな哉　召波（春泥發句集）
寶引や奥上﨟の玉むすび　路山（東日記）
方丈や弟にとらす下り繩　休計（浪花置火燵）
寶引やさぞな心のひたち帶　朧麿（姿かな）
寶引やどちらへまはる福の神　冬斜（新類題發句集）
寶引や膝出したる女の子　紫菊（同）
寶引や何處を行燈の置所　馬吹（同）
貴之神寶引繩の注連もなし　吉水（江戸舞臺）
寶引やあとにもつらき包み紙　子規（子規全集）
寶引にとりつく顏み心かな　五雀（五雀句集）
羊鮭の太刀や寶引の勝誇り　田明（田明句集）
寶引やさらりと振つてふり返し　鬼城（鬼城句集）
よく笑ふ女ありけり寶引　墨水（墨水句集）
寶引のかはる趣向もなかりけり　虚子（ホトトギス）
田舍道の馬者にけり寶引　鶯池（鶯池句集）
寶引に添乳の人もまじりけり　刀麓子（最新二萬句）
寶引や女一人に引負けし　師竹（同）
寶引の人のうしろの火鉢かな　釜村（懸葵）
寶引の引けど動かぬ柱かな　三鄕（同）
寶引や籤引競ふ紐さばき　夜濤（同）
寶引や輪の元結を一束ね　鳥化（同）
胴ふぐり
保昌が力引くなり胴ふぐり　其角（五元集）
きげんとる乳母が手くらや胴ふぐり　嘯山（葎亭句集）
投出すやおのれ引得し胴ふぐり　太祇（太祇句選）
珍らしく寢ぬ末の子や胴ふぐり　青坡（草上俳句集）

福引（ふくびき）

季題解説　福引は繩の一端に景物を結び、他の端を集め持ちて引かしめ、當りたるものを取らしむる遊戲、又圖とする紙撚の中に、歌・俳句・地口・謎の文句などを記して景物を分け與ふるものもあり。多く新年の餘興に行はる。〔[illegible]〕寶引（ほうびき）

例句

福引

福引の順にあたりて物さびし　大江丸（發句類聚）
太々や福引とりてぬけ參り　巣兆（曾波可理）
福引や御降濟で殘る雪　鳳朗（鳳朗發句集）
福引や善き物とりし下女　子規（子規全集）

福引の後で素人の落語哉　同（同）
福引の包持寄る座敷哉　繞石（落椿）
來ぬ人に代り引きしが一の福　同（同）
福引やひく手あまたの人は誰　鳴雪（鳴雪俳句集）
福引の一番當りひき當てたり　鬼城（鬼城句集）
福引のさてもおかしや勝大根　墨水（墨水句集）
福引やためらひ引きて當り籤　虚吼（虚吼句集）
福引や空ラ圖文ンの面白き　偲堂（ナガサキ）
福引の庭に撒きたる蜜柑かな　橡面坊（深山柴）
福引につかむ草履や鏡山　十二星（鏤氷集）
袴着て福引なんどおどけたる　菰堂（春夏秋冬）
福引や女がちなる笑ひ聲　梧月（明治俳句）
福引の殘り一つとなりにけり　寒樓（同）
福引の圖持ちまはる男かな　太古（同）
福引や老は伊吹のさしも草　三秋（最新二萬句）
福引の鯛三尺や染眞綿　六花（同）
福引のから籤すねる法師哉　蝶衣（蝶衣句稿）
福引や石山の月膳所の城　碧童（續春夏秋冬）
福引や古句の意を酌む三十番　田士英（同）
福引に二人來てゐる尼僧哉　鳥城（ホトトギス）
福引の始まりて座の亂れけり　青荷（同人俳句集）
福引の嵩なすものを貰ひけり　鬼生（愛吟集）
引當てし大福帳のよかりけり　化羊（明治一萬句）
福引のこよなき籤に當りけり　秋櫻子（現代俳句大觀）
福引や筵に躍りて大だるま　竹坡（同）
福引の讀まれぬ立ちてゆくは誰ぞ　竹人（同）
福引や明るく灯す青疊　門耳（同）
福引や福をすくひの貝杓子　薄陽（明治新俳句集）
福引の箒羞らふ女かな　天山（年刊俳句集）
福引の一番先きに呼ばれけり　狂介（昭和模範句集）
福引や教へられたる惡いくじ　花笠（懸葵）
福引のなげ出されたる俵かな　露皎（同）
福引の主人こせ〳〵したりけり　秋蒼（同）
福引のたのみありける殘り籤　得川（同）
福引の言下に品を判じけり　鎭西郎（同）
福引や水引かけし包みもの　鱶洲（同）
持ちよりの福引の品並びけり　青蝶（同）

【参考】梅園日記に「杓に見えたるは月當夜話に或人云、正月の福引は昔

は兩人して餅を引き合せて雨方の多少取りたるを見て其の年中の禍福をみし事あり、今代は餅を種々の器物に取りかへたるなり、餅をひきとる故福引と名付くとあり。又寶引と云ふ」とある。これも年占にもとづくと思はれる。

歌留多（かるた）

歌がるた（うたがるた）　骨牌（かるた）　花歌留多（はなかるた）　いろは歌留多（いろはがるた）　歌留多會（かるたくわい）　歌（か）留多遊び（るたあそび）　歌留多取（かるたとり）　歌留多箱（かるたばこ）　讀札（よみふだ）　取札（とりふだ）

【季題解説】正月男女うち交りて歌留多遊びを催すもの多し。歌留多は主に小倉百人一首の歌を、上下の句を分ちて書きたるものにして歌がるたといふ。この外に花歌留多・いろは歌留多などあり。この遊戲各地にて盛んに行はれ、都會地にては競技會など催さるゝことあり。又、謠曲名寄・花月・地名等の歌留多を古は大名等玩びたり。

【實作注意】歌留多は多く「歌かるた」を意味し、花歌留多を遊戲するものは或る一部の人々に限られたれば、作句の場合も矢張り「歌かるた」を本とするをよしとす。

【例句】
歌がるた

歌かるた女ばかりの夜は更けぬ　子規（明治一萬句）
ぬかれたる札のかことや歌かるた　紫影（かきね草）
座をあげて戀ほのめくや歌がるた　虚子（虚子句集）
毛氈に金釵落ちけり歌がるた　五空（五空句集）
歌がるた賴み甲斐なき味方かな　同（同）
讀む人の立ちて一人よ歌がるた　温亭（温亭句集）
そらんじてかるた取りけり歌百首　麥人（春夏秋冬）
歌がるたさはれ織手の手だれもの　六花（寒烟）
妹を欲しと思ごぬ歌加留多　綾石（落椿）
歌がるた座敷開きの殘り客　蝶衣（蝶衣句稿）
歌かるた人にてならで女の集し　松宇（松宇家集）
罵ぬられたる黒主や歌加留多　鶯渡（鶯池句集）
朗詠のしわがれ聲や歌がるた　虚吼（虚吼句集）
破れたる心覺えや歌加留多　庭從（江戸庵句集）
歌加留多無言の人の上手哉　波靜（春夏秋冬）
下手強の人後のわれや歌加留多　櫻磈子（同）
歌かるた君が猿臂の強かりし　香村（新春夏秋冬）
下手くそのからかけ聲や歌がるた　射石（同）
歌かるたおなじ札よむうつせ貝　瓏華（同）
徒の君の淺き怨や歌がるた　余子（同）
讀み下手のおくれてはかり歌がるた　夕村（年刊俳句集）

歌がるた

歌がるた殊によごれて二三枚　泥中　（年刊俳句集）
歌がるた取られじものに慌だし　山灌子　（最新二萬句）
歌がるた安堵の札をとられけり　波空　（同）
美姫國に遊び心や歌がるた　雪人　（同）
下の句のわからで悲し歌がるた　鶴聲　（同）
怨ろに二度の使や歌がるた　春沙　（同）
亡母の筆なつかしや歌がるた　桂株　（明治一萬句）
歌がるた袴を脱て交りけり　三允　（同）
歌がるた子供は先へ寢たりけり　鬼史　（同）
我が膝の月さらはれつ歌がるた　牛後　（同）
歌やそも戀の棧橋かるた哉　知白　（同）
正月も今宵かぎりや歌がるた　豐風　（同）
頼もしき組の人數や歌がるた　坡醉　（同）
末の子に母の加勢や歌がるた　翠村　（大正俳句選）
歌がるた君が疊の戀づくし　太中梅　（明治新俳句集）
歌がるた雪の迎ひの傘二本　菴村　（同）
歌がるた身をつくしても負けにけり　虚鳴　（同）
なか／＼に押へたる手や歌がるた　黄綠　（現代俳句大觀）
はしための陣のかたさや歌がるた　順風　（青嵐）
大燭に徹す一夜や歌がるた　茶山　（同）
歌がるたを遙かにきいて寢入りけり　波那女　（大正新俳句）
婦女に媚ぶ汝を見たり歌がるた　へき生　（ホトトギス）
歌がるた嬉しき人と組みにけり　豐女　（同人俳句集）
藤原の世に時めくや歌がるた　十二星　（鏤氷集）
膝に袖に歌留多數多を掩ひけり　蘇南　（蘇南遺唫）
六人の子女を膝下や歌がるた　腸谷　（閑古鳥）
四五枚にゐざりよりけり歌がるた　牧童　（年鑑俳句集）
歌がるた額補はねど取りそめし　炎子　（懸葵）
歌がるた清女ばかりの世となりぬ　羊男　（同）
歌がるた御髪に狆のたはむるゝ　句佛　（同）
虎の位をかり催す日かるた哉　支考　（蓮二吟集）
人のため梶が書きたるかるた哉　鳴雪　（鳴雪俳句集）

歌留多

歌留多して戻る雨夜や最合傘　同　（同）
負けまじきかるたを美女の嗔り哉　紫影　（かきね草）
子等がとる歌留多の宿に戻りけり　虚子　（虚子句集）
幼きが坊主めくりも骨牌かな　四明　（四明句集）
打つ音に火影のゆらぐ骨牌かな　同　（同）
二つ三つ歌も覺えてかるた哉　鬼城　（鬼城句集）

歌留多

寿命も君に嬉しき歌留多哉　天郎（東　国）
門々にかるたの連の別れ哉　撲天鵰（青　嵐）
戀の神の今宵この家に歌留多哉　紫人（[illegible]）
奥の方幾間距てしかるたかな　放哉（續春夏秋冬）
大方の友は嫁ぎしかるたかな　残鶯（同）
少年の讀み昂れるかるた哉　五沼（同）
さわがしき人の去りたるかるた哉　なみ（最新二萬句）
月雪と置き忘はするかるた哉　天仙（明治一萬句）
一枚になつてとられし加留多哉　夏袖（同）
負まじき人のかるたにきほひけり　酒骨（同）
教へ子を呼び集めたるかるた哉　白夢（同）
讀み初めし聲にかるたとられけり　杏村（現代俳句大觀）
我が前の戀さらはれし歌留多哉　宙耳（同）
かるたそれにしたゝか打ちし疊哉　雲山（同）
ひそやかにかるたの聲や婢部屋　静子（同）
夫婦していくたび組むかるた哉　鬼生（同）
大雪に泊るときめて歌留多哉　潮磊（同）
勝つ負くる此一枚のかるた哉　其外（同）
負け腹の戀も忘れしかるた哉　曉風（昭和一萬句）
四五枚のかるたとなれる瞳かな　眞帆（同）
長袖にかるた曳きずる燈下哉　密竹（青　嵐）
宴流れて曉近しかるた人　菊坡（大正新俳句）
かるたしばし灯のまたゝきに静まれり　野風呂（同）
そのはしに婢もとれる歌留多哉　清水（ホトトギス）
とこしへにをとめなれかしかるたとる　一杉（同）
書を伏せてかるたの騒ぎ聴き沈む　太郎（同人俳句集）
大雪となりけりかるたとり更くる　孤軒（孤軒句集）
歌留多の座興かる君を待ちもして　万太郎（道　芝）
闇の梅ばけものがるたはやりけり　田士英（懸　葵）
吟替りしてそゝくるゝ歌留多哉　雨青（同）
上手より下手面白きかるた哉　九斤子（同）
かるた果てゝ夫婦淋しき燈下哉　古南（同）
兒を寝せて暫しは交るかるた哉　水明溪（同）
かるた更くる聲をうつゝに宵寝哉　句佛（同）

花がるた

喰積の橋かけつ花がるた　青々（妻　木）
花かるた男は河原に走りけり　聴泉（最新二萬句）
から／＼と切りこぼしけり花骨牌　犀州（同人俳句集）

いろはがるた

昔より家にあるいろはがるた哉　青々（妻　木）

かるた取り　壬生が妻紫女が夫もかるた取り　十框（最新二萬句）
相識りて相知らぬげに歌留多取　佛文（懸葵）

歌留多會　歌留多會青き疊の匂ひけり　波津女（ホトトギス）

參考　かるたはポルトガル語（Carta）より出づ。うんすんがるた、トランプ等あり。我が邦にてその製に倣ひ歌を書けるを歌がるたといふ。その歌は小倉百人一首を常とし、古くは古今集の歌を書けるもあり。小倉百人一首は、藤原定家が小倉山莊に閑居せし頃、嘉禎元年五月、妻の兄宇都宮頼綱法名蓮生の囑に應じて嵯峨中院の障子の色紙形に古今の歌人の歌一人一首づゝ百首を書けるに起る。こは頼綱が歌を選みしならむと言ふ說世に行はるれども、その多くは定家が秀歌として他に選出せしものに一致すれば、選歌も多分定家の手に出たものであらう。後之に擬して武家百人一首・烈女百人一首等選めるものあれども廣く行はれない。

羽子板

胡鬼板　胡鬼の子　羽子　羽子つく　はご　つくばね　遣羽子　追羽子　おひばね　およばね　揚羽子　內裏羽子板　飾羽子　逸れ羽子　懸り羽子

古書校註

【山之井】　はねつく　さぎちやうばね　やり羽子　胡鬼の子　胡鬼板　はごいた　これ蚊にくはれざるまじなひといへり、秋の蜻蛉蚊をくふものなり、其故に羽をとんぼうのかたちにしてつくと、云々。世諺問答

【年浪草】　世諺問答に曰ふ。稚きものゝ胡鬼の子とてつき侍るはいかなる事ぞや、答て云ふ。をさなきものゝ蚊にくはれぬまじなひなり、秋のはじめに蜻蛉といふ蟲出きて蚊をとりくふ物なり、こきの子といふは木蓮子（一）などをとんぼうかしらにしてはねつけたり、これを板にてつきあぐればおつる時とんぼうがへりのやうなり、さて蚊をおそれしめんためなりと云々。雜談抄に云ふ。蜻蛉の蚊蝱（二）を喰ふ事本草にも注せり、此板を羽子板鬼板など云り、表に譬ば大臣家などの內々の祝儀の體、裏には爆竹の體を畫きたり、寸法定まらず、云々。一說羽子板は神功皇后を女武者の祖と仰て己未栢板を表して女の翫とし羽子のこは矢に象ると　云々。やり羽子、爆竹ばねと云ふ事增山井に出づ、名義未考。

【新式】　はねつく　さぎてうはね　やりはご　きしのはね　胡鬼のこ　はごいた　胡鬼いた。

【いつまで暦】　胡鬼はつくばね（三）といふ木の實によく似たるゆゑの名なり、蚊にくはれざる咒といへり、はねのとんぼうの形に似たるは、とんぼうは蚊をくふ蟲。

註　（一）木蓮子（もくれんじ）　木槵子（むくれにし）　毛患子（むくろじ）　木槵樹の實なり、圓くして大きさ六七分、外皮黃なり、內に圓子あり、深黑にして甚だ固し、種々の用を爲す。（二）蚊蝱　かとあぶと。（三）つくばね　灌木の名、諸國深山に多し、高さ七八尺、葉は

いほたに似て末尖なり、兩對す、立夏の後、白綠の淡黄花を綴り開く、實はしろまめの如くにして上に細長き四翅あり、羽子のごとし。鹽漬にし、或は炙りて食ふべし。味榧の實の如し、常州筑波山に産するもの名あり。一名こきのき、又はごのき、胡鬼子。

季題解說　羽子板は古く胡鬼板ともいふ、新年に羽子を突くに用ふる板、長方形にして柄あり、表に繪をかき又は押繪を附くるものなり。古は表に殿樣（素盞嗚尊）かみ樣（稻田姬）を畫き、裏に左義長の繪を畫くを例とす。殿樣かみ樣を畫けるは子孫繁榮を祝し、裏の左義長は厄を拂ふ意なるべし。江戸時代のものには殿樣かみ樣を書きたる表の上に、葵紋三つをつけ、總體に金箔を押したるものあり。現今は表は俳優の似顏などを押繪とし、或は縫ひ取りの布帛をとりつけたるものなど多く裏は松竹梅などの墨繪を書き、飾羽子板としてはその大きさを競ふ風習もあり。

羽子は胡鬼子とも云ひ、棕の實に鳥の羽根など五枚を並べ、作りたるものなり。これを羽子板にてつき、數へ唄を歌ひながら遊戲す。その方法種々あり。遣羽子といふは二三人或は四五人輪になりて、各羽子板を持ち、一の羽子をつきて追ひ逃くるを、順次に受けて突くを云ふ、受け損じたるものを負けとす。揚羽子は一人にて羽子をつき上げ、數へ歌に合せて數多くつきたるものを勝とす。【參照】冬　羽子板市

實作注意　羽子板は新年の遊びの具なれども、その羽子板市と稱して賣り出すは年末の一行事なれば、區別して作るべし。

(左、古、江戸製)

(左、古、大阪製)

(左、古、京都製)

例句

羽子板

羽子板やたゞに目出度裏表　嵐雪（類題集）
羽子板の一筆書や内裏髮　召波（春泥發句集）
羽子板をやりたし雪の奥出家　乙二（松のさえ草稿）
羽子板や十五かしらに皆女　子規（子規全集）
羽子板の裏や戀歌のぬすみ書　紅葉（紅葉句集）
羽子板に團十郎を知る子哉　鬼城（鬼城句集）
羽子板の繪に古びしや土佐霞　梨葉（梨葉句集）
羽子板の重きがうれし突かで立つ　かな女（虚子撰雜詠選集）
羽子板の大きを飾り子なき家　野菊女（大正新俳句）
翩々と彼女の羽子のはづみけり　柳家（明治一萬句）

羽子

御慶いふて羽子の仲間に交りけり　鶯子（同）
凪ぎ映えて蜻蛉とぶよに羽子あがる　蝶衣（蝶衣句稿）
羽子の音二つとなりて亂れけり　粂青子（現代俳句大觀）
靜かさや冴え渡り來る羽子の音　鬼城（鬼城句集）
此村は羽子もあらずよ海近し　墨水（墨水句集）
羽子やんで姫すや〳〵と寢入り給ふ　紅綠（俳家句集）
地震止んで又羽子の音暮れてゆく　句佛（我は我）

羽子突

羽子つくや用意おかしき立まはり　太祇（太祇句選）
はねつくや世ごゝろしらぬ大またげ　同（同）
あら手きて羽子つき上し軒端哉　同（同）
はねつくやまた花娵の蓍とも　也有（蘿葉集）
つく羽根の轉びながらに一つ哉　一茶（七番日記）
つく羽根を犬がくはへて參りけり　同（同）
羽子つくや住ばみやこと思ふさま　梅室（梅室家集）
羽根黑は黃昏やすしつきそめて　櫻磈子（園門の草）
つく羽根や一條過ぎて櫻町　はつ女（大正新俳句）
つく羽子の落ちくるやまこと風もなし　鶯池（鶯池句集）
羽子をつく眼に北山の雪白し　雪山（明治一萬句）
獨りつく羽子に飽けども又突ける　溫亭（溫亭句集）
九ッの春や羽子つく女の子　三幹竹（懸葵）

遺羽子

やり羽子やまだ戀しらぬ妹がふり　利牛（類題句集）
やり羽子やあこめにまじる年女房　木導（篇突）
遺羽子や皆君が代の女ぶり　子規（子規全集）
遺羽のちら〳〵雪となりにけり　同（同）
遺羽子や女同士にねだみある　貞子（大正新俳句）
遺羽子やかはりの羽子を額髮　虛子（虛子句集）
遺羽子や雪の山べの祇園町　青々（妻木）
遺羽子や姬君多き九條殿　紫影（かきね草）
遺羽子やわりなき中の負惜み　守水老（守水老遺稿）
遺羽子や簪の夕日帶の塵　玉鬼（日本俳句鈔）
遺羽子に切凧落ちぬ門の内　助骨（春夏秋冬）
遺羽子や田圃に近く小家がち　把栗（同）
遺羽子の都ぞ春の錦なる　稻青（同）
遺羽子や君稚兒齒の黑日勝　漱石（續春夏秋冬）
遺羽子の急に落ちざる斜かな　橡面坊（深山柴）
遺羽子や昔男の幸四郎　放江（放江句集）
遺羽子の殘る二人や雪が降る　寒樓（明治俳句）

追羽子

追羽子や柳に風のなびく如　松宇（年刊俳句集）

追羽子

追羽子や鳥羽の浦曲の鏡晴　静佳（現代俳句大觀）
追羽子や應へながらも空返事　梨花（昭和一萬句）
追羽子や夕の空のある限り　楷郎（現代俳句大觀）
追羽子や妹の友姉の友　春宵魚（同　）
追羽子や晝靜かなる富士見町　南天樓（同人俳句集）

飾羽子

飾羽子淀君のそれも歌右衛門　句佛（我は我）

參考　但原の語義については諸説ありて確でない。那波道圓が遺藁、元旦の詩に「繋レ毬撞レ羽」と作つてゐる。

手毬（てまり）

手鞠（てまり）　手毬つく（てまりつく）　手毬唄（てまりうた）　毬唄（まりうた）　手毬子（てまりこ）

古書校註

【栞草】年のはじめに幼女の翫びなり、蓋し毬打（ぎちやう）にならへるなるべし。

季題解説　手毬は正月の兒女の遊戯として昔より傳はりたるもの、多く色絲にてかゞりたる美しきものをもてあそびたるものなれども、現今はそれらの美しき手毬の影薄く、ゴム製の手毬に變じたるは世の移り變りのあとのあまりにあさましく、情趣を殺ぐものあり。戀しきは昔の色絲にてかゞりたる手毬なり。手毬つく時に唄ふ歌を手毬唄といひ、これも亦、昔の子女の教へ草を詠みたるものあり。故きを尋ねて作ることも亦よろしかるべし。

例句

手毬

さゝかにの絲かけそふる手毬哉　成安（菱錦）
鳴猫に赤ン目をして手毬哉　一茶（一茶句帖）
百とゆて突きそこねたる手毬哉　紫影（かきね草）
大いなるだん〳〵めぐりの手毬哉　虚子（虚子句集）
鴛鴦の衾の襟に手鞠哉　青々（妻木）
つかで持つ手毬や糸の綾錦　蓼江（同　）
かけ糸の赤きが多き手毬哉　守水老（守水老遺稿）
鞠入れし袂や長くふり歩く　温亭（温亭句集）
日暮るゝに取替へてつく手毬哉　鬼城（鬼城句集）
四ツ手毬上手にこそはゆりにけれ　碧梧桐（續春夏秋冬）
庭廣うなげ〳〵手毬遊び哉　琅々（同　）
つき倦みて猫に與へし手毬哉　放江（放江句集）
美しき手毬持ちけり盲の子　鯖魚（大正新俳句）
いさかひに手毬かゝへて戻りけり　兜山（同　）
片袖を胸高に抱く手毬かな　三昧（青嵐）
町の子のてん〳〵手毬つきにけり　八重櫻（明治一萬句）
末の子もいつかつき出す手毬哉　貞子（大正新俳句）

手毬唄

伊勢暦手毬に添へて貰ひけり　三幹竹（大正俳句選）
手毬かゞり〳〵思ふやかぐや姫　握月（懸葵）
九十九ついてそれ手毬惜みけり　琅玕（同　）
口馴し百や孫子の手毬唄　太祇（太祇句選）
窓の日や手毬の唄の夢心　露月（露月句集）
玉藻手繰る思ひ手毬の唄盡きず　櫻䰟子（閭門の草）
母慕ふこと綴りけん手毬唄　山梔子（日本俳句鈔）
落しては又つき始む手毬唄　あふひ（ホトトギス）
一人つくや皆して唄ふ手毬唄　四涼（同　）
手毬唄うたひながらに別れゆく　六々坊（現代俳句大觀）
噂すれば良寛坊や手毬唄　鶯池（鶯池句集）
先生の庭の訓や手毬唄　橡面坊（深山柴）

毬唄

毬唄や背丈のびても娘の子　玉圃（古今句鑑）
鞠唄や妹が日南の二三尺　鳴雪（鳴雪俳句集）
毬唄のところ〴〵を唄ひけり　百盞（年鑑俳句集）
毬唄やお仙の茶屋にほとり住み　松濤樓（懸　葵）

手毬子

手毬子が顔につけよ梅の蘂　解堂（反故集）
手毬兒に會釋の笑みを投げにけり　鶯池（鶯池句集）

参考　一條兼良の尺素往來に「揚弓、手鞠終日可ニ張行中一候」と見えてからその前よりあつたものであらう。歌僧良寛も手鞠を愛して、歌多く、その愛用したと言ふ手鞠も現存してゐる。元祿十六年綱の松の葉に手まりと題して「つる〳〵と出づる月を松の枝で隱した、いざさらば切りても棄ちよやれ、松の枝の下枝。チラシ、とんと突き上げきりゝと廻り〳〵、見てし人こそ、ゆかしけれ。」

雙六（すごろく）

しごろく　双六（すごろく）　數語錄（すごろく）　繪雙六（ゑすごろく）　歌雙六（うたすごろく）　道中雙六（だうちゆうすごろく）　廻り雙六（まはりすごろく）　飛雙六（とびすごろく）　盤雙六（ばんすごろく）　官位雙六（くわんゐすごろく）　佛法雙六（ぶつぽふすごろく）　淨土雙六（じやうどすごろく）　出世雙六（しゆつせすごろく）　賭雙六（かけすごろく）　雙六石（すごろくいし）

季題解說　正月兒女の翫ぶ雙六は古の雙六にあらず、繪雙六にして、紙面に多くの區劃を設けたる中に、「振り出し」と「上り」の二欄あり、數人にて一個の骰子を振り、その骰子の目の出でたる數だけ、區劃をたどりゆきて、早く「上り」の欄に入りたるものを勝とす。昔は佛法雙六・淨土雙六・官位雙六などいふものもありたれど今は見當らず。佛法雙六は又名目雙六とも云ふ、天台の名目を集めたるものにて、沙彌をして佛法の名目を暗記せしむる爲めに作りたるもの、これは文字のみにして繪はなし。淨土雙六は又永沈雙六とも云ふ。南膽部州を振出とし、骰の目のよき惡しきにより

て、或は人天より賢聖に入り、或は三惡道に墮落し、其内永沈とて一度無間地獄に墮つる時は浮び出づること能はず、故に永沈雙六と云へり。官位雙六は官位の事を兒童に覺えさせんが爲めに作れるものにて、寛延の頃より出版せられたり。また道中雙六は東海道中、木曾道中などを繪入にして作り、驛によりて泊りなどあり、古くより行はれたるものなり。尚詳しくは左の引用文を參照すべし。

▽繪双六の話　山本笑月

○双六の起り、繪双六の古いものは、支那の或種の繪畫に粉本があつて、「選佛圖」から淨土双六、「陞官圖」から官位双六が出來たものと想像されてゐる。淨土双六といふのは、南閻浮洲から振出で、「惡い目が出ると地獄へ墮ち、良い目が出ると佛に上るといふ仕組で、一說には天台の名目双六を繪に直したものともいはれ、後には佛法双六と名を改めたが、鎌倉時代には、佛法の名目を暗記するの具に使はれたものだといはれてゐる。官位双六は前のよりは後に出來たもので、板行で古いのは正德・享保ごろのを最古とする。布衣から太政大臣までの役々の人物を二百七圖あらはし、黑刷に丹・綠・黃の手彩色のものであり、文化ごろには、この双六の極彩色版の改版で「官位昇進双六」と題されて、役名は幕府のものであり、明治初年には新政府の「官等双六」が出てゐる。なほ極最初の双六のサイは、一から六までの數字でなくて、貪・瞋・痴・戒・定・惠の六字のが名目双六用に、南・南・分・身・諸・佛のが淨土双六用に、祚・品・位・階・等、級のが官位双六用にと、それぞれ專用のサイが使用されてをり、寬文、貞享のころまで、この古式のサイが使はれてゐたものである。

○珍らしい双六　文政八年の書き物に或る人のコレクションに古板双六が二十八種のつてゐて、そのうちの二つ、鶴屋版の「廿露壺双六」と、鱗形屋版の「かわるが早いおででこ双六」が私の手許にある。その他、松の内のんこれ双六」といふ流行歌を入れた双六などがあるが、話は古本屋の目錄みたいになるからこれ位でやめる。

○役者双六　役者双六は延寶から行はれ、珍品は明和・安永から寬政ごろのものに多い。また天明ごろのものに一顏見世ふり分双六」といふのがあつて名優十八名を描き、その末に無名の人物があつて「やうちん」と記してあるが、これは永沈地獄のことで、此處へ行くと、最後まで動くことが出來ぬ。これは淨土双六にあるもので、その影響がこの双六に

もある譯で、同じころの力士双六にも「やらちん」があるが、「役者賑双六」は「やらちん」を完全に清算して了つたものである。畫は丹繪で勝川春章の筆である。その後文化文政度にも役者双六は全盛を極はめ、明治になつても澤山出版された。

○道中双六　道中双六は貞享ごろに作り出したものだらうと柳亭種彦がいつてゐるが、寳永ごろのものを私は見た覺えがある。

近藤清春(?)の正德ごろのが先づ古い方で、時代が降つて、お馴染の北齋には「新板往來双六」といふ優れたものがあり、廣重には「東海道富士見双六」「諸國名勝双六」「東海道木曾振分道中双六」等、等がある。地方板としては「米澤道中双六」といふ米澤から江戸までの道中双六で寳曆前後のものがある。また名古屋板、仙臺板があるさうだ。

○川柳俳句双六　狂歌・川柳・俳句などを加へた双六も種々あるが、最も古いのは明和二年版の英一蝶の俳句入「梅盡吉例双六」で、文晁一門合作の俳句入「江の島文庫」なんて上品なものもある。「狂歌江戸花見双六」「壽出世双六」(狂歌)、孝不孝振分双六」(川柳)「名所遊歸宅双六」(狂歌)去來庵選の俳句入「江戸名所巽双六」といふ北齋の畫品の高い挿畫の逸品がある。

○年玉の廣告双六　お正月に最品として廣告に用ひた老舗の双六がまた澤山ある。「寳物には仕らず」とか、「禁賣買」とか斷つてあつて、文化文政ごろから明治に及んでゐる。

神田三河町の小間物屋泉屋の「御化粧双六」。三馬の「江戸の水」の廣告「賑式亭繁榮双六」。下谷車阪の櫻香本舖の「寳の山松繁榮双六」。淺香の紅勘の淺草名物を集めた「年玉双六」。赤坂表傳馬町の陶器商西村の「諸國陶器山冬双六」。日本橋伊勢屋(佃煮)の「御年玉細見双六」日本橋通の羊羹屋船橋屋織江の「名所羊羹双六」などがあり、明治になつてからの面白いのは、銀座上方屋の「かるた出世双六」で、當時禁制であつた花札を、其筋へ願つて賣出すまでの苦心を畫にした奇拔なものである。

○變つた双六　双六の畫工は大抵浮世繪師であるが、四條派の祖といはれる松村吳春筆の「京都名所双六」といふ肉筆のものがあつて、私はその寫眞を持つてゐるが、お上品なものである。

また具足のつけ方を五十餘圖に說明した文化ごろの「具足着用順次双六」なんてものがあり、「鉛銃點放號令双六」「調練双六」なんて幕末の勇ましい双六もある。

豆双六といふのは懷中用で、二三寸に三四寸といふ大きさで、これにも色々とあるが、明治十九年版の「新双六淑女鑑」といふのは小林清親の筆で署名はしてないが坪內逍遙博士の案である。

弘化二年版の「新製がん双六」といふのは、オランダ双六といはれてゐ

て、雁を描き、四隅に紅毛の男女が描いてあるが、海外のものゝ飜案であらうと思はれる。

○以上極く簡單に双六の概念を話したが、双六は微々たる遊戯の具に過ぎないが、時代を反映して風俗・流行・文藝・娛樂の傍系として、美術品としての價値を具へてをり、双六そのものゝ實質に就ても十分検討されていゝと思つてゐる。（昭和八年一月十五日發行・週刊朝日第二十三卷第四號所載）

例句

双六

双六の六部に逢ん宇都の山　巣兆（曾波可理）
双六や盧生の夢のふりあがり　子規（子規全集）
双六や附木追越す餅のかけ　紫影（かきね草）
人につらく双六の運つよき哉　露月（露月句集）
双六や君と二人に川とまり　五空（五空句集）
双六や奇才ひらめく女の子　嫦魚（大正新俳句）
双六や外の雪見て煩悩の闇　繞石（藻　椿）
双六の賽轉がりて袖の上　波津女（現代俳句大觀）
双六や二三の驛に富士見ゆる　寒山（續春夏秋冬）
双六や額あつめて筒井筒　小酒（同）
双六や押立鎗の早上り　泊雲（同）
双六に今年の遊び始まれり　梓女（ホトトギス）
双六をひろげて淋し賽一つ　万太郎（道芝）
双六に賽の目癖を狙ひけり　十二星（鏡氷集）
三十あまり六つの歌仙を双六に　月可（日本俳句鈔）
双六の一人上り二人上り行く　愛草（年刊俳句集）
双六やさいころ神の思召し　草郎（昭和一萬句）
三であがる双六の円の起きにけり　碧道人（懸葵）
双六に寝そびれてゐる子供哉　東一紅（同）
双六や人後に落ちて泊り癖　三幹竹（同）

絵双六

絵双六所々に歌ありて　觀魚（最新二萬句）
橋あれば瀬田も覺えて絵双六　櫻磯子（同）
一番は飛脚上りや絵双六　禽化（同）
古きもの東海道の絵双六　未央（明治一萬句）
絵双六の一二の宿に雪籠り　八重櫻（同）
賑かに旅立ちしけり絵双六　絲白（新春夏秋冬）
主が出て伊勢に三泊り絵双六　雪山（續春夏秋冬）
三道を進む軍の絵双六　寒山（同）
乙女子のひろげて見せぬ絵双六　鬼城（鬼城句集）
賽止まる折目新し絵双六　露生（虚子選雜詠選集）

道中双六

道中双六亦た泣蟲の一時雨　天郎（東　國）

道中双六　道中双六に交りて眠うなりにけり　鬼城（鬼城句集）
道中双六鞠子のとろゝ急ぎけり　鶯池（鶯池句集）
道中双六後や先なる君と我　波空（續春夏秋冬）
道中双六いそがぬ旅のひとり哉　庭後（江戸庵句集）

出世双六　出世双六士農工商選びけり　瓏華（日本俳句鈔）

参考　古く行はれた雙六盤は、支那より傳來せしもので盤上の遊戯中最古のものである。持統天皇三年に之を禁斷してある所よりすればすでに盛行して居たものゝとみえる。盤上に線條十二を畫し石を並べ、賽二個を振りて石を進めて勝負を爭ふ。近世になつて紙雙六起り佛法雙六・官位雙六などの類があり、初めは賽を使はなかつたが後道中雙六となつて又賽を用ゐた。萬葉集、雙六の賽を詠める「一二の目のみにあらず五六三四さへありけり雙六の賽」徒然草に「雙六の上手といひし人に其のてだてを問ひ侍りしかばかたんとうつべからず負けじとうつべきなり。いづれの手かとく負けぬべきと案じて其の手を使はずして一目なりとも遲くまくべき手につくべしといふ。」

毬打　ぎつちやう　玉打　ぶり〳〵毬打　玉こがす

古書校註

【栞草】［萬葉］神龜四年正月、數王子及諸臣子等、春日野に集つて打毬之樂を作す。［袖中抄］十節錄に云ふ。黃帝（二）蚩尤が頭をとり是を毬とす、今の毬杖是也。彼例を以て漢土年の始に件ノのことを用ひて國中凶事なし、仍て日本國その例を學びて毬打をうつ。云々［醒齋骨董集］正月男童のもてあそぶ毬杖はもと打毬の變風なるべし。打毬は馬上に武事をならはす業にて和漢ともにその來ること久し。云々。又云ふ。打毬といへるは椎の形したる杖なり。玉といへるは片木を平にけづりて玉のかたちに作りたるもの也。打やうは其間凡十間或は十二三間をへだて其半地上にすぢをひきこかぎりとし、男兒双方にわかれてかの玉を地上になげめぐらすを一方より椎もてうちとむるなり。とめえずして限りのすぢよりさきへ玉のめぐり越たるを、投たるかたの勝とし打とむるかたの負とす。或は打とめて限りのすぢより玉をこさせざれば、とむる方の勝とし、投たるかたの負とす。双方かはる〳〵かくすめり、是を毬杖の玉打といひしとぞ。今も京師には玉打とて其なごりあるよしなれど、昔のごとく毬杖の椎はもちひず、竹杖、箒のたぐひにて玉をうちとむるのみとぞ。［同上］ぶり〳〵の名は古き書にいまだ見あたらず、近き昔造り始たるものなるべし。毬杖と同じものとするはひが事なり、元來別物なり、本草啓蒙に云ふ「碌碡は田器なり、形瓜の如くして六稜あり、兩頭に梁ありて上にをひきて地面を平かにする具なり、三才圖會、授時考等に圖を載す、本邦正月兒戲のぶり〳〵はこの形に

象るなり、」今この説によりて按に、正月男兒にぶり〳〵をも一あそはせしは年の始に農業のまねびをさせ、農事をすゝむる意なるべし、古畫をみるに、ぶり〳〵に紐をつけて地上を引ていを多く畫けり、是れ田畑の地面を平にするのまねびならん。云々。今は年始の祝ひのおくりものにするのみ、何の所用もなきものとなれり。云々。毬杖、ぶり〳〵共になほくはしきことは、骨董集に古き圖など出して辯じたり。

【山之井】袖ぎてう　ぶり〳〵　玉。萬葉に玉きはるといふ是なり。と袖中抄にいへり。これ黃帝の亡し給へる蚩尤か眼のひとみを准ふといへり。袖中抄並世諺問答。

【いつまで暦】むかし鞠を打て遊びし事なり、今の手毬つく遊びに同じ。

【平家物語】大きなるぎつちやうの玉を造りて、是こそ入道相國の頭と名づけて、打て、蹈め、などぞ申しける。

【年浪草】世諺問答に曰く、蚩尤といふ惡人、黃帝にうたれしゆへ、その惡靈疫病といふ神になりて國土の人民をほろぼせり、末の世に疫病をおそれしめん爲に、蚩尤が身分をづた〳〵にわかちて、ひとつものこさじのはかり事に、正月にかの眼中の人見（二）をぬきて、木丁の玉にして打ことにせり、かの眼のふくりん（三）に三重ありしゆへに、弓いる時のまとに、三重に繪を書て、中の人見をばのぞきたり、しかのみならず正月のもちは彼肉なり。烏頭藻はひげ、大根ははとなづけてくふ事にせり。此外五節句といふ事もその〳〵かたどる處ありて、いかにも疫病神をこらしめて、人をやましめぬまじなひなりと云々。（一）雜談抄に云、萬葉に玉きはると詠るも年始の毬打を云、增韻又唐史に云ふは、毛皮にて作る日本の蹴鞠の鞠に類せり、日本には木にて造る、近き頃の由也。必竟近世女子の翫ぶ手鞠は、毛毬に近き者也。昔は木毬はなかりしと也。然れども成恩寺殿（四）の世諺問答に木丁と遊ばされたれば、其頃も木毬にや。唯男兒の翫ぶ地上石間に擲つ便ならん。後鳥羽院の稚き御時に、孫の外毬打を好み玉へければ、文覺上人（五）故ありて禁獄の時腹立て、此帝を毬打の冠者と詈られける由平家物語に侍る、又俗に振々と稱して毬を拂ふもの有り、毬杖と云ふ者にて、杖のさきに付る者也。當代は古來の模樣に變じて二三歳の幼兒に、小き毬打を紙上又は薄板に帖し、鶴龜松竹など造て是を毬打に限るやうに稱し、其餘は玉振々と各別に呼ぶ、大なる非也、いづれも木丁と稱すべしと云々、今玉振々と云は卽ち昔よりの毬打にて、腰物の目貫、縁頭の繪様又は諸具の蒔繪にもあり其の形狀玉は大戶に付る戶車の如し、寶盡しの中の七寶と云ものゝ如く彩る、振々は木を八角に削り、兩端を細く、中ぶくらにして、細き方上の方左右に木瓜形の穴を穿ち、此處に前件に云處の玉を付て、惣體金箔にてだみ、其上に鶴龜松竹尉姥等の繪を彩色にするなり。用る時は左右の玉を取はなし、別にして是を擲つ玉とし、八角の木の木瓜形の穴へ竹杖木杖の如き棒を貫き、柄として、是を玉を打つ毬杖とす、略し

ては皆己が得物を用ふ。○紀事に云、北野宮寺の奴僕、元日より三日に至て右近の馬場に出て毬を撃つ、云々

註 （一）黄帝　支那古代の帝王の名。（二）人見　瞳。（三）ふくりん　まはり　へり　覆輪。（四）成恩寺殿　一條經嗣　關白良基の末子、權大納言房經の後を繼ぎ、遂に關白を拜す、應永二十五年薨ず、年六十一、和漢の學に通じ頗る世の尊崇を受く。（五）文覺上人　遠藤武者盛遠をいふ、年十八の時、誤て源渡の妻袈裟を殺し、痛恨の餘髮を削つて僧となる、性頗る勇猛にして、流されて伊豆に在るの時、源頼朝に勸めて源家の再興を圖らしむ、正治元年頼朝の薨後不軌を圖り、顯れて佐渡に流さる、踊躍罵言食せずして死す、年八十。

季題解説 毬打は古、正月の遊戯に用ゐたる玩具にして、槌の形したる柄長き杖に、彩絲をからみつけ、木製の毬を打ち合ひて勝負を決するものなり。其法、十二三間を隔てゝ、其間に線を劃し、玉を線内に打ち入れしを勝ちとす。これはもと馬術家の行ふ打毬の遺風なりといふ。平家物語に「大きなるぎつちやうの玉を作りて、是れこそ入道相國の頭と名づけて、打て蹈めなどぞ申しける」と見ゆ。

其二

参照 ぶりぶり　毬打(ソデギチャウ)

例句

毬打
世の中や毬打の箔の人こゝろ　鼠花（新類題發句集）
長生をならべて見たる毬打哉　鯉遊（類題發句集）
去年の子が明て二つの毬打哉　蘆集（大三物）

玉打
雪はじいて毬打の玉止りけり　規魚子（昭和一萬句）
玉うちを避て行なり御寮達　嘯山（葎亭句集）
たまうちや抱たも踊る男の子　同（同）
玉打ちて雪に筋つく小路かな　一路（新類題發句集）

玉こがす
玉こがす兒と中よき小犬哉　芈林（大三物）

参考 十節錄に「黄帝取二蚩尤頭一毬レ之、今毬杖是也」とある。萬葉集卷六神龜四年正月諸王諸臣子等を授刀寮に散禁せし時の歌の左註に「右神龜四年正月、數王子及諸臣子等、集二於春日野一而作二打毬之樂一」云々とある。

ぶり〳〵

季題解説　ぶり〳〵は正月男兒の弄ぶ玩具。木にて造りたる六角形の槌の如きもの、頭部は長さ五寸餘、柄の長さ四寸許、高砂の尉と姥との圖を彩色にて畫き、これに紐をつけたるもの。初め碌碡といひて土を平らにする農具に作り、小兒に農事を學ばしむる爲にせしが、後之を弄ぶに紐を付して打振り、毬打の如くなして戯れ、又は美々しく彩りて室内の飾物とす。〔參照〕毬打(ぎつちやう)　袖毬打(そでぎつちやう)

例句　ぶり〳〵

ぶり〳〵もふりさけみるや玉の塵　可頼（玉海集）
ぶり〳〵やあるは添乳の枕にも　重厚（類題發句集）
ぶり〳〵の緒や玉ならば玉かつら　壽信（洗濯物）
ぶり〳〵や昔の春のわすれ種　長翠（俳諧歳事記）
ぶり〳〵や剝け殘る繪の尉と姥　蝶衣（續春夏秋冬）
ぶり〳〵の長き緒を子に祝ひけり　同（蝶衣句稿）
ぶり〳〵を棚のかざりや妹が宿　梓月（閑古鳥）
ぶり〳〵や房も匂ひの棚飾　梨葉（現代俳句大觀）
ぶり〳〵や承塵に映る飾り紐　規魚子（昭和一萬句）
ぶり〳〵や紐の喰み出し玩具箱　零餘子（古今模範一萬句集）

袖毬打(そでぎつちやう)

季題解説　毬打の玉とブリ〳〵とを絲にて釣り、飾にしたるもの、これを袖毬打といふ。〔參照〕毬打(ぎつちやう)　ぶり〳〵

例句　袖毬打

手にふれて我年よるや袖毬打　桐案（大三物）

松葉(まつば)むしり

季題解説　維新前、京都の士族屋敷にては門松を七日より半ばに切り去り、梢のみ存し置きたれば、童子等群れ集りてその葉をむしり取り、互にあてあひなどして遊び、これを松葉むしりといひたりといふ。

例句　松葉むしり

七日から松葉むしりの遊び哉　四明（四明句集）

福笑ひ(ふくわらひ)

季題解説　福笑ひは正月の玩び物の一種にして、大なる紙にお多福の面の目

鼻口なきを描き、別に目鼻口を切り抜きたる紙片を備へ、目隠しをして之を面の目鼻口の各適處に置かしむ。多く鼻のところへ目をのせ、又は口を鼻の上に重ぬる等の滑稽ありて面白き遊びなり。

實作注意 福笑は新年に兒童等の遊戯するものゝ名なれば、正月の「笑ひ初」などの異名として作るはよろしからず。世上の句集中に間違ひたるものを見受くることあり。

例句

福笑ひ

目隠しが透いて見えたる福笑　庭後（江戸庵句集）
お福既に玄關に來てゐたりけり　默禪（ホトトギス）
眉二つ上りさがりや福笑ひ　烏一（青嵐）
眼かくしに常世の闇や福笑ひ　龍雨（龍雨俳句集）
袖摺りて鼻の行衛や福笑ひ　同（同）

ぽつぺん

ぽこんぽこん　響胡蘆（ぽんぴん）

季題解説 響胡蘆は玻璃にて薄く作りし異様のものにて、其管より息を入れ呼吸すれば、底部内外に動きてぺこんぺこんと鳴る。東京にてはその音に因みてぽこんぽこんと稱す　大阪にてはぽつぺんと云ひ女兒等今も之を玩ぶ。

例句

ぽつぺん

等身にして頭大のぽぺん哉　素石（木虫句集）
大ぽぺん男の息に餘るかな　二島（同）
ぽつぺんに小さき顔が映りけり　月斗（現代俳句大觀）
ぽつぺんに機嫌直しつ泣吃逆　千燈（同）
ぽつぺんの曇れば寒き光り哉　素明（同）
ぽつぺんの吹く息白き曇り哉　橡面坊（最新二萬句）
ぽつぺんの繪や正月の花盡し　泰洋（同）
ぽつぺんや四十島田もはづかしく　十二星（鏡氷集）
病床にぽつぺん吹きて疲れけり　羊史（ホトトギス）
ぽつぺんが光れる夜の箪笥哉　百迷（同人俳句集）
ぽつぺんに息の長さをくらべけり　初子（同）
ぽつぺんや息がつゞかぬ酒の醉　一央（同）
ぽつぺんを吹きつゝ物をねだりけり　四方哉（同）
ぽつぺんに紅濃き口をあてにけり　傘子（現代俳句大觀）
ぽつぺんを鳴らせば躍る面輪哉　臥牛（昭和一萬句）
背の子にぽつぺんを吹く母若し　春坡（同）
込合へる中にぽつぺん買ひにけり　平安（年刊俳句集）
末の子はぽつぺんの音恐れけり　日車（同）
ぽつぺんにちいさくへこむ笑靨哉　蘆仙（懸葵）

ぽつぺんや粉雪となれる長田道　原　游（同　）

投扇興（とうせんきょう）　投扇（とうせん）

季題解説　投扇は四角なる箱を臺とし、その上に蝶に擬したる飾りをおき、扇を之に投じ、其の落ちたる状に隨ひて、優劣を判じ、其點の多少をかぞへて勝敗を定むるもの。其點には皆名目あり。初め百人一首の歌にとりしが、後に源氏物語の巻の名を用ゐるに至る。この遊戯は安永年間に初めて起りたるものにて、投壺に摸したるものなりといふ。

例句

投扇興　投扇興末子さかしき笑ひ初む　句佛（我は我）

投扇　投扇に興じ更かすや浪花人　同（同　）

穴一（あないち）　穴市（あないち）

季題解説　穴一は、江戸時代地上に錢大の穴を穿ち、これに錢を投入し、入りたるものは其所得とし、外づれたるものは更に他の錢を以て敵の指示する所に隨て之を撃ち、中つれば勝とし、中らざれば負とする遊びなり。

參照　つぶ遊び（つぶあそび）

例句

穴一　穴一の筋引すてつ梅が下　太祇（太祇句選）

穴市の仕廻を掃くや梅の花　路生（俳諧[illegible]集）

十六むさし（じふろくむさし）　十六目石（じふろくむさし）　十六さすかり（じふろく）　むさし八道（さすかり）　むさし

季題解説　十六六指は雙六に類したるものにして、其の法、十六の士卒、一力士を中央に圍みて、之を攻む。力士は八道に行き、士子の間を跳び、直行して左右の士卒を屠り、遂に行道に障礙なきに至るを以て勝とし、士卒は力士を窮逐して逃ぐること能はざらしむるを以て勝とす。又地上に大路小路の形を畫き、此に錢を投じて勝負を爭ふものをも「むさし」といふ。なほ嬉遊笑覽に「安齋隨筆に、和名抄に、八道行成讀夜佐須賀利とあり、今も武州埼玉郡邊にては十六サスカリといふ。江戸にては十六ムサシと云ふ。十六は子馬の數十六あり。親馬を除ていふ也。ムサシは馬指なり。マとムと音相通じ、ヤサスカリといふはヤススカリなるべし。ヤスはヤスシの略語にて、八の道スシなり。スガリは子馬を以て親馬にスガリ迫る也。スガルは縋字にて繩を付て離れざるをスカルと云ふ。相州鎌倉の邊にてはニツサと云ふ。二人にて三ツヅヽ石を六ツ持なれば二三といふ心か。十六ムサシを牛追ニツサといふ。和訓栞云、ヤサスは八指カリは樗蒲なり。八道行成は梵經に出たり。其名義いまだ考得ざれ共今もむさしを十六サスカ

りといふ思へば、八を倍したるものとは知らる。伊勢氏ヤスジの説は疎忽なり。假字の違へるに心つかざる歟、さて八道行成のつくりさまは今しるべからず。遊學往來に、七双六、一二五双六云々、十六目石など載するを見れば双六の類なる事明らかなり」とあり。参照 雙六スゴロク

例句

十六むさし
幼きと遊ぶ十六むさしかな　虚子（俳星）
母とする姉とする十六むさし哉　のぼる（現代俳句大觀）
十六むさし昔の夢となりにけり　吹花（同）
父も共に十六むさし更けにけり　鳴々子（同）
いさかひとなりし十六むさし哉　羊我（懸葵）
敗けて見て崩す十六むさし哉　同（同）

凧（たこ）

紙鳶　いか　はた　繪凧　字凧　奴凧　人形凧　鳶凧　板木凧
小袖凧　三河凧　角凧　切抜凧　五角凧　六角凧　扇子凧　扇凧
壽賀凧　軍配凧　けんえき凧　旗凧　骨牌凧　達磨凧　行燈凧
南京凧　細工凧　蝙蝠鳶　切凧　懸凧　落凧　凧の骨　凧の尾
凧の絲

季題解説　凧は兒童の玩具にして、一に紙鳶といひ略して「いか」といふ。即ち昔は重に烏賊の形に作りしに由る。凧はもと漢の高祖陳豨を征せし時、韓信凧を作りて未央宮の遠近を量りしに始まれりといひ傳へらる。現今専ら正月に流行すれども、地方によりては三四月の交盛んに飛揚する風習あり。武者繪、月に兎などを描ける繪凧、龍「鳳等の文字をあらはせる字凧、畫を板刷りにしたる板木凧、形によりて奴凧、人形凧、鳶凧、小袖凧などいろ／＼の種類多し。絲の斷れたるを切れ凧、樹木に懸りたるを懸り凧、水田等に落ちたるを落ち凧など云ふ。参照 長崎紙鳶揚ナガサキハタアゲ

實作注意　凧は春季とする書多けれども、正月氣分の多きものなればこゝには正月の遊戯として編入したり。されば正月の初東風に飛翔するさまを表現するやう心掛くるをよしとす。地方によりては三月四月の交、又秋より冬にかけて揚ぐる所もあり、猶夏季に遊ぶ地方もあれど、正月のお年玉に貰ひ受けたる凧を兒童等の正月休みにあぐると見る方情趣豐かなるものあるべし。

例句

凧
絲つくる人と遊ぶや凧　嵐雪（玄峰集）
此夕べ軒端へたちぬいかのぼり　同（同）
虚空を引とゞめばやいかのぼり　同（同）

木の枝にしばしかゝるや凧　嵐雪（玄峰集）
おつしかや江戸をはなれぬ凧　其角（五元集拾遺）
白川の關に見返れいかのぼり　同（同）
落付のしれぬわかれや凧　丈草（丈草發句集）
絡も斯や遠山低し凧の糸　支考（蓮二吟集）
まな板や霞たなびくいかのぼり　同（同）
いかのぼりいつぞや絲をひかれしは　昨木（雜巾）
凧きのふの空のありどころ　蕪村（蕪村句集）
からくりの首尾のわるさよ凧　太祇（太祇句選）
山路きてむかふ城下や凧の數　同（同）
凧持て風尋るや御伽の衆　同（同）
落かゝる夕べの鐘やいかのぼり　同（同）
海士の子や舟の中より紙鳶　几董（井華集）
聰のそなた長閑にいかのぼり　同（同）
凧の尾の我家はなるゝうれしさよ　同（同）
舟にあげて舟ふりかはる凧　白雄（白雄句集）
凧空見てものはおもはざる　同（同）
里坊の兒やおはしていかのぼり　召波（春泥發句集）
暮かゝる空をかこつや凧　同（同）
朝東風に凧賣店を開きけり　同（同）
此糊のひるま過せよ紙鳶　同（同）
凧買て子心ぞ憂雨つゞき　同（同）
きれ凧に主なき須磨の夕べ哉　蓼太（蓼太句集）
きれ凧の夕越ゆくやまつち山　同（同）
見送るも糸は手にあり凧　也有（蘿葉集）
御所へ落てしかられにけり凧　同（同）
花よりも上を吹けとて凧　同（同）
凧きれてはかなき風の便哉　同（同）
凧かけてさびしき夜の杜かな　士朗（枇杷園句集）
反故凧のあたり拂て上りけり　一茶（七番日記）
朔日や一文凧も江戸の空　同（同）
山寺や翌剃る兒の凧　同（同）
すゝけ紙まゝ子の凧と知られけり　同（九番日記）
乞食子や歩行ながらの凧　同（一茶句帖）
凧あげてゆるりとしたる小村哉　同（一茶發句集）
夜は夜とて忘れぬ凧の置所　乙二（をのゝえ草稿）
蓬生や日暮れておろす凧の音　梅室（梅室家集）
高鳴りをして夜に入ぬかゝり凧　同（同）

春凧　嶺の雪揃りては上る凧の尾や　句佛（我は我）
色紙凧天に花咲地に子あり　笑種（□□巾）
佳吉の松に懸りし紙凧かな　壺孔（□唄句集）
人形凧　今っ列子絲わく重し人形たこ　尺草（江戸辨慶）
奴凧　奴凧おくれ上りて並びけり　八雲（昭和一萬句）
奴凧もんどり打つて風強し　青嵐（同）
青凧　鳶凧の中に無慙や貫ひ絲　淡々（淡々句集）
唐木凧　佛ぞ昔舞ふ昔板木凧　柄鶴（父の恩）
小袖凧　吹閉よ乙女の姿小袖たこ　友夕（江戸辨慶）
三河凧　紅に畫ける鶴や三河凧　射石（新春夏秋冬）

長崎紙鳶揚（ながさきのはたあげ）

【[illegible]】正月十日・十五日・二十日（新暦三月十日）、長崎にて紙鳶揚を行ふ。大さ六尺四方の凧に硝子屑を塗りたる絲をつけ、搦め合ひて勝負を決す。當日會場に酒肴を携へて□□する者多しといふ。【[illegible]】凧に

能始（のうはじめ）

舞臺始（ぶたいはじめ）　御能始（おのうはじめ）　初能（はつのう）

【[illegible]】能樂の舞臺始を能始、初能などゝいふ。翁・高砂を初番とするを例とす。【[illegible]】仕舞初シマヒハジメ

【[illegible]】
初能初
名聞の鶴見に待つや初の能　稻城（年刊俳句集）
能始見所淋しき翁の出　子翁（同）
鼓座のいかれる肩や能始　薫城（年刊俳句集）
初能の囃子もるゝや車寄　亮吉（同人）
袴着て雪掃く門や能初め　同（同）
能始鏡の如き舞臺かな　山葉（同）
御能初馬簡子素袍の謹之精　句佛（懸葵）

仕舞始（しまひはじめ）

舞初（まひぞめ）

【[illegible]】新年始めての仕舞を仕舞始、舞初といふ。【[illegible]】能初ノウ、舞初ソマヒ

【[illegible]】
仕舞初　扇よきを師匠に惜まぬ仕舞初　規魚子（昭和一萬句）
舞初　舞初や家に讓りの舞扇　綾石（落椿）
舞初す師の祝言を素囃子に　木母（懸葵）

初場所（はつばしよ）

一月場所（いちがつばしよ）　正月場所（しやうぐわつばしよ）　初春場所（はつはるばしよ）　初角力（はつずまふ）　春角力（はるずまふ）　新番付（しんばんづけ）

【[illegible]】毎年一月に興行する大相撲を初場所、一月場所と云ふ。もと東

京兩國回向院に小屋を設けて行ひたるもの、今は同所の國技館にて十一日間の大角力を行ふ。

一　台覽相撲（明治四十三年）　若月紫蘭

一月九日皇太子殿下國技館へ行啓、明治十七年以來久しぶりの台覽相撲で三段構への古式があると云ふので、古式の相撲が陪覽したさに、思ひ切つて始めてシルクハットと云ふものを買つた。たつた此間までは「シルクハットで電車は變だ」と云つて人を笑つて居たものが、いざとなつて見ると、矢ツ張護謨輪の車へ乘るのも馬鹿〳〵しいと云ふので、恥かしさうにして電車へ乘つた。電車の中でも平生の安帽子よりは何となく頭の釣合が變で、ともするとヒョコリ〳〵脱けさうになるのを、氣にしい〳〵時々かぶり直しては、やつとの思ひで國技館へ着いた。

着いた時は最う相撲は始まつて居つた。そして幕下のが半分許り濟んで居た。それから暫くすると、丁度二時に五分と前頃たつたらう、場外で、萬歳！萬歳！と云ふ聲が天に轟いた。やがて物の十分も經つて、平の石と書寫ケ嶽の呼出しがすんだと思ふと、台覽席の方が騒しくなつて、土俵の上へ「脱帽最敬禮」と書いた小さな幕が下つた。頭を擧げると東宮殿下が台覽席に玉顔美はしく立たせ給ふので有つた。

君が代の奏樂が終ると思ふと、一寸傾處を見て居る間に、梅と常陸とは既に土俵の眞中に向合つて立つて居る　之が上段の構へた。それから折烏帽子に素袍姿の行司が團扇を横にしてシーと云ふと同時に、常陸は左手を梅は右手を、共に前へ水平に延ばして指先を合はせる様にし、各一方の手を腰に支へる様にする。之が中段の構へである。行司は吉田追風である。之に次いで行司のシーと云ふ聲に應じて、前と同じだが、而も前より少し碎けた風にする　之が三段構への式と云ふのだ。後にて聞けば梅と常陸の二人が土俵へ上る前に吉田行司即いつもの呼出しが、土俵口即ち二字口に出て、「東―方東京の産常陸山谷右衛門」と名乘を擧げると、之に次いで西の方でも西―方越中の産梅ケ谷藤太郎と名乘をあげて、やがて二力士は土俵口で例のチリと云ふ挨拶をして、それから土俵の中へ進んだのたさうな　台覽席の方をチョイと仰ぎ見ると、寺内大將が殿下の御側に在つて頻りに何か御説明申しあげて居る。殿下と大將との間は僅か二尺ばかりしかない

それから又幕下の相撲が三つ四つ濟むと、チャン〳〵〳〵と、拍子木を合圖に樂隊につれて、東方の御前掛り土俵入りが始まる。之は普通の土俵入りと大差はない。之が濟むと西の方の土俵入りが有る。その間絶えず拍子木と樂隊とは同じ音を繰り返して居る。之に續いて、今度は常陸と梅との横綱方屋入りが有る。東と西と別々で有ることは勿論で有つて、これも平常のと何一つ變りはない。此の式が終ると同時に、拍子木と

樂隊の音が止んで、後は暫くしんとする。けれども靜かな間は極めて暫くで有つて、間もなく幕の内力士の勝負が始まる。處が此日の相撲は平常のと異つて、例の呼出のヒガアシー駒がターケーと云ふ様に、長く長く引張つた趣のある聲は聞かれぬ代りに、呼出は東西各一人宛、折烏帽子に素袍姿で西と東の各々の土俵口にしやがんで一揖して、東の方が「東の方大湊」と云ふと、西方は其聲を直に受けて「西の方上ケ汐」と、雙方共に極めて短かい餘韻のない聲でやる。そして東西更に一揖して後にさがつて行く。すると力士が土俵にて例の挨拶をやつて直ぐに土俵の眞中へ進む。そして平生とちがつて、一旦土俵に上つてからは、水も飲まねば鹽も撒かぬ。況んや不斷のマッタ〳〵をやで有る。で勝負と勝負との間は瞬く間で有つて、面白くもなければ趣きもない。處で、呼出がすんで兩方の力士が愈土俵の眞中に行つてしやがむと、行司はいゝ頃を見計つて「勝負ッ」と一聲高く呼ぶ。そして愈々勝負がついて了ふと、力士は雙方共土俵口に引下つてしやがんで居る。不斷ならば負け角力はさつさと行つて了ふのだが、儀式角撲ではさうは行かぬ、つまらなさうな顏をしてお附合をして居ると、その間に行司は力士溜りの後方にある造花の菊の花束を受取つて「東の方勝角力」と高く呼んで、くるりと其勝角力の方に直角に曲つて行つて、しやがんで其菊の花束を渡す。勝角力は之を受取つて、右手で花束を後へ廻して、行司が元の自分の位置に復してしやがむのを待つて、力士二人と行司とが互に一禮して一勝負が終るのである。そして勝角力はまた其儘歸つて行くことは出來ぬ。殘つて次の一勝負を見るのである。

なほ古式によると、勝角力が貰ふところの菊の造花二輪に添へた葵の花若しくは夕顏の花は、其實昔は角力が始め土俵に出る時に髷に結び附けたものださうなが、此日のは菊花と同時に渡すことにして有つた。通の語る所によると其他にも少からぬ遺式が有つた様だ。

それから三役になると又三役の土俵入のやうな儀式が有る。これは不斷の相撲でも、十日目には必ずやるので誰も知つて居る所であるが、今一つ平生と違つた所の有つたのは――實際は古式に則つたものではないかも知れぬと云ふことだが――三役になると呼出しの様子が頗る八ケ間敷なつて、三段構の時と同じく、藝名の前後に角力の生國と名前とをつけて呼んだ事である　即ち「東の方仙臺の産駒ケ嶽國力」「西の方高知の産國見山悅吉」と云ふ風に呼んだ事である。

やがて例によりて常陸と梅の引分相撲が終ると、間もなく樂隊が君が代を奏し始めた。そして殿下の御還啓についでシルクハットにうよ〳〵と動き始めた。(東京年中行事上卷)　〔[illegible]〕夏　夏場所(五月)　秋―相撲(秋)

例句

初場所　初場所の大番附や江戸の春　鳥堂（[illegible]春夏秋冬）

初場所　一月場所　正月場所　春場所

初場所の贔屓も故ゝぐさかな　へき生（ホトトギス）
初場所や贔屓と共に出で、関相撲　黒潮（年刊俳句集）
初場所も十日目黒つきまつたり　牛詰（同）
川風に一月場所の太鼓哉　五空（五空句集）
戀の意趣も正月場所の八景哉　同（同）
春場所やわたはる、江戸角力　同（同）
春場所を出て浅草へ向ふ風　南崖（ゆく春第一句集）
春場所も[illegible]中なる贔屓哉　冬葉（[illegible]）
春場所の番附讀みし朝湯かな　比呂樓（同　古鳥）
春場所の撥音包み吹雪哉　忽々洞（同）

初角力　春角力　初番附

千本の織亙てけり初角力　涼斗（同人）
梅一輪太鼓になりぬ大相撲　梓月（年刊俳句集）
小角力や初番附を一抱へ　左衛門（左衛門句集）

【參考】近世に於ける相撲の興行は、もと神社佛閣の建立の爲に相撲を催して淨財を集むるに出で、これを勸進相撲又は寄相撲と稱し、室町時代より行はれた。江戸時代に入つて寛永七年以後しばしば勸進相撲行はれ、諸方の社寺の境内で行はれたが、文政十年より毎年二回本所回向院境内を興行地とするに至つた。興行に先だつ約一ヶ月許り前、御免札を相撲場所と兩國橋際とに立てる。初日の前日にはもとは地取の式を行ひ、天神地祇及び相撲の祖當野・宿禰を祭つたが、今は方屋祭又は土俵祭と稱して初日取組の終つた後に行ふ例である。

初芝居（はつしばゐ）

初春狂言（はつはるきやうげん）　初曾我（はつそが）　春芝居（はるしばゐ）　芝居仕初（しばゐしぞめ）　二の替（にのかはり）

【古書校註】

【栞草】紀事　正月二日、四條河原（一）淨瑠璃歌舞妓等これを始むるを初芝居といふ。江戸堺町（二）大阪道頓堀等も亦しかり。

【年浪草】紀事に云、正月二日四條河原淨瑠璃歌舞妓等之を始む、是を初芝居と稱す。武江堺町、大阪道頓堀等も亦然り。凡そ年中節句祭宴神事の後日、其方士農工商竝人家の奴僕、此日を以て閑暇と爲して傲遊任意なり。此等多く此の芝居を築き見る。芝居は、古へ棧布（三）無く、四垣（四）も亦之無し。唯芝上に座して各々之を見る、依て芝居と稱す。和俗原野を謂て芝と曰ふ。棧布元禄東也、今誤て棧敷と寫す。雍州府志に曰く、歌舞妓元出雲大社の巫女に、久備（五）と號する者あり、神樂（六）を一轉して歌舞す。古へ白拍子（七）と稱するの類ひ、相比ふ乎。元祿年中、名護屋三左衛門（八）と云ふ者有り、元武人にして落魄して生きたり、京師に在るときに則ち彼女と密通し、共に謀りて歌舞妓の曲を作る。又猿若と稱するは、三左衛門、毎に赴く所の娼家に、奴隷の斗猿と云ふもの有り、形貌猿猴の如く、性魯

鈍にして人情に通ぜず、三左衞門常に之を玩ぶ。今世狂言を稱して猿若と云ふは之に始れり。遂に祇園社の南門に場を開きて之を催す、是れ歌舞妓の始也。玆より遊女の長、佐渡嶋（九）其の遊女妓者をして歌舞を教へ藝能を施さしむ。良賤集ひて誠に人心を詭し國を亂し、家を滅すの甚之に過ぐるなし、之に依て女藝を禁ず、寛文中又若衆歌舞妓を始む。云々。一說芝居の號は、南都興福寺の南門前に二月薪の能、草居より出ると。

〔いつまで暦〕元日翁渡しとて惣役者麻上下にて座付小供の戲狂言など有。江戸

註（一）四條河原　京都に在り。（二）武江堺町　今の日本橋區人形町の邊、寛永中猿若芝居此處に創まれり。（三）棧敷　さんじき、さじき。（四）四垣　四方の圍ゐ。（五）久國　出雲のお國、古き記錄に見ゆ。（六）神樂　神に獻ぐる舞樂。（七）白拍子　昔の遊女の舞の名、又其の遊女をも云ふ。鳥羽院の頃江島の千歳、和歌の前といふ二人の遊女之を始むと。或は云ふ通憲入道作りて磯の禪師に舞しむと、初は水干に立烏帽子、白鞘巻をさして舞しかば男舞といへり、後水干のみ用ゐたれば白拍子と稱するに至る。（八）名古屋三左衞門　初め山三郎と云、蒲生氏郷に仕ふ、後浪人して京坂に遊ぶ、其の行狀に就ては種々の說あり、甚しきは淀君に通じて秀頼を生ましむとす、後美作侯森忠政に仕へ、臣井戶野兵衞と鬭ひ克たずして死す。（九）佐渡嶋正吉　所作事の名人なり

季題解說　初芝居は新春の芝居興行を云ふ。昔は正月二日を初芝居と定めたれど、現今は元日より始むるもありて一定せず。劇場訂話に「正月元日仕初、二日三番叟あり、同十五日、此年の初日なり」などゝあり、十五日を初日とし、吉例として三番叟を舞ひ、狂言は必ず曾我物語を出す、故にこれを初曾我と名づけたり。〔參照〕芝居讀初（しばゐよみぞめ）春　二の替（かはり）冬　顏見世（かほみせ）

例句

初芝居

二柱其戀うつせ初芝居　心色（江戸舞臺）
鶯やまたこもりくの初芝居　信鳥（綠陰集）
初芝居團十郎の烏帽子哉　子規（子規全集）
初芝居見て來て晴着いまだ脫がず　同（同）
初芝居宗重代の大目玉　紫影（かきね草）
景事の七福神や初芝居　同（同）
病人ある氣がかりや初芝居　盧子（盧子句集）
眉描てほの〳〵なりぬ初芝居　青々（妻木）
初芝居當時獨行紅十郎　櫟面坊（[illegible]紫）
名門に恥塗隈も初芝居　放江（放江句集）
茶屋へ行くわたりの雪や初芝居　万太郎（道芝）
初芝居醉ひたるが居てわめきけり　鹿朗（大正俳句選）
大江戸や喧嘩が花の初芝居　秋皎（明治新俳句集）
初芝居ちら〳〵雪を戾りけり　芳月（年刊俳句集）
餅を燒く樂屋の人や初芝居　春醉（同）

初芝居

似顔繪の夫れも春めく初芝居　蓼静（年刊俳句集）
髪の香もよき幕合や初芝居　稻穗（同）
梵天に雪見て入りぬ初芝居　祖春（昭和模範句集）
初芝居閉ねたる音や雪の中　暮聲（同）
曉に雪をよびけり初芝居　來布（最新二萬句）
初芝居江島が情け今は佗　三允（同）
積物の五座や浪花の初芝居　春海（同）
土堤角見て虹の月嬉し初芝居　大我（大正新俳句）
初芝居の看板見居り懐手　村家（同）
初芝居團十郎の世なりけり　蘇南（蘇南遺吟）
初芝居島田と髷の間より　三千夫（現代俳句大觀）
初芝居愈々開くる太鼓かな　自然（同）
早や歸る見合ひ娘や初芝居　樂天（同）
初芝居廊下に出でゝ襟直す　山之（同）
乗りつけし茶屋の景氣や初芝居　綾華（ホトトギス）
和事師の役者老いたり初芝居　さくら女（同）
紋付を著たるおちやこや初芝居　雨聲（同）
成駒屋の親子三人初芝居　一央（同人俳句集）
迎[illegible]屯すや舊芝居　艸宇（古今模範句集）
初芝居諸藝の司源之丞　月兎（明治一萬句）
茶屋座敷古物語り初芝居　黑潮（懸葵）
序開きゝ曾我よと見るや初芝居　青蛾（同）
初芝居歩き疲れてゝ[illegible]にけり　水陽（同）
初芝居[illegible]郎椿の花　握月（同）
雪間に梅の素や初芝居　木兎（同）
市川の親二人や初芝居　静浪（同）

初曾我

初曾我や團十菊左左團小團　子規（子規全集）
初曾我や燈にひるがへる蝶千鳥　冬葉（故郷）
初曾我や酒たしなめる女達　香茶（現代俳句大觀）
初曾我に祇園こぞれる脂粉哉　露祗（同人俳句集）
初曾我や春は鼓の音に出て　秋皎（懸葵）

春芝居

春芝居わか左團次の役どころ　蕪子（昭和一萬句）
子は膝にいつか眠るや春芝居　靜心（昭和模範句集）

〔參考〕（初芝居）　昔は吉例として三番叟を舞ひ、寛永六年に山村座、中村座、市村座、森田座の四座で初狂言に曾我物を出して大當りを取つたので爾來初芝居には曾我物を演する慣例となつて明治の初に及んだ。かくて江戸で出來た曾我狂言は數百種にも及んだが優れた作品は少い。その中でも中心を爲して盛行したのは曾我兄弟が工藤祐經に對面する事を骨子とし

た所謂曾我の對面の狂言である。

【二の替】古今役者大全に「二の替りとて初狂言の次の春狂言を一年中の月あてのやうにして必らず行ふ事也必らず男情事をするは、都萬大夫座に初まる由あやめ草に見えたり。顔見世は一人一人我が得たる事をして見物への見え姿として二の替りを一座打ち混じて一くるめに花ある事をする事なれば、二の替は總役者立ちあひの大事なる故別して作者心を用ふべき事也。」

芝居讀初（しばゐよみぞめ）　翁渡し（おきなわたし）

季題解説 正月初旬、江戸劇場三座（守田・中村・市村）にて翁渡しと稱して三番叟を舞ふ、後ち座中の俳優一同麻裃にて舞臺に並び、座頭新春の賀詞を述べ、春狂言の名題・役割等を讀み千秋樂を謠ふことを芝居讀初といひ、又翁渡しともいふ。【參照】初芝居（新年）

例句

芝居讀初　近松も来てをる芝居讀初め　雨青（懸葵）
　着流しの輕く芝居の讀初め　園燊（同）
翁渡し　初空や翁渡しの朝日影　露沾（江戶辨慶）

初扇（はつあふぎ）

季題解説 年禮及び仕舞・謠曲等に出づる時、新年始めて扇を用ゐるを初扇といふ。【參照】扇子賣（センスウリ）、夏―扇（夏）

例句

初扇　月花の翁を舞ん初扇　讃多（寶曆九年歲旦帳）
　寝て起きて早七十や初扇　鶯池（鶯池句集）
　餅腹の袴ゆるめぬ初扇　撲天鵬（懸葵）

初鼓（はつつづみ）

季題解説 新年始めて鼓を打ちはやすを初鼓といふ。【參照】舞始（マヒハジメ）

例句

初鼓　細き指そらし構へぬ初鼓　房女（同人俳句集）
　紫の締緒古りたり初鼓　藤華（閑古鳥）
　金屏にゆらぐかざしや初鼓　蝠子（現代俳句大觀）
　よく眠る兎起きよ初鼓　輪水（同）
　初鼓春色うごくこれよりぞ　平地木（同）
　初鼓師老いまして平袴　珠女（昭和一萬句）
　初鼓ゆかしときゝつ門過ぐる　蕪州（年刊俳句集）
　襖越しに其人見たり初鼓　霞水（同）

小さき手に魂打込みつ初鼓　緑呼（同人）

初鼓我もぽと〳〵打ちにけり　皆春（同）

初烏帽子（はつゑぼし）

【季題解説】 新年の神事・及び仕舞・舞踊・演劇等に、始めて烏帽子を被るを初烏帽子といふ。

【例句】 初烏帽子

初えぼしかざりの床やむら烏　玉尺（虚栗）

初席（はつせき）　語り初（かたりぞめ）

【季題解説】 新年早々に開催する講談・落語・萬歳・義太夫・浪花節等の寄席開きを初席といひ、芸人の高座にのぼりて口演するを語り初めといふ。【[illegible]】

初咄

【例句】 語り初

堀川や御社めでたく語り初　宋斤（昭和一萬句）

初席の小さんいさゝか醉ひゐたり　沈生（懸葵）

吉原遊女年禮（よしはらいうぢよねんれい）

二日着（ふつかぎ）　三日着（みつかぎ）　跡着　吉原遊女二日禮（よしはらいうぢよふつかれい）

【季題解説】 二日。東都歳事記に「今日より茶屋々々へ年禮にとて仲の町へ出る、家々嘉例により仕着小袖を調へ禿に至るまで一様の新衣を着して往來す、これを世諺に道中といふ。三日よりは跡着と名づけて、銘々物好の衣裳にて出る。其行粧筆紙に盡しがたし。」とあり、京の祇園、島原にても茶屋茶屋へ年禮廻りをすることあり。

（青樓年中行事）に「二日は傾城の年禮とて、初衣裳の綺羅をかざり、仲の町を勤むるを道中といふ事は、江戸町より京町の間をあゆむの事なるべし。又駒下駄を履く事は角町菱屋の

抱帯はじめて見るはきしより、おしなべて今に用ゆ。されど松葉屋に限りては此日草履をはいず事、往昔よりの古例にして、家々の格式銘々の狩好、繻のうちかけ芳ばしく、紫綾の袂は禿の手に抱へ持たる羽子板と倶に光り、遊女の艶なるは少妓の袖に捧げたる人形と等しく美し。此日禮者の上下は、若屋に入て皺を延ばし、素見物の小倉帯は大道に立つて埃をかづく。云々」とあり。

例句

吉原遊女二日禮
　道中や小さき禿も春小袖　魯牛（懸　葵）

二日着
　二日着や国に寵ある命也　青々（妻　木）
　二日着の裾かゝげゆく禿かな　柿赤（年刊俳句集）
　二日着の走り書きなる揚屋紙　同（同　）

三日着
　二日着や何大盡の物好み　羊我（懸　葵）
　宋玉は三日着ほめて去にけり　青々（妻　木）

飾夜具（かざりやぐ）

積夜具（つみやぐ）

季題解説 新年、東京吉原・洲崎・品川等の遊廓にて、馴染客より遊女に贈れる新調の夜具を、樓の店頭に積み飾るをいふ。「青樓年中行事」に「夜具の敷初は、客の方より送りし儘を若亭に飾り、其妓を招きて飲酌を催し、祝儀を述ぶ。云々」とあり。

例句

飾夜具
　鶯よいでもの店の飾夜具　居龍（俳諧辭典）
　借銭の山も意氣地や飾夜具　十二星（鏤氷集）
　猿曳の猿と覗きぬ飾夜具　同（同　）
　積夜具や逢瀬せかるゝ顔かむり　同（同　）

肩三日（かたみつか）

季題解説 正月元日より三日まで、遊女の馴染客にのみ賣ることを肩三日といふ。肩は肩入れの義なるべし。

島原の初寄り（しまはらのはつより）

季題解説 正月九日　京都島原の廓にて太夫芸妓等盛装して検番に集まり新年の挨拶を交はす、これを初寄りといふ。現今絶えて行はれず、

例句

島原の初寄り
　初寄や不夜にゆかりの舞師匠　狐山（懸　葵）
　初寄や柳をくゞるしるし傘　同（同　）

寶恵駕（ほえかご）　戎籠（えびすかご）　補助駕

【季題解説】一月十日、大阪南地の藝妓、舞妓等十日戎に参詣のとき乗る駕をいふ。この時は駕衣裳とて特に新調した晴れ着をまとひ、駕の中には友禅の坐蒲団を厚く敷き重ね、駕籠の上より毛氈又は紅白の縮緬にて飾り、ホエカゴ、ホエカゴと掛聲をなしつゝ進む。駕先には幇間太鼓持、揃ひ衣裳の片肌ぬぎにて、扇をかざし勇しく練りゆくさま艶麗を極む。又北の新地の藝妓は、この寶恵駕にて二十五日の初天神に参詣す。浪速情緒の一なり。（→十日戎）

【例句】

寶恵籠

寶恵籠の梅にまことの吹雪哉　青々（壬申句鈔）
巨燵出て寶恵籠に乗るうき身哉　虚明（最新一萬句）
寶恵籠や帯に挟みし紫金錠　素石（木虫句集）
寶恵籠やとりすがりゐる力綱　洛山人（昭和一萬句）
寶恵籠の一挺橋にかゝりけり　雁來紅（同）
寶恵籠の御守殿髪をちらと見し　燕佐志（同）
寶恵籠や片袖垂れてあでやかに　竹人（年刊俳句集）
寶恵籠の中より會釋美しき　白禾女（同）
寶恵籠や見て見ぬふりに籠の中　梅窓（同）
寶恵籠を下りて背高き妓かな　東一紅（懸葵）
寶恵籠のをしどりに結ぶ舞妓かな　櫻坡子（ホトトギス）
寶恵籠に追はれて橋をわたりけり　六村（同）
寶恵籠や我に歸りてたゞ淋し　多果枉（同）
寶恵籠の髷がつくりと下り立ちぬ　夜半（同）
寶恵籠やまた生きてゐる太鼓持　三四郎（同人俳句集）
眉剃りて寶恵籠の昔偲びけり　夏木洞（木虫句集）
寶恵籠に[illegible]簪ピンと挿されけり　静兒（現代俳句大觀）
寶恵籠にもまるゝ笑顔見せにけり　閑々子（同）
寶恵籠や一挺飛で雪白し　几湫（最新二萬句）

呼ばはりて道々行くや寶惠籠ほいなみえ（同　）
寶惠籠の蒲團は寶つくしかな　青羽（同　）
人の山寶惠籠一つ遅れけり　由水（大正新俳句）
戎祭　戎籠腰を落してなまめける　草城（ホトトギス）
福助籠　寶惠々々と福助籠や風を切り　素石（木虫句集）

祇園歌舞練場始業式　八阪女紅場始業式　歌舞始

【行事解説】一月十六日、京都祇園の歌舞練場にて祇園新地の盛裝したる藝妓舞妓は八阪女紅場生徒として始業式に臨み、役員來賓等定めの席につき、理事長の式辭、教務監督の訓辭などあり、精勤者には賞品を授與して式を終り、それより生徒は順次壇上の一角に設けられたる祭壇を拜し、つゞいて技藝にうつり習字・裁縫・挿花の選ばれたる數名はその下並を見せ、これについで小唄・淨瑠璃・寄澤・鳴物・地唄・清元・舞踊・長唄・常盤津など一通り代表生徒の演藝を行ふ。これを祇甲の始業式といふ。

【例句】
歌舞始　色町や今日を晴着の歌舞始　蘇泉（春蘭第二集）
松明けの雪に祇園の花競べ　同（同　）
歌舞練場始業式　襟脊へてけふとゝ交り始業式　羊我（懸葵）
姉顔の伊達の薄着や始業式　同（同　）
女紅場始業式　舞師匠老いぬ女紅場始業式　黑洲（同　）

毘沙門功德經　唱門師　夙の者

【古書校註】
【莱草】元日〔雜談抄〕古老傳へ云、往古は元朝寅の時に、犬神人（一）、禁裏日花門（二）の外に參り、毘沙門經の文句を訓讀し、唱へて祝の義をなせり、故に此者の黨類を呼て唱文師と稱す、又元日毎に夙に候する故、夙の者と號す。夙の字音志久、世訛てしゆくと云、夙と宿と音近き故か、民家へも元朝未明に門へ來りて毘沙門經を訓讀せしこと中古迄侍りし也、當世絶て沙汰なし。
【毘沙門天功德經】毘沙門に奉仕せんと欲せは、毎月元三日、身を清め新衣を著し、東北方に向ひ、毘沙門の名號を稱念すれば、大福德を得、決定疑ひ無し、云々
【新式】毘沙門功德經といふは、町かたの陰陽師とも肩衣袴にて、びしやもんの像を治めにありき、家々にかうしやう（三）にことごとしくとなふる也。始は釋氏の道（四）にわかく後はめで度事を云たつる也。
註（一）犬神人　犬神といふは犬の精を使ふ方術なり、いづなつかひの類にて四國九州にありといふ、飢ゑたる犬を繋ぎて食物を見せ頸に之を食せむとする時、急に其頭を切れば、

首せよ（て食を嗜む）を、器に入れ一閉すと云ふ、犬神を持ちたる者は、良民嫌ひて婚を通ぜずと、犬神人亦此の徒歟か。（二）日花門（じつくわもん） 内裡の門、中門ともいふ、月花門に對す。（三）かうしやう 高聲。（四）[illegible]

【季題解説】 元日 陰陽師の徒、山城國愛宕山毘沙門天の紙符と若夷の札を携へ、經文などを誦しつゝ京洛中を賣り歩きしものを、毘沙門功徳經といふ。讀む經文の名をそのまゝ、その名稱としたるものなり。また滑稽雜談に「古老傳へて云、往昔は元朝賀の時に犬神人（弦召）、禁裡日華門の外に來て、毘沙門經の文句を讀誦になへて祝する儀をなせり。故に此の者を黨類を呼て唱門師と稱す。又、元日毎に風に從する散風の者と號す。風の字音、志久。世俗誤りて志由久と云ふ。風と宿と音近き故なるべし。民家へも元朝門にまいりて毘沙門經とて讀誦せし事、中古より侍りし也 當世絶て沙汰なきことなり。尤彼經は國家を守護し人民を擁育する功力侍るよし也 委は彼の經を評すべし」とあり。毘沙門天功徳經には「毘沙門に奉仕せんと欲する者は毎月の三日に身を清くし、淨衣を著して東北方に向つて毘沙門の名號を稱念する者は、その福徳を得ること疑ひなしと云々」とあり。

【例句】

毘沙門功徳經
身も沙門御座れ毘沙門けふの春　日如（麿筑波）
毘沙門を頼みこころや功徳經　三幹竹（懸葵）

唱門師
唱門師の賤しき影や日華門　同（同）

萬歳（まんざい）

千秋萬歳（せんずまんざい） 千壽萬歳（せんずまんざい） 萬歳樂（まんざいらく） 御萬歳（おまんざい） 門萬歳（かどまんざい） 大和萬歳（やまとまんざい） 三河萬歳（みかはまんざい） 德若（とくわか） 鶴太夫（つるだいふ）

【古書校註】

【山之井】 萬歳樂見物歡樂（一）のまねかとといへり、花鳥餘情に有り。

【栞草】 紀事 大和國、窪田・箸尾の兩村に、千壽萬歳兩座あり。太夫（二）所司（三）の庭に來て鼓舞す、窪田、箸尾の兩村より出、南都西南に有り。相去ること三里ばかり、此内兩流あり、則窪田、箸尾是也。窪田太夫、箸尾太夫、左都右都に准じてこれを稱す。

【年浪草】 （四）千壽萬歳、正月五日禁裏木堂始まる、此の日千壽萬歳並に猿舞、東の御庭に來ると云々、是れ季吟云、千壽は猿廻しとも又千壽萬歳は萬歳樂にて、前漢の倫會の學といへる也 凡そ京師猿を舞す者六人有り。倭俗狙公を猿まはしと謂ふ。此外妄に猿を使ふこと能はず、又伏見に六人有り。

【いつまで暦】 千壽萬歳、萬歳樂 これは大和窪田箸尾（五）の兩村より出る上方を廻る萬歳也。五日禁裡へ來るを千壽萬歳といふ、〇一條院の御宇、大江の定基、三河守

に住し、其民に佛教傳來の因緣を敎へて舞しむ。これ三河萬歳の始なりとぞ。

【年浪草】是も千壽萬歳にて、千壽を略して云にや、○岷江入楚に曰、昔正月十四、十五日、京中の散所より參じてあなたこなた歌ひ舞しより、末代に千秋萬歳と云て進興を催す事あるは是れ其餘風也云々千壽萬歳大和の外にも有けるにや。○御湯殿記に云、元龜三年正月五日、北畠のせんずまんざい三人參。云々、北畠とは指南抄に、一條より北その門三町なりといへり。然れば都の内にも有けるにや。今萬歳と稱するは、烏帽子素袍を着し、鼓を打ち、早歌を唱ふもの也。又三河國に一派あり　或說に大江定基、博學大才にして佛道にもうとからぬ人にて、正月の祝も、日出度事はふりたりとて、我知行所の百姓に敎へ、佛法東漸の歌をうたはせ、春の始より世事を忘るゝ媒とせり、今の世にひろまりし三河萬歳是也。云々

【いつまで暦】御萬歳、大江の定基、三河守に任ぜられて、其國の民とも春ことに千歳萬歳樂と舞かなでけるを、定基は橫川源信の法をうけて佛者なれば、佛敎傳來を文句に作りて、庄司吉郎太夫にあたふ。今の三河別所村より出る萬歳其跡也　長門萬歳　太夫廰上下大小、才蔵うちかけ姿にて步行く、是を夫婦萬歳と云ふ。

註（一）男踏歌　女踏歌の條を看よ　（二）太夫たいふ　能狂言其他伎藝の者、其他遊女の頭なるもの〻稱、元と宮中に召さる〻時、位なければ入る事を得ず、因て假に五位に准せられしを因襲して稱せしに起ると云ふ。（三）所詞　室町時代に於ける侍所の詞なれども此處には單に役所を云ふ　（四）原文此處に一書の說を引く、栞草と重複するを以て略せり。（五）着尾とあるは箸尾の誤。

季題解說　萬歳は千秋萬歳の略。萬歳樂又は御萬歳とも云ふ　その起源については諸說あれども一般に中古宮中に行はれたる正月十四日の男踏歌に田樂の風を加味せるものと云ひ、一條院の長德の頃三河に赴任しゐる大江定基により佛敎的となり、尾張長母寺の開山無住國師によりて廣く傳播せられ、大和萬歳、三河萬歳などの稱あり。

中古は法師によつて行はれ、中世は部落民に移り、室町時代には正月、禁中又は幕府へも召されしといふ。今の萬歳は松の内に來り、太夫は風折烏帽子に素袍を着、脇師の才藏は定裝なきも、大黑頭巾を被るを普通とし、太夫は扇、才藏は鼓を打つ。戸毎をめぐり步きて一種の節付面白き賀詞をのべて立舞をなし、米錢を乞ふ。關東にては多く尾張三河地方より出づ、これを三河萬歳と云ひ、又京

阪地方には大和の窪田・箸尾の兩村より出で來る、これを大和萬歳といふ。鶴太夫は萬歳の太夫の略稱、才藏は多く上總下總地方より江戸に來り、三河萬歳等集りて市を成して備ひ定め、萬歳に連れ歩くもの。侍烏帽子、或は大黑頭巾を被りてヲチャッケを勤む。

德川氏發祥の地たる三河は萬歳の本場となりて、年毎に領主より國郡村萬歳何某太夫、各年始御祝儀の爲め出府御往還御關所相違なく御通し給はるべく云々といふ如き文言の通行手形を與へられ、途中にて才藏を雇ひて江戸に出でたるものにて、その本國たる岡崎城にては每年碧海郡別所村の者これを勤むるを例とし、正月元日未明、折烏帽子、[illegible]く裝ひ兩刀を帶し、從者の才藏亦同樣の裝束にて[illegible]、城門の下にて[illegible]「戸ざさぬ御代のあけ[illegible]」鼓に和して萬歳[illegible]おかしく[illegible]へば、門卒は「若やぎ聲をのばす海老[illegible]」といひて門を開き、それより[illegible]に入りて萬歳樂を舞ふといふ。

考證　萬歳は所謂三河萬歳、大和萬歳、[illegible]なるも[illegible]なれば、多くの人の知るところなる近頃寄席等に興行する所謂萬歳とは、全く別個のものなれば、誤りて混同するべからず。［參照］才藏

例句

萬歳

萬歳や左右にひらいて松の陰　去來（去來發句集）
きのふ見し萬歳に逢ふや嵯峨の町　蕪村（自筆句帳）
萬歳の踏かためてや京の土　同（落日庵句集）
萬歳のふまへし姿やわたし船　太祇（太祇句選）
萬歳や舞おさめたるしたり顔　同（同）
萬歳やめしのふきたつ竈の前　同（同）
萬歳の頤ながき旦かな　白雄（白雄句集）
萬歳や変八橋に醉てゆく　蓼太（蓼太句集）
萬歳や波も鼓もうたぬ世に　也有（蘿葉集）
萬歳やさればこれはの春の女　素葉（素葉句集）
萬歳やもどりは老のはづかしく　千代女（千代尼句集）
萬歳よも一つはやせ春の雪　一茶（享和句帖）
萬歳が留主の妻子や飯時分　乙二（をのゝえ草稿）
萬歳や跡の太夫は色白き　梅室（梅室家集）
萬歳のうしろ見かけぬ知恩院　蒼虬（蒼虬翁句集）
萬歳や使者の間ふさぐ女子供　一江（寶晋齋引付）
萬歳や顔形に似ぬ拍子取　寒玉（同）
萬歳や山姥つれて山廻り　枳風（同）
萬歳の舞ひ納めたる眞顔哉　玉珂（玉珂句集）
萬歳は今も烏帽子ぞ都鳥　子規（子規全集）
萬歳に見つけられたり草の庵　同（同）

萬歳や古き千代田の門柱　鳴雪（鳴雪俳句集）
からかひに鼓とられて小萬歳　同（同）
萬歳を其夜とめたる長者振　四明（四明句集）
萬歳や皺面白き古代顔　紫影（かきね草）
上京や萬歳はいる寺の門　碧梧桐（新俳句）
萬歳の子も萬歳の十二歳　虚子（虚子句集）
萬歳や大和の梅に別れ來る　青々（妻木）
萬歳や烏帽子の下の鬢の霜　五空（五空句集）
萬歳の鼓繕ふ苧縄かな　守水老（守水老遺稿）
萬歳やまかり出たる三河貌　駒村（枯檜庵句集）
源八や萬歳も來る僧も來る　露石（春夏秋冬）
萬歳や金春を出て烏森　秋竹（同）
萬歳や窪田箸尾の鼓振り　夏風（續春夏秋冬）
萬歳や引立て冠る古烏帽子　炳魚（ホトトギス）
舟で來る萬歳はやせ童共　苗兒（同人俳句集）
萬歳の廣袖に紅見ゆるなり　八重櫻（明治一萬句）
萬歳や幾日都の日和下駄　碧童（同）
萬歳はいつもの通り鶴太夫　秀彦（同）
閑院に若狹萬歳召されけり　未央（同）
萬歳のさこも久しき太夫哉　柳家（懸葵）
萬歳や泊りの朝に鼓うつ　捍月（同）
萬歳の衣紋猿曳誹る哉　小蛄（最新二萬句）
梶が許若狹萬歳訪づるゝ　象外（同）
萬歳も猿曳も居る渡し哉　露葉（明治俳句）
萬歳の袋輕しや足拍子　波靜（同）
萬歳の足跡殘る庭の雪　愚哉（同）
萬歳や御門くゞりて一ト囃子　無聲（昭和一萬句）
萬歳の烏帽子古りけり何代目　鱗洲（同）
萬歳の素袍古びて候ひける　無黃（現代俳句大觀）
萬歳の袖くはへたる小狗かな　潯陽（明治新俳句集）
素袍着た萬歳やあな昔顔　月兎（同）
萬歳や扇開いて軒づたひ　坤者（年刊俳句集）
萬歳の袖の先なる扇かな　淺水（同）
朝戸出に宿の切火やお萬歳　零雨（寒吟集）
萬歳や隅田の小家の訪れ顔　徂春（昭和模範句集）
萬歳や水戸加賀薩摩陸奥の守　鶯池（鶯池句集）
萬歳の宿に居る日を御降れり　芹涯（懸葵）
萬歳の舞ふ程もなう去りにけり　朵南子（同）

例句

萬歳扇

松に日の出ゐがく萬歳扇かな　素山（懸葵）
丸盆にのせて萬歳扇かな　冬葉（同）

獅子舞（しゝまひ）　太神樂（だいかぐら）　竈祓ひ（かまはらひ）　竈注連（かましめ）

季題解説　新年、獅子頭を被りて家々に來り、惡魔を祓ふと稱して、笛・太鼓・鉦などにて囃しつゝ舞ひ歩くものを獅子舞と云ひ、太神樂とも云ふ。伊勢の太神樂とは別種のものにして、道化、滑稽の餘興を演ず。その服裝、昔は淨衣、烏帽子・白括袴姿なりしが、近年は羽織裁着などの姿に變化したり。又、家々に獅子舞の入り來るのを竈祓といひ、縁喜をよろこぶ風習あり。

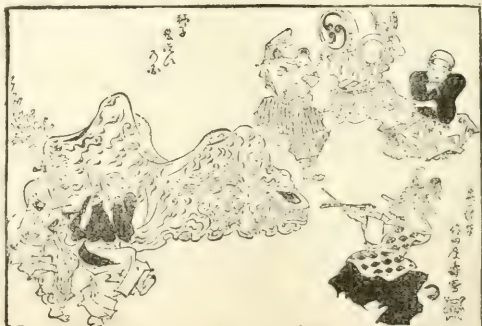
例句

獅子舞

獅子舞の二つ反り打ち土間の中　温亭（温亭句集）
子のあれば祝ひて獅子を舞はせけり　梨葉（梨葉句集）
結ひたての髪を喰ひけり獅子頭　庭後（江戸庵句集）
獅子舞や獅子をはづせば囃子方　秋翠（虚子選雜詠選集）
獅子舞の口大いさに見ゆる顏　漂舟（ホトトギス）
あやに振る鈴や御幣や神樂獅子　月倚（同）
山中温泉
鷺の湯を舞獅子の顏覗きけり　誓子（同）
角兵衛獅子鷄の如くに吹かれ來る　あい女（同）
獅子舞や笛の少年戸に凭れ　鷄二（同）
獅子舞のすり鉦入れてきほひけり　蕪子（塔）
舞獅子の鼻にたばしる霰かな　孤山（年鑑俳句集）
獅子頭笛の音澄めば眠りけり　蕙子（同）
ぬき渡る瀬田長橋や獅子頭　蘇南（現代俳句大觀）
獅子舞の獅子に富士晴日ざし哉　稗人（同）
獅子舞のをさめて歸る刀かな　雨青（懸葵）

太神樂

雪晴れし都大路や太神樂　魯牛（同）
それはそも伊勢の御札か太神樂　天眞（同）

竈祓ひ　笛太鼓竈祓ひに囃しけり　杏子（[illegible]）

【參考】起原は未詳ではあるが要するに舞樂より出たのであらう。陳氏樂書に、唐大平樂、「謂二之五方獅子舞一」云々の句がある。更らに白氏文集西涼伎の詩に、「假面胡人假二獅子一、刻レ木爲レ頭絲爲レ尾、金鍍眼青銀帖齒、奮迅毛衣擺二雙耳一、如下從二流沙一來萬里上、紫髯深目兩胡兒、鼓舞梁前致レ辭云」云々とも見える。後、田樂盛行してこれを學び一藝となし神事に之を奏した。又、職業的獅子舞の存在も古今著聞集・十訓抄・太平記などの諸書にみえる。

猿廻し（さるまはし）

猿舞師（さるまひし）　猿曳（さるひき）　狙公（そこう）　狙翁（そおう）　舞猿（まひざる）　太夫猿（たいふざる）

【古書校註】

【栞草】紀事「凡京師猿を舞すもの六人あり、倭俗狙公を猿まはしと云。又云猿牽、赤縄（一）を高貴の家に獻ず、或は猿を舞して厩の祓をなす。」云々是れ馬櫪神（バレキシン）といふ厩の神を祭るなり。

【本艸綱目】獼猴（二）を厩に繫ぎ、馬病を辟くるは之に據るか。

註（一）赤縄　故事に一婚姻の前定せるを赤縄足を繫くといふ、唐の韋固、月下の老に問ふ、囊中何物かあると、曰く、赤縄子、以て夫婦の足を繫く、讐敵の家、貴賤の異地、富貴懸隔すと雖も、この縄一たび繫けば、終に違るべからず」（二）獼猴（さる）也。

【季題解説】新年、猿を背負ひて家々に來り猿を舞はしめて米錢を乞ふものを猿廻し、猿曳とも云ふ。猿は馬の病を去るといひ、又は厄を去るといふ迷信より、昔は馬を飼ひ用ゐる武家に並に農家にては、猿曳を招きて一年の無恙を祈らしめたりといふ。

【實作注意】猿廻しは正月厄を去るといふ迷信より世間に喜び迎へられたるものなれば、當然正月限りのものなり。現時は猿曳渡世をして年中徘徊して人の門に立つやうなれども、句作の時は正月の意味を含めることを忘るべからず。他の季の時はその配合となるのみにて新年の季にあらず。

【例句】

猿廻し

三筋足る顔とも見えず猿廻し　也有（蘿葉集）

暮門の外焼飯袖に猿廻し　同（同）

猿引

猿樂に入らであはれや猿廻し　巴静（類題集）
鞭取て左短し猿まはし　蓼太（三傑集）
美しき妹をもてり猿廻し　子規（子規全集）
物思へば猿よりやせて猿廻し　鳴雪（鳴雪俳句集）
猿廻し綱渡りなど書院にて　四明（四明句集）
猿廻し猿の機嫌をそこねけり　井村（春夏秋冬）
兩國を越えてお江戸や猿廻し　庭後（江戸庵句集）
三浦屋の暖簾くゞりぬ猿廻し　十二星（[illegible]氷集）
關守に手形見せけり猿廻し　北渚（最新二萬句）
古市やおこんに見とれ猿廻し　江南（明治一萬句）
美しき娘つれけり猿廻し　梨月（明治新俳句集）
正月や伊勢路をかせぐ猿廻し　樂南（同）
源八を渡りて來り猿廻し　燕里（年刊俳句集）
猿廻しよき俗唄ひ老いにけり　三幹竹（懸葵）
猿廻し戸毎に猿をおろし行く　句佛（我は我）
猿引の村へ來たるよ呼子鳥　召波（春泥發句集）
猿曳も月やほしがる戻り道　也有（蘿葉集）
猿曳を親猿と思ふ夜もあらん　子規（子規全集）
猿引や若君抱きしお乳の人　同（同）
猿曳の猿して人を怖しけり　青々（妻木）
家々に猿曳過ぎぬ垣の梅　同（同）
狙引やこの年月を我子とも　五空（五空句集）
猿曳の都かせぎや松の内　椿堂（春夏秋冬）
猿曳の來てめでたさよ草の庵　行[illegible]（ホトトギス）
猿曳や旅を重ねて膳所の宿　水棹（青嵐）
猿曳や大路片側を風の中　東洋城（大正新俳句）
猿曳や猿にも分つ握り飯　北涯（俳人北涯）
猿曳の後ろ晴れたり富士筑波　百花庵（百花叢遺稿）
猿曳や染屋が店の舞處　象外（日本俳句鈔）
猿曳の猿より人の哀れなり　竹湍（明治俳句）
猿曳の手に錢を吐く小猿かな　碧童（明治一萬句）
猿引や梅白くして鼻赤し　八重櫻（同）
猿曳やめでたかりける門の雪　暘谷（年刊俳句集）
猿曳や猿の扇をわすれ草　駒村（枯檜庵句集）
其猿と猿曳似たり似たるかな　緑浦（殘紅）
猿曳や赤き鬘を梅に掛く　雙兎（雙兎句集）
猿曳の留守はいづこに誰がする　南葉（辛未句鈔）
猿曳の醉ひ寢る[illegible]や猿の入る　同樂（稲の香）

猿引

猿引の猿と年よる日南哉　龍雨（龍雨俳句集）
猿曳や旅に果つ身の哀れなる　壽美子（懸　葵）
又平が宿に猿曳はいりけり　小姑（同　）
猿曳の賤しき宿も都かな　三幹竹（同　）
猿曳は萬歳よりも小ざかしき　句佛（我は我）

猿舞師

猿舞師正月無しの町過ぎる　華梧（紅潮集）

狙公

狙公引飢すれば小狙忡々たり　十框（十框句集）

太夫猿

烏帽子を正しもあへず太夫猿　翠雲（かりがね）

舞猿

舞猿や唄の心の扇ぶり　五空（五空句集）
舞猿をほうりこまれぬ小店先　蝶衣（蝶衣句稿）
舞猿は蒼海の浪を恐れけり　月因（同人俳句集）
さかしらに耳打をする舞猿よ　六祿（同　）
舞猿や褶にかくれて狆吠ゆる　放江（放江句集）
舞猿や獅子の面きに厄拂　月村（明治一萬句）
舞猿の慮外や御簾を覗きけり　松濤樓（新春夏秋冬）
年々や猿に着せたる猿の面　芭蕉（篇　草）
君が代は猿も烏帽子に羽織哉　茂與（新類題集）
聞わけて猿も舞かやそゞろ唄　梅室（梅室家集）
妻猿の舞はですねたる一日哉　鳴雪（鳴雪俳句集）
親猿の赤い頭巾や叱られし　虛子（虛子句集）
春殿や狙にも年の纏頭もの　鶯池（鶯池句集）
猿見れば舞する顏でなかりけり　八重櫻（續春夏秋冬）
二人猿もつこどつこに舞ひにけり　二星（同　）
猿の舞朝三暮四の手振かな　句佛（昨非集）
おろされて顋腭おかしや猿の顏　同（同　）
舞猿にとらする錢も寶哉　三幹竹（懸　葵）

參考　厩に猿を飼ふ事は印度にも支那にもある。それで馬の病氣を防ぐ爲に、猿曳が正月に厩の祓をする。

懸想文賣（けさうぶみうり）

懸想文（けさうぶみ）　化粧文（けさうぶみ）

古書校註

【新式】　懸想文といふは、元日寅の刻より町を賣ー通る也。赤きはかまに立えぼしにてありく也。是に錢をあたへつれば、女の縁の日出たく有べしといふ事を祝につくりしゆくして洗米（一）をあたへかへる也。今はたへてその事なければ、かゝる事としらず。あるひは戀のふみのやうに覺へたる人も有ゆへに口傳をこゝにしるし侍、されば一句は戀に成べし、皆未嫁女のために陰陽師の祝をあくるなり、此祝の文言多くそのとしの内にめで度

えんあるべき事をよむ(二)なれば、ヲモヒヲカクルモンを書てけさうぶみとよみたる也。誠には文事にあらずと知べし。

【栞草】 鷺水云ふ、赤き袴立烏帽子にてありく也。錢を與へつれば、女の緣の日出たく有べしといふことを、つくり祝して洗米をあたへ、歸る也。今は絕て其事なければ戀の文のやうに覺えたる人も有故に、口傳をこゝにしるしはべる。

【年浪草】 紀事に曰く、淸水の弦指、赤き布衣を著け、白布を以て頭面を覆ひ、纔に兩眼を露はして紙符を市中に賣る、是を懸想文と謂ふ。云々。其來由詳ならず、唯嫁娶を祈るが故に、懸想文と謂ふ乎。

【いつまで暦】 元日寅の刻より赤き袴に立烏帽子にて町を賣て步行也。これに錢をあたゆれば女のゑんの日出度有べしと云ことを祝に作り、洗米をあたへ歸る也。今絕へて其事なければ戀の文のやうに覺えたれどさにあらず。まだ嫁せざる女子の、其年のうちには日出度緣有べきことをよむなれば想を懸る文ゝといふまでにて、まことの文にはあらざるとしるべし。

註 (一) 洗米(せんまい) 洗ひよね、神事に用ゆ。(二) 女子の結婚難の現時に初まりしにあらざるを見るべし。

參考解說　懸想文の名は想文祈下所ニ懸念一之事上と云ふ意にて、後世の懸想愛着の意にあらず。卽ち緣談、商賣繁昌等すべて人の欲する慾望を叶へる符札賣を云ふ。寬文の頃、京都松原弓矢町に住する犬神人より出でたるもの、延寶の頃には侍烏帽子、小袖、袴の姿、天和には立烏帽子、素袍、袴の姿となり、後世には立烏帽子に紅梅の素袍若くは布衣、覆面、藁脛巾、草鞋等の扮裝にて、梅の枝に文箱を吊るし、或は文を吊し、或は文包を頸に掛けたるもありて、艷書の體裁に擬したる結び文を賣り步きしもの。近年は京都の風俗研究會の會員有志によつて復興され新年の街頭に見ることあり。これは元日より十五日まで行はれ、この懸想文を婦女の鏡臺、簞笥などに納めおけば福德ありといふ。昔の文は杉原紙に靑摺の柳と梅の地紋に蝶鳥の赤紐の文樣などあり、風雅なる意匠を凝らしたるものなり。

懸想文の一例を擧ぐれば

梓弓はるたちくれば花鳥のいとなれ〳〵しくもしめしまゐらす、誠や去年に見し四方山のけはひも今はうち解けて岸のひたひに靑柳の

打たれかみのかほるさへ、またなうなつかしきに、谷の戸出る鶯の聲のあやさへをりはへて、千代の友とし語らふを、など聞捨てにはし給ふらむと、しかめる顔も打忘れ、野邊の若菜と諸共に、もゆる思ひを絲ゆふの、いとあはれにもおぼしなば、東風ふくことの便りには、ひと目もはやう色香よき、花の下紐とき給はんことをねぎまゐらせ候、かしく。

春風に柳のまゆはひらけども
いつしかゑまん花のくちびる

ふきのとうの中將より

む月けふ

ひく手あまたの姫松の君へまゐる

といふ如きものなり。

【作句注意】 懸想文は多く艶書の體に擬したるもの多ければ戀の意味を含むものなり、その心持を内に藏して作句すれば匂ひゆたかなるものとなるべし。

【例句】

懸想文賣

懸想文賣そもじの顏の吉なりと　四明（四明句集）
懸想文賣るや錦の袋より　同（同）
格子から暖簾から懸想文賣招ぐ　同（同）
懸想文賣花見小路を曲りゆく　壽美平（青雲抄）
紅閨の目尻をかしや懸想文　魏象（最新二萬句）
靜かなる祇園の靄や懸想文　漁荘（明治一萬句）
懸想文美しき聲遠まさる　露石（同）
懸想文に祝はれて居る女かな　碧童（同）
門に居て折からの春や懸想文　蓍森（葵）
懸想文これへと梅の折戸哉　東洋城（同）
懸想文白梅園子のとある門　羊我（同）

懸想文

けさう文樂て婿せぬ御代ぞかし　重之（大三物）
鶺鴒は昔々の化粧文　蓼太（三傑）
懸想文睦月けふとぞ書かれたり　銀臺（松のそなた）
拾ひ來て笑ひ初けり化粧文　如琴（靈袋）
鶯の音もなし梅の懸想文　子規（子規全集）
薄墨のたよりなき色や懸想文　鬼城（鬼城句集）
懸想文舞ふ子に戀のありやなし　徂春（昭和一萬句）
懸想文なげのなげさのいとはかな　鶯池（鶯池句集）
茶杜の朝の縁起や懸想文　偲堂（最新二萬句）
認めたるを人に見られぬ懸想文　忍月（同）
女孺たちや燈火さゞめく懸想文　田士英（同）
梅が香に心ゆく夜や懸想文　北涯（俳人北涯）

大黒舞（だいこくまひ）

古書校註 【栞草】悲田寺垣外の類大黒天の姿を摸し面をかぶり頭巾を着て民間の門々を唄ひ舞ふ、年々嘉祝の詞を以て新作して唄ふ故に此唱歌をも大黒舞と云ふ。江戸にては大黒舞と云は新吉原町に限れり、これも非人のたぐひにて狂言物眞似をするなり。

季題解說 元日、京阪の賤民、大黒天の姿を摸し、假面、頭巾を着て、張拔の槌を持ち大黒天の數へ歌うたひ舞うて、門々に錢を乞ひ步くを大黒舞といふ。又江戸吉原にては正月三日より二月初午の頃まで種々の物眞似などして舞をなし、錢を乞ひ步きたりと、今は市井にその跡を絕つ。〔一四〕若夷（わかえびす）

例句

大黒舞

初春の大黒まひは大黒か　舟軒（姿かな）

はやし人の分別らしや大黒舞　白雅（新類題發句集）

春もけふ大黒舞の米ふたつ　武仲（同）

誰が家に入るや今年の福の神　野明（類題發句集）

大黒舞さすお女は連れざりけり　吏登（俳諧歲事記）

參考 藤凉軒日錄文正元年の條に「彼知客、平日好二大黒舞一」とある。湯津長者物語に「大黒打ち出で、かゝるめでたき御座敷に何かいなび申さん、はやし給へや舞はんとてゆさ〳〵と立ちあがり、それがしが能には一に俵を足に蹈み、二ににこと打笑ひ、三に酒を造らせ、四つ世の中守りて、五ついつもの機嫌にて、六つ無病息災に、七つ何事なくして、八つ屋敷を廣めて、九つ小倉を建てならべ、十でちらと納まれりと舞ひ納め、本の座敷に直り給ふ。」

鹿島（かしま）の事觸（ことぶれ）

季題解說 元日より三日間。古へは常陸國鹿島神宮の禰宜のうちに、卜部の家あまたありて、年中の吉凶を卜ひて朝廷に奏聞せしといふ。江戸時代には鹿島より神官の裝ひしたるもの出でゝ、背に幣束を負ひて步き、其年の豐凶の神託をいひ、何くれの虛言などを諸國に觸れ知らし廻りたる者を、鹿島事觸（ことぶれ）

の事觸、或は事觸と云ふ。後には各地にて呪咀禁厭を事とする者、事觸れと稱して人を集むる手段となせり。これらは皆賤しき乞食の類ひなりしが現今は絶えて見ることとなし。

例句

鹿島の事觸

晩稻よき鹿島のふれも嚀かな　蝶衣（蝶衣句稿）
有難や鹿島の觸も神の告げ　鱶洲（昭和一萬句）
事觸をまことしやかや宮奴　同（懸葵）
事觸のそれも鹿島の神たのみ　三幹竹（同　）

參考

陰曆正月、茨城縣（常陸國）鹿島郡鹿島町宮中、官幣大社鹿島神宮の御神託なりと稱して、年中の吉凶を全國に觸れ歩くを、鹿島の事觸と稱す、此の事に掌る者は鹿島に住む乞食若くは香具師の類にして、多く農家を廻りて「これやこなたへ御免なれ、鹿島の神の御託宣でおじやり申す」と唱へつゝ、作物の豐凶を事觸れたり。農家にては深く之を信じ、豐年と告ぐれば餅を搗きて赤飯を炊き、酒を酌みて祝ひ、凶年といへば家每に儉約し、一層耕耘を勵みて之に備ふと云ふ。

鹿島の事觸は、往昔、鹿島神宮の禰宜に、卜部の者數多ありて、正月四日に占祭の神事を行ひ、年中の吉凶を朝廷に奏聞せりと傳へらるゝに依れば、後世その卜法廢絶せるにも係はらず、之に假託せる民間行事として發生せしものならん。而して之を掌る者も、古くは裝束を着け、烏帽子を被りて、神官らしく裝へども、後には衣を着流し扇を持ち頭を覆ひ、軒別に米錢を乞ひ歩くに至れりと云ふ。又、此の事觸の舞ふ踊を「鹿島踊」或は「大小見ん踊」等と稱し、大小見んとは、事觸が月の大小又は種蒔の時節などのことを言ひて踊るに依りて號くと云はれたれば、吉凶の卜のみならず年中の曆をも唱へし事を窺知し得べし。此行事は早くより廢れて今は全く無し。（山本）

若夷（わかえびす）

季題解說

【栞草】紀事、京師街頭に鞍馬毘沙門天の紙符幷に若惠美須等の福神の簡を賣る、四民これをかひ門戶に貼し或は歳德棚に供し元日是を拜し福を祈り祚をもとむ。南都（一）の市中每年吉野より來りて守り福神の札を賣る、二日の曉又毘沙門天を迎ふべしとていひて毘沙門天の札を賣る。三日の曉又惠比須を迎ふべしといふ、猶京師にて元日の曉天に若惠比須の札を賣がごとし。夷廻はこれ傀儡師を云、津の國西の宮に跡を垂給ふ夷三郞殿、歳の始に衆生に笑ひをしいさませて富貴を守らんとの託宣にて昔より西宮より春の始には都を始め方々傀儡まはして勸むる也、この傀儡師を夷かきとも云、驚水も夷廻と云へり。又京大坂にて大黑舞の類にて、夷三郞殿の姿をまな

び鯛を釣てみさいなと囃すもあれどこれは悲田寺(二)或は四ケ所の垣外(三)の賤しき者の業也。

【山之井】 若夷　元朝に寶ありくを買をさめていはひまつり侍り。

註 (一)古都　奈良　(二)悲田寺、悲田院、王朝時代、孤兒、病者を養ふ所にして施薬院の別所なり。(三)垣外(かいと)悲田院垣外の徒の意なりといふ、仍て非人は悲人なりとの説もあり、要するに乞食非人の類なり。

季題解説 元日、江戸時代に京畿、方にて紙札に福神(恵比壽神)の像を畫きたるを、市中の家々に賣り歩くもの、諸人これを門戸に貼りて福を祈り祚を素めたりといふ。[參照]大黒舞(ダイコクマイ)　傀儡師(クグツシ)

例句

若夷　しはのなき紙にうつすや若ゑびす　正直(犬子集)
めでたさをけさもてくるや若夷　重頼(狗猧)
門松や今朝早々の若戎　松序(寶晋齋引付)
繪を見ればいつも淳朴や若戎　休計(浪花置火燵)
世の業や髪はあれども若夷　山峰(續猿蓑)
歸り花さけば廿日も若惠比壽　也有(蘿葉集)
人麻呂に鯛もあれかし若惠比壽　巣兆(曾波可理)

夷賣　諸聲や今朝鶯と夷賣　愼笑(大三物書入)

春駒(はるごま)　春駒舞(はるごままひ)　春駒萬歳(はるごままんざい)

出典及註

【山之井】 是まざいらく(一)にて舞もの也。

[栞草][故事要言]云、年の始に馬を作りて頭にいたゞき、歌ひ舞ふもの、これを春駒と名づけて都鄙ともに有り、是は禁中にて正月七日に白馬を御覽のこと(二)有り、是を下にうけてし侍るにや。

【いつまで暦】 白馬の節會を童のまねてすることゝいへり。

註 (一)萬歳樂　舞樂の曲の名、唐の武后の作といふ。(二)これ白馬の節會なり、別項參看

季題解説 新春、馬の首の形を作り、頭に戴きて、歌ひ舞ふ一種の乞丐を春駒といふ。享保の頃には、馬の首の人形を持ちし男、三味線、太鼓に合せて來り、後世は若衆姿に馬の人形を持ち來り、少女に頬冠りさせ馬の人形を持たせ、三味線、太鼓の調べに合せ來りたる門付を云ふ。春駒舞又は春駒萬歳ともいへり。

例句

春駒

春駒や男顔なるおゝなの子　太祇（太祇句選）
春駒やよい子育し小屋の者　同（同）
春駒や若衆をつくる玉くしげ　嘯山（葎亭句集）
春駒や胡弓の絲のより心　同（新選）
春駒をほめぬ人なき目顔哉　青々（妻木）
春駒や己が宿より舞ふて出づ　同（同）
春駒や願ひ一捨て唄ふたび過ぐ　素石（同）
春駒や白く塗りたる狐顔　同（同）
春駒や美人もすなる物貰ひ　鳴雪（鳴雪俳句集）
摩耶詣連を競の春駒の唄　櫻磯子（同門の草）
春駒や三吉といふよい子にて　橡面坊（同山柴）
春駒や江を渡り來て美男村　八重樓（續春夏秋冬）
春駒や味方但馬の盛り節　金龜子（同）
春駒の雪板踏みて我が家にも　濱人（ホトトギス）
春駒や連錢葦毛鮮かに　董絲（同）
春駒の唄まねはやす童かな　嵐翠（閑古鳥）
春駒の黄金の鈴ぞひゞくなる　梓月（同）
春駒の鈴をならして來りけり　苔雲水（明治新俳句集）
春駒や衣裝も同じ親子連　碧童（同治・爲句）
春駒や三味の囃子のあちら向　月兎（同）
春駒や局々の笑ひ聲　比羅夫（俳星）
春駒に美人二人や挑み貌　居月（最新二萬句）
春駒によき唄うたへお乳の人　芳坊（同）
春駒や紅裏かへす高からげ　翠竹（同）
春駒や短く着たし絹脚袢　素茗（懸葵）

參考　馬の形を作りて頭に戴き歌ひ來る新年の門附は、元來馬を見るを吉兆とするに基づく。その歌詞「やんらめでたや、春駒なんどは夢に見てさへよいとや申す」云々とて、終に養蠶の豐産なるを祝ふは、馬を蠶神とする俗信に依る。

舞々（まひまひ）

季題解説　鹿島の事觸に似たるもの。嬉遊笑覽に「美濃國にて舞まひと稱するものあり、百姓の內なれども部を異にす。此者歲末に來りて、守札やうの物を人家の門々にさして廻る。是を小兒の正月さしといふは春に近づく印の意なり。さて春になりて、又來りて、この度は月の大小種蒔等のことを云ひて、米錢を貰ふ。舞々は唯名のみにて、彼事觸に似たるものにや。

帯刀して來るとぞ、萬歳などのかくなりしにや。」とあり。

鳥追（とりおひ）

古書校註

【栞草】「雍州府志」乞丐（一）の人元日より十五日に至り、笠を着白巾（シロテヌグヒ）を以て面を覆ひ、手をたゝき祝語（二）をとなへ、門戸によりて米錢を乞ふ、是を敲（タヽキ）の與次郎と號す、又鳥追と稱す、もと民間田疇（三）の鳥を追ひはらふ辭よりいづるもの也。今東都にては俗に女太夫と唱ふるもの編笠を着、三絃をひきうたひて錢をこふ。

註（一）乞丐きつがひ乞食、かたゐ、ものもらひ、こじき。（二）祝詞、めでたきことば。（三）田疇 田地、また其あぜ。

季題解說 正月元日より十五日まで、乞丐人、笠を被り白巾にて面を覆ひ、手を敲き祝詞を唱へ、門々に立ちて米錢を乞ふもの、これを鳥追ひと云ふ。これは田疇の鳥を追ひ、豐作なることを祈るより起りしものなり。東都にては女太夫と稱する門付、編笠を着け、三絃を彈き唄ひて錢を乞ふものをいふ。

［參照］敲の與二郎（タヽキノヨジラウ）

例句

鳥追の門をぬひ行聲長し　馬光（馬光句集）
鳥返は笠著て來たり女也　蒼狐（古今句鑑）
鳥追や夕日に下る九段坂　子規（子規全集）
鳥追のあとから笑ふ雀哉　同（同）
鳥追や柳の軒端梅の門　鳴雪（鳴雪俳句集）
鳥追の笠傾けて爪を見る　同（同）
鳥追はふるき梨園の弟子哉　青々（妻木）
鳥追は竹の徑をめぐり來る　同（同）
廣重の繪に鳥追の名殘かな　松宇（松宇家集）
今の世は鳥追もなき乞食哉　虚子（虚子句集）
鳥追や早たそがれの袖の雪　炎天（年刊俳句集）
鳥追や奴の醉をやりすごし　圭岳（同）
鳥追の一人は消えし行燈かな　踏花（ホトトギス）
鳥追や續く二人の美しく　和香子（俳星）
鳥追は都戀しき姿かな　旭山（ゆく春第一句集）
鳥追や紅い太き笠の紐　同樂（稻の香）
夕月に鳥追戻る小梅かな　冬草（現代俳句大觀）
鳥追や今戸を出でゝ雪催ひ　水馬（昭和一萬句）

鳥追

鳥追やはやりすたりの江戸小唄　花因（同）
鳥追に隔たり浮きぬ渡し舟　零餘子（現代俳句大觀）
鳥追や憚り潜る凧の絲　瓦全（年刊俳句集）
小原女と鳥追と袖すりかはす　眉月（最新二萬句）
鳥追の笠をおさへし柳かな　唐村（同）
鳥追の宿は堤の小家かな　一葛（同）
梅柳鳥追の笠のそかるゝ　握月（懸葵）

雜俎參考　もと田樂の所作中鳥追より出で、田畝の害鳥を攘ふ祝言を唱へて、諸家を廻つたものである。後には三味線を彈きて來る門附けとなつた。鳥追の詞「やんらめでたや、やんら樂しや、千町萬町の鳥追が參りて、福の神を祝ひ籠め、しらげもよんに洗ふ、ましらげもよんに洗ふ、よに洗ふが定には福と德が參りて、宿借らうと申す。宿借り候へば、殿も榮へ候よなう、町も榮え候ふ（下略）」。

やあら〳〵

季題解説　嬉遊笑覽に「（長崎歳時記）にやあら〳〵と云ふものあり、厄拂に非ず、正月中非人ども二三人一組とし、餝りしたるあみ笠を着、家々門に立ち歌をうたふ。俗これをやあら〳〵と云。やあら〳〵は歎ごとの發語なりとあり、鳥追の類なるべし。」（中略）「西鶴（大かゞみ）やあらめでたや鶴は千年龜は萬年、東方朔は九千歳と、年こしの夜の厄拂ひが高聲、老の浪立しきねの舟の春に近づくをおどろき云々、貞享のはじめも今もかはることなし」といふ。　**參照**　鳥追オヒ

例句
やあら〳〵の色編笠をそろへけり　鶯竹里（懸葵）

傀儡師（くわいらいし）

夷廻し（えびすまはし）　夷かき（えびすかき）　木偶廻し（でくまはし）　くゞつ廻し　山猫（やまねこ）　傀儡女（くゞつめ）

古書校註
【栞草】攝州西の宮より出る夷廻のことなり、若夷の條あはせ見るべし。
【年浪草】事物紀原に曰く、傀儡は漢の高祖平城に圍まれし時、陳平が計を以て、木を以て美人を爲りて城上に立、冒頓閼氏を詐り、後人比に因て傀儡を爲ると云。○列子には周の穆王の時、偃師といへる巧人あり、木偶人を爲りて樂しむ。王盛姬と共に觀たまふに、舞終て木偶人瞬目して手を以て王の左右を招く、王疑怒て偃師を殺さむとす、よつて木偶人を壞して漆膠を以てからくりたるを見せ、其疑をとくいへり、傀儡は夷廻なり、其名異る故再び出すにや。○於芥抄、嘉祿四年百首寄傀儡戀、
大井川岸のとまやの竹柱うかりしふしやかぎりなりけん（爲家）
烏丸資慶卿記し玉ふは、傀儡は淀江口その在所也、是は手くつなれども一

夜つまうかれめなど遊君をよみ來るとのたまへり、作者可心得にや。

【新式】傀儡師（でくゞつ　にびすまはし）。

季題解説 傀儡師は頸より人形箱を掛け、種々の人形を出して舞はしめたる物貰ひの一種にして、時には山猫の人形を出し、又ひそかに陽物の人形を賣ることもありたりといふ。夷廻し、夷かき、或は山猫とも稱す。江戸時代には主として、攝津西宮の夷社の駕輿丁より出でたるものにて、始めは夷子の鯛釣りのさまを見せたるも、後に漸次他の人形を用ゐるに至りしものなりといふ。西宮の末社に百太夫祠あり、傀儡師の祖を祭るといふ。**参照** 若夷（ワカエビス）

例句 傀儡師

馬に出る子を待つ門や傀儡師　其角（五元集）
傀儡師阿波の鳴戸を小歌哉　同（同）
節に成る古き詠や傀儡師　太祇（太祇句選）
一芝居歩行くや傀儡師　嘯山（葎亭句集）
おづ／＼にでく呼れけり夫の留主　同（同）
紫の上もめしけり傀儡師　蓼太（三傑）
傀儡師しの田の森に入にけり　梅室（梅室家集）
その箱のうちのぞかせよ傀儡師　子規（子規全集）
傀儡師梅の花道歩み來る　同（同）
乙女子が日影短し傀儡師　鳴雪（鳴雪俳句集）
名所の松めで居れば傀儡師　露月（露月句集）
人形まだ生きて動かず傀儡師　虚子（虚子句集）
あて人の妬な買ひそ女人形　青々（妻木）
傀儡師佛ばかりを出しにけり　五空（五空句集）
女多き聚樂御所や傀儡師　四明（四明句集）
傀儡師日暮れて歸る羅生門　古白（古白遺稿）
傀儡師鬼も出さず去にゝけり　鬼城（鬼城句集）
あやまりて鬼を出しけり傀儡師　井村（續春夏秋冬）
鳥追を追ふ子戻りね傀儡師　小酒（同）
傀儡や男をみなの二せりふ　居二郎（ホトトギス）
はじめより姫の嘆きの傀儡かな　市夕（同）
傀儡の頭がくりと一休　青畝（同）
でく箱にかけて憩へりでく廻し　數十（同）

傀儡師

口軽も摂津訛や傀儡師　双葉（年刊俳句集）
鬼も佛もちらつく雪の傀儡師　徂春（昭和模範句集）
神崎の遊女見ていぬ傀儡師　月兎（明治一萬句）
浪のうつ灘の濱邊や傀儡師　月村（同）
傀儡師梶原殿の門前に　五丈原（同）
なつかしき古き小唄よ傀儡師　荒井蛙（最新二萬句）
傀儡師方士の帽を冠りけり　翠竹（同）
淨瑠璃の節も淡路の傀儡師　霽月（同）
隣から聲ひき來たり傀儡師　嵐翠（青嵐）
なげかひの情ほのかなる傀儡かな　活東（年鑑俳句集）
打榮えし淺黄頭巾や傀儡師　松宇（松宇家集）
眉長によき古顔や傀儡師　素石（木虫句集）
はかなさや使ひ切らせし傀儡の綱　樂堂（新春夏秋冬）
傀儡や手ずれの袖の綾錦　秋櫻子（昭和一萬句）

夷廻し

正月や足たしぬ神も舞出る　青與（新類題發句集）

參考　樂屋圖會拾遺に「往昔西の宮浦暴風にて不漁なりし時百大夫といふ人木偶を作り蛭子の神の前にて舞はしめ神慮を慰め奉りしより波靜かに漁獲多くありしを時の帝きこしめされ御感なゝめならず大日本諸藝首に勅許ありきとぞ。それより胸に箱をかけ諸國諸神社を巡り人形を以つて神々をいさめ淡路の國に至りてみまかれり。時に四人の弟子ありて諸國に操座を起す。中にも名高きは淡路の上村日向椽なり」とある、しかしこの緣起は、もとより附會であらう。

ちよろ　ちよろけん

季題解説　ちよろけんは長老君の轉訛ならん。江戸時代の中期には張子の福祿壽を冠り、三味太鼓の囃子につれ、唐團扇を手にして踊り歩きたれども、末期には帽子を冠りたる鬚の張抜きを冠り、手にさゝらを磨り、他の者は額を描きたる袋を冠りでん〳〵太鼓をうちつゝ米錢を乞ひ歩きたるものなり。近時は絶えてその姿を見ることとなし。

例句　ちよろ

早口にちよろの呟く戸口かな　之水（現代俳句大觀）
大ちよろの眉の太さに動く雲　華峰（大正新俳句）

ちよろけん

ちよろ覗く注連の蔭なる女客　宜秋（同）
長松と栗田のちよろに怖ぢて泣く　冬史庵（同）
頭から手を出すちよろや辻の風　夜濤（懸葵）
人垣に一文ちよろの踊りけり　同（同）
ちよろと乘る大山崎の渡しかな　煤蓑（同）
ちよろけんや倚降る雪の大通り　子角（同人）
ちよろけんの崩るゝやうに來りけり　之水（同）

徳助お福（とくすけおふく）

季題解說　徳川時代の中葉頃、正月に京都の市中にて徳助お福といひ、二人連れ立ちたるもの、一人は麻裃をつけ、他はお多福面を被り赤前垂をかけて女裝し、家々を廻り歩きて祝詞を誦し施しを乞ひたるものなり。

例句　徳助お福

門松を出入る徳助お福かな　船伏山（懸葵）

物吉（ものよし）

季題解說　古へ、正月の町々に來りし門附の一種にして、背には黑く張りたる籠を負ひ、黑衣にて覆面し、「ものよし〳〵」と大呼しつゝ家々を廻り施しを乞ひしもの。この物吉はある一部の人に限られたるものなりしといふ。

參照　鳥追（とりおひ）　敲の與二郎（たゝきのよじらう）

物吉

物吉も來るや都の吉方より　王幹竹（懸葵）

狐舞（きつねまひ）

稻荷山の白狐（いなりやまのしらぎつね）

季題解說　古へ、正月に京都市中に來たりし門附の一種にして、狐の面を被り、「福の神のお見舞」と呼ばはりつゝ町内を巡りしものなり。又稻荷山の白狐ともいふ。

例句　稻荷山白狐

白狐汝は稻荷の事觸れか　王幹竹（懸葵）

面被り（めんかぶり）

季題解說　正月、信州飯田地方にて、萬歲・猿曳の類面を被りてその地の舊家

に來り、鎌倉治世の事を筋おかしく、節つけして謠ひ舞ひたるものを面被りといふ。

例句

面被り　謠ひ囃す中に實あり面被り　三幹竹　（懸葵）

敲の與二郎（たゝきよじらう）

たゝき

季題解說　萬治・寛文の頃より、京都の悲田院に住する與二郎と稱する乞食、笠を着、白巾を被りて顏を覆ひ、手を敲きつゝ祝語を歌うて錢を乞ひ歩きたるものこれを敲與二郎又は敲きと云ふ。後世、鳥追ひと變じたる正月の門附の一種なり。參照　鳥追

例句

敲の與二郎　夕くれの京を敲の與次郎哉　竹涼　（俳句大觀）

敲き　加茂川を越して敲きの來りけり　三幹竹　（懸葵）

正月や敲き出て來る悲田院　同　（同）

かせとり

季題解說　正月十四日。陸前・陸中地方にて十四日の夕方、小き折敷型の上に形代にて田を耕す形をつくり、これをば蓑を着、腰に鳴子をつけ、杖をつけたる小兒等が群をなして持ち廻り、家々の門に立ちて「春の始にかせとり參れり」といふ、家人出でゝ「何れの方向より」と問へば、「あきの方より」と答ふ。又この小兒等の群、途にて出會ひ、雌なりやと問ひ、雄と答ふれば闘雞の狀をなし、又雄なりやと問ひ、雌と答ふれば「さらば卵を渡す」とて貰ひ來りし餅などを渡す風習あり。これを「かせとり」といふ。

例句

かせとり　コヽと呼びてかせとり來るや雪の門　蒼梧　（懸葵）

かせとりの腰の鳴子を鳴らしけり　冬葉　（同）

掃込め（はきこめ）

季題解說　新年に來る一種の乞丐にして節季候に似たるもの、一組の人數五人以上にして、太鼓を打ち割竹を敲き、一人は草箒にむかで小判を付けたるものを音急はしく、「サアサ、掃込め〳〵、大判小判で掃込めナ」と囃し立てて、家々の門に立ちて米錢を乞ひ歩きたるものを掃込めといふ。

【例句】　掃込め

掃こめや鷄嫁に飛びあがり　　蒼梧（懸葵）

寢積む（いねつむ）

いねを積む　　寢擧る（いねあぐる）　　いねを起す

古書校註

【栞草】寢と稻と和訓同じき故に祝詞とするか、積も擧も又稻の縁語なり。雜談抄に云、寢臥と常のごとく唱ふるは病床などにまぎらはしければばかくいふ也。涙をながすを米こぼすと云に同じ。

【山之井】正月の寢起をいへり。

【いつまで暦】ともに正月の寐起をいふ。

【新式】三ケ日の間人の寐起をいふなり。寐の字を書て和訓イヌル・イネル・イネテなどとよめば、イネを稻にとりなしたる也。ツム・アグルは稻の詞なり。

季題解説　元日寢に就くことを寢積むといふ。寢と稻と和訓同じき故に、寢といふ詞を忌み、稻の縁語にて寢る事をつむ、起る事をあぐるとし、又一說には三ケ日の寢起なりともいふ。

例句

寢積む

よき雨や枕もあけず稻積まむ　　風蘿（新類題發句集）
かしこげに稻積む作の油斷哉　　步簫（同）
稻積むや惠方の方へ枕せん　　朝竹（類題發句集）
神々に燈を捧げゝりいね積まむ　　蝶衣（懸葵第一句集）
庭松に月も宿れりいね積まむ　　同（懸葵）
年棚の下避けて稻つみにけり　　同（蝶衣句稿）
いね積や夢ばし結ぶいとまなみ　　鶯池（鶯池句集）
寢積や或は聞ゆる風の音　　北涯（俳人北涯）
いねつむや袴ながらの高鼾　　松宇（松宇家集）
寢積や枕屏風の六歌仙　　鬼城（鬼城句集）
寢積や賣るにも惜しくたまりし書　　天浪（かりがね）
いね積や持佛に花をさして後　　素石（木虫句集）
綿雪にお逮夜つとめいね積まん　　雨圃子（俳星）
風月のうつゝ心にいねつみぬ　　青々（已巳句鈔）
いねつむや愚公移山の計成りて　　米仙（現代俳句大觀）
いねつむや南部繪暦讀み了せ　　鶯化（懸葵）
いねつむや梅が香こもる窓の中　　銀杏莊（同）

いねあぐる

いねあげよ明て秋の田かゝる世に　　鬼貫（七車）
鳳ふかな雞さへいねのあけにとて　　素外（古今句選）
いねあぐる去年の炬燵にしびれ哉　　青々（最新二萬句）
曙や神も妻籠のいねあげん　　蝶衣（蝶衣句稿）

俵重（たはらかさね）

季題解説 俵を重ぬ

新年禁忌の詞の一にして転び臥すことをいふ　〔参照〕寝積む

米こぼす（よね）

季題解説 若水あぐる

新年禁忌の詞なり、涙をこぼすといふを、米こぼす、或は若水あぐるといひ、また涙を米（ヨネ）といふ。〔参照〕泣初（ナキゾメ）

例句 米こぼす

長いきをしすぎて老の米こぼす　冬葉（懸葵）

お撫で物

季題解説

新年禁忌の詞の一にして、箒をお撫物といふ。〔参照〕掃初（ハキゾメ）

例句 お撫で物

日の匂ふ厨の柱やお撫で物　冬葉（懸葵）

采配（さいはい）

季題解説

新年禁忌の詞にして、拂塵を采配といふ　〔参照〕掃初（ハキゾメ）

例句 采配

采配と改まりたる二日かな　沈生（懸葵）

髪長（かみなが）

季題解説

新年禁忌の詞の一、僧といふを忌みて髪長といふ

例句 髪長

髪長や四日を待ちて禮廻り　雨青（懸葵）

髪長のひとりまじるや夕渡し　冬葉（同）

あかあせ

季題解説

新年禁忌の詞なり、血といふを忌みてあかあせといふ。

しほたれる

季題解説

新年禁忌の詞にして、濡れるといふを忌みて、しほたれるといふ。

例句 しほたれる

しほたれの衣かけたる衣桁かな　玉鉾（鯛祭）

雪雫蘭粂の葉末のしほたるゝ　蒼梧（懸葵）

餅ほこらす

季題解説　新年禁忌の詞なり。燒くといふを忌みてほこらすといひ、餅燒くを、餅ほこらすといふ。 參照　左義長

例句
餅ほこらす　齒固の餅をほこらし祝ひけり　琅玕（蠶葵）
老も出て餅ほこらすやさぎつ長　天眞（同）

歡樂（くわんらく）　御歡樂

季題解説　新年禁忌の詞なり。病といふを忌みて歡樂といふ。玉かつまに「東鑑云。承元二年正月十一日云々、依將軍家御歡樂延及今日。今の世にも、年のはじめには病と云ふ事をいみて、御歡樂と云ふならはしのこれり」とあり。

例句
歡樂　歡樂や枕のうへの酒一壺　雨靑（蠶葵）
御歡樂　御歡樂內宴の儀もなかりけり　天眞（同）

くる〱

季題解説　鰤の腸をくる〱と云ふ正月の忌詞なり。親元日記、寛正六年乙酉正月十日の條に、「齋藤越中入道雁二來々一折云々、鰤の腸を不來々々と云て正月用ゆ、名詮あしきによりて中頃より來々と書たり」とあり。

椒酒（せうしゆ）　椒柏酒　藥酒　椒觴　椒盃　椒盤

古書校註
【栞草】　荊楚歲事記　元日椒柏酒（一）を進む。椒（二）は是玉衡星の精也。これを服すれば人をして身輕くよく走らしむ、柏（三）はこれ仙藥也。
風土記　元日長幼こと〴〵く衣冠を正し、次を以て拜賀椒酒を進む、桃湯（四）及び柏葉酒（五）を飮む。椒觴・椒盃・椒盤みな椒を進め酒を飮の器也。
【新式】　椒柏酒とはさんせうと柏とを酒に入て呑ば年災を拂ふと。

註　（一）椒柏酒　山椒と柏とを用ゐて製したる酒、椒酒。（二）椒　さんしやう。（三）柏　かしは。（四）桃湯　元日去年實りし桃の實の核を湯に入れて呑むもの、邪氣を祓ふといふ、桃仁湯。（五）柏葉酒　柏酒　邪氣を拂ふと云ふ一種の酒、元旦に用ゆ。

季題解説　支那の古俗。山椒及び柏葉のほかに藥品を調合して製したるを椒酒、又は椒柏酒といふ。元日これを飮めば、老をしりぞけ、齡を延ぶるといふ　又藥酒とも稱す　椒觴・椒盃・椒盤はその酒を盛る器物の名なり。

例句
椒酒　日の匂へ小瓶に椒酒花むかし　白雄（白雄句集）

椒柏酒　これよりは千年の春に椒柏酒　政次（類題集）
藥酒　藥酒や東方よりの春霞　俊了（[illegible]）
椒盃　椒盃に天壽を祈り傾けぬ　三幹竹（懸葵）

如願　令如願（れいじよぐわん）

典據故事

【山之井】もろこしにある商人、清湖君（一）に如願といふ女を乞得たり。彼商人ほしきものあれば、如願是を與へしに、元朝に如願遲く起出たりとて、商人追打ければ、糞壤（二）の中に逃入て其後見えずなりぬ。其故に後人元日にほそ繩に人形をかけて、糞の中になげこて、令如願といふ事をせり。事文

【栞草】歲時記　商人あり、清湖を過て清湖君に見ゆ、君、須むる所を問ふ、人有り教へて云、但如願を乞べしと、君之を許す、果して一婢を得たり。如願は即ち其名なり。商求むる所あれば悉く能くこれを致す。後正旦に如願晩く起るによりて商人これを撻つ、走りて糞壤の中に入て見えず。今の人正旦細繩を以て偶人（三）を繫ぎて糞掃の中に投げて令如願と云。五雜組　閩中（四）の俗、糞土を除かず、初五日に至て草にして野地に至て石を取て返て寶を得たりと云、則古人如願を喚ぶの意也。云々。

【いつまで艸】元日細き繩に付て木偶を糞中に投ずる事農家にあるよし。

註（一）清湖のほとりに棲む仙人。（二）糞壤　こえつぼ。（三）偶人　人形（にんぎやう）木偶。（四）支那の古き國名、今の福建省の邊。

季題解說　正月元日、支那にて行はれし古俗に、人々細繩にて偶人を作り、糞掃の中に投ずることあり。傳へ云、昔商人正明といふ者、彭澤湖にて婢女如願を得、如願怜悧にしてよく働き、商人の求むる所悉くこれを致しゝが、或る年の元日、如願の起き出づる事遲しとて商人これを打ちしに、如願糞中に走り入つて遂に還らず、後人如願を弔ふためこれをなすなりといふ

例句

如願　疾く起きて人形つくれる如願哉　鷺水（新類題集）
誰とても朝寢ゆるせよ如願の日　松堅（同　）

拜年（はいねん）

歲拜（さいはい）　歲銜（さいかん）　歲拜錢（さいはいせん）　德談（とくだん）　問安婢（もんあんぴ）

季題解說　臺灣・朝鮮・滿洲等に於ける年賀を拜年といふ。歲銜とは年賀に用ひる自筆の名刺、歲拜錢とは拜年の少年少女に與ふる年玉、德談とは道にて親しき人々に會ひし際に交す年賀の詞、問安婢とは、元日女中に化粧させて先方へ年賀を述べさせるをいふなり。

例句

拜年　拜年や扉をひらく不老門　雨青（懸葵）

拜年に來る滿洲の武官かな　同（同）

春飯　過年飯　隔年飯　長年飯　飯春花　春花

【季題解說】臺灣にて、歲旦には春飯と稱する山盛の飯を神佛の前及び已の部屋の卓上に供ふ。之をまた過年飯・隔年飯・或は長年飯ともいふ。またその春飯の上に挿す造花を飯春花、或は春花と稱す。なほ、春飯は除夜に焚きて作り、元旦より五日までの間は、毎日その中の幾分づゝを他の米に混ぜて炊ぎ食ふといふ。

【例句】
春飯　春飯のおかれてあるや髑髏棚　雨青（懸葵）

春錢　過年錢　春仔　隔年錢

【季題解說】春錢とは、臺灣にて弘法錢を緡に通して、新年の節の卓上に、春飯の兩側に二行に供ふるをいふ。近年は弘法錢等の古錢は得難きを以て、銅貨をこれに代ふ。

【例句】
春錢　春錢に古句玉の交りけり　冬葉（懸葵）
春錢や五彩の絲の末長に　蒼梧（同）
春錢や家に傳へて弓火銃　雨青（同）

利年　出行

【季題解說】臺灣にて、元旦にこの年の吉方を卜することあり。これを利年といふ。又方向を定めて後、早朝その方向へ歩む眞似をするを出行といふ。

【例句】
利年　ゆうかりに月ありあけの利年かな　冬葉（懸葵）

桃符　桃板　桃梗　仙木　神荼　鬱壘　燈綵

【古書校註】

【山之井】是はもろこしのならはしに、桃の木の札に神荼・鬱壘の、二神の形を繪に書て、元日に門にたて、凶鬼を防ぐ業し侍り、これを桃符とも桃梗とも桃板・仙木などもいへり。

【栞草】淮南子　羿、桃棓に死す、許愼が注に云、棓は大杖也。桃を以てこれをつくる、以て羿をうち殺す。これによりて以來鬼桃を畏る、今の人桃梗を以て杙を作り、歲旦に門に植て鬼を辟る、これによつて此の故也。
六帖　元日桃符を造り、戶に着く、これを仙木と云、百鬼の畏るゝ所也。
風俗通　東海度朔山に桃樹有、屈盤こと三千里、其卑き枝東北にむかふ。

鬼門と云ふ、二の神あり、神荼・鬱壘と云ふ。衆鬼出入、執て以て虎に飼ふ、こゝにおゐて黄帝法てこれに象り、桃板を門戸の上に立つ。

【新式】これは重にもゝの木のいたに、神荼・鬱壘の二神をかきて、元日に門に立て凶鬼をふせぐとなり、群談採餘に有り

季題解説 元日。支那の古俗に、畫雞を戸に貼し、葦索を懸け、その傍に桃の杖にて符を作りて挿む。この符は百鬼の最も恐るゝ所といふ。淮南子に、「羿桃棓に死す、許慎注、棓は大杖なり、桃を以て之を爲くる、以て羿を撃殺す、是に由て以來鬼桃を畏る、今人桃梗を以て杙を作り、歳旦門に植て、以て鬼を辟くるは此に由れり。」とあり。桃符・桃板・桃梗・仙木等といふ。神荼、鬱壘は「風俗通」に曰く、「東海度朔山に桃樹あり、盤屈三千里、其卑枝東北に向ふを鬼門といふ、二神あり、神荼・鬱壘と曰ふ、衆鬼出入す、執て以て虎を飼ふ、是に於て黄帝法りて之に象り、桃板を門戸の上に立つ。」とあり。[參照] 畫雞貼戸・春聯

例句

桃符　我腰の桃符ほしがる兎かな　青々（妻木）
戸に帖す畫雞の傍の桃符かな　山梔子（稿本夏秋冬）
道ばたの巨石に貼りし桃符かな　銀杏（ゆく春第二句集）
桃板　桃板でかの倭人をたゝきけり　青々（妻木）
桃板の門仰ぎ去る童鬼かな　鳥堂（續春夏秋冬）

畫鷄貼戸（ぐわけいをとにてつす）

葦索を懸く　葦索（ゐさく）　あしのなは

古書校註

【山之井】元日の事也。これもから國に、ゐかける鶏を門戸の上におき、其上に葦のなはをかけ、札をかたはらにさしはさめは、百鬼恐るゝ由、歳時記に有り。

【易通卦驗】正旦五更、實庭中に爆竹す、畫鷄を之に貼す、五色の土を戸上に鏤め、以て不祥を厭す。云々。

【栞草】「荊楚歳時記」正月朔日、畫雞を戸上に帖し、葦索を其上に懸け、桃符を旁に挿ば、百鬼これを畏る

季題解説 元日。支那の古俗に、雞の畫を戸上に貼り、葦索をその上に架け、之に桃符を挿めば、百鬼恐れて門に入らずと傳ふ。[參照] 桃符

例句

畫鷄貼戸　戸に貼れば畫鷄の隠人を射る　望東（明治俳句）
鶏旦の戸に貼る畫鷄鳴くなめり　三幹竹（懸葵）

夜光（やくわう）

篇を壁に懸く　履物を匿す

季題解説 元日の夜、朝鮮にては夜光と稱する惡鬼履物を盜み、盜まるれ

ばその年不幸なりとして、早くより消燈して履物を匿し、飾を壁にかけおく風習あり。蓋し夜光飾の日を算へゐるうちに鷄鳴となるとの俗信なり。

柶戲（しぎ）

季題解説 朝鮮にて、元日に行はるゝ遊戲にして、荊（ハギ）の木を一寸位に切り、縱二つに割り、恰も蒲鉾形のものを四個作り、之を投げて飲食物を賭けて遊ぶ。これを柶戲といふ。

例句 柶戲

柶戲の運強く勝ち得し童子哉　三幹竹（懸葵）

春聯（しゅんれん）

春聯（ツンリェン）　門葉（もんえふ）　門聯（もんれん）　春祝（しゅんしゅく）　春聯頌壽（しゅんれんしょうじゅ）

季題解説 臺灣の俗、新春門戸に必ず紅紙に吉祥の對句を書したる門聯を貼付す。但し門聯は新年に限るにあらず。新居・出産・結婚等慶事ある時必ず貼付すれども、新年には特に春聯と傳して以てこれと區別す。初め桃符などより出でしものなるべく、「神荼鬱壘」など簡單なるものもあり、或は「爆竹一聲除舊、桃符萬戸更新」「貞下起元梅萼先傳信色、靜中含動桃符新換春來」など其一例なり。〔參照〕桃符（冬）—春聯賣（シュンレンウリ）

例句 春聯

壽福無量春聯の筆潑剌と　十二星（綠氷集）
春聯や國治まらず二十年　由布史（同人俳句集）
春聯の金箔袖に散りにけり　德華（同）
春聯や爆竹煙る土人町　秀水（ゆゝ春第一句集）
春聯の門に燈籠灯りけり　雨江（草上俳句集）
春聯の戶とざしあり阿片窟　俳子（現代俳句大觀）
春聯に香煙あがる亭子脚　紫川（昭和一萬句）
春聯を貼りたる馬車に乘りにけり　幸叢（同）
帆柱に春聯貼りし戎克かな　巨洲（昭和模範句集）
春聯や幼きもする耳かざり　とみ女（濱ホトトギス）
土の上に春聯を書く老儒かな　沐生（同）
春聯の門を出でくる纏足女　蘇川（同）
春聯や蕃社のなかの土人店　千里女（同）
春聯やこれより支那の町つづき　栗子（同）
春聯をかけて晋子は酒にあり　禽化（懸葵）

春盤（しゅんばん）

生菜（せいさい）　菜盤（さいばん）　五辛盤（ごしんばん）

古書校註 【山之井】もろこし（唐）の李號（リコウ）といふ人大根芹などを菜盤とて立春の日相

贈れり　是よりならはしとなりて、春餅生菜と號すといへり。事文
【栞草】齊人月令　立春の日生菜を食ふ、新を迎ふの意にとる、云々。立春の日春餅、生菜を以て相饋るを春盤と號す。
【年浪草】本草に時珍が曰、五辛菜は乃ち元日立春に、葱蒜蓼蒿芥辛嫩の菜を以て、雜和して之を食す、新を迎ふるの義に取る。○杜甫詩、春盤細ニ生菜。

註（一）もろこし　唐土　支那。

季題解說　支那の古俗、立春の日に葱・蒜・蓼・蒿・芥・芋等の五種の生菜を食する風習あり、これを盛るを五辛盤といひ、迎新に音の通ずるを祝するなり。又春盤・菜盤ともいふ。參照　食積

例句
春盤
春盤や七日となりし置き所　蕪翠窟（木虫句集）
春盤の陰の寒さや根水仙　千燈（同人）

綵燕（さいえん）　春燕（しゆんえん）を戴（いただ）く

古書校註
【山之井】是も唐（一）に燕を作り色どりして立春の日いたゞくと也。歲時記
【栞草】荊楚歲時記　立春の日、綵（二）を剪り、燕に爲りてこれをいただき、宜春の字を門に帖す。
【年浪草】王晉公春帖子に云、綵燕釵を迎へ鬢に入て舞ふ。〇歲時記に曰く、立春の日貴賤の家綵を剪り小旛と爲し、之を春旛と謂ひ、或は佳人（三）の頭に懸け、或は花枝の下に綴る、又剪て春蝶と爲す。云々

註（一）唐　李唐とも云、支那上朝の號、隋の後、宋の前、約三百年に亘つての盛世なり。此所には支那を云ふ。（二）綵（いろいと）着色したる絲をいふ。（三）佳人　美人　我が懷ふ人。

季題解說　支那の古俗、立春の日、色綵を剪り燕に作りてこれを戴き、宜春の字を書きて門に貼することあり、これを採燕又は春燕又は春燕を戴くといふ。

例句
綵燕
花よりもわきてかざしの燕かな　貞兼（玉海集）
けさの春唐土人の燕かな　良德（同）

葭灰飛（あしはひと）ぶ　葭灰（あしはひ）を飛（と）ばす

古書校註
【山之井】立春の日、葦の葉の灰を律（一）の端にみてゝおけば、春の氣いたる時、其灰おのづから飛と也。事文
【栞草】歲時記　立春の日、竹を取て管と爲し、葭を取て灰と爲し、葭莩灰（フクワイ）

を以て律（一）之端に實たしめ、以て氣を候ふ　則ち灰飛ぶに至つて管通ず、以て六律（二）に應ず。

【新式】立春の日あし、灰を調、子竹のはしにまで置けば春の氣いたる時、その灰をのづから飛となり。

註（一）律　調子を合する器。（二）六律　音聲の陽の調子、陰の六呂に對す。

噴春（ふんしゆん）

季題解說　噴春（ブンツン）

臺灣にて、正月元日より噴春と稱する一群の人々・喇叭・太鼓、銅鑼・笛などを吹奏して市中を徘徊す、家毎に紅紙に包みたる小銀貨又は銅貨をこれに與ふる風習あり。

例句　噴春

噴春の山を出てくる跣足かな　雨青（懸葵）

噴春や蕃社の中の大通り　古亭（同）

長年蔗（ちやうねんしや）

季題解說　臺灣に於ける新年の飾り物の一に、甘蔗を根付葉付のまゝ門口に立てかけおくものあり、これを長年蔗といふ。

例句　長年蔗

蒼海を前なる宿や長年蔗　冬葉（懸葵）

長年蔗蠻家の軒に立てにけり　雨青（同）

荒夷にも皇恩及ぶ長年蔗　三幹竹（同）

賭戯（とぎ）

擲錢　擲骰

季題解說　元日より十五日まで、臺灣にては清國時代に公然と賭博を許され、現在は取締嚴重なれども、風習を改むること難く、その種類、百餘種に及び、殊に擲錢・擲骰等は小兒も行ふ賭戯なり

例句　賭戯

賭戯するや蠻人にまじる內地人　雨青（懸葵）

鼠の嫁入祝（ねずみのよめいりいはひ）

季題解說　正月三日、臺灣にては鼠族婚姻の日なりとて、此夜の燈火は深更に及ぼし鼠の嫁入を祝ふといふ。

人を帳に貼す（ひとをちやうにてつす）

古書校註

【山の井】華文、正月一日を鷄とし、二日は狗、三日は猪、四日は羊、五日は牛、六日は馬、七日は人日といふ也　人は萬物の靈なる故實辰（一）共いへ

り。一日に鶏を門にゑがくがごとくけふも唐には人を帳に貼すと。云々。

【栞草】 荊楚歳時記「人日綵を剪りて人をつくり、屏風の上に貼す。また頭鬢に戴く、又或は相遺る、新年舊を改め、私しきにしたがふ意に取る。云々。

【新式】 七日唐には人を畫にかきてとばりにかくる兕ありとかや、帳はとばりと讀也、催馬樂わいへんの歌に、とばり帳といふは重言也。

註 (一)窺辰、七日正月、人日の條を看よ。

季題解説 正月七日、支那の古俗に、綵を剪りて、人をつくり、屏風の上に貼す、また頭鬢に戴く、また或は相遺る。新年舊を改め新しきにしたがふ意に取り、以て慶賀の意とすといふ。

鼠火戯（そくわぎ）

鼠燻し（ねずみふすべ）（チュイナル）

季題解説 正月初子日、朝鮮にては、百姓等皆爭ひ田野に出で野草を燃やす。又は家内にて豆を煎りながら、「鼠の口が焼けた〳〵」と唱ふる地方もありといふ。

例句

鼠火戯　大江の風上うけて鼠火戯かな　狂々（懸葵）

鼠燻し　鼠燻しに出て日高しや百濟人　北谷生（同　）

命絲（めいし）

壽絲

季題解説 正月上卯日、朝鮮にて青色の絹絲又は綿絲を尺餘房形に束ね、嚢纓に佩ぶ。又は門戸の鐵鐶に括る。災を攘ひ壽の長きを祝するなり。

例句

命絲　北漢亟まともの家の命絲かな　瓜青（懸葵）

門口にくゝりて長き命絲かな　雨青（同　）

龍卵撈（りゆうらんらう）

季題解説 正月上辰日、朝鮮忠南にては、婦女早朝井水を汲む。蓋しこの日龍降りて井に卵を下し、最初に之汲みたる者福ありとの俗説に依るものにて、最初に汲みし印として小量の草を井水に入れ置くといふ。

例句

龍卵撈　龍卵撈雪の下草掘りにけり　雨青（懸葵）

人日（じんじつ）

季題解説 正月上寅の日、朝鮮にてはこの日を人日と稱して人と交際せず。若しこの日、外出して他家にて大小便をすれば、家の者必ず虎に襲はると

の信仰あり。〔季寄〕人日ツ

例句

人日　人日の机離れず日暮れけり　冬葉（懸葵）
人日の越房雪にしづかなり　瓜青（同）
布掛けて人日の窻閉しけり　雨青（同）

福盜み（ふくぬすみ）

季題解說　正月十四日夜、朝鮮にて、秘かに豪家の門内の土を盜み來りて、自家の四隅に撒けば福ありとて俗信りこれを福盜みといふ。

例句

福盜み　雨斑の門内廣し福盜み　瓜青（懸葵）
福ぬすみ泰山木の下の土　冬葉（同）

處容（しよよう）

季題解說　正月十四日夜、朝鮮にては、女子・哉男十歲の厄を攘ふため、處容と稱する桶を作り、頭腹に錢を入れて門外に捨つれば、下層の子供等群りて之を取るといふ。

例句

處容　門外の凍のはげしき處容かな　蓼女（懸葵）
枯草に錢のそれたる處容かな　玉鉾（同）
凍てつくや拾ひ忘れし處容錢　狂々（同）

索戰（さくせん）

季題解說　朝鮮にて正月に行はるゝ遊戲にして、内地の綱引に髣髴たり。正月十四日に多く行はる。

例句

索戰　索戰に足どまりなき氷かな　雨青（懸葵）
索戰の雨方に聲あがりけり　冬葉（同）

上元の日（じやうげんのひ）

上元（じやうげん）　花燈の夕（くわとうのゆふべ）　元宵（げんせう）　元夕（げんせき）　花燈會（くわとうゑ）　燈樓（とうろう）　上燈（じやうとう）　落燈（らくとう）

古書校注

【山之井】十五日の事也、唐にはこよひ灯樓（一）を見る事あり。

【栞草】正月十五日を上元といひ、七月十五日を中元といひ、十月十五日を下元と云。花燈の夕とは唐の世より、上元の夜燈燭を列ね游觀するを云。

【五雜俎】天下の上元、灯燭の盛なること閩中（二）にまさるものなし。

【新式】花灯夕　十五日もろこしには此夕火を多くともし、佛舍利（三）を拜

する也。

註 (一) 打標　爆竹を以て衆を做ることを云ふなるべし。(二) 閩　支那東南地方の稱、今の福建省地方。(三) 佛舍利　佛骨　崇拜の物となる。

季題解説　支那の俗、正月十三日を上燈、十五日を元宵・上元・元夕、十八日を落燈といひ、この六日を燈夜又は花燈の夕といふ。唐代には禁中に於ては常に夜行を禁ずるもこの夜のみ許さるゝより、大家の女燈燭を掲げ、肩輿にて出で歡呼の上より經過す。これを轎上橋といひ、この夕を花燈の夕と稱す。貧家にては歩行するのみなりといふ。

又、朝鮮にては、この日、飼犬に夕食を與へず。之は月犬相剋の理により月を貪ぶためとも、犬の夏に痩せぬ呪法ともいふ。([illegible]名日[illegible])

(元宵の燈籠)

例句

上元　上元や松にはじめて春の月　一有（類題集）

上元や遊びなれたる弟子大工　貞佐（同）

元宵　元宵や飾りたてたる一老舗　紅石（ホトトギス）

花燈會　花燈會を迎ふ狭斜の女ども　天門（昭和一萬句）

耳明酒（じめいしゆ）

季題解説　上元の日、朝鮮にて、藥酒一杯をのみて、耳の聰かならんこと、及び一年中善事をきくやうにと祝す。これを耳明酒といふ。

例句

耳大酒　南瞑にまづ耳明酒の利きにけり　蒼梧（懸葵）

耳明酒に聰く三韓の榮かな　狂々（同）

耳明酒や南山の雪まのあたり　夏清（同）

嚼癤（しやくせつ）

藥飯（やくはん）

季題解説　上元の日、朝鮮にて早朝臥床しながら、胡桑・栗・松の實の如く、固くして音のするものを歯にて碎き食ふを嚼癤といふ。之を行へばその歳、肌に腫物を生ぜずといひ、又一説にはその年健康なりといふ。又上流社會にては、嚼癤の代りに藥飯を喫り、藥飯とは、精米に棗・乾柿・松の實・蜂蜜等を入れて蒸したるものなり。

例句

嚼癤　嚼癤や牛のやうなる百濟人　南青（懸葵）

しやくせつに寐てくふことも覺えけり　同（同）

囀稍や障子の外の鶏の聲　瓜青（同　）

百家の飯（ひやくかのめし）

【季題解説】上元の日、朝鮮にては諸所より少しづゝ米を貰ひ集めて炊ぎ食す。これを百家の飯と稱す。即ち壯健を祝する俗信なりといふ。

【例句】百家の飯

千萬の米を百家の祝かな　冬葉（懸葵）
溫突の焚口淨し百家飯　瓜青（同　）
陋屋も煙をたてぬ百家飯　雨青（同　）

旗奪ひ（はたうばひ）

【季題解説】上元の日、朝鮮咸悦にては、各部落の若者總出にて旗を奪ひあふ勇壯なる技を行ふ。之を旗奪ひといふ。

【例句】旗奪ひ

旗奪ひみな傾きし冠かな　瓜青（懸葵）
寥々として廣き野や旗奪ひ　雨青（同　）
奪ひあふ旗に朝東風渡りけり　冬葉（同　）

暑を買ふ（しよをかふ）

【季題解説】上元の朝、朝鮮にて、突然途上人に會ひたる時「暑を買へ」と云ひ、是に返事をすれば即ち買ひたることゝなりて、賣りたる者はその夏涼しく、買ひたる者は人一倍の暑さを負ふといふ。

【例句】暑を買ふ

暑を買ひし悔にこもれる一家かな　雨青（懸葵）
うかりひよんと出でゝ暑を賣られけり　巷梧（同　）

炬火の戲（きよくわのき）

【季題解説】上元の日、朝鮮にて壯年兒童など炬火の用意をなし、部落と部落互に打合ひ、勝ちたる方を豐作とすといふ。

【例句】炬火の戲

炬火の戲に風つよき夜となりにけり　雨青（懸葵）
雪上に炬火の戲の屑こぼしけり　瓜青（同　）

弄獅（ラウサイ）　剖獅

【季題解説】上元の夜、臺灣にて、街中の壯漢、廟前にて行ふ祈禱にあはせ、一人は獅子を舞ひ、一人は長刀にて、獅子を截らんとして互に亂舞し、傍

らより銅鑼にて囃し立つ。これを弄獅と稱し、この時長刀をもつ者を刮獅といふ。

月の家焼き　月の家

季題解説 上元の日、朝鮮慶尚道の兒童青竹を柱とし藁葺きの家を作りて月の家と稱し、月の出の時、兒童その周圍を巡り謠ひつゝ焼き棄つるを月の家焼き、又は月の家（タルマーチョン）といふ。

例句 月の家焼き

月にあがる月の家焼くけむりかな　冬葉（懸葵）

名日　良辰　上弦日

季題解説 正月十五日、朝鮮にては月を祭る日と定め名日といふ。この日、夕月の昇る時、紅箋を月形に丸く切り、中央を萩に挿して東方の屋背に揭げて禮拜し、年中の運勢の滿月の如く光亮圓滿無碍ならんことを祈り、且つ、年中の豐凶を豫驗すといふ。一[illegible]上元ャ

例句 名日

名日の邑内灯りはじめけり　瓜青（懸葵）

踏橋　橋を踏む

季題解説 正月十五日、卽ち名日の夕、朝鮮にては橋を渡ればその年は、脚きにめて健かなるべしとて、この日踏橋の群集多しといふ。

例句 踏橋

長橋を踏み終へて月上りけり　冬葉（懸葵）
踏橋の水にひゞくゆふべかな　雨青（同）

鬼神の日

季題解説 正月十六日、朝鮮にては鬼神の日とて外出せず、旅に在る者、家の近くに迄戻り來りても、鬼神を家に連込むことを恐れて途中に一泊すといふ。

例句 鬼神の日

城壁の外の假泊や鬼神の日　瓜青（懸葵）
城外は更けてをるなり鬼神の日　同（同）

天穿　補天穿　煎餅を繫く

古書校註 【山之井】もろこし江東（一）の俗、正月廿日紅の糸にて煎餅を繫て屋の上

におけり、是を天穿とはいふとかや。拾遺記

【年浪草】事文類聚に曰く、江東の俗正月廿日を號して、天穿と爲す。紅縷を以て煎餅餌を繋ぎ、屋上に置く、之を補天穿と謂ふ、古詩云、一枚煎餅補ニ天穿一。

【新式】煎餅を繋ぐ、是を天穿ともいふ也。唐にて江東の俗、紅のいとえ煎餅をつなぎて屋の上にをく事ありとかや、畫言故事にも有。

註（一）江東　揚子江の東岸にて昔の吳の地方　鴻羽の革命を起せし所。

季題解説　正月二十日。「江東の俗、正月二十日を天穿と號け、紅縷を以て煎餅を繋ぎて、屋上に置く。之を補天穿と謂ふ」と「事文類聚」に見えたり。

例句
天穿　天穿に竹の雀の來りけり　青々（妻木）
天穿や地上に落ちし再びす　禽化（懸葵）
天穿の尾を曳く赤き糸目哉　同（同）

開印　官衙開く

季題解説　臺灣の政治始の意なり。古は文武官衙共に一月廿日前後に開印の式を行ひたりといふ。

實作注意　開印なる詞は、官衙を開く際にも、祠廟を開く時にも用ふ。蓋し、初めは祠廟を開くことを云ひしものなりしも、後に官衙の場合にも適用せらるゝに至りしものなるべし。紛らはしけれど、作意によりて、誤まらざるやう注意ありたきことなり。參照　宗教―開印（カイイン）

例句
開印　開印や竹の綠に窓ひらく　新汐子（懸葵）

龍王日　小龍尾　合菜を食ふ

季題解説　正月二十五日を滿洲にては龍王日となし、この日は各家、獨頭の蒜を門に掛け病を避く。またこの日は、小女は五彩を剪りて圓形となし、綵絲を以て之を穿ちたるものを帶ぶ。之を小龍尾といふ。且つ、家內一同この日は合菜を食す。同地方の諺にも「龍王日吃合菜」とあり。

例句
小龍尾　驢馬あそぶ門の日和や小龍尾　雨青（懸葵）

送窮

古書校註
【采草】「四時寶鑑」に云、高陽氏の子、衣の敝れたるを好み、かゆを喫ふ。正月晦日死す。世に糜を作り破衣を巷口に捨て貧鬼をのぞく、又池陽の風

俗、正月廿九日を以て窮九とす。屋室の塵穢を掃除し、是を水中に投、これを送窮と云。五雜俎 謝肇淛が曰く、俗説は信ずるに足らず、窮也、窮也、皆晦盡の義也、諸の月をいはずして、獨り正月をいふものは、其端めを擧る也。○按るに送窮は己の方に云晦日掃なり。

季題解説 正月二十九日。支那の古俗に、屋室の塵穢を掃除し、之を水中に投ず、これによりて貧鬼を祓ふを送窮といふ。

例句

送窮　送窮の情はたゞや古莚　禽化（懸葵）
窮鬼五子貧乏神と走りけり　同（同）
送窮や陋巷に居す窮措大　同（同）

地神踏（ちしんふみ）

季題解説 朝鮮にて、正月中、慶尚南道東萊邊にて、農民すべて假裝し、行列をつくりて富家を巡訪し、足拍子を揃へて地を踏みならし、福運を祝うて錢穀を乞ふ。これを地神踏といふ。

例句

地神踏　地神踏月の我影濃くなりぬ　蘆風（懸葵）

超板戯（てうはんき）

季題解説 朝鮮にて行はるゝ新年の遊戯なり。藁のかますに土を包みしものゝ上に板を置き、婦女等その兩端に立ちて、脚力と反動とを利用して跳動す。内地のシーソーの如きものなり。

例句

超板戯　錦繍の赤紫や超板戯　若梧（懸葵）
日を浴びて女一人や超板戯　瓜青（同）

四方拝（しはうはい）

古書叢註

【山之井】　四方拜、星をとなふ。ほしぼとけ元正の寅の時(一)すべらぎ(二)屬星(三)をとなへ、天地四方の山陵を拜し給ふて、年災を拂ひ、寶祚を祈申さるゝ義にて侍るにや。公事根源　猶江次第に委し。星をとなふるとは年中行事の歌合にいはく、當年の星本命星をまづ七返づゝとなへ給ふ事にやといへり、今在家の世俗星佛とて祭るも其心ばへなるべし。

【栞草】　元日寅の一刻に、天皇清涼殿(四)の東庭に於て天地四方を拜し給ふこと也。臣下も私の庭にて拜する也。公事根源　屬星を唱へ、天地四方山陵を拜し給ひて年災をも拂ひ、寶祚をも祈り給ふ、云々。

【江次第】　日本紀に曰、皇極天皇元年八月朔、天皇南淵の河の上りに幸し、跪き四方を拜して雨を祈らる、云々。元旦四方拜の事、寛平二年御記に始めて見ゆ、云々。

註　(一)寅の時　午前四時。(二)すべらぎ　天皇。(三)屬星　生年の屬する星（四）清涼殿　禁中主上の常の御殿、古くは「せいらうでん」と云へり。

參考解説

一月一日。四方拜は皇室の年中行事の始まりなれども、その起源については諸説あり、皇極天皇南淵の川上に行幸し四方を拜し、天を仰ぎて雨を祈り給ひし事等より察すれば、四方を拜して神祇を崇敬するは上古よりの風なるべしとせられ、又江家次第、延喜式等より察すれば、寛平以前より既に祭典の式を備へしものなるべし。古制によれば元旦寅の一刻、清涼殿の東庭に大宋屏風八帖（或は四帖）を廻らし、内に御座三所を設け、前に机を置き、香華、燈等を供し、北辰の座にて屬星即ち北斗七星の名を唱へて二拜し、次で北・乾・東・南・西等天地四方並に山陵を拜せらる。此儀は應仁の頃一時中絶し、文明七年に再興せられ今日に及びたるものなり。午前五時三

十分、聖上に於かせられては、綾綺殿に於て黄櫨染御袍の御束帯を召させられて御手水、御笏を執らせ給ひて、白の祭服に身を整へたる掌典長の御先導、同様のよそほひの侍従、御前左右に脂燭、御後に御裾御剣を奉仕して供奉し、神嘉殿南庭の御座に進御あらせらる。御座は庭上に床なしの御假建の中央、地上直に鋪かれたる清薦の上に設く、御座前に御燈二基を供じ、その周囲を御屏風二帖を以てかこふ。神嘉殿南階より御假建への左右、聊か離れたる所に、庭燎を焚く。御拝は御屏風の内に於てあそばされ伺ふよしもなけれど、物の記によれば、先づ皇大神宮、次に豊受大神宮、次に四方あらゆる神祇、次に神武天皇山陵、次に先帝山陵、次に武蔵国の一宮に坐す氷川神社、山城国の一宮に坐す賀茂下上両社、石清水八幡宮、熱田神宮、香取神宮といふ順序を以て御拝あそばさると承る。此間諸員平伏、萬籟不聞、唯々微かに御袍の御衣摺の音を伺ふのみ。御拝を終らせられて、出御の御時と同じ供奉にて入御あそばせらるゝなり。

民間四方拝　四方拝は宮中の御儀式なれども、民間にても、元旦の庭上にて四方を拝すること行はれ來る故に、作句の場合には明かにその區別を立てゝ表現するを要す。

例句

四方拝

うばそくが聲ときかん四方拝　文鱗（續虚栗）
もれあやは短山まで四方拝　言水（初心もと柏）
四方拝我は内裏の方をこそ　善林（大三物）
四方拝その時朝日のぼりつゝ　子規（子規全集）
四方拝銭形屏風ひきまはし　四明（四明句集）
御座三所嚴にして四方拝　觀魚（明治一萬句）
四方拝果てゝや木々に風渡る　鳴雪（鳴雪俳句集）
鶴翼に侍す記部や四方拝　露人（ナヽサキ）
鳳闕や霜は儀せよ四方拝　忍月（同）
四方拝八幡の鶏も鳴きにけり　泰山（泰山俳句集）
四方拝二十八宿あざやかに　守水老（守水老遺稿）
四方拝つもりて長き山の雪　青木潤（青雲句鈔）
夜をこめて霜に聲あり四方拝　別天楼（石中句鈔）
四方拝天下和平のはじめかな　円葉（葉の音）
四方拝禁裡の垣ぞ拝まるゝ　青々（最新二萬句）
鶴の如く人在しけり四方拝　九品太（同）
大空の古きみどりや四方拝　雲池（雲池句集）
鶴氅の御衣に星降る四方拝　蕉谷（現代俳句大観）
諸ロ濠の鴨も動かず四方拝　瓜青（懸葵）
漁者樵者曲らぬ膝の四方拝　吾痩（同）
蜜柑生る籬落の國旗四方拝　句佛（我は我）

〔參考〕毎年一月一日天皇宮中神嘉殿に出御あらせられ、親ら天地四方及び山陵を拜し、年災を攘ひ、寶祚の長久を祈り給ふ御儀式なり。當日午前四時神嘉殿の前庭に幄を設け其の中に菅薦を敷き、屛風を立て廻らして御座となす。之を御拜所となす。時刻到りて天皇出御在らせ給ふ。宮內大臣、侍從長、書記官、侍從式部官、近衞士官等供奉す。天皇賢所の綾綺殿に臨御ありて御束帶を着させられ御拜所に入らせ給ふ。侍從御裾・御劍・御笏・御草鞋等に奉仕す。こゝにて天皇は、伊勢皇大神宮・天神地祇を拜し給ひ、次に神武天皇及び大正天皇の御陵を拜し給ふ。畢りて入御在らせらる。四方拜は近世までは院宮・攝關家にても行はるゝ例なりしが平安朝時代にては廣く一般の行事にして江家次第一・拾芥抄上等には特に庶人の儀を載せたり。當時の朝廷に於ける儀式は天地四方、山陵を拜せらるゝ外に屬星を唱へ給ふ事あり、即ち鷄鳴に清涼殿の東庭に大宋の御屛風をめぐらし、御座三所（屬星を拜する座、天地を拜する座、山陵を拜する座）を設く、降雨の際は弓場殿にて行はるゝ例なり。天皇御沐浴を訖はらせ給ひ寅の刻に及びて黃櫨染の御袍を着させられ、清涼殿の三間（雨儀は額の間）より出御あり。藏人頭御裾に候し近衞次將御劍を取りて前行す。天皇御屛風に入御の後は近衞次將御屛風の後に候し、藏人も亦御屛風の傍に候して御笏を奉ず。天皇先づ西座に着かせ給ひ、屬星の名を唱へさせ給ひて再拜了りて呪を稱へ給ふ。次に東座にて北に向ひて天を拜し、西北に向ひて地を拜し給ふ、次に南座にて山陵を拜し給ふ。儀式畢りて還御の後、所司御座等を撤す。以上記せる御儀の次第は、儀式執行に當りて宮中に何等の支障無き通常の際に行はせらるゝものにして、偶々支障を來す事ある時は此に種々の異例を生ず。之を御歷代の諸例に徵するに、即ち諒闇の時には座を設けて天皇御拜在らせられず（延久五年）、御代始には欠日を以て東宮の御拜なく（治曆五年）、天皇御幼少に座ます時は座を設くるのみにて拜し給はず（永平元年）、又天皇御物忌の時には御裝束は常の如くなれども拜し給はざる（天慶七年）が如き是なり。

四方拜の御儀は江家次第に、宇多天皇寬平二年より始まると見えたり。それより足利中期に至り、朝廷の御儀漸く廢頹するに及びて、此儀も遂に中絕したりしが、後文明七年正月に至りて再興せられたり。即ち實隆公記文明七年正月一日の條に「傳聞、今朝有二四方拜一、奉行職事政顯也云々、亂後今年始而有二公事再興之面影一、珍重々々、幸甚々々、一天之昇平宜レ在二今春一者歟」。と見ゆ。是より後ち幕府にてもしば〳〵用脚錢を獻じ、御儀用途に充てたるに依りて退轉することなく、遂に明治維新に至り、改めて年中恒例の御儀式となれり。

歳旦祭（さいたんさい）

〔季題解說〕一日早旦、宮中賢所、皇靈殿、神殿にて行はせらる。年頭に際し

祖宗天神地祇の神靈を祀り神佑を祈る御祭典にして、古來の節朔祭の故掌を遺すものなり。節朔祭は毎月朔日及節日に行はれたるものにて、既に禁祕御抄等にも毎月一日賢所に神饌を供進することを記す所にして、古くより行はれたるもゝなるべし。明治維新以後は年頭祭又は正月三箇日祭と稱して三箇日の御祭典を行はせられたりしが、現制に於て歳旦祭は四方拜直後に行はせらる。四方拜の御儀に先ち掌典長以下の奉仕にて、樂師の神樂歌奏奏の間に、賢所皇靈殿神殿の開扉、供饌奠幣あり、掌典長の祝詞奏上ありて、大禮服着用の宮内勅任官、同奏任官總代各一人著床す。陛下賢所に進御遊ばされ、内陣の御座に著御、掌典長の進めまゐらす御玉串を執らせ給ひて御拜、終つて掌典長御玉串を拜戴し、やがて皇祖の御前近くに奉奠せられ、終りて　陛下には皇靈殿、次いで神殿に同じく御玉串を執らせ給ひ御拜の後入御遊ばさる。次に總代の各殿拜禮ありて幣饌の撤却、閉扉ありて全く終了せらるゝ御祭儀なり。

實作注意　歳旦祭は、宮中の御祭儀の他に、歳旦諸社にて行はるゝ祭儀をも總稱して言ふことあり。作句の場合は、明らかにそれを區別すべし

例句
歳旦祭

歳旦祭の太鼓鼕々と打ちそめたり　刀水（高[illegible]）
歳旦祭松風出でゝ夜明けけり　広青（懸葵）
歳旦祭天地の光り淑氣滿つ　三幹竹（同　）

星佛（ほしほとけ）

星佛祭（ほしほとけまつり）　星祭（ほしまつり）　星を唱ふ（ほしをとなふ）

出典參考
【滑稽雜談】　當年星の九曜（一）、是を最初に祭らん爲に、其星の形像を彫て、禁裏院中へは佛工所より調進し、是を顯密の行者或は陰陽家に仰て星供を行はせたまふ、民間も亦星を祭る、此の九曜の次第は、羅土水金日火計月木と、一歳より九歳まで至り、十歳より十八歳と幾度も九年目〳〵にくり返て當年星となる也、惣て星宿の祕法は、唐の開元中、一行阿闍梨天文宿曜の術に通じ、九曜曼多羅を感得したまふと云々、凡そ人の災難口舌あるは、羅計火の三ツの惡星より起る、宜しく僧を請じ、如法供養して祈り陀羅尼を唱ふべし。消除す一切災難陀羅尼經、我に大吉祥眞言有り、破宿曜と名づく、若し能く受持せば、志心懷念、其の災自滅し、禍を變じて福と爲す。云々。

【いつまで暦】　これは四方拜のまねびにて、星をとなへてまつるなり。

註（一）九曜　日曜、月曜、火曜、水曜、木曜、金曜、土曜の七星に、羅睺（ラゴ）計都（ケイト）の二星を加へたる稱、此の九つの星を人の身の上に種々に配當して吉凶を判斷するが即ち九星說なり。

季題解說　元日。昔、年の始に禁裏にて九曜星の內、其年に當れる星の形像を、佛工所より獻ぜしめ、陰陽家に命じてこれを祭り災厄を禳ひたる式、

これを星佛といふ。俗間にもこれに習ひて星佛を佛寺より求めて星祭をなしたることあり。今も諸寺院にて節分にあたり星祭を行ふ。卽ち本命星（各人が持つて生れたる星にて、一生その人の善惡を司り、吉凶を主理すといふ）及び當年星（本命星の外に毎年順に廻り當る星）を供養し、當り星の吉凶に從ひ、それ〳〵息災增益、除厄招福の祈禱を修法するなり。攝津中山寺の星祭祈禱會は殊に盛んにして、當夜は福火焚きをなし、福豆を授くといふ。因みに九曜星の次第羅喉星、土曜星、水曜星、金曜星、日曜星、火曜星、計都星、月曜星、木曜星と一歳より九歳まで至り、十歳より十八歳までと幾度も九年目〳〵に繰り返して當年星となるなり。當年の宿命星を祭り七遍づゝ其名を唱ふることを「星を唱ふ」といふ。

【實作注意】星佛は又星佛祭、星祭とも云ふ。秋の七夕の星祭とは全く別種のものなれば、彼此混同すべからず。星祭といふ古句少なけれども、若し作る場合には、その意味を忘るゝことなきやう注意すべし。

【例句】

星佛　月はなの願はやさし星佛　道彦（俳句大觀）

壁黑み影向したる星佛　紅葉（紅葉句集）

山一つ彼方妹が家星佛　放江（放江句集）

愼めば却て宜し星佛　釜村（懸葵）

星を唱ふ　お詞師や星を唱ふる鯨さし　泰清（江戸[illegible]）

星祭　厄年を寺に參るや星祭　三幹竹（懸葵）

星祭我が身の上は羅喉星　同（同）

祇園削掛の神事

祇園の削掛　白朮祭　白朮詣　白朮火　白朮繩　吉兆繩　火繩賣

【古書校註】

【山之井】元日の寅の一天に、祇園の拜殿にて、松の木のけづりかけに新しき火をきりて、大ぶく雜煮のために用る事也、一說大晦日といへるは非也。

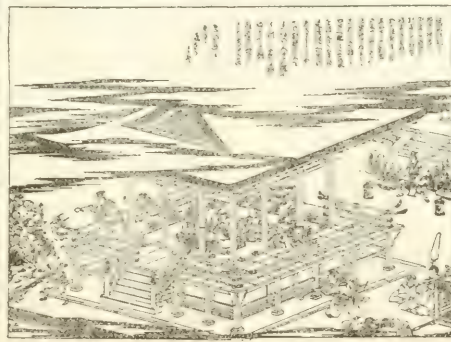
【栞草】元朝寅詣　神社啓蒙　祇園社は山城國愛宕郡八坂鄕に有、祭る所の神三座、牛頭天王、八王子、少將井。紀事　晦日子の刻（一）、祇園の社、神前の灯燭の外こと〴〵く火を滅して、暗中參詣の人口を恣にして他人の瑕疵を序りいふ、假令その辟をきゝ、其人を罵るといへども、爭はず恨みず、これ懺悔の儀にして勸善懲惡の微意か、丑の刻（二）ばかりに、執行（三）腰輿に乘り、社司前驅して執行升殿に登り、神前に向ひて默座することしばらくありて經咒を誦す、東西の欄の内に預じめ削掛の木を左右に建おくこと各六也、是十二月の數を表す、是を卯杖と稱す、而して同時にこれを燎なり、傳へ云、其烟西にむく時は、丹波の國來年五穀熟せず、東へなびく

時は、近江の國又しかり、これによつて兩國の豐凶を占ふ、故に西方に居る人は、高年に近江々々とよび、東方の人は丹波々々と云ふ、其爛を避んと欲する也。其後社司、私に井水を汲て、削掛の火を以て、元朝の供物を調ふ、是新年水火を改るの義也、參詣の諸人も又其火を携て家に歸り、元朝の羹を煮る

【いつまて暦】削懸の神事　元朝寅の一天に、拜殿にて松の木をけづりかけにして、新しき火を切て大ぶく雜煮の爲に用る也。

【新式】元朝寅のこくにおこなはるゝなり。

註（一）大晦日　午後十二時。（二）寅の刻　午前四時。（三）執行　寺院の事務を統ぶる職

【朮祭】一日。京都祇園の官幣大社八坂神社（昔の祇園社）にて行はるゝ神事。祇園の削掛といひ、又おけら祭といふ。紀事の記すところによれば、晦日子刻社前のほか悉く火を吹消し、暗中參詣の人、口を恣にして他人を詈る。詈らるゝ者其年[illegible]人を詈ると雖も、當夜は決して恨まず。丑刻に至りて執行腰輿に乗り、社司前驅して執行拜殿に登り、經呪を誦す。次に東西の間に削掛の木各々六箇を立てたるを一時に燒く。其烟西に向くときは丹波の國不作、東に靡くときは近江の國不作なりとの云傳へあり。其後社司此削掛の火を以て新年の供物を調ふ。參詣人も其火を携へて家に歸り、雜煮等をつくる火となすと云へり。往時の罵り合へる有様を西鶴の「一胸算用」には「參詣の老若男女左右に立別れ、惡口の樣々いふ中に、それ／＼腹抱えることなり、おのれはな、三ヶ日の中に餅が咽喉へつまつて鳥部野へ葬禮するわいやい。おのれは又人買の責でな、同罪で粟田口へ馬

に乗りて行くわいやい。おのれが女房はな、元日に氣が違うて、子を井戸へ投げ居るぞ。おのれはな、火の車で連れに來てな、鬼のかうのものになりをるわい。おのれが父は町の番太をした奴じや。おのれが嬶は寺の大黑が果てじや。おのれが弟はな、かたりの挾み持じや」などゝ巧みにしるしありて、その年の笑ひ納めと笑ひ初めをしたるものなりといふ。現今は元旦寅の刻（四時）より白朮祭を執行、十二月十三日に四條高倉市原平兵衞氏より削掛を奉納す。これは陛下御召料の御箸を作り仕上げの時の削り掛けを一年中唐櫃に保存しおきたるものなり。さて元旦には神饌として一升取の[illegible]斗餅、鹽鯛、赤大根、蜜柑の四種を盛りたるもの十二臺を作り供し、伶人の亂聲につれて宮司は捲簾を行ひ、次で中に神饌を傳獻し、祭文を奏したる後、樂人一同、樂の座を立ちて神樂座につき、神前を正面にして座樂を奏し、撤火の式を行ふ。これは神前に八足臺を据ゑ、薪を掛け、金燈籠を置き、主典は樂人の數の紙燭を作り、燈火を點じて各樂人に渡す。樂人は前拜四本柱の中央に、案を据ゑて十二の折敷に市原氏より獻じたる削掛を盛りあるものに火を點じ、それを神前に集りたる參詣人目がけて投げつけ、全く式を終るなり。參詣の人々の雜踏を防ぐために三十一日夜より、燈籠の火を神前の篝火にうつし、參詣人所持の火繩に隨意點火せしめる慣例となれり。大晦の夜をこめて參詣の人出あり、吉兆〳〵と呼ぶ火繩賣の聲も明け方迄盛んなるものなり。

【[illegible]注意】 祇園削掛の神事は、現今は昔とやゝ異れども猶そこ行事あり。參詣者多ければ、白朮の燃料となる事多し。をけら火、をけら火貰ひ、をけら參り、火繩賣りなど、觀察を廣くすれば趣味の多きものなり。單に「削掛け」と詠みても、祇園社の神事の意をほのめかすことを忘るべからず。神事の意を失ふ時は、別個の削掛挿す、削り花等となるべし。

【例句】 削掛の神事

白朮[illegible]

焚いて置いて笑ふや削り掛　重行（俳諧發句題叢）

明けぬ間をこやせ祇園の削懸　學海（新類題發句集）

天の戸の今や祇園の削かけ　雲青（伊達衣）

消くらへ削かけには未だ早し　百川（類題發句集）

削りかけ青葉ねりつの鼻にあれ　其角（五元集）

削掛火種ふく袖ふはし行く　蝶衣（蝶衣句稿）

繩賣の呼ぶ祭闇に削掛　[illegible]（ゆく春第一句集）

火繩振れば星地に落ちぬ削掛　翠竹（最新二萬句）

宵冷ゆまはりの闇や削り掛　楠島子（大正新俳句）

あけぼのは境内寒し削掛　草城（[illegible]）

人波ををけら詣にまじり　秀好（ホトトギス）

婢をつけてをけら詣や宵の口　三千女（同）

をけら參り四條通りの冱てにけり　軒乙（現代俳句大觀）

白朮詣

をけら詣粟田の暗き急ぎけり　青澄（年間俳句集）
白朮詣年越し蕎麥を啜りゆく　三幹竹（[illegible]）

白朮火

白朮火や橋の袂の火縄賣　南畦（萬　[illegible]）
白朮火を眞白き縄にうつしけり　紅朗（年刊俳句集）
をけら火のこぼれて遠く散りにけり　米太（同）
をけら火の眞葛ケ原の暗に消ゆ　兎月（塔）
をけら火や白みそめたる東山　秀好（ホトトギス）
をけら火にけむたき四條通り哉　柳冠子（同）
白朮火や老のたぐれて袖の口　羊我（懸　葵）
白朮火を傘に守りゆく時雨哉　句佛（同）

白朮縄

をけら縄手にさし出して商へり　影津（ホトトギス）

吉兆縄

しかと持つ吉兆縄や削掛　宏芳（ゆく春第一句集）
人並に吉兆捧げ押されけり　竹杖（京都・[illegible]）

【季題解説】　毎年正月元日の寅の刻に、京都市（山城國）下京區祇園町、官幣大社八坂神社にて行ふ神事なり。一に之をおけら祭と云ふ。さて神事を執行するに先ち大晦の子刻に神前を初め諸所の燈火を消す。參詣の人々、暗中にて各自他人を誇り惡口を唱ふ。誇られし者は其聲を聞きて何人かを知るも、其の夜は決して恨まざるものとす。次いで丑刻に至りて神事を行ふ。其の儀先づ執行腰與に乘り、社司前驅す、執行拜殿に登り經呪を誦す。次に東西の欄に立てたる削掛（削掛とは棒の周圍を縱に細く削り一定の場所に削り留めたるものにして、魔除け或は招福の印とし、以前は東京地方にても正月十五日より廿日迄屋内及門の軒に掲げたりと云ふ）を六本一時に燒く、其の煙の靡き向ひたる國は不作を來すと云ひ傳へられたり。其の後社司是の火を以て新年の供物を調進す。參詣の人々之に做て各々火を家に持ち歸り、是の火を以て雜煮を作りて祝ふを例とす。

上賀茂の元日神事
（かみかものぐわんじつしんじ）

【季題解説】　元日。京都上賀茂社の神事は、もと神領たりし江州安曇川より、鯉魚を獻ずる慣ひあり。貞享年代後、此の儀絶えて、いまは僅に樂を奏するのみなりといふ。

延壽祭
（えんじゆさい）

延壽盃（えんじゆはい）　延壽箸（えんじゆばし）

【季題解説】　一日。大和國橿原神宮にて、皇室の無窮と群生の蕃殖とを祈念せらるゝ神事、嚴肅なる祭儀畢りて後、參拜者中の六十歳以上の高齢者に延壽盃を、一般參拜者に延壽箸を頒與す。但し、延壽盃の數は皇祖の御齢に因みて百三十七箇とし、延壽箸の數は、御即位の紀元に據りて、毎年一對づゝ遞増する定めにて、例へば昭和九年なれば二千五百九十六對なり。こ

れを受けたるものは無病長壽なりと云ひ傳へらる。當日は大鳥居附近に篝火を焚き、祭庭には庭燎を設け、神樂等あり。

例句

延壽祭

庭燎守るどれも翁や延壽祭　鳩十（ホトトギス）

神の琴べろん〳〵と延壽祭　同（同）

あちこちの守衛提灯延壽祭　櫻朶（昭和一萬句）

久米の子等參り合ひけり延壽祭　三幹竹（懸葵）

延壽箸

新しき延壽御箸や屠蘇の膳　篤郎（昭和一萬句）

若水祭（わかみづさい）

季題解説　一日。若水祭は京都三條蹴上日御山の日向皇大神宮にて行はる特種祭典の一にして、元日の朝午前三時より本殿前の「朝日泉」にて祭儀を行ひ、その泉の若水を汲みて一般參詣者に頒與し、且「向陽齋」の護符を下附す。これは家業繁榮、陽氣增長の祈禱にて一日より三日まで連日參者多く賑ひを呈す。

例句

若水祭

若水祭朝日泉に霜氣滿つ　三幹竹（懸葵）

若水祭霜の日あたる神の杉　同（同）

寒川の八方除札（さむかはのはつぱうよけふだ）　八方除の符（はつぱうよけのふ）

季題解説　元日。相摸國高座郡寒川村一之宮なる寒川神社にては、八方除と稱して、巾三寸三分、長さ九寸許りの神符を、參詣の諸人に頒布するを例とす。これ方位忌を避くるためなりといふ。

例句

八方除の符

方除や神播の神事今絶えて　蒼梧（懸葵）

頼まれし八方除を忘れけり　蓉太（同）

和布刈の神事（めかりのしんじ）

季題解説　元旦。門司の和布刈神社にて行はるゝ神事にて、往古は大晦日の子の刻に行ひしも、現今は改めて舊曆正月元日の午前三時に行ふ。神官は右手に鎌、左手に松明を持ちて石段を下ること五百段、大海の渚に向へば、潮左右に分る、卽ち進んで海底の和布を刈りて石段を馳せ登り、神供に奉るなり。神事の時に至れば附近の繫船悉く燈を滅して鎭まり居るに、海底夥しく轟き渡るといへり。これ、この神は潮の干滿を掌ると稱し、今も潮滿珠、潮干珠を寶物となせり。神功皇后征韓の御時、此珠の加護により、敵の王城迄汐干たりといふ。後に如意珠の司の神、安曇磯良神をも配祀あ

りて、和布刈神社と斎き祀る、今も航海の神として、崇敬篤き神社なり。

【例句】和布刈の神事

[illegible]出して和布刈の寒さ知る夜哉　夢太（[illegible]句集）

傾きて盤石にのる和布刈桶　晴[illegible]（[illegible]）

潮垂れの衣かゝげぬめかり禰宜　螢雪（同　）

蛙狩の神事（かはづかりのしんじ）

【季題解說】元旦、信濃國諏訪神社にて御手洗川の氷を破り、蛙三疋を捕へて、祠官社前に於て之を弓にて射る神事あり、蓋し年の豊作を祈るの意ならんといふ。

【例句】蛙狩神事

蟇もなく寒き神事や蛙狩　茂子（[illegible]一萬句）

凍て蛙狩り出されけり神の前　三幹竹（同）

繞道祭（ねうだうさい）

【季題解說】元日、古、大和國大神神社にて繞道祭行はるといふ、その行事次第審かならず。

代参の御籤探り（だいさんのみくじさぐり）

【季題解說】元日、美濃國揖斐郡地方にて、元日の早旦村の氏寺に詣でゝ伊勢代参の御籤をさぐる事、年々恒例として行はるといふ

【例句】代参の御籤探り

代参の御籤さぐるや年の朝　茶尉（ホトトギス）

探り得し御籤尊き今年哉　樹南（同）

六條道場天神開帳（ろくでうだうぢやうのてんじんかいちやう）

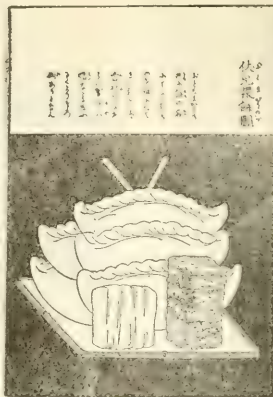
【季題解說】元日、京都京極錦小路の歓喜光寺を六條道場と號す、一遍上人の開基なり、菅公自畫の像、所持鏡の御影を開帳す。

山崎天神社開帳（やまざきのてんじんしやかいちやう）

【季題解說】元日、山城國山崎天神社にて、菅公自畫の束帯の尊像を開帳す。社司、御酒を供ふれば則ち神顔必ず赤くなる故に御酒天神と呼ぶといふ。

【例句】山崎天神社開帳

開帳や御酒天神の初日影　三幹竹（懸葵）

伏兎糫餅御供（ぶとまがりもちごく） 公御供（おほやけごく）

元日。安藝嚴島神社にて兩宮に巳刻御供といひて伏兎糫餅を奉りて社司内侍出仕す。これは國家安全の御祈念なりとて、又公御供とも云ふ。この時、供僧は經庵屋に、於て、大般若經を轉讀し、客人宮にては法華懺法ありといふ。伏兎は和名抄に餢飳音部斗、亦𩜙𩝐に作り和名布止、俗にいふ伏兎油煎餅の名也とあり。又糫餅は、和名抄に文選に曰く、膏糫粔籹、楊氏漢語抄に曰く、糫餅形藤葛の如きもの也、和名萬加利云々と見ゆ。また本草綱目に、環餅糯粉を以て麪に和し、麻油を以て煎、糖を以てこれを食ふ。或は糯粉を以て麪に和し少鹽をいれて牽紐の如く捻りて環釧の形に成し、油に煎てこれを食す、故に環餅と名づくとあり。土佐日記附註に、まがりは餅なり、關東に餅をまがりといふ、山崎よりほら貝のなりなる餅を油あげにして京都へいだすと見えたり。

伏兎糫餅御供

廻廊の柱に日あり伏兎糫　蒼梧（[illegible]）

伏兎糫巳の刻御供やいつくしま　三幹竹（同）

内侍迎（ないしむかへ）

元日より三日迄、安藝の嚴島神社にて、手長内侍、神樂男等、奉仕する内侍の家々に至り迎へ一、神殿に至らしめ、供御の事を取行はしむることあり、これを内侍迎といふ。元日に出るを竹林内侍、二日に出るを德壽内侍、三日に出るを御子内侍といひ、これを共に本内侍と稱す。これに隨從する女人多勢あり。これを手長内侍といひ、又これに隨從して、神前に神樂を奉仕する男子を神樂男といふ。この由、嚴島名所圖會にも見え、往年は嚴島年中祭事の中、盛大なる一祭事なりしも、現今は絶えて傳らず。

例句

内侍迎

水干に鹿の觸れたる内侍かな　鯱人（懸葵）
萠たけき德壽の内侍迎へけり　北谷生（同）
廻廊に裾引く内侍迎へかな　三幹竹（同）

嚴島の元日御衣獻上（いつくしまのぐわんじつおんぞけんじやう）

季題解說　元日、寅の上刻、神饌終りて後、棚守（社家の上首）御前に御衣を奉る。祝師これを内陣に納む。白綾に地紋龜甲を織りたるものにして、舊衣はこれを裁ちて社家中へ分つといふ。

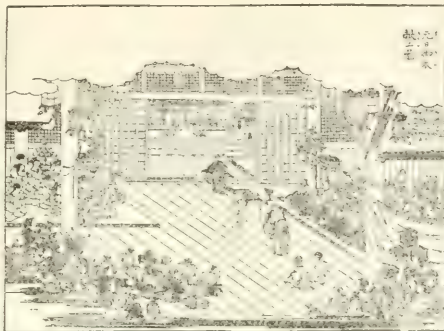
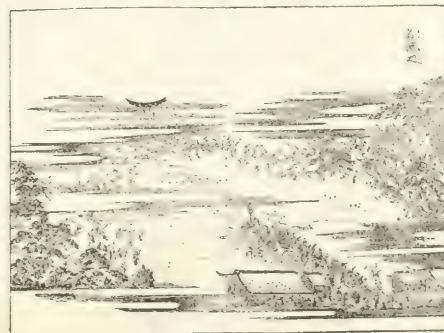
例句

嚴島の元日御衣獻上

獻上の御衣や海の日うらゝ　雨青（懸葵）
御衣さゝぐ一座の禰宜の髯白き　蒼梧（同）

（嚴島の元日御衣獻上の圖）

（若潮迎の圖）

若潮迎（わかしほむかへ）

季題解說　元日、安藝の宮島の人々拂曉に若潮迎へとて、手に／＼松明を持ち小桶を提け、嚴島神社の大鳥居の渊に群來して、潮水を汲み歸り、家の內を祓ぎ清め、身の垢れを洗ひ落して本社に參詣すといふ

例句

若潮迎

若潮や松かげ走る炬かゞり　女之衣（古譜短冊）
若潮を迎ふ炬火あかりかな　雨青（懸葵）
若潮を迎ふる闇に老の聲　羊我（同）

知恩院の昆布式（ちおんゐんのこんぶしき）　諸堂參（しよだうまゐり）

季題解説　一日。京都東山知恩院に於て元朝午前四時、大僧正を初め常隨者、寺務所役僧、並に山内の寺院住職一同は連れ立ちて佛殿、大殿、御廟等を「諸堂參り」とて順次參拜、讀經し終りて、古經堂に於て、大僧正以下全員參列し、新年の賀儀を述べ、次いで昆布湯及び昆布と蜜柑を出し、終りて雜煮を喫す、これを昆布式と稱す、明治以前に行はれたる厨下の式に代りたるものなりといふ。〔參照〕厨下式

例句
昆布式
一山の僧健やかに昆布式　啞佛（鷺葵）
百目蠟燭に映えて昆布式　同（同）
諸堂參り
暗きより諸堂參りや年の朝　三幹竹（同）

東本願寺獻盃式（ひがしほんぐわんじけんぱいしき）　獻盃（けんぱい）

季題解説　一日。京都東本願寺大師堂にて祖師親鸞聖人の厨子を法主自ら開扉し、親しく屠蘇を酌み供ふる古式あり、これを獻盃式といふ。この式凡そ午前四時の頃、番衆をして折障子を厳重に守護せしめ、堂衆掛役内陣南の方に間障子を入れて囲ひをなし、輪燈及び菊燈に灯をともし退出す。其後法主及び連枝のみにて式を行ふ。式果てゝ元朝修正會の鐘を撞き出し、直ちに衆僧本堂に出仕する例なり。〔參照〕屠蘇御流れ頒與（トソオナガレハンヨ）

例句
獻盃式
獻盃やいますが如き御容貌　禽化（鷺葵）
初灯の穂冴ゆる尊し御獻盃　三幹竹（同）
獻盃式果てゝ白むや菱燈籠　同（同）
獻盃や差貫の音のゆきかふて　句佛（同）

鞍馬寺牛王加持（くらまでらごわうかぢ）

季題解説　元日。京都北郊鞍馬寺本堂に於て牛王加持あり、その札寶珠九ツを押し、これを三御所に奉る。いにしへ諸人己が名をしるし堂前の箱に納む、初寅の日、木を以てその札をつき上げ、その上かりたる姓名の者に札を與ふること、箕面山の富の如し、富の濫觴なりと傳へいふ。この牛王は江州三井寺の遮那崇福寺の木印にして、印文に崇福印と彫りたり、何れの時より傳りしやその故を知らずといふ。

例句
鞍馬寺牛王加持
寶印の肉の赤さや牛王加持　冬葉（鷺葵）
加持の燈の鞍馬巫にゆらめけり　蒼梧（同）
貴船より嶮しき參る牛王加持　雨青（同）

舊年の雪に籠るや牛王加持　　三幹竹（同）

般舟院開帳（はんじゅいんかいちゃう）

季題解説　元日。般舟院は京都[illegible]の町通大宮西へ二町のところにあり。もと伏見院の皇女こゝに住み給ひ、般舟三昧の法を修せられたるに依りて般舟三昧院と號す。慈恵大師自作の像の開帳あり。

大山寺日の出護摩（だいせんじひのでごま）　日の出護摩（ひのでごま）　初日護摩（はつひごま）

季題解説　一日。相模國大山町なる大山寺にては、毎年一月元旦に日の出護摩と稱し、大護摩會を修す。修正會の一なり。

例句
日の出護摩　鷄が音は遥かにみだれ日の出護摩　　宵太（懸葵）
初日護摩　臼杵の玩具土産や初日護摩　　碧梧（同）

鍵引（かぎひき）

季題解説　元日。伊賀國上野地方に「鍵引き」、一に山の神の祭といふ行事あり、早暁山神の寶木に大き注連繩を張り、各村の男、小さき子に至るまで出でゝこれに鍵をかけて歌を唄ひながら引く、これを鍵引といふ。即ち西の國は絲や綿、東の國は錢や金、某の門へ千兩箱五ツ六ツ、ガランコ、ガランコと唄ふ。當日は注連繩を結ぶ大木の根に男女の陰部にかたどれる木彫を並べおくと云へば、道祖神祭の一種なるべし。

例句
鍵引　鍵引や歌面白う福を引け　　三幹竹（懸葵）

年頭墓參（ねんとうぼさん）

季題解説　一日。徳川幕府時代よりの慣例として、長崎に生れ長崎に祖先の墓をもつ人々は、元日に鎮守社たる諏訪神社へ參拜し、併せて家々の檀那寺へ參詣し、祖先の墳墓に參拜す。この慣例今に傳へて行はる、これを年頭墓參といふ。

例句
年頭墓參　年頭の墓參に寺を尋ねけり　　不知火（懸葵）

濱拜み（はまをがみ）

季題解説　一日。安藝國地方の製鹽業者この日鹹水の煎熬を休み、鹽屋の入口に注連飾をなし門松を立て、美事に掃除したる鹽釜の前に荒菰を敷き祭壇を据ゑて、鏡餅と清酒とを供ふ。その釜方の高き處に鹽釜明神を祀り燈

明を獻ず。祭壇の前に展べられたる蓆に濱師（鹽田所有者）と濱大工（鹽田雇夫の長）とが座して拍手再拜して、來る年の製鹽の祝福を祈願す。終りて別に運ばれたる屠蘇と數の子にて互に新年祝賀の獻酬をなす。獻酬すみて鹽田の守護神たる鹽釜明神社に參詣し各々歸宅す、これを濱拜みといふ。

參照 曳初

濱拜み　濱拜み鹽屋の注連に東風渡る　枳南（鹽　奕）

一望に鹽田うらゝや濱拜み　同（同　）

初妙見（はつめうけん）

季題解說 一日。妙見堂に初詣でするをいふ。妙見は菩薩の名、もと眞言密敎の經軌に講說せられ古くは東密台密を通じて大いにこれを供養し、修法せられたる史實あれど、中古以來日蓮宗に於て盛にこれを祭り、現に妙見堂なるもの我國の都鄙到る處にこれを見る。中にも攝津國豐能郡吉野村の妙見は後陽成天皇の御宇身延山第二十一世日乾の靈驗を感得せる以來、我が國に於ける妙見信仰の中心地たるの觀あり。この菩薩、眼睛特に淸潔に

してよく物を照らし、衆生の善惡行を鑒みて謬らざるがゆゑに妙見と名づく。その實體は北辰即ち北極星にして、この星は諸星中最尊なればまた尊星王とも稱す。その形像は一樣ならず、尊星王儀軌には、月輪の中に菩薩の形を畫く、即ち左手に蓮華を持ち、その花上に北斗七星あり、右手は左指並べて上に向ひ、大指を以て頭指の頭側を捻して、掌外に向けたる說法の印相をなし、天衣、瓔珞、その身を莊嚴し、左色雲中に結跏趺坐せる像を說き、又北辰別行法には、延命の本尊として四臂の像を說く。北斗念誦儀軌に、此本尊を供養すれば無量の求願みな成就し、福壽自在にして安樂なり、五穀成就して國土安泰なることを得る等の功德を說けり。

例句 初妙見　初妙見丹波路の雪踏み參る　一英（鹽　奕）

初彌撒（はつみさ）

季題解說 一日。キリスト降誕より八日目に當り、舊約時代天主其民に對して結べる契約の印たる割禮を受け、耶蘇なる聖名を附けられたるを祝す。ミサは天主公教會に於て毎日行はれ、天主に對する拜禮、感謝、贖罪及び祈願の四つの務を爲し、キリストの十字架上の苦難及び死去の功德を人々に施さんが爲めの祭式なり

【例句】 初彌撒

初彌撒や讃美歌に心新たなり　白天（懸葵）

鶴ケ岡八幡宮の御璽頂き（つるがをかはちまんぐうのごはんいたゞき）

御璽頂き（ごはんいたゞき）

【季題解説】 元日より三日間、相模國鎌倉町なる鶴ケ岡八幡宮にては、參者のために、白紙にて上部を包みたる神璽を恭しくその前額に擬す。これによりて、腦に病氣ある者はその苦痛を救はるゝと稱へ、當日參詣者殊に夥し。

【例句】 御璽頂き

さしあげて頂かせたる御璽かな　容太（懸葵）

松風の清しさや御璽いたゞきて　蒼梧（同）

清瀧權現護摩修行（きよたきごんげんのごましゆぎやう）

【季題解説】 元日より三日間。下野國日光の清瀧權現社にて嚴かなる護摩修行あり。修正會の一なるべし。

六波羅の大福茶（ろくはらのおほふくちや）

【季題解説】 一日より三日間、京都六波羅密寺に於て參詣の諸人に大服茶を飲ましむる行事あり。もと村上天皇御惱の時、觀音の靈夢ありて大服茶を奉りしに、御惱忽ち癒え給ひたるに始まるといふ。大服は大福に通じ、茶は百草の魁、梅は百花の兄といふにより、一年の穢惡を拂ふといふ。（季題 人事—大福茶（オホフクチヤ））

【例句】 六波羅の大福茶

弦召も見知り顔なり大福茶　三幹竹（懸葵）

黄檗放參（わうばくはうさん）

【季題解説】 元日より三日間、山城國黄檗山萬福寺の僧堂にて、寺僧打ち集りて、狂言、踊などをして戯れ遊ぶことを黄檗放參といふ。

【例句】 黄檗放參

放參の黄檗僧か風のほし　雨青（懸葵）

黄檗や放參の三日晴れつゞき　三幹竹（同）

叡山元三大師會（えいざんぐわんさんだいしゑ）

【季題解説】 元日より四日間、比叡山延暦寺にて、元三大師會とて法華八講を修し、大師の像を開帳す。横川にある畫像は民部卿法眼、俗にいふ粟田口法眼の筆。東塔北谷にある畫像は慈惠大師の自筆にて、降魔の眉毛をつけ

しものなりといふ。

【實作注意】なほ同じく般舟院を始め、眞如堂、廬山寺、東叡山等にても慈恵大師の畫像の開帳あり。【參照】元三大師忌(ガンザンダイシキ)　般舟院開帳(ハンシユウヰンノカイチヤウ)　兩大師詣(リヨウダイシマウデ)

萬代精進(ばんだいしやうじん)

【季題解說】元日より七日間、古へ和泉國萬代村の八幡宮の氏子、例年大晦日には他國にあるものも、前日までに家に歸りて居籠し、精進をなせり。是を萬代精進と云ふ。

【例句】萬代精進

精進やふるさと人と居籠りて　東一紅（懸葵）

東本願寺修正會(ひがしほんぐわんじしゆしやうゑ)

【季題解說】一日より七日間。京都東本願寺大師堂、阿彌堂の兩堂に於て修正會を營む。元旦晨朝阿彌陀堂の勤行は、登高座、漢音彌陀經の眞々讀。法主の聲にて始經す。次に大師堂の勤行は、正信偈を眞々讀し、念佛及び六首の和讚、最初の彌陀成佛のこの方はの一首を位上曲にて讀誦し、次第に念佛の間々に六首の和讚を讀み終り、願以此功德の廻向文を以て終る。その後蓮如上人著述の御文一帖目第一通を一臈拜讀す。尙三ケ日の間は兩堂の燈明殘らず終日燃し置き、大師堂眞影の御戸は終日開扉し、昏時勤行過ぎに閉扉すること、七日まで同じ。修正會中は兩堂の本間三所、並びに龜山帝御前を莊嚴し、供華は殘らず若松の眞に立替へられ、各影像前には鏡餅を山折敷に杉原紙を敷きて供ふるを例とす。

【例句】東本願寺修正會

修正會や御華は松の一色に　禽化（懸葵）
修正會に皆在住や直連枝　同（同）
修正會も眞々讀に明けそむる　六々坊（同）
修正會や登高座して御ゝ始經　三幹竹（同）
修正會や歷代の繪像掛け並ぶ　同（同）
修正會や供華の柳の灯影して　句佛（同）

屠蘇御流れ頒與(とそおながれはんよ)

お流れ

【季題解說】一日より七日間、東本願寺修正會の間、毎日午前九時より十一時過ぎまで、大師堂南側の水馬行內緣に疊六枚を敷きつらね、金屛風を引き廻し、莊りつけの調度美はしく、祖師前に尊供したる屠蘇酒の御流れを一般參詣者に頒つこと古來行はれ、屠蘇御流れ、又はお流れといふ。

念佛して屠蘇お流れや老の杖　三幹竹（懸葵）
元三やお流れ頂く老後番　同（同）
善男女屠蘇御流れの志　同（同）

淺草觀音追儺（あさくさくわんおんのついな）

淺草寺修正會（せんさうじしゆしやうゑ）

【季題解說】除夜より七日間。古、東京淺草寺にて、追儺の式を行ひ、鬼形の者一人を、方相氏の假面着たる者、追うて堂外を巡る行事あり。一に修正會ともいふ。

七福神詣（しちふくじんまゐり）

七福詣（しちふくまうり）　福神詣（ふくじんまうり）

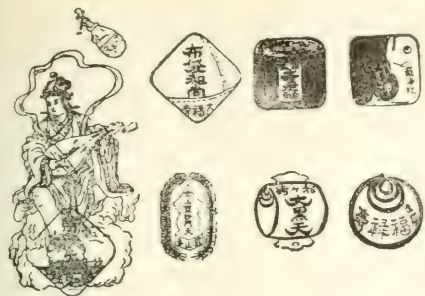
【季題解說】一日より七日間。一年の福を祈るために、正月松の内に七福神詣をなすこと、各地盛んなり。東京にては向島三囲神社の惠比壽・大黑、弘福寺の布袋、多聞寺の毘沙門、白鬚神社の壽老神、百花園の福祿壽、長命寺の辨財天を巡り、京都にては松ケ崎の大黑天、出町妙音堂の辨財天、廬山寺の毘沙門・福祿壽、荒神口護淨院の惠美須、寺町革堂の壽老神、麩屋町二條大福寺の布袋尊等を巡る人多し。

因みに、七福神を簡單に說明すれば、左の如し。

一、壽老人　南極老人、星の化身にして、壽命を司る神。或はこれを太上老君、即ち老子、名は聃のこととし、共に支那の民間信仰たる道敎より傳はりたるものにて、我國にてはこれを白鬚明神に配す。

二、大黑天。梵語、摩訶迦羅といひ、大黑天神經には「一切貧窮無福の衆生の爲めに、大福德を與へんがために、今優婆塞の形を現す」とあり。印度の婆羅門の神に屬するものにて、我國にてはこれを大國主命と習合す。

三、福祿壽。道敎の神たる天の三星、福と祿と壽とを擧げたるものにて、童顏長頭の異裝の支那人を以て標示するものなり。

四、惠比壽。大國主命の御子、事代主命とし、御父大國主命の大黑天と共に福の神として最も多く崇敬せらる。七福神中唯一の日本の神なり。或はこれを蛭子命とし、或は少彦名命とする說あれど如何。但し、日本の神とする點に於ては同じ。

五、辨財天。詳しくは能與總持智慧集大辨財天といひ、又宇賀の神將と稱し、一切衆生のために愛福を授け、無上菩提に入らしめんとしたまふ印度の神にして、七福神中唯一の女性なり。

六、毘沙門。これも印度の神にして、支那に譯して多聞天といひ、惡魔の軍を除かんが爲めに金甲を擐し、足に藍婆・毘藍婆の二鬼を踏み、手に寶珠と寶塔とを持ちたる神なり。

七、布袋。これは支那明州奉化縣の契此といふ僧侶にて、自ら稱して長汀子布袋和尚と號したる實在の人物なり。

例句

七福神詣　橋々もたのむ七福詣でかな　梨葉（梨葉句集）
小商人誘ひ合せて七福神　瓦全（年刊俳句集）
一福も申しうけずに詣かな　虚子（ホトトギス）

福神詣　願ぎ事もなくて福神詣かな　同（同　）
三園を拔けて福神詣かな　同（同　）

參考　每年正月民間に於いて七福神の祠を巡拜し、其の歳の福德を祈願する行事なり。一に七福參とも稱す。

七福神とは民間信仰にて福德神として崇敬せらるゝ七神仙のことにして、その七神に相當するものは時代に依りて多少の相異あれども略ぼ惠比須・大黑・辨天・毘沙門・福祿壽・布袋の六神を基とし、之に古くは吉祥天又は猩猩を加へしが、現今にては壽老人を加へて七神となすを通例とす。今是等を個々に就きて略述すれば、

惠比須　一名を蛭子、又は夷三郎と稱す。伊弉諾・伊弉冉二尊の生みませる御子に蛭子とて三歳になるも脚猶ほ立たざりければ、舟に乘せて海に放棄し給ひしが、後ちに攝津國西宮蛭子浦に到り給ひ、此の地に留りて蛭子神となり給ふといふ。蛭子とは其の御名にして、夷三郎とは三歳になるも脚立たざるより稱號となすと傳ふ。其の像は風折烏帽子に狩衣・指貫を著け、腋下に鯛を挾み釣竿を持つ。一說事代主神なりといふ。

大　黑　既に本書冬之部子祭（四一三頁）の條に記したれば參照されたし。

毘沙門　一に多聞天と云ふ。印度に於ける佛法守護の神將にして、善根を施す者に無量の財貨を與へ、其の名四方に聞ゆるを以て多聞天と號す。此を以て我が國にては福德の神として崇敬す。その像は身に金甲を着け兩手に寶塔と鉾とを持ち、百足を其の使獸（つかはしめ）と爲す。

辨財天　略して辨天と云ふ。七福神中唯一の女神なり。印度に於ける福德の神にして其の名を宇賀神將と云ふ。我が國にては辨財の文字より成金等と結び付けて之を福德の神となし、又其の名宇賀を五穀の神倉稻魂（ウカノミタマ）に附會せるものもあり。其の像天女の形にして、龍に坐して琵琶を彈ずる相に作る。

福祿壽　その名稱は福星・祿星・壽星の三星を合せて作れるものと云ひ、一

に南極老人星の化身にて、支那宋の嘉祐年中の道士とも云ふ。延命の神にして我國にては之に福壽を祈る。其の像は短身にして長頭の老人美髯を湛へ、杖頭に經卷を結び、白鶴を使獸と爲す。

壽老人　福祿壽と同星と傳へ、延命の神なり。その像老人にして杖を携へ、玄鹿を使獸とす。玄鹿は鹿の年古りたるを云ひ、その肉は能く二千歳の長壽を保たしむと云ふ。

布袋　支那宋代の禪僧にて名を契此、長汀子と號す。常に大なる布袋を荷ひ、聚落にて得たるものを盡く此の嚢中に納む。故に世之を呼んで布袋和尚と稱す　其の像は肥滿せる僧形の老人悠々として微笑し杖にて大なる布袋を負ひ、軍配團扇を持す。又十八人の群兒之に追隨するもあり。

以上の七福神は日本・支那・印度の古傳說に基きて形成せられ、足利時代の畫工によりて畫かれたるに始まる者の如し。然して當時より之が信仰世に弘まり、徳川時代に及びては町人の崇敬殊に深く益々盛となりて、或は寶船の如きを生じ、又は七福參りの如く世俗一般の行事として今日猶ほ一部の間に行はれつゝあり。尙ほ東京にて江戸時代より市人の巡拜する七福神の詞として傳へらるゝものに左の三箇所あり。卽ち、

(向　島)三圍の蛭子・大黑。弘福寺の布袋。多聞寺の毘沙門。白鬚の壽老人。百花園の福祿壽。長命寺の辨財天。

(谷　中)上野の大黑。淺草の蛭子。不忍の辨天。谷中天王子の毘沙門。谷中長安寺の壽老人　日暮里花見寺の布袋。　端西行庵の福祿壽。

(山の手)目黑不動内の大黑・蛭子。目黑蟠龍寺の辨天。二本榎の毘沙門。白金瑞聖寺の布袋。白金妙圓寺の壽老人。福祿壽。

以上の如きものなり。

四天王寺修正會（してんわうじしゆしやうゑ）

【季題解說】一日より十四日間。大阪の四天王寺に於て修正會を行ふ。卽ち六時堂は元日より十四日まで、芹田坊は四日、太子堂は六日、椎寺は八日より十二日までと定めらる。これを四天王寺修正會といふ。【參照】天王寺牛王出（ごわうだし）

【例句】天王寺修正會

修正會の大鐘鳴るや天王寺　東一紅（懸葵）

修正會や連るゝ子遊ぶ龜の池　同（同）

熊野連歌始（くまのれんがはじめ）

熊野連歌（くまのれんが）

【季題解說】正月二日。紀伊國熊野權現の本宮の拜殿にて、社家と地下人と相交りて、百韵の連歌を興行あり、その發句は往古神託の句なりと云ふ。卽ち「この山のあるじは花のこかげかた」の句なり。これを熊野連歌始とい

ふ。【參照】東照宮連歌始（トウシヤウグウレンガハジメ） 人事―江戸城連歌始（エドジヤウレンガハジメ）

【例句】熊野連歌
熊野連歌地下も參りて膝交ゆ　枳南（懸葵）

北野の筆始祭（きたののふではじめさい）

【季題解説】一月二日。京都北野天滿宮に於て、祭神菅公は文運の神として尊崇せらるゝに因みて筆始の小祭を行ひ、參詣の人々に筆始の護符御判を授與す。これを筆始祭といふ。

【例句】筆始祭
寒紅梅咲くや北野の筆始　雨青（懸葵）
一二輪しるしの梅や筆始　三幹竹（同）

船靈祭（ふなだままつり）

【古書校註】【栞草】船に酒饌を供し以て船神を祭る也。
【雜談抄】攝の住吉社の側に、船玉神とて小社有り、是れ則ち船神にて侍れば、美奴賣の神を祭れる也。然れども船魂の義は住吉社家者流の神祕と云々。此船玉を尋常も船中に崇め奉る所也。殊に歳首には餅酒其外祭奠を整て之を祭る。云々。
【三才圖會】舟神媽祖娘と名づく、俗に之を舟菩薩と謂ふ。唐船長崎に來て、間々祭る所の神是れなる乎。本朝住吉大明神を以て舟神とする也、舟玉の社末社に有り。

【季題解説】正月二日。諸國にて船靈を祭り、年中の海上安全を祈る祭をいふ。

【例句】船靈祭
荷主來て祝ふ舟靈祭かな　十二星（鐵氷集）
船靈の御明し見ゆる渚かな　六篠（草上俳句集）
上汐や船靈祭る荷たり船　洗川（現代俳句大觀）
雪少し散つて船靈祭かな　夜潮（年刊俳句集）
大漁旗たてゝ船靈祭かな　砂村（同）
船靈のみてぐら濡るゝしぶき哉　北涯（俳人北涯）
魚飛ぶや船靈祭る海の凪　鱶洲（昭和一萬句）
船靈や苫新しき客設け　同（懸葵）

島繫の神事（しまつなぎのしんじ）

【季題解説】正月二日。近江國琵琶湖上なる竹生島は、大津を距る十六里、周圍凡そ二十六町、島の形、猛虎の蹲るが如く、斷巖危壁削立して攀づべか

らず、唯、島の東方に一の入江ありて、漸く舟を入るゝに足る。島の半腹に洞穴あり、左右に通ず。毎年正月二日、社僧燭を秉りて洞に入り、縄を通して島を繋ぐ。世にこれを島繋の神事といふ。現今は一月二十五日に行はるといふ。

例句

島繋ぎ

篁を透く旭ゆたけし島繋ぎ　蒼梧（懸葵）

島繋ぎとめて太さや年の縄　三幹竹（同）

天狗宴（てんぐゑん）

愛宕寺の天狗宴　天狗酒盛　結召酒盛　愛宕寺牛玉加持

古書校註

【山之井】二日弦指（一）之を行ふ。

【栞草】紀事正月二日愛宕寺の牛玉加持也、清水坂の西にあり、今日夜に入て弦指客殿にあつまり、南北二行に座し、おの〳〵宴飲す、其座上にある人、片木を以て立舞ふ、これを天狗酒もりと云、もと轉供酒盛也。其體麁豪なるが故に、其音をかりて天狗酒盛と云ふ。宴終てのち、各堂に登り牛王杖を以て、大に門扉或は床壁を敲き又法螺を吹き太鼓をうつ、其間に寺僧牛王を貼す、是みな惡鬼をはらふの謂也。雜談抄天狗酒盛は、東西に座を設けて、互に脊の高き人を出して勝負を爭ふ事と云。

【いつまで暦】二日、おたぎ六波羅坂町念佛寺にて弦指どものなす事なり。

註（一）法師を云ふ、今神前に甲冑を帯し出るものなり、元つるめそと云ひて弓のつるを賣るものなりし（つるめせの轉）今は俗人にして法師にあらず。又弦を賣ることとなし、一種の稱となる、或弦指とも云ふ、以上一話一言に見ゆ。

季題解説

正月二日。京都松原通愛宕寺に、古へ行はれたる牛王加持の酒盛をいふ。日次紀事に「清水坂の西に在り。今日、夜に入り、弦指、客殿に聚り、南北二行に列座して、各宴飲す。其の座上にある人、倍木を持ちて起ち舞ふ。是を天狗の酒盛と謂ふ。元、轉供の酒盛也。其の體麁豪也。故に其の音を借りて天狗の酒盛と謂ふ。宴終りて後、各々堂に登り、牛王杖を以て大いに門扉を敲き、或は床壁を敲き、法螺を吹き、太鼓を撃つ。其の間、寺僧牛王を貼す。是皆惡鬼を攘ふの意なり。」と見え、又滑稽雜談には「天狗酒盛は東西に座を設けて、互に背の高き人を出して勝負を爭ふ事と云ふ」とあり。

例句

天狗宴

醉づらの天狗に似たり愛宕寺　車蓋（類題集）

かたどりて天狗の宴や阿當護寺　觀魚（明治一萬句）

天狗宴地を搖り山を動せり　俳小星（俳句大觀）

方丈や氷酒割る天狗宴　茂竹（なぎの花）

天狗宴おかめ般若も出でぬべし　草郎（昭和一萬句）

弦召酒盛　弦召の酒もり更けぬ松の内　重厚（類題集）

厨下（ちうげ）

【季題解説】　正月二日。夜に入りて京都知恩院にて、現住の大僧正、厨に出で、疊を設け屏風を囲ひ、僧徒は左方に、俗人は右方に坐し、各に饂飩を饗し、その後住職土器を以て酒を酌み、僧徒より俗人まで一人ごとにその酒器を戴く。然る後僧俗上下混雑して宴遊をなす。これを厨下と稱せり。

【參照】昆布式（こんぶしき）

【例句】
厨下　僧俗の酒呑み競ふ厨下かな　三幹竹（懸葵）

三弘法詣（さんこうぼふまうで）

【季題解説】　正月二十一日、京都にて西賀茂の西光寺、御室の仁和寺、九條の東寺の弘法大師に參詣して、家内安全無病息災を祈願する慣習あり。これを三弘法詣といふ。【參照】初大師（はつだいし）。兩大師廻り

【例句】
三弘法詣　雑煮腹三弘法へ詣りけり　黒洲（懸葵）
雪の中に三弘法の焚火かな　同（同）
仁和寺や三弘法の二日晴れ　同（同）

大日詣（だいにちまうで）　駒舞（こままひ）

【季題解説】　正月二日。陸中國鹿角郡小豆澤村の大日堂にて大祭行はれ、郡内各地より大日詣と稱へて、こゝに群集し、神事の後、數番の舞樂の演奏あり。これには附近各村より、由緒ある舊家より舞人撰出さるゝ例なり。笛・太鼓の節面白く、舞人數名いづれも假面を被り、太刀を携へて舞ひ、又駒舞といふ古雅なる舞樂も行はるるといふ。

長崎七高山詣（ながさきしちかうさんまゐり）

【季題解説】　正月二日より十五日頃まで。長崎七高山詣とて、市中の老若、草鞋がけに腰辨當を携へ、市の周圍なる金毘羅山・七面山・秋葉山・烽火山・峨眉山（彥山）・豐前坊・愛宕山の七ヶ所の山々を巡拜して、その祠堂に參拜の札を打つ慣習あり。この七ヶ所は必ず一日中に巡拜するを要し、又日を改めて、やゝ遠く且つ高峻なる岩屋山に參拜す。昔は甚だ盛に行はれ、各山上には各種の露店・見世物等並び、頗る雑踏せしといふ。

【例句】
長崎七高山詣　吉方より七高山を詣でけり　零雨（懸葵）
三足の草鞋七高詣かな　冬葉（同）

健脚の翁七高詣かな　　蒼梧（同　）

元始祭（げんしさい）

季題解説　一月三日。宮中賢所皇靈殿神殿に於て行はせらる。此の御祭典は明治三年神祇官に神殿御造營あり、翌三年正月三日行幸御親祭の御豫定の處、明治天皇御徵恙の爲三條右大臣を御使として參向せしめらるゝと共に「朕恭しく惟みるに大祖業を創むるや神明を崇敬し蒼生を愛撫し給ふ、祭政一致由來する所遠し矣。朕寡弱を以て夙に聖緒を承く。日夜怵惕天職の或は虧けむことを懼る。乃祇して天神地祇八神暨列皇の神靈を神祇官に鎭祭し以て孝敬を申ぶ。庶幾くは億兆をして矜式する所有らしめよ。」と詔し給ひ、翌四年正月三日御親行御親祭あらせらる。玆に於て之が恆典たるべきの議起り、神祇省は同年十二月、正院に對し「正月三日行幸ノ祭典、自今更ニ元始祭ト稱シ、天孫降臨天日嗣ノ本始ヲ歳首ニ祀ル事、義ニ於テ然ラン。卽皇祖瓊瓊杵尊ヲ始メ、御歷代皇靈ヲ奉祀スヘシ。神武天皇遙拜儀今年旣ニ擧與アリ、皇大神宮御拜式又旣ニ起ル。宜元始祭ト併セテ、三祭海內普ク遵行セシメ、乃天祖ノ德澤ヲ崇奉シ、天孫開國ノ本祝ヲ祝シ、神武ノ創業ヲ追尊ス此三祭國家ノ大典トシテ、人主ノ以テ天職ヲ始メ玉フ所、億兆一民モ忽諸ス可カラサルノ國律タルヘシ」と上陳し、五年以降年年元始祭と稱して御祭典を行はるゝことゝ成りたる大祭なり。元始祭なる稱は古事記の序に「元始綿邈、先靈に賴りて生神立人の世を察す」の句あるに依り開國創業年頭の各義に通ぜしめられたるものなるべし。

例句　元始祭

旗立つるのみ知る賤や元始祭　　戊子（昭和一萬句）

御湯立つ笹に雪降る元始祭　　鶯池（鶯池句集）

曲玉や小鈴ならべて元始祭　　一澄（懸葵）

萬世の靈なれや元始祭　　柴莚（同　）

三殿の雪しづかなり元始祭　　瓜青（同　）

参考　每年一月三日宮中賢所・皇靈殿・神殿の三殿に於いて天皇親ら行はせ給ふ御祭典なり。元始とは古事記の序に見えたる「元始綿邈賴ニ先聖一而察ニ生レ神立レ人之世ニ一」の意に基くものにして卽ち元始祭は皇位の元始を御親祭在らせらるゝ報本反始の義に外ならざるなり。御祭典執行に當りて、御殿の裝飾を爲し大眞賢木を御門の左右に建つ。宮內の官員等着床し、次に三殿の御扉を開く。此の間奏樂あり。次に神饌・御幣物を供ふ。畢りて御內陣に御座を設く。時刻到りて天皇出御あらせ給ふ。親王・內大臣・宮內大臣各大臣以下近衞士官等供奉す。

天皇先づ綾綺殿にて御束帶を着御、御手水の後、賢所に進ませ給ひ、御幌の內に入御あらせらる。先づ御玉串を奉りて御拜在らせられ御告文を奏せさせ給ふ。畢りて皇靈殿・次に神殿と巡次に御拜ありて入御あらせらる。次

に皇后・皇太子・皇太子妃の御拝あり、次に親王以下宮内官員の拝禮あり。畢りて神饌・御幣物を撤し三殿の御扉を閉づ、之にて御祭典畢る。元始祭は明治五年の正月より始まる。即ち明治三年神祇官再興に際し、八神・天神地祇及び歴朝の皇靈を鎮座して、天皇は歳首に皇位の元始を祝ひ奉り給へり。翌四年正月は神祇省にて御親祭あり、五年正月三日に初めて元始祭の名稱を決定し是れより年中恒例の儀式となれり。

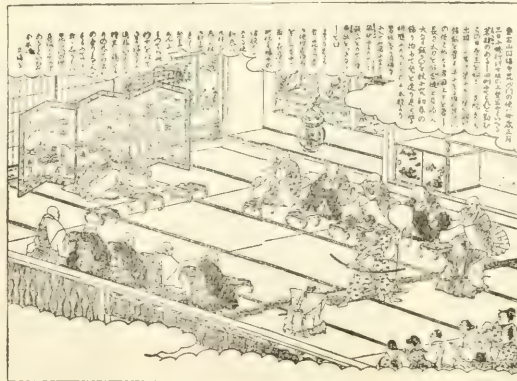
東照宮謠初（とうせうぐううたひぞめ）

季題解説 正月三日。徳川時代に暮六つの時、櫻田門内に篝を焚き、諸大名登城、謠初の儀あり。今それに倣ひ、上野東照宮拜殿に於て、一月三日午後一時より四海波・老松・東北・高砂等の謠、弓箭立合の舞をなす。徳川家一門及舊臣華族參席、出演者は觀世・喜多は年々變らず、寶生・金剛・金春は輪番に相勤め、此時着用する時服は社務所に備付けられしものを貸與せらる。右終つて各太夫に饗應を給ふ。

例句 東照宮謠初

肩に受けし時服着て立つ謠初　香村（ホトトギス）

毘沙門の使（びしやもんのつかひ）　愛宕の神事　愛宕の使

季題解説 一月三日、或は二十四日、東京芝愛宕山なる愛宕神社にて行はるゝ神事なり。同日、毘沙門天の使と稱する者、昆布にて作りたる兜に齒朶を前立とし、昆布の鎧を著し、その他注連飾にて粧ひしものを著し、七尺餘の太刀を佩き、擂木を副佩とし、右の手に大なる杓子を杖にし、從者一人、黑木綿の布子に大なる釘貫の紋を紙にて貼付け、是も擂木をさして社殿より出づるを、多勢手を引き腰を抱へて新坂を下り、更に數十階の男坂をたどり、社務所に至りて物申と言ひ、毘沙門天の御使といふを、いざ／＼お通りとて、神人等座をつらね居る中へ通り、杓子をつき立てはだかり、睨り

出でたるは毘沙門天の使なり云々、おのみやれ〳〵、おのみやらぬに於ては、此の持ちたる杓子にて招き申すが返答は何とでござるといふに、一同いづれもたべます、御使者御苦勞でござる、おかへりなされと云へば、然らばかへり申すと、もとの如く杓子を杖つき歸るなり。かくて後、强飯の式ありて終る。

［例句］ 愛宕の使

輿揭げて暮れは愛宕の使かな　庭後（江戸廃句集）
昆布鏝かきこでて愛宕使かな　菅楢（同　集）
愛宕使杓子も物を申すかや　三幹竹（同　）

柴神樂（しばかぐら）

春日の神樂始（かすがのかぐらはじめ）

［季題解説］ 正月三日、古、奈良春日の攝社若宮社頭にて、里人、柴の束ねしを捧げて神樂を奏せしを柴神樂といふ。今はこの日、神樂始の儀あり。

［例句］ 柴神樂

よきを着て捧げ申しつ柴神樂　青々（妻木）
寺々に柴の匂や柴神樂　同（同　）
柴あげて古きためしの神樂哉　同（同　）
柴神樂鹿の寒むげに見ゆる哉　只角（最新二萬句）

春日の神樂始

神樂始春日燈籠に東風渡る　三幹竹（[illegible]　集）

玉せり（たませり）

玉祈祭（たませせり）　玉取祭（たまとりまつり）　玉せせり

［季題解説］ 一月三日、筑前國箱崎の官幣中社筥崎宮の神事。方言には「玉せり」と云ふ。玉競の義なり、本社神殿に石の如き玉を備へ、後、これを約五丁隔りたる末社惠比須社に持出で、參詣の群集に投ぐ。其時數人あり、みな壯年にして、裸體のまゝ新しき犢鼻褌を締め、海水又は井水にて身を淸めて神前に驅付け、爭ひて此玉を得て當年の運氣を開かんとす。幾十血氣の士いづれも狂したるが如く、互に力を極め、人には渡さじと爭ふ。時に力勝れたる者、早くも玉を抱き地に伏して動かざるが如きことあれば、他より沙を振懸けてこれを苦しめ玉を放たしむ。かくて人の肩に登り頭を踏みて累々層をなし、鯨波の聲を揚げ、玉を擁しつゝ本社の方に進む。本社の樓門下に達すれば、神官は玉を受取り、直に神前に供へて祭典を行ふ。當日これを見んとて來集する者群をなし、雜沓を極む。この神事はいつの頃より始まりしか詳かならず。傳へ云ふ。一木某、山口某の二人、本宮に參詣の途、潮井の沙を採らんとて箱崎の濱に到りしに、木玉二つ（一つは徑一尺二寸、一つは徑一尺五寸）海上に浮べり、奇なりとてこれを拾ひ、宮に奉納せり、これを男珠・女珠といふ。それより正月三日古例により一木・山口兩家の子孫禮服を着して參社し、本宮の拜殿にて珠洗ひの儀を行

ひ、後、惠比須社に持出し、神官祝詞を奏し終りて攤人に投ずるなりといふ。

例句

下せり　玉競の裸をたゝく霰かな　風生（昭和一萬句）

松の虚空に神渡せ給ひ玉競　禪寺洞（同）

玉取祭　玉取りしあかゞね肌や刀疵　魯牛（懸葵）

小鷹の田植式（こたかのたうゑしき）

季題解說

正月三日、安房國長尾村の小鷹神社にて行はるゝ田植祭は、元日に供へたる餅を鍬の柄になぞらへたる細き竹に貫き、鍬取早乙女、神官の正面に向ひ、氏神様の御田を耕し奉ると唱へつゝ、太鼓打ち振りて社殿の周圍を廻り、大勢にて「ドウダラボ〳〵」と、同じく繰返して廻り、最後にその年の惠方に向ひて牛を呼べば、牛に扮せる人「モウ」と答へて來り、それより早乙女を初め、參拜の人々各々杉葉を以て、田植の眞似をなす。神官も亦、「ニイホンサラリト、コフネンナラリト、ホトトギスノコエモ、コエモキウナリ」と謳ひつゝ、田植の眞似をなす奇習なり。

茗荷祭（めうがまつり）

茗荷神供（みやうがじんく）

季題解說

正月三日、丹波國以鹿郡志賀村、オソクキ神社（祭神未詳）の社地の小溝のほとりに、一間許りの芝原あり、常に垣をもつて圍ひ、人の踏むことを禁ず。今日社人此所に至つて祈念すれば、暫くしてその芝原の中より茗荷を生ずること三莖或は五六莖に至ると傳へらる。即ち、社人これを取りて神供とす。里俗その多少によりてその年の豐凶を卜し、神供多ければその年豐年、少ければ凶年との信仰あり。尚五日には社地に筍を生ず、社人取りて五日の神供とす。いかに寒氣きびしく雪深き年といへども恆例違ふことなしといふ。

例句

茗荷祭　雪深き中の茗荷をまつりけり　冬葉（懸葵）

豐年をことほぐ茗荷祭かな　沈生（同）

茗荷神供　瑞兆の尊き茗荷神供かな　三幹竹（同）

吉兆祭

季題解説 一月三日、淡路國洲本町在拵江なる住吉神社にて毎年正月吉兆祭を行はる。當社は、洲本の町より惠方にあたれば、殊に參詣多しといふ。

例句 吉兆祭

おのころの島初風や吉兆祭　淡洲（懸葵）

東寺牛王加持

舟牛王

季題解説 一月三日、弘法大師の開山たる京都東寺にては、その大師堂に於て牛王の寶印を捺し、參詣の諸人に與ふ。世に「船牛王」と云ひ、船中にこれを持參すれば風波の難を免れ得ると云ひ傳へられ、今も猶盛んに行はる。

例句 舟牛王

舟牛王難波の舟師參りけり　三幹竹（懸葵）

ありがたき御修法の寺や舟牛王　同（同）

東叡山大黑の湯

お福の湯　御福の湯　大黑詣

季題解説 正月三日　江戸東叡山中の護國院に大黑天あり、正月三日に餅をひたしたる湯を參詣の人々に飲ましむ、これを大黑湯と云ふ。これを飲むもの必ず所願成就すとて、この日殊に參詣多し。或は「お福の湯」又は「御福の湯」とも稱し、兒女を伴ひてこれをいたゞかすれば福智を得るとの信仰もあり。江戸時代町家に最も尊信せられたるも、現時はこの行事絶えたり。

例句 お福の湯

慾深き願ひの數やお福の湯　三幹竹（懸葵）

祈るともなく戴くやお福の湯　同（同）

東叡山兩大師詣

兩大師廻り

季題解説 正月三日。江戸上野、東叡山の兩大師堂（慈惠大師、慈眼大師の像を安置す）に、諸人參詣するをいふ。江戸時代よりの慣習なり。東都歲時記には、「毎月といへども、正・五・九月は別して詣人多し。黑門前の大路

橋より南に植木、其餘商人市をなせり。毎月三日は慈惠大師御影を掛けまゐらす、民部卿法眼の筆なり、云々。」と見えたり。

〔例句〕
両大師廻り　梅が香や山の大師の廻り月　汶村（東都歳時記）
お大師の二ヶ所を廻る三日哉　三幹竹（懸葵）

初祖師（はつそし）

〔季題解説〕一月三日、東都にて、諸人、各所の祖師堂（日蓮宗の開祖、日蓮の堂）に參詣することを、初祖師といふ。杉並堀の内の妙法寺、池上の本門寺、祖師堂等甚だ賑ふ。

堂押（だうおし）

毘沙門堂の堂押（びしやもんだうのだうおし）　浦佐の堂押（うらさのだうおし）

〔季題解説〕正月三日。越後國南魚沼郡浦佐の普光寺毘沙門堂に、堂押といふことありて、遠近の男女來るもの多し。北越雪譜に、「押しに來りし男女、先づ普光寺に入りて衣服を脱ぎすて、身に持ちたるものも猥りに置きすて、婦人は浴衣に細帶、まれには裸體もあり、男は皆裸なり。燈火を點ずるころ、かの七間四面の堂に浴衣裸體の男女押し入りて、錐も立つるの地なし。余も若かりしころ、一度此の堂押にあひしが、上へあげたる手を下へさぐることもならざる程に逼り立ちけり。押といふは、誰ともなくサンショウ、サイコウサイと呼はばはりて、北より南へごろ／＼と押し、又呼ばはりて西より東へ押し戻す。此の一押にて、男女ともに元結おのづからきれて、髮を亂すこと甚だ奇なり。（中略）況んや此の堂押に、いさゝかも怪我を受けたるもの昔より一人もなし。婦人の中には湯具ばかりなるもあれど、闇處にわやくやして人もみだりがましき事をせず。これおの／＼毘沙門天の神罰をおそるゝ故なり。裸なる所以は、人氣にて堂内の熱すること燃ゆるが如くなる故なり。願望によりては、一里二里の所より、正月三日の雪中寒氣肌を射るが如きをも厭はず、柱の如き氷柱を裸身に背負ひて堂押に來るもあり。二タ押三押に至れば、如何なる人も熱きこと暑中の如き故、堂のほとりに大なる石の手洗水盥に入りて水を浴び、又押して入るもあり、一押おしては息をやすむ。七押七踊にて止むを定めとす。踊といふも桶の中に芋を洗ふが如し。故に人皆滿身に汗を流す。筆七踊りめにいたりて、普光寺の山男（寺男のこと）手にさゝらを持ちて、人々の手聲に乘りて出で來り、衆人の中へ押し入り、大音にて「毘沙門さまの御前に黑雲が降たモウ、」衆人「なんだとてさがつたモウ、」山男「米がふるとてさがつたモウ」と、さゝらをすり鳴らす。此のさゝら內へ摺れば凶作なりとて、外へ／＼とすり鳴らす。又志願の者兼て普光寺へ達し置きて、小桶に神酒を入れ、盃を添へ

て獻ず、山男挑燈を持たせ人を押分くるもの、二十人ばかり先に進みて堂に入る、此の盃手に入れば幸ありとて、人の濤をなして取らんとす。神酒は神に供する狀して、人に散し、盃は人の中に擲る。これを得たる人は宮を作りて祭る。その家必ず思はざる幸福あり。この挑燈をも爭ひ、その骨一本たりとも田の水口へ挿し置けば、この田熟實し、蟲のつく事なしといふ。」とあり。その奇習思ふべし。この堂押のこと、諸所にありて、多くは寒中通夜する時に行はれたるものなりといふ。なほこの行事、現今は三月三日夜と改められしといふ。【參照】西大寺會陽（サイダイジヱヤウ）

【例句】

堂押　滿堂の裸七押し躙りけり　牛山人（懸葵）

住吉踏歌節會（すみよしふたうせちゑ）

【季題解説】正月四日、攝津國住吉神社にて夜戌の刻より踏歌節會あり、兩官氏人一之神殿に參り幣殿に着座す、樂人拍子笙篳篥笛大拍子等を持ちて北の中門にならび立ち、雙調を吹き此殿をうたふ、言吹綾童御前を廻ること三匝、この間御前にて言吹以下舞終りて禪文を申し、袋持をめし御前に參り、餅を袋より取り出してその數をよみ退出す。時に樂人筵田をうたふ、綾童御前に出て舞ひ、田中、井戸をうたひ終りて退出す。兩官以下樂人舞人等神宮寺に參りて萬歲樂・延喜樂を奏して、その外式事どもありて退出すといふ。【參照】熱田踏歌神事（タウカノシンジ）　鹿島踏歌祭（タウカサイ）

【例句】

住吉踏歌節會　松籟も鳴らぬ四日の踏歌哉　王幹竹（懸葵）

筵田の催馬樂うたふ踏歌哉　同（同）

歳山祭（としやままつり）

【季題解説】正月四日、常陸國鹿島神宮正殿の四方に神木の椎の木あり。その年の惠方にあたりたる椎の木の下に篝火を焼き、木簡を劍の形につくりて、その中央に「十吉合」の三字を書き添へ、此の木簡に椎の木を折添へて篝火にかざし、大宮司家の惠方なる軒に挿しおくを歳山祭といふ。これは昔の御占祭の遺風なり。

【例句】

歳山祭　惠方なる椎に神事の篝かな　王幹竹（懸葵）

裏白連歌（うらじろれんが）　裏白俳諧（うらじろはいかい）

【古書校註】

【栞草】「雍州府志」北野社に正月四日裏白の連歌あり。凡そ連歌は懐紙（一）

四枚なり。中古執筆(二)誤て片面を脱しこれを記さず、是より流例となりて片面を白紙にす、故に一枚をそへて五枚とす、依て號するなり。

註（一）クワイシ　和歌又は連歌を正式に詠進するに用ゐる紙、檀紙又は杉原紙の全紙を用ゐる書式あり。（二）シユヒツ　俳諧の座に於て文臺の捌を爲す者。

【季題解說】　正月四日。古、京都北野松梅院にて興行せし連歌。中古、執筆の人、誤りて初面の次を白紙として記さず、後にその誤、流例となりて毎年片面の白紙を存するに至る、故に裏白連歌と稱す。俳諧も亦之に傚ふ。

【參照】　熊野連歌　若菜連歌　清水寺本連歌

【例句】　裏白連歌

裏白の連歌の發句や梅蕾む　　鶴化（懸葵）

緇衣白衣交じる裏白連歌哉　　羊我（同）

髪長も參る裏白連歌かな　　三幹竹（同）

【參考】　陰暦正月四日京都府京都市上京區馬喰町、官幣中社北野神社にて行ふ。江戸にては正月二日龜戸天神にて之を行へり。卽ち八句の連歌を懷紙に書きて奉るものにして、懷紙の表にのみ文字を記し裏を白紙とする故に裏白と稱するなり。雍州府志ニ北野宮ノ條に「正月四日有ニ裏白之連歌一凡連歌之懷紙四枚也、中古執筆人誤脫ニ片面一不レ記レ之、自レ是爲ニ流例一存ニ片白紙一又別添ニ一枚一爲ニ五枚一依レ之謂ニ裏白連歌一」とあり。德川時代最も盛んに行はれたるものなり。

接神

迎神　送天神

【季題解說】　正月四日。臺灣の俗說に舊臘二十四日諸神上天して玉皇上帝に朝賀し此日還駕す。依て各戸諸神を迎ふる爲、神馬駕馬と稱する紙製の馬人形を燒きその煙を上天せしめて騎馬に供す。此日、諸神不在中降臨せし天神歸上するを送天神といふ。【參照】開印

開印

祠廟開く

【季題解說】　一月四日。臺灣にて此日祠廟を始めて開き、上天の神を迎ふる儀あり。これを開印といふ。

【作法注意】　開印は他に官衙開くの場合にも用ふ。彼此混同すべからず。

【參照】　接神　人事—開印

稻荷の大山祭

注連張神事　御土器

【季題解說】　一月五日。京都伏見なる稻荷神社御山の山上御神蹟七ケ所(上社神峰・中社二ノ峰・下社三ノ峰・荷田社間ノ峰・長者社劒石・田中社荒神峰・御膳谷)に、注連を引渡し、古式により清酒と中汲酒とを、耳土器に盛りたるを供進する神事を大山祭と云ふ。古來、この土器を得れば、武

運長久、商賣繁昌、殊にすべての勝負事に勝利を得、又酒造家はこれを得て釀造に用ふれば水質をすます等、奇しき靈驗ありといふ。爲めに、全國各地よりの參拜者夥し。神事は午前十一時、本殿祭の儀を畢りて、行裝を整へ、御供物の御唐櫃を先頭に、宮司以下祭員・氏子役員・特別崇敬者等の一行は、列を正して粛々と登山、御鷹谷の式場に向ふ。式場には早朝より群衆押しよせて神事の始まるを待つ。神事は、齋主の祝詞奏上に次いで、陪從は唐櫃より清酒と中汲酒とを盛りたる耳土器一百枚を取り出し、これを御饌石上に供ふ。時に群集はこれを爭ひ奪ひ、終りて一同直會の式あり。日影蔓を各自の襟にかけ、劍石に至り、驗の杉の小枝を烏帽子に挿し、山上の各靈蹟を巡拜する祭儀あり。

例句

京都の大山祭　大山祭怪我人も無く終りけり　黒　洲（懸　葵）

日陰蔓懸けし神主や大山祭　同　（同　）

御土器　三つの峰晴れし五日のお土器　三　幹竹（同　）

初縣（はつあがた）

季題解說　一月五日。京都宇治の縣神社の初詣は、初縣といひて人出多し。牝牡二匹の獅子、踊り進めば、紅木綿の揃着に黄鉢卷に白足袋なる、華々しき姿の稚兒達揃ひて神輿を舁き、行列をなして參詣す、神社にては福寄熊手、厄除御守の授與をなすといふ。參照 初詣ハツマウデ

御福迎（おふくむかへ）

季題解說　正月五日。古、尾張國熱田の上知我麻神社へ、諸人參詣して、祝福を祈り、祝ひの物を買ひ求むるを御福迎といふ。

初水天宮（はつすいてんぐう）

季題解說　一月五日、久留米市縣社水天宮、或は東京日本橋蠣殼町の水天宮の年初の祭禮に參詣するを初水天宮といふ。安德天皇及び二位平時子を祭神となす。〔三月〕冬―納の水天宮ヲサメノスイテングウ

例句

初水天宮　初水天宮興治座はけふ初日かな　巨　鹿（年刊俳句集）

戊の日を五日にしたる人出かな　枚　々（俳諧雑誌）

霰降る初水天宮の露店かな　蘭　聚（懸　葵）

淺草三社權現流鏑馬（あさくささんじやごんげんやぶさめ）

季題解說　正月五日。古へ、午刻、社人本社に至り祝詞神樂を奏し、庭上下

を着したる者、片面に鬼といふ文字を書きし的を竹の先へ付たるを持て鬼の前駈をなす、鬼に扮したる者是に添ひて出づ。社人騎馬にて鬼を追ひ本堂を巡りて其年の悪方より始め、「天地四方へ矢六筋を放つ、諸人此矢を拾ひて守とす。但し弓矢は眞の物にあらず、假初につくりし物なり。後には殆ど形式のみとなり、弓矢の役の神官、馬にも乗らず、竹づくりの形ばかりの弓を以て、社前に設けられたる鬼の的を射ると同時に、鬼面を被りたる者社殿より飛び出し逃げ去る、それを見物の子供等後ろより囃しながら追ひ廻はして式を終るに到りしといふ。

例句 三社權現流鏑馬　おはれてや脇にはづるゝ鬼の面　荷兮（東都歳事記）

淺草寺牛王加持（せんさうじごわうかぢ）　柳の牛王（やなぎのごわう）

季題解説 正月五日。淺草三社權現の法樂流鏑馬行はるゝ日の巳刻、本堂にて牛王加持を修し柳の牛王を諸人に與ふ。［参照］鞍馬寺牛王加持（クラマデラゴワウカヂ）　東寺牛王加持（トウジゴワウカヂ）　清水寺牛王加持（キヨミヅデラゴワウカヂ）

天王寺生身供（てんわうじしやうじんく）　舍利出し（しやりだし）

季題解説 正月五日より十四日まで、大阪天王寺太子堂にて修する會式。その式、棚所にて七十五膳の供物を調し、公人、白洲に立ちて御膳を捧げ、太子堂の階下に至れば、衆僧堂上に並居て轉供して寶前に供ふ。これを生身供といふ。聖德太子の御誕生會のためなり。

東福寺羅漢供（とうふくじらかんく）

季題解説 正月五日。東福寺にて、明兆筆の五百羅漢畫像を僧堂に掲げて供養をなすを東福寺羅漢供といふ。

五日戎（いつかえびす）

季題解説 正月五日。古、奈良の俗に、初戎を特に五日に行ひて、五日戎といふ。

嚴島神社の年越祭（いつくしまじんじやとしこしまつり） 神前相撲（しんぜんさうまふ）

【季題解説】 正月六日。嚴島神社に於ける六日年越の年越祭は午後六時頃より古典的なる神樂につれて莊嚴なる式典を擧げられ、一同退下したるあとにて時刻の「神前相撲」を行ふ、その立合の意氣の盛んなる、實つたの怒號のうちに押し合ひへし合ひ、全く肉彈相搏つの壯觀を呈すといふ。

鞆八幡の御弓神事（ともはちまんおゆみしんじ）

【季題解説】 正月六日、備後國鞆町祇園社の攝社、鞆八幡の御弓神事は神功皇后三韓征伐御凱旋の故事に倣ひて行はる。神事は六日夜を彼岸詣といひ、當番町繰つて「一申す／＼お弓を申す」と高唱しつゝ數多の提灯を點じ、親弓主・子弓主・小姓二人・矢取二人は何れも裃姿にて、神功皇后の甲冑を裝ひ御手に弓を手挾み給ふ神像と、武内宿禰の應神天皇を抱き奉る神像とを安置せる二つの御弓を持ちて、本殿に上り、祭儀の終つて勸盃式を行ふ。七日午後三時より又前夜と同じく「一申す／＼お弓を申す」を稱へながら所役のもの素袍にて參進し、祭儀の終るをまちて設けの弓場に參着し、十五間に五間の矢來の中にかけたる徑九尺の大的に向ふ、的裏の「鬼」の字は所謂惡鬼を射拂ふ意にて、式は先づ主典、白木の弓に白羽の矢を手挾み、弓場に立ちて艮巽坤乾中央と射、次いで親弓・子弓の弓主、古例によりて互に雌雄の矢を以て競射するものにて、古來有名なる神事なりといふ。

三島御田打祭（みしまおたうちまつり） 三島（みしま）

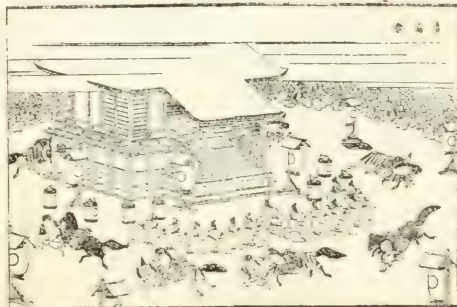
【季題解説】 正月六日、伊豆國三島町三島神社にて御田打祭の祭禮あり、農民等思ひ思ひの服裝に假面を被り、鍬鐵を肩にし、市中を踊り歩くを例となす。これ耕作の利を祈るためなりといふ。

芝明神祭（しばみやうじんまつり）

【季題解説】 正月六日、江戸（芝）にある飯倉明神にて祭あり、年越とて參詣群をなすといふ。社は六十六代一條院の御宇、寛弘年中託宣によりて此地に勸請せるものなりといふ。

【例句】
芝明神祭　明神の祭もどりや御成門　船伏山（[illegible]葵）

（住吉の白馬神事の圖）

（青馬祭の圖）

始の神事を行ふ。又この時、神主幷に禰宜、社僧及び伶人等各々出仕す。

例句

住吉の白馬神事　狩衣に梅が香こめよ白馬祭　沈　生（蘂　葵）

青馬祭（あをうままつり）

季題解説　正月七日の夜。常陸國鹿島神宮にて正殿の御戸を開き奉り祭禮あり。御戸開の神事といへり。物忌輿に乘り錢切をふり、散米して參り、神殿に至りて太刀弓矢等諸種の幣帛を奉り、而して去年納めしを取り出すといふ。これを物忌出納の役と稱す、大宮司をはじめ諸神官參拜をなす、畢りて青馬御會とて神馬七頭を曳きたてゝ御假殿の周圍を走り廻らす神事あり、青馬祭といふ。禁裡の白馬節會に擬したる古き祭事なり。

例句

青馬祭　狩衣の色杉にたぐふ神事かな　鯱　人（懸　葵）
青馬節會神も御目さめ見そなはす　三幹竹（同　）

嚴島の御弓始（いつくしまおんゆみはじめ）　鬼射（きしや）

季題解説　正月七日。安藝國嚴島神社の輪藏前にて、鬼的といふを懸けてこれを射る。社家ことごとく出仕し、祝師これを勤む。鬼射は鬼射にして、甲乙ムの三字を集めたる謎字を射通し、勝負を爭はざる意をあらはせる年始の祝事なりといふ。

若菜祭

【季題解説】一月七日、京都北野天滿宮にては古來人日祭として、七種の若菜の御供を獻ずる祭儀を行はれ參詣者多し。

太宰府の追儺祭

【季題解説】一月七日、福岡縣筑紫郡太宰府天滿宮の追儺祭には、鷽替の神事及び鬼燻の神事行はれ古來有名なり、詳細は次の引用文を參照すべし。

鷽替の神事　鬼燻の神事

▽太宰府の追儺祭　古賀無方

太宰府一の鳥居下にて下車したのが十一時過ぎ、直ちに天滿宮に參拜する。今日は朝よりどんよりと曇りて、折々粉雪ちらつく寒い日ながら、七日正月とて相應にお參りがある。境内に入り左に曲りて、お池の太鼓橋を二つ渡れば、坦々たる鋪石道の兩側には、定紋附の高張が整然と立て連ねてある。一の樓門二の樓門神前の飛梅は舊冬よりの暖氣續きに早や三分の見頃である。

〇

再び太宰府へと引き返し、鳥居前に着いて時計を見れば六時三十分である。茶店に立ち寄つて、鷽替は何時頃から始まりますかと尋ぬれば、七時頃からですといふ。然らばとて其間に夕飯を食ふことにする。形ばかりの夕食を終へて茶店を立ち出で境内に入れば、立ち並べる高張には皆灯が入りて、その間數間置きに庭燎がとろ〳〵と燃えてゐる。而して雪曇りの夜空は星一つ見えず、露店の灯のある外は漫々たる闇である。この闇の中にうごめく人數は刻一刻に殖えて來る。

再度神前に額づき、門外の庭燎にあたりて待つ間程なく、替えましよ替えましよといふ聲が繪馬堂のうしろ、社地の北の奧なる祓殿の傍から聞えて來る。行つて見ると、腰に荒繩の帶を卷き付け、頭に同じく繩の鉢卷の、結んだ兩端を角の樣に立てたる異形の人々が、大聲に替えましよ替えましよと叫んで、互に押し合ひ〳〵輪に廻つてゐる。群衆は忽ち爰に集り來り、面々に木削りの鷽を手に持つて其輪の中に加はり卷き込まれて行く。輪は次第に大きくなり、渦は次第に激しくなつて、後には其處にも此處にも小渦を生じて、祓殿の側より後にかけて闇の中一面が轟然たる人の渦卷きになつて仕舞ふ。自分も池の北岸近くに無數に並んでゐる鷽店から、小さな拇指大の鷽を貳錢宛で二つ買ひ求め、その一つを右手に持つて、替えましよ〳〵と渦卷の中の一人になつた。中には一と抱えもある樣な大鷽を四五人して頭の上に擔ぎ練り廻つて居るものもある。多くは直徑一二寸位のを右手に持つて、人波に押されてぐる〳〵廻りながら、行き當つたもの誰れ彼れかまはずに左手を出して、替へまし

よく／＼とやるのである。相手が持つて居るのは金の鷽ではないと分つて居ても、縁起で替へましよとお互に取り替へ、又はそんな物とは替へませぬと替へずに廻つて行く。

かくして互に替へ／＼してゐる間に、神官の手傳の者が群衆に紛れて持つて出てゐる金の鷽に替え當てたるものは、幸運を授かるといふことである。自分の鷽も幾度か替り替り、或時は拳大のものとなり、又は小指の様な小さなものとなり、時には又燃えさしの木片などに變りなどしたが、なかなか金の鷽には變り相にもない。そのうちに手の鷽は揉まれ／＼て汗ばむ程になつたので、満足を離れて暫く休むことにする。夜も大分更けたらしい。折から雲が破れて片割月が青く楠の梢にかゝる。急に身體がぞくぞくと寒氣ざして來る。四方を見れば所々に庭燎を圍んで三人五人、顔を眞赤にしてあたつて居るのが見える。自分も近くの庭燎のところに行つて手を差し出してあたる。月は又雲に隠れて、雪が灰の様くやうにちらちらと降つて來る。地上は見る／＼白くなる。火氣で顔々赤く、背替えは愈々はづんで來る。庭燎にあたつてゐると、顔はほてるが身體は寒くなるばかりである。仕方がないから幾度は別の新しい鷽を持つて又満足に割込む。替えましよ／＼と暫く行つてゐると忽ち寒さは忘れて仕舞ふ。

○

幾度かこんな事を繰り返してゐると、やがて鳥居の方から、おんにやおんにやと大きな掛聲が聞えて來る。鬼燻べの行事が始まつたのである。實は今か／＼と待ちあぐんでゐた事とて、早速樓門の傍に行つて待つてゐると、數十人の若者が、筒袖に鉢巻をして荒縄の襷に荒縄の帶をしめ、後鉢巻に股引き脚絆草鞋足といふ甲斐／＼しい扮装で、周り一抱へ長さ五六間もあらうといふ大松明二本を擔いで、おんにや／＼と掛聲勇ましく練り込んで來る。その大松明の一本は肥え松の割木で、他の一本は枯竹を束ねたものである。其二本には未だ火をともしてない。而、その後から、同じ大さの長さは二間位の短い肥松の松明に、これには火をともして炎々たる焔を揚げながら、五六人して擔ぎ火の方を後にして打ち振り打ち振り、群衆の中を荒れ廻りながらつゞいて來る。これを鬼松明といふ。その後から高張を先頭に、五六人の神官につゞいて町の區長組長など町の幹部達が、手に手に弓張り提灯を持ち列を正して練り込んで來る。社前に着くと二本の大松明を地に下ろし、末を交叉し、神前に向つて山形に開いて横へる。鬼松明も火を消して大松明の上に、山形の交叉點の少し前方に横に置く。神官達の列はそのまゝ左手の廻廊の接所を上つて行く。やがて一同は神前に跪いて神官の祓を受ける。それが濟むと神官は神前の蠟火を取つて一人に與へる。それを受取つて火を點ずると、二本の大松明は忽ち向拜口の兩側に高く燃え上る。一同は火の番の者を殘

して右側の廻廊に用意してある御神酒を戴きに行く。

其次に警固と稱する百名許り、同じ扮裝にて、頭には更にいかめしく縄鉢卷の兩角を立てたるが、各自に五六尺の大樫棒を擔いで、同じくおんにやく／＼と掛聲しながら驅け込んで來る。前の如く一同神前に跪きて御祓を受け終るとお神酒所に退いて休息する。

最後に燻人と稱するもの同じく百名許り、同じ裝束にて、窓障子程の大さの團扇に、五六尺の長柄の着いたのを各自に押し立てて這入つて來る、其團扇の面は皆紅白に彩り、或は梅若櫻若など大書したのがある。神前のお祓等前の通りに濟むと、これで人數の勢揃へが出來たわけである。

（上）[illegible]に於ける警固の勢揃、手に持てるは生木の樫棒。

（下）[illegible]に於ける燻しの光景、高く掲げたるは燻べ方の持てる[illegible]團扇。

やがて時刻になると、鼕々と打ち鳴らす太鼓の音を合圖に、此度は高張提灯を灯した十名許りの神官の列を先頭に、積て燃え盛る大松明、そのあとから再び火をともした鬼松明が荒れ狂ひながら續いて行く。その後が警固、最後に燻人、列をつくりて門を出で、闇中の群衆を分けて祓殿一名燻べ堂の方へ進んで行く。堂に着くと三本の松明は別れて遙か堂の後方に去り、神官は側面の戸より入りて神前の座席につき、警固は堂内に、燻人は堂外の側面と背後に各その部署に就く、これから所作が始まり、約三十分間位にしてそれが濟むと、神官は忌火を蕈に點じて背面の窓か

ら投げ出す、燻人はそれを受取つて堂の側面と背面とに、前から準備して積んである青松葉と藁とに火を移す。何しろ青松葉六十把、藁二百把といふから大した火勢である。これと同時に警固は手に手に棍棒を振つて南側と背面の板壁を内面から打ち破りにかゝるのである。その又棍棒といふのが、樫の木を根こぎにして、根の方を頭に幹の方を柄に作つた杓子形の大槌であるので、壁板は打つ度に木の葉微塵になつて飛ぶが、柱の穴に篏め込んで五寸釘で打ちつけた横木は容易に外れない。すると燻人は盛んに又木を以て火を掻き立て、大團扇を以て火焔を堂内に煽ぎ込めば、堂は全く火焔につゝまれて軒も棟も見え別かず、その中に警固が振ふ槌の響、雄叫びの聲、天地にとどろきて、阿鼻叫喚の地獄を眼前に見る心地、壯觀極まりて寧ろ凄慘である

百人の警固、漸くにして三面の壁を打ち破り終れば、太鼓の音を合圖に、鬼松明を先頭に三本の大松明を燃やしながら堂内に擔ぎこみ、四十八所を縛り固めて一日堂内に押し込めある鬼（鬼面を被れる人にして此日一日の鬼の給料米一俵半なりといふ）を引き立て、堂内を廻ること七回、鬼廻りて神官の前に至れば、神官は豆を摑んで之を打ち、廻りて堂後に至れば、燻人は爰を詮度と煙を煽ぎ灰を彈ね掛く、かくて七回廻り終れば堂外に出で、餘勢を以て堂後の大松の木を廻ること三回、爰に壯絶慘絶を極めたる追儺の神事は終つたのである。（下略）（昭和五年三月一日發行懸葵第二十七卷第三號所載）　【季題】亀戸の鷽替神事（かめゐどのうそかへしんじ）

例句

鷽替神事

かへ〳〵て遂によき鳥得たりけり　椽面坊（蕉山集）
鷽替や天拝山を冒の上　十二星（寂水集）
鬼松明に鷽替の波闘れけり　天高（同人俳句集）
鷽替や梅ヶ枝餅を買ひ戻る　星峰（懸葵）
鷽替の黄金つかみし人や誰れ　魯牛（同）
鷽替や女も交る笑ひ聲　魚方（同）

鬼燻神事

鬼燻べ火の子の中の月赤し　同（同）
鬼燻べ煽ぐ團扇も燃えにけり　同（同）
鬼燻べ鬼を呼ばはる聲寒し　三竿竹（同）

菜摘川の神事（なつみかはのしんじ）　若菜の神事（わかなのしんじ）　若菜供（わかなく）　吉野鉢（よしのはち）

古書校註

【山之井】七日吉野、つての明神にあり。

【栞草】七日　神社啓蒙　勝手明神の社、大和國吉野川に有、祭る所の神一座、受鬘神云々。毎年正月七日、此社の神人氏子の男女、此川の邊に至り、若菜をつみ、勝手御前の神供に備へ祭祀をなす、故に菜摘川の神事と云。

【年浪草】 吉野山吉水院が云、勝手明神二大宮の本地毘沙門天冒神若宮の本地文殊菩薩、右社頭は役行者(一)建立、出現は人皇六代孝安天皇六年甲子と舊記に之を載す、又神功后宮御建立の說あり、正月廿三日神事能有レ之、三月十一日、九月十九日、兩度祭禮ありて神輿本堂へ渡御、其外修正會八講等有之といへとも今菜摘川神事と云ふこと分明ならず、菜摘川は吉野より行程一里餘、菜摘村にあり、此所氏神を花籠明神と云ふ小社なり、何れの神と云ことを知らす、南朝の頃は六月祓を行はれ玉ふといへども、今其形も絕ゆ、菜摘川吉野山に屬せず、勝手祭審かならずと。云々。

註 (一)役行者 役小角、大和葛城上郡茅原村の人、佛氏を好み咒術を善くす、年三十二家を棄て、葛城山に入り巖窟に居る事三十餘年、松果を食ひ藤葛を衣とし、鬼神を驅役し水を汲み薪を採る等唯意の欲するがまゝなり、もし命を用ひざるものあらば、則ち之を咒縛す、時に韓國廣足なるものあり、妖言衆を惑はすよしを朝に讒告す、文武天皇詔して小角を捕つ、東堆ふること能はず、因て其母を攻む、小角自ら出て、縛に就く、卽ち伊豆島に流す、後赦に逢ふに及び母と共に唐に行くといふ。(大日本史)

季題解說 正月七日。古、大和國吉野の奧にある勝手明神の祭祀に、この社の神人、村の氏子、男女等、吉野川のほとりに至り、若菜を摘み、神前に備ふ。故に菜摘川の神事といふ。

例句

若菜の神事　雪解風吹渡る若菜神事かな　八重櫻（明治一萬句）

脐の手に神事の若菜摘みにけり　橡面坊（深山柴）

若菜供　若菜供や巫女が杓子に飯白し　八重櫻（明治一萬句）

七草祭（ななくさまつり）

季題解說 正月七日、尾張國の津島神社にて、七日には七種を神前に供へて祭儀を行ふ。七草祭といふ。（[illegible]）北野天滿の若菜祭（キタノテンマンノワカナサイ）

蜜柑納め（みかんをさめ）

季題解說 一月七日、京都、東本願寺宗務所の事務始の日にあたり、調進方一同より年頭祝儀として、青竹にて編みたる大籠に蜜柑を美しく詰めたるものを數多納むる古來の例あり、これを俗に「蜜柑納め」と云ふ。

例句

蜜柑納め　六條は蜜柑納めの七日かな　三幹竹（雪[illegible]）

蜜柑納め御方日記に遺しけり　同（同）

箕面富（みのをのとみ）

箕面山辨財天參（みのをざんべんざいてんまゐり）　一の富（いちのとみ）　二の富（にのとみ）　三の富（さんのとみ）　富札（とみふだ）

古書校註

【栞草】 七日今夜諸人、攝州箕面山の辨天に競ひ來て堂上に富をつく、先

勝尾寺の富

【季題解説】正月七日。攝津國三島郡勝尾寺にて、富籤の札を投くる行事あり。箕面瀧安寺の富と同じ。【參照】箕面の富、谷中天王寺の富（ヤナカテンワウノトミ）

【例句】
勝尾寺富　京人も勝尾の富に參りけり　白天（懸葵）

清水の牛王

清水寺牛王杖

【季題解説】正月七日。京都の清水寺は延暦十一年平安遷都の時、阪上田村麿の建立する所なり。寺僧巳の刻修法あり、樺の木を以て堂中を打ち廻る。これを牛王杖といふ。即ち陰を逐ひ陽を迎ふるの意なり。修法後、諸人持參の白紙に牛王の寶印を捺し與ふるために參詣人多く、雜沓を極む。商家にてはこれを帳面に貼りおけば、收入多しとの信仰ありて、なほこの日に限り、本尊の開帳あり。

【例句】
清水の牛王　ぬかりなき牛王の札や廓者　羊我（懸葵）
新帳に牛王の朱のうるみ哉　同（同）
福運に皆あづかるや牛王杖　三幹竹（同）
清水寺牛王杖　牛王杖百邪萬障はらひけり　同（同）

蘇民將來の祭

曼荼羅米

【季題解説】正月七日。陸中國江刺郡黑石の藥師堂にて行はるゝ祭事なり。その次第は、日の西山に沒する頃より、近郷近在の若者は褌に單衣一枚の裸姿にて押し寄せ、附近の谷川の水を浴びて水垢離をなし、堂前に集りて盛んに焚火をなし、その餘燼を取りて堂内に入り、互に投げ合ひて惡態をつき、これを御火焚登りといひ、次いで別當の僧、若者に護られて堂に登る、これを別當登りといふ。最後に、七八歳の童二人、一は赤鬼の假面、他は青鬼の假面を背にし、赤きものは木槌と葦の炬を持ち、青きものは木斧と松明を持ち、各々屈強の若者に負はれて堂に登る。これを鬼子登りといふ。これより住僧の修法ありて、散米の式あり。畢りて檀中の者一人、麻にて造りたる大袋に、六角に削りたる蘇民將來の符を持ち出で、群衆の中に入り、高く蘇民と呼ぶを合圖に、待ちかまへたる若者等は、これを得んとして互に相爭ふ。若しこの符を得て歸れば災厄を免れ、又散米を曼荼羅米と唱へ、これを口にすれば、疫病を免るとも信ぜられて、盛なる祭事なりといふ。【參照】西大寺の會陽（サイダイジノヱヤウ）

御判戴き

【季題解説】正月七日より九日間、信濃國長野の善光寺大勸進にて、內佛殿に

祕めおける寶印を、結緣のため特に參詣人の額に押し戴かしむることあり。これを御判戴きと稱し、その日は老若男女爭うて詣づといふ。

太元帥法（たいげんのほふ）

古書校註

【山之井】 八日 治部省（一）にて七日これを行はる。公事師の字ヲヨマズ。

【栞草】 延喜玄蕃式 凡そ太元帥の法、毎年正月八日に起り、十四日に至る一七日、省に於て之を修す。公事根源 治部省にて七ケ日是を行はる、藏人（二）內藏寮の官人をもて御衣を給ひて壇所におくる、御衣箱に入緋のつなにて是をゆふ、御所より給へば、藏人封を付て、是を治部省につかはし、御祈をいたさしむ、結願の日は御衣をもとの如く返上する也、云々。〇帥の字をよまず、たいげんの法と云ふならひ也。

註（一）治部省「をさむるつかさ」とも訓む、談天門の內右馬寮の東に在り、五位以上の婚姻、祥瑞を辨じ喪祭を記し陵墓を守り、僧業を正し、僧尼を制し蕃客を遇し姓氏の爭訟を判斷す。（二）藏人 くらうど、古へ禁中の校書殿の御書籍を守る職、後に藏人所を建られて其職名となる、殿上、近侍して機密の文書及諸訴を掌り、小事を奏宣す、殿上の事を奉行して其權甚だ重し。

季題解說 正月八日より七日間。太元帥明王を本尊として、鎮護國家の爲にこれを修す。帥の字は讀まざる習ひにて「だいげんの法」と云ふ。太元帥修行儀に、若し國王ありて此明王に歸依し名號を唱へ神呪を誦せば、國家安穩、怨敵降伏、寶祚長遠、風雨順時、乃至息災、增益、敬愛、調伏の諸願悉く圓滿せざるなしと說く。[illegible]法宮中に於ては此法は殊に重んぜられ、古は私にこれを修するを嚴禁せらる。初め山城國小栗栖の法琳寺の常曉、大和の秋篠寺の井にて感應あり、承和五年六月入唐して、不空三藏の弟子棲雲寺の文琛にあひ、此秘法を相承し、六年八月歸朝し、法琳寺に太元堂を建てゝ太元帥明王を安置し、奏請して鎮國の場とし、七年六月始めて此法を行ふ。越えて同十二年に至り、常曉更に上表して後七日御修法に準じてこれを行はんことを請ひしも許されず、嘉祥四年正月八日始めて治部省に於てこれを修し、以後永く恒例とせよとの宣旨を下されしを以て、其翌二年正月以來後七日御修法に準ずるの待遇を得、毎年正月七日より十四日迄一七日の間、法琳寺を本所として、紫宸殿、太政官等を以て修法の道場に擬し、最も如法嚴肅に行はれたり。大壇及息災、增益の兩護摩壇、聖大壇、十二天壇、神供壇等を莊嚴し、其壇上及壇外に普通の佛器、資具に加ふるに、壇上には弓百張、箭百隻、大刀百腰、鐵杖二十四、鉤二十四、鏡四枚を備へ、壇外に長刀八口、小刀四十七口、鐵杖三十支、弓四十二張、矢十、鉤三十二、棒十九本等を調へ、御衣を賜はりて加持し、結願の後、緋卷と共にこれを返納す。其香水には秋篠寺太元水の井より汲み、大阿闍梨は常曉より相承せる者に限れり。中世法琳寺退轉の後、これを三寶院勝覺の弟子賢覺に相傳し、賢覺理性院を開きて太元別當となり、保延元年九月十九

日官符を以て理性院の祕法と定めらる。その後元祿年中將軍德川綱吉の請願によりて特に江戸湯島の靈雲寺にても行はるゝことゝなる。明治四年九月に至り、勅會の事は廢せられたり。

例句

太元帥法　太元帥の法や刀杖の莊嚴具　禽化（懸葵）
　　　　　太元帥の御修法ゆゝしや武具襖　同（同）
　　　　　遠く汲む秋篠の井の御修法哉　同（同）

眞言院の御修法（しんごんゐんのみしゆほ）　後七日の御修法（ごしちにちのみしゆほ）　御修法（みずほふ）　宿直人（とのゐびと）

古書校註

【山之井】八日　是もけふより七日の間行はる、今年金剛界なれば明年は胎藏界、年々にかはる〲修せらる、後七日の御修法とは此事也、眞言院（一）は禁中にあり。

【栞草】八日より十四日迄之を行はる、後七日の御修法是也。帝王編年記承和元年始て眞言院を宮中に置、鎭護國家、五穀豐饒の爲、毎年一七日を限り修法せらる。公事根源　ことし金剛界なれば、明年胎藏界、年々にかはる〲修法せらる。拾芥抄　眞言院は八省の北にあり。〇宿直人　徒然草　後七日の阿闍梨（二）武者をあつむること、いつとかやぬす人にあひにけるより、宿直人とて、かくこと〲しく（三）なりにけり、一年の相は、此修中のありさまにこそみゆなれば、兵をあつむること、おだやかならぬこと也。漢語抄　晝勤むるを直といひ、夜務むるを宿と云、合せて止乃伊（トノイ）といふ。

【新式】八日　禁中南殿にて東寺長老と御室仁和寺と兩寺より隔年に御體の加持を申なり、今年金剛界なる時は、來年は胎藏界を本尊とせらるゝよし、一七日の御法事なり。

註（一）眞言院　朝廷の御修法及び念誦を勤むる所にして修法院、又は曼陀羅道場ともいふ、大内裏八省院の北、宮居の西に在り。（二）阿闍梨　あざり　僧の師となるべき者、あじやり。（三）ことごとし　大層らしく。

季題解説

一月八日より七日間。古昔、宮中に於て玉體安穩、國家隆昌、五穀成就、萬民豐樂のために修行する眞言宗最重要の大法。兩部の大曼荼羅を開展供養すれども、正しくは南方福德門の主なる寶生如來を中心の本尊とし、此本尊の種子及其三摩耶形を觀ずるものなり。初め空海、承和元年十一月上奏して解法の大僧二七人、沙彌二七人の十四人のこととなるも祈禱には四の字を避けたるなりじを擇びて別に一室を莊嚴し、諸尊の像を陳列し、供具を鋪布し、眞言を持誦してこれを修せんことを請ふや、朝廷乃ちこれを修して永く恒例とせよとの勅許を下せるが故に、其翌二年一月八日より十四日まで、空海大阿闍梨となり、既定の供僧を引率して修行せるを濫觴とす。後、勘解由廳、改めて眞言院と公稱し、永く御修法の道場と定めら

抱た子もぬかづかせぬる御修法哉　嘯山（葎亭句集）
たどりつゝ御修法拜みぬかり袴　同（同）
御修法や松の雪散る院の庭　三幹竹（春・雲）
袈裟の雪拂ひて登る御修法哉　同（同）
關白の御修法の阿闍梨拜みけり　同（同）

御齋會（ごさいゑ）

古書校註

【山之井】八日大極殿（一）にて十四日まで七ケ日最勝王經を講ぜられて朝家（二）をいのり申侍る也。

【栞草】八日より十四日迄。公事根源

【公事根源】是は大極殿にて、八日より十四日まで七ケ日の間、最勝王經を講ぜられて、朝家を祈り申す也、此經とり分國家を護持する功能あり、よりてあらたまの年の始には是を講ぜらるゝにや。

【拾芥抄】大極殿御齋會、神護景雲四年戊午之を始む、行幸有り、興福寺維摩會、藥師寺最勝會、巳上三會は法相宗を以て講師と爲す。

【新式】八日御いもゐとも申よし、是は天武天皇九年の五月に宮中並に諸司に下して金光明經を講ぜらる、又桓武帝延暦廿一年正月最勝王經をからせられたりつるより定式となりたる由。

註（一）大極殿　大内裏八省院、即ち朝堂院の正殿の名、天皇即位の式を見らるゝ處にしてまた國儀大禮の行はるゝ處なり。（二）朝家（てうか）　帝王の御家、皇室。

季題解説　正月八日より七日間　大極殿にて七ケ日の間、最勝王經を講じて朝家の御息災を祈り奉る。此の經とりわけ國家を護持するの功徳あるによつて、年の始にまづ講ぜらるゝなり。桓武天皇の延暦廿一年正月より始まる。

熱田鬼祭（あつたのおにまつり）

季題解説　正月八日。尾張熱田東町なる不動院にて、毎年この夜修正會を行ひ、午王加持あり。それより前、裏堂に鬼祭に出づる人々、裝束を整へおき、太鼓其他鳴物を一度に打ち鳴らすを合圖に、松明を照らしつゝ出で、別當これに加持す。終りて、鬼面の人松明を持ちしまゝ堂外に出づ。この時鳴物一入騒がしく、鬼面は本堂を三度廻り、松明を池に投捨てゝ、面を脱ぎて裏堂の中に入り、この間に群衆は午王寶印を拜受して畢る。これは古往の追儺の餘風なり。但し、明治維新後に中絶せしを、近年復興して、現今は舊暦正月八日に行ふ。

例句

熱田鬼祭　ことしの厄祭の鬼の喰ひけり　觀魚（續春夏秋冬）
鬼はやすさゝらも打て祭かな　同（同）

[illegible]出典祭 境内に篝の數や鬼祭 觀魚（續春夏秋冬）

初藥師（はつやくし）

季題解説 一月八日。諸所の藥師堂に初參りをなす。これを初藥師といふ。藥師は具に藥師瑠璃光如來といひ、大醫王佛、醫王善逝など稱す。十二誓願をおこし、衆生の病源救ひ、無明の痼疾を治する如來と崇敬せらる。俗、正月朔日に參れば三千日に向ふとて、亦參詣人多し。

例句
初藥師
初藥師白魚賣も出るなり 青岐（せき屋でう）
一山の雪の深さや初藥師 無字（ホトトギス）
裏道の梅の林や初藥師 育川子（昭和一萬句）
青天に欅落葉や初藥師 日々午（昭和模範句集）
堂裏に松焚く烟や初藥師 竹芝（春泥研究會句抄）
憂き人に歸るさ會ひつ初藥師 蟷螂（塔 ）

大元帥明王初祈禱（だいげんすゐみやうわうはつきたう）

季題解説 一月八日。京都醍醐の三寶院山内理性院にては、泰安の大元帥明王に初祈禱の大法を修し、參詣殊に多し。大元帥明王は利生功德宏大なりといふ。この大法は支那唐朝に於て朝廷獨占の大法として尊重せられ、如何なる場合にも王城の土地以外に、その法を出すことを禁ぜられたるものなりしが、承和元年常曉法師入唐して栖雲寺の文璨に密教を受け、華林寺の元照に謁してその法器を認められ、特に大元帥の秘法に授けらる。常曉歸朝して官に申し出で、山城國小栗栖の法琳寺に於て修し、後、理性院にて修す、海内唯一の根本道場になりたるものなりといふ。

西宮の居籠（にしのみやゐごもり）

居籠（ゐごもり）の神事（しんじ） 居籠（ゐごもり）

故實參考
【山之井】 夷祭 十日 西の宮にて行へり。今日大坂の今宮の夷のやしろにも、人々參り侍るなり 俳言也。
【栞草】 居籠九日夷祭十日攝州西の宮太神宮の祭也、村民九日の朝より夜に至り戸を閉て出ず、これを居籠と云、一說に女は神前にこもり男は家に居るといへり。「雍洲府志」に云「居籠祭は正月初の申日より四日の間也、柞（ハハソ）の森に有、申日より亥日に至りて神事畢る。傳云、此間惡鬼遊行す、これにふるゝもの祟りあり。故に兒女及六畜を他村につかはし、男子家に有て門戸開闔（カイカフ）の音を禁じ聲を揚げず、民間居籠と云」、亥日旅所に神事あり。社司片帛（カタキヌ）を以て口鼻を覆ひ、人氣をして神輿に觸しめず、榊を持て從行す、

又五穀の種種を各一器に盛り又農具を村民相携て供奉す、神輿旅所（一）に遷りて後、諸民大にいこみよ〳〵と呼ぶ、是居籠の華燭に。攝陽群談に云、毎年正月九日、蛭兒尊廣田の社に臨幸あり、神の容相異なるを以て人倫の見んことを恥たまふの謗となりて、村民戸を閉て外へ出ず、門松を逆にさして居籠と云、明日諸人各々戸を開て參詣す、世俗十日夷といふ、諺に云、十日に參詣するを十日夷と云、此神は韓にてましますとて、參詣の人社の後の羽目板を敲くなり、街にて米花袋、銀錢小判などすべてめでたき物を賣る、下向の人これをかひて笹のうらへ結ひつけ、又賣る處の烏帽子を買て頭に戴き往來の人を笑はせ興ずることを有り。商家も此日大に宴を設け客をむかへて饗應す、江戸にてはこの月廿日夷講をなす。

【御傘】惠比須　西宮明神の御事也、蛭神なれば神祇たりといへども、面八句の内にもくるしからず。云々。

【年浪草】一書に曰く、西宮は攝州武庫郡西宮町の西に在り。祭神三座、天照大神、素盞烏尊、蛭子尊、相殿 左大臣貞信公八十神。武記に云ふ、神武天皇、長髓彦と戰ふ時、天軍矢盡き度を失ふ、椎根津彦神、乃ち持する所の箱より數萬の矢を出せり、天軍氣を得逆賊を射退く、又食盡きたり、食を箱中に得て諸を士卒に與ふ、又箱の中より出でゝ寶物を出し、其の無きに代へて奉り、神宮に寄せり。天皇大に奇として之に問ひて曰く、汝何なる由ぞ、自在神力の備はる如し、椎根津彦神、答へて曰く、吾は由有る神也後日に之を申さん、今強て之を問ふこと勿れ。其天下を治むる時、天孫亦此の由を問ふ。椎根津彦神曰く、吾は是れ天祖の始め、子蛭子命大神なり、今來りて汝尊を助く、吾世の富の事を司ると。是西宮大神なり。俗に得美栖と稱す、正月十日村民九日の朝より夜に至つて戸を閉して出入せず、之を居籠と謂ふ、亦一異說の神代卷に曰く、伊弉諾尊　伊弉冊尊、ミトノマクハヒし玉ふて蛭兒を生玉ふ、便ち葦の船に載て之を流し玉ふ、又曰く、蛭兒已に三歲になると雖も脚猶立たず、故に之を天の磐櫲樟船に載て、風のまに〳〵放ち棄つと云々。三神日神を生れまし次に月神を生し次に蛭兒を生す。故に世に三郎と稱す、又容の異相なるを以て、夷と號す。

【いつまで暦】居籠　九日西の宮戸を扣く事あり。

註（一）旅所　たびしよ、祭禮に神輿を停し置むる所、おたび。

【季題解說】正月九日。攝津國西の宮大神宮十日夷の前日、氏子の村民等朝より夜に至るまで家々門戸を閉さして外に出でず、門松を逆に建てゝ家に籠る、これを居籠祭といふ。翌朝戸を開きて人々社參をなす、これを十日夷といふ。一說に女は神前にこもり、男は家に居るといふ。攝陽群談に「毎年正月九日、蛭兒尊廣田の社に臨幸あり、神の容相異なるを以て、人倫の見んことを恥ぢたまふの謗となりて、村民戸を閉ぢて外へ出でず云々」と見ゆ。【[illegible]】十日夷參照　作者居籠、[illegible]

【例句】

居籠

妹とあらば常に居籠も悪しからじ　蝶衣（蝶衣句稿）
居籠りて覗けばたゝる目々にかな　同（同　）
居籠や犬もありかず人も行かず　山梔子（續春夏秋冬）
居籠や火桶の上の花かるた　ながし（ホトトギス）
居ごもりや屏風の裾の筆硯　栩童（同　）
蓑蟲も我も居籠る古巣哉　東窓（最新二萬句）

天公祭（てんこうさい）

天公生（てんこうせい）　天公生日（てんこうせいじつ）　玉帝生日（わうていせいじつ）　玉皇上帝誕生日（ぎよくくわうじやうていたんじやうび）

【季題解説】一月九日、臺灣にて、玉皇上帝即ち天公の誕生日。空を望んで九叩の拜を行ひ、市中は元旦よりも熱鬧を極む。

西本願寺報恩講（にしほんぐわんじはうおんかう）

【季題解説】正月十日より七日間、京都西本願寺にて、宗祖親鸞聖人の報恩講を修す、明治維新後、暦法改正の時、弘長二年十一月二十八日に御往生の命日、たまたま一月十六日に相當したるにより、その日を以て御命日と改め修し來りたるものなり。〔季題〕冬—報恩講（ハウオンカウ）

常陸帯の神事（ひたちおびのしんじ）

縁結（えんむすび）の神事（しんじ）

【古書拔萃】

【山之井】十日　常陸國鹿嶋明神の祭の日、女のけさう人（一）あまたある時、其男の文どもを布の帯に書あつめて、神前におくに其中にうらかへりたる帯を見て女のかけ帯のやうにかつぎて、すなはち其帯のぬしの男と親しくなる事と也　無名抄。

【栞草】十日［神社啓蒙］鹿島の神社、常陸の國鹿島郡に在、一ノ宮記云、武甕槌神（タケミカツチノカミ）也。）年中祭禮七十五度あり、中に常陸帯の祭あり、其日男女の名を布帯に書記し神前に置、社人これを取授く、相見て婚姻を定む、正月十日の祭典なり　奥儀抄　等、）を帯にして一ツには我名を書、一ツには男の名を書て折返して中をば隱して、末を禰宜（ねぎ）に結ばする也、あしかるべきは、はなれはなれに結ばれ、よかるべきは掛帯のやうに丸く結びつながると、云々。○常陸帯といへば、神祇なり、戀なり。

【新式】十日、かしまの明神の祭の日、女のけさう人あまた有とき其おとこの名どもを布の帯に書つけて神前におく時、風にふれてうらかへりあひたる、おびとおびとをむすびあはせて、やがてその帯のぬしとふうふに成事也、此故に此神事の名は戀也。

【いつまで暦】鹿島の神前にて、布の帯へ懸想ありし男の名をあまた書て其名の裏返りたると縁を定める事也。

注（一）けさう人　懸想人、異性の心ある人。（二）苧　を　からむし、麻等の繊維によりて合せし糸

【季題解説】　正月十日。昔、常陸國鹿島神宮にて行はれし神事。男女の名を布帯に書きしるし、神前に置けば、社人これを取りて授く、相見てその婚姻を定むることゝせる神事なり。奥儀抄に「苧を帯にして一つには我名を書き、一つには男の名を書きて折り返して、中をば隱して末を禰宜に結ばするなり。わろかるべきなからひは、はなれ〳〵に結ばれ、よかるべきは掛帯のやうに丸く結びつながるゝなり」とあり、昔の若き男女の縁結びの神事なり。

【例句】

常陸帯の神事

相惚も神事の數か常陸帯　不碩（伊達衣）

神頼むことのよろしき常陸帯　山梔子（續春夏秋冬）

一筋に願の丈けや常陸帯　月兎（明治一萬句）

布帯や鹿島の神の中繼　素石（同　）

思ふ人を神しろしめせ常陸帯　麥人（大太刀）

紅梅の御印尊し常陸帯　鱸江（最新二萬句）

【参考】　陰暦正月十一日、茨城縣（常陸國）鹿島町宮中、官幣大社鹿島神宮に於いて行ふ神事なり。男女の縁を定むる卜の一種にして、女の懸想人數多ある時、夫等の男の名を、各〻別の布の帯（一に苧をといふ）に書き、一には我が名を書き、一纏にして神前に供へ置く。時に禰宜祝詞を奏して折りかへし、字を隱して端を結ぶ。其の密着して「かけ帯」の如くなりたるを良しとして我が夫と定め、然らざるを良からずとして棄つると云ふ。今は廢れて全く行はれず。

此神事は新古今集十にあつまぢの道のはてなるひたち帯のかごとばかりも（一にかごとばかりにも）あはんとぞおもふと記さるゝに據れば、既に鎌倉時代の初期には行はれたるものにして、又謡曲の中に此の神事に基きて、常陸帯と云ふ曲の存するを見れば、足利時代の末頃に及びても猶ほ行はれたるが如し、即ちその文中に「御神事様々御座候中にも、正月十一日の御神事をば、常陸帯の御神事と申候」と見えたり。其の後断ゆる神事は人心を離れて漸次衰頽せる結果、纔かに正月十四日常陸帯祭と稱する式典を執行さるゝに至れるが如し。その儀、常陸帯を寶庫より出して神宮寺に持ち参り、禰宜祝等堂内に列座す。此の時供僧等火鉢に篝をたきて常陸帯を捧げ、驛路鈴を振りて本堂の外陣を巡廻して式を終るを例とせり　此の祭典も今は廢れて行はれず。

貴布禰社神供

【季題解説】　正月十日。京都の北郊貴布禰の社にて饗膳を供ず。かます、とびうを、結び昆布、大根、海藻等あり、又末社結神に於て社家左右の一老、

奉幣の儀あり、當日參詣の人々奉幣を神社の前に結び置てこれを拜して、世俗誤りて男女好縁を結ぶの誓ひとなすといふ。

十日戎（とをかえびす）

戎祭（えびすまつり）　宵戎（よひえびす）　初戎（はつえびす）　聾戎（つんぼえびす）　殘り福（のこりふく）　福笹（ふくざさ）　戎笹（えびすざさ）　[illegible]
[illegible]袋（…ぶくろ）　蝦魚小判（…こばん）　吉兆（きつちやう）

【季題解説】一月十日、大阪今宮神社なる蛭子神の祭禮なり。（攝津武庫の西宮太神宮をも本社とす。）諸商賈參詣して福運を祈る、これを世俗十日夷と名づく。諺にこの神は聾にましますとて參詣の諸人、社殿の後の羽目板を敲くに、これ今日參詣して諸願をたのむことを神に告げんがためなり。故に聾戎の稱あり。この日境内及び諸道にて、小笹に小判・金匣・鯛・大福帳・枡・俵など多くの寶を吊したるものを賣る、これを福笹又は吉兆と呼ぶ。その賣聲に「吉慶々々（キツキヤウ）」とて喧騒を極む。【參照】居籠の神事（キヨコモリノシンジ）

【例句】

十日戎

笑ひあふ十日戎の笑顔哉　子規（子規全集）
賣れ殘る十日戎や寶なり　琅々（續春夏秋冬）
受けて來る戎も升に十日哉　素泉（同）
浪花なるつんぼ戎も十日哉　吟月（同）
夜起して十日戎にまゐりけり　双岳（俳句大觀）
ぬかるみに十日戎の小判哉　宋斤（大正新俳句）
十日戎夜明の道の氷りけり　蕙畝（木虫句集）
耳しひの神の坂戸をたゝきけり　素石（同）
慾の世の[illegible]戎も十日哉　一外（木太刀）
酒に聲からして十日戎かな　秋園（壬申句鈔）
去年殘る寶も十日戎かな　傑尚坊（最新二萬句）
十日戎浪花の春の埃かな　松濱（昭和一萬句）
大俵小俵十日戎かな　著森（懸葵）

宵戎

店の燈に髮焦しけり宵戎　蝶衣（蝶衣句稿）

堀川の水の晴さや宵戎　月斗（同人俳句集）
うつぼざこばの大提灯や宵戎　月朵（同）
大阪の祭はじめや宵戎　比羅久（ホトトギス）
福笹にちらつく雪や宵戎　福穂（昭和一萬句）
夜詣や十日戎の残り福　水鳴（ホトトギス）

残り福
残り福の賽銭箱や朝の霜　二鳥（木虫句集）
朝のまに主が往けり残り福　素石（雞）

福笹
福笹の笹もたわわに吹雪哉　梅史（ホトトギス）
渡舟福笹あげて呼びとめし　卜花（同）

戎笹
ほゝぼたに當る小判や戎笹　旭川（同）
神棚に戎の笹の一かへけり　素石（雞）

福飴
福飴の出來つゝ賣れてゆきにけり　木國（ホトトギス）
大いなる福飴の値のきまりけり　塔史（現代俳句大觀）

吉兆
吉兆をかけて明るき座敷哉　虹城（獺祭）
酒の座や吉兆かけし床柱　鳥一（同）

初金毘羅（はつこんぴら）

季題解説　初金刀比羅（はつことひら）　初十日（はつとをか）

一月十日、新年最初の縁日として、讃岐の象頭山金刀比羅宮をはじめ、各地に鎮座する金毘羅神社に參詣することをいふ。東京にては芝虎の門に琴平神社ありて殊に賑はし。

例句

初金毘羅
道すがら初金毘羅の御賑ひ　ひろし（ホトトギス）
雪の中初金毘羅に詣でけり　嚢羅（同）
初金毘羅の高橋逸れし都人　公羽（大正新俳句）
吹雪頃初金毘羅の人出かな　旭當（昭和一萬句）
初金毘羅ゆきゝの鳴門凪ぎにけり　薫風子（獺祭）
夜の内に初金毘羅の御山かな　竹人（木太刀）

初十日
みち松にお山鴉や初十日　一外（同）

市神祭（いちかみまつり）

季題解説　正月十日。山形市旅籠町湯殿山神社並に十日町に鎮坐の市神大神の神前に於て厄落しといふ事行はる、これはその年の厄に當りしもの、例へば四十二歳なれば四十二文、二十五歳なれば二十五文と、それ〴〵の年齢に應じて錢を撒く、この錢を拾へば火防の符となるといひ、貴賤を問はずこれを拾はんとす。中には泥子といひて、破れ半纏に股引を着し、オイタオイタと叫びつゝ押し合ひ拜き、泥塗れとなりて拾ふものあり、昔は非常の雜踏を極めしものなりしといふ。又この日に初市立ち、盛り飴を賣り、

臼市とて臼を商ふ。商家にては初市祝ひを行ふ風盛んなりといふ。【參照】人事—初市ハツイチ

伊ヲ志祭（いそしまつり）　登宇斗祭（とうとまつり）

【季題解說】正月十日、攝津國西成郡伊ヲ志村廬尾寺にて、本尊十一面觀世音の會式あり、村民炬火をともして群集し、又若者は水を打掛け合ひて挑み、村の父老の宥むるを待ちて止むといふ。一に登宇斗祭ともいふ。

初甲子（はつきのえね）　初大黑（はつだいこく）　大黑祭（だいこくまつり）

【季題解說】正月初甲子の日、大黑天當年最初の縁日として、俗間、大黑天を祭り、二股大根、小豆飯等を供ふ。大黑天は梵語摩訶迦羅の譯、又大時とも云ふ。密教には、大日如來、惡魔を降伏するために忿怒藥叉主の形を示現せしものにて、或は一面八臂あり、或は三面六臂あり、人の精氣を瓔珞とし、畏るべき相なり。故に、古來軍神として之を祀ること、猶大元帥王の如し。顯教の所傳はこれを以て施福神となし、祀れば能く福徳を得ると云ひ、西竺の諸寺皆食厨に之を安置供養す。吾國の大黑天を祀るも亦この意なり。而して、その濫觴は、傳教大師にして、師の止觀院を創するとき、これを感得せしといふこと諸書に出づ。

【例句】
初甲子　引き當てし初甲子の富の札　樵青（同人俳句集）
雪晴れや初甲子の御題日　黑洲（懸葵）

初寅（はつとら）　鞍馬初寅詣　初寅參　鞍馬詣　一の寅　上寅日　福寅　福搔　搔下し　お福蜈蚣　鞍馬小判

【古書校註】
【山之井】上の寅の日（一）鞍馬に參る事也、しまかりといふ所に、ふご（二）に燧石（三）をいれて、上よりほそ繩にてさげて賣事をふごおろしといへり。二番のとら（四）にもまうで侍る。

【栞草】○畚卸　初寅詣と同日同所なり。紀事　初寅詣、或は二の寅を用ふとも云、此日鞍馬近邊往還の西の山岸に高く小樓を構へ、その内より繩をつけて簣（五）をおろし、參詣の人、燧石を求めむとするもの、錢を簣に入るとき引上げ、其錢の多少に應じて燧石を入れて再びこれをおろす、因て畚おろしと云、其簣を操るもの鞍馬の地の出生の地下人（六）にして、髮を剃たるもの交り勤む、世に鞍馬坊主と稱す、燧石はこの山の名産なり。○初寅　紀事　正月初寅の日、師々山鞍馬寺に詣づ、是を初寅參と云、此日鞍馬の土民福搔木を以て鑰を作り是を賣る、これを福搔と云、福徳をか

きとるのいひ也、又生蜈蚣を賣る、是を御福蜈蚣と云、多門天の使令とするもの也、凡て鞍馬山中雞を養はず、いふ心は鷄好て蜈蚣を喰ふ故なり。

【いつまで暦】　斧おろし燧石を賣る。

註　（一）上の寅の日　正月上旬の寅の日。（二）ふご　もつこ。（三）燧石　ひうちいし。（四）二番のとら　一月の第二回目の寅の日　二の寅。（五）簣　あじか　もつこ。（六）地下人　こゝにては土民と云ふほどの意。

季題解説　一月初寅日、京都鞍馬山の鞍馬寺なる毘沙門天王に參詣するを初寅詣といふ。當日寅刻より法華懺法護摩供修行あり、玉體安穩、天下泰平、萬民豐樂の祈禱をなし、參詣の諸人に、御劍の印、福富の印、牛王の寶印等を授與す。今日鞍馬の村民、福搔木を以て鑰を作りて賣る、これを福搔といふ（現今は樫の木にて作る）即ち福德を搔きとるの謂なり。又生蜈蚣を賣る、これをお福蜈蚣といふ。蜈蚣は毘沙門天の使なりとて、この山中雞を飼はず、これ雞の蜈蚣を捕食するを恐るゝ故なりと。又大判、小判の形を摸したるを賣る。これを鞍馬小判といふ。現今は福蜈蚣等は行はれず。又鞍馬山には古來「斧下し」といふことあり、「谷向ひの山に小屋を掛け、此方へ繩を引き、別の繩にて斧を上下す。斧に錢を投じ麾を振れば斧を引き上げ、價に應じて燧石を斧に入れて繰り下げること行はれたりといふ。毘沙門天は福神と稱し、寅の日の緣日とて、諸商賈「虎は千里を走る」といふ諺によりて、走るが如く金銀を利するに擬す。二の寅、三の寅も亦參詣多し。

例句

初寅

初寅の泥障にまみれ鞍馬寺　貞德（類題發句集）
初寅の子わたしやけふくらま川　正章（毛吹草）
初寅や櫻寂しき鞍馬寺　芝女（新類題發句集）
初寅や慾つらあかき山おろし　太祇（太祇句選）
初寅や賴光しばし市原野　同（同）
初寅や衣のうらの玉かしは　嘯山（葎亭句集）
初寅や小町寺より殘る雪　四明（四明句集）
初寅や蜈蚣うねりの鞍馬道　同（同）
初寅や雪の貴布禰へ廻り道　北渚（明治一萬句）
初寅や衣美しき博奕打　翠竹（最新二萬句）
初寅や氷柱の寒き二軒茶屋　衣中（同）
初寅や夜火に行交ふ顏しるき　觀崖（大正新俳句）
初寅や雪に埋れし信貴の道　子串（年刊俳句集）
初寅や未だ薄暗き二軒茶屋　山舟（俳句大觀）
初寅や冬木のまゝの雲珠櫻　雪山（現代俳句大觀）
初寅や施行焚火に長憩ひ　正城（ホトトギス）
初寅や茶所の内なる大焚火　苔子（同）
初寅や雪踏みしめて闇の道　子角（同人俳句集）

卯の札　歸り來て卯の札さすや梅の鉢　香村（最新二萬句）
　　　　卯の札にやみ〳〵散らす小雪哉　素石（昭和一萬句）

【考證】每年正月上卯の日、東京市城東區龜戶町、龜戶神社境内の妙義神社に於いて行ふ神事なり、初卯とは、初卯詣の略稱。此の日神社にては火防守・開運出世守等と稱する神符を出し、又は魔除けとして卯杖・卯槌等を頒つ。參詣の者神符を受け、或は卯杖等を購ひて歸るを例とす。又社の内外には商人軒を連ね、土産物と稱し、餅或は土を以て團子となし、之を五色に彩どりて大なる柳の枝に附け、繭玉と號けて之を賣る。

魔除として卯杖・卯槌を用ふることは、元來支那傳來の思想にして、支那に剛卯杖とて正月卯の日鬼を压する料として桃の枝にて杖を作り、之を革帶に佩くと云ふに始まり、我が國にては、日本書紀（三十）持統天皇三年正月乙卯（二）の條に「大學寮獻杖八十枚」と見えたるを初とす。衛府兵衛府之を掌り、絲所の女嬬に傳へて天皇の上覽に供し、その後、卯杖は清涼殿の晝御座の御帳、夜大殿の御帳等の四隅に立て、卯槌は同じく御帳に結び、或は角柱に懸けたるものなり。而して此等の用材に多く桃木を用ひしは注意すべきことにして、當時の追儺式には必ず桃弓・葦矢を使用して不祥を攘ひたると併せ考ふれば、桃を以て惡鬼不祥を攘ふ思想は、古事記に見ゆる伊弉諾尊、桃實を投げて鬼を防ぎ給ひし故事と共に、當時の一般信仰なりき。然るに爾來千數百年を經たる今日尚ほ之が遺風を存するは、吾人をして轉た懷舊の念に堪へざらしむ。因に初卯詣に卯杖・卯槌を頒つことは天保二年頃より始まり、明治二十年頃に中絶せしが、後ち復興して今日に至れるなり。

初辰（はつたつ）

上辰日（じやうしんにち）　初辰の水（はつたつのみづ）　潮の水（しほのみづ）　辰祭（たつまつり）

【季題解說】正月初辰の日、此日屋根に水を打ちて火災の禁厭をなし、又海水を屋上にまきちらし火災を防ぐの禁厭をなす、これを「潮の水」と云ひたり。〔三元〕 上辰の祓（八頁）

【例句】
初辰　初辰の机据ゑたり蔵の中　梨葉（梨葉句集）
　　　初辰の屋根の打水氷りけり　北谷生（同　古鳥）
　　　屋根にうちし水氷の月や辰祭　冬葉（續　祭）
　　　初辰や出初この方晴るゝ富士　龍雨（俳諧雜誌）
　　　初辰の水や火伏せの大般若　梓月（同

上辰の祓（にやうしんのはらへ）

【古書校註】

【栞草】「西京雜記」高祖の宮中、正月上辰池邊に出て盥濯し、蓬餅を食ひ

以て妖邪をはらふ。〔五雜俎〕「錢塘湖が曰、今の人三月上巳をいひて、正月の上辰をしらず。」

季題解説　正月上辰の日。支那の古俗、池邊に出でて盥濯し、且つ蓬餅を食ひ、以て妖疫を祓ふといふ。参照　初辰

初巳（はつみ）

初辨才天（はつべんざいてん）　初辨天（はつべんてん）

季題解説　一月初巳の日、當年最初の辨財天の緣日とて、諸所の辨財天を祀る寺々、例へば江の島、不忍池等へ參る人多し。辨才天は、又美音天、妙音天などいふ。或は男天とし、或は女天とすれども、女天とするもの多し。聰明にして辯才あれば辯才天といひ、能く美音を發して歌詠すれば美音天、妙音天といふ。辨才天、辨財天、國音通ずるゆゑ、祈れば財福を得べしとの俗信あり。形像に二樣あり、一は八臂にして種々の器杖を具し、一は二臂にして左膝を立てゝ琵琶を彈ず。参照　布施參

例句
初巳　舟着きも靄の佃の初巳かな　春草（俳諧雜誌）

布施參（ふせまゐり）

布施籠（ふせごもり）

季題解説　正月初巳の日、下總國相馬郡利根河畔の丘陵にある、布施の辨才天に參詣するを、布施參といふ。巳のなる金を祈る慾深連の信仰にて、頗る繁昌せりといふ。参照　初巳

例句
布施參　花の時日待こゝろや普施參　堤亭（[illegible]合）
正月己巳、布施の辨才天へ詣侍る[illegible]
布施籠　玉椿書とみえてや布施籠　其角（五元集）

初庚申（はつかうしん）

帝釋天詣（たいしやくてんまうで）　帝釋詣（たいしやくまうで）　庚申待（かうしんまち）

季題解説　正月初の庚申の日、當年最初の帝釋天の緣日なれば、諸所の帝釋天を祀る寺、庚申堂に參詣するもの多し。俗間またこの夜、青面金剛を以て本尊とし、猿の形を造りて神とし、祭供を設けて夜を徹し、以て樂願を滿足すと。これを庚申待、庚申を守るといふ。然るに、これもと道家三尸を避くるの説に出でゝ、更に佛教の典據なし。眞俗佛事論に、「吾朝庚申の本尊の前に、塞目・塞口・塞耳、三の猿をおく事は、道書にも見えず、青面の軌にも素よりなし。愚按するに、是吾朝の好事の者、庚申の申の緣より思ひつけて、孔子家語の三緘の故事を取りて、不言不聞不見の教を垂るゝものなり」とあり。又、この日炒豆を食し、女子は裁縫を休み、鐵漿をつけざる習慣もありき。東京にては柴又の帝釋天に參詣する信者多

し。

〔例句〕

初庚申　梅が香や初庚申の背戸の風呂　蓼太（三傑集）

初庚申堂の曉に[illegible]集　土芳（[illegible]）

川風や初庚申の小提灯　三巴（[illegible]）

遊びほうけて寝る夜となりぬ初庚申　甲羽（俳諧雑誌）

初帝釈　初帝釈へ魚河岸より[illegible]　黒渊（懸葵）

浅草寺境内山王宮開戸（せんさうじけいだいさんわうみやひらきと）

〔東都歳事記〕初申の日、辰の上刻より唄、散華、三問一答の法要を修し、衆徒六人、弟子三人出頭に於て勤む。其境に於て衆徒等、内陣近侍の弓矢を負ひ、悪魔降伏の矢を放つ行事ありと、東都歳事記に見ゆ。又永田馬場の山王宮にても、この日法華三昧ありたりといふ。

〔例句〕

浅草山王開戸　開戸や衆徒の唄の聲冴ゆる　枳南（懸葵）

柞森居籠（ははそのもりゐごもり）

〔[illegible]〕正月初申の日より亥の日まで三日間、山城國柞森、現今の相樂郡川西村字祝園にては、森の悪鬼進行し、これに觸るゝときは必ず祟りありとの傳説あり。この悪鬼は長髄彦の靈といひ、又挑川（泉川、即ち木津川）を挟みて對陣し戰歿したる武埴安彦の靈とも稱す。この三ケ日の間、村民、兒女六畜を他村に遣はし、門戸を閉ぢ莚を垂れ、炭火油燈を設けて、晝夜絶やさず、精進潔齋して音聲を立てず、音聲ある時には悪鬼來たるといひてつゝしむ。戌の日春日明神の神幸あり、神主は覆面し鈴を鳴らして隨行し、土人も亦覆面して大松明を持ち、或は一切の農具を携へてこれに供奉し、五穀の種を器に盛りて、旅所に供ふ。旅所に集れば、一同イゴミヨイゴミヨといふ。居籠よ／＼の訛ならんといふ。神人五穀の種を手に掬うて與ふれば、その種の多き穀物を播種す。又青竹にて輪をつくり、藤蔓にてくゝり、村人社前にて南北に分れ引き合ひ、勝ちたる方を本年の吉兆とすといふ。現今にても、猶前日には住家の内外にある汚物を掃除し、戸障子の類は全部開放し、寒風を防ぎ、出入りに音のせぬ様に筵を吊す。水溜便所等、水のある所は、皆藁を敷きて音のたたぬやうにし、鍋の蓋、柄杓等までも繩を卷き等して音のせぬやうになす。音あれば悪鬼來るといふ。今申の日申の刻より、齋籠始る。昔は兒女六畜等を他村に預けたりしが、今は行はず。この日、村内にて生れたる者は皆生家に立ち歸り、家人は土間或はその爲めに設けられたる低き板敷に筵をしきて籠居し、肉食をせず雜

煮を食すといふ。酉の日夕刻より神靈を奉じ、神人は大なる松明を先にして出、御田植の式を行ひ、五穀の種子を神前にて村民に分つ、その種を多く得たる者の田は、其の年豐作にて、少なき者は凶作なりといふ。戌の日戌の刻、大なる竹の輪を作り、村民兩方に分れて綱引を行ふ。これ武埴安彦の屍を引き合ひ、身と首に二分し、出森に埋めたる故事に傚ふものなりといふ。綱引終れば、勝ちたる方は出森にて、その輪を燒き捨つといふ。現今は一月十日より三日間、祝園神社にて、毎日惡鬼退散、五穀成就、武運長久を祈願する式事行はれ、參詣多しといふ。因みに、相樂郡棚倉村の天乃夫岐賣神社の居籠祭は、二月十五日より三日間行はれ、松明曳きの神事ありて著名なり。 參照 西宮の居籠(ニシノミヤノヰゴモリ)

初酉(はつとり)

季題解說 正月初酉の日。東京淺草の鷲神社、四谷の須賀神社その他の神社へ參詣する者多し。 參照 冬—酉の市(トリノイチ)

例句

初酉　初酉の歸るさ拜む日の頭　唯波　(壬申句鈔)

松尾山神祭(まつのをやまかみまつり)

季題解說 正月亥の日に、京都松尾の松尾神社の神人、氏人、各々燈火を供ふ。この燈明消ゆる時は、其家に凶事ありとの傳說あり。後、社家十二人、裸馬に乘りて馳驅す。後世は西芳寺の山の社にて神事を行ひ、假想の鬼を作り、氏人の子弟等追ひつゝ村外に至り、沿道の家々は皆戶を閉ぢたり。これを山神祭といふ。

亥巳籠(ゐみごもり)

季題解說 正月亥の日より巳の日迄七日間。播磨國日岡神社の氏子等、鳴物音曲を停止し、下女下男は故郷へかへし、犬は他郷に繫ぎ、雞は日岡山に放ち、家の戶障子には溝に油をぬりて音のたゝぬやうにし、茶柄杓の類には藤葛をまとひ、言語は耳元にことゝやき、聲を出さず。沐浴も理髮も忌みをる古風ありと。これは神の生れ給ひし日なるが故なりと信ぜらるゝ爲なり。日岡神社は彥五瀨命を祀る。命は鵜鷀草葺不合尊と玉依姬との間に生れ給ひし御子にて、神武天皇の皇兄に在す。但し、この祭今日は行はれずといふ。

初亥(はつゐ)

摩利支天詣(まりしてんまうで)

季題解說 正月初亥の日、各所の摩利支天に參詣するをいふ。摩利支天は謙

して陽談といふ。その形相見るべからず、取るべからざるを以て名づく。又は華鬘、天女の形相に名づく。常に日の前に在りて行き、自在の通力を有する天神なり。若しこれを念ずれば、一切の災厄を離る。殊に武士の守護神とす。密家に傳ふるところ、此天の印呪隱形法を以てその至極とす。京都建仁寺禪居庵に安置する尊像は、唐國より將來する所の泥塑にして、世に有名なり。

神宮奏事始（じんぐうそうじはじめ）

【季題解説】正月十一日。古へ、歳首に當り伊勢神宮の事を奏聞する始をいふ。「近代年中行事細記」に、「傳奏の座圓座一枚、西方御簾を垂る。刻限（議定所に）出御、傳奏簾中に入り條目を奏す。一々御氣色をうかがひ奉り、悉く奏し了り、副笏を取りて退去す。此の間奉行簾外の簀子に有り云々」とあり。傳奏とは神宮傳奏のことにして、即ち、神宮の事を天皇上皇に傳奏することを掌る職。奉行といふは神宮の奉行といふ。奏事始の月日に就いては、「禁中恒例行事」「近代年中行事細記」等には正月十一日と爲せり。〔一一〕政始　傳奏下り

熱田踏歌神事（あつたたふかしんじ）

【季題解説】正月十一日、熱田の大福田社は食稻魂神を祭るゆゑに五穀の豐饒を祈る神事を行ふ。午の刻神人各政所に揃ひて、舞人十人冠に櫻の作り花を挿頭し、陪從十人山吹の作り花をかざす。是は笛を吹き笏拍子を採る役なり。はじめ鎭皇門の前にて催馬樂をうたひ畢りて海藏門よりねり入る。大宮にて卯杖舞あり、この舞すみて陪從一人高巾子の冠を着し、兆鼓を持ち出づ。その時祝詞御踏歌の頌をよむ。大福田社より始めて、政所、大宮、八劍宮に至り大福田宮に戻りて終るといふ。又俗にべろ〳〵祭と呼ぶといふ。〔一一〕住吉踏歌神事　踏歌祭

【例句】
熱田踏歌神事　梅が香に鼻息寒し笈拍子　曉臺（曉臺句集）

住吉評定始（すみよしひやうぢやうはじめ）

【季題解説】正月十一日。攝津國住吉社正印殿に、午刻より祠官等相集り、同社年中の諸般の儀式を評定す。これを住吉評定始といふ。

甘酒祭（あまざけまつり）

【季題解説】正月十一日。美濃國郡上郡相生村の白山神社にて行はるゝ祭禮をいふ。この祭は、社有の田地にて作りたる米にて、甘酒を製し村民一同に酌ましむるものにして、毎年抽籤にて、その釀造者六名を定め、定められたるものは、これを謹製して、當日社前に据ゑられたる六斗餘を容るゝ大釜の中にて煮立て、村民は今日を晴れと着飾りて社前に集り、當番は順次村民の名を呼びてこれに一椀づゝの甘酒を與へ、漏れなく啜り終るや、一同鯨波を揚げて大釜の周圍に集り、その殘れるを啜りて式を終るものなりといふ。

【例句】甘酒祭

甘酒を啜り殘さぬ祭かな　琅玕（懸葵）

釜をかこみ啜る甘酒祭かな　同（同）

天王寺金堂手斧始（てんわうじこんだうてうなはじめ）

【季題解説】正月十一日。戌刻、大阪四天王寺の金堂に番匠集りて、堂中に材木を横へ、手斧始の式を行ふ。正番匠黑袍を着し、其他、權番匠、副大工は狩衣大紋を着す。秋の坊堂裡、堂司出仕して、これを督す。これ聖德太子、番匠の事を初めて教へ給ひし遺意により行はれたるものなりといふ。

空也堂鉢敲出初（くうやだうはちたゝきでぞめ）　鉢叩出初（はちたゝきでぞめ）

【季題解説】正月十一日、京都空也堂の寺僧、頭陀巡行の出初めと稱し、京洛内を巡ぐり歩く。これを鉢叩出初といふ。昔は正月八日に出初めたるものなり。【參考】冬—空也忌、鉢叩（ハチタヽキ）

【例句】鉢敲出初

出初を祝うて叩く瓢かな　一茶（一茶發句集）

一瓢に醉ふや出初の鉢叩　三幹竹（懸葵）

法談始（ほふだんはじめ）

【季題解説】正月十一日。日蓮宗の寺院にては舊例により、法談始の儀を行ふところありといふ。

【例句】法義始　龍の口の法難説くも始め哉　[illegible]竹（春 [illegible]）

稻荷の奉射祭　御弓始祭

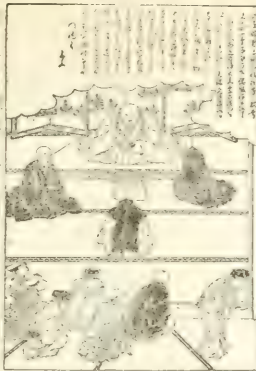
【季題解説】一月十二日　京都伏見なる稻荷神社本殿にて、御祭事終了の後、宮司以下一同、境内神幸道の西側なる的場に至れば、神職二人、的の前に進みて神饌を供し、宮司以下の拜禮あり。拜禮の後、射手の神職二人、眞弓を取りて二射す。この神事に供せられたる弓矢は、古來惡魔を除くとして、信仰者の懇望するところなり。往古は正月十三日に行はれたるも、現今は十二日なり。

日賣許會祭　日賣許會團子

【季題解説】正月十二日、攝津國東生郡味原郷小橋村なる下照姫の宮（俗に姫社と書す）の祭禮なり。この日、ヒメコソ團子とて、小さき色團子を鬻ぐ。

【例句】日賣許會祭　味原も古りぬ日賣許會祭かな　枳南（曉臺）

報恩寺の俎開　鯉魚料理規式　報恩寺俎始　鯉切り

【季題解説】一月十二日。東京市淺草區北清島町の坂東報恩寺にて、七百餘年間毎年正月に行ふ行事なり。十一日午後に茨城縣結城郡[illegible]村報恩寺（當山元の地）の世話人二名、飯沼の天滿宮の御手洗より上りし鯉魚二尾を持參す。十二日は午前十時より本堂正面に棧敷を設け、開基性信房の御影一幅を掛け、住職副住職はその側に散服の上に黒衣の袈裟にて座す。（從來[illegible]前に[illegible]にて行ひし由）御影の正面に料理臺を据ゑ、烏帽子、素衣の料理人二人、古式に則つて各々一尾づゝを料理す。その料理法は毎年題を代えて之を行ひ、例へば、一、一、片身下尾立の鯉、一、八十島の鯉等の如し。料理するに當りては鯉魚に手を觸れることを禁じ、眞魚箸と庖丁にて操作すといふ。この行事の由來について寺傳によれば、「當寺の開基性信房は宗祖親鸞聖人の高弟にして、聖人關東の教化を終りて歸洛の後、ひとり下總國岡田郡に一の勝地を得て一字の廢寺を起し、報恩寺と稱し、聖人より口承せし寫瓶の

法水を道俗に傳へしかば、遠近の緇素皆風靡す。時に白髮の老翁一人、日を重ねて法筵に列なりけるが、或日性信房に對して申して曰く、此頃上人の勸化、人善く歩みをはこび、德音廣く四方に響く、翁も幸ひ勝緣にあひ、多生の疑雲やがて晴れ、信順の覺悟已にえたり。曾て聞く末代の惡機も歸屬すれば心光に攝められ、在家の翁も肉を食ひつゝ往生す、彌陀難思の本誓、釋尊出世の本意、諸佛證誠の實語、何の尊きことかこれにしかん。上人ねがはくは翁も弟子とならん事をと。時に性信房許容ありて性海の字を書き與へければ、その老翁おしいたゞき述べるやう、子弟の禮儀永く忘るべからずといふ程に法席を立出けり。人々奇特の思ひをなしつゝ跡を見送りたれば、北をさし飯沼ちかきほとりに往くと覺えしに、霞と共に消えたれば人々これを見うしなひけり。後の夜、天神の巫どもも夢ともなくうつゝともなく、天神示現し給ひ、性信のひじりは我師也、我名をば性海とぞ申ける、我ひじりのをしへによりて曠劫の苦惱を除き、永世の樂果を受けたり、和識の洪恩を謝せんが爲めに年每に御手洗の鯉魚二尾を贈るべし、永くぞ告げる、必ずうたがひそ、ゆめ〳〵冥恥を恐れよと、明かに告げ玉ひける。頃は人王八十四代順德帝天福元癸巳年の事にぞありけり。云々」と詳かなり。爾來この古式の俎開を行ひ、現今も當日の拜觀者遠近より聞き傳へ群集し滿堂の盛儀なりといふ。

例句　報恩寺俎始鯉切り

御裾分領す俎始めかな　禽化（懸葵）

鯉切りや肉食宗の由緒寺　同（同）

眞魚箸の音冴えてけり鯉魚料理　白路（同）

淺草寺の溫座陀羅尼（せんさうじのうんざだらに）　法華三昧會（ほつけさんまいゑ）

季題解說　正月十二日。今日より十八日迄七晝夜の間、本堂の中左のかた、不動尊の前に壇を構へ、幔幕をめぐらして一百六十八溫座の祕法修行あり、即ち天下泰平國家安全の御祈禱なり。十八日は卯の刻、大衆惣出仕して溫座陀羅尼の結願を修し、夜、松明をともし、供物等を奥山にて焚捨つることありたり。

例句　溫座陀羅尼

朝々の溫座陀羅尼や灯影冴ゆ　枳園（懸葵）

東照宮連歌始（とうせうぐうれんがはじめ）

季題解說　正月十三日。東京上野東照宮にて、昔柳營に於ける連歌始の例に倣ひて行はる。午後一時、德川家一門の代參を始め、神官一同打揃ひ、先づ東照宮に神酒、神饌を供へ、拜禮の後、一同着席、太祖廣忠公の詠歌を第一とし、次で德川家一門、以下華族の自詠連歌をよみ上げ、文臺發聲等

すべて古式に則りて行ひ、神官これを東照宮に獻じ式を終りたりといふ。現今は行はれず。〔參照〕人事―御連歌始ゴレンカハジメ

住吉の御弓すみよしのおゆみ　住吉御弓神事すみよしおゆみしんじ　住吉御結鎭神事すみよしおけちんしんじ　住吉御的すみよしおまと

〔古書校註〕

【栞草】十二日　紀事追加　正月十三日住吉の御弓、其式社人正鵠（一）に准へし、尺三寸の的を立て、立合これを射、勝負を論ずるにあらず、神事也と云々。今日參詣の諸人、竹馬と昆布を買て土産とし、又堺の魚々屋煎餅とて名物あり。各これを買ふ。

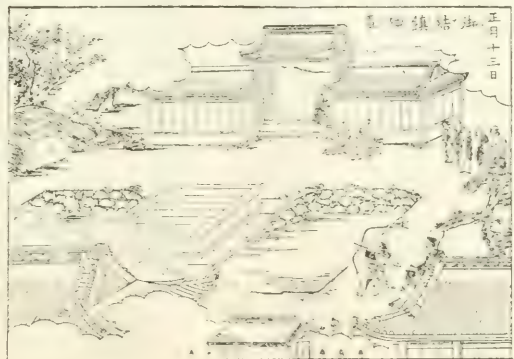
註（一）正鵠　せいこう　弓のまと、射的、正は布製の的、鵠は革の的の黒星

〔季題解説〕　正月十三日、攝津國住吉神社にて行ふ弓始の式。神官氏人等、上客殿に着座して酒一獻をすゝむ、而して若宮の御前にならび立ち、次第に一の神殿に參入し幣殿に着座し、神供等をすゝめ奉る。御講の導師、神前の講を終りて、各上客殿に退き座す。政所の目代射手を呼ぶ、射手出でて弓を始め、堺の的に弓十番を射終りて後、酒餅を賜ふ。これ天下泰平祈禱の爲なりといふ。參詣の諸人は竹馬と昆布を買うて土産とす。又住吉御結鎭、住吉おんたらしとも云ふ。

〔例句〕

住吉御弓
松晴れて住吉の御弓神事哉　樂南（ホトトギス）
十番の御弓神事や松晴るゝ　三幹竹（懸葵）

直會祭なほらひまつり　儺負祭なおひまつり　儺追祭なおいまつり　裸祭はだかまつり

〔季題解説〕　正月十三日。尾張國中島郡稻澤町に鎭座まします大國靈神社は、尾張國府宮と稱す。往古、正月十一日、神官往來の人を捉へ、潔齋させて俎の側に立たせ、豫め用意せし人形を其人の代りに俎上に寢せしめ、木の庖丁、眞名箸にて、これを料理するの態をなす。後一夜これを神前に供へ、翌日、錢一貫と土の餅を其人に負はしめて追ひ立て、その人の轉びし處に塚を築き、餅を埋めて以て儺を拂ひたりとす。然るに、この祭事はいつし

か行はれざるに至り、現今は舊暦正月十三日、直會祭とて、村内より四十二の厄年に當る男を選びて潔齋させ、十三日修祓をうけしめ、境内儺負堂にて夜を撤す。十三日、儺を負ふ人は、村内より群聚す。皆裸體にて腹卷一つなり。此時、厄年男も裸にて、この群集の中を進み行くに、人々少しにても此男に觸れて儺を除かんと犇めき、肌膚相接し熱鬧す。若し衣服など着けて行く者あれば、これを取らんと人々犇めき騒ぎて、衣類は寸斷するに至るといひ、土地の俗諺に「國府宮の祭で取られ損」などいふことあり。斯くして、この人を神前に納め、深夜、明の方に追放つなり。これを直會祭、或は儺負祭、裸祭など稱す。

〔參照〕天文—儺追風

例句

直會祭　引さいて追儺の布を貰ひけり　木南（比叡）

上賀茂御棚飾

季題解説　一月十三日。京都上賀茂神社にて、諸役より獻ずる處の神供、魚鳥米穀の類を數へ記して幣を奉り、伶人音樂を奏することを御棚飾といひ、又魚讀みともいふ。因みに、現今は御戸代神事といふ。古へは正月十四日に行はれしものなり。

魚讀　御戸代神事

例句

魚讀み

魚讀や季鷹大人のしたり顔　羊我（懸葵）

魚讀やみなほしてきゝなほします　同（同）

豊橋赤祭

季題解説　正月十三日。三河國渥美郡豊橋神明社の祭禮なり。社前に天狗（緋縅の鎧を着、長刀を持つ）と、赤鬼（撞木を持つ）と戰ひ、赤鬼忽ち敗れて市中を驅走りつゝ節を撒く。天狗は社前に舞ふ。天狗方、鬼方とも緒を

つけし人警護し、鬼方には別に青鬼。黑鬼從ふといふ。

道祖神祭（だうそじんまつり）

【季題解説】正月十三日より三日間、甲斐國一般に行はるゝ祭にて、道祖神といへる纏行燈を高くさゝげ、太鼓を鳴らし、種々の假面を被れるものこれに從ひ、天狗の假面を被り、頭に馬の履を戴き、小さき夜具を着したるもの道祖神となり、五穀の豐饒を祈るをいふ。【季語】龜戸道祖神祭

赤塚田遊祭（あかつかたあそびのまつり）

尺太郎（おくたらう）　尺次郞（おくじらう）　太郞次（たらうじ）　安女（やすめ）　よねほう　よなんそう　いなんそう

【季題解説】正月十三日。江戸赤塚村の農民、十羅刹女宮に參り、後、常福寺に集合して餅を搗き、その餅にて種々の農具を作り、農事に關する凡ゆることゝの學びをなす。

寒壇爺祭（かんたんいあまつり）

【季題解説】正月十三日。臺灣にて寒境爺の神像を裸體の壯漢四名が舁ぎて街中を練り、各戸爆竹に火を點じて神に擲ち、他の壯漢二名傘と箒にて之を掃ふ。この神寒さを厭ふ故なり。

丸岡火祭（まるをかひまつり）

【季題解説】正月十三日、十四日。越前國坂井郡丸岡、秋葉神社の祭禮に、各所より紙型に彩色したる押繪額を神前及び各戸に掲げ、十四日の夜は火消人足總出にて、社前に大なる左義長を立て、點火して囃すといふ。

御齋會內論義（ごさいゑのないろんぎ）

【古書摘註】

【山之井】十四日御齋會（一）の結願（二）にて、南殿（三）にておこなひ、問者講師など御前にて論義すれば、內論義と申とかや。

【栞草】公事根源　正月十四日は御齋會の結願なり、內論義は御殿にて行はる、御物忌（四）の時は南殿にて有、問者講師など有て、御前にて論義すれば、內論義とは申なり　又天長十年正月廿四日、延曆寺の僧圓證をめして、論義ありとみえたり、是なや事の起りと。云々。

【新式】十四日御さいゑのけちぐわんにて、南殿にて行ひ、問者講師など御前にて論義する故に內論義と申と也。

註（一）正月八日より十四日まで七日の間、天子大極殿にて金光明最勝王經を講説せしめら

れ、國家の平安を祈禱せらるゝ儀式。（二）結願（けちぐわん）日數を定め、佛に立願修法などして果たしたること。（三）南殿（なでん）紫宸殿の一名。（四）物忌（ものいみ）神佛を祭るに際して齋戒沐浴して飲食を愼しむこと、又は天一神、太白神等を避けて愼しみ居ること。

【季題解説】 正月十四日。御齋會の結願にあたり御殿にて內論義行はる。公事根源に「御物忌の時は南殿にてあり、問者講師などありて、御前にて論義すれば內論義とは申すなり。孝德天皇白雉三年四月に、惠隱沙門を內裏に召されて、無量義經を講ぜらる。沙門惠資を論義者として、一千人の沙門、作聽衆たり。と日本紀に記せり。又天長十年正月廿四日、延曆寺の僧圓澄を召して論義ありと見えたり。是れなどや、事の發とも申すべからむ」と記す。

吉田の鬼祭　鬼の飴

【季題解説】 正月十四日。三河國豐橋の藩中にて、鬼祭とて神前に白木の的を立て、烏帽子狩衣を着したるもの二人、榊の自然木の弓と、白羽の矢を持ち來り、互に的を射、中れば神前に太鼓を打ち、此の鼓聲を合圖に一人赤鬼に扮せるもの、撞木を携へて神前に來り、後より天狗の假面をつけたるもの、小具足にて長刀を携へ、これを追ひ來りて相鬪ひ、終に鬼逃れ去り、裃を着けたるもの數十人追うて市中に出で、町々を追ひ廻りつゝ、手に持ちたる飴袋を見物人に擲つ。これを鬼の飴と稱して、これを食ふものは惡病を除くべしといふ。かくて天狗は鬼を卻けて神前に至り、古雅の舞を爲す。これを吉田の鬼祭といふ。

熱田的射

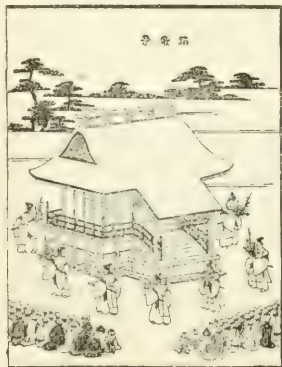
【季題解説】 正月十四日。尾張國熱田社の社人六百家集り、海藏門前にて弓術を試む。若し誤りて射損ずるものは、其家を沒せられたりと傳ふ。

鹿島踏歌祭

【季題解説】 正月十四日。常陸國鹿島神宮にて禰宜祝等いづれも梅花の枝を手毎に持ち、太鼓をうち笛を吹き、笏拍子を打て、御假殿を三度うち廻り、各自神拜の式あり。これを踏歌祭といふ。禁裡の踏歌節會より出でたるものなるべし。

【參照】 熱田踏歌神事（アラレバシリノウカンシン） 住吉踏歌神事（スミヨシノタウカシンジ）

鹿島踏歌　踏歌祭神もよろこぶ梅の花　三幹竹（[illegible]）

伊勢世様（いせよだめし）　伊勢世計（いせよはかり）

季題解説　正月十四日　伊勢豊受宮の庭上にて、三本の柱をたてて、月影を量り、其の年の豊凶を占ふこと。又「世計」とも云ふ。参照　世訓酒（ヨハカリザケ）

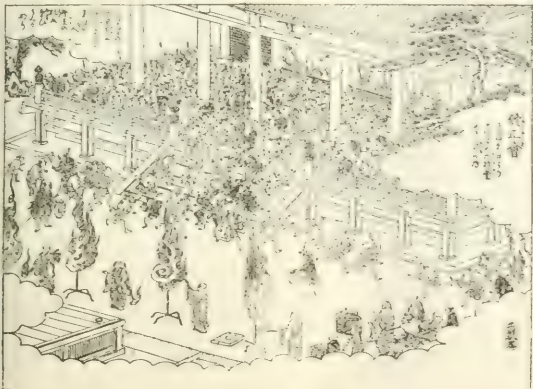
例句　伊勢世様　世ためしの年のみのりを祝はばや　三幹竹（[illegible]）

安満粥占（あまのかゆうら）

季題解説　正月十四日、攝津國島下郡成合村安満神社にて行ふ神事なり。この日、村民社頭に會し、粥を煮て竹管三本に、早稲・中稲・晩稲の印を附し、釜に入れて、その管中の粥の入りし分量を以て、その年の豊凶を占ふといふ。（一名）枚岡粥占

例句　安満粥占　粥占や神子が祝詞の空に澄む　迷々（日本俳句）

天王寺牛王出（てんわうじごわうだし）　六時堂修正會（ろくじだうしゆしやうゑ）　どやく

季題解説　一月十四日　大阪四天王寺の六時堂にて、元日より二七日の間行ひたる修正會の結願の日にあたり、御祈禱の中に五穀成就の意の籠れるに因みて、天王寺附近の百姓達こゝに集り、堂の縁を踏みならし、大音にゴダセゴダセと云ひて牛王を稱ふれば、僧等堂上より牛王の札を投げ與へ、諸人爭うてこれを取る。これを天王寺の牛王出といふ。昔は酉の刻より始まりしも、現今は午後三時頃より、夕景に及んで行はれ、群衆寒中にも拘らず裸體となりて、紅白の二組に分れ、押し合ひて優劣を爭ふ。

その最中に大松明運ばれ、堂の前に設けられたる三筒の篝に火を移すやがて群衆の内二三人は、堂柱をよぢ登りて、堂の屋根裏、廂裏等に挿しある牛王寶印を一尺ほどの柳の枝に挿せしものを抜きとり、裸群の渦中に投げ落せば、その爭奪に群集打ち合ひて、夕闇の中に終る。これを俗に、天王寺のどや〳〵、又單に、どや〳〵とも稱す。【參照】會陽參

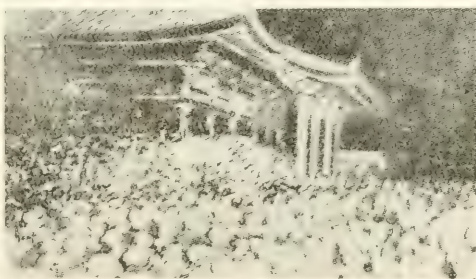
例句

どや〳〵
どや〳〵や夕日さし込む六時堂　千燈人(同)
どや〳〵の裸にうつや寒の水　同(同)
どや〳〵や堂をゆるかす力足　菁水(同)
どや〳〵の御符奪ひ合ふ命懸　同(同)

六時堂
どや〳〵や水の氷れる龜の池　甘雨(同)
どや〳〵や揉み合ふ裸二百人　同(同)

修正會
修正會や結願の篝寒う燃ゆ　三幹竹(曉人)

會陽（ゑやう）　西大寺參（さいだいじまゐり）　寶木（しんぎ）　裸押（はだかおし）

季題解説　二月十四日。岡山縣上道郡西大寺町西大寺觀音院にて、毎年今夜會陽と稱して、參拜せる群衆に寶木を投與し、數萬の裸群はこれを獲んとして爭ひ奪ふ。その光景、實に天下の一偉觀なり。會陽について、寺傳によれば、南都東大寺の高僧實忠上人これを創め傳へたるものにて、上人嘗て難波津に大悲の像を得、朝廷に請うて羂索院を創めてこれを安置し、毎年二月、これに對して兜率宮軌を修すること二七日、又天平勝寶四年より大同四年に至る五十八年間、これを缺くことなし。今、東大寺二月堂に修する水取の式は、蓋しこの遺法を傳へたるものなり。この西大寺の修正會も、開祖安隆上人が、これを實忠上人より傳へ、毎年正月元日より二七日の間、一山の大衆齋戒沐浴して、觀世音菩薩の祕法を修し、以て國家安泰五穀成就商賣繁昌の大祈禱を行ひ來りたるものにて、世にも稀なる祕法なれば、國主自ら參拜し、年々數多の供物を捧げたるものなり。往古は唯法會を修するのみなりしが、今を距ること四百三十餘年前、文龜二年同寺住職忠阿上人の時に至り、結願の夜、寶前の寶木を授くることゝなし、當時は信徒の内講頭、或は年長者、

これを戴く例なりしも、これを戴くものは靈驗著しく幸福を得るために、年を經るに從ひ、信仰者益々多く、且つこれを戴かんとするもの夥しくなりたり。よつて、講頭父は年長者の少數者に限る不公平を避くるため、抽籤によつて之を授くることに改めしが、數萬の參拜者に對しては、容易にこれを行ふこと能はざるため、遂に群衆せる參拜者に投與することゝせり。而して、その爭奪の結果、各自その行動を自由にせんがため、今日の如く裸體となるに至りしものにて、これを會陽と言ひならはしたるものなり。又、讃岐國志度浦の濱邊には、この日、諸人耳を地につけ、此の西大寺詣の人の足音の海にひゞくを聞きとれば福を得るといふ。〔參照〕天王寺午王出(テンノウジゴワウイダシ)

例句

會陽

垢離をとる會陽の人や吉井川　愚哉（唐辛子）
四國路に掛け聲ひゞく會陽哉　侍巾（同）
御福米積んでゆたかや會陽寺　放牛（同）
月冴えてこの夜めでたき會陽哉　燕々（同）
双肩の月影寒き會陽かな　一馬（青嵐）

寶木

辛うじて握りしめたる寶木かな　愚哉（唐辛子）
いつまでも觸れたる寶木薫じけり　燕々（同）

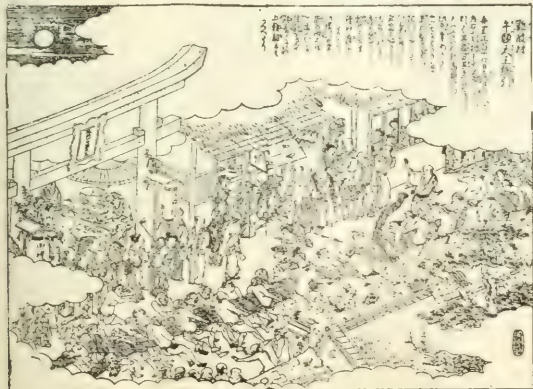
難波牛頭天王綱引（なんばごづてんわうつなひき）

季題解説　正月十四日。大阪難波の牛頭天王社前にて氏子の若者共左右に分れ、綱引をなして勝負を爭ふ。これを牛頭天王綱引といふ。なほ、これと同樣の行事諸所に存せり。〔參照〕人事―綱引(ツナヒキ)

長谷唯押（はせのたゞおし）

季題解説　正月十四日。大和國初瀬の長谷寺にて、參詣人同寺の廊下を押合ひて昇ることあるを唯押といふ。

譽田八幡水斗（こんだはちまんみづはかり）

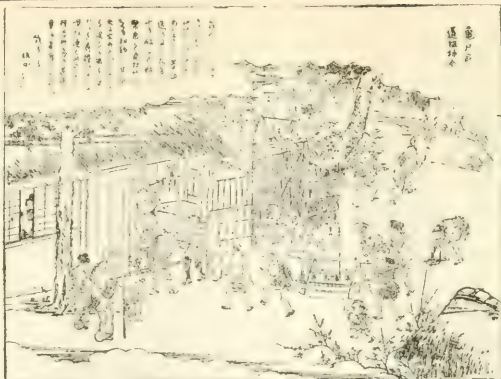
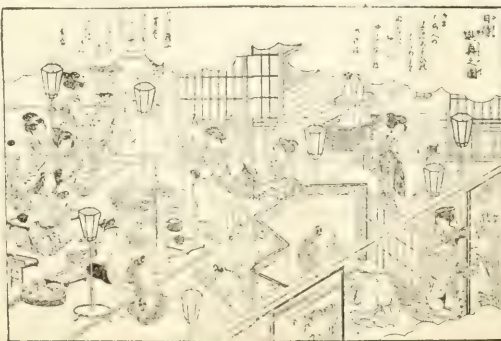
季題解説　正月十四日。往古河内國古市郡譽田八幡の社にて、

今夜月影をうけて曲物に水を入れ、板に目をもり、年中の水何斗何合と知る、これを水斗といふ以て農民その年の灌漑を豫め用意す。

龜戸道祖神祭(かめゐどだうそじんまつり)

【季節解説】 正月十四日。江戸龜戸村の童子多く集りて菱垣造りにしたる小さき船に、五彩の幣帛を建て、松竹などをも飾り、その中央に寶舟といへる文字を染めたる幟を建てたるものをかつぎ荷ひて、同音に唄ひつれて近邊を持ち廻り歩く、これを道祖神祭といふ。又その夜童子等一處に集會して遊び戯るゝを恒例とせり。

（龜戸道祖神祭の圖）

（日待の圖）

日待(ひまち)

【季節解説】 正月十五日。夜京都吉田の卜部家に於て、禁裏の日待ちを修す。五月、九月、十月亦同じといふ。又正月三日、十三日、十七夜、廿三夜、廿七夜に民家の主人齋戒沐浴して暮より朝に至りて少しも寢ねず、共間親戚朋友その家に集り雜遊して主人の睡りを醒さしむ。或は僧侶陰陽師を請じ經咒を誦せしめ、朝日の出づるを待ちて供物を獻じ所願を祈る、是を日待といふ。

仁徳祭（にんとくさい）

【季題解説】 一月十五日、大阪市高津神社社頭にて仁徳天皇難波の都を定め玉ひたる往時を追慕しまつり、その御聖徳を讃仰し奉る。大阪市南區聯合青年團主催の仁徳祭は午前十時より始り、玉串奉奠を執行し、同十一時に式を終る。

【例句】 仁徳祭

仁徳祭やまとの畑侵みそむ　青圃（[illegible]）

獅子頭の神事（ししがしらのしんじ）

【古書校註】

【山之井】 十六日伊勢國山田にある事也、十四日十五日十六日、大たい松（ ）をになふ事なとあり。

【栞草】 十六日 伊勢國、度會郡、山田郷に祭るところ七社或は八社、牛頭の社（中島町）・大社（[illegible]）・藤の社（[illegible]）・[illegible]内、今村の社（[illegible]）・坂の社（世古）・茜の社（高倉山の内[illegible]）・箕曲の社（[illegible]）是七社、瀧木の社（吹上町）以上八社、一社々々各の獅子頭を合せて八ッあり、此内一頭、虚空より降れるよし、殘り七つは常政長官と云神職の作と云ふ。祭の日、八ヶ所の町々氏子、龍の如く長き獅子を出し松明をともし舞ふなり、土人傳へ云、人皇百五代後柏原院、永正の末飢饉疫癘はやりしころ、獅子頭を作り、山田上の在家より次第に下の町へ追やりしこと有、其頭を町々の疫神に祝祭りて、産沙神と崇む。毎年正月中旬、社より取出して、鼓吹して舞ありく也。氏子の家々、くゝめものとて、鏡餅松明或は十二灯などを出し、十五日終夜廻りて、十六日小田橋の上にて刀を持て悪神を切拂ふ體になして、即座に獅子頭を舞衣にて押つゝみ、其社へ納め入るゝなり。十五日より十七日までといへり。

【いつまで暦】 伊勢の山田に有なり。

（註）大たい松、大松明、たいまつの大なるもの。

【季題解説】 正月十五日、十六日に、伊勢國山田に祭るところの七社或は八社、即ち牛頭社・大社・藤の社・今村の社・坂の社・茜の社・箕曲の社の七社、或はこの他に瀧木社を加へたる八社にて祭典を行ひ、十五日の終夜、炬火を點じて獅子頭を舞はしめ悪神を祓ふことをなす。この獅子頭一社に一つ宛都合八つあり、この内一頭は虚空より降れるよし、殘る七つは常政長官の作と云ふ。祭典の日八ヶ町の氏子連、この獅子頭を戴き、門々をめぐり、鼓吹して舞ひ歩くなり。氏子の家々、くゝめものとて、鏡餅松明、或は十二燈などを出し、十五日終夜廻り歩きて、十六日、小田橋の上にて、刀を持ちて悪神を切拂ふ體をなして、即座に獅子頭を舞衣にて押包み、後、各

社へ納め入るゝといふ。

【例句】

神風や伊勢も古りたり獅子頭　三幹竹（雲）

御粥祭

【季題解說】一月十五日、京都下鴨の下賀茂神社にては毎年一月十五日御粥祭の儀あり、神前に紅白の御粥を奉る。白は普通の白米の御粥、紅は小豆の御粥なりといふ。京都北野の天滿宮にてもこの日御粥祭の儀あり。

枚岡の御粥占神事

枚岡の御粥　卜田祭　管粥祭

【古書校註】

【山之井】同日（十五日）河内國平岡の神前に粥をたきて年中の田畑の吉凶を相すると也。

【栞草】十五日　神社啓蒙　枚岡社は、河内國河内郡に在、社記に云ふ、祭る所の神四座、第一殿天子屋命、第二殿鸕鷀草葺不合尊、第三殿大國主神、第四殿天照大神也、又若宮一座、天兒屋命の子、押雲命也。正月十五日卜田祭、當日神供所において小豆粥を煮、粥の上に寸竹管を掛け、百穀を納署し、蒸氣の强弱によりて年數吉凶を占ふ也。當社第一の神事にして神主水連氏の外、相承することなし云々。是を平岡の御粥と云、十四日より大釜を居て、小豆粥を煮て、其釜の上に五十四本の竹を五寸ばかりに切て、管とし、一束として釣置、十五日早朝、其粥を神供とし、五穀成就の祝詞あり、五十四品の種物を、一管每に書付て、釜中の粥に浸し、さて一々管を割て、管中の粥の多少により、耕作の吉凶を卜ひ、參詣の諸人に告知す。

【新式】河内國ひらおかの社前にて十五日のかゆをたき、その中へこの竹の管を三つ入るにそのとしの滿作をはかりてしるといへり、たとへは早稻、中稻、晩稻と三度に入る時、其管に粥の滿るを吉とす、滿ざるを凶とすと也。

【いつまで艸】粥占十五日河内の國恩知平岡の神前に粥を焚、竹の筒へ穀の名を書て入れるなり、其筒へ粥の入たる多少を以て豐凶を占ふなり。

【季題解說】一月十五日大阪府中河内郡枚岡村の枚岡神社にて行はるゝ御粥占の神事は、その起源不確なれども、同社所藏の御粥古引付日記の鎌倉初記のものと傳へらるゝによつて見るに、相當古くより行はれたるものゝ如し。神社啓蒙卷之四、枚岡神社の條に、「社記曰、正月十五日、卜田祭、當日於神供所燒小豆粥、粥上五寸掛管、管中納百穀署、依蒸氣强弱占年穀之吉凶也」、蓋當社第一神事、云々、とあり。其他神道名目類聚鈔及び河内名所圖會にも亦之と大同小異の記事あり。古は當日神供所に於て小豆粥を煮、其の粥の上に五寸位の竹管をかけ、管中に百穀のしるしを納

め蒸氣の强弱によりて年穀の吉凶を占ひたれども、現時は先づ十四日正午より氏子總代社頭に參集し、御卜の諸準備を終へ、今年此の神事に參與する所役四名を卜定す。午後五時より神職及び卜定の所役一同潔齋の上神饌所に粥で占の神事行はる。卽ち古式により檜板と卯ッ木を揉りて發したる齋火にて、小豆三升米五升の御粥を焚く。此の釜の中に占竹（長五寸徑七分位の篠女竹五十三本を葛藤にて編み束ねたるもの）を入れ、御粥と共にたき（約二時間）、相當なる時間に占竹の束を引上げ、三方にのせ第一の御殿（天兒屋根大神）に奉り置き、其夜十二時頃宮司以下神職神前にて祈禱したる後之を撤下し、御神前にて占竹の管を割り、管中の小豆及米の密積したる度合によりて、米麥等五穀を始め、五十三種の作物の豐凶を占ふ。又一方釜の下の齋火の中にて長四寸直徑六分位の若樫十二本を燒きて燠になりし程度を見計ひ、古臺の上に取並べ、十二ケ月の晴雨を占ふ。十五日は早旦その結果を古例により公衆に宣するなり。尙當日は中祭式により報賽の祭典を執行す。攝河泉の民衆この古記を拜受せんとして境內に溢れ、參道の兩側には露店軒を並べ頗る殷賑を極む。

昭和八年に行はれたる神事の御粥占の記は左の如し。［參照］伊弉諾神社粥占祭（イザナギジンジャカユウラマツリ）　石卷粥占（イシノマキカユウラ）　三保祭（ミホマツリ）　粥づけ（カユヅケ）

		わせ		なかて		おくて	
米	あけの山田	わせ	上	なかて	上	おくて	中
米	あげの中田	わせ	上	なかて	上	おくて	上
米	下のふけ田	わせ	上	なかて	上	おくて	上
もち	あけの山田	わせ	中	なかて	中	おくて	上
もち	あけの中田	わせ	上	なかて	上	おくて	上
もち	下のふけ田	わせ	上	なかて	上	おくて	上

むぎ	はやむぎ	中	なかむぎ	上
むぎ	おそむぎ	中		
むぎ	大むぎ	上	小むぎ	中
雜　上の畑	大豆	上	小豆	上
雜　上の畑	さゝげ	上	そら豆	上
雜　上の畑	あは	上	きび	上
雜　上の畑	そば	中	大こん	上
雜　上の畑	ごま	上	いも	上
雜　上の畑	さつまいも	上	うり類	中
雜　上の畑	なたね	中	あかわた	上
雜　上の畑	あをわた	上		
雜　下の畑	大豆	上	小豆	上
雜　下の畑	さゝげ	上	そら豆	上
雜　下の畑	あは	中	きび	上
雜　下の畑	そば	中	大こん	中
雜　下の畑	ごま	上	いも	中
雜　下の畑	さつまいも	中	うり類	中
雜　下の畑	なたね	上	あかわた	上
雜　下の畑	あをわた	中		

例句 枚岡の粥占神事　上もなき御粥の占を貰ひけり　東一紅（寧樂）
枚岡や上々吉の御粥占　三醉竹（同）
管粥祭　占札を貰ふ管粥祭かな　同（同）

伊弉諾神社粥占祭（いざなぎじんじやかゆうらさい）

季題解説 正月十五日　淡路國津名郡多賀村鎮座の官幣大社伊弉諾神社は、古來淡路の一宮皇大神とも奉稱し、萬民の崇拜厚き大社なり。粥占祭に奉仕する神職は、前夜より齋戒して齋竹を切り、三本の管を作り、管の外面に一二三の印を刻みて、早稻・中稻・晩稻の目印とし、御粥に炊くべき米一升、及び水八升と共に祓を行ひ、齋釜の中に入れ置き、當日となれば午前二時の夜更けの頃に、齋火を鑽りて第一回目を炊き始め、同四時と同六時との三回に炊き終り、同八時に三管を取り出して神前に奉り、その日の祭典を行ひ、五穀の豐饒を祈り、併せて御神慮を下し賜はらん事を祈願す。斯くて參詣の群衆は三管より管外に御粥の漏れ出づるさまを拜して、その年の五穀の豐凶を占ふ　之を粥占祭といふ。〔參照〕枚岡粥占神事（ヒラヲカノカユウラシンジ）

例句 伊弉諾神社粥占祭　中おくの幸現はれぬ粥の占　歩牛（蘆葵）
島人の集ふや多賀の御粥占　三幹竹（同）

石巻粥占（いしのまきのかゆうら）

季題解説 正月十五日。三河國八名郡神郷村石卷神社にて粥占の神事を行ふ。式は河内國枚岡神社の粥占に同じといふ。〔參照〕枚岡粥占神事（ヒラヲカノカユウラシンジ）

三保祭（みほまつり）　筒粥（つゝがゆ）の神事（しんじ）

古書校註
【柔草】十五日　延喜式神名帳　駿河國廬原郡、御穗神社云々」慶長年中より有度郡に屬す。羽車磯田の社は、本社を去ること南へ六町餘、外濱の海畔に有、此社祠古へは數十町をへだてゝ海中三四町ばかりの島にありしを、往年狂濤衝突して漸く汀渚を沒したり、よりて社地を退く、只今此處を羽衣の舊跡といへども附會の事也　風土記に、羽車磯田の社は御穗大明神の離宮にして、今に至て每年祭祀の時、本社の神鉾を神幸し、羽車の社にて神祭をなし神供等を獻ず。○羽衣のこと、往昔この島へ天女天降し故に、羽車と云こと、神主の家の傳に有と云、しかれば羽衣の舊跡は今の社地にあらざること明らけし。例祭正月十五日也。十四日より十六日に至る、參詣の人昔より馬をまゐらすることにて、多く牽來る。十四日筒粥の神事、十

五日神前に於て天下泰平の祈禱あり。十六日古來は神輿神幸し、湯立（一）等有しに、大永二年、細川彈正忠孝範の兵火にて、神殿諸寺神器等悉く燒失す、今は神供神酒の祭祀のみのよし、[illegible]記なり。

注（一）湯立　ゆだて　巫女の[illegible]に行ふ式。[illegible]湯を笹などにひたして身に注み、[illegible]れた心亂るゝに及んで、神の託宣を得といふ、古の探湯　くがたち　の遺風歟。

季題解説　正月十五日。駿河國庵原郡、三保明神の祭事あり、十四日には筒粥の神事を行ふ。粥占の一風にして、その年の五穀の豐凶を卜ふ。（三）[illegible] 枚岡粥占神事（[illegible]）。

例句　[illegible]の　筒粥や皆來る秋を祝ひ顔　三幹竹（壁　癸）

粥つけ　管粥

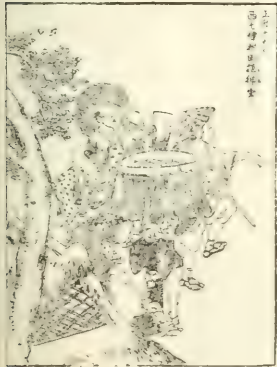
季題解説　正月十五日。美濃國海津郡吉甲村の御[illegible]神社にて、十四日の左義長の火を取り夜を徹して大釜に粥を焚き、その中に長さ三四寸なる篠竹の管を十二本入れ、十五日未明にその管を取り出して割り、中に粥の入りたる狀態にて五穀蔬菜等の豐凶を卜する風習あり。その粥を食すれば瘧をまぬかるとて人々競ってこれを食す。これを粥づけといひ、又管粥ともいふ。又同國揖斐郡地方にても鎭守の寶前に大いなる湯の花釜をすゑ、粥を煮て村の者にわかつ。この粥を食すれば病を拂ふといふ傳說あり。朝まだきより村の人々集まる。（三）[illegible] 枚岡粥占神事（[illegible]）。

例句
粥づけ　粥づけや鎭守の宮の人だかり　茶村（ホトトギス）
管粥　管粥や八分作とて目出度かり　翁化（懸葵）

鹿島の司召祭

季題解説　正月十五日。常陸國鹿島神宮にて惣神官の職位の次第をかき記し、銚場において東に向ひ高らかに讀みあぐる祭を司召祭といふ。但し、今は廢止せらる。

西七條田植神事

季題解説　正月十五日。昔、山城國葛野郡西七條村にて、酉の刻、當番の男、當村新婚の女の小袖を着し、赤前垂をかけ、紅・白粉にて化粧し、大なる笠子に注連を引きて頭に戴く。これを「ゆりなき」

といひ、人を「おやせ」といふ。又、蓑笠に鋤鍬を持ちたる者二人、おやせの先きに立ちて村中の家々に入りて耕作の眞似をなす。それを鉦太鼓に合せて「おやせ榎木婆おやせ」と囃し、家々より包物を出して盆子に納む、かくして村内を廻り、松尾の旅所に詣でて歸る神事ありたりといふ。

世計酒

季題解説　正月十五日、相模國鎌倉、瀨戶明神に供ふる神酒を、世計り酒といふ。この名の來由は、「伊勢の世はかり」に同じ〔二四、伊勢世樣〕。

船方祭

季題解説　一月十五日。加賀國能美郡湊村の今湊神社の祭事にて、神殿に奉納されたる千石船の長サ九尺餘の模型一雙と、同小形一雙とを枠作りて曳臺に乘せ、神酒・鏡餠を供へ、四方に靑竹を結びて注連を張り、船旗・五色の吹流し・櫻のダシなどの裝飾美しく、太鼓鉦に二節面白く囃子立て、紺づくめの船乘姿及び化粧廻しなどの勢子これを曳き出し、追分節の音頭を取り、「ヒヤアーエーイヤナアー、曳く帆綱はヤットコナ鬼の孫……」と獨唱すれば、「ホヲリヤ、ア、リモ、アリヤリヤノ、ドツコイシヨ、ヨヲイトナア」と勢子がこれに和して唄ひ、賑やかなりといふ。

例句　船方祭

雪散るや船を曳き出す囃子唄　鴨水

玉替神事

季題解説　正月十五日。筑後國三井郡國幣中社玉垂宮高良神社にて行ふ神事。參詣の諸人、彩玉を交換して、金銀の玉にあたりたるを福にあたれりとす。

山崎會合始

季題解説　正月十五日。山城國山崎の離宮八幡の神官の宅に當役五六人集り、上下の太夫といふ下役人を召寄せ、傳來の文書を取出し、それに關する下知をなし、酒宴を開く。互に一人づゝ盃を順に勸め、舞踏す。終つてその年の執事役を定む。これを會合始といふ。但し今は絕え果てたり。

幸の神祭

塞の神祭　御幣

季題解説　正月十五日。東遊記に、「出羽國湯美驛のあたりの街道の兩方に岩の聳えたる所には、幾所となく必ず岩より岩へ注連を張り、その注連縄のもとに、木にて細工よく陰莖の形を作り、道の方へむけて出しあり。

其の陰莖甚だ大にして、長さ七八尺ばかり、太さ三四尺周りもあるべし。（中略）幸の神と名づけて、每年正月十五日に、新しく作り改むることなり云々」とあり。

幸の神は道祖神にして、古くは塞の神、岐神、船戸神と稱し、專ら道路を守る神として、始めはその神體は杖を祭るものなりしが、中世以降、生殖器に變じたるものにて、正月十五日を以て、この神を祭り、門飾・注連を集めて之を焚く。卽ち三毬打なり。

越後の小千谷にては、此の祭盛にして、雪を踏みかためて壇を作り、中央に杉の生木を建てゝ柱とし、正月の飾物を何くれとなく結びつけ、町内安全の祈禱をなし、然る後之を燒く。この時、俗にオンペといふものを火に翳して燒くを祝事とす。オンペとは御幣の訛にて、白紙・色紙を數百枚繼ぎ合せたるを、細き幣束に切り、梢に扇の地紙の形を切り殘し、これを數千集めて靑竹に括り、棹の末に開き扇四つを寄せて、扇には家の紋などを彩り畫く。その燒けて、燒け殘りの高く擧るを以て吉祥とす。又この祭に、小兒等道路に繩を張り、通行人を要して、初穗を乞ひ、戶口に餅或は錢を乞ひ歩く風習あり。道祖神祭とて、亂暴を働くも咎むることなかりしと云ふ。又、伊豆地方にては、小車に朱塗の小祠を載せ、これを曳きて兒童等戶每に錢を貰ひ集め、これを以て、達磨・をかめ・扇・幣等を買ひ求めて大竹枝に吊し、その下に各家の松飾を集め、十四日を以て燒き棄つる風習あり。〔參照〕人事—幸の神勸進

三十三間堂の楊枝淨水加持　頭痛粥

〔季題解說〕一月十五日、京都三十三間堂に於て諸人に楊枝水を施與す。この日小豆粥を祝ふ前に參詣し、加持の楊枝水を受くれば、その年頭痛の惱みなしといふ。又佛前に小豆粥を携へ供ふ。都名所圖繪に「抑〻後白河法皇は常に頭痛の御惱ましませば、醫療さまざまなりしかども、その驗更になし。ある時熊野に御幸ありてこれを祈らせ給ふに、權現告て宣ふやうには、洛陽因幡堂に天竺より渡る妙醫あり、かれに治療を受給へと。是に依て永曆二年二月二十二日因幡堂に參籠して、ひたすら祈給ふに、滿ずる夜、貴僧忽然として又告ていはく、法皇の前生は熊野にあつて蓮華坊といふ人なり、海內を行脚して佛道を修行す、其勤功によつて今帝位に昇れり、されども前生の髑髏いまだ朽ずして、岩田川の水底にあり、其頭より柳の樹貫て生る、風の吹每に動搖す、則今身に響て此惱をなせり、急ぎかの頭を取上なば苦惱を免るべしと、香水を以て法皇の頂に灑ぐと思召て夢覺めたり。頓てかの所を見せしめ給ふに、河底より髑髏を得る。則これを觀音の頭中に籠め、三十三間堂を建立して蓮華王院と號す。かの柳の樹を堂の梁となさしむ」とあり。この日內陣を開放し一千體觀音を諸人に拜觀せしむ、都

下の道俗群參す。

【例句】

楊枝香水加持　楊枝水こぼさじと掌に受けにけり　　三管竹（同）
頭痛粥　頭痛粥額冷めたき御香水　　同（同）
　　　　足弱の起きぬけ參る頭痛粥　　羊我（慶甚）

興福寺心經會（こうふくじしんきやうゑ）

【季題解說】正月十五日。奈良興福寺に一、幸德井賀茂氏、日時の勘文を當寺務門主に献じ、松榊を南大門に建つる合式あり。終つて松榊を倒し、土民爭ふて之を引き、勝ちたる方を農事に利ありとす。

嵯峨釋迦開帳（さがのしやかかいちやう）

【季題解說】正月十五日。京都嵯峨の清涼寺にて、本尊赤栴檀尊像の開帳をなす。現今は四月十九日の御身拭に開帳す。【參照】春―御身拭（オミヌグヒ）

初聖天（はつしやうてん）

【季題解說】一月十五日。諸所の聖天に參るを、初聖天といふ。聖天は大聖歡喜天と云ひ、夫婦二身相抱の象頭人身の形を本尊とす。男天は大自在天の長子にして、世界に禁害をなす大荒神なり。女天は觀音の化身にして、彼に抱着してその歡心を得、以て彼が暴を鎭むるもの。依つて歡喜天と稱す。關西にては生駒の聖天、世に知られ參詣多し。

上元祭（じやうげんまつり）

【季題解說】正月十五日。長崎名勝圖繪、福濟寺の條に「正月十五日觀音大士の祭日なり、この日は天より福を降す日なりとて、もろこしにては殊更に祝ひをなして家々に種々の華燈を掛すことあり。その意を以て今日當廟の祭をとり行ふなり。且より夜に至て參詣群をなす。即ち紅紙に竈神の像を摺りて頒ち與ふ。人々受け歸つて竈邊壁上に貼して守護とす。ションゲハンは上元といふことなし。上元の唐音ジヤンエンなり。漳州音にてションゲハンといふ。當寺は起る事漳州の人による、故にその音を用ふ、今に至てこれを改めず云々」とあり。長崎市史風俗編唐人風俗の條に「上元はまた蠟燭替とも稱せられた。上元の夜には堂中佛前に巨蝋燭が數十挺ともし

てあるが、參詣の人々日本蠟燭を持參して、右のともしかけの唐蠟燭と取替ふるのを例としたので斯く稱せられたのである。上元の夜の唐蠟燭を持ち歸りて病人などの枕元に於て點せば病氣平癒の祈禱になるといふので、病家の男女先を爭うて蠟燭替のために參詣したものである。唐寺年中行事に據ると、正月の上旬頃上元會に用ふる方燈籠などを先づ修補して觀音大士を祀れる青蓮堂へ之を届くるのを例とした。上元會の當日は佛前獻果上供美々しくかざり、銅羅太鼓の音かまびすしく、參詣の老若踵を接するのであつた。夜は眞の意味に於ける蠟燭祭であつた。そして刹竿にも點燈が施さるのであつた。」と詳記す。秋の蘭盆勝會と相雙んで、この上元祭は、今も廢れずに行はれ、特異の情景を呈す。

例句

上元祭

請ひ得てし這神護符々上元會　田士英（太白）
明鐘にまたゝく燭や新福祭　甘瓠（同）
明々と蠟燭祭の籠り堂　季外（同）
上元やトランプ遊ぶ支那婦人　日樓（同）

龜戸の大御食調進（かめゐどのおほみけてうしん）

季題解說　正月十六日。江戸龜戸天滿宮にて、午の時に社司祝詞を奏し、次に越天樂を奏し、魚鳥蔬菜菓子果物等七十五膳の供物を獻備し、別當は祭文を讀む。終りて神樂殿にて神樂あり賑ひたりといふ。

例句

龜戸の大御食調進

大御食をすゝめ參らす神樂かな　都水（懸葵）

唯押（たゞおし）

季題解說　正月十六日。伊賀國阿拜郡河合の高松神社にて、每年正月十六日神殿にて「タダオシ」といふ事を營み、氏子の村人左右に分れ押合ひ、其勝負を以てその年の吉凶を占ふといふ。〔參照〕浦佐の堂押（ダウオシ）

日野の裸踊（ひのはだかをどり）

季題解說　正月十六日。京都醍醐の南、日野の藥師阿彌陀堂に里人集りて裸になり、歌を謠ひ、二人づゝ背中を合せて緣を廻る。これを日野の裸踊といふ。元來この藥師は乳のなき女の信仰する佛にして、佛供米を乞ひ粥として食すれば必ず靈驗ありとなし、その乞ひうけたる佛供米の十倍を納めて佛恩を謝し、里人を雇うて踊らしむることもありといふ。法會の終りに牛王の札を出し廣庭に投ぐるを參詣の人々拾ひ歸る風習ありたりといふ。

例句

日野裸踊　よろこびの裸踊りや日野薬師　丈石（懸葵）
乳乞ひも交る裸の日野踊　鴨水（同）

七瀬川の裸踊

【季題解説】正月十六日　京都伏見七瀬川の薬師堂にて、裸踊をなすことあり。日野の裸踊に同じく、またこの邊を通過する人には、貴賤となく引き止めて、酒をすゝむる風習ありといふ。【參照】日野の裸踊

鱗祥院春日局木像開扉

【季題解説】正月十六日。江戸湯島天澤寺にて徳川家光の乳母春日局の木像の開扉あり。局は寛永二十年九月十四日年六十五にて病歿し、嘗て建立せし湯島天澤寺に葬る。その戒名を取りて、一に鱗祥院と稱す。

【例句】
春日局木像開扉　御開扉や二位の局の天澤寺　麥秀（懸葵）
藪入子參る春日の局寺　鹿羊（同）

山門開き

【季題解説】正月十六日、江戸時代、東叡山文殊樓・増上寺山門・淺草寺山門等諸大寺の山門を開きて終日樓上に參詣者を登らしむること行はる、これを山門開きといふ。春臺文集に「早春登增上寺樓」と題して「芝浦春風百尺樓、登臨宛是鳳麟洲、東南日極滄溟濶、唯見房陵水上浮」の詩あり。

【例句】
山門開き　樓門の文殊拜みに登りけり　春浦（懸葵）

雜司ヶ谷鬼子母神堂奉射　鬼子母神祭禮

【季題解説】正月十六日、昔江戸雜司ヶ谷の鬼子母神にて奉射の式を行ひ、土俗に「ひしや」といふ。その式次第は射手六人、各小屋より幕の中に出でて、介添の者より弓矢と敷皮とを請け取る、この間に式あり。その後射手一人にて矢六筋を放つ、すべて三十六筋なり。日記付、采配振、矢取、介添等各式あり。射手六人、射終りて後、一番より次第して小屋に入る。この間に一山の僧侶又氏子の輩集會し、酒五獻にて終るといふ。東都歲事記には「奉射のこと絶えて唯法華經を讀誦するばかりにして、本尊の衣更あり」と記す。

興福寺法起始　烽起始

【季題解説】正月十六日。今夜、奈良興福寺の衆徒、面を包み、法螺貝を吹

き、寺の周囲を廻り、後大湯屋にて年中の大會事を定む。此時市中は灯を滅し、若し之を見物するものあれば杖に打たれて其祟ありとす。又烽起始ともいふ。【[illegible]】冬―法起納【[illegible]】

【[illegible]】
興福寺　すさまじや法起始の貝の音　亞　僧（[illegible]葉）

大茶盛（おほちやもり）
西大寺（さいだいじ）の茶宴（ちやえん）

【[illegible]】正月十六日、大和國生駒郡伏見村の西大寺大茶盛式は、中興開山思圓上人の時に由來す。上人は學徳一代に傑出し、律法を振起し、廢寺を復興し、朝命を奉じて蒙古退散の祈禱を修し、國家の爲に貢獻する所勘からず、一天四海の大導師、濁世末代の生身佛として興正菩薩の勅諡を賜ふに至れり。茶は正月歳首の御修法を行ひ、同十六日の結願に當り、鎭守八幡社頭に賽す。時に自寺彌塑、風景極めて佳なりければ、上人自ら抹茶を點じ衆に施す、これ即ち此式の起源なりと云ふ。方丈上段の間に假山を造り、松枝に綿を綴りて雪景を模し、傍に小祠を安じ、徑尺餘の大碗に茶を點じ、衆客同じく喫る、他に見ざるの古式なり。久しく絶えたりしが、近年この古式を再興し、春四月の好時期に行ふことになれり。【[illegible]】春―大茶盛（オホチヤモリ）

遊行寺の札切（ゆぎやうじのふだきり）
お札切（ふだきり）　お符札（まつふだ）

【[illegible]】
【栞草】十六日　遊行上人（一）年中諸人化益のため、一遍上人（二）熊野權現より請られし遊行代々相傳六字名號の印を正月十一日に押るゝといへり。これを札切といふにや東都淺草日輪寺にて問はべりしに、札切と稱する事なしといへり、此詞四季部類に出づ。

【註】（一）遊行上人、一遍上人を云ふ、但しては代々の遊行派の高僧をも云ふ。（二）一遍上人、姓は河野氏、通秀と稱す、出家して隨縁、後ち智眞と改む、六萬念佛の金札を荷ひ諸國を遊行し、貴賤道俗を勸化し、世人これを遊行上人と呼ぶ、正應二年八月寂。

【[illegible]】一月十六日、相模國藤澤町なる時宗本山遊行寺にては宗祖一遍上人手づから刻したる六字名號の札を刷り、これを截つの式をお札切といひ、この日作りたる數にて、一年中の衆者に頒布するに過不足なしといふ。これは昔一遍上人諸國行脚の時、紀州熊野權現に參籠中靈夢により、念佛の行者に結緣せんがために、手づから此札を截ち刷りて大衆に與へしに始まるといふ。この念佛札には、南無阿彌陀佛決定往生六十萬人と記せり、蓋しこの六十萬人は、神授感得の頌、六字名號一遍法、十界依正一遍體、萬行離念一念證、人中上々妙好華とある四句の初の各一字を取りたるものにして、人數を限れる意にあらずといふ。

【例句】

お札切

經机に御札切る間の御珠數かな　凡狂子（昭和一萬句）

勤願にちらつく雪やお札切　碧梧（同）

札切や念佛三昧醉酒如々　夜濤（同）

札切の口に不斷の念佛かな　容太（懸葵）

初閻魔（はつえんま）

閻魔詣（えんままゐり）　齋日（さいにち）

【解説】正月十六日。當年最初の閻魔の緣日。あだかも藪入の日とて、諸所の閻魔堂に參詣する人殊に多く、諸寺院にては地獄變相の圖、十王圖、その他地藏尊、羅漢等の佛畫をかゝげて一般の參詣者に禮拜せしむ。閻魔は縛と譯し罪人を縛する義あり、地獄の總司なり。又勸善懲惡の判官なれば閻魔法王ともいふ。㊫夏—閻魔詣エンママウデ

【例句】

初閻魔

鬼呵る口もめでたし初閻魔　十三星（鍵氷集）

うしろより紙の礫や初閻魔　童觀（懸葵）

空風の中に出店や初閻魔　虛夢（同）

晝からのざんざ降りなり初閻魔　寂人（懸葵）

閻魔詣

かぜひくな正月閻魔詣でかな　梨葉（梨葉句集）

合邦ケ辻の閻魔や宵詣　童觀（年刊俳句集）

子を連れて閻魔詣を梅園へ　羊我（懸葵）

齋日

齋日や晝餉久しき臺所　菅雅（發句類聚）

齋日を鶯に似よ人の舌　爹松（同）

妙見寺の石賣（めうけんじのいしうり）

【解説】正月十六日。往古下總國の妙見寺にて石の賣買をなすことあり、その石は馬に一駄の價百文なりしといふ。尙、九月十六日にもこの行事あり。

永觀堂大般若轉讀（えいくわんだうだいはんにやてんどく）

札賦（ふだふ）

【解説】正月十六日。日次紀事に「今日大般若經を轉讀す、讀了りて札を諸人に授く、これを札賦といふ」とあり。京羽二重に「傳云池の大納言賴盛卿の息、僧都靜遍はじめは仁和寺の僧たり。後禪林寺永觀堂に住居し、源空滅後選擇集を披閱して一向專修の念佛に歸依し、改めて名を心圓坊と號す。賴朝卿心圓坊にふかく歸依し給ひ、武運長久の祈禱の爲に大般若を此寺にて轉讀したまふ。其例いまに正五九月勤之」とあり。

【例句】

永觀堂大般若轉讀

鹿ケ谷の僧も出で來よ大般若　枳南（懸葵）

管絃講（くわんげんかう）　十七夜講（じふしちやかう）

季題解説　正月十七日、安藝國嚴島神社大宮の御前に於て、供僧は終日法華經を讀誦し、伶人は甘州五常樂、皇麞太平樂、鷄德樂等の諸樂を奏す。これを管絃講と稱へ、一に十七夜講といふ。

精進頭（しやうじんのとう）

季題解説　正月十七日より明年の正月十六日迄、京都上加茂の氏人五人、日日垢離を修し、本社及太田社に詣で、特に丑の日は貴布禰に詣づ。その途中に扇を翳して不淨を避く。これを精進の頭といふ。

例句

精進頭　　正月十六日加茂に詣す

梅が香や精進の頭の入替り　　史邦（俳諧猿舞師）

精進の頭名はそも一之進　　羊我（懸葵）

新御靈御弓（しんごりやうのおゆみ）

季題解説　正月十七日。攝津國大阪御靈社にて御弓の神事を行ひたりしを新御靈御弓といふ。【參照】住吉御弓神事

護國寺開帳（ごこくじかいちやう）

季題解説　正月十七日。江戸小石川なる護國寺はこの日開帳の定めにて、參詣の群集殊に多し、

王子十八講（わうじじふはつかう）

季題解説　正月十七日。江戸王子村の農家にて十八講を行ふ。當日權現の別當金輪寺の住持を請待して酒飯の饗應をなす、半ばにして當番の百姓、杵、飯臺、魚盤の三品を携へ出でて、のめそ、よいやさの懸聲をなして食をすすむ。これこの地の舊例にして珍らしき行事なり。十八講とは昔神領十八箇村ありし頃の舊稱ならんといふ。

（王子十八講之圖）

仁壽殿觀音供（にんじゆでんのくわんおんく）　二間の供（ふたまのく）

【季題解說】正月十八日。公事根源に「東寺の長者たる人の、此の事をば勤するなり。里内の時は眞言院にて行はる。應和二年六月十八日觀音の像一體を仁壽殿に安置せらる。寛空僧正をして、開眼供養あり、是れは每月の事にて天子の御祈の爲なり。昔は又夜居の僧とて二間にめしおかれて、御加持を致しけるにや」と見ゆ「里内」とは里内裏とも云ひて、假皇居のことを指す。寛空は河内の人、仁和寺に住し僧正たり。夜居の僧とは夜中宿直して加持する僧「二間」は淸涼殿内、夜の御殿の隣室なり。

壒囊鈔十二に「二間供とは仁壽殿の觀音供の事なり。是も大師奏聞に依て、承和元年より始也。東寺の長者之を勤む。每月十八日阿闍梨參內して、仁壽殿に於て觀音供を勤むる。是內侍所に就て御神體を觀ずる祕傳侍るとかや。但近き比は淸涼殿にて有る也。其故は白河院御宇、承曆四年二月に大內失火ありてより、仁壽殿の觀音供絕たりけるに、寛治六年經範僧都法事斷絕不可然由を奏す。乃至永長元年正月より觀音供を淸涼殿に置かる。乃至彼の所に二間ある故にフタマと云ふと。或說には主上の御座の間にて御身近く被修故に二間の觀音供と云と。帝の御座を一の間とする心なり。二をつぎと讀で、次の字の心に用ふ也」とあり。

淺草觀音亡者送り（あさくさくわんおんもうじやおくり）

【季題解說】一月十八日、亡者送りは古來の溫座陀羅尼の祕法修行の結願の夜に行はるゝ行事をいふ。東京年中行事に「時は夜の七時頃、一百の御燈明パッと一時に消えると思ふと、一人の坊さんはお供物の入つた飯櫃のやうなものを抱へて暗闇の中から飛出して來る。と頭に頭巾をかぶつて、松明を携へた二人の坊さんがツト物蔭から躍り出て、前の一人の後を追駈ける。供物を抱へたのが追はれながらに御堂を三遍廻ると、松明の二人もぐるぐると追かけながら三遍まはる。そしてやがて三人共に西の階段から下りて左甚五郎作の木馬の隣にある鹽舐地藏の後ろへ供物を埋めに行く。それで亡者を送り屆けたことになるのであつて、松明の燃えさしは戸口先に下げて置けば、厄病除の呪ひになるといふので、松明坊さんのあとを女子供がぞろ〱と附き歩くも面白い。」と詳說せり。

【例句】亡者送り　松明や亡者送りの闇照らす　枳園（懸葵）

鬼走り（おにはしり）

【季題解說】一月十八日。近江國甲賀郡石部の常樂寺にて鬼走りの古式あり。

付民赤鬼の假面を被り、炬火を振りて相追逐し、堂の前後を廻る、この寺を一に西寺といふ。近傍の東寺と相對す。堂宇には特別保護建造物に指定の佛畫佛像を藏する古刹なり。

例句

鬼走り　闇かんにかゞりに鬼の走りけり　鶴化（煙　茶）
東寺は淋し西寺の鬼走り　同（同）

初觀音（はつくわんおん）

季題解説　一月十八日、諸所の觀音に參詣するをいふ。觀音は又觀世音、觀世自在、觀自在ともいふ。梵音、アバルキテイシユバラ。世人彼の菩薩の名を稱する、音を觀じて救を垂るゝ故に觀世音と云ひ、世界を觀じて拔苦與樂するに自在なるを以て觀世自在といふ。觀音に六觀音、七觀音、乃至三十三觀音あり。但常に觀音と云ふは六觀音中の聖觀音を指す。法華普門品の觀音、觀無量壽經の觀音是なり。これを觀音の總體とす。世俗正月朔日に參詣すれば百日に向ふといふ。江州立木觀音・京都清水觀音・東京淺草觀音など賽者多し

例句

初觀音　初觀音梅にかけさす夜店かな　烏不關（現代俳句大觀）
仲見世や初觀音の雪の傘　龍雨（昭和模範句集）
初觀音繪馬のかげより鳩のぞく　茂竹（なぎの花）
糸針の初觀音の夜店哉　羊我（懸葵）

厄神詣（やくじんまうで）

厄參（やくまゐり）　厄詣（やくまうで）　八幡參（はちまんまゐり）　八幡授膳詣　八幡土産（やはたみやげ）　八幡鐘
青山祭（あをやままつり）

古書校註

【山之井】是は八幡の厄神の宮にまうでてそみん將來の札をもとめて歸る事也、神代に牛頭天王のこの蘇民が情を得給ひて汝が子孫永く災難を免るべしと誓ひ給へる故、蘇民將來が子孫といふ札をうけもつ事也、厄神は牛頭天王なるべし。

【栞草】十九日　山城國綴喜郡八幡一の鳥居の内に、八幡の御旅所あり。年毎の正月十九日この所に疫神を祭る、諸方の男女參詣す、この故に此所を疫神の社と云へば非也、一日の勸請也、宿院頓宮のまへに預め榊數千本を建て疫塚を表し、夜に入て宮守神主各榊を圍み立つ、凡宮守の上首を一の行事と云ふ。その次二の行事三の行事と稱す、いにしへは火燎を以てす、今は燎すこととなしといへども、舊きに傚ひて圍み立つ、この榊は疫を攘ふの義也神人を背炙栗と云ふ。參詣の人年齡支干を小き木札に記し、捧ぐる

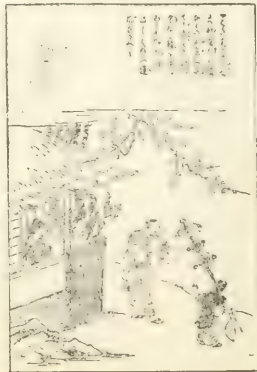
所の錢に添へ、疫塚の内に投入るゝ也、昔はこの木札疫塚共にこれを燒り、これ又疫を攘ふ也。十五日より參詣有て十九日昧に多し、是を疫神祭と云ふ。歸路弓矢を買て小兒の翫びものとす、又昔此所は祇園の社也。故に今も蘇民將來の木符を賣る、これを小兒の衣領に繫ば、疫を除くと云ふ。これ中華剛卯の微意か、又山腹の岩間より出る水有、これを香水と稱し參詣の人小竹筒に盛り携へて家に歸る、疫病あるもの少しく飲ときは癒ゆ、凡厄年にあたるもの、疫神の社前なる砂をとりかへり、寢所の下に置き、年過て此砂を倍して返し納む、故に俗又厄神と稱す。（季吟曰く神代に牛頭天王蘇民が情を得給ひて、汝が子孫永く災難を免るべしと誓ひ給へる故、蘇民將來が子孫と云札をうけもつことなり、厄神は牛頭天王なるべし。

【新式】むかし神代にそさのおのみこと（二）根のくに（三）へやられ給ひし時、暮におよびてやどりをもとめ給ひしに、巨丹將來、蘇民將來とて兄弟の者ありしが、こたんしやうらいはおしみてかし奉らず、そみんしやうらいはやどらせ奉り、かしづき參らせしかば御饗ちかひ給ひて、そみんが子孫には長く災厄のかなしみなからしめんとの給ひしとかや。されば厄神まいりの土産にはかならず千貫も此遺事か。

【いつまで暦】厄神詣十九日八はた牛頭天王へ參る也。

註（一）牛頭天王　ごづてんわう　備後に「天竺の北なる九相國吉祥園の王、祇園精舍の守護神なり、其の垂跡を素盞嗚尊とす」山城愛宕郡八坂郷なる今の祇園の神是れなり。（二）そさのおのみこと　素盞嗚尊。（三）根の國　黄泉　よもつくに　よみのくに。

[illegible]　正月十九日、山城國綴喜郡八幡町の男山八幡の頓宮前に榊數千本を立てこれを青山といふ。夜の子の刻、宮守座の神人、四方の疫神を此の青山の塚に祭り、注連を以て封ず。頓宮北門の下にて、宿の者左右に列座して、中央に大幣、左右に十六本の幣を立て、天津祓・國津祓・若生祓をなし、參詣の人を祓ふ。その方法は其の人の年齢干支を小さき木札にしるして、之を榊の中に投げ込む。これ疫を攘ふ意なり。十五日より十九日まで、京阪地方の人々參詣して混雜したりといふ。

現今は、一月十八日に山下頓宮の前に正午に祭場を設け、八角の形に竹を建て、方毎に榊の枝を插み、南方を開き、入口の左右に忌竹を立て注連を廻し、机二脚を設け、一脚に神饌、一脚に神饌を供ふる所とし、又その前に清薦を敷きて祝詞の座とし、午後三時、神饌を供して祝詞を誦し、退散す。この祭を青山祭といひ、昔國境にて祭を行ひたる遺風にて、近世はこれを道饗祭と稱へ、八衢比古神・八衢比賣神を祀ることゝせりといふ。

土産として破魔弓・破魔矢・紙製の鯉・鳩の箸等を賣る店多く、これを俗に八幡土産といふ。〔[illegible]〕吉田清祓（ヨシダキヨハラヘ）　女節分（ヲンナセツブン）

例句

厄神詣　厄神や暫しとぎれし詣人　楓居（ホトトギス）
厄神詣寒晴の湖に沿ひ行けり　三幹竹（懸葵）

厄参　厄参り思ひつる事果しけり　嘯山（律亭句集）
駕舁やよき序なる厄参り　同（同）
賽前の胸突坂や厄参り　王城（ホトトギス）
後厄の妻もつれそひ厄詣　羽公（同）
厄参り壬生に暮れたる吹雪哉　橘鳥子（大正新俳句）

八幡参　白羽箭八幡詣りの手に寒し　徂春（ゆく春第一句集）
破魔矢挿す八幡戻りの帽子哉　洛山人（昭和一萬句）
うち晴れて八幡詣での渡舟哉　米朗（年刊俳句集）

八幡土産　丸盆に八幡みやげの弓矢かな　太祇（太祇句選）
寒梅の山路にうるや八幡鯉　青々（妻木）
初八幡土産を舟に忘れけり　男也（懸葵）

吉田清祓（よしだのきよはら）　厄塚撤す（やくづかてつす）

故事來歴

【栞草】十九日［紀事］正月十九日、大祓毎年夜に入て、吉田卜部家（ウラベケ）（一）新年の行事有、斎場所の前に八所壇をかまへ、八方を拜せらる、其後斎場所八角の社内に入て、宗源神道の行法を修せらる、これを大祓と云ふ、（一）一説に今日の祓は疫神祭也、八幡の疫神祭に同じ、節分の夜より正月十九日迄なり、此間疫神を封ずる也、十九日に至て其塚を撤す。

註（一）吉田卜部家　天兒屋根命十二世の孫大中臣雷大臣命より出づ、命始めて卜の術に達し仲哀天皇に仕へ、依て卜部氏を賜ひ子孫をして之を行はしむ、朝廷の時に吉田社を預り子孫世襲す、故に後吉田氏に改む、明治に至り子爵を賜はる。

【いつまで暦】吉田の清祓　十九日、女節分と云

季題総説　正月十九日。日次紀事に「正月十九日、大祓毎年夜に入る、吉田卜部家に新年の行事あり。斎場所の前、八所に壇を構へ、則ち八方を拜せらる。其後斎場所八角の社内に入りて、宗源神道の行法を修せらる。これを大祓といふ」とあり。又一説に今日の祓は疫神祭なり、八幡の疫神祭と同じく、節分の夜より正月十九日までなり、節分の夜は天下一統百鬼夜行を掃ふて禳する也。其の百鬼を散亂せざるために節分の夜より今日まで疫神所に封じこめ置くなり。節分若し春にあれば、大晦日の夜より今日迄祭る。そのために疫神塚とて榊を以て大元宮の前に壇を構へられ、清祓を修せられ、今日塚を撤せらる」とあり。現今は二月四日の節分の夜厄塚焼きの神事を行ふ。〔季語〕女節分（ヲンナセツブン）　厄神詣（ヤクジンマウデ）　冬―厄塚立てる（ヤクヅカタツル）

節分詣

例句

吉田清祓　神樂岡しづめの神や清祓　三幹竹（曙　葵）

女節分（をんなせつぶん）

古書校註

【栞草】十九日、吉田の疫神詣なり、節分の夜より疫神を祭るが故に、男は夜分といへども參詣す、女子は夜分といひ時分の家事多くて節分に詣づることを得ず、よつて十九日を節分の代りに詣づる心にて、女節分といへるにや、吉田の清祓の條と互見すべし

【年浪草】按に是も亦吉田の疫神詣なり、節分の夜より疫神を祭るが故に、男子は夜分と雖も參詣すれども、女子は夜分と云ひ時分の家事多くて節分に詣る事を得ず、此の十九日を節分の代りに詣る心にて女節分と云にや。京師婦人正月十五日を年禮の始とし女正月と云が如きか、又當社は別て婦人の詣る由緣もあり、奈良の京には春日社、長岡の京には大原野[illegible]、平安城には吉田の社、皆帝闕に近して、皇龍を守りたまふ、凡て日大原野兩社は京師に遠く女御（一）の行啓を始奉り女官（二）達に到るまで折々詣る事難し、故に御堂關白道長公（三）法性寺（四）を造り、吉田を崇めて以て興福寺の春日の社に擬せらる、婦人の詣ること之に起る乎。

註（一）女御　にようご　女官の名、中宮に次ぎて寢に御す、中宮は古く皇后の御所の稱、後には直に皇后の稱、又後には皇后の外に設けられたる妃の位の稱、皇后と並べ置かる　女御の行啓とあるは皇后（又は中宮）の謂なるべし　（二）女官　にょくわん　禁中後宮に仕ふる女の官人の總稱官女に同じ。（三）御堂關白道長、法成寺入道[illegible]白太政大臣とも云ふ、藤原氏の長者として位人臣を極め、其女三人皆后位に居り榮華を極む、萬壽四年十二月薨ず、六十二。（四）法性寺、法成寺の誤。

季題解説

正月十九日、京都の婦女子、吉田の清祓に參詣す、而して、節分の厄拂に代ふとの信仰あるため、女節分といふ。〔參照〕吉田清祓　厄神詣　時候―女正月　冬―節分詣

例句

女節分　社家にして女節分詣かな　黒洲（曙　葵）

女節分を詣に鹿の子の流行哉　同（同　）

御忌（ぎよき）

法然忌　御忌詣　御忌法事　御忌小袖　衣裳競べ　辨當始
御忌の鐘

古書校註

【山之井】廿五日　法然上人（一）の忌日にて、十九日より廿五日迄七日知恩院にて法事有。

【いつまで暦】十九日より廿五日まで浄土宗本山法然上人の御忌、あたらしき衣類を着て智恩院へ参るなり、これを御忌小袖といふ。

【栞草】廿五日　洛の東山、華頂山智恩院大谷寺浄土宗惣本山也、正月十八日より廿五日に至て一七日晝夜別行法事を修す、廿五日を以て正日とす、是法然上人の忌日也、故に忌と云。

【年浪草】紀事に曰く、洛中年中多事、處々に遊楽す、春は初知恩院御忌の中、是を遊覧の始とす、冬十月東寺開山忌是を終とす、云々　京俗の所謂弁當始め弁當納め也、正月十八日より廿五日に至て、一七晝夜別行法事を修す、廿五日を以て正日と為す、是れ法然上人忌日なり、故に是を御忌と謂ふ、其式彌陀經[illegible]讃偈陀唄散華等也、悉く御忌法要に見えたり。

【新式】十九日より廿五日迄浄土四ヶ本寺に一て圓光大師忌をつとむるなり、委くは爰に略。

圖（一）法然上人　浄土宗の開祖、源空と號す、両親にして厚く[illegible]を[illegible]む、建暦二年正月二十五日寂す、世壽八十、圓光大師・東漸大師・慧成大師・弘覚大師・慈教大師の諡號あり。

季題解説　正月十九日より二十五日まで、浄土宗の寺院にて開祖法然上人の忌を修す。圓光大師・常照大師、名は源空、法然と號す。美作の人、漆間時國の子、十歳にして受戒し、後、叡空について剃髪を受く。洛東吉水に住して一向專修念佛を弘通し、圓頓戒を說き、彼の善導大師の釋文によりて、浄土の一宗を創唱す。建暦二年正月二十五日寂す。壽八十。もとこの法會は後水尾天皇の勅命によりて、修したるを以て單に御忌と云ふなり。十八日夜僧侶阿彌陀經を諷し行道を修す。これを經の紐解といふ。今知恩院・知恩寺・増上寺等は四月十九日より修すれども、地方にては舊暦の正月廿五日に營む所あり。御忌詣の人の著る衣服、俗に衣裳競べと稱して、各自美を競ひ、呉服屋はこの衣裳を見てその年の流行を定めしといふ。又、洛中に於ける年中の遊覧の始めとて、辨當初ともいへることとなり。御忌の鐘は御忌の時撞く大鐘の音をいふ。

【参照】春・御忌。

【例句】

御忌

さはいへど御忌奥深し華頂山　嘯山（蓮亭句集）
金棒や御忌の警固の威めしく　四明（明治句集）
錦襴のとばりに御忌の燈かな　貞名文（同）
引いて來て松まだ植えず御忌の寺　玉垣（續ホトトギス）

法然忌

魚食はぬ猿が佛か法然忌　鳥不關（靑嵐）
鐘聞いて心づきけり法然忌　守水老（明治句集）
佛燈に白梅寒し法然忌　秋菊（同）

御忌詣

人妻の老けり御忌の朝詣　大魯（蘆陰句選）
松風に紅裏かへせ御忌詣　靑々（妻木）
御忌詣子に付與したる老が杖　同（同）
丹波からおちよぼの母や御忌詣　世音（明治句集）
御忌詣都をぞろり〳〵かな　六和（同）
御忌詣定宿古き四條かな　荒井蛙（同）
双林に寒烟ほしゝ御忌詣　山梔子（櫻軋、萬句集）
信のなき視をさとしぬ御忌詣　句佛（懸葵）

御忌小袖

御忌戻り小袖たゝむや京の宿　露石（明治句集）

御忌の鐘

御忌の鐘時なき京のうねりかな　蕪村（蕪村句集）
白河の出窓凍るや御忌の鐘　互口（壬申句鈔）
京は梅の寒きをつくや御忌の鐘　月村（明治句集）
御忌の鐘夜冷へに老を聊ちけり　蘆仙（同）
念佛の一足づゝや御忌の鐘　孤島（同）

野里一夜官女（のさといちやくわんによ）

野里御頭祭（のさとおとうさい）

【季題解說】正月二十日、攝津國西成郡野里村に御頭祭あり、祭神は住吉明神なり、諸國年中行事大成に「住吉此地に乃佐渡彥といふ者あり、常に住吉の神を崇信す。ある夜の夢に老翁告げて曰く、我は住吉明神なり、此地に跡を垂れん、近日東方の深淵にその證を見るべしとて夢覺めたり。乃佐渡彥郷人を率ゐて神供鯉・鮒・鯰を調へ月穢なき少女に持たしめて深淵に至る。時に俄然として風雨おこり黑雲淵の上に覆ひ、白波を上げて貞龍出現す。郷人恐れて走り去る。乃佐渡彥一身動ぜずして神の出現なることを悅ぶ。暫時にして河上波靜かにして白日に復し、水面に一の神器を留む。これを崇めて社を建つ、時に承和二年正月二十日なりといふ。乃佐渡彥の裔今に十二家あり是を番頭衆といふ、又宮座とも稱して神祭皆この家指揮す、又附僧あり辻本道場・照圓寺・成覺寺・圓光寺といふ。その番頭の內一老二座と次第ありて今日の神供二座の家よりこれを調ふ。神供四品、一に御供飯土器盛、二に鯉魚の三年物を頭を切て紙に包み首尾ともに土器に盛り、

三に鮒魚の七八寸ばかりなるを土器に盛り、四に鯰魚を二つに切り皿につきたるまゝ土器に盛り、其他蕪菁、串柿等あり、その御供物は第一の社に納め、第二第三第四の社へは鯉鮒鯰を献ず。六具是を一槽の御物に入る、これを醬司といふ、一社に二具づゝなり、これを持つ者を上﨟といふ。皆少女にして下げ髮に打かけを着す、故に一夜官女と稱す。今池十二家の番頭、帶刀して前驅し、次に上﨟御供物を頭に戴き歩行す、その後一村これに從ふ。而して社前に至り淨衣の神人に渡す、神人是を神前に捧げ終り、大鼓を早く打ち鈴をふる。この時、上﨟及び番頭の者退散す、これ饌のあらはれたるを表すといふ。其後この十二家の番頭の家に於て神供の鯉鮒鯰を調味す、これをゴンタロウと云ふ、その由緒詳かならず。」とあり。この祭事は後には二月廿日の午前中に行はるゝものと改められたりといふ。

例句　一夜官女

道行は寒き野里の官女哉　零雨（寒葵）

一夜のみ官女の御衣参らせん　同（同）

昔一夜官女つとめし媼かや　同（同）

一夜揃ふ野里の齋の官女哉　三幹竹（同）

下げ髪に東風泌む一夜官女哉　句佛（同）

二十日夷祭（はつかえびすまつり）　二十日夷（はつかえびす）

季題解説　正月二十日、古、江戸にてはこの日夷祭を行ひ、惠比須講の市も立ちたり。これを二十日夷といふ。【季題】十日夷（新年）　冬　夷講（冬）

春日御田植祭（かすがおたうゑまつり）

季題解説　正月二の申日、奈良春日神社の社前にて御田植の式をなし、農作物の豊饒を祈る祭を行ふ。現今は三月十五日に行はる。【季題】春　春日御田植祭（かすがおたうゑまつり）

初鰹神供（はつがつをのしんく）

季題解説 正月中旬より二月上旬の間に、相模國鎌倉長谷の海にて初めて鰹一尾を漁す。此時の魚に限り、頭に大さ二寸餘の紺色の烏帽子の形したるものを頂くが如し。故に烏帽子魚、又は駈魚（カケウヲ）といふ。漁人これを獲るや直ちに船を戻し、鶴岡八幡に至り神供とす。後濱に引返して、漁船數艘を出し、笛太鼓を囃して祭を行ひ、其鰹を漁したる漁夫の名を、江戸幕府へ注進したりといふ。

初大師（はつだいし）　初弘法（はつこうぼふ）

季題解説 一月二十一日。新年最初の弘法大師の入定日にあたりて、各地の大師堂に參詣する者多し。殊に京都東寺の縁日は初弘法と云ひ殷賑を極む。

參照 三弘法詣（サンコウボフマヰリ）　東叡山兩大師廻り（トウエイザンリヤウダイシマハリ）

季題解説 初大師

御影堂は雪につゝまれ初大師　樂天（現代俳句大觀）
初大師鮫洲に酌みて夜となりし　徂春（昭和一萬句）
賽米に交じる霰や初大師　筍浦（同）
穴守へのろ／＼舟や初大師　かな女（同）
一日の牛の休みや初大師　舟青（年刊俳句集）
護摩上ぐる遍昭講や初大師　無黄（同）
初大師佛眼黑く光りけり　蘇子（蘇子句集）
初大師雪降りたらぬ寒さ哉　白水郎（白水郎句集）
頭上飛ぶ投賽錢や初大師　不二夢（ホトトギス）
初大師吹かけ雪にのぼる醉　池音（ゆく春第二句集）
日當りの萱道寒し初大師　可種（己巳句鈔）
麥の芽に筑波颪や初大師　孤軒（孤軒句集）
梅の日にかたひめぐまれ初大師　樂南（昭和模範句集）
風よける風車賣や初大師　烏不關（青嵐）
梅さげて赤門出たり初大師　春村（懸葵）

御弓祭（おゆみまつり）　御弓神事（おゆみしんじ）　御弓式（おゆみしき）

季題解説 一月二十二日、山城國乙訓郡大原野の官幣中社大原野神社にて御弓祭を行ひ、一に御弓神事、又は御弓式と云ふ。この神事は氏子を南北兩町に分つて隔年に奉化する例にして、その當番役は（一）上座侍（南一人、北一人く、（二）弓太郎（同上）、（三）下座侍（同上）、（四）酌人（同上）、（五）使丁數人等より成る。一月二十日弓始めとてこの日當番を定め、それよりいろ／＼の順序を踏み、二十二日の當日は村内當使の者、弓太郎兩家へ

時刻打合せの爲め七度半の使をなす。午後零時半打合せ整ひ、南北より各弓持（使丁）を先導に、上座侍・弓太郎・的人・下座侍の列にて社頭に着く。神前にてはこれに先だち、宮司以下中門内神饌所に着座し、次で型の如く献饌祝詞奏上、玉串奉奠等ありて、弓太郎一行を迎へ、當番役一同は修祓を受け、神前に進みて拜禮、退出。次で權宜主典の二名先導して一行正しく射場野に向ひ、參着後所定の座に就く。やがて弓太郎二人は同時に立つて神座を拜し、型の如く弓を引く。射を五回行ひ、的人五度立ち、弓太郎五度立ちて以て式を終るものなり。

【例句】御弓祭

潔き射場野の雪や御弓式　三幹竹（[illegible]）

弓太郎神座を拜し構へけり　同（同　）

火防祭（ひぶせまつり）

【解説】正月二十二日、陸中國水澤町の日高神社にて行はる、祭事にて、町內各戶、造花軒燈を懸け、陰裝として大仕掛りの屋臺を出し、百餘の大衆の舁き上げる臺上には、幾多の盛裝せる稚兒、各自太鼓を前にして雛人形の如くに列び、芸者の素手音頭をとり、別に幾組かの山車あり。夕方より全町の假裝行列を行ひ、戶々の表舞臺に傚ふさま頗る壯觀なり。火災鎭護と豐年滿作とをかね祈るものなりといふ

善正寺釋迦開帳（ぜんしやうじのしやかかいちやう）

【解説】正月二十三日。京都東中山の善正寺は、關白秀次公の建立するところにして、正月・五月・九月の三回、本尊釋迦佛の開帳をなす。中にも正月最も賑かなりしといふ。

阿部野祭（あべのまつり）

阿部野神社例祭（あべのじんじやれいさい）

【解説】一月二十四日、大阪住吉區の阿部野神社は祭神北畠兩公の忠節を嘉せられ、明治十五年正月二十四日に神社創立の儀仰せ出され、別格官幣社に列せられたるによりその日を以て例祭日となし、爾來例祭には、幣帛供進使參向あり。大祭（春季）は五月二十二日に執行せらる。

箟宮祭（ののみやまつり）

【解説】正月二十四日。陸前國遠田郡箟峯寺には竹を祀れる箟宮權現あり。坂上田村麿、東征の時駿河に於て賊の巨魁高丸を破り、追擊して此地に來り、終にこれを射殺し、首級を京都に送りて、胴を丘上に埋め、且つ此地に殘矢一條を挿し、東夷再び起らずんば此矢七日七夜の中に枝葉を生

ずべしと誓ひ、こゝに凱陣の祭式を擧げしに、不思議にも其矢七夜にして枝葉を生ぜりと。これを箆竹と稱し、箆宮權現として祀りしものにて、爾來毎年正月二十四日を以て凱陣の祭式を行ひ、竹を以て矢を作り、箆宮に二人の少年をして射さしむるをいふ。

牛の祈禱（うしのきたう）

季題解説 一月二十四日。京都右京區川岡町附近の家々、先づその村の牛飼主と伯樂と相助け合ひて牛の爪を切り、厩を掃き清めて後、その當番の家に一同集りて一夜の宴を張り、明くれば二十五日、北野天神へ相携へて總參りをなす風習あり、これを牛の祈禱といふ。

例句 牛の祈禱

伯樂が牛の爪切る祈禱かな　西の丘（懸葵）
牛の祈禱燈明上げし厩神　同（同）
天神へ牛の祈禱の總參り　同（同）

初愛宕（はつあたご）

季題解説 正月二十四日。京都西郊の愛宕神社には毎月二十四日參詣すれども、正月は初詣とて參詣人殊に多し　〔參照〕夏―愛宕千日詣（アタゴセンニチマヰリ）

例句 初愛宕

初愛宕スキー場の雪踏み登る　枳南（懸葵）

龜戸鷽替の神事（かめゐどうそかへのしんじ）

季題解説 正月二十四日及二十五日。筑前國太宰府の天滿宮にては正月七日の夜に神事あり、當夜參詣の群衆、木の枝其他のものにて造りたる鷽の鳥を袖の内にかくして遇ふ人々と互にこれを交換す。其鷽は神社より出すものにして、其中に黃金製のもの一個ありと云ひ、これを得るものは最上の吉にして、好運の兆となせり。東京龜戸の天滿宮にては、太宰府に倣ひて文政三年より二十四日二十五日の兩日に鷽替の神事を始めたり。但し龜戸は晝間にこれを行ふを例とす。其當時、谷文晁・太田蜀山・龜田鵬齋等相伴ひて神事に參詣し鷽鳥を得んとて天滿宮に請求せしに、既に賣り盡したる後なりしかば、文晁は筆を矢立より取出し、鷽鳥の形を畫き、蜀山「此神のまことの道のあらはれて、うそは賣切申候」と口ずさみしを其まゝ乞ひうけて之を梓に上し、鷽鳥の賣り切れたるとき、これを出すことを例となせりきといふ。往時はなほ太宰府に於ける如く、人々互に鷽を交換せしが、其間に掏摸の類まぎれ込みて、交換の間に人の財物を抽き掠むること多かりしかば、遂に相互に交換することを禁ずるに至れりといふ。現時は祠前に鷽を賣る店舗あり、鷽は柳の木にて製し、尾と嘴とは赤く塗り、背部は

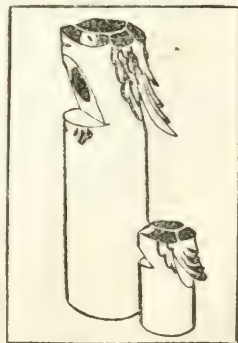
緣にして金箔をつく。大小數種ありて、緣起を印刷せし紙に包む。參詣の人々これを購うて、鷽取換所と貼札せる社務所に到り、その購ひたる鷽を出して、社務所より與ふるものと取換ふ。鷽替は開運の效ありとて參詣夥し。「うそ」は本來嘯くの義なれど、此神事にては虛言の義に解し、從來の凶事うそとなり、吉事に取換へんとの意にて、これを行ふものなりといふ。

（鷽之圖）

［參照］太宰府の追儺祭（ダザイフノオニヤナマツリ）

［例句］龜戸鷽替の神事

曉の鷽替て來た袂かな　紅葉（紅葉句集）
鷽替やまことに顏なる古帽子　知十（明治句集）
鷽替や袂に殘る箔の塵　且笠（同　）
晴天に雪ちる日なり鷽替る　素泉（續春夏秋冬）
かへまけて小さき鷽を袂かな　得川（同　）
鷽替や隣の孀婦替へ當てし　偲堂（同　）
鷽替て巾着らせぬ戻り道　青々（妻木）
肘突の上替へ來けん鷽置きぬ　六花（寒畑）
鷽替の寒き鯉汁たうべけり　龍雨（現代俳句大觀）
店の灯に賣れざる鷽の十ばかり　自得（昭和一萬句）
鷽替て身のさびしさを戻りけり　丹沙郞（年刊俳句集）
鷽替やうそともつかぬ禰宜の顏　羊我（懸葵）

［參考］每年正月二十四・二十五兩日、東京市城東區龜戸町龜戸天滿宮に於いて行ふ儀式なり　福岡縣（筑前國）御笠郡太宰府の天滿宮にて正月七日の夜行ふに倣ひ、文政三年より始む　鷽替とは、鷽を虛と通はし、虛言の意とし、從來の凶事うそとなりて吉事と取替はると云ふ意味に解するものにして、江戸時代には當日參詣の人々木の枝にて造れる鷽を袖の內に匿し、行き遇ふ人と互に交換すと云ふ。此の鷽は神社より出すものにして其の中に唯一つ黃金製のものあり、之を得る者は最上の吉を得る好運の兆なりと稱せり。然るに其の後群衆中に掏摸紛れ入りて交換の噓に乘じ、人の財物を掠め奪る事あるに據り遂に相互の交換を禁ずるに至れり。現今にては、社前に鷽を賣る店あり、柳の木に金箔を施して製れる大小の鷽を緣起を書ける紙に包みて出す。參詣の人は之を購ひて「鷽取換所」と貼札せる社務所に到り、同所より出すものと交換するを例とす。開運を願ひて參詣する者群をなし、今に至りて尙ほ殷賑を極めたり。嘗て太田蜀山人・谷文晁・龜田鵬齋の三人相伴ひて是の神事に參詣し、鷽を購んと欲せしに、

既に賣盡されてなかりしかば、文晁筆を執りて鶯を書き蜀山人口吟みて「此神のまことの道のあらはれて、うそは賣切申候」と云ひしを後ち上梓し、鶯の賣切たる時之を出すを例となすと云ふ。

初天神（はつてんじん）　天神花（てんじんばな）　天神旗（てんじんばた）　宵天神（よいてんじん）　殘り天神（のこりてんじん）

古書校註

【年浪草】是れ年初の惠日を以て當社に詣るの義也、京師初天神詣、男女宿願有れば、則ち本社を廻ること百度、要待に神前を拜す、是を御百度と謂ふ、近世老婆或は兒女、米錢を取て願主人に代て之を勤む、是亦代參の謂也。

季題解説　一月二十五日。天滿宮の初縁日にあたり各地方にて盛んに參詣す。太宰府天滿宮・北野天滿宮・大阪天滿天神・東京龜戸天滿宮等殊に參詣者多し。大阪の天滿宮には北新地より寶惠駕の練り込みあり、社務所より雷除の守を出す。境内には天神旗・天神花とて紅白の梅の造り枝に小判などを付けたるものを賣る商賣多し。二十四日を宵天神、二十六日を殘り天神といふ。

例句

初天神

荒吹の初天神へ渡舟かな　一壺（ホトトギス）
歩かすや初天神へ凧買ひに　同（同）
驪籠へ初天神のまはり道　清女（同）
去年もよ初天神の風日和　素方（同）
梅ほつ／＼北野は晴れぬ初天神　瓜錢（現代俳句大觀）
樂人の笛溫むや初天神　秋風（同）
曾根崎へ初天神の紛れかな　青々（昭和模範句集）
畑姥も初天神の蜜柑賣　句佛（我は我）

宵天神

泥踏んで宵天神に參りけり　素石（木虫句集）
雪風や宵天神の橋長く　月斗（俳諧雜誌）

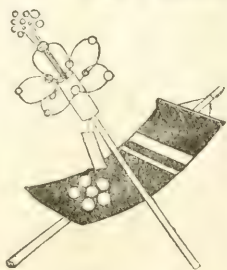
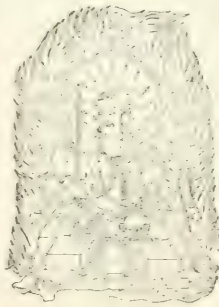
天神花

竹獨樂と天神花に名殘かな　同（同）
天神花風の天神橋長し　素石（炎）

（天神花・天神旗の圖）

下津林神事能（しもつばやしじんじのう）

季題解説　正月二十六日。「京羽二重」に洛西下津林の里に一昔神事能の催ありしこと見ゆ、現今神社に古き能の面など保存すれども、神事能は行はれずといふ。

初不動（はつふどう）

【季題解説】 正月二十八日。この日は不動尊の會日なり、年の初の會日なれば初不動といふ。下總國、成田山の不動、大阪北野天神傍の不動（本尊は弘法大師の作と傳ふ）最も世に知られ、當日の參詣夥し。梵語、阿遮羅曩他を譯して不動尊、又は無動尊といふ。密教の諸尊を三輪式の分類に依て總稱するときは、大日如來を一切諸尊の總體として、これを自性輪身と爲すに對して、この不動尊を一切諸佛の教令輪身と爲す。故にまた、諸明王の王、五大明王の主尊と稱せられ、密教諸尊中、大日如來と相並んで最も廣く多數の祭祀を享くる菩薩なり。

【例句】
初不動

正月の末の寒さや初不動　万太郎（道芝）
初不動梅咲くとしもなかりけり　同（同）
永代の雪の景色や初不動　瓦全（昭和一萬句）
日の出見し淵詣の戻り初不動　三允（最新二萬句）

孝明天皇祭（こうめいてんわうさい）

【季題解説】 一月三十日。孝明天皇の御忌日。京都後月輪の山陵に勅使、舊女官などご參拜をなす。

【例句】
孝明天皇祭

正月も仕舞旗日の天氣哉　鴬化（懸葵）
孝明天皇祭泉山の雪潔し　三幹竹（同）

清水寺本式連歌（きよみづでらほんしきれんが）

【季題解説】 正月三十日。京都清水寺の六坊に於て月々交替にこれをつとむ。大摸連歌紙四枚半、これを横折りにして百句を書す、初表八句を書す、第一發句賦物あり、日花等其他を賦す、是を賦物といふ。本式に於ては初表十句を書す、每句賦物あり、是を以つて題とすといふ。【參照】北野裏白連歌 熊野連歌

松例祭（しようれいさい）

百拾明の神事

【季題解説】 正月三十日。羽前國出羽神社。百日間の參籠の後、種々の勝負を

爭ふ古式あり。此夜炬火をともし、白晝にまがふばかりの壯觀を呈すといふ。

美江寺の御蠶祭（みえでらのおこまつり）　喧嘩祭（けんくわまつり）

季題解說　正月晦日。岐阜市美江寺町の大日山美江寺の修正會にあたりて、御蠶祭を行ふ。この祭は、三尺許りの青竹數本を寄せて胴とし、藁に赤き紙を貼りて造りたる手足をつけ、紅染の麻苧を髮とし、これに猩々の假面並に赤地金襴の衣服を着せしめ、手には大杓子を持たせたる山車を出して、この杓子の持ち方にてその年の晴雨をトし、下向きなれば晴多く、上向きなれば雨多しとし、夕刻に至れば山車を觀音堂の前に引き、別當所寒松院より、數人出でゝ山車の居根に乘りて餅を投げ、且つ假面と裝束とを殘して、他は悉く取り毀ちて群集に投げ與へ、その竹の一片にても、藁の一筋にても、これを得ればその年の養蠶の出來よしとて、相爭うて奪ひ合ひ、中には血を流すものあれど、觀音堂裏の流れにて洗へば、必ず癒ゆると信ぜられたり。元氣なる祭にて、一に喧嘩祭ともいふ。

上賀茂燃燈祭（かみかものねんとうさい）

季題解說　正月下子の日。京都上賀茂神社にて往古權祝（ゴンノハフリ）、祝方（ハフリカタ）各々布衣にてカウタチの芝に參り、祝詞あり、後燃灯草を社々に納め、歸りに小松二株を引き歸りたりといふ。

嚴島祭（いつくしままつり）　伊都岐島祭（いつくしままつり）

古書校註　【山之井】　下亥日、（一）官幣（二）有り、近代斷絶す。云々。拾芥。

【栞草】　下ノ亥　地の御前は藝州安藝郡にあり、これ嚴島と同體也。每年正月下の亥日に神祭あり、近國より乘船にて參詣す、この祭正月下の亥日より二月初の申日迄十日の間、祝師（ハフリ）（三）嚴島の上卿（シヤウケイ）（四）齋所（サイシヨ）に入て潔齋す。國府（五）の奉幣使（六）社家（七）等、末日嚴島へ渡海す。夜半に至て七度半の使あり。道芝記

註（一）下亥日　正月下旬の亥の日　（二）官幣　祈年、月次、新嘗等の諸祭に、京の神祇殿にて祭らるゝを云ふ。國司にて祭るを國幣といふに對す。（三）祝師　はふり　神官の一、一神社に事ふる神人の長を神主とし、其下に禰宜、祝部、巫覡等を置く。（四）上卿　こゝには首座たる者をいふ。（五）國府　國司。（六）奉幣使命を受けて神社に幣帛を奉るもの。（七）社家　神社に仕ふる家、神主。

春日の水飴（かすがのみづあめ）　滑糕（しるつか）

季題解說　正月、奈良春日の社家にて飴を煉製し、宮中・堂上・地下の公卿

陰陽に分ち、陽を甲丙戊庚壬とし、陰を乙丁己辛癸とす。陰の方には徳なく陽の方に徳を生ずる故に、甲の歳徳は東宮、丙の歳徳は南宮、戊の歳徳は中宮、庚の歳徳は西宮、壬の歳徳は北宮にあり。即ち歳徳は左の方角に當る。

甲　己	寅卯の間	北東東
乙　庚	申酉の間	南西西
丙　辛	巳午の間	東南南
丁　壬	子亥の間	西北北
戊　癸	巳午の間	東南南

即ち甲己の年の惠方は北東東となるなり。歳徳棚は歳神を祭る棚、新年その年の惠方に向けて棚を吊り、注連・松竹を飾り、供物並に燈火を獻じて祭る。而して新年の出納物飲食類必ず先づこれを獻じ、神佛の參詣、萬事の經營此方より始むといふ。

例句

歳徳

年徳のみやしろならぬ宿もなし　重供（毛吹草）
歳徳や御身輕げに巳午より　宗因（梅翁宗因發句集）
歳徳や土かはらけの御燈明　泊雲（ホトトギス）
歳徳の灯に宵寢せる座敷哉　樵青（同人俳句集）
歳徳や孕まば男ほしきもの　梁村（昭和模範句集）
箕に祀る歳徳の燈や臼の上　南鷗（同　人）

年神

長ものになりて來にけり年の神　鶯山（大三物）
年神に樽の口ぬく小槌かな　其角（五元集）
歳徳神二階に運び祭りけり　南國子（ゆく春第一句集）
歳神の光りに嫋く不毛哉　蘇泉（春蘭第二集）
歳神や霽れわたりたる松の雪　色茶　雲母

歳徳棚

火の數や歳徳棚のにぎやかさ　鬼貫（俳諧七車）

年棚

年棚や妹が小錢のかくれ里　一蜂（類題發句集）
年棚や鏡に通ふ嫁が君　柳也（新類題發句集）
年棚はやゝ筋違にゆがみけり　青々（妻木）
年棚や低く立ち舞ふ爐の煙　著森（懸葵）

惠方棚

傘に齒朶かかりけり惠方棚　夕道（類題發句集）
面影や暦左右さす惠方棚　言水（俳諧五子稿）
惠方棚貝にゆかしがられけり　也有（[illegible]葉集）
有る柵を年々庇の惠方かた　同（同　）
ゆがむのも嘉例なりけり惠方棚　三巴（新類題發句集）
惠方棚丁子も結び十二燈　四明（四明句集）
俳諧に東西はなし惠方棚　鶯池（鶯池句集）
惠方棚や松青々と右左　躑躅（現代俳句大觀）

【參考】毎年正月俗間にて祭る神、或は略して歳徳と云ひ又歳の神とも稱す。日本歳時記＝正月の條に「晴明が簠簋内傳には、年徳神とは沙竭羅龍王のむすめ、牛頭天王の妻、婆利采女の事をいふよし見えたり」とあり元來陰陽家の祭る神にして、其の年の大將軍塞りと相對する方角を司ると云ひ、此の神の住む方角をあきの方或は惠方と稱し、萬事に吉なりと云はれたり。正月各家には、歳徳棚・惠方棚と稱し所謂あきの方には神棚を設け、注連を引き延し、潔齋して種々供物を獻じ、その年の穀物の豐饒或は家内幸福等を祈るものなり。又惠方詣とて吉方に當る社寺に參拜する事あり。

此の吉方詣のことは既に平安朝時代にありて、藤原道長の日錄、御堂關白記の長和四年正月九日の條に、「出、從二皇太后一詣二雲林院一是吉方也、女方同參〇下」と見え、又同書寛仁二年正月十五日にも記されたり。然れども當時の吉方の意味は、現今のものと聊か趣を異にすれども、之を以て吉方詣の原型と見るを得べし。又屋内に惠方棚を設くる等の行事は、江戸時代に及びて一般世俗の行事となりたるものゝ如し。即ち大江俊光記の寛永七年正月元日の條に「諸神先祖兩親觸穢故、心念計り歳徳・かまと・水神〇中略　小餅少供、其外へ不レ供」と記されたるにて知るべし。

惠方詣（ゑはうまゐり）

惠方（ゑはう）　吉方（えはう）　兄方（えはう）　得方（えはう）　明きの方（あきのはう）　惠方道（ゑはうみち）

【季題解説】新年に歳徳神のある方角にあたれる神社佛閣に參詣するを、惠方詣と稱す。惠方は吉方・兄方・得方とも書き、一に明きの方といひ、陰陽家にてその年の干支により、四方の間の吉兆となるべき方角を定めたるをいふ。【參考】歳徳神の項參照

【例句】

惠方

先惠方みの幸よろしいなり山　鬼貫（俳諧七車）
定惠方淺茅が庵は月と花　野坡（野坡吟艸）
我惠方多し松しまいつくしま　闌更（半化坊發句集）
寢勝手に梅の吹きけり我惠方　一茶（旅日記）
惠方とて女交りに城南神　青々（妻木）
白雲のしづかに行きて惠方哉　鬼城（鬼城句集）
惠方とて八幡にのぼり四方の景　梨葉（梨葉句集）
詣る道鹽竈神詣でも惠方かな　射石（日本俳句鈔）
火燧出て惠方の人に交りけり　小酒（續春夏秋冬）
一握りの米をたもとに惠方哉　石南（昭和模範句集）
江の家や惠方を定む山一つ　松壽樓（最新二萬句）
住吉の松を惠方の泊りかな　荒井蛙（同）
山風に買ふ矢眞白き惠方かな　水巴（年鑑俳句集）

雪の富士まだあけきらぬ恵方哉　瓜青（同）
ほの〴〵と大潮走る恵方かな　五三桐（同）
眺めやる日は美しき恵方かな　零雨（愛吟集）
松ケ枝に星のうるめる恵方かな　子龍（同）
行く方に金剛晴るゝ恵方かな　左遷（昭和一萬句）
雪晴れの一山秀づ恵方かな　只木（大正俳句選）
野の雪を踏み固めゆく恵方哉　芋月（同）
恵方向けば野の明るさに鶏唄ふ　添水（添水第二句集）
せばめられて居間の恵方に書をつみぬ　屈人（懸葵第一句集）
荒磯の岩も祭りて恵方かな　朱人（ホトトギス）
外の浦を一めぐりせし恵方かな　嘲水（同）
裏恵方たま〳〵人の詣でけり　芥六（同）
住吉を我孫子へまはる恵方哉　洛山人（現代俳句大観）
平安は雪のあしたの恵方哉　滄海龍（同）
朝凪の恵方にあれや辨財天　三巴女（同）
恵方向けて船の錨をおろしけり　木春（青嵐）
沖を行く船に日當る恵方かな　村兒（年鑑俳句集）
ぬかるみの道なが〳〵と恵方かな　八千代（同）
假宮の小さく在す恵方かな　吉朗（同）
山川や恵方詣での渡し舟　飛車（ホトトギス）
くらがりに人現れし恵方かな　水香（京鹿子）
雲の帳開けし空を恵方かな　曉村（愛吟）

明きの方

鶯も初音に口やあきの方　望一（類題發句集）
山見れば雲も匂へり明きの方　蝶衣（蝶衣句稿）
明きの方松の上越すいかのぼり　北江（愛吟集）

恵方道

若者の馬走らすや恵方道　月斗（同人俳句集）
白髪の素袍めでたし恵方道　蝶衣（續春夏秋冬）
恵方道七ツの橋をわたり行　虚明（最新二萬句）
恵方道鶏鳴く村を過ぎにけり　白蒐（愛吟集）
麥畑の露に日の明け恵方道　泊雲（昭和一萬句）
恵方道隣りあひたる二柱　丹葉（ホトトギス）
美しき茶山つゞきや恵方道　夢筆（同）
大吉のみくじ袂に恵方道　竹雨（ゆく春第一句集）
池田箕田冬のまゝなる恵方道　南城（丁卯句鈔）
恵方道雪ある草に藪柑子　木城（戊辰句鈔）
故郷に踏んで親しや恵方道　一峰（現代俳句大観）
落ち方の月かゝりゐて恵方みち　草岳衞（鹿笛）
恵方道海沿ひ家並灯り居る　木兎（懸葵）

門の神棚(かどのかみたな)

古書校註

【山之井】在家の妻戸(一)に棚をかまへて神を祭り、夜はかはらけに灯をそなへ侍る事也。

【栞草】季吟が曰、在家の妻戸に棚を構へて神を祭り、夜はかはらけに灯を供へ侍ること也。また其義を詳にせず。按るに［月令廣義］に云ふ、除夜門神を祭る住に、道家(二)門神を謂て左を門丞(モンヨウ)といひ、右を戸尉(コヰ)とす、蓋し門を司るの神也、其義桃符(三)より本づく。神荼、(四)鬱壘(五)を以て邪を辟る故に、これを千門に樹る、云々。本朝も此意に據か。

註　(一)妻戸　縁の戸、舞戸にて兩方に開くもの。(二)道家　だうけ　支那に行はるゝ一種の宗教、老子を祖として玄元皇帝と云、其流を道宗といひ、其人を道士といふ、奇異の術をなす。(三)(四)(五)別項に在り

季題解説　正月、各家の戸口に棚を作り、夜に入れば土器に灯を供へて祭る。即ち道家にて說く所の門戸の神を祭るなりといふ。

例句

門の神棚
故郷は門の神棚作りけり　青々（妻木）
厩神門の神棚祝ひけり　烏堂（續春夏秋冬）

初詣(はつまうで)

初参(はつまゐり)　初社(はつやしろ)　初祓(はつはらひ)　初御籤(はつみくじ)

季題解説　新年初めて鎭守の社、或は惠方に當る神社佛閣等に參詣するを初詣といふ。

例句

初詣
遊び女や古き習ひに初詣　五空（五空句集）
神饌に吾名を見るや初詣　野風呂（ホトトギス）
初詣住吉土產打かつぎ　硈女（同）
にぎやかに金刀毘羅舟や初詣　竹人（同）
常春の和歌の浦曲や初詣　樂南（同）
宇治橋をこぞりわたるや初詣　曉水（同）
提灯にへだてられつゝ初詣　春一（同）
初詣鵜戶の巖屋の眞暗がり　萬堂（同）
初詣あがる神樂に急ぎけり　邦子（同）
良の毘沙門天や初詣　無字（同）
初詣鳥居の影を人出づる　虛子（同）
初詣日の霜けぶる獅子の口　素石（木虫句集）
初詣鈴の音に曉の靄晴るゝ　秋蒼（大正新俳句）
住吉や醉ふて芋買ふ初詣　子角（同）

初詣雪美事なる太鼓橋　花蓑（同）
初詣橋の黄に日尊し　鳥一（青嵐）
夜の人のまだ行く町や初詣　白劍（年刊俳句集）
御手洗の涌く音澄めり初詣　北洲（同）
初詣いつもの土産買ひにけり　翠雨（同）
初詣人にたなびく霞かな　鱗千（同）
神苑に不二見付けつゝ初詣　瓢亭（同）
石段の日かげ日なたや初詣　湛水（同）
參道の雪清々し初詣　蟹歩（筑波）
みせあふて同じみくじや初詣　銀杏城（現代俳句大觀）
飛梅に傘ひしめくや初詣　白水郎（春泥）
初詣奥州守護の第一社　青陽（懸葵）
神さびし御燈白し初詣　嵐翠（同）
初詣ほぐらきに人戻り來る　涼波（同）
初詣鈴ほがらかに鳴らしけり　柳子女（同）
戀ふかな祈りもおかし初詣　繁枝女（同）
初詣社頭の篝明けそむる　壽美平（同）
香煙に霏々と祖廟初詣　句佛（我は我）
大雪に賽錢滅りぬ初參　三允（最新二萬句）
常盤なる狩衣黄なり初社　重春（大三物）
印の子の姿もうるはし初社　正利（同）
膳に木香心に初音初祓ひ　白鳴（花笠）
姉妹の各々吉や初みくじ　くに女（ホトトギス）

初參　初社　初祓ひ　初御祓

初伊勢（はついせ）

季題解說　初參宮（はつさんぐう）

正月、伊勢神宮に初詣するを特に初伊勢といふ。

例句　初伊勢

初伊勢の船路船人瀬戸に乘る　一珍（懸葵）
初伊勢や二見泊りに子を連るゝ　三幹竹（同）

初神樂（はつかぐら）

季題解說　初燈明（はつとうみやう）

新年始めて諸社にて神樂を奏するを初神樂といふ。

例句　初神樂

初神樂凍てたる山に響きけり　南濤（同人俳句集）
神風や雪の社の初神樂　壽子（辛未句鈔）
初神樂緋の袴燃ゆ倭舞　永堂（同人）
數ともる雪の燈籠や初神樂　平安（同）

初神樂　初神樂御酒をいたゞく一家族　平安（同人）

初燈明　荒神のくらき方にも初燈　蝶衣（蝶衣句稿）

大澤や五社明神の、初燈　比羅夫（同人俳句集）

初虚空藏（はつこくうざう）

季題解説　一月。諸所の虚空藏菩薩を奉安する寺に參詣するを初虚空藏といふ。この菩薩は智慧の庫藏猶虚空の如くなるより虚空藏と名づけ、一切の功德を包藏すること虚空の如くなれば、虚空藏と名づく。胎藏界曼荼羅虚空藏院の中尊なり。京都にては嵐山の法輪寺有名高し。參照　春―十三詣（ジフサンマヰリ）

初勤行（はつごんぎやう）

季題解説　新年初めて、諸寺院にて勤むる勤行を初勤行といふ。その他初太鼓・初鐘・初燈明・初開扉・初法座・初提唱・初御堂など年頭の諸式あり。

初太鼓（はつたいこ）　初鐘（はつかね）　初燈明（はつとうみやう）　初開扉（はつかいひ）　初法座（はつほふざ）　初提唱（はつていしやう）　初御堂（はつみだう）

例句

初勤行　堂柱初勤行の燈に光る　北洲（年刊俳句集）

内陣の總燈明や初勤行　紅陽（同）

初勤行の伽羅薫りけり持佛堂　北洲（現代俳句大鑑）

初太鼓　初太鼓山内の閑動きけり　三猿子（青嵐）

初鐘　初鐘や提燈ともる樓の上　笋莊（閑古鳥）

初鐘やほのと明るき東山　朝冷（大正俳句選）

初鐘の樓へ白砂を渡りけり　禽化（懸葵）

初燈明　尊供屠蘇頌つ灯に初鐘を聞く　句佛（我は我）

あらためてうちふるおふや初灯影　君里（寶曆九年歳旦帖）

初開扉　燭灯に淑氣の暈や初開扉　禽化（懸葵）

初開扉慈顏尊し今朝の春　句佛（我は我）

初開扉軋る音淑氣に滿てり　同（同）

初法座　うづくまる人の寒さや初法座　白鳥（現代俳句大觀）

初提唱　初提唱胡餅の則を拈じけり　月嶺（月嶺句集）

初御堂　御草鞋の音も尊し初御堂　水棹（懸葵）

初護摩（はつごま）

季題解説　正月。初めて焚く護摩を初護摩といふ。護摩は梵語にて、焼と譯す。もと婆羅門にて火を焼き天を祀りしことを、密教にとり、火爐を設け、乳木を焼き、即ち智慧の火を以て煩惱の薪を焼き、眞理の性火を以て、魔障を盡すの標幟とするをいふ。

【例句】

初護摩　初護摩や野天の壇に幣ゆるゝ　一坡（現代俳句大觀）

役行者忌（えんのぎやうじやき）　小角忌（をづのき）

【季題解說】　正月元日。諸處の役行者開基の寺院にて忌を修す。役行者は小角と云ひ大和葛木上郡茅原村の人、敏悟博學にして最も佛氏を好み咒術をよくす。年三十二にして家をすてゝ葛城山に入り、巖窟に居ること三十餘年、松果を食ひ藤葛を衣、鬼神を驅使し、汲水採薪たゞ意の欲する所、命を用ひざるものあれば則ち咒して之を縛す。韓國廣足從ひて學ぶ。其能を害ありとして、妖衆を惑はすと誣ゆ。文武帝詔して小角を繋ぐ。小角空に騰りて亡げ去る。吏捕ふる能はず、其母を捕ふ。小角自ら出でて縛に就き、伊豆島に流さる。大寶元年赦に逢ひて京都に還ることを得。古傳に母を鐵鉢に載せ海に泛びて唐に去るといふは怪むべし。赦免後西國に赴き豐前の彥山を踏開す。而してその地方にて世を終りたらんも其年時未だ詳かならず。後世小角を以て修驗道の開祖とす。寬政十一年正月に勅して諡號を賜はり、神變大菩薩といひ、この日を以て忌日となす。

【例句】

行者忌　行者忌や年を越えたる籠り人　黑洲（懸葵）
行者忌や雪に埋もる御山木々　同（同）
行者忌や今に殘りて前鬼後鬼　雨青（同）
行者忌や雪にかゞやく金峰山　三幹竹（同）

小角忌　小角忌や老先達の雪を來し　黑洲（同）
醍醐寺に來る年禮や小角の忌　雨青（同）

才麿忌（さいまろき）　舊德忌（きうとくき）

【季題解說】　正月二日、才麿は西武・宗因・西鶴に隨從して、談林風の俳諧に長ぜし人。大和宇陀に生れ、初め江戶に住し、後大阪天滿に移居す。椎本氏、名は則氏、字は少文、松笠軒・甘泉庵・舊德翁・狂六堂・春理齋・檪特小僧・八千丸・西丸等の號あり。天文三年正月二日歿す。年八十三歲。天王寺椎寺藥師堂に葬る。

【例句】

才麿忌　松かさを落す鳥來つ才麿忌　冬葉（懸葵）

幻吁忌（げんうき）　大巓忌（だいてんき）

【季題解說】　正月三日。大巓和尙の忌日なり。相模國鎌倉圓覺寺の百六十三世の住僧、名は梵千、字は大巓、其角門、江戶の人。貞享二年正月三日歿す、享年五十七　芭蕉に「悼大巓和尙、梅戀て卯の花拜むなみだかな」の

句あり。

例句

幻吁忌　みなし栗の卷頭戀し幻吁の忌　三幹竹（懸葵）

大巓忌　鎌倉の梅の便りや大巓忌　同（同）

野坡忌（やばき）

季題解說　野翁忌（やをうき）　無名庵忌（むめいあんき）　淺生忌（あさふき）

正月三日。志多野坡の忌日なり。寛文二年正月三日越前國福井に生る。幼名庄一郎、字は輔亮。樗子・樗木社・半醉堂・紗方齊・三日庵・淺生庵・當用庵・秋草舍・百花窓・蘇鐵庵・かゝし庵・照笛居士・靜元居士等多くの別號あり、終に無名庵・高津野々翁と號す。又本姓は信田（炭俵には志多につくることあり）。本姓信田、元文五年歿、享年七十八、大阪小橋寺野寶圓寺に葬る。

例句

野坡忌　野坡の忌にけふ名代の御慶哉　羊我（懸葵）

うかぶ瀨に雪めづらしき野坡忌哉　同（同）

野坡の日や浪花の梅の咲き初め　雨青（同）

淺生忌　炭俵年々に讀む野坡忌かな　三幹竹（同）

淺生忌やさしもめしたる禮扇　雨青（同）

義朝忌（よしともき）

季題解說　正月三日。源義朝は左衞門大尉爲義の長子なり。坂東に成長し驍武にして勇略あり。保元の亂起るや、父爲義は諸子を帥て崇徳上皇の白河殿に赴き、義朝獨り禁內に赴く。平清盛と共に夜に乘じて白河殿を攻め、火を放ちて之を陷る。義朝父爲義の助命を請へども、後白河帝清盛が叔父忠正を斬りしを以て許し給はず、義朝遂に父を斬る。功に依り左馬頭に任ぜらる。清盛族を擧つて重賞を受け帝の信任厚し。義朝意平ならず、清盛が熊野に赴きし留守中藤原信頼と謀りて兵を擧ぐ。帝及び上皇を宮中に幽し奉る。清盛途に變を聞き子重盛と急ぎ歸り、待賢門にて大いに戰ふ。義朝の長子惡源太義平善戰せしも及ばず、敗れて關東に走らんとす。尾張國野間に往きて長田莊司平忠致に就く。忠致義朝を殺さんことを謀り、正月三日夕、湯沐を具へ壯士三名を浴室に伏せ、隙を窺ひて之を刺す。忠致首級を京師に傳へ之を左獄の樗樹に梟す。染工五郎といふ者嘗て義朝の恩顧を蒙むる、因て之を左獄の內側に埋む。後子頼朝之を迎へて勝長壽院を創め、之を收葬す。

例句

義朝忌　紅梅に木太刀納めん義朝忌　冬葉（懸葵）

元三大師忌（ぐわんさんだいしき）　元三忌（ぐわんさんき）　慈恵大師忌（じゑだいしき）

季題解説　正月三日。元三大師は良源、俗姓は木津氏にして近江國淺井郡の人。延暦十二年九月三日の生誕。十二歳の時比叡山に登り、寶幢院日燈の房に往き理仙和尚に師事す。經論を讀誦して倦まず、延長六年十七歳にて出家剃度す。山門に顯密の奥旨を受け、康保三年五十五歳にして延暦寺の座主に補す。永観二年冬風痺を染み、山を下りて東阪弘法寺に居りて加養す。同三年正月三日、口に念誦を絶たずして寂す。壽七十四。寛和三年二月十六日勅して慈恵と諡し給ふ。世に元三大師と云ふ。〔參照〕叡山元三大師會（エイザングワンザンダイシヱ）　般舟院開帳（ハンシユウヰンノカイチヤウ）　東叡山兩大師廻り（トウエイザンリヤウタイシマハリ）

例句

元三忌　うら／＼と神通あらん元三忌　夜濤（懸葵）

元三忌寺門を惡くむ法師ばら　禽化（同）

北谷の鐘も氷るや元三忌　三幹竹（同）

御國忌（みこくき）

季題解説　正月四日。「村上天皇の母后の御國忌なり。天暦九年正月に、帝宸筆を染められて法華經を遊ばして、弘徽殿にて御八講の儀侍りき。其の後法性寺にて、毎年に御八講は行はる、さしたる事なし。大かた法華八講といふ事は、勤操といふ沙門の、桓武天皇延暦十五年より行ひ始めけるにや。石淵の八講とはこれをいふなり。十講世講も、同じく此の沙門の始めて行ひけるとぞ承る。」と公事根源に記す。法華八講とは法華經を八分して八度に講説すること。勤操は泉州槇ノ尾寺の僧にて、弘法の師なり。石淵は寺の名、大和國添上郡にありきといふ。

團水忌（だんすゐき）　西鶴庵忌（さいかくあんき）　橘堂忌（きつだうき）

季題解説　正月四日。團水は北條氏、平元子・橘堂・白眼居士・西鶴庵と號す。京都の人にして、初め西鶴門、後才麿に就きたれども、常に西鶴の人となりを慕うて、その歿後七年間、その舊庵を守れり。正徳元年正月四日歿す。年四十九。辭世に「おぼろ／＼引くべき胸の月清し」の句あり。

例句

團水忌　夕月もおぼろ／＼や團水忌　冬葉（懸葵）

秋の坊忌（あきのばうき）

季題解説　正月四日。秋の坊は加賀金澤の人、初め前田家に仕ふ。後、金澤蓮昌寺の住職となる。名は寂玄。俳諧は芭蕉に就きて學び、加賀蕉門の一

人として名あり。享保三年正月四日歿す。

例句

秋の坊忌　淸墨なき忌日さびしや秋の坊　花笠（懸葵）
惠方なる秋の坊忌や卯辰山　三幹竹（同）

正行忌（まさつらき）　小楠公忌（せうなんこうき）

季題解説　正月五日。楠正成の子、父湊川に戰死する時、正行年甫めて十一、父の遺誡を奉じ、後醍醐帝吉野に入り給ふや之に從ひて王事に務め、度々敵軍を敗る。帝薨じ後村上帝踐祚し給ふ。尊氏正行の武勇を憚れ、高師直及び師泰をして兵六萬を發して來り攻めしむ。正行弟正時以下百四十餘人の一族郎黨と死を誓ひ、行宮に到りて決戰の由を奏請す。又血盟の姓名を如意輪堂の壁に題し、其の後に書して曰く、「返らじと豫て思へば梓弓亡き數に入る名をぞ留むる」と。各々髮を截りて佛殿に納む。正行三千の兵を率ゐて四條畷に進み、師直の軍と大いに會戰したれども、時利あらず、弟正時と交刺して斃る。先に瓜生野の戰に正行敵の溺卒五百人を援く、敵その恩に感じて來り降る者多かりしが、皆四條畷に正行に從ひて死す。正行時に年二十三。明治三十年、從二位を追贈し給ひ、別格官幣社に列し、四條畷神社に祀らる。

例句

正行忌　正行忌手向の梅のつぼみかな　冬葉（懸葵）
河内路に麥ふむ老や正行忌　芒角星（同）

夕霧忌（ゆふぎりき）

季題解説　正月六日。江戸の高雄、京の吉野と並稱せられたる大阪の遊女夕霧太夫の忌日なり。本名てる。寛文十二年に京都島原より大阪新町二丁目に引移りし扇屋四郎兵衛の抱遊女にて、當時大阪にては京女郎の珍らしければ、この一家はすべて繁昌せり。中にも夕霧は容貌婀娜としてその全盛實にいふばかりなかりしが、延保五年の秋の頃より病にかゝり、翌六年正月六日に扇屋の内にて歿す。享年二十六。同地西寺町淨國寺に葬り、法名を花岳芳春信女と云ふ。大阪新町九軒の吉田屋にては去る昭和二年その二百五十年正當忌を修したり。

例句

夕霧忌　夕霧忌九軒の櫻冬木なる　月斗（同人）
伊左衞門の雁治郎來たり夕霧忌　同（同）
吉田屋の八方明し夕霧忌　同（同）
この巨燵に布團かけ見よ夕霧忌　青々（倦鳥）
三味線にあはれを彈けや夕霧忌　同（同）

此日とて貸しにしのびし夕霧忌　同（同）

義政忌（よしまさき）　慈照院殿忌（じせうゐんでんき）

正月六日。京都市今出川の相國寺に於て、足利八代將軍義政の忌を修す。義政は應仁の亂後、職を子義尚に讓り、文明十五年東求堂を東山に造り、鏤刻するに金銀を以てす。時人之を銀閣と稱して、北山の金閣に比す。義政之に移り、茶宴を設け、古器丹青を玩弄す。數奇の盛なる、此の時を第一とす。延德二年薨ず、年五十六。慈照院と稱し、又東山殿と稱す。太政大臣を贈らる。

義政忌

品香に喫茶に暮れぬ義政忌　爲化（懸葵）
淡雪のごときうす茶や義政忌　冬葉（同）
薄雪の大文字山や義政忌　雨青（同）
銀砂灘雪降りうめぬ義政忌　三幹竹（同）

湖月尼公忌（こげつにこうき）

正月六日。京都高臺寺にて湖月尼公の忌を營む。尼公は豐臣太閤の北政所なり。織田信長の卒藤井又右衛門が養女、實は杉原長房入道道松が女といふ。豐公初め織田家に奉仕し卑賤たりし時に嫁し、婦德尤も篤し。嘗て豐公登庸ありて外權を掌るに及びて、尼公はよく內治を補け、內外順和して遂に大業を成す、實に尼公の婦德に依れり。慶長十一年落髮して高臺寺を建立し、寛永二年に薨ず。壽八十有餘。〔一題〕高臺寺の方丈懺法（カウダイジノハウヂヤウセンボフ）

湖月尼公忌

懺法の香煙寒し湖月尼忌　三幹竹（懸葵）
枯萩も庭の眺めや湖月尼忌　同（同）

豐國忌（とよくにき）

正月七日。歌川豐國（一世）は浮世繪師なり。江戸の人、倉橋氏、俗稱熊吉。歌川豐春の門に入りて浮世繪を學び、師名の豐字を讓られて豐國と稱し、一陽齋と號す。善く當時の風俗を畫きて、最も俳優の似顏繪に長ず。當時、文化の始合巻・讀本盛に行はれ、豐國亦多くこれに畫きて最も世に賞せられ、畫を請ふ者踵を接ぎて來り應接暇あらず。當時讀本の作者は、京傳・三馬・馬琴の徒にして、其挿繪は多く豐國これを描く。その繪彩色精巧にして燦爛目を射るに許りなり。文化元年繪本太閤記中の圖を錦畫にし出板せし罪を以て手鎖の刑五十日に處せらる。文化八年正月七日歿す。

年五十七、三田聖坂の曹洞宗功運寺に葬る。門人等之を悼み後に相謀り筆塚を柳島妙見の境内に建つ。撰文は狂歌堂四方眞顏なり。

例句

豐國忌

錦繪に香炷きそへつ豐國忌　冬葉（懸葵）

窓開けて海紺青や豐國忌　撲天鵰（同）

弟子の數かぞへ擧ぐるや豐國忌　蘭家（同）

除風忌（じょふうき）　百花忌（ひゃくかき）

季題解説　正月十三日。除風は備中國八田部（今の總社町の一部）の人、眞言宗の僧、嵐雪に俳句を學ぶ。元祿十一年の頃備中倉敷に住し、後下庄四ツ堂のほとりに南瓜庵を結び、寶永元年庭前に翁墳を立て千句塚と呼ぶ。寶永三年讃岐觀音寺宗鑑の遺跡一夜庵に入り百花と號す。寛保二年中風症に罹り、生前追善集「夢の枯野」を編す。延享三年高齡にて歿す。同地興昌寺に葬る。青莚・番橙集・千句塚等の著あり。

例句

除風忌

除風忌や浮草もゐる水の底　冬葉（獺祭）

除風忌や畑榾散れる雲寒し　燕々（唐辛子）

春寒や除風忌による五六人　華石（同）

百花忌

百花忌や烈しき風の松にある　燕々（同）

百花忌や松活けてある興昌寺　同（同）

一蝶忌（いってふき）　朝湖忌（てうこき）　暁雲忌（ぎょううんき）

季題解説　正月十三日。英一蝶の忌日なり。本姓多賀、名は安雄、又信香、字君愛、通稱次右衛門、俳名を暁雲と呼ぶ、賛翠翁・牛丸・狗斗堂・一蜂閑人・隣樵庵・翠蓑庵・朝湖齋・北窓翁・六巣・潤雪・寶蕉・和央・雲堂等の號あり。狩野より出で別に一派の畫風を興す。芭蕉門、江戸の人。享保九年歿、享年七十三。江戸芝二本榎、顯乘院に葬る。

例句

一蝶忌

坐に招く隆達節や一蝶忌　羊我（懸葵）

墨客にして嫖客や一蝶忌　犄化（同）

其帶縮くけふや一蝶忌　三幹竹（同）

朝湖忌

朝湖忌や朝妻舟の諷諫圖　犄化（同）

頼朝忌（よりともき）

季題解説　正月十三日。頼朝は源義朝の三男、その人となり面大にして身短く、風度温雅、音吐亮朗、沈毅にして度量あり。算前に定まらざれば未だ

嘗て事を擧げず、故に軍に敗衂なし、將士畏服す。然れども猜忌にして恩寡し。骨肉功臣多く殺戮に遭ふ。初め頼朝の祖先世々戰功あり、關東の士久しく源氏を戴く。以仁王の令旨を奉じて兵を擧げ平家を倒し遂に幕府を鎌倉に開き天下に號令するに至りて、兵馬の權悉く之に歸す。世、鎌倉右大將と稱す、又鎌倉殿といふ。建久三年征夷大將軍に任ぜらる。正治元年病革まるを以て薙髮し、年五十三にて薨ず。和歌を好み射をよくす。しばしば將士をして流鏑馬・犬追物・笠懸等を講ぜしめて親らその優劣を定む。常に節儉を以て天下を率ゐたり。鎌倉八幡宮本社の西に白旗明神社あり、その木像を安置す。

例句 頼朝忌

梅の散る白旗宮や頼朝忌　冬葉（續　紅）
鎌倉の東風浪寒し頼朝忌　同（同　）

巖如忌（ごんにょき）　愚皐忌（ぐかうき）

季題解説 一月十五日。東本願寺二十一世の法主、名は光勝、法名は巖如、愚皐と號す。文化十四年三月七日生れ、童名豫丸、近衞右大臣忠煕の猶子たり。文政十一年三月十八日得度し、近江大通寺の住持となり、天保十二年四月六日長兄光淨寂するを以て、十二月十八日法嗣となり、十四年正月十四日大僧正に任じ、弘化三年五月二十三日宗務を繼ぎて第二十一世となる。安政五年六月堂宇燒失せしを以て大谷に移住す。萬延元年八月新堂落成す。元治元年堂宇兵火に罹り、慶應元年朝廷より再建の綸旨を下し併せて資を賜ふ。明治元年正月朝命を奉じ、法嗣光瑩と道を分ちて各地に行化し、軍資金を募りて之を獻ず。同五年三月八日華族に列せらる。同六年二月五日從五位に敍せらる。同二十二年退隱し、廿七年一月十五日正二位に敍せられて寂す。壽七十八。眞無量院と稱す。津梁の餘事に繪畫・和歌・茶の湯等趣味多かりき。

例句 巖如忌

巖如忌やお花狐の大通寺　禽化（懸葵）
巖如忌や湖東湖北の御末寺　同（同）
巖如忌や末寺に殘る女人講　三幹竹（同）
巖如忌や形見の火桶抱きつゝ　旬佛（同）

愚皐忌

龍華墨今も殘りて愚皐の忌　三幹竹（同）

愚庵忌（ぐあんき）　鐵眼忌（てつがんき）

季題解説 一月十七日。鐵眼は京都修學院村林丘寺の僧、愚庵と號す。俗名は天田五郎と云ふ。始め久五郎と云ひ磐城平藩士甘田平太夫の二子なり。明治元年兄善藏出陣し、新田山等の戰に加はる。久五郎十五歳、父母に請う

て出陣し谷川瀬村の一番所に至りて推擧を求め、忽ち元服して鎌田河の關門詰となり、次に新川町の關門詰となる。七月十二日炮戰あり、新川町の關門破る。久五郎敵の彈丸を潜りて本丸に入る。此夜平城沒落す。この戰ひに父母及小妹離散してその行くところを知らず、兄弟共にその搜索に力をつくす。久五郎は兄善藏の命により平に留まりて學問修行し、既にして甘田久五郎を天田五郎と改む。その後父母小妹を尋ねて江湖に流遊すること三十年、初め國書を讀み、既にして儒道を學び、時に悲歌の士と交りて北陲に往き、時に遠征の軍に從ひて南荒に渡り、或は劒客の門に投じ、或は博徒の一家に寓し、市井の業、臺閣の氣、冷飯敝衣の生涯、綠酒紅燈の筵席、凡そ人間の苦樂、貧富貴賤都鄙内外の事情、一も親炙せずといふことなし。一日豁然悟る所あり、林丘寺に入りて滴水禪師の度を受け鐵眼といふ、時に三十四歲。詩あり、曰く、悠山奥水去悠々、二十年來事歷遊、踏斷身前身後路、白雲深處臥林丘と。明治二十五年、京都清水産寧坂に小庵を營み、愚庵といふ。愚庵十二勝の作あり、江湖の文人墨客これに唱和す。二十六年六月西國三十三所の靈場を巡禮せんとし勧進帳を製し、一人三錢三厘の喜捨を求め、一百日にして隨喜する男女一千五百五十人に及ぶ。九月二十日出發し十二月二十一日冬至の日小庵に歸る。三十三年八月桃山に移り居す。三十七年一月一日の夜俄に發熱し、十三日遺偈を書す、曰く、氷魂向水散、鐵骨入苔穿、月下人尋否、梅花白處烟と。十四日遺書を作り、十七日寂す。壽五十一。著作に愚庵全集一卷（昭和三年東京政教社發行）あり。

例句

愚庵忌
愚庵忌や思ひ浮べる十二勝　愚哉（懸葵）
愚庵忌や遺跡の梅も咲きつらん　同（同）
愚庵忌や白梅唯に寒う見る　三幹竹（同）

鐵眼忌
鐵眼忌遺偈日記繙かん　愚哉（同）
鐵鉢に梅の一枝や鐵眼忌　同（同）
天龍の梅第一座鐵眼忌　三幹竹（同）

土芳忌（どはうき）

季題解説　正月十八日。服部土芳の忌日なり。伊賀國上野の人、諱は保英、通稱半左衛門、始め蘆馬・後蓑蟲庵の號あり、後此中庵と改む。芭蕉門。その隨聞記・白冊子・赤冊子・黒冊子の三冊は連歌俳諧のことより、不易流行の事、季題の事、芭蕉の遺語等を主としたるもの。安永五年に至り、闌更け、この三冊をまとめて「三冊子」と名づけ上梓し世に行はる。享保十五年歿。享年七十四。

例句

土芳忌
土芳忌や上梓めでたき三冊子　羊我（懸葵）

伊賀人の雪蓑戀し土芳の忌　三幹竹（同　）

徂徠忌（そらいき）

【季題解説】正月十九日。荻生徂徠は鴻儒なり。名は雙松、字は茂卿、又蘐園・赤城城と號す。父方庵は徳川幕府の醫員たりしが、延寶中事に坐して上總に竄せらる。十四の時父の謫所に從ひて研學す。長じて柳澤氏に仕へ、儒官となりて寵あり。是より先伊藤仁齋古學を平安に唱ふ。徂徠即ち蘐園隨筆を著はして之を排絶す。李王の書を讀み感奮する處あり、宋學を棄てゝ古文辭を以て古經の階梯とし、一家の言を創立して自ら復古の學と稱して曰く「偏に秦漢以上の古言を采りて六經を玩味せば宋儒の妄誕章々として明かなり」と。鋭意聖學を復するを以て任とす。名聲一世に震ふ。赤穗の遺臣仇を報ずや、林信篤之を宥めんと欲し、議未だ決せず。徂徠吉保に謂つて曰く「今良雄等を宥めば上杉綱憲と淺野大學の二家難を構ふに至るべし。嘗て天下の禍根を招かんより殺すに如かず。」と。議乃ち決すといふ。享保十三年正月十九日歿す、年六十三。著書數多あり。

【例句】
徂徠忌
徂徠忌や客にもてなす煎豌豆　䲙人（懸葵）
煎豆を酒の肴や徂徠の忌　冬葉（同　）

覺如忌（かくによき）

【季題解説】正月十九日。本願寺第三世にして名は宗昭、覺如と號す。親鸞の外曾孫にして、第二世如信の從姪。文永七年十二月二十八日を以て京都三條富小路に生れ、弘安九年十七歳にして攝津原殿の禪房に於て得度し、奈良一乘院信昭大僧正の門侶となる。傳來法相宗西林院行寛法印に瑜伽唯識の法門を學ぶ。同十年十一月九日所學を捨てゝ大谷に入り、如信より一宗の口訣を得、正應三年關東に行化す。正安二年如信寂せしが、偶法流蹉跌ありたるを以て、奧州に往き、延慶元年四月京都に還る。此年後伏見上皇より大谷坊舍故の如しとの院宣を賜ふ。同三年宗務を嗣ぎて第三世となる。觀應二年正月十九日寂す、壽八十二。在職四十二年、一流の法義は師の世に至りて益々其精を究む。著作、拾遺古德傳七卷、親鸞聖人繪傳二卷、口傳鈔三卷・改邪鈔・執持鈔・本願鈔・願々鈔・最要鈔・出世元意・報恩講式、各一卷等あり。

【例句】
覺如忌
繪詞傳に王の響や覺如御忌　烏化（懸葵）
[illegible]
覺如忌や銀杏雙樹の裸鳴り　同（同　）

覺如忌　覺如忌や御墓守りて四十年　夜諦（懸　葵）
覺如忌や朱雀の墓の掃かれある　片湮（同）
覺如忌や凍てつく灯風なくも　西の丘（同）
慚愧恥づる襟もと寒し覺如御忌　魯牛（同）
そらんずる聞窓集や覺如御忌　逸水（同）
覺如忌やことに尊き口傳抄　句佛（同）

遍照忌（へんぜうき）

【季題解説】正月十九日、遍照、俗姓は藤原氏、宗貞といふ。仁明帝に仕へて近衞將を經て藏人頭となる。嘉祥三年、帝崩ず。師、哀慕に堪へず、遂に比叡山に登り、圓仁和尚に投じて落髮出家し、圓頓戒を受け、天台宗を學び、圓仁の命により安慧に就て三部の大法を受け、圓珍和尚に從つて灌頂密旨を受く。貞觀十一年法眼に叙し、元慶元年權僧正に任ず。正僧正に進み、仁和元年封一百戸を賜り、元慶寺の座主となる。寛平十二年正月十九日華山寺に寂す。壽七十四。京都山科の元慶寺に木像を安置し年々法會を營む。

【例句】
遍照忌　その庵は都の乾遍照忌　羊我（懸　葵）
宇治醍醐かすみそめたり遍照忌　三幹竹（同）

明慧忌（みやうゑき）

【季題解説】正月十九日、山城國栂尾高山寺の學僧、名は高辨、明慧と號す。紀伊國有田郡の人、父は重國といふ。八歳にして父母を失ひ、出家して文覺に從ふ。華嚴の奥義を究め、栂尾山に止まり、後紀伊白峰山に登りて庵居修行す。元久二年春同志と支那より天竺に達せんとし、準備已に成りて疾のため果さず。建永元年十二月後鳥羽上皇勅して栂尾山を賜ひ、永く華嚴興隆の地となす、因て號して高山寺と云ひ、院宇の廢頽を興し、盛んに華嚴宗を唱ふ。承久の亂に敗士多く栂尾に隱る、ために北條氏の疑を招きて、捕へらるゝに至りしが、泰時その德望を聞き罪を謝し、これより屢々山に入りて政道を問ひ、崇拜甚だ深し。三年冬後疾に罹り、貞應元年正月十五日門下を誡め、十九日朝に安詳として寂す。壽六十、栂尾禪堂院の後に葬る。著書七十餘卷あり。

【例句】
明慧忌　明慧忌や近畿に殘る華嚴宗　喬化（懸　葵）
明慧忌や毒舌に似て摧邪輪　同（同）
明慧忌やわれも都の茶商人　羊我（同）
預還歌の主人明慧忌修しける　同（同）

明慧忌や參り合ひたる畑の姥　雨青（同）
明慧忌や紅葉の枯れ葉踏み詣づ　句佛（同）

曉臺忌（げうだいき）

季語解説 正月二十日。久村曉臺の忌日なり。本姓加藤氏、享保十七年名古屋に生る。通稱平兵衛。俳諧は美濃派の蓮阿坊白尼に學び、暮雨庵、白一居、買夜子、龍門司等と號し、寛政二年二條柏公より中興宗匠の稱を賜はり花の本の稱號を允許せらる。俳風は美濃派の出なるも、諸國を歴遊して自ら悟るところあり、大いに復古の調を唱へ、天明六家の一人に數へらるるに至る。京都に上りて蕪村及びその周圍の人々と吟詠を樂しみ、遂に門人等の斡旋にて洛に閑居を結ぶ。寛政三年十一月より病んで翌四年一月十九日夜病假に革りて歿す。享年六十一。京都寺町通四條南大雲院に葬を營む。著書に、秋の日、しをり萩、古池など、又、去來抄、桃青三十歌仙などの覆刻もなす。

例句

曉臺忌に

濟々の堅並集や曉臺忌　羊我（懸葵）
曉臺忌北野連歌師參りけり　同（同）
曉臺忌尾張大根も京の土　同（同）
曉臺忌なも〳〵と寄る名古屋衆　禽化（同）
蕪の蕪村忌大根の曉臺忌　同（同）

乙字忌（おつじき）　寒雷忌（かんらいき）　二十日忌（はつかき）

季語解説 一月二十日。乙字、名は績、大須賀氏、明治十四年七月二十九日福島縣宇多郡（今は相馬郡と改む）中村町に生る。磐城の藩儒神林復所の季子、大須賀筠軒の長男なり。明治三十七年秋東京帝國大學入學後、碧梧桐・碧童・六花等と交情深く日本俳句に精進し東京俳句界に雄飛す、明治四十一年アカネ誌上にて「俳句界の新傾向」を論じ、これより「新傾向」なる語行はれるに至る。大正四年六月碧梧桐の海紅派と關係を絶ち、懸葵、石楠、常盤木等の誌上にその俳論を執筆し專ら斯道の啓發につとむ。大正九年一月二十日東京市小石川區高田老松町の自宅にて病歿。享年四十。東京雜司ケ谷に埋葬し墓を建つ。法名諦觀院顯文清績居士。故人春夏秋冬、乙字俳論集、乙字句集、乙字書簡集等の著あり。一に寒雷忌と稱す、歿したる日恰も寒中の雷鳴ありたればなり。又二十日忌とも稱す。

例句

乙字忌

乙字忌や乙字句集の酒のしみ　鬼城（懸葵）
乙字忌や君が書は句は評論は　竹の門（同）
乙字忌や爛たる瞳いますかに　寒山（同）

乙字忌

[illegible]碑成る

乙字忌やこれより語る嵐山碑　小[illegible]（曙　夢）
乙字忌に參らず霜の鳴る夜なり　寒樓（同）
乙字忌や父翁が五言冴ゆる也　曉村（同）
一間もなき句座滿し乙字の忌　牛詰（同）
乙字忌やこの十冬の句變遷　蓼江（同）
乙字忌や大寒に見る日の光　竹石（同）
乙字忌や渉成園の十二年　琅玕（同）
乙字忌や曾遊のこの地山眠る　節堂（同）
寒雲の日をつゝみけり乙字の忌　碧梧（昭和一萬句）
異端者も來て乙字忌を修しけり　冬葉（同）
一門の句屏風立て[illegible]乙字の忌　枯木（[illegible]　古　[illegible]）
霜の碎きゝに參りぬ乙字の日　朶青子（俳　星）
乙字忌や寒花霜雪手向草　三幹竹（同）
乙字忌や我が柴門の月寒し　同（懸　葵）

寒雷忌

枯野一點の日射し消えけり寒雷忌　九萬里（同）
着[illegible]の筆昔[illegible]に寒雷忌　羊我（同）
松雷の果てを吹雪や寒雷忌　雀子（同）
筆の穗も氷らんばかり寒雷忌　壽美平（同）

二十日忌

二十日忌の寒月となりし戻り哉　素琴（同）

義仲忌（よしなかき）

【季題解說】正月二十日、近江國粟津義仲寺にて源義仲の忌を修す。義仲は源義賢の第二子、名は駒王丸、治承四年、以仁王の令旨を奉じて平氏を破り、壽永二年、從四位下征夷將軍に任ぜらる。範賴、義經の來り討つに及びて大敗し、近江國粟津にて射殺せらる。年三十一。後、里人、堂を建てゝ義仲寺と號して弔す。尙芭蕉に「義仲と背中合せの寒さかな」の吟あるに因みて、芭蕉翁の塚を義仲の塚と相並べて設けたりといふ。

【例句】

義仲忌

懐に項羽本紀や義仲忌　青々（妻　木）
義仲忌[illegible]果合に雨そゝぐ　同（同）
義仲忌むかし知らるゝ寒さ哉　三甫（戊辰句集）
みづうみに波の穗白し義仲忌　十六浦（青　嵐）

木庵忌（もくあんき）

【季題解說】正月二十日　山城國宇治黄檗山萬福寺の第二世、名を性瑫といふ。支那泉州晉江の人なり。明の崇禎二年開元寺の印明和禪師に從ひて得

度す。八年鼓山の永覺禪師に謁して其足戒を受く。これより四方に遊びて諸名僧に謁す。我朝明暦元年招かれて來朝し、長崎に着す。寛文元年黄檗山に入り、三年冬結制を行ひ、四年隱元禪師の法席を繼ぎて第二世となる。八年幕府より白金及良材を賜はりて新たに大雄寶殿、韋駄殿、禪悦堂を建つ。十年勅して紫衣を賜はる。延寶八年法席を慧林に付して退隱し、紫雲院に入る。貞享元年正月病に罹る、懇ろに弟子を諭し、正月二十日寂す。壽七十四。末後の句に云はく、「一切空寂萬法無相」と。嗣法の弟子五十餘人、其中、鐵牛、慧極、潮音を三傑と號す。

例句

木庵忌

山門の聯も古りけり木庵忌　羊我（懸葵）
木庵忌學人江を渡り來る　同（同）
宇治かけて暮れ立つ虹や木庵忌　鶴化（同）
獅子林や松籟冴ゆる木庵忌　三幹竹（同）

日朗忌（にちらうき）

季題解説　正月二十一日。日朗は字を大國といひ、號を筑後房といふ。寛元三年四月八日下總濱島鄕能天村に生る。父有國建長六年鎌倉にて日蓮に見え深く歸信し、乃ち師を携へて日昭に投ず。日蓮より日朗の名を受く。文應元年十六歳にて剃髮得度す。龍ノ口の法難に際して右の臂を折らる、これより一生右手治せずといふ。日蓮の佐渡に流さるゝや、渡海して省すること八回、常に米を負ひて到るといふ。後佐渡に渡りて日蓮を迎へ鎌倉に歸る。弘安五年十月十三日日蓮長榮山にて滅を取るとき、長榮、長興、兩山の監督を遺囑せられ、伊東の感應佛像一軀、立正安國論一卷、伊豆佐渡兩島の赦状二紙を讓らる。その示寂にあたり、日昭と共に喪事及び後事を監す。正應四年九月大曼荼羅を繪きて日輪に附して兩山に主たらしめ、文保二年疾に罹り、死後松葉ケ谷に荼毘せんことを遺命し、正月二十一日寂す。後光嚴天皇勅して菩薩號を賜ふ。下總鼻和の本土寺の開山なり。この日京都本圀寺にても開山日朗の法會を營む。

例句

日朗忌

日朗忌佐渡は暮れたる浪の月　黑洲（懸葵）
松籟に高題目や日朗忌　同（同）
荒海のしまきも晴れよ日朗忌　三幹竹（同）
日朗忌團扇太鼓の音冴ゆる　同（同）

左衛門忌（さゑもんき）

季題解説　一月二十二日。本名吉野太左衛門別號太朗。明治十二年二月十日東京府下北多摩郡三鷹村大字野崎に生る。明治二十八年子規居士の門に入

りて俳句を學ぶ。明治三十三年東京專門學校政治科卒業、直ちに國民新聞社に入り編輯の要部にあること約十年。明治四十三年京城日報社長となりて赴任す。大正三年病氣のため辭任、東京に移住す。大正九年病歿す。享年四十二。左衛門句集の著あり。

〔例句〕

左衛門忌　左衛門忌斗酒獻せぬ人無々ぞ　羊我（懸葵）
水仙の花まゐらせん左衛門忌　冬葉（同）

阿茶局忌（おちやのつぼねき）

〔解説〕 正月二十二日、徳川家康の侍女。名は須和、武田信玄の家人飯田久右衛門の女なり、今川氏の臣神尾孫兵衛に嫁す。家康今川氏に質たりし時、神尾夫婦よくこれに事ふ。今川義元の戰死するや、孫兵衛亦陣歿す。長男お甲斐に歸る。武田氏又滅び、家康甲州に至りて局に遇ひ、これを濱松に召す。側奉大奥に在りて家康に信用せらる。家康駿府に退隱するに及び、又これに隨ふ。大阪冬役に大阪城中に使し、鎧裝に肩輿に乘り矢丸を冒して往還す。淀君の侍女大藏卿に說き議和に成る。又徳川秀忠の女、中宮（東福門院）に立てられし時、これに從ひて京都に入り、從一位に叙せらる。晚年薙髮して雲光院と號す。寛永十四年卒す、享年八十三。

羅山忌（らざんき）　道春忌（だうしゆんき）

〔解説〕 正月二十三日、林羅山の忌日なり。日次紀事に「本朝無双之博識而、在文敏先生號爲南、讀耕有司堂」と記す。初名又三郎信勝後ち忠と改む。字子信、道春と稱す。浮山、羅洞、羅長胡、麝庵、夕顔庵、雲母溪、梅花村と號す。幕府の儒官にして民部卿法印に叙せらる。京都の人、後江戸に住す。明暦三年歿す、享年七十五。

〔例句〕

羅山忌　羅山忌や神童の耳囊の如し　鶯化（懸葵）
羅山忌や夫子の道の斷として　同（同）
羅山忌やうらぶれし身に古袴　羊我（同）
羅山忌や一夜和讀のもの語り　三韓竹（同）

道春忌　祭酒なぞ世に唐めかし道春忌　羊我（同）
五行倶に讀む眼光や道春忌　鶯化（同）
銅瓦葺の鳥有を惜しむ道春忌　三韓竹（同）

契沖忌（けいちゆうき）

〔解説〕 正月二十五日、學僧契沖、名は空心、俗姓下川氏。寛永十七年攝

津國尼ヶ崎に生れ、十一歳の時父母の家を離れ、大阪今里の眞言宗妙法寺に入り丰定に就いて佛學を修め、十三歳の時薙髪すると共に高野山に登り東寶院快賢に就いて學び、二十四歳にして阿闍梨位を得。その後山を下り、大阪生玉の曼陀羅院、今里の妙法寺等に住し、五十一歳の頃老母を失ひ、高津の里に庵を結び圓珠庵といふ。佛學の傍國學を好みて造詣深く、最も語學に精しく、又和歌をよくす。萬葉集代匠記二十卷、和字正濫鈔等幾多の著述あり。元祿十四年正月二十五日大阪高津の圓珠庵に寂す。壽六十二。墓は圓珠庵にあり、又今里の妙法寺に供養塔あり。

【例句】

契沖忌

一日の梅のこぼれや契沖忌　青々（妻木）
梅しろくたきもの細し契沖忌　同（同）
白梅に泣返る夜や契沖忌　九朝（昭和一萬句）
國學の先生にして契沖忌　としを（ホトトギス）

實朝忌（さねともき）

【季題解説】　正月二十七日　源實朝は賴朝の二子にして、建仁三年年十一にして、征夷大將軍に叙せらる。建保六年右大臣に轉ずるや、翌承久元年正月二十七日、拜賀の禮を鶴岡社に行ふ。禮畢りて石階を降り、姪公曉の爲に殺さる。時に年二十八。始め實朝しきりに高官を得んことを求む。大江廣元、父賴朝の叙任の度每に辭讓し、將に以て慶を子孫に延べんとせしことを云ひて諫言す。實朝曰く、「言ふ所誠に當れり。然れ共源氏の正統孤危、今日に極まる。豈に子孫の繼承を望むことを得んや。故に身果高を極めて以て家聲を顯著せんと欲するのみ。」と。廣元言なくして退く。實朝和歌を好み藤原定家に學ぶ。著はす所金槐和歌集あり。萬葉の古調を好みて[illegible]壯、二三を擧ぐれば、

山はさけ海はあせなむ世なりとも君に二心我あらめやも
時によりすぐれば民の嘆きなり八大龍王雨やめ給へ
箱根路を我が越え來れば伊豆の海や沖の小島に波のよる見ゆ

等、代表作として最も人口に膾炙す。
青木月斗氏及び「同人」社の人々鎌倉壽福寺に於て、曾て二月二十七日實朝忌を修してより、毎歳この忌を修し、以て多情多感なりし詩人としての實朝を弔す。然れども陰曆一月二十七日が正當の忌日となす。

【例句】

實朝忌

肩うつあられの音や實朝忌　蒼梧（懸葵）
[illegible]南に春の[illegible]や實朝忌　冬葉（同）
寒風の伊豆の海見ゆ實朝忌　三杵竹（同）

了佐忌（れうさき）

季題解説　正月二十八日。古書畫鑑定古筆家の始祖、名は節世、また範佐、正覺庵樸村と號す。近江國西川の人、初め彌四郎と稱し、薙髪して了佐といふ。近衛關白前久公に從ひて書畫鑑定の事を學び、以來業とす。豐臣秀次より古筆の姓及び琴山の印を賜ふ。琴山は今も以て極め印に用ふ。寛文二年正月二十八日歿、享年九十一。了佐和歌を烏丸光廣に學ぶ。

例句　了佐忌

了佐忌や折紙多き床の軸　三味（懸葵）
近衛家の秘香焚し了佐の忌　同（同）
了佐忌や蘇種裂の軸帛紗　同（同）

官幣社例祭表（新年）

別格官幣社例祭

神社	祭日	祭神	鎮座地
阿部野神社（あべのじんじゃ）	一月二十四日	北畠親房・北畠顯家	大阪市住吉區住吉町

動物

新玉鷹（あらたまだか）

【季題解説】正月に捕りたる鷹をいふ。また一説には、初鳥狩の鷹をいふとあり。【參照】冬―鷹、人事―初鳥狩（ハツトガリ）

【例句】

新玉鷹　尾羽白の新玉鷹のきほひかな　冬葉（驟葉）

天津日のあら玉鷹や神の國　三幹竹（同）

初鶏（はつとり）

【古書蒐註】

【御傘】春也、元日の朝のには鳥の鳴をいふ。元日を雞旦ともいふ也。しかれば朝時分にも成べし、寅の刻（一）鳴初る鳥也。寅の刻は曉なれば夜分は勿論の事なり。（二）

【栞草】鷄旦東方朔占書歳後八日、一日爲レ雞と有より元旦を雞旦と云、七日を人日といふにおなじ。

【年浪草】索隱に曰く、三號三たび鳴く也。言ふ心は夜雞三たび鳴に至つて則ち天曉けて乃ち始めて正月一日と爲る、言ふ心は歳を異にする也。○和漢三才圖會に曰く、和名加介（三）又云久太加介、又云木綿（ユウ）附鳥、俗云庭鳥、雞は家々之を畜て庭に馴る、因て庭鳥と稱す、又家鷄（カ）と稱す、以て野雞に別つ。其の種類多し。尋常の鶏、俗に呼で小國と名く、能く鳴て時を告ぐ。丑の時（四）より始て鳴く者、一番鳥と稱す。寅の時鳴く者二番鳥と稱す、人之を賞す。丑より以前に鳴く者を不祥と爲す、俗に之を宵鳴と云。

註　（一）寅の刻、午前四時。（二）初鶏に就て栞草は御傘の全文を引けり、故に略す。（三）萬葉「曉と鷄（カケ）は鳴くなりよしえやし獨りぬる夜は明けば明けぬもの」（四）丑の時、午前二時。

【季題解説】元日の曉に雞の鳴くを初鶏といふ。

【實作注意】初鶏は元旦鳴く鶏の聲をいふことは人の知るところにして、我が國には神代の昔より鶏鳴を尊ぶ慣習あることなれば、日出度き心持を失はぬやう作るべし。

【例句】

初鶏　初雞や富士白々と明心　友之（玉かつら）

拔高く神の初雞諷ひけり　古慊（文庫）

寢ぬ夜寐て榊に雞の初音哉　淡々（淡々發句集）

初鶏や海に出鼻の蜑が家　九日庵（同）
初鶏や爐にも聞ゆる浪の音　鷺江（青嵐）
初鶏の聲つたへ行く家並かな　句泉（同）
初鶏や海より明けて淡路島　洲山（同）
初鶏やまだ灯しある長局　孤軒（孤軒句集）
初雞や戸明ける下の池明り　柹晉（かりがね）
初鶏や灯して向ふ膳くらき　羊皮（草上俳句集）
初鶏の百羽の鶏の主かな　たけし（現代俳句大觀）
初鶏や兒等も覺めゐぬ閨の中　蕾兒（同）
船宿に島の初雞聞きにけり　虹波（同）
初鶏や既にともせし神樂殿　蓼江（昭和一萬句）
初鶏の臼に降りたる一羽かな　燕洲（懸葵第一句集）
初鶏や吉田の社家の大竈　九斤子（懸葵）
初鶏や外宮に近き大旅籠　壽美平（同）
初鶏やほのかに遠き御所の森　天眞（同）
初雞や郡梅津の霞むほど　紫閑（同）
初鶏や國栖の古栖の日の匂ひ　鶯池（同）
初鶏や吊巢の下の炭俵　五沼（同）
初鶏や枕上みなる浪の音　歩牛（同）
初鶏や壠畝の中の西の京　三幹竹（同）
初鶏や霜雪の如淑氣滿つ　句佛（我は我）
畑遠くなる京を思ふ初鶏に　同（同）

初鶯（はつうぐひす）

季題解説 飼育して新年に鳴かする鶯を初鶯といふ。

作句注意 鶯の初音は春なり。混同すべからず。［参照］春—鶯（ウグヒス）

例句 初鶯

初鶯湯殿のともし漏れにけり　北谷生（獺祭）
初鶯庵の春告げそめにけり　三幹竹（懸葵）

初鴉（はつがらす）

季題解説 元日の曉天に鴉の鳴くを初鴉といふ。

作句注意 初鴉は、元日に鳴く鴉の聲、或はその姿をも詠むべし。

例句 初鴉

己が羽の文字もよめたり初烏　蕪村（津守舟）
黑きもの又常盤なり初烏　蓼太（蓼太句集）
吾こゝろわれにある時初烏　梅室（梅室家集）

初鶏

一羣の姿も見たし初鳥　若虬（若虬翁發句集）
明渡る年のきげんや初鶏　壺仙（玉かつら）
初鶏三ツ四ツからは見えにけり　馬明（類題集）
除夜の灯の峰に殘りて初鳥　四明（四明句集）
鉾杉や粟田の宮の初鳥　同（同）
我が庵は上に近し初鳥　鳴雪（鳴雪俳句集）
大雪のはたと止みけり初鳥　月嶺（月嶺句集）
東海に日出づる國や初鳥　梧堂（俳星）
初鶏早やも丘行く人の聲　明成（東火）
曉け一つ時の海鎮まつて初鳥　亜浪（同）
海冴ゆる祈もありけり初鳥　墨水（墨水句集）
初鳥上加茂杉に夜明けぬ　紀石（[illegible]櫻）
初鳥昔内裏の空に鳴く　守水老（守水老遺稿）
樓門に打たれ太鼓や初鳥　碧雲（[illegible]十選雑詠[illegible]）
上賀茂へみさゝぎよりの初鳥　紅波（ホトトギス）
城山の巣をのんで初鶏　南舟（現代俳句大觀）
初鶏あとよりつゞく聲のあり　白亭（同）
はねつるべつかへる宮や初鶏　牛詰（同）
初鶏苫屋ほのかに潮明り　莊子（同）
住吉の東雲清し初鶏　赤心女（昭和一萬句）
山の手の早き電車や初鶏　啓堂（同）
東の野よりす聲や初鳥　月斗（同人俳句集）
初鳥我が家に聲を落し行　南陽（同）
初鳥田家の燈消えにけり　紅村（同）
大濤のうねりを鳴くや初鳥　春歩（同）
山姥もうつゝに聞くか初鶏　輿衣（かりがね）
わたつみの空すかす風や初鶏　鶯江（同）
はつ鶏は芭蕉蕪村は二の鳥　寒樓（最新二萬句）
山の井に口やはそゝぐ初鳥　射石（新春夏秋冬）
今朝春の鳥いつもの森よりす　雪人（同）
宮樣の森ほのぼのと初鳥　池音（ゆく春第一句集）
行列の消ゆる見附や初鳥　孤軒（孤軒句集）
一鼓打てばつるゝ百鼓や初鶏　蔦月（草上俳句集）
二三點魯雪の墨や初鳥　炎天（大正新俳句）
初鳥水田へ芹を踏みに來る　蘭山居（同）
夜もすがらもの煮ゆる火や初鳥　白峰（同）
初鳥一山雪に明くるかな　忍月（同）
初鳥第一年の宮柱　素石（同）

紙燭して眉描く巫女や初鴉　洛山人（同）
三囲のあたりに灯あり初烏　竹芝（蕉吟集）
山際やはげしく群るゝ初烏　零雨（同）
初鴉大きな羽をひろげけり　梅夜（同）
馬は疾く前掻きしをりはつ烏　鶯池（鶯池句集）
初鴉加茂の曙橋の霜　鱸江（明治新俳句集）
初鴉鳴くや熊野の朝朗　薫水（同）
初烏横に日のさす加茂の社家　吟月（同）
仁和寺の鐘が鳴るなり初烏　風骨（年刊俳句集）
三熊野の深雪を出でし初烏　瓦全（同）
森越しや東しろりと初烏　八重櫻（明治一萬句）
初烏神路山から起ちにけり　六花（同）
初烏鳴きぬ芝から上野から　梧大（同）
初鴉今し雲の戸開くなり　葵卿（懸葵）
初鴉仰げば額にかゝる雪　虚心（同）
ふところひゝゝ素袍着居れば初烏　葦竿子（同）
明け動く宮裏山や初烏　三幹竹（炬火）

初雀（はつすゞめ）

季題解説 元日の朝の雀を初雀といふ。

例句

初雀

初雀褌たのしき色音哉　芝之（大三物）
酌そめて初音そおそき朝雀　冷松（同）
九族の囀り盡きじ初雀　青々（妻木）
柑橘の畑より立ちぬ初雀　月斗（昭和一萬句）
古庭に汝も栖みなれて初雀　瓦全（同）
初雀翅ひろげて降りにけり　鬼城（鬼城句集）
神垣や註よりもまづ初雀　梨葉（梨葉句集）
初雀深雪の松の高みより　潮人（春日新聞俳句抄）
屋根の上を通る筧や初雀　ふせつ（最新二萬句）
初雀林の如き氷柱かな　釜村（同）
初雀廷廚が門の寂として　橡面坊（同）
外流しに静かに下りて初雀　かな女（大正新俳句）
門前に出ればまばゆし初雀　碧明（現代俳句大觀）
初雀南天の雪をちらしけり　劍三老（同）
ひるとなる風あたゝかし初雀　春草（同）
藁屋根の旭に躍りけり初雀　桃郁（同）

初雀

初雀軒にかけたる種袋　　瓜村（年間俳句集）
夜明から熱き炬燵や初雀　　龍雨（同）
霜がれて軒を離れず初雀　　三巴女（同）
初雀やぶうぐひすのゆくへ哉　　万太郎（道芝）
終日をしめらす雨や初雀　　白水郎（白水郎句集）
初雀家を繞らす蜜柑畑　　槿紅（同人俳句集）
ひもろぎの淨き筵や初雀　　梧風（ゆく春第一句集）
簾の戸にさしそめし日や初雀　　蕪吟（草上俳句集）
朝風に旗出す門や初雀　　素彩（懸葵）
梅の雪ちらして立ちぬ初雀　　盧仙（同）
氷上の小雪搔き消ゆ初雀　　亜浪（同）

初鳩（はつはと）

【季題解説】　元日の朝の鳩を愛でゝ初鳩といふ。

【例句】　初鳩

初鳩や籾積む庫の七構　　青嵐（年間俳句集）
初鳩や祖先より藏に棲み傳ひ　　俳小星（大正新俳句）
初鳩やまだ燈ともして神籤賣　　冬葉（懸葵）
初鳩やいつか去にたる火繩賣　　三幹竹（同）

初聲（はつこゑ）

【季題解説】　新年早旦、初雞・初鳥・初雀などの鳴き聲につれて、春の心地うれしく、囀りそめる諸鳥の聲を、總じて初聲といふ。【子題】初鶯（ハツウグヒス）　初鶏（ハツトリ）　初鶉　初雀

【例句】　初聲

初聲やいつもの鳥といひながら　　淵石（大三物）
初聲や鳥鶯若夷　　排悅（雑巾）

嫁が君（よめがきみ）

【古書校註】【梅亭筆記】　俳諧五節句（元禄元年印本内田順也著）に「よめが君、三ケ日の鼠をいふ」とあり、三ケ日には忌ていはざる詞あり、それにはかざし詞とて名をよびかへていふ也、雨をおさがり、寢るをいねつむ、おきるをいねあぐるといふ類にて、鼠をよめが君といふはかのかざし詞なるゆゑ、俳諧にては初春の季を持なり。云々。

【季題解説】　嫁が君は新年に鼠をさしていふ祝ひ言葉なり。一説に三ケ日間の鼠なりともいふ。

實作注意 嫁が君は、正月に限りて鼠を特に呼ぶ名なり。但し、古來諸說ありて、例へば「葛の松原」に、支考は、

明る夜のほのかにうれし嫁が君　其角

の句解に於て、嫁が君は正月の燈火と言ひしが如きものあれども採らず。

例句

嫁が君

明る夜のほのかにうれし嫁が君　其角（五元集拾遺）
三日月を出て見るあとは嫁が君　乙二（をのゝえ草稿）
鐵漿壺を踏みなかへしぞ嫁が君　子規（子規全集）
行燈の油なめけり嫁が君　同（　）
ほの暗き忍び姿や嫁が君　碧梧桐（碧梧桐句集）
この翁かくて在るぞや嫁が君　露月（露月句集）
祕め置し丹砂踏けり嫁が君　青々（妻木）
嫁が君几帳の裙にかくれ顏　四明（四明句集）
三ケ日眠むたき人や嫁が君　天郎（東國）
若餅と契りにけりな嫁が君　蝶衣（蝶衣句稿）
穂俵にのびたりけり嫁が君　北涯（俳人北涯）
どこからか日のさす闇や嫁が君　鬼城（鬼城句集）
嫁が君孟嘗君が厨かな　蛇湖（蛇湖句集）
貧厨に夜ひと音あり嫁が君　守水老（守水老遺稿）
三笑の酒座の爐尻や嫁が君　雪人（雪人句集）
嫁が君出て貧厨のめでたさよ　孤峰（ホトトギス）
ぬばたまの寢屋かいまみぬ嫁が君　不器男（同）
物を喰ふ口臈たしや嫁が君　橡面坊（深山柴）
依々として繭玉たれぬ嫁が君　百花庵（百花庵遺稿）
ものゝ縞にほのめくを嫁が君とこそ　放江（放江句集）
嫁が君戸帳の蓋を去來かな　句瑠璃（懸葵第一句集）
繭玉に來てゐる音や嫁が君　素琴（同）
嫁が君閨の薫物怖れけり　朝冷（同人俳句集）
嫁が君荒神箒曳きにけり　魚里（かゝがね）
通ひ路の鎗一筋や嫁が君　泰山（新春夏秋冬）
はしきよしはらからつれて嫁が君　文恵（現代俳句大觀）
嫁が君書の蓬萊覗きけり　紫石英（同）
鹽鮭を吊る煤梁や嫁が君　仙春（同）
長き尾を隠しおほせず嫁が君　蘭香（昭和一萬句）
傾城の懷紙引きけり嫁が君　謝山（同）
立琴を廻り啼めぬ嫁が君　孔雀（同）
絲好が寢顏こそくや嫁か君　夏風（明治新俳句集）
餅の粉に化粧やすらん嫁か君　夢幼（同）

嫁が君

幸兵衛が小言初めや嫁が君　無黄（年刊俳句集）
嫁が君遊ぶにまかせ讀みゐたり　犀川（同）
嫁が君に引かれて行くや小殿原　綺石（落椿）
嫁が君よべ出てひきし重の物　宗重（明治一萬句）
子を二つ連れて居ますや嫁が君　笑月（同）
かるたとる屏風の外や嫁が君　彩雲（同）
樂人の夢想のひまや嫁が君　溪水（同）
さゝめきは嫁が君なり熨斗昆布　秋竹（明治俳句）
常闇の神の代よりの嫁が君　鶯池（鶯池句集）
嫁が君寢積むわれを輕んずる　瘦石（最新二萬句）
諺の似たか夫婦か嫁が君　殘菊（同）
顔見ねど名は鶴女とや嫁が君　三允（同）
猫飼はぬ古き家や嫁が君　舞月（同）
來山は人形大事や嫁が君　山梔子（同）
嫁が君手影足影[illegible]灰かな　蘭竹（同）
嫁が君二十日鼠に禿君　櫻磯子（同）
今宵また燈おとすや嫁が君　九斤子（寒葵）
嫁が君嫁が手鞠をかくしけり　句佛（昨非集）

伊勢海老（いせえび）

【季題解説】　蓬萊臺等の飾り物として、海老は伊勢海老・鎌倉海老等名あり。
鎌倉海老（かまくらえび）
—新年— 人事——飾海老（カザリエビ）

【例句】
伊勢海老
わらへ人伊勢と海老とわが読と　成美（成美家集）
伊勢海老や四海の春を家の内　冬葉（獺祭）
伊勢海老の全き髭そめでたけれ　蒼梧（寒葵）
伊勢海老の其身を飾る目出度さよ　句佛（同）

【參考】　伊勢海老 Panulirus Japonicus (v. Siebold). 南日本の沿岸に産する海老　夏期産卵し、孵化した幼蟲はフイロソマと稱し、長さ三粍、體扁平透明である。このフイロソマには約十期を區別し、フイロソマ第一期に於ては、明き方へ向ふ性質あるを以て、海の表面近くを漂ひ、潮流に乘つて沖合遠くへ離散する。第二期以後は暗きを好むを以て、沖合に達した幼蟲は漸次深い海底へ入つて行くのである。フイロソマに次ぐ幼蟲期をフエルルス期とよび、稍々伊勢海老の成體に似てゐるが、頭胸部が著しく角張つて居り、海底を匍匐して漸次海岸に近づく。かくの如くして孵化後一ヶ月乃至一ヶ月半で、成體となるのである。近年伊勢海老濫獲の結果、甚だその數を減じたので、これを孵化し養殖しようと企てた人も多いが、右のやうな性質の爲め、人工的に養殖するには多大の困難が伴ふの

で、未だ何人も成功してゐない。伊勢蝦は鎌倉蝦とも稱せられることがあるが、鎌倉蝦の名の下には他種の蝦をも混じてゐるやうである。伊勢海老の最大なものよりも一倍半大即ち一米半に達するのは錦蝦 Panulirus ornatus (FABRICIUS) で、臺灣に產して居り、紫赤、黄白等の彩色美はしい種類である。この蝦は南支那の沿岸にも產するものであり、支那で龍蝦といつたのはこれを指すのではないかと思はれる。

海蠃（ばい）　海螄（かいし）

季題解說 海蠃は内海の砂泥地に生ずる、田螺に似たる貝にして、味美なり。殊に紀州熊野の產を上とす。春夏最も多く產すれども、特に新年の嘉祝として賞せらる。〔改正〕人事―海蠃の身祝

例句

海蠃　三熊野の海蠃一能を貰ひけり　冬葉（蝦祭）

海蠃買ふや緣起をかつぐ浪速人　代醉（懸葵）

參考 海蠃　あうむがひ Nautilus Pompilius LINNÉ. タコ・イカと同じく頭足類に屬する軟體動物であるが、タコ・イカが二個の鰓を有するに過ぎぬに反し、これは四個の鰓を有する點で別目に編入してある。化石時代にはこの四鰓類は甚だ繁盛してゐたのであるが、現在ではこの「あうむがひ」の類だけが殘存してゐる。體の軟部は稍ゝタコに類し、頭部には鞭狀の觸手が百本近く存在するが、これにはタコやイカに見るが如き吸盤がない。水を噴き出す漏斗即ち俗にタコ・イカの口と稱せられる部分もあるが、これは管狀をなさず、單に變形した觸手が二個左相接近して形成してゐるに過ぎない。海底を徊匍する時は、頭部を下にし、螺旋狀の殼を上にするが、海水中を游泳する際には、殼を前にし、軟部を後にする。この殼の基部は黒く鸚鵡の嘴のやうであり、それに續く部分には不規則な條紋があつて、あうむの頭部の如く見える。殼の内部は三十乃至三十五室に分れ、最後の一室を動物體軟部の棲家としてゐる。この室は、動物體の生長するに從つて次々に造られたもので、隔壁を以て互に分たれて居り、その中に窒素に富んだ空氣を含み、全體の比重を小ならしめてゐる。この殼は古來杯として廣く用ひられたものであるが、近年諸種の工藝品材料として廣く用ひられるやうになつた。肉は生のまゝ又は干物として食用に供せられ美味である。フィリッピン、ポリネシア等の近海に產するが、空殼が漂流して我國近海に來ることもある。以上記したもの〻外に近似種があるが、いづれもこれよりも稀である。但し殼の形態が臍部に於て主として異なる位のもので、他の部分は酷似してゐる。

植物

子日草（ねのひぐさ）　子の日の松（ねのひのまつ）　姫小松（ひめこまつ）　茶筅松（ちやせんまつ）

【季題解説】子日草とは正月初子の日の遊びに引く小松をいふ。此時に限り用ふる祝ひ語なり。子の日の松・姫小松・茶筅松も亦同じ。【參照】人事―子日の遊（ノ）

【例句】子日草

根つかせて見せばやけふの子の日草　曉臺（曉臺句集）
花よ實よ四時かやうの子の日草　士朗（枇杷園句集）
子の日草日高く山を下りけり　瓜青（懸葵）
春日野に誰が引き捨てし子の日草　三幹竹（同）
根の土の春晝にこぼれ子日草　句佛（同）

十六日櫻（いざさくら）　十六日櫻（いざよひざくら）

【季題解説】伊豫國道後の左方、山越村なる了恩寺の山にあり、毎年正月十六日に花を開くゆゑに、十六日櫻と名附く。昔此の山に花を愛する翁あり。實うゑの櫻あるを、老後に及びて、「春咲く花も心せよ、吾よはひ八旬にあまれば此春花咲く頃にも逢ひがたし」とかこちければ、花たちまち咲きたり。時にこれ正月十六日。これよりして年毎に正月十六日に花を開くといふ。【參照】春―櫻（ノ）

【例句】十六日櫻

うそのやうな十六日櫻咲きにけり　子規（子規全集）
いざさくら咲くや寺僕の宿下り　雨青（懸葵）
湯の客も遊ぶ十六日櫻かな　冬葉（獺祭）

楪（ゆづりは）　讓葉木（ゆづりは）　弓弦葉（ゆづるは）　交讓木（ゆづりき）　親子草（おやこぐさ）

【古書校註】

【栞草】和漢三才圖會　讓葉木（ユヅリハ）、俗に楪に作る。枕草子　よはひのぶる齒固の具にもしてつかひたんめる。【塩嚢抄】杜の字はユヅリハなり、世俗正月に用レ之。○此木は新葉生ひとゝのひて後に舊葉落つ、故に讓葉と名く、又和名親子草（二）といふ。

【事物異名】交讓木。

【萬葉】弓弦葉。

註 （一）蘐蘿草 年鑑にこのごろ落つる親子ぐさ人にしたしき人や知るらむ。

季題解説 大戟科に屬する常綠の喬木にして、樹の高さ一丈五六尺に達す、枝葉茂生し、葉の形、長楕圓形、厚くして光あり、裏面は淡白色を帶び、葉帶赤し。舊葉は新葉生ひて後落ち、新舊相讓るに似たり。故に讓葉といひ、親子草ともいふ。因て新年の儀にこれを用ひて祝するなり。

參照 人事―楪飾る（ユヅリハカザル）

例句

楪

ゆづり葉や齡の枝折けさの山　東水（東日記）
ゆづり葉や小髮にかゝる日八分　桑露（寶晋齋引付）
楪の世阿彌祭りや靑かづら　嵐雪（玄峰集）
楪に筆こゝろみんうら表　浪化（浪化上人發句集）
楪の莖も紅さすあした哉　園女（玉藻）
楪や繩結ぶ代のむかし草　似船（反古集）
ゆづり葉や齒朶や都は山くさし　子規（子規全集）
ゆづり葉を流す家ありをしの沓　靑々（妻木）
ゆづり葉を切りに新鎌利鎌もて　十框（十框句集）
楪に句を書くこともあらぬ哉　橡面坊（深山柴）
ゆづり葉に粥三椀や山の春　蛇笏（ホトトギス）
楪を飾る心ぞ老いにける　十黄（十黄第一句集）
楪葉の赤き處を結びけり　素石（木虫句集）
楪の茜がられし齒朶がくれ　添水（年刊俳句集）
楪葉に樵者は齡長きかな　痩梅居（最新二萬句）
楪に一斗の餅と甲冑と　靜堂（大正新俳句）

親子草

蓬萊に祝ふやけさの親子草　一陶（玉かつら）
箕裘の譏のうへや親子草　天眞（懸葵）
井の蓋も拭かれてあるや親子草　芦風（同）
紅さして日々あざやかや親子草　皷人（同）

季題植物 ゆづりは Daphniphyllum macropodum, Miq.（たかとうだい科）山中に自生する常綠喬木なり、幹の高さ一二丈に達し、葉は大形の長楕圓形にして、通常五六寸、厚く滑かにして、裏面は淡白色を帶び、葉柄通常赤し、五月頃、葉心に花穗を出して綠黃色を呈す。細小花を攢簇し、後楕圓形の黑色果を生ず、雌雄異株なり、葉を新年の飾りに用ふ。

國(二)に遣はして非時香菓(トキジクノカグノミ)を求めしむ、今橘と謂ふは是れ也。聖武帝天平八年、葛城王の忠誠を嘉め給ひ、浮杯の橘を賜ふ。勅して曰く、橘は果子の長上にして人の好む所是を以て汝が姓を橘の宿禰と賜ふ、橘の姓此に始まる、橘の宿禰とは諸兄公なり。(三)仍て嘉祝の物と爲るなり。

註 (一)常世の國、上古の世遙かに隔れて容易に往來すべからざる國の汎稱、新井白石は風土記によりて之を常陸となせるも取るべからず、總じては遙き彼方なる不老不死の國、「水の江の浦島子海に入りて蓬萊山(とこよのくに)に到る」といふが如し、又黄泉(よみのくに)をも云ふ (二)敏達天皇の皇子難波王の孫美努王は、縣犬養宿禰東人の女なる三千代を娶りて葛城王、佐爲王を生む、元明天皇和銅元年、三千代大嘗の宴に供奉す、時に杯に橘浮べり、依て姓橘宿禰を賜ふ、天平八年、勅して、葛城王の請により橘姓を賜ひ、諸兄と改めしむ

季題解説 橘は葉花共に蜜柑に異ることなく、實は皮薄く小にして、金柑の大なるに似たり。歳始嘉祝には必ずこの果を用ふ。參照 山蜜柑(ヤマミカン) 人事 橘飾る(タチバナカザル)

例句 橘

橘や飾り具足を床の脇　冬葉(懸葵)

祝ぎ心葉つき橘選びけり　蒼梧(同)

山蜜柑(やまみかん)

季題解説 山口縣笠山の雜木林に、五十株程の橘點在す。同地にては古來山蜜柑と稱し、新年の飾として橙の代用に供したりといふ。參照 橘 人事 山蜜柑飾る(カザル)

例句 山蜜柑

山蜜柑遠きしるべに頒ちけり　雨青(懸葵)

榧(かや) かへ

古書校註 【年浪草】本草綱目に曰く、榧(カヘ)(一)釋名は拘側栢(キクソクハク)、蘇頌に曰く、三月花を開き九月子を結ぶ、其實稞(二)を成す、狀小鈴の如し、○史記に曰く、松栢を百木の長となす。○漢武内傳に曰く、藥に松栢の膏有り、之を服せば以て年を延ぶべしと。云々。仍て嘉祝の物と爲る者乎。(三)

註 (一)栢、柏、同字なり (二)稞もちあは、此にはあはもちの謂か (三)榧、本來は秋季也、之を新年の部に載するは蓬萊の飾り物なるが爲のみ

季題解説 榧は公孫樹科、常綠の喬木にして、葉は樅に似て厚く端尖りて尖あり。雄樹は枝立ちて花ありて實なく、雌樹は横に茂り下に垂れて實ありて花なし、實の長さ一寸許り棗の如く皮綠にして内に油多し。内に核あり、淡褐色にして厚く長く兩頭尖る、中に白き仁あり、炙りて食すべし。蓬萊盤に飾り用ふ。參照 人事―榧飾る(カヤカザル)

例句

橙　橙七日薄き斑をかへ見けり　池生（懸葵）
　　青葉のみどり紙に白さや橙十粒　冬葉（同　）

柑子（かうじ）　包橘

古書校註

【栞草】［大和本草］包橘（カウン）は橘よりも小なり、皮薄く瓤（サノゴ）(一)のへだて上よりみゆ。

【年浪草】時珍本草に云、包橘、外薄く内盈てり、其の脈瓤皮を隔つ。○唐故事に曰く、近臣に黄柑を賜ふに黄羅を以てす、之を包む人各々一枚、是を傳柑の宴と爲す、云々。

註 (一) さなご　實子の嚢　瓜類

季題解説 柑子は柑橘類に屬し、其實は橘よりも小なり、皮薄く瓤のへだて上より見ゆ、蓬萊盤に積み用ふ。［新年］柚柑等。藪柑子［冬］。人事　柑子飾る條

例句

柑子　南山の南泉東園の柑子かな　五城（ホトトギス）
　　　篝の灯の影にある柑子かな　冬葉（懸葵）

柚柑（ゆかう）　橙柑

古書校註

【栞草】［和漢三才圖會］橙柑（ユカウ）は柚(一)の屬也、其枝葉花みな柚とことなることなし、實の殼も柚に似て最大きなり。

【年浪草】柑類の總名は橘也、故に俗物と稱す乎。(一)

註 (一) 柚、橘の類に似て、色の黄なる白花を開く、はつき、ほう、又はおと稱す、實を柚子、柚の實なことといふ、形は柚に似て色黄白にして光り、冬月之を貯へ實を食用とし、又汁を酢に用ゆ。(二)橙を以て柚の果とするは、今蓬萊に出で、橘の條に譲る。

季題解説 柚柑は柚の屬なり。其枝葉花皆柚と異ることなく、實の形狀も柚に似て最も大なり。蓬萊盤等に飾り用ふ。［新年］柑子　人事　柚柑飾る條

例句

柚柑　青き葉の一つめでたき柚柑かな　冬葉（懸葵）
　　　室こむる香のほがらかに柚柑かな　蒼梧（同　）

藪柑子（やぶかうじ）　紫金牛（やぶかうじ）　ししくはす　山橘（やまたちばな）　唐橘（からたちばな）

季題解説 藪柑子は紫金牛科に屬し、山中に多く自生す。高さ四五寸、莖頭に葉集りつく。葉は常綠にして形橘の葉に似て鋸齒あり、夏五六月の頃小白花

を開き、實を結ぶ。大きさ南天燭の實の如く、冬に至れば紅色となる。［季題］柑子の名あるによりて蓬萊盤等に用ひ、又新年鑑賞用の盆栽等とす。［季題］柑子 人事—藪柑子飾る　冬—藪柑子

［例句］

藪柑子

髭かくるやと薜にかざす藪柑子　杉風（杉風句集）
蓬萊や子のつまみ出す藪柑子　大梅（續枯尾花）
藪柑子の彩る落葉衾かな　蝶衣（蝶衣句稿）

新年茶前

手ともしによろけかゝるや藪柑子　庭後（江戸庵句集）
雪折れの竹四五本や藪柑子　夏木洞（木虫句集）
藪柑子の高さに石の平目なる　素石（同）
神籬やなほうるほへる藪柑子　黄木（庚午句鈔）
四阿の雪の雫や藪柑子　揷雲（現代俳句大觀）
巖の根をくゝり寄せたる藪柑子　古泉（年刊俳句集）
日に映ゆや雪を抽きたる藪柑子　黄綠（同）

葉牡丹

牡丹菜

［季題解說］甘藍の一種にして、普通の甘藍の如く玉を卷かず。圓莖高さ一二尺、頂に葉多く重なり生じ、あぶら菜の葉より大くして厚く、冬春の交紫色に變じ、葉皆相抱きて紫色の牡丹花の如し。新年觀賞の盆栽生花等に用ゐらる。［季題］夏—玉菜花

［例句］

葉牡丹

葉牡丹や彫刀も研ぐ水を置く　三猿子（獺祭）
葉牡丹やいつしかからぶ爐のほとり　薫風子（同）

福壽草

元日草　朔日草　元日華　歲日華　ふくづゝ草　志賀菊　富士菊　まんさく　ゆきわりさう　ゆきのした　たけれんげ　しゆくど　側金盞花　報春花　献歲菊　雪蓮　歲菊

［古書摘註］

【山之井】元日草ともいへり、元日に花咲となり。

【栞草】［紀事］福壽草を器に種て人の家に贈るは、其名の宜しければ也、よつて新年の観とす、又元日必開く故、或は元日草といふ、云々。

【和漢三才圖會】洛東山溪陰處に之有り、冬枯れて春宿根より生ず、肥えたる莖高さ二三寸、葉胡蘿蔔及石長生葉に似て小さく、歲日初めて黃花を開く、半開の菊花に似たり、人珍となす、云々。

【季題解説】 福壽草は漢名、側金盞花、毛莨科に屬する宿根草にして、山野に自生す。冬の末より早春の頃、寒を凌ぎて舊根より芽を生じ、莖[illegible]て二三寸に及び、葉は胡蘿蔔に似て小さく、黄色の單瓣花を開く。此花は毎朝開きて夜は合す。變種多く出づ。その園養種は新年鉢植として床飾に用ゐらる、故に元日草、歳旦華等の異名あり。

【例句】 福壽草

朝日さす弓師が店や福壽草　蕪村（蕪村遺稿）
歳月日三つかほりや福壽草　同（摺物）
小書院のこの夕ぐれや福壽草　太祇（太祇句選）
二日には箒のさきや福壽草　同（同）
ふたもとはかたき莟や福壽草　召波（春泥發句集）
福壽草一寸ものゝ始なり　言水（俳諧五子稿）
福壽草咲くや後に土佐が鶴　大魯（蘆陰句選）
あらそはぬ國いたゞくや福壽草　蓼太（蓼太句集）
目出たさを一字まけたり福壽草　也有（蘿葉集）
帳面の上に咲きけり福壽草　一茶（九番日記）
福壽草くさとは見えぬ影もらし　梅室（梅室家集）
ひと雫するや朝日の福壽草　蒼虬（蒼虬翁發句集）
南山をかざすや窓の福壽草　子規（子規全集）
福壽草貧乏草もあらまほし　同（同）
福壽草影三寸の日向哉　同（同）
莟太く開かぬを愛す福壽草　同（同）
何もなき床に置きけり福壽草　虚子（虚子句集）
福壽草一ツ二ツの匂ひ哉　青々（妻木）
福壽草咲いて筆硯多祥哉　鬼城（鬼城句集）
病室の湯婆の側や福壽草　八重櫻（春夏秋冬）

祝新婚

福壽草松に盡きせぬ契かな　四方太（明治俳句）
福壽草黄一塊書房亂れ初む　六花（雲烟）
すゞしろはホ句壽草なれ福壽草　未央（日本俳句鈔）
福壽草堂と書す病魔拂ふなり　鵜平（同）
尊圓親王の御筆かゝりぬ福壽草　射石（新春夏秋冬）

購ひし日月硯や福壽草　快川（同）
金屏に小き影や福壽草　夏月（新俳句）
わりなくも眠き灯明し福壽草　竹の門（竹の門句集）
洗ひ干す硯二面や福壽草　雀子（閑古鳥）
福壽草屠蘇を冷たく頂きぬ　波岑（年刊俳句集）
三ケ日過ぎて一花や福壽草　疎竹（同）
蟾滴に置いて花こぼしたり福壽草　九萬字（九萬字句集）
鉢石の蒼き苔かれぬ福壽草　吐天（懸葵第一句集）
一鉢の福壽草おらが庵の春　夜濤（同）
福壽草朱泥の鉢に五七本　狗子（同人俳句集）
持ち歩きて福壽草咲かす日南哉　冬葉（枯野）
花花を押し合ひ咲けり福壽草　十黄（十黄第一句集）
苔堅き瓶の梅、福壽草机上　續石（落椿）
福壽草盆梅を嗅ぐ人卑し　巨口（最新二萬句）
草庵や持佛の前に福壽草　山外（同）
萬兩の鉢もめでたし福壽草　冷泉（同）
几上なる猿簑集や福壽草　月斗（同）
膳について子等賑々し福壽草　久女（大正新俳句）
福壽草座敷明るく日の移る　靜居（同）
袋物あきなふ店や福壽草　乙童（明治一萬句）
酒の香に咲くうれしけれ福壽草　鶯池（鶯池句集）
三ケ日過ぎて一花や福壽草　疎竹（現代俳句大觀）
かにかくに二日の坎福壽草　野風呂（同）
着け苔の乾く日向や福壽草　孤城（昭和一萬句）
吹きみちて置かれしまゝや福壽草　蘆仙（懸葵）
寒けれど日さすがうれし福壽草　天眞（同）
あたゝかな日ざしに福壽草咲きぬ　琅玕（同）
安らけく稚兒の書籍や福壽草　水明溪（同）
人日の詩情閑なり福壽草　小石（同）
惜しみ磨る墨の匂ひや福壽草　羊我（同）
書き散らす賀箋の中や福壽草　三幹竹（同）
この春の讀む書を選む福壽草　同（同）
幾鉢の花に遲速や福壽草　句佛（我は我）
神國や草も元日さへと咲く　一茶（一茶新集）
野坂の店元日草のめでたけれ　象外（新春夏秋冬）
靜かなる元日草に日闌けたり　椽魚子（現代俳句大觀）
百千句元日草に媚びにけり　泰山（泰山俳句集）

福壽草　元日草
ふくじゆさう　Adonis amurensis, Regel et Radd.（うまの

あしおた科〕北地に自生すること多しと雖ども普通に培養する多年生草本なり、葉は三五寸許の二回羽狀葉、其小葉は深裂して、裂片更に亦鋭尖頭なる線狀披針形の小裂片をなす、早春、新葉と共に黃色の花を開く、瘦せたるは一莖一花、肥たるは分枝して花を開く、萼片は暗紫色を帶び、花瓣は多數にして倒披針形をなし、多雄蕊にして、瘦果は短小綠色なり。

若菜（わかな）

初若菜　朝若菜　磯若菜　磯菜　京若菜　千代名草　祝菜　粥草　七草　七草菜

季題解說　若菜は人日に用ふる七種の菜の總稱。薺・蘩蔞・芹・菘・五形・蘿蔔・佛の座を七種の若菜といひ、又、蓬・葵・薺・苣・水蓼等を加へて十二種の若菜といふ、この中の一種、薺のみにても、又薺及び二三種にてもすべて若菜といふことあり。初若菜は春の初の若菜といふ意にて、若菜に同じ。千代名草は古への異名。磯若菜は磯邊に生ずる若菜の意なり。磯菜ともいふ。その他祝菜・京若菜ともいひ、又七草粥に用ふるより、粥草・七草菜などゝも云ふ、〔異名〕薺ナヅナ 根白草ネジログサ。五形ゴギヤウ 蘩蔞ハコベ 佛の座ホトケノザ 菘スズナ、蘿蔔スズシロ 人事―若菜摘、七種、地理―若菜野

實作注意　若菜は人日に用ふる七草の總稱にして、定まりたる一種の菜を云ふにはあらず、但し薺一種のみにても若菜と云ひ得るものなれば注意して作るべし。若菜摘むといふ場合も亦同じ。

さて七種に關しては、古來、何何を以て七種となすかに就きて、諸說甚だ紛らはし、いまその一端を揭ぐれば、河海抄には、薺・蘩蔞・芹・菁・御形・酒々代・佛座を七種として擧げ、これを增補題林集には「せりなづな御形はこべら佛の座すゞなすゞしろこれや七種」と、國風に讀み込みて示せり、又、劉山人の一話一言には、七種の菜を京洛の七野に配したる一覽表あり、卽ち、次の如し

せり	日本名芹	大原野産	なづな	漢名薺	内野
ごぎやう	同 艾	平野	たびらこ		嵯峨野
佛座	同 元寶草	蓮臺野	すゞな	同 菘	紫野
すゞしろ	同 蘿蔔	北野			

例句

若菜

津まで神の供御といひのの若菜哉　季吟（歌仙そろへ）

蒟蒻にけふは賣かつ若菜かな　芭蕉（若菜集）

傘持はつくばひなれし若菜かな　其角（五元集拾遺）

霜は苔に雪に樂する若菜かな　嵐雪（玄峰集）

雁背の足をつまげて若菜かな　許六（五老井發句集）

うぐひすと畑で出あふ若菜かな　浪化（浪化上人發句集）

板前に行燈のこる若菜かな　同（同）

冬年の聲賣戻す若菜かな　來山（續いま宮艸）
青し〳〵若菜は青し雪の原　同（同）
鉢の子に粥たく庵も若菜かな　太祇（太祇句選）
まないたの七野に響く若菜哉　几董（井華集）
小わらはの物は買ひよき若菜哉　召波（春泥發句集）
雪の戸や若菜斗の道ひとつ　言水（俳諧五子稿）
隣男妹見けんかも若菜垣　同（東日記）
大雪の旦若菜をもらひけり　白雄（白雄句集）
朝の間に摘てさびしき若菜哉　同（同）
筐もる雪も若菜の野末哉　闌更（半化坊發句集）
つまずとも奕を闢屋の若菜哉　蓼太（蓼太句集）
裾野から山摘起す若菜哉　同（同）
若菜そゝぐほどは解たり忘水　同（同）
摘まぜて雪と八色の若菜哉　同（同）
とく〳〵の水より淺き若菜かな　巣兆（曾波可理）
きのふけふやゝあらはるゝ若菜哉　樗良（樗良發句集）
老がつむ若菜をひとのもらひける　士朗（枇杷園句集）
はや若菜馬のひまゆく駒下駄も　也有（蘿葉集）
菊過ぬ鍬入れそめよ若菜はた　同（同）
此七日若菜より野のなつかしき　同（同）
人音を鶴もしたらて若菜かな　千代女（千代尼發句集）
ひとつ家も摘出す雪の若菜哉　同（同）
三足ほど旅めきにけり野は若菜　一茶（享和句帖）
出序にひんむしったる若菜哉　同（七番日記）
つむあともなくて家々に若菜かな　梅室（梅室家集）
買たほどこぼして行し若菜かな　同（同）
柴さして置けり雪の下若菜　蒼虬（蒼虬翁發句集）
五十鈴川にそゝぎて歸る若菜哉　松宇（松宇家集）
蓮月が少しくれたる若菜かな　菜人（最新二萬句）
山川の水に清めし若菜かな　蟲樓（昭和二萬句）
昔より雪を詠みける若菜哉　鶯池（鶯池句集）
堀河の荷は若菜と蜆かな　蝶衣（明治一萬句）
雪掻けば若菜の綠うれしかり　北齋（同）
平らしら若菜香に立つ厨かな　博女（懸葵）

初若菜

砂植の水菜も來たり初若菜　其角（五元集）
けふの春きのふと過し初若菜　曉臺（曉臺句集）
初若菜鯉も切るべき日なりけり　同（同）
古へもこんな物かは初若菜　素檗（素檗句集）

初若菜

嫌ひのなつかしきかな初若菜　鶯池（鶯池句集）
住さびし頃來し里や初若菜　蕙子（年刊俳句集）
天地のあるむひまより初若菜　松宇（松宇家集）

朝若菜

今朝の若菜人影もなし野は入日　杉風（杉風句集）
うかれ雀妻よぶ里の朝若菜　其角（五元集拾遺）
一桶は如來のためよ朝若菜　一茶（旅日記）

磯若菜

飛々に跡うつ波や磯若菜　不白（不白翁句集）

京若菜

籠の目に上る匂ひや京若菜　乙字（乙字句集）

祝菜

祝ひ菜や花買ひなれし白川女　水棹（懸葵）

粥草

粥草や葛飾舟の朝みどり　白雄（白雄句集）

七草

七草や内より春は外の物　桃仙（桃の首途）
七種のそろはずとても祝ひかな　白雄（白雄句集）
七草やあまれどたらぬものもあり　千代女（千代尼發句集）
七草や雪を拂へばそれでよし　同（同）
七草やなくて二數のなつかしき　青蘿（青蘿發句集）
七草や沮清き木の匂ひ　青々（妻木）
七草や目に新たなる草の色　五空（五空句集）
七草や鼠麴にかゆる何の草　櫻磯子（最新二萬句）
鈍根に七草の名もむづかしや　鶯池（鶯池句集）
七草や盆にのせたる草の數　川井（明治新俳句集）
七種や芹生の薺淀の薫　ひで女（閑古鳥）
七草や藁杏はいて姉妹　大山坊（年刊俳句集）
七草を紙につゝみて貫ひけり　きく枝（同）
七草の中にて芹の香は知れる　晩水（現代俳句大觀）
七草は薺はこべに何々ぞ　碧玲瓏（新俳句）
七草や古葉まじりし佛の座　壽子（丁卯句鈔）

薺（なづな）　東風菜（こな）

季題解説　薺は十字花科に屬する草本にして、原野に自生し、葉は蒲公英に似て岐あり、七種菜の中最も主なるものにして、薺一種を特にさして若菜といふこともあり。異名として三味線草・へんぐ草、又外に爺の巾着・婆の巾着（尾張）、雀のだらこ（津輕）等の方言あり。〔參照〕若菜（わかな）　人事―薺摘（なづなつみ）　春―薺の花（なづなのはな）

實作注意　七種粥に用ゐる各蔬菜は、「摘む」「囃やす」「打つ」等の意あれば新年の句たるべく、然らざれば新年の季感薄し。

例句

薺

六日八日中に七日の薺かな　鬼貫（鬼貫句選）

薺

一とせに一度つまるゝ薺かな　芭蕉（芭蕉句選）
風渡て石にすかれる薺かな　嵐雪（玄峰集）
ぬれ緣や薺こぼるゝ土ながら　同（同）
うす鹽の鴨に薺の雫かな　浪化（浪化上人發句集）
賤が子は薺見る目のかしこさよ　杉風（杉風句集）
御飛脚の堀河出てなづな哉　召波（春泥發句集）
澤蟹の鋏もうごく薺かな　蓼太（蓼太句集）
橋寺に洗ふ七日の薺かな　青々（妻木）
山陰に多少の家の薺かな　同（同）
しのゝめに小家の薺殘りけり　同（同）
爼に鷄の餌ほどの薺かな　天哉（懸葵）
痩せ腹の命に溶くる薺哉　鶯池（鶯池句集）
神棚の火花ちり落つ薺かな　秋双（最新二萬句）
白箸に色かぐはしき薺かな　秋皎（大正新俳句）
心當てに雪搔き分くる薺かな　春波（現代俳句大觀）

東風菜
武藏野の雪間に靑き東風菜哉　冬葉（懸葵）
葛飾の春を告げ來る東風菜哉　卿宇（同）

根白草（ねじろぐさ）

つみまし草　芹（せり）

季題解説 芹は繖形科に屬する宿根草にして、水田又は池沼邊に自生し、又栽培するものあり。莖は中空にして節あり、長さ四五寸乃至一二尺、一種の芳香あり。古來七種菜の一となす。根白草・つみまし草等の異名あり。種類には赤芹・白芹・鴨兒芹（ミツバ）・絲鴨兒芹（イトミツバ）・川芹・田芹等あり。又根を賞用する故に根芹ともいふ。參照 若菜（ワカナ）　春―芹（セリ）　夏―芹の花（セリノハナ）

例句

芹　東寺の塔芹洗ふ水にうつりけり　雨青（懸葵）
根白草　根白草雉子酒の微醺殘りけり　瓜青（同）

御形（ごぎやう）

五形（ごぎやう）　おぎやう　鼠麹草（ははこぐさ）　はゝこ　はうこ　ひきよもぎ　もちよもぎ

季題解説 御形は正月七草の一として鼠麹草をいふ。菊科に屬する草本にして、原野に自生し、葉は馬齒莧に似て柔き白毛あり。異名にはゝこ・はうこ、種類にひきよもぎ・もちよもぎ等あり。參照 若菜（ワカナ）　冬―鼠麹草（ハハコグサ）

例句

御形　一籠の薺にまじる御形かな　冬葉（懸葵）
古都に住む身には平野の御形哉　三幹竹（同）

鼠麹草

七草の屑にえらるゝ母子哉　梅室（梅室家集）

摘み添へてしるしばかりの母子草　雨青（懸葵）

蘩蔞（はこべ）　鷄腸草（はとべ）　はくべら　はこべら

【季題解説】蘩蔞は石竹科に屬する草本にして、原野に自生す。莖は方形にして蔓をなして地上に敷く。葉は對生し、圓くして末尖る。七種菜の一なり。古くははくべらといふ。【參照】若菜（ワカナ）　春―蘩蔞（ハコベラ）

【例句】

蘩蔞

草の香やはこべらむしる垣の隙　四方太（明治俳句）

はこべらや放ち遊ばす鷄百羽　三幹竹（懸葵）

佛の座（ほとけのざ）　田平子（たびらこ）　黄瓜菜（おうくわさい）　鷄（おに）腸菜（らけな）　元寶草（げんはうさう）

【季題解説】佛の座は鷄腸草を正月七草に用ふる時の名稱。紫草科に屬する草本にして、原野に自生し、其の地に敷きて叢生する狀恰も佛の蓮華座に似たれば名づく。葉は圓くして五六分許り、長き蔕あり。嫩葉は食ふべし。又田平子と云ひ黄瓜菜等の名あり。【參照】若菜（ワカナ）

【例句】

佛の座

けふや七日七佛以後の佛の座　意秋（俳諧三部抄）

是ならば踏でも來たり佛の座　梅室（梅室家集）

佛の座我先づ摘んで歸らばや　祐昌（俳句大觀）

佛縁のある草やこれ佛の座　三幹竹（懸葵）

田平子

たびらこは西の禿に習ひけり　其角（五元集）

たびらこや洗ひあげおく雪の上　冬葉（懸葵）

たびら子や七日の厨拭き淨め　芦風（同）

【參考】たびらこ　一名　こおにたびらこ　Lampsana apogonoides, Maxim.（きく科）早春より田面に多き越年生草本なり、全體小形にして葉は根生し、大小不齊に羽裂す、無毛にして其質軟なり、莖は數多く出で細くして少數の枝を分ち、三四寸を常とす、質軟くして常に横斜す、早春枝の頂端に一箇づゝの頭狀花を開く、黄色の舌狀花冠數箇より成り冠毛なし、古、春の七草の一なるホトケノザは、此種の古名なり、從來の學者タビラコをムラサキ科のものとするは誤なり。

菘(すゞな) 鈴菜(すゞな) 菁(すゞな)

【季題解説】 菘は唐菜を春の七種に用ゐる時の特稱なり。但し、滑稽雜談には、「諸抄には、菁の字をすゞなと記す、相通ずなり。菘と菁と一類二種也。菘は俗に浮菜(うきな)、又水菜也。菁は俗に云ふ畠菜也。菘は水田に生ずる故なり。菁は圃に生ずる故に、はたけ菜と稱す。今すゞ菜と云ふは、すゞは小の字を書く。ちひさき心なり」とあり。 【參照】 若菜(ワカナ)

【例句】

鈴菜　ふるとしのふる名は呼ぬ鈴菜哉　抱一（屠龍之技）
　摘に出て鈴菜鈴代忘れけり　完來（俳句大觀）
　一つまみ添へて目出度き鈴菜哉　竹石（懸葵）

蘿蔔(すゞしろ) 鈴代(すゞしろ)

【季題解説】 すゞしろは大根を春の七種に用ゐる時の特稱なり。すゞしろは清白の義かといふ。【參照】 若菜(ワカナ) 鏡草(カガミ) 人事 大根祝ふ(ダイコンイハフ) 冬― 大根(ダイコン)

【例句】

鈴代　すゞしろや春も七日を松の露　鳳朗（鳳朗發句集）
　すゞしろや削りためたる花鰹　蘇南（蘇南遺吟）

蘆蒿(よめがはぎ) 娵萩(よめがはぎ) 娵菜(よめな) おはぎ うはぎ

【季題解説】 蘆蒿は娵菜に同じく、田野に生じ、その嫩苗は食ふべし。時珍本草に、「二月莖を生ず、葉を食ふべし、野圃家園に分つことを用ひずして叢生す。香氣あり。秋花をひらく、野菊に似たり。」と見ゆ。なほ栞草には、「ヨメガハギ、ヨメナ同物なるべし　オハギは似たれども別なり」とあり。

【例句】

蘆蒿　二葉から男持てや蔀蒿(ヨメガハギ)　林紅（桃の首途）

齒朶(しだ) 裏白(うらじろ) 鳳尾草(ほうびさう) 穗長(ほなが) 山草(やまぐさ) 諸向(もろむき) 貫衆(やまぐさ) 百頭草(ひやくとうさう)

【古書校註】

【栞草】 〔本草〕 其根一本にして衆枝これを貫く、故に鳳尾と名づく、根を貫衆(モロム)と云。〔和漢三才圖會〕 葉は蕨及び狗脊(ぜんまい)に似て葉柔かに薄し、面青く背白し、四時枯ず、以て元旦嘉祝の物に飾る、(一)一説に齒はよはひ、朶はえだ、朶は長延なるもの故、齡の延る義と云。

【年浪草】 一説齒朶はモロムキ(一)と云和名あるを夫婦の相生(二)を祝すと也。

註 （一）モロムキ　諸向の義か　（二）夫婦の相並びて長生するを云ふ。

【季題解説】　歯朶は隠花植物の一種にして羊歯科に属する常緑の草本なり。根茎は地中に匍匐し、随処に葉柄を出して葉を生ず。葉は羽状複葉にして、初め出づる時は必ず渦巻に巻旋し、後展開す。表は鮮緑色にして光沢あり、裏面は白色なり。暖地の山中到る処に生ず。その葉茎ともに容易に枯れざるを以て、新年嘉儀の物に用ふ。裏白・穂長・もろむき・山草等の異名あり。もろむきは和名、夫婦の相生を祝すと云ふ説あり。又歯はヨハヒ、朶はエダにして、朶は長延なるもの故、齢を延ぶる義により祝ひとすると説あり。

【季題本意】　歯朶売と云へば前年[illegible]、同じく前年末に来る者にして新年にあらず。[illegible]人事　歯朶売参照。

【例句】

歯朶

何を夢に折結しだの草枕　芭蕉（東日記）
歯朶の葉に見よ包尾の鯛のそり　其等（[illegible]集）
乙姫の手向の歯朶かうき身宿　乙二（をのゝえ草稿）
君が代はゆづり葉白し歯朶青し　文體（大三物）
ぬり膳や一日〳〵の歯朶の塵　青々（妻木）
歯朶の葉の反りかへりたる日向哉　森々（明治俳句）
歯朶かくれさやかに神の燈かな　洋舟（明治一萬句）
歯朶を噛む若し[illegible]かなり神の馬　松宇（松宇家集）
歯朶の葉の摩清くなり足袋の先　紅葉（紅葉句集）
帽子掛に歯朶の作りを祝ひけり　左川（新春夏秋冬）
歯朶の葉の重なり如くし磯山路　華水（丁卯句集）
歯朶勝の三方置くや草の宿　虚子（ホトトギス）
塗床や歯朶一ひらの塵を見し　春梢女（同）
誰も来ぬ背口うれし歯朶の風　花笠（懸葵）

裏白

うら白や海老上[illegible]のしたがさね　正長（[illegible]三ツ物）
山柴にまじる白きもじる籠かな　重五（曠野）
うら白もはみちる神の馬屋哉　胡及（同）
裏白は東雲招くそよぎ哉　順也（類題集）
裏白に和歌三神の灯影かな　北溟（俳人北溟）
裏白や斧にもたらす小野の奥　小蛄（最新二萬句）
裏白や敷寝冷たき海老の守　不水（同）

穗長

深山柴たく裏白を惜みけり　逸夢（明治新俳句集）
裏白や薪の中に捨らるゝ　青々（妻木）
祝れて幾代の穗長神の春　淺水（大三物）
長刀のほこりを拂ふ穗長哉　袁弓（同）
うつりよくほながぞ匂ふ都哉　好英（同）
柴門の穗長は雨にそぼちけり　木母（新味□）
穗長など俳諧草や庵の春　不水（最新二萬句）
お鏡の干割れしまゝに穗長哉　宇外（俳星）
輪燈に影大いなる穗長哉　二葉（現代俳句大觀）
篝火にあほられてゐる穗長哉　柳之（木太刀俳句鈔）

山草

山草のさやかに匂し神の棚　露月（ホトトギス）

【植物學説】うらじろ Gleichenia glauca, Hook.（うらじろ科）南方暖地に自生する大形の多年生草本にして、大なるものは四五尺に及ぶ、葉は羽狀に分裂し、上面は鮮綠色にして光澤を有し、裏面は白色を呈す、春夏の候、顆粒狀をなせる子嚢を裸出し、四箇相寄りて一堆をなし、黄綠色を呈す、葉を歳首の裝飾に用ふるは普く人の知るところなり、葉柄を用ひ箸、盆等を造る。

鏡草（かゞみぐさ）　加賀見草（かがみぐさ）

【古書校註】

【年浪草】南國の具並雜煮に用ふ、よつて鏡草と云由、岷江入楚にも見ゆ、○韓保昇蜀本草に云、萊菔は俗に蘿蔔と名づく、按ずるに爾雅に云ふ、葖蘆萉なり。孫炎の注に曰く、紫花は菘也、俗に温菘と呼ぶ、蔓菁に似たり、大根は俗に雹突と名づく、猶冬之部を見よ、春季は鏡餅と云べし

【栞草】かゞみ草、大内にて餅の上におく大根をいふなり。夫木　さゝ草の中にも早きかゞみ草やがてみつぎにそなへつるかな。

【季題解説】鏡草は大根の異名、古、大内にて元日鏡餅の上におく大根を鏡草と呼びたるに出づ。【參照】人事―鏡餅の條　大根祝ふ

【例句】

鏡草

我國の寶のうちかかゞみ草　浦之（俳句大觀）
餅の上にけふし契りぬ鏡草　山夕（俳諧畫故集）

加賀見草

加賀見草餅もいざりの女白□　□葉（□葉句集）

野老（ところ）

萆薢　野大根　立どころ　姫どころ　江戸どころ　鬼どころ

【古書校註】

【栞草】和漢三才圖會云、蔓葉頗る薯蕷（一）に似て、小白花をひらき青き子を結ぶ、三稜なり、其根老薑（二）薯蕷の形に類す、俗に野老とし、蝦

を以て海老として共に嘉祝の食物に充つ。(三)【本草綱目】草薢(トコロ)、蔓生をなし、苗葉倶に青く三叉をなす、山薯に似たり、云々

註　(一)薯蕷(いも)やまのいも、里芋に對す、莖にむかごを結ぶ、根を食用藥用に供す、山野に自生するを自然生といふ。(二)はじかみ、此處には生薑をいふ。(三)野老、海老、以て山海の義にとるなり。

【季題解說】　野老は萆薢をいふ。薯蕷科の草本、山野に生ず。春宿根より生じ、蔓長く伸ぶ、葉は楕圓にして尖り、山の芋の葉に似たり。根は老薑、薯蕷の狀に類し、黃色にして節あり長鬚多し。俗に野老の字をあて、海老と共に新春嘉祝の用に充て蓬萊に用ふ。

【實作上注意】　野老は新年嘉祝の意にて新年とするものなれば、「野老掘り」は冬季とす。「野老賣」をも新年とすれども年の用意にするものなれば、寧ろ冬季とする方可なるべきか、但し、例句中に舉げたる其角の句二章は、いづれも春の部に編入せられたるを以て、參考のため揭ぐることとなせり。【參照】人事　野老飾る(トコロカザル)

【例句】

野老

朱を研や蓬萊の野老人間に落つ	太祇	(太祇句選)
喰積に殘るは苔の野老かな	文青	(新類題發句集)
三寸に髪あらたまる薢かな	凉石	(同)
和物には髭むづかしき野老哉	和鶴	(類題發句集)
萬才の米の中より野老哉	芹鷺	(文庫)
捻りそへたくるところ髭籠(ヒゲコ)哉	宅之	(蕉 波)
神ながらをかしきものに野老哉	烏不闘	(青嵐)
鰻にもならぬ野老の味を知れ	蒼梧	(年刊俳句集)

野老賣

初茸の盆と見えたり野老賣	其角	(五元集)
ところうり聲大原の里ひたり	同	(同)

【參考資料】　ところ　一名　おにどころ　Dioscorea Tokoro, Makino.（やまのいも科）山野に自生する多年生草本なり、莖葉共にヤマノイモに似たれども、其葉稍に比して通常幅廣く、基脚の心臟形凹入稍淺く、又互生するを以て異れりとす、此種はムカゴを生ぜず、又其根は味苦く堅くして食ふべからず、夏日、稍葉腋に淡綠色の花を長穗狀につゞり、後三翅ある蒴果を結ぶ、六花蓋片の小花を開き雌雄異株なり、正月の春盤に用る長壽を

祝す、鬚根を老人の鬚髭に見立て山に生ずるを以て野老と書せり、即ち宛もエビを海老と書するが如きなり。

昆布（こんぶ）　ひろめ　ゑびすめ　厚昆布（あつこんぶ）　三石昆布（みついしこんぶ）　黒昆布（くろこんぶ）　長昆布（ながこんぶ）　青板昆布（あをいたこんぶ）

古書校註

【栞草】 和漢三才圖會 其大なるもの一株にして林をなす、葉長さ二三丈、これを長昆布と云、大抵幅四五寸、長二三尺、海人（一）鎌を以て刈とる、松前（二）の產を最上とす、專ら嘉祝の物とす、和名よろこぶといへる訓に似たる故か。

【本草綱目】 東海に生ず、流に順て生ず、高麗、新羅（三）に出づるもの、葉細く黄黒色柔靭にして食ふべし。云々。

註 （一）海人　あま。（二）松前　北海道の古名なり、箱館奉行を松前奉行といへり。（三）高麗、新羅、みな朝鮮の古地名なり。

季題解說

昆布は海藻にして、全體恰かも帶の如く、その長大なるものは數十尺に達す。下部は根狀をなして海底の岩石に付着す。色淡黄褐色にして兩緣青黒色をなす、夏季これを採取し乾燥して貯ふ。蓬萊に飾るもの、一つなり。飾る意にて新年とす。ひろめ・ゑびすめと祝儀を含む異名あり

〔季題〕 人事―昆布飾る（コンブカザル）　夏―昆布採り（コンブトリ）

例句

昆布　酒樽の菰に垂れたる昆布かな　冬葉（懸葵）

ひろめ　掃き落す鹽も日出度きひろめかな　雨青（同）

ゑびすめ　ゑびすめや神に灯す壽屋　冬葉（同）

參考

まこんぶ　一名こんぶ Laminaria japonica, Aresch.（褐藻類）陸前金華山より函館の間に生ず、長さ六七尺より二十尺位に達し、其の幅一尺以上に至る長大種にして、葉質厚く革質柔靭なり、莖は短く扁圓柱狀にして、其の下端は分岐して根となる、葉緣は粗き波狀を呈す、食用とし、殊に北海道西海岸に產する一種「リシリコンブ」は味美にして細し。

穗俵（ほだはら）　ほんだはら　たはら藻（たはらも）　莫鳴菜（ほだはら）　神馬藻（なのりそ）　莫告藻（なのりそ）　神馬草（なのりそ）（ジンバサウ）　馬尾藻（なのりそ）（バビサウ）　ななのりそ

古書校註

【栞草】 本朝式 奈々里曾、神馬藻。漢語抄 奈乃里曾（一）。和漢三才圖會（二）西南の海に多し、冬これを取乾し、藁稗を以て一握りばかり折卷て、束ねて米俵のかたちにつくりて穗俵と名づく、正月蓬萊臺（三）の飾とす。

【倭名抄】 本文未レ詳、神馬騎る莫れの義也。

總索引

(五十音順)

凡例

一、本索引は「俳諧歳時記」全五巻に亙り、季題の主題・傍題の全部を收容せり。

一、索引の排列は檢索を容易ならしむる爲、第一字め以下全部五十音順に從へり。但し音引はあ行の終りに入れたり。

一、假名遣ひは、徹底的なる表音式は却つて不便なるを思ひ、正式に從ひたり。即ち、温石は「をんじやく」、吸入器は「きふにふき」化生は「くわせい」等としたるが如し。

一、同一季題にして讀方を同じくし、唯漢字に於て異るのみの季題は、主季題のみを揭げて他は省略に從へり。例へば「ごぎやう御形」のみを採用し、「ごぎやう五形」を省けるが如し。

一、同一季題にして二ケ所に重出せるものは檢索の便を慮り、一つの見出しに二ケ所の頁數のみを記したり。

一、索引中、最上段は讀み假名を、第二段は歳時記各部に載せたる儘の假名交りの漢字讀みを、第三段は、各々、春・夏・秋・冬・新年は、春之部・夏之部・秋之部・冬之部・新年之部を、時・天・地・人・宗・動・植は、時候・天文・地理・人事・動物・植物を、數字は各卷の頁數を表す。

總索引

あ

い

う

え

お

き

く

け

こ

さ

し

す

せ

そ

た

ち

つ

つりがねさう 釣鐘草 夏植六七五
つりがねにんじん 釣鐘人参 秋植六六二
つりがま 釣釜 春人一三〇
つりしのぶ 吊忍 夏人二一〇
つりどこ 吊床 夏人二〇〇
つりどの 釣殿 夏人一九三
つりぶねさう 釣船草 秋植六六八
つりぼり 釣堀 夏人二三六
つるあふひ つるあふひ 夏植六〇四
つるいちご 蔓いちご 夏植六九三
つるうめ つるうめ 秋植五六一
つるうめさう つるうめさう 夏植六六二
つるうめもどき 蔓梅擬 秋植五六三
つるうめもどきのはな 蔓梅擬の花 夏植五七三
つるかへる 鶴帰る 春動四〇三
つるがまつり 敦賀祭 秋宗三一四
つるかめだこ 鶴亀凧 春人一九五
つるきたる 鶴来る 冬動四九〇
つるぎばね 剣羽 冬動五〇九
つるがをかはちまんぐうのごはんいただき 鶴ケ岡八幡宮の御判頂き 新宗三六八
つるがをかまつり 鶴岡祭 秋宗三三三
つるさぎごけ 蔓鷺苔 春植六六八
つるさんご 蔓珊瑚 秋植五八九
つるしがき つるし柿 秋人二四三
つるしのぶ 蔓忍 夏植六〇三
つるたいふ 鶴太夫 新人三一六
つるたで つるたで 夏植五六一
つるな 蔓菜 夏植七一一
つるなんてん 蔓南天 夏植五六八
つるのす 鶴の巣 春動四二一
つるのすごもり 鶴の巣ごもり 春動四二一
つるのつかひ 鶴の使 冬動四九〇
つるのはうちやう 鶴の庖丁 新人一九〇
つるのはやし 鶴の林 春宗三九八
つるばみ つるばみ 夏植五四八
つるべずし 釣瓶鮓 夏人一八〇
つるまさき 蔓柾 秋植五七八
つるむらさき 落葵 秋植五八九
つるめそ 絃召 夏宗三七六
つるめそさかもり 絃召酒盛 新宗三一四
つるもどき つるもどき 夏植五七三
つるれいし 蔓茘枝 秋植七一〇
つるわたる 鶴渡る 冬動四九〇
つれさぎさう 連鷺草 夏植六三三
つれなしぐさ つれなしぐさ 夏植六二四
つゐな 追儺 冬宗四五五
つゑつきえび 杖突蝦 夏動五〇四
つゑつきむし 杖つき蟲 夏動四五六
つんつくをどり つんつく踊 秋人二〇〇
つんぼえびす 聾戎 新宗三〇四
つんりえん 春聯 新人三四三

て

てあしあるる 手足荒るる 冬人三六七
てあぶり 手焙 冬人三〇一
ていかき 定家忌 秋宗三六九
ていてん 帝展 秋人二九九
ていとくき 貞徳忌 冬宗四六五
ていれぎ ていれぎ 春植六八二
でいろ でいろ 夏動四六一
てううん 鳥雲 秋動四一
てうが 朝賀 新人一四
てうきんのぎやうかう 朝覲行幸 新人九二
てうぐわんらん 萱莞蘭 夏植六六八
てうこき 朝湖忌 新宗四六六
てうしう 肇秋 秋時二
てうしき 趙子忌 夏宗三
てうせんあさがほ 朝鮮朝顔 夏植六六四
てうせんがらす 朝鮮鴉 秋動四四三
てうせんぎく 朝鮮菊 夏植五九二
てうせんさゝげ てうせんさゝげ 秋植七〇〇
てうせんじんぐうまつり 朝鮮神宮祭 秋宗三七五
てうせんじんぐうれいさい 朝鮮神宮例祭 秋宗四一一

と

な

に

ぬ

ね

の

は

ひ

へ

べにばな　紅藍花　夏植六二〇
べにばなあま　べにばなあま　夏植六四四
べにひは　紅鶸　秋動四二五
べにぼたん　紅牡丹　夏植六八〇
べにましこ　紅猿子　秋動四三五
べにます　紅鱒　春動四三三
べにみかん　紅蜜柑　秋植五〇〇
べにりんご　紅林檎　夏植六八二
へめまつうり　紬松瓜　夏植七〇六
へび　蛇　夏動四七一
へびあなにいる　蛇穴に入る　秋動五一〇
へびあなをいづ　蛇穴を出づ　春動四五五
へびいちご　蛇苺　夏植六九四
へびいちごのはな　蛇苺の花　春植六一九
へびきぬをぬぐ　蛇衣を脫ぐ　夏動四七一
へびずし　蛇鮓　夏人一八〇
へびたけ　蛇茸　秋植七一七
へびとんぼ　蛇蜻蛉　夏動四七七
へびのから　蛇の殼　夏動四七二
へびのきぬ　蛇の衣　夏動四七二
へびのぬけがら　蛇の脫殼　夏動四七二
へびのもぬけ　蛇の蛻　夏動四七二
へひりむし　放屁蟲　秋動四九七
へ　み　へ　み　夏動四七〇
へらうち　篦打　冬人一九八
べらつり　べら釣　夏人二四〇
へりあんさす　ヘリアンサス　夏植五八六
へりくりさむ　ヘリクリサム　秋植六五三
ぺるしやぎく　波斯菊　夏植五九六
へるめつとばう　ヘルメット帽　夏人一五一
べんけいさう　辨慶草　秋植六七〇
へんぜうき　遍照忌　新宗四七〇
べんたうはじめ　辨當始　新人二四三
べんたうをさめ　行厨納　冬宗四三三
へんちく　扁竹　夏植六六七
べんてんたうびはゑ　辨天堂枇杷會　春宗三三六
へんとう　扁豆　秋植七〇一
ぺんぺんぐさ　ぺん／＼草　春植六一八
へんるうだ　芸香　夏植六〇九
へんろ　遍路　春宗三三三
へんろやど　遍路宿　春宗三三三

ほ

ほあか　頬赤　秋動四三二
ほいたけぼう　ほいたけ棒　新人一七七
ほいろ　焙爐　春人二三四
ほいろし　焙爐師　春人二三四
ほいろば　焙爐場　春人二三四
ぼううちがつせん　棒打合戰　夏宗三五三
ほうきつ　包橘　夏植五九五
ほうきはじめ　箒起始　新宗四一六
ほうこくじんじやさい　豐國神社祭　秋宗三五七
ほうせんくわ　鳳仙花　秋植六三一
ぼうたん　ぼうたん　夏植六八〇
ぼうたんくわい　牡丹會　夏人一四〇
ぼうてうぎよ　望潮魚　春動四二九
ほうとうゑ　放燈會　秋宗三二六
ほうねん　豐年　秋人二六一
ぼうねんくわい　忘年會　冬人二五八
ほうねんさい　豐年祭　夏宗三三〇
ほうねんさい　豐年祭　秋宗三六八
ほうねんをどり　豐年踊　秋人二一八、二九
ほうびき　寶引　新人二八五
ほうびきなは　寶引繩　新人二八三
ほうびさう　鳳尾草　新植四九九
ぼうふら　ぼうふら　夏動四七九
ぼうぶら　ぼうぶら　秋植七〇四
ぼうぶらまく　ぼうぶら蒔く　春人二二三
ほうふり　孑孑　夏動四七九
ぼうふりむし　棒振蟲　夏動四七九
ほうらい　蓬萊　新人一三一
ほうらい　ほうらい　新人一三一
ほうらいかざり　蓬萊飾　新人一三二

ま

み

む

め

や

よ

ら

り

る

れ

ろ

わ

ゐ

ゑ

読み	見出し	分類・頁
ゑぐのわかな	ゑぐの若菜	新人一八五
ゑぐのわかばえ	ゑぐの若生え	新人一八五
ゑくぼばな	笑靨花	春植五七四
ゑご	ゑご	春植六八二
ゑごよみ	繪暦	新人一四九
ゑしき	會式	秋人三一九 冬宗四四一
ゑしきざくら	會式櫻	冬植五四二
ゑしんき	惠信忌	夏宗三五〇
ゑすごろく	繪雙六	新人二九三
ゑすだれ	繪簾	夏人一九五
ゑぞこげら	夷小げら	秋動四一七
ゑだこ	繪凧	新人五〇三
ゑちごうさぎ	越後兎	冬動四八一
ゑちごじやうふ	越後上布	夏人一四二
ゑつきつ	越橘	夏植六八六
ゑどうろう	繪燈籠	秋人一九六
ゑにしだ	ゑにしだ	夏植六七七
ゑにす	ゑにす	夏植五四一
ゑのこぐさ	犬子草	秋植六五五
ゑのころぐさ	狗尾草	秋植六五五
ゑのぼり	繪幟	夏人二二〇
ゑはう	惠方	新宗四五六
ゑはうだな	惠方棚	新宗四五四
ゑはうまゐり	惠方詣	新宗四五六
ゑはうみち	惠方道	新宗四五六
ゑひがさ	繪日傘	夏人二一四
ゑびすかう	惠比須講	秋宗三三五
ゑびすめ	ゑびすめ	新植五〇三
ゑびすぎれ	夷子切	秋宗三七五
ゑびすこ	ゑびすこ	秋宗三七五
ゑびすまつり	惠比須祭	秋宗三五八
ゑびすまつり	夷子祭	秋宗三七五
ゑひすむし	ゑびす蟲	夏動四七七
ゑひな	繪雛	春人一五七
ゑびやうぶ	繪屛風	冬人一五九
ゑぶみ	繪踏	春人一四四
ゑほうらい	繪蓬萊	新人一三三
ゑほかゐ	繪行器	秋人二〇五
ゑぼしうを	ゑぼし魚	夏動四九二
ゑぼしばな	烏帽子花	夏植六七〇
ゑみぐさ	笑草	夏植六七四
ゑみぐり	笑栗	秋植五四八
ゑむしろ	繪筵	夏人一九九
ゑやう	會陽	新宗四三三
ゑんえい	遠泳	夏人二八三
ゑんこうさう	猿猴草	夏植六三一
ゑんざ	圓座	夏人二〇一
ゑんさうじよく	圓草褥	夏人二〇一
ゑんざむし	圓座蟲	夏動四五〇
ゑんしくわ	燕脂花	秋植六三九
ゑんじゆのはな	槐の花	夏植五四一
ゑんずゐ	淵酔	新人六三
ゑんそく	遠足	春人一九四
ゑんてう	鴛鳥	夏動三九四
ゑんどううゑる	豌豆植る	秋人二八二
ゑんどうひき	豌豆引	夏人二六五
ゑんばば	ゑんばば	秋動四六四
ゑんらい	遠雷	夏天一八
ゑんゐき	圓位忌	春宗三四三

を

読み	見出し	分類・頁
をあさ	雄麻	夏植六四
[をゝみのみあかしを]	小忌御燈を供ず	夏宗三五〇
をかざきまつり	岡崎祭	秋宗三九八
をかざきをどり	岡崎踊	秋人二〇〇
をかしね	をかしね	秋植六八七
をがたま	黄心樹	春植七七
をかつつじ	岡躑躅	冬植五五六
をかとらのを	をかとらのを	夏植六六九
をかほ	陸稲	秋植六八七
をかぼかり	陸稲刈	秋人二七三
をかみ	岡見	冬人二六五
をかやどかり	をか寄居蟲	春動四四〇

―終―

（兩角製本）

昭和八年十二月十六日印刷
昭和八年十二月二十日發行

俳諧歳時記（新年の部）

編者　山本三生

發行者　山本三生
東京市芝區新橋七丁目十二番地

印刷者　村尾一雄
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌　改造社
東京市芝區新橋七丁目十二番地
振替東京八四〇二番
電話芝(43)一二二一－二四

（株式會社秀英舍印刷）